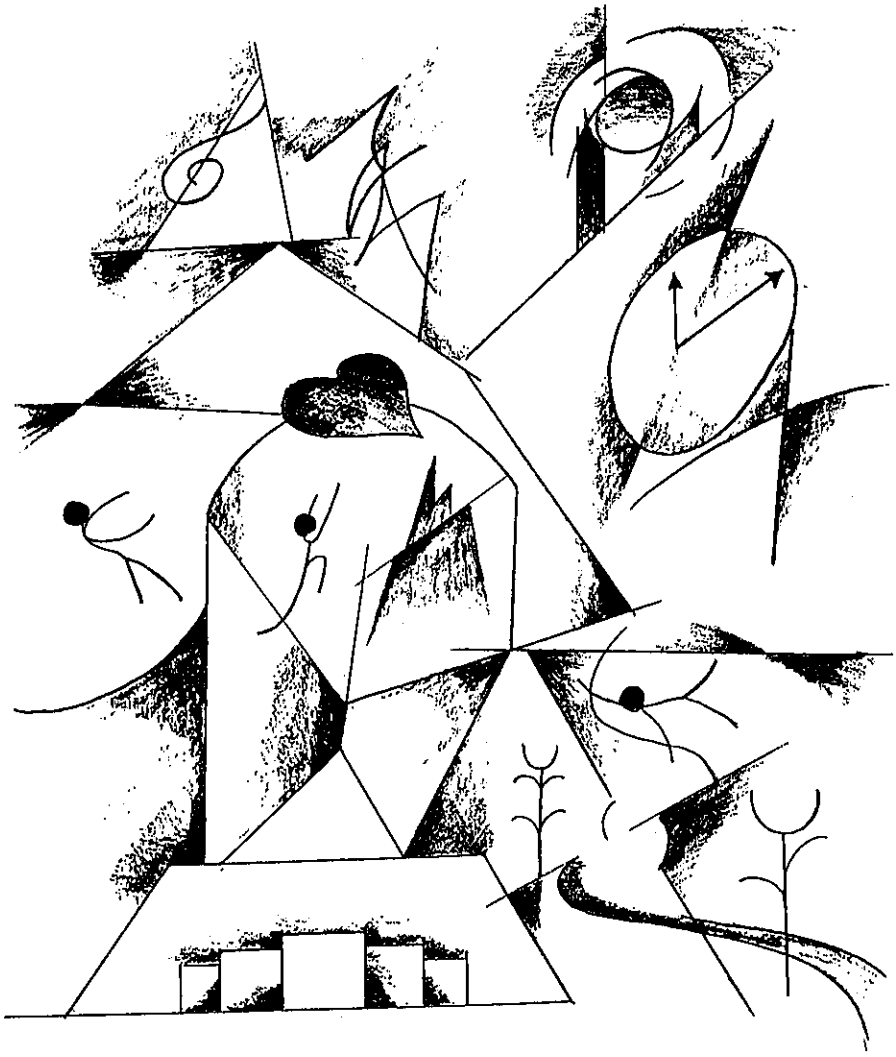
研究紀要 No.27

平成8年6月6日・7日
教育研究会要録

生きる喜びを生み出す教育課程の創造

―― 子供主体の活動からみる教育課程の編成 ――



福岡教育大学教育学部附属福岡小学校

本報告書に記載されている内容は、学校教育法施行規則第26条の２の規定に基づき、教育課程の基準改善のために文部大臣の委嘱を受けて実施した実証的研究です。

したがって、この研究内容のすべてが直ちに一般の学校における教育課程の編成・実施に適用できる性格のものでないことに留意してお読み下さい。

ご あ い さ つ

福岡教育大学　学長　　菰 口　　治

本学附属学校の一つである福岡小学校が、創立120周年を迎え、本年も関係各位のご支援・ご指導を受けて研究発表会を開催することができますことを心より感謝申し上げます。

戦後50年が過ぎましたが、本校の発表会は49回目になります。この間、高度経済成長によって、過去比類ない物質的豊かさに恵まれた社会になりました。

一方、価値観の多様化、少子化、高度情報化、国際化など、社会の変化は歴史的にも経験しなかった激しいものがあります。

このような社会の変化により、学校教育に関しても、いじめなど厳しい問題を抱え、マイナーチェンジでなく、抜本的改革および学校教育以外を含む総合的視点に立った教育のあり方が求められています。

このような時代の要請に応えて、全国各地の多くの先駆的学校は、豊かな人間の育成を目標にして、創造的教育実践研究の開発に力を注いでいます。諸学校の研究発表のテーマを拝見しますと、個性化教育の推進、自己教育力の育成、乏しい人間交流の改善、マルチメディアの教育的活用、国際性の涵養など、新学力観として実践されていることが察せられます。

こうした状況の中で、附属福岡小学校においても数年後に迎える21世紀の社会をよりよく生きる自立した子供を育てるため、本校独自の教科・領域や内容を編成し、実践して参りました。本年度は特に子供の活動に重点をおき、子供主体の活動から新しい教育課程の方向を模索しているところです。本校独自の教科・領域や内容の編成が新しい教育の提案になることを期待し、ご参会の皆様のご指導をお願い申し上げます。

なお、本学では大学と附属学校とが共同研究を進めるための組織を昭和44年にスタートさせ、附属福岡小学校は初等教育研究部と障害児教育研究部において研究活動を進めております。共同研究関係の方々のご尽力に心から感謝申しあげます。

はじめに

本校では、平成3年度から5年度にかけて「生きる喜びを生み出す学習の創造」という主題で教育実践研究を行ってまいりました。この主題を追究し、学習を創造するためには、現行教科の指導内容や全体的教科間領域の見直し・検討が必要であるとの結論にいたりました。

さいわいにも、平成6年4月1日付で、文部省研究開発学校の指定を受けました。その研究委嘱事項は、「小学校において、児童の学習実態に対応して、基礎的な学力の一層の定着を図る教育課程の研究開発を行う。」ことであります。

そこで、平成6年度から3ケ年の研究主題を「生きる喜びを生み出す教育課程の創造」とし、1年次の副主題を「新しい教育課程における教科領域の学習の具体化」として定め、教育課程全体の見直しを検討して参りました。

その中で、現在の子供の実態を踏まえ、本校がめざす子供像は、「21世紀の社会をよりよく生きる自立した子供」であるとし、そのような子供を育てるには、基礎・基本を定着させ、さらにどのような力を育てる必要があるかを議論した結果、総合的学習を基礎にした新教科として、低学年に「表現科」、中学年に「生活環境科」をそれぞれ設定することを試みました。

「表現科」は、子供の本能的な表現欲求を自由な表現方法で引き出し、旺盛な表現活動の過程で豊かな感性や創造性への関心・意欲・態度を育てていくことをねらいとしています。

「生活環境科」では、低学年の「生活科」の体験活動を通して育てた生活者としての能力や態度をさらに生かして、環境構成者の一員として自分自身や生活について考え、探究活動を重視した実践的な態度を育てることを主眼とし、高学年の「社会科」「理科」「家庭科」へと分化するものであります。

これらの教科の内容の吟味を行い、現行の枠の中で関連指導も試み、その可能性について検討して参りました。

2年次では、副主題を「子供主体の活動からみる教育課程の編成」とし、年間計画を全面実施する中で、子供の心を具体的な活動や体験によって十分に耕し、対象とのかかわりの中で認識を深めていく学習ができるような教育課程のあり方を考えて参りました。その中では、特に子供の感性と認識が相互にかかわり合い高めあっていくことができるような単元や題材を考え年間計画を見直してきました。

また、新たに領域「人間」を設定し、心の教育の中核を担う道徳の時間と特別活動（特に学級活動）との統合を図った総合的な学習の中で、人間尊重の精神に基づいて、人間性豊かに生きる実践的な態度を育てようと試みてきました。

この2年間の研究を振り返りますと、わずかな一歩ではございますが、学習の姿は着実に、子供を中心とした子供主体の学習へと変容していることを感じているところです。

この研究が本校の研究担当者以外の運営委員の皆様をはじめとする多くの方々のご指導・ご支援のもとに展開できていることを深く感謝申し上げますとともに、今後とも各方面からのご助言やご協力をお願いする次第でございます。

平成8年6月

福岡教育大学教育学部附属福岡小学校　校長　高橋義夫

目　　次

ごあいさつ …… 1

はじめに …… 2

日程と内容 …… 4

1　日　目 …… 4

2　日　目 …… 6

公開授業及び全体会の部

1　日　目

学習指導案（午前） …… 9

学習指導案（午後） …… 31

学習指導協議会 …… 54

全体会 …… 56

2　日　目

学習指導案（午前） …… 59

学習指導案（午後） …… 81

学習指導協議会 ……100

全体会 ……102

全体講演 ……105

研究紀要の部

研究紀要目次 ……108

研究紀要 ……110

おわりに ……267

研究同人 ……268

日 程 と 内 容（1日目）

◇ 学 習 指 導（ 9 : 15〜10 : 00 ）

学年組	教 科 等（指導者）	単元・題材・主題名	会 場
1の1	生 活（石 田 耕 一）	じゃんぼすべりだいであそぼう	ジャンボすべり台
1の2	国 語（伊 藤 啓 二）	なかよしのどうぶつさんたち	2
2の2	体 育（笠 宏 照）	ポンポンボールゲームをしよう	附中体育館
3の2	人 間（中 原 浩）	みんなの心をつなごう（ぼくらのひみつき地づくり）	5
4の2	算 数（加 藤 英 也）	角の大きさを調べよう	7
5の1	社 会（後 藤 正 弘）	21世紀の博多の漁港	11
5の2	理 科（山 下 浩 徳）	生活の中のおもりのはたらき	9
6の2	理 科（今 林 康 治）	生活の中の水溶液	理 科 室
ふ じ	音 楽（西 原 敦 子）	かえるの音楽会	北校舎音楽室
梅	算 数（松 本 良 一）	おつかいにいこう！（金銭）	さ く ら

あ い さ つ（ 10 : 15〜10 : 35 ）　　学 長　菰 口　治

学校長　高 橋 義 夫

◇ 主題発表（ 10 : 35〜11 : 00 ）

● 生きる喜びを生み出す教育課程の創造

—— 子供主体の活動からみる教育課程の編成 ——　　教 頭　安 永 純 二

◇ 教 科 発 表（ 11 : 00〜11 : 45 ）

● 体育科 「 主体的に運動にかかわる体育科学習 」　　体育科部　佐々木 壮一朗

● 理 科 「 自然事象に対する新たな考えを つくり出す理科学習 」　　理科部　今 林 康 治

◇ 教 科 発 表（ 12 : 45〜13 : 30 ）

● 社 会 科 「 社会の形成者として社会生活を よりよくしていく社会科学習 」　　社会科部　後 藤 正 弘

● 国 語 科 「 ことばを通して創造的に 自己表現していく国語科学習 」　　国語科部　伊 藤 啓 二

◇ 学 習 指 導（13：45～14：30）

学年組	教 科 等（指導者）	単元・題材・主題名	会 場
1の2	生 活（藤 木 寿美枝）	わたしにしかできないがっこうしょうかい	クローバー畑
2の1	算 数（重 松 宏 明）	大きな数をかぞえよう	3
3の1	音 楽（津 本 修 一）	むかし話のミュージックシアターをつくろう	音 楽 室
4の1•3	体 育（佐々木 壮一朗）	3種競技を楽しもう（走・跳・投の運動）	運 動 場
4の2	人 間（植 松 伸 之）	長浜公園にふれあいをつくろう	7
5の1	理 科（安 永 純 二）	動物の成長とわたし	理 科 室
5の2•3	図 工（樺 島 穣）	布と針金で生みだされるもの	工 作 室
6の1•3	家 庭（平 山 尚 美）	家庭生活に役立つ物を製作しよう	家 庭 科 室
6の2	社 会（芋 生 修 一）	活躍する博多商人	11
ふ じ	体 育（舛 元 俊 文）	どうぶつむらのだいたんけん（基本の運動）	北校舎運動場
さくら	生活単元学習（落 合 純 哉）	おみせやさんになってあそぼう	北校舎音楽室

◇ 学習指導協議会（14：45～16：15）

会 場	教 科	司 会 者	指導助言者	大 学 教 官
9	国 語	南筑後教育事務所 指導主事 佐々木保善	太宰府市教育委員会 指導主事 古川 千年	福岡教育大学 教授 前田 真証
3	算 数	福岡市立原北小学校 教諭 坂口 忠司	小郡市立東野小学校 校長 川口 浩	福岡教育大学 助教授 飯田 慎司 助教授 山口 武志
11	社 会	久留米市立日吉小学校 教諭 岡崎 茂	福岡県教育庁義務教育課 指導主事 家宇治正幸	福岡教育大学 教授 中野 和光
理科室	理 科	太宰府市立太宰府小学校 教諭 奥村 明男	福岡県教育庁義務教育課 指導主事 平石 信敏	福岡教育大学 教授 進藤 公夫 教授 中村 重太
2	生 活	太宰府市立太宰府南小学校 教諭 奥園 哲夫	大牟田市立中友小学校 校長 堤 直樹	福岡教育大学 助教授 寺尾 慎一
音楽室	音 楽	杷木町立松末小学校 教諭 矢野 幸子	志免町立志免南小学校 教頭 高橋 秀喜	福岡教育大学 助教授 木村 次宏
図画室	図画工作	福岡市立宮松小学校 教諭 犬伏 哲也	黒木町立笠原小学校 校長 栗原 宏徳	福岡教育大学 教授 吉井 宏
家庭科室	家 庭	福岡市立舞鶴小学校 教諭 藤永 福子	福岡市立愛宕浜小学校 校長 田中 光子	福岡教育大学 助教授 甲斐 純子
5	体 育	柳川市立両開小学校 教諭 福永美智也	福岡市立香椎小学校 教頭 三原 英喜	福岡教育大学 助教授 相部 保美
7	人 間	南筑後教育事務所 指導主事 池田 隆	甘木市立立石小学校 校長 徳田 正毅	福岡教育大学 教授 高田 清 助教授 堺 正之
ふ じ	体 育 算 数	前原市立波多江小学校 教諭 大石 育郎	福岡県教育庁特殊教育課 主任指導主事 堤 正則	福岡教育大学 助教授 藤金 倫徳
梅	音 楽 生活単元	福岡市立生の松原養護学校 教諭 林田 千枝	福岡県立北筑前養護学校 教諭 古賀 真理	福岡教育大学 教授 山下 勲

日 程 と 内 容（2日目）

◇学　習　指　導（ 9 : 15〜10 : 00 ）

学年組	教　科　等（指導者）	単元・題材・主題名	会　　場
1の1	算　　数（加 藤 英 也）	いくつになるかな（たしざん1、ひきざん1）	1
2の1	表　　現（津 本 修 一）	もしも空をとべたなら	音 楽 室
3の2	体　　育（笠　 宏 照）	スルーボールをしよう（ゲーム）	運 動 場
4の1	生活環境（芋 生 修 一）	福岡市の交通	7
5の1	国　　語（吉 田 正 樹）	見方を変えて考えよう	9
6の1	算　　数（重 松 宏 明）	拡大・縮図をしよう	図 画 室
6の2	人　　間（中 原　 浩）	小さな友達から	11
帰　国	総合活動（後 藤 正 弘）	世界の食事のよさを紹介しよう	子どもスタジオ
さくら	体　　育（松 本 良 一）	ぼうけんワールドであそぼう（おいかけボール遊び）	北校舎運動場
梅	国　　語（落 合 純 哉）	あてっこあそびでわいわいあそぼう	北校舎音楽室

あ い さ つ（10 : 15〜10 : 30）　　学校長　高 橋 義 夫

◇ 主 題 発 表（10 : 30〜10 : 55）

● 生きる喜びを生み出す教育課程の創造
　── 子供主体の活動からみる教育課程の編成 ──　　研究主任　重 松 宏 明

◇ 教 科 発 表（10 : 55〜12 : 00）

● 生活環境科　「生活環境とのよりよい関係を
　つくり出す生活環境科学習」　生活環境科部　山 下 浩 徳

● 領域「人間」　「ともに生きることの喜びを味わい
　豊かに実践できる人間学習」　領域「人間」部　中 原　 浩

● 表 現 科　「豊かに感じ取り創造的に表現していく
　喜びを味わう表現科学習」　表現科部　樺 島　 穣

◇ 学 習 指 導（13：00～13：45）

学年組	教 科 等（指導者）	単元・題材・主題名	会 場
1の2	表 現（樺 島 穣）	えのぐぬのあてあそびからでてきたおはなしやおとたち	2
2の2	生 活（藤 木 寿美枝）	あらつのおかの小鳥となかよくなろう	クローバー畑
3の1	算 数（小 森 晃）	しらべたことで生活を見直そう	5
3の2	生活環境（今 林 康 治）	あらつの虫たち	動 物 村
4の1	国 語（伊 藤 啓 二）	松井さんはどんな人「白いぼうし」	7
4の2	生活環境（山 下 浩 徳）	私たちの室見川	子供スタジオ
5の2	人 間（植 松 伸 之）	バングラデシュに心を届けよう	9
6の1•3	体 育（佐々木 壮一朗）	マット・とび箱にチャレンジしよう	附中体育館
ふじ さくら 梅	合 同 生活単元学習（舛 元 俊 文）（落 合 純 哉）（松 本 良 一）（西 原 敦 子）	かいじゅうランドをつくってあそぼう	北校舎運動場

◇ 学習指導協議会（13：50～14：50）

会 場	教 科	司 会 者	指 導 助 言 者	
7	国 語	糟屋郡教育研究所 研究主事 水上 栄一	八女市立福島小学校 教頭 橋本 義徳	城島町立城島小学校 校長 中野 秀雄
5	算 数	粕屋町立大川小学校 教諭 御手洗昭夫	春日市立春日野小学校 教頭 吉富 修	大野城市立大野東小学校 校長 古賀 宮太
音楽室	表 現	粕屋町立粕屋中央小学校 教諭 宮口 光秀	福岡県教育センター 研究主事 田中 和隆	北野町立弓削小学校 教頭 大橋 鉄雄
体育館	生活環境	宇美町立原田小学校 教頭 西 邦彰	福岡教育事務所 主任指導主事 谷 友雄	太宰府市立太宰府小学校 校長 倉吉志米男
9	人 間	福岡教育事務所 指導主事 大嶋 正紹	福岡市立三宅小学校 校長 三浦 淳彦	三橋町立矢ケ部小学校 校長 松石 正夫
11	体 育	大川市立大野島小学校 教諭 武下 英俊	福岡教育事務所 指導主事 脇田 哲郎	春日市立春日北小学校 校長 大橋 直徳
ふ じ	体 育	福岡市立草ケ江小学校 教諭 山本 弘美	福岡県教育庁特殊教育課 指導主事 宮地 祥太	
梅	国 語	宗像地区教育研究所 研究主事 有馬 宏	福岡県立福岡盲学校 校長 川上 匡彦	

◇ 全 体 講 演（15：05～16：30）

演 題 「未来をひらく子供主体の学習活動」

文部省教科調査官 嶋 野 道 弘 先生

あ い さ つ　　副校長 楠 田 和 三

本校研究のあゆみ

年度	
23	学習効果判定の理論と実際
24	カリキュラムの構成と実際
25	（発表会なし）
26	学習深化の指導
27	学習深化の指導
28	学習深化をめざす指導
29	学習指導における諸問題の再検討
30	学習指導における新課題の再検討
31	学習指導深化をめざす新課題の究明
32	組織化をめざす学習指導法の究明
33	同　上
34	学習指導の系統化
35	改訂指導要領による学習指導の諸問題
36	考える子どもを育てる指導法の究明
37	○考える力をのばす学習指導法の考察 －考えさせるために経験を どのように位置づけるか－
38	○考える力をのばす学習指導法の考察 －考える力をのばす学習過程の構造化－
39	○考える力をのばす学習指導法の考察 －学習過程における「くらべ活動」の 検討とその指導
40	○考える力をのばす学習指導法の考察 －学習の「かまえ」を育てる指導法の究明－
41	○考える力をのばす学習指導法の考察 －考える力をのばす学習過程の評価－ 明治図書から出版 「授業における思考訓練」
42	○教科の本質に立脚した学習指導法の考察 －教材の価値と指導内容の検討－ 明治図書から出版 「思考をのばす学習過程の評価」
43	（発表会なし）
44	○現代化をめざす指導法の究明 －教材の現代的価値と児童の実態と 反応にもとづく指導内容の検討－
45	○現代化をめざす指導法の究明 －基本的内容にせまらせる学習の開発－
46	○現代化をめざす指導法の究明 －ひとりひとりを生かす 合理的な学習指導のしくみ
47	○現代化をめざす指導法の究明 －学習の連帯化をはかる指導のしくみ－
48	○現代化をめざす指導法の究明 －連帯性を育てる学習指導のしくみ－
49	○現代化をめざす指導法の究明 －連帯の力で学びとる姿勢の形成をはかる 学習指導のしくみ－
50	○現代化をめざす指導法の究明 －学びとる力の育成をはかる学習指導のしくみ－
51	○学びとる力を伸ばす学習指導法の究明 －操作を通した学習の構造化－
52	○学びとる力を伸ばす学習指導法の究明 －操作を通した学習指導の展開－

年度	
53	○「できるまで育てる」学習指導の計画と運営 －交流でよりよい操作を身につける学習指導－ 秀巧社から出版「自由活動の時間」
54	○「できるまで育てる」学習指導の計画と運営 －教材の価値にせまらせる操作学習の評価－
55	○自己実現の喜びを生みだす学習指導 －見直し活動を生かした操作学習の深化－
56	○自己実現の喜びを生みだす学習指導法 －自己を見直し、考えを深める指導のしくみ－
57	○自己実現の喜びを生みだす学習指導 －自ら見直し活動に取り組み、 自己を深める指導のしくみ－ 北大路書房から出版 「学ぶ喜びを生み出す授業」
58	○自己実現の喜びを生み出す学習指導 －個が生きる課題づくり－
59	○自己実現の喜びを生み出す学習内容の検討 －学習実態の多様性に即応する学習指導－
60	○自己実現の喜びを生みだす学習指導 －子どもの個性が生きる指導－
61	○自己実現の喜びを生みだす学習指導 －「学習の個性化」をめざす指導法の開発－ 明治図書から出版
62	○自己実現の喜びを生み出す学習指導 「学習の個性化」をめざす学習過程
63	○自己実現の喜びを生みだす学習指導 －「学習の個性化」をめざす授業の改造－ 明治図書から出版 「『学習の個性化』をめざす授業の開発」 「感動体験を中核とした 生活科の授業づくり」
平成元年	
	○個が生きる授業の創造 －自己理解の学習過程－
2	○個が生きる授業の創造 －考えを確かにする活動構成－
3	○個が生きる授業の創造 －考えを深める自己吟味活動を通して－ 北大路書房から出版 「個が生きる授業の創造」
4	○生きる喜びを生み出す学習の創造 －思い・願いをもって問いつづける活動づくり－
5	○生きる喜びを生み出す学習の創造 －思いをあらわしていくよさを 実感する活動の展開－
6	○生きる喜びを生み出す学習の創造 －自分のよさを実感する表現活動の展開－
7	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 －新しい教育課程における 教科領域の学習の具体化－
8	○生きる喜びを生み出す教育課程の創造 －子供主体の活動からみる教育課程の編成－

公開授業及び全体会の部

第一日目　午前の部

公開授業指導案

第１学年１組　　生活科学習指導案

指導者　　石　田　耕　一

単　　元　　じゃんぼすべりだいであそぼう

指　導　観

○　本学級の子供たちは、学校探検を通して、友達や上級生、先生などとのかかわりを深めてきている。休み時間などには、お互いに誘い合って遊ぶ姿も見られるようになり、共に生活する仲間としての意識が芽生えつつある。しかし、友達と協力し合って遊びを工夫したり、遊具などの施設の特長を生かして遊んだりする態度は身に付いていない。

○　本単元は、ジャンボ滑り台周辺の施設を利用した遊びを工夫し、友達と遊ぶ楽しさや喜びを味わわせることをねらいとしている。具体的には、①ジャンボ滑り台周辺の施設の特長や斜面を生かした遊びに熱中して活動すること、②遊びのルールを創り出したり遊び道具を作りかえるなど、より楽しい遊び方や新しい遊び方を求めて創意工夫すること、③遊びや製作を楽しみながら、友達のよさや自分との違いに気付くことである。このことは、子供自らが遊びを創り出し、友達と力を合わせて仲良く遊ぶ態度を育てる上から価値がある。

○　本単元の指導にあたっては、子供たちにとって身近で親しみのあるジャンボ滑り台周辺の施設での遊びを工夫する中で、友達とのかかわりを深めていくことができるよう次のような支援を行う。①「遊び場の特長を生かすこと」と「友達とのかかわりを深めること」の視点から、価値ある遊びを選定し、演示と試しの活動を設定すること、②遊びの質を高めたり、子供同志のかかわりを深めたりする場の工夫や言葉かけ、③お互いの活動のよさを認め合い、遊びを生活に生かし広げていく表現活動や交流活動の設定。

目　　標

１．ジャンボ滑り台で遊ぶ活動を通して、友達と遊ぶ楽しさを味わい、友達とのかかわりを深めていくことができる。

２．ジャンボ滑り台周辺の施設の特長や斜面を生かした遊びを工夫することができる。

計　　画（約８時間）

段階	で　あ　う（２時間）	ふ れ あ う（４時間）	ふ か め る（２時間）
活動と内容	１．ジャンボ滑り台で遊ぶ。 ○　ジャンボ滑り台周辺での遊びの経験 ○　施設の特長や斜面を生かした遊びの工夫 （一人遊び～集団遊び） ○　モデル演示を受けての試しの遊び	２．自分の思いに沿った遊びを工夫し行う。 (1)　やりたい遊びに必要な道具を製作する。　② (2)　自分の思いに沿った遊びを行う。（本時１／２）② ○　より楽しい遊び方、新しい遊び方（ルールの改良、遊び道具の作りかえ） ○　友達と遊ぶ喜び、友達とのかかわりの深まり	３．遊びを振り返り、絵図「わたしのじゃんぼすべりだい」に表現し交流する。 ○　ジャンボ滑り台への思い ○　遊びの楽しさや遊びの工夫 ○　友達とのかかわりの深まり
支援	○　対象と充分にかかわることのできる時間の保障 ○　集団遊びの価値づけ ○　斜面を活用した遊びのモデル演示	○　遊びの見通しの具体化 ○　遊びの質を高めたり子供同志のかかわりを深めたりする場の工夫や言葉かけ	○　友達の活動のよさの交流 ○　「遊び」を生活に生かし、活動を広げる促し

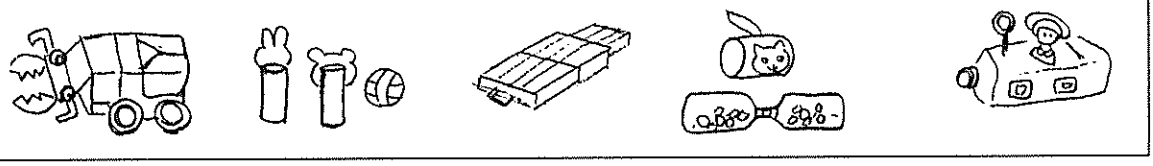
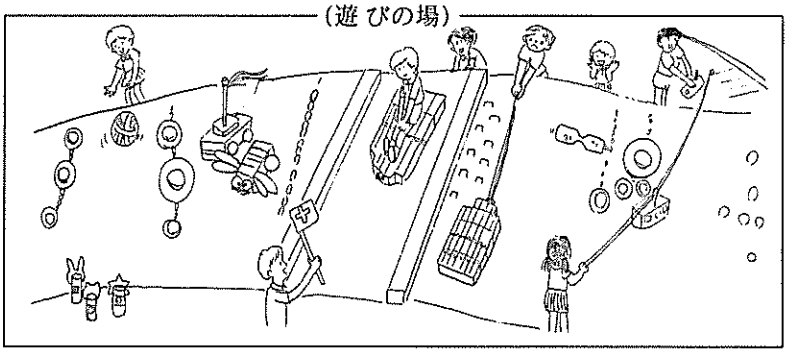
本時の目標

○　友達と協力したり、誘い合ったりして、自分たちの作ったおもちゃで楽しく遊ぶことができる。

準　　備

子供 ── 自分の思いに沿った遊び道具　　教師 ── 修理コーナー、「お友達になったよ」カード

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．前時までの学習を振り返り、本時のめあてを確かめる。 (1) 前時までの学習を想起し、本時への思いを発表する。 ○　活動の様子や思いの想起と本時目標の明確化 ※　活動への思いを発表させる中で、遊びの工夫と友達とのかかわりの視点をしっかりと押さえていく。 ※　遊びのグループごとに活動の場を設定しておく。 (2) 本時学習のめあてを確かめる。 めあて じゃんぼすべりだいで、ともだちとなかよくあそぼう。	○　△△くんとスピードカー競争をして遊ぶよ。 ○　うまくそりすべりができるといいなあ。 ○　お友達と仲良く遊ぶよ。 ○　けがをしないようにするよ。
2．自分の思いに沿った遊びをする。 (1) グループごとに自由に遊ぶ。 Aグループ(スピードカー)　Bグループ(ボーリング)　Cグループ(そりすべり)　Dグループ(ころころ車)　Eグループ(ロープウェイ)  ※　子供たちの自由で主体的な活動を認め励ましていく。 ※　遊び道具を作りかえることのできるコーナーを設置する。 (2) 活動を振り返りながら、遊びを繰り返す。 ○　遊びの楽しさや遊びの工夫 ○　友達とのかかわり ※　友達とのかかわりを深めるための場の設定や教具の提示 (3) グループ同志で遊ぶ。 ○　他グループとの交流 ○　グループ内での声のかけ合い、誘い合い、協力	(遊びの場)  ○　もっとたくさんのお友達と遊ぶよ。 ○　上手に速くすべれるようにがんばるよ。
3．自分がした遊びについて話し合う。 ○　遊びの工夫 ○　友達とのかかわり ※　工夫した遊びや友達と遊んで楽しかったことを実際に行わせ、そのよさを広める。 ※　次にしてみたいことを発表させ、次時への意欲を高める。	○　スピードカーが、よく動くようになったよ。 ○　△△ちゃんが応援してくれて嬉しかったよ。 ○　また一緒に遊びたいな。

第１学年２組　　国語科学習指導案

指導者　伊藤啓二

単　　元　なかよしのどうぶつさんたち　「とりと　なかよし」

指　導　観

○　本学級の子供たちは、ひらがなをすべて学習し、リズミカルな詩や童話から文章を読んで想像する楽しさを味わってきている。また、知的好奇心が旺盛で、新しいことを知ったときの喜びは大きい。そこで、文字言語によって物事に対する新しい情報を得ることは、この時期の子供たちにとって楽しい活動である。そこで、子供たちの好きな動物に関する説明文を活用し、文章から想像を膨らませ、自分なりにことばを解釈して情報を獲得していく学習を行っていきたい。

○　本単元は、説明的な文章を読む学習の入門期として、説明している事柄に興味をもって読み、文章やことばから自分の知りたいことを情報として得ることをねらいとしている。具体的には、①鳥と動物の関係に興味や疑問を持ち、文章を読んで解決すること②文章やことばとして書かれた事柄から自分なりに想像して理解すること③読んで考えたこと、分かったことを自分のことばで発表することなどが内容である。このことは、文章から自分に必要な情報を取り出す情報収集の能力や自分の感じたこと、考えたことを表出していく能力を育てていくものである。このことは、次の説明文を活用した単元で、比べて読む情報収集能力や考えを付け加えていく能力へと発展していく。

○　本単元の指導にあたっては、挿絵や写真を使って鳥と動物の関係に興味をもたせ、鳥と動物が仲良く話している場面を想像して楽しむことによって、説明的文章を読んで、その中から情報を得ることを体験させたい。そのために、導入の段階では映像を通して動物の意外な共生に興味と疑問をもたせる。次に疑問を解決する教材文を提示し、自分なりに文章を読んで叙述から動物の気持ちを想像することで共生の意味をとらえさせたい。その際、共生をしている動物たちのお話のペープサート劇をつくる活動を中心に行う。終末段階では、問いと答えの方で自分の知っている動物のクイズを作り、説明的な文章の特徴の理解と自分の知っていることを説明的に話す経験をさせたい。

目　　標

１．鳥と動物の関係に興味を持って、自分のもった疑問や課題を解決するために文章を読み、文やことばをもとに自分なりの答えを見つけることができる。

２．自分の知っている動物や虫などの生き物について、問題と答えという形で話すことができる。

計　　画（約７時間）

段階	導　入（１時間）	展　　開（３時間）	終　　末（３時間）
活動と内容	１．小動物と大きな動物の共生の挿絵や写真を見て、疑問や課題をもつ。　① ○　映像からの疑問課題の明確化 ○　学習に対する興味・関心の喚起	２．「とりとなかよし」を読み、なかよしの理由を考え、劇をする。 (1)　ペープサートを使ってわにとわにちどりのお話をする。(本時) ① ○　叙述された事柄の読み取り (2)　水牛、ぞうと鳥の仲良しのわけを考えペープサート劇を楽しむ。　② ○　想像をふくらませた表現	３．問いと答えの形を使ってものしりクイズをする。 (1)　教材文を使ってクイズ形式のカードを作る。　① ○　問いと答えの理解 (2)　自分の知っている動物のクイズを作って出し合う。　② ○　説明的な話し方
手だて	○　鳥と動物の共生の様子の映像による提示	○　文カードによる教材文の提示 ○　映像と文章の融合	○　動物の絵や写真の提示 ○　学習ノートの活用 ○　問いと答えのカード提示

本時の目標

○　わにがどうして口に中に入る小鳥を食べてしまわないのかという疑問を解決するために文章を読み、わにとわにちどりのなかよしのわけを考えてペープサート劇をすることができる。

準　　備　教材文のカード・わにとわにちどりのペープサート・動物の共生の写真・お面

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．動物同志のなかよしについて振り返り、本時のめあてを話し合う。	
(1) 動物がなかよくしている写真から疑問を出し合う。	○　どうしてわには口のなかにいるとりを食べてしまわないのだろう。ふしぎだなあ。
○　動物の共生に対する疑問の表出	
※　共生の写真を提示し、自由に感想を出させる。	
(2) 教材文のわにちどりの挿絵と名前をみて、なかよしの動物について想像する。	○　わにちどりという名前だからわにとなかよしだろう。
○　絵や名前からの内容の想像と文章を読む意識の喚起	○　わにさんとわにちどりさんは何を話しているのかな。
※　教材文の挿絵とわにちどりという名前から想像させる。	
わにちどりさんとなかよしのどうぶつになっておはなしをしてみよう。	
2．説明文教材「とりとなかよし」のわにちどりとわにについて書かれた段落を読み、わにとわにちどりのお話を作る。	
(1) 教材文のわにちどりとわにの部分を音読する。	○　本を読んだらわかるかな。
○　音読による叙述の理解	○　「それは、わにです。」と書いてあるぞ。
※　文章を短冊カードにして掲示し、音読しながら内容が押さえられるように配慮する。	○　食べ物のかすがついているのは、ぼくたちと同じだ。
(2) グループ内の友達と話をしながら、わにのペープサートとわにちどりのペープサートをもとにお話をつくる。	○　わにちどりがかすを食べてあげるんだな。
○　文章の叙述をもとにしたお話の想像	○　どんなお話をしてるのかなお礼を言っているのかな。
○　1対1の対話による自分の思い・考えの表出	○　友達とこの人形でお話をしてみよう。
	○　歯をきれいにしてくれるからなかよしさんなんだろう。
※　対話の様子をみながら、どのような文やことばをもとにお話を作っているのか尋ね、叙述と内容を結ぶようにする。	○　わにちどりのえさなんだな。
・わにのはには、たべえものかすが、たくついています。 ・わにちどりは、かすをたべて ・わにのはをきれいいにするのです。 ⇨ ・ちゃんと歯を磨かないと虫歯になるよ。ぼくがきれいにしてあげるね。 ・ぼくのおなかもいっぱいになったし、はもきれいになってよかった。	
(お話の根拠となる叙述内容)　(予想されるお話の内容)	
3．わにさんとわにちどりさんのなかのよいお話を発表する。	
○　自分なりに読み取った事柄を根拠とした言語・身体表現	○　わにさんきれいになって気持ち良さそう。
○　なかよしということの意味の理解	○　二人とも得する仲良しだ。
※　どんなお話のようすがなかよしか感想を出し合わせる。	

第2学年2組　体育科学習指導案

指導者　笠　宏照

単　元　ポンポンボールゲームをしよう

指導観

○ 本学級の子供たちは、ゲームの学習において、簡単なルールを決めて力いっぱい活動すること、仲よく遊ぶこと、勝敗を競い合うこと、などの楽しさを味わっている。ボール遊びでは、投げる・転がす・とる・蹴るなどの運動特性に応じたゲームをすることができるようになっている。さらにこの期にチームのみんなで場やルールを工夫しながら、思いきりボールを打ったり、はじいたりしてゲームをする楽しさを味わわせたい。

○ 本単元のねらいは、子供たちが自分たちの力に応じてルールを工夫し、ネットをはさんでボールを打ち返しながら、仲良くゲームをする楽しさを味わわせることである。本単元の価値としては、①友達と仲良くプレーをしたり、ルールを考え工夫するなど、人とのかかわりを深めることができる、②自分たちでボールを選んだり、ネットの高さを工夫したりするなど、場とのかかわりを深めることができる、③ボールを打つ・はじくという新しい動きを身に付けることができる、などである。

○ 本単元の指導にあたっては、ボールを打つ・はじくという動きに着目させ、みんなでいっしょにゲームを作りながら、ボールで遊ぶ喜びを味わわせる。そのために、とらえる活動では、丸くて軽いボールを準備して、打つ・はじくという動きを十分に体験させ、ゲームにつながる遊びについて考えさせる。つくる活動では、動きに親しませながら、場やルールを意識するような支援を行い、自分たちでコートの広さ・ネットの高さなどを工夫させる。深める活動では、自分たちが工夫してきた場やルールについて、他のチームとの交流をさせながら、ゲームを作る観点を広げさせる。

目　標

1．ポンポンボールにおける簡単なルールに親しみ、自ら場やルールを工夫しながら、楽しくゲームをして遊ぶことができる。

2．チームの中で、お互い声をかけ合ったり、力を合わせたりしながら、相手にボールを打ち返して得点を競い合う楽しさを味わうことができる。

計　画（約8時間）

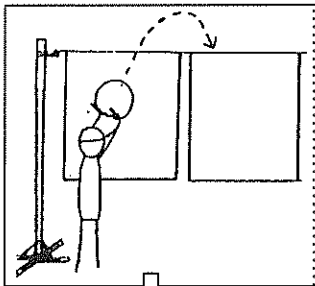
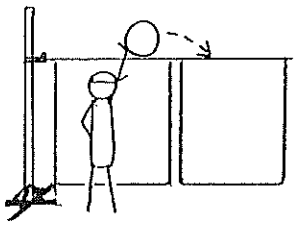
段階	運動との一体感をとらえる活動（3時間）	運動との一体感をつくる活動（3時間）	運動との一体感を深める活動（2時間）
活動と内容	1．打つ・はじく動きを体験する。 ② ○ 丸くて軽いボールでの遊び（ビーチボールなど） ○ しきりを使った遊び ○ 複数の友達との遊びとチームの人数の決定 2．活動について話合い試しのゲームをする ① ○ 課題点の取りだし	3．ルールを考えながら楽しくゲームをする。 (1) ネットの高さを考える。（本時2／2） ② ○ ネットの高さの設定 ○ 場の違いによるボール操作の気付き (2) ボールに関するルールを考える ① ○ ボールに触れる頻度	4．考えたルールについて交流しまとめのゲームをする。 ② (1) ルールを確認し、コートやネットを設定してゲームをする。 ○ 工夫点の発表による交流 ○ 対戦チームごとのゲーム ○ ボール操作への気付き (2) 学習したことをまとめる。 ○ 協力・工夫したことの発表
手だて	○ 多種類のボール ○ 移動式支柱とネット ○ 学習課題表（課題の記録）	○ 対戦チームごとのルール表 ○ 可動式ネット（ひも） ○ 学習課題表（課題達成の記録）	○ ボール操作のビデオ ○ 学習課題表（課題達成の記録）

本時の目標

○　ネットの高さを決めていきながら、ボールを相手コートに打ち返すという楽しさを味わうことができる。

準　　備　ボール、移動式支柱、可動式ネット（ひも）、得点板、学習ノートなど

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．本時学習について話し合う。 (1) チームごとにボールを使って遊ぶ。 ○　対戦チームごとの場の設定とボールを打ち上げる遊び (2) 学習のめあてについて話し合う。 ○　ネットの高さを変えることへの気付き ※　学習課題表や前時までの学習から、対戦チームごとに、ネットの高さに違いがあることに気付かせ、続けてボールを打つことや操作などの楽しさの観点からめあてをつかませる。 めあて ネットの高さを考えながら、みんなでボールをあいてコートにうちかえして遊ぼう。	○　みんなで、打ち上げ遊びをしよう ○　この前考えたネットの高さにしよう。 ○　もう少し、低いほうがたくさん動けそうだな。 ○　アタックみたいなことができるように、ネットを低くしていたよ。 ○　私達も、いろいろな高さでやってみよう。
2．ポンポンボールゲームをする。 (1) ゲーム1をする。 ○　設定したコートやネットにおけるゲーム (2) ゲーム1を振り返り、全体で交流をしながら、場を変える。 ○　その場のよさや不十分さの発表 ○　場の変更 ※　子供の発表を観点表にまとめ提示することで、ネットの違いによるゲーム様相をとらえさせ、高さを変える観点をもたせる。 高いネットから低いネットへ  ・ボールを上にしか打ち上げることができないな。 ・片手で、アタックのような返し方もやってみたいな。 ・少しネットを低くしてみよう。  ・手が届くくらいでいいかな。 ・片手で返すこともできるようにしてみよう。 ・上のほうだけではなく、少し強く前のほうに返すこともできるぞ。	
(3) ゲーム2をする ○　ネットの高さを変えた場でのゲーム ※　場を変えたことによって、どんな楽しさや不十分さが出てきたかをとらえさせる支援を行い学習課題表にまとめさせる。	○　強く打っても、相手のコートにはいるようになった
3．本時学習をまとめる。 ○　工夫したことや、協力したことの発表 ※　活動について賞賛しながら、次時の学習について話す。	○　友達と一緒に考えて遊ぶことができたな。

第３学年２組　「人間」学習指導案

指導者　中原　浩

題　　材　みんなの心をつなごう（ぼくらのひみつき地づくり）

指導観

○　本学級の子供たちは、学級目標の「太陽学級」をめざす組織づくりや取り組みを通して、一人一人が学級の仲間であるという思いと協力して楽しい学級を作っていこうとする意欲が育ちつつある。また、今まで知らなかった友達とも、話したり誘い合って活動したりする姿も見られてきた。そこで、一人一人の思いや考えを生かすことができる創造的な活動に取り組み、友達とともに活動する楽しさを味わわせ、自己存在感や学級の凝集性を高めていきたい。

○　本題材のねらいは、自分たちの秘密基地作りを通して、友達とともに活動することの喜びを味わわせることである。具体的には、自分、そして友達が学級のかけがえのない一員であるという自己存在感を味わい、学級が一人一人の心の安全基地として意識できるようになることである。秘密基地作りの活動は、活動の過程を通して、①友達の思いや願いを感じ取る豊かな感性、②太陽学級に向かうための具体的な活動を考える創造力と判断力、③友達と交流、対話しながら協力して活動を推し進めることができる対人関係能力と実践力を培うことができると考える。

○　本題材の指導にあたっては、学級の和を強める「３の２秘密基地」作りの活動に自主的、実践的に取り組めるよう次のような支援を行う。①日記や活動時のつぶやきにおける「もっとみんなと仲良くなりたい、楽しく協力して取り組める活動をしたい」という思いの取り出し、②活動目的の明確化と話合いの焦点化、③思いの具現化に向けた材料や用具の準備・援助、④協同で作り出す喜びを味わわせる時間と場の設定とビデオ等による活動の記録と賞賛の声かけ、などである。

目　　標

１．「３の２秘密基地」作りを通して、仲間と協力して作り上げる喜びを味わい、友達とのつながりや学級のまとまりを強めることができる。

２．仲間や学級への思いを「３の２秘密基地」に表現するとともに、今後の学級での取り組みへの見通しと意欲をもつことができる。

計　　画　（約５時間）

段階	感じる（0.5時間）	考える（0.5時間）	行　う（３時間）	見つめる（１時間）
活動と内容	１．一人一人の学級や友達への思いを話し合う。 ○今までの活動の想起と思いや願いの把握 ○活動目標の明確化と意欲の高揚 みんなの願いのこもった「秘密基地」を作ろう。	２．「秘密基地」作りの計画を話し合う。 ○活動目標実現のための計画（準備と分担）  みんなが入れる 思いが表れている 移動ができる	３．「秘密基地」作りに協同で取り組む。 ○計画案による友達との協同的活動の実践 ○活動課程における自他のよさの気づき ４．開所式を行う。 ○有用感、充足感の感得 ○自己や集団の凝集性の高まりの自覚化	５．活動を振り返り、今後の活動について話し合う。（本時） (1)　実践活動の思いや感動を話し合う。 ○友達の存在のよさの実感 (2)　秘密基地の今後について話し合う。 ○今後の活動への見通しと意欲の喚起
手だて	○　ビデオによる活動想起の促し ○　日記による思いや願いの取り出し ○　他学年の創造的活動の紹介	○　活動目標実現の観点（目的性、現実性）による焦点化と資料コーナーの設置	○　協同的活動の行為の取り出しと賞賛 ○　具体的実践活動の場と時間の設定	○　活動時の感動やよさが見てとれる写真やビデオの掲示 ○　活動を広げる促し

本時の目標

○　活動で見つけた自分たちのよさを話し合い、協同で活動する楽しさや作り上げた喜びを味わうとともに、今後の活動（秘密基地の生かし方）を考えることができる。

準　　備　活動時のビデオと写真　「友だち発見」カード　人間学習ノート

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．「3の2秘密基地」作りの活動をふり返り、本時めあてについて話し合う。 ○　活動の様子や思いの想起と本時目標の明確化 ※　秘密基地の製作や開所式の様子のビデオを視聴させ、今までの活動の足跡や思いを見つめさせる。 めあて 自分たちのよさをのばし、3の2の心をつなぐ「ひみつき地」の生かし方を考えよう。	○　みんなの協力で3の2だけの秘密基地ができてうれしいな。 ○　開所式では、みんなで心を合わせて建てることができたが、みんな中に入れて楽しかったな。 ○　「友達発見」カードがたくさんたまっているから、それを紹介したいな。 ○　ぼくのよさを見つけてくれた友達がいるだろうか。
2．秘密基地作りを通して見つけた友達（学級）のよさや秘密基地の今後の活用の仕方について話し合う。 (1) 友達（学級）のよさについて話し合う。 製作活動　・協同的な助け合いの姿　・よさを見つけ賞賛する姿　・集中して取り組む姿 開所式　・心を合わせて建てる姿　・司会など分担協力する姿　・完成をみんなで喜ぶ姿 ○　自分たちだけの秘密基地を作り上げた喜びの実感 ○　協同で作り上げた喜びと友達のよさ共有 ※　製作の過程における「友達発見」カードや触れ合いが見てとれるビデオ視聴をもとに考えさせる。	○　○○君が、わたしが書きにくいとき、場所をゆずってくれて、やさしいなと思いました。 ○　○○さんが、わたしの絵をとっても上手ねとほめてくれてうれしかった。 ○　友達は、ぼくのこんなことを見てくれていたのか。ありがとうっていいたいな。
(2) みんなの心をつなぐ「秘密基地」の今後の活用の仕方について話し合う。 定期的な活動としての活用……さらに仲良くなるために 例　・野外給食や活動の拠点として（校内や西公園で） イベント的な活用……学級の記念日（学校目標に近づいたとき）に 例　・7月第一土曜日…伊崎浜を基地に海水浴をしよう ・10月教育実習最終日…教生先生とのお別れ会をしよう ・3月第3土曜日…3の2お別れ○○遠足にいこう ○　今後の学級での活動の見通しと意欲の高まり ※　大まかな1年間の計画表と活動のヒントを掲示しておき子供のアイデアや思いを引き出し、広げる支援を行う。	○　秘密基地をつくって、3の2のみんながとっても仲がよくなったな。これからも仲よくしていきたいな。 ○　秘密基地を生かして、楽しい3の2の活動をみんなでつくっていこう。 ○　7月の秘密基地での海水浴が楽しみだな。ぼくも実行委員になって、心をつなぐ海水浴の計画を立てたいな。
3．本時学習をまとめる。 ○　友達や学級のよさの実感と実践意欲の高まり ※　学習ノートに自己評価とともに記入させる。	

第4学年2組　算数科学習指導案

指導者　加藤英也

題　　材　角の大きさを調べよう

指　導　観

○　本学級の子供たちは、1つの頂点から出ている2つの辺で構成される形としての角をとらえたり、2つの角を重ねて、角の大きさを比べたりすることはできるようになっている。また、長さやかさ、重さなどの量に関しては、重ねて比べる、移しとって比べる、単位のいくつ分で、量を数値化するなどの体験をしてきている。本題材では、これまでの、図形としての静的な角のとらえ方から回転の大きさを表す量としての動的な角のとらえ方へと角の概念を付加することができるようにしたい。

○　本題材のねらいは、角を量としてとらえ、任意単位による測定から普遍単位（度）による角の測定へと測定の見方・考え方ができる対象を広げるとともに、生活の中の事象から角を取り出し、その大きさを測ったり、かいたり、作ったりする測定や構成の活動をたっぷりと行わせることである。具体的には、①角を回転の大きさを表す量としてとらえること②いろいろな角の大きさを測ったり、かいたりするために、単位のいくつ分の考えを使って分度器を作りだすこと③目に見えない部分から角という量を取り出し量の見方を深めること④位置を表すために角を利用するなど生活の中に活用することなどである。これらの学習を通して、量のとらえ方、数理を生活に活用する力を育てることができる。

○　本題材の指導にあたっては、子供自らが、生活の中から角の大きさを比べたり、表したりする必然性を持って、角を量として数値化し、身の回りから取り出した角の大きさを測定することができるようにしたい。そのために、角を取り出す段階では、ゴルフゲームやボール回しゲームを行い、回転量としての角の大きさを表す必要感を持つ活動の場をしくむ。角の大きさを測ったり表したりする段階では、いろいろな角の大きさを、単位角のいくつ分で表すという測定の仕方ができるように、角の大きさを数値化する必然性のある角比べゲームを行う活動の場を設定する。生活の中に角を生かす段階では、身の回りのいろいろな物の位置を角度により表す場所当てクイズやオリエンテーリング活動を行い、見えないところに角を取り出す場を設定し、角の有用性を味わう。

目　　標

1．回転の大きさとして角をとらえ、角の大きさを単位となる角のいくつ分でみることができる。

2．生活の中の事象を角という観点から着目し、見えない角の大きさを取り出し、測ったり、表したりする活動を行うことができる。

計　　画（約7時間）

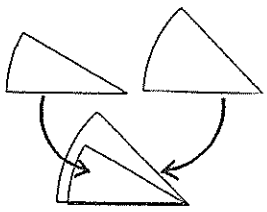
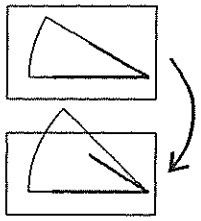
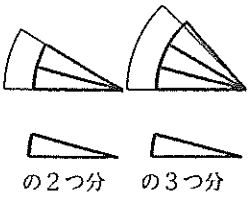
段階	角を取り出す体験（2時間）	角の大きさを測ったり表したりする体験（3時間）	生活の中に角を生かす体験（2時間）
活動と内容	1．回転の大きさを角で表す (1)　ゴルフゲームをする。① ○　回転の大きさとして角を取り出す体験 (2)　ボール回しゲームをする。① ○　回転角を直接比較する体験	2．角の大きさを数値化する (1)　角比べゲームをする。②（本時1／2） ○　角を単位のいくつ分で表す体験 (2)　図形捜しゲームをする。① ○　分度器を使った測定体験	3．角度で位置を表す (1)　場所当てクイズをする。① ○　角度によって位置を表す体験 (2)　オリエンテーリングをする。① ○　生活の中の事象から、見えない角を取り出す体験
手だて	○　回転の大きさを角を用いて表すゴルフゲームやボール回しゲームの場の設定	○　角を数値化する必然性のあるゲームの設定 ○　角度が与えられた三角形を捜す活動の設定	○　水平角が測定できる測角器の提示 ○　オリエンテーリングの場の設定

本時の目標

○　角の大きさを重ねたり、写しとったり、単位のいくつ分を使ったりして、自分なりの方法で比べる量（角）の大きさを比べていく活動体験を豊かにできる。

準　　備　学習ノート、角カード　透明シート

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．本時学習のめあてをつかむ。	
(1) 提示された角カードを見て、角の大きさについて話し合う。	○　どの角が大きいのかな。
○　数種類の角カードを大きさの順に並べる見通しを持つこと 	○　なんとなく、辺の長さが長い方が大きく感じるけれど、どうなのかな。
・角を切り取って、直接重ねる方法 ・移しとって、間接的に比べる方法 ・任意の角のいくつ分で比べる方法	○　重ねてみようかな。 ○　長さやかさでやったように写しとってもできそうだな。
※　見た目で判断しにくい台紙に貼った角カードを数種提示する。	
(2) 本時学習のめあてについて話し合う。 めあて 調べ方を工夫して、角カードの大きさを比べよう。	○　よし、写しとってやってみよう。
2．それぞれの角カードを、自分なりの方法で比べ、話し合う。	
(1) 自分なりの方法で角の大きさを比べる。	
○　直接角を切り取って比較  ※　角の部分だけ取り外せるようにしておく。	○　透明のシートにこの角を写して……こっちの角に、重ねると…、あっ、こっちが大きい。
○　角を写しとって比較  ※　間接比較ができるように、透明シートを準備しておく。	○　今度はこっちの角を写して……、この角と比べると、こっちが大きい。
○　任意単位による測定  ※　同じ大きさの任意単位ができるように数枚の色画用紙を重ねたものを準備しておく。	○　何か面倒だな。 ○　1枚のシートに全部かいていけば、はやいかな。
(2) 調べたことについて話し合う。 ○　調べた過程や結果の交流 ※　任意単位による測定の方法は、角カードの数が増えると、便利なことを話合いの中でとらえさせる。	○　なるほど、どのやり方でも、角は比べられるんだ。
3．本時学習をまとめ、次時の学習を知る。 ○　さらに細かい角比べをすること	○　今度は、いくつ分でやってみよう。

第５学年１組　　社会科学習指導案

指導者　　後　藤　正　弘

単　　元　　２１世紀の博多の漁港

指　導　観

○　本学級の子供たちは、生活環境科の学習から福岡市についてもっと知り、よりよい生活をするために、自分から地域に働きかける大切さに気付いてきている。その中で、生活とのかかわりから食料に目をつけ、食料資源がどのように確保されているのか関心をもっている。また、４学年の地域調べの体験から、福岡は漁業の盛んな所であることに気付いてきている。そこで、福岡の漁業について調べ、漁業を通して自分のかかわり方を考え実践していく学習を設定していきたい。

○　本単元のねらいは、イカ漁を主体とした沖合と沿岸漁業が主体の博多の漁港の現状をとらえ、これからの博多の漁業のあり方を考えることができるようにすることである。具体的には、①２００海里や埋め立てなどによる漁場の縮小からくる漁場の開拓への努力や市民にも親しまれる新しい施設、設備、流通の充実への努力をとらえること、②地域漁業の特色であるイカ漁に関心をもち、日本や世界の漁業の現状と比べながら、よりよい博多の漁業の方向を漁場や漁港などの面から判断することである。この博多の漁港を取り上げることで、ア地域に貢献している博多の水産業に関心をもって積極的にかかわっていく態度、イ地域全体という視点で地域と日本や世界相互の事象のもつ情報を分析、吟味する力、ウ地域に貢献しようという意思力、実践力を育てることができる。

○　本単元の指導にあたっては、地域の漁業の特色や意味をとらえる活動として、博多漁港の働きを調べる活動、博多漁港のいかつり船やそこで働く人の様子や願いを調べる活動を設定する。そこで出てくる働く人への共感をもとに、漁場の開拓問題と市民に親しまれる漁港の充実への取り組みについて考え、博多の漁業が発展していくしくみをつくっていく。ここでは、全国的、世界的な漁業の現状も合わせて市の水産課や港湾局への取材活動を展開し、そこから出される視点として・漁場・機械化・市民とのかかわる施設・流通、などの情報からしくみをつくっていく活動を設定する。

目　　標

１．博多の漁港の働きや働く人々の工夫や努力を調べていく活動を通して、地域の漁業を発展させようと漁場開拓などの問題を乗り越え、市民に密着し変わっていく姿をとらえることができる。

２．博多の漁業が発展していくしくみを漁場開拓や漁港の設備からつくりだすことができる。

計　　画（約１１時間）

段階	事象の特色や意味をとらえる（６時間）	社会のしくみをつくりだす（５時間）
活動と内容	１．博多の漁業とのかかわりを調べる。　④ 博多の漁港がどのように生活とかかわっているのか調べ、よさや問題点を取り出す。 (1)　水産食品とのかかわりを調べる。 (2)　博多の漁業の特色やよさを調べる。 ○　漁法、漁港の特色（見学は課外） ○　働く人々の思い、願い(本時４／４） ２．博多の漁業の問題点やよさから変わっていく方向を考える。　② ○　漁場開拓と市民とかかわる施設、設備	３．博多の漁業のしくみをつくる。　④ 博多の漁港はこれからどのようにかわっていったらよいか調べ、しくみにする (1)　仮のしくみをつくり吟味しあう。 ○　漁場の開拓のしくみ（日本の漁業との比較） ○　漁港の施設、設備のしくみ (2)　再取材活動やリサーチ活動をして発展するしくみをつくる。 ○　市や市民、働く人からの意見の反映 ４．しくみを見直し、再度提案する。　① ↑
手だて	○　博多漁港の実地取材活動 ○　夕市への参加 ○　二つの漁港の現状を比較する交流活動	○　漁業発展のための再調査や地域の人や市、漁協などへのリサーチ活動 ○　しくみの内容となる事項決定の交流活動

本時の目標

○　博多の漁業に携わる永村さんのイカ漁の様子や思い・願いを漁の様子を見合ったり、施設に対する思いを聞き取ったりする交流活動から調べ、永村さんのひたむきな生き方から博多の漁業のよさや問題点をとらえることができる。

準　　備　　博多の漁業コーナー（漁港や漁場の平面図）　　永村さんの漁の様子が見れるビデオ

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．本時学習のめあてについて話し合う。 ○　博多漁港の漁師さんの漁業の様子や思い、願いを調べること ＊　博多の漁業コーナーを設置して調べたことが視覚的にとらえられるようにしておく。 めあて 博多のイカ漁業で働く永村さんの漁業にかける思いや願いを調べ、博多の漁業のよさや問題点を考えよう。 2．漁師の永村さんの働く様子や思い、願いを永村さんとの交流活動から調べ、博多の漁業のよさや問題点について話し合う。 (1) 永村さんの漁業の様子や漁港への思いについて予想したことを聞き取ったり、疑問をなげかけたりして思い、願いを取り出す。 ○　イカ漁の様子(漁場開拓、維持費の確保への努力) 永村さんとの交流の場 交流の視点　　＜博多の漁港や漁場の平面図＞ ○　漁や漁港での様子とその時の思い、願い ○　博多の漁業の施設面の変化への思い、願い ○　取り出す思いや願い ・　採算がとれる漁　・漁のきつさの緩和 ・　新しい施設への不安、漁の喜び ○　共感していく永村さんの生き方 ・　自分の仕事への誇りと知恵 ・　漁港にできる市民とかかわる場についての不安 問題点　よさ (2) 博多の漁業のよさや問題点について話し合う。 ○　働く人々のひたむきさと地域の漁業の発展を願う心 ○　市民にかかわる施設への不安と期待 ＊　実際のイカ漁を感じ取れるように、漁場までの動きや漁の仕方を平面図やビデオ、永村さん本人の説明からシュミレーションしていく場を設定する。 3．本時学習での自分の思いやかかわり方を話し合う。 ○　博多の漁業や漁港の発展に関する疑問や願い ○　水産資源の保護や食生活の見直していく態度	○　博多の漁港は、漁場が狭く漁獲が減っているが、働く人はどのような思いで働いてあるのか ○　伊崎の漁港は、夕市など開いて工夫している。働く人の考えが何かあるんだ。博多の漁港ではどうなのだろう。 ○　こんなに重い網を持ち上げている時は、もうやめたくなるのではないかな。 ○　イカ漁の電球も一個４万円もする。１年しかもたないので予算的にも大変ではないかな。 ○　それでも、頑張って漁をしてあるのはどうしてだろうか。 ○　きつくても仕事が好きだということにびっくりした。 ○　少しでも多くのイカをとるために漁でけんめいに仕事をしてある姿に感動しました。これが博多の漁業のよさになると思います。 ○　地域のためになることとして博多漁港にも朝市ができるようなので、ぼくもぜひ行ってみたい。 このように、地域の人が喜ぶような漁港になっていくことも博多のよさになると思う。 ○　でも、永村さんの不安もわかる。もっと漁師さんのことを考えた施設を考えるべきだ。 ○　養殖業や機械化していけば漁獲量を増やすことができもっと博多の漁業は発展すると思う。

第5学年2組　理科学習指導案

指導者　山下浩徳

小単元　生活の中のおもりのはたらき(1)

指導観

○　本学級の子供たちは、日常生活の中でコップが割れたりボールを打ったりなどのさまざまな衝突にかかわる事象を体験している。特にサッカーやソフトボールなどの遊びの経験では、ボールを遠くにやるためには、ボールを強く打てばいいことを経験的に感じている。また、子供たちは生活環境科の学習で、自分なりの問題を見つけ、事象と事象の関係をとらえる力が身についてきている。そこで、これらの上にたって、衝突にかかわる速さや重さの要因を取り出し、量的な変化に目を向けながら、衝突のきまりを見いだす経験をさせたい。

○　本単元のねらいは、おもりが衝突する現象について、条件を整備し、おもりの重さや動く速さを変えて、物の動きを調べることができるようにすることである。具体的には、①おもりが他の物を動かす働きは、おもりの重さや動く速さによって変わること、②おもりが他の物を動かすきまりを生かして遊びを考えること、などがその内容である。これらの学習を通して、事象の変化を量的な変化からとらえ、物の変化の規則性についての見方や考え方を深めたり、身の回りの物の動きや衝突の現象を科学的にとらえ直したりする態度を育てることができる。

○　本単元の指導にあたっては、おもりをあてて転がしたボールを目的の場所に止める遊びなどを通して、子供自らこれまで衝突についてもっている見方や考え方を自分なりに高めていけるようにしたい。そのために見いだす段階ではレールとビー玉などを与え衝突のある遊びを考えさせ、ボーリングなどの自分の衝突の経験を意識させる。調べる段階では、重さや速さなどの衝突にかかわる要因を変えながら、他の物の動く距離や変形の度合い、音の大きさなどを調べ、いろんな衝突におけるきまりをとらえさせる。生かす段階では、お互いの考えた遊びを体験し、おもりの重さや速さによって物を動かす働きが変わるというきまりが使えることを確かめさせる。

目　標

1．生活の中にある、物が衝突して他の物を動かすきまりを、意欲的に追求することができる。

2．おもりが衝突したときの物の働きやそれに伴う変化の規則性についての見方や考え方を深めることができる。

計　画（約7時間）

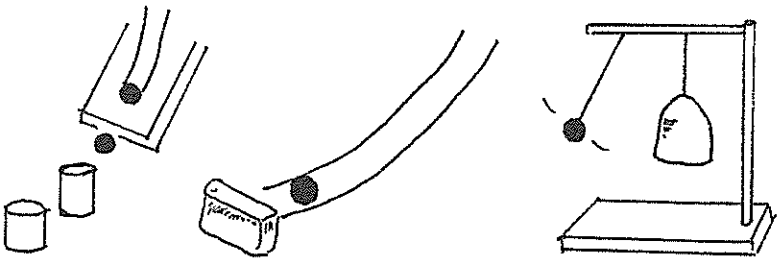
段階	見いだす（2時間）	調べる（3時間）	生かす（2時間）
活動と内容	1．玉を物に衝突させる遊びを考え、遊ぶ。　② (1)　衝突された玉をねらった場所に止める遊びやボーリングなどを考える ○　自分の衝突についての経験の意識化。 (2)　考えた遊びで、遊ぶ。 ○　要因の把握。	2．おもりの重さや速さを変えておもりの働きを調べる。 (1)　おもりが他の物を動かす働きを調べる。　② ○　おもりの重さや速さと動く距離の関係の把握。 (2)　変形や音を出す衝突などを調べる　（本時）① ○　衝突のきまりの把握。	3．自分たちが考えた遊びを紹介しあい、相互に遊びを体験する。　② (1)　自分たちの作った遊びを紹介する。 ○　遊び方の把握。 (2)　他の遊びを体験する。 ○　衝突のきまりの適用や応用。
手だて	○　レールやビー玉などの遊びを作る材料り準備 ○　衝突のある遊びの紹介	○　重さの違う球の準備 ○　速さが変えられるレールの台の準備	○　遊びを作るための、材料の準備 ○　遊びの交流の場の設定

本時の目標

○　おもりの重さや速さの要因を変えて、いろんな衝突の様子について調べ、おもりの重さや速さと物の変形や音の大きさなどの関係をとらえることができる。

準　　備　　重さの違う球、速さが変えられるレール台、など

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．前時の学習を想起し、本時のめあてについて話し合う。 (1) 前時までにわかったことについて話し合う。 ○　おもりの重さや速さと、衝突されたものが動く距離の関係がわかったこと。 (2) 本時のめあてについて話し合う。 ○　他の衝突の事象にも、同じことがあてはまるかという疑問。 ○　本時のめあての把握 めあて おもりの重さや速さを変えて、いろんなしょうとつのきまりをしらべよう。 ※　見いだす段階で、いろんな衝突があったことの想起	○　おもりが重いと遠くまで転がり、軽いと転がらない。 ○　速さが速いと遠くまで転がり、軽いと転がらない。 ○　ボーリングでピンをたおすときや、鐘をつくときも、同じことがいえるのかな。
2．おもりの重さや速さを変えて、いろいろな物に衝突させ、衝突のきまりを調べる。 ○　重さや速さの変化と衝突された物の変化の様子の追究 〈重さについて〉 ・あてる玉の重さを変えて、たおすピンの数や粘土の変形、音の出方などを調べること。 〈速さについて〉 ・あてる玉の速さを変えて、たおすピンの数や粘土の変形、音の出方などを調べること。 ※　いろんな重さの玉や傾きが変えられるレール、粘土やベルなど多様に調べられるように、材料を準備しておく 	○　ピンを立てて、物の倒れ方を調べよう ○　ベルにおもりをあてて、音の出方を調べよう。 ○　粘土を使って、へこみ具合を調べよう。 ○　重さを重くするとピンがたくさん倒れた。速くしても、たくさん倒れる ○　音の出方も、重さが重いほど、速さが速いほど、大きくなる。 ○　粘土のへこみ具合についても、同じことがいえる。
3．調べてわかったことを話し合う。 (1) わかったことを発表する。 ○　衝突の要因と他の物を動かす働きの関係の把握 ・おもりの重さが重いほど、他の物を動かす働きが大きくなること。 ・おもりの速さが速いほど、他の物を動かす働きが大きくなること。 (2) 次時の学習について話し合う。 ○　見つけたきまりを生かして、遊びを考えること。	○　どんな衝突でも、おもりの重さや速さに関係がある。

第6学年2組　理科学習指導案

指導者　今林康治

単　元　生活の中の水溶液

指導観

○ 本学級の子供たちは、日常生活においてテレビや雑誌などの情報から洗浄剤の成分についてある程度の知識を持ち、掃除のお手伝いもしている。そのため、タイルやトイレの便器についたよごれは、洗浄剤に入った薬品が反応して落としていることは知っている。また、場所による洗浄剤の使い分けにも気付いている。しかし、洗浄剤を使い分ける理由や使うときの適切な量などを考えて使ってはいない。また、洗浄剤以外の水溶液にも性質の違いがあり、生活していく上で大切な意味をなしていることは意識していないため、環境に対する影響を考えるまでにはいたっていない。

○ 本単元では、生活経験の再体験活動を通して、水溶液の働きや性質を個の発想から自分なりの方法で調べて、自分の見方や考え方を強化させることをねらいとしている。

具体的には、①塩酸や水酸化ナトリウム水溶液と身近な物との反応を調べ、その反応の違いから水溶液の働きによる変化の違いをとらえること、②自分の身の回りにある水溶液の性質を調べてその違いや関係をとらえること、などが主な内容である。これらの学習を通して、環境に対する影響も考えながら生活の中の水溶液を見直していこうとする態度を育てることができる。

○ 本単元の指導にあたっては、水溶液の性質や働きを調べた結果から身近な水溶液の性質や働きについて自分なりに考えることができるようにしたい。そのために見出す段階では、よごれ落としの体験を通して、洗浄剤に含まれる塩酸や水酸化ナトリウム水溶液の性質や働きについて問題を設定する。調べる段階では、塩酸や水酸化ナトリウム水溶液と物との反応を調べたり、酸性・アルカリ性といった性質の違いから、身近な水溶液にも同じような性質があるのか調べて、仲間分けする。生かす段階では、指示薬作りや中和などの自由研究を計画・実行し、達成した喜びを味わわせる。

目　標

1．生活的知識を基に自分なりの方法で意欲的に調べ、自分の見方や考え方を見直すことができる。

2．塩酸・水酸化ナトリウム水溶液や身近な水溶液を用いて、その働きによる変化や性質の違いをとらえることができる。

計　画（約１０時間）

段階	見出す段階（３時間）	調べる段階（４時間）	生かす段階（３時間）
活動と内容	1．手洗い場にあるよごれを落とす体験を通して、洗浄剤に含まれる塩酸や水酸化ナトリウムの働きや性質について問題をもつ。 ○ 塩酸と水酸化ナトリウムの取り出しと問題把握	2．水溶液の性質や働きの違いを調べる。 (1) 塩酸と水酸化ナトリウム水溶液について調べる。② ○ 性質や働き（本時2／2） (2) 他の水溶液を調べる。② ○ 指示薬での仲間分け	3．追究を通して得た解釈を深め、発展させるために自由研究を計画・実行する。 ○ 自己の責任に任された実験・観察 ○ 水溶液の働きによる変化や指示薬作りと環境保全
手だて	○ 生活場面で経験する事象に対しての自分の解釈を確かめる活動 ○ 描画や概念地図による解釈の整理と自己評価	○ 個の発想を尊重した活動 ○ 実験に必要な材料の収集 ○ 結果の交流による追究活動の見直しと再考 ○ 描画による解釈の確認	○ 関連する事象の提示 ○ 結果の解釈を深めるための自由研究 ○ 概念地図による解釈の整理と導入時との比較

本時の目標

○　洗浄剤に含まれる塩酸や水酸化ナトリウム水溶液を使ってその性質や働きによる変化を調べ、物の種類や水溶液の濃さによって違いがあることをとらえることができる。

準　　備　　塩酸、水酸化ナトリウム水溶液、身近にある物、指示薬等

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．前時学習を想起し、めあてと調べる方法について話し合う。 (1) めあてを確認する。 めあて 塩酸や水酸化ナトリウム水溶液を使って、物との反応や性質を調べてみよう。 (2) 水溶液の濃さや物による反応の違いについての予想や自分なりに調べていく方法を確認する。 ○　水溶液を調べることへの興味・関心 ※　濃さの違う水溶液を準備しておく。 2．それぞれ自分なりの方法で実験・観察をする。 A. 予想をもとに、濃さの違う水溶液と物を選んで反応を調べる。 ○　水溶液の種類や濃さによる反応の違い きばみ　さび　汚れ　茶渋 鉄板　ステンレス　毛糸　布 木　コルク　紙　石　コンクリート B. 予想をもとに、濃さと種類の違う水溶液を選んで反応の違いを調べる。 ○　水溶液の種類や濃さと物による反応の違い 酸性　中性　アルカリ性 強弱 ―― 強弱 塩酸　水酸化ナトリウム水溶液 3．それぞれの追究結果をもとに、水溶液の性質と働きとの関係についての考えを交流する。 (1) それぞれの結果を出し合う。 A. 物によって反応に違いがあることから、水溶液の性質による違いを考える。 ○　反応結果からの考察 B. 同じ性質の水溶液にも強弱があることに気付き、濃さによる水溶液の働きの違いを考える。 ○　性質の違いからの考察 (2) 性質や働きをまとめた表をもとに洗浄剤に書かれた注意書きや水溶液の性質と働きについて話し合う。 ※　性質や働きによる変化の違いを表にまとめて比較する。 (3) 性質の違いで反応が違っていたことから、PH測定紙を使って、その性質の違いをとらえ直し、次時の見通しをもつ。 ○　水溶液の性質と働きとの関連	○洗浄剤の注意書きに種類によって、塩酸や水酸化ナトリウムと書いてあったけど、何か反応や性質に違いがあるのかな。 ○２５％と書いてあるから、濃さも関係しているのではないか A. おそらく注意書きに書かれた使ってはいけないものと反応するのだろう。 B. 酸性やアルカリ性と書いてあるのは、おそらく塩酸と水酸化ナトリウムの性質の違いによるものだろう。 A. 塩酸と水酸化ナトリウム水溶液とでは反応に違いがあるのではないだろうか。 B. 濃さが変わっても性質は変わらないのだろうか。 B. 混ぜたら性質が変わるかな。 A. 濃い方が反応が激しいよ。 B. 濃さが変わっても性質は変わらないけど、混ぜると濃い方の性質になってしまう。ちょうど同じ濃さのとき中性になるのではないか。 ○水溶液の性質によって反応するものに違いがある。 ○水溶液には酸性・中性・アルリ性があり、それぞれが打ち消しあって存在している。 ○他の水溶液にも酸性・中性・カアルカリ性があるのだろうか。

第１・２学年ふじ組　音楽科学習指導案

指導者　西原敦子

題　　材　かえるの音楽会

指　導　観

○　本学級の子どもたちは、精神年齢２歳から４歳程度の１年生３名、２年生３名で構成されている。

子どもたちは、身近な動物や生き物に興味を持っており、楽曲が流れる中、ぞうさんの長い鼻やいも虫がごろごろと転がる様子など、特徴的な動きや擬態語を真似て表現することができている。又、はっきりとしたリズムの曲が流れる中で歩いたり、走ったりすることを楽しいと感じ始めている。しかし、拍やリズム、強弱などをとらえた身体表現の楽しさを味わうまでには至っていない。

○　本題材のねらいは、ぴょんぴょんがえるとどんどんがえるが楽しく歌ったり、踊ったりするかえるの音楽会の様子を思い描いて、楽曲の拍やリズム、強弱を感じながら、身体全体を動かして表現させていくものである。具体的には、①楽曲（ぴょんぴょんがえる、どんどんがえる）を歌う、楽曲に合わせて踊るなど様々な表現方法を知る②拍やリズム、強弱などの音楽的要素を感じながら、身体を動かして表現する③友だちと一緒に楽しく身体表現をすることである。

これは、生活の中で音楽を楽しもうとする態度を育て、生活への積極性を生み出す上で意義深い。

○　本題材の支援は、楽曲の拍やリズム、強弱を感じながら、身体全体を動かして表現させていくために、①次のような条件をもつ楽曲を選定する。ア．子どもたちが興味・関心を持つ身近な生き物が登場する、イ．「ぴょんぴょん」、「どんどん」など擬態語や繰り返しの多い歌詞である、ウ．登場するぴょんぴょんがえるとどんどんがえるの動きとリズムが合っている楽曲である。②「ペープサートを持って歌いながら踊る」、「イメージ楽器を鳴らしながら踊る」の一連の活動を構成する。③楽曲の場面や動きに合った場の設定をする。④個の実態に応じた支援を行うことである。

目　　標

１．友達と一緒に、かえるの音楽会で表現することを楽しむことができる。

２．かえると楽しく踊っている場面の情景を思い描く中で、拍やリズム、強弱を感じながら身体全体を動かして表現することができる。

計　　画（約４時間）

<table>
<tr><th>段階</th><th>であう（１時間）</th><th colspan="2">あらわす（２時間）</th><th>まとめる（１時間）</th></tr>
<tr><td>活動と内容</td><td>１．かえるの音楽会に出会う。
○　音楽会の場面把握
○　楽曲に出会い、歌いながら踊る、楽器を鳴らしながら踊る、などの表現方法を知ること</td><td colspan="2">２．かえるの音楽会をする。
(1)　ぴょんぴょんがえるの音楽会をする
○　楽曲の拍やリズムを感じて表現すること
(2)　ぴょんぴょんがえるやどんどんがえるの音楽会をする　（本時）
○　楽曲の拍やリズム、強弱を感じて表現すること</td><td>３．かえるの音楽会を友だちに紹介する。
○　表現することにより満足感・充実感を味わうこと</td></tr>
<tr><td>支援</td><td>○　活動の場の提示
○　パネルシアターの提示
○　ぴょんぴょんがえる、どんどんがえるの楽曲</td><td>○　ぴょんぴょんがえるが歌ったり、楽器を鳴らしたりしながら踊っているパネルシアター
○　ぴょんぴょんがえるのペープサート
○　イメージ楽器</td><td>○　どんどんがえるが歌ったり、楽器を鳴らしたりしながら踊っているパネルシアター
○　どんどんがえるのペープサート
○　イメージ楽器</td><td>○　励まし、賞賛
○　他のクラスの友だちに紹介する場の設定</td></tr>
</table>

本時の目標（※Ｇはグループをあらわす。）

○　ぴょんぴょんがえるやどんどんがえると、歌う、楽器を鳴らす、踊ることにより、楽曲の拍やリズム、強弱を感じながら楽しく身体表現をすることができる。

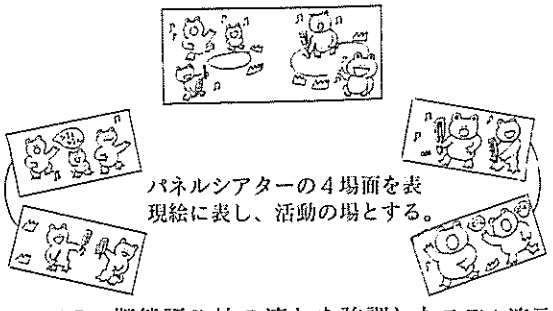
ＡＧ：「ぴょんぴょん」、「どんどん」などの特徴的な歌詞を部分的に歌い、拍の流れを感じて表現したり、教師のモデル演示を見てリズムや強弱を感じることができる。

ＢＧ：「ぴょんぴょん」、「どんどん」などの特徴的な歌詞を歌いながら、拍やリズムを感じて表現したり、教師のモデル演示を見て強弱を感じることができる。

ＣＧ：場面の情景を思い描きながら、拍、リズム、強弱を感じて表現することができる。

準　　備　パネルシアター、ペープサート、イメージ楽器、表現絵

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．本時のめあてを知る。 (1) 前時学習のビデオを視聴する。 ○前時学習の想起 (2) パネルシアターを見て、本時のめあてを知る。 めあて ぴょんぴょんがえるやどんどんがえるとおんがくかいをしよう！ ○どんどんがえるの登場を知ること 2．かえるの音楽会をする。 (1) ぴょんぴょんがえるとどんどんがえるの音楽会を知る。 ①ぴょんぴょんがえるの表現をする。 ②どんどんがえるの表現をする。 AG：○ぴょんぴょん、どんどんの歌詞を歌い、ペープサートを持ったり、イメージ楽器を鳴らすこと。 BG：○ぴょんぴょん、どんどんの歌詞を歌い、拍やリズムを感じながらペープサートを振ったりイメージ楽器を鳴らすこと。 CG：○簡単な歌詞を歌い、拍やリズム、強弱を感じてペープサートを振ったり、イメージ楽器を鳴らすこと。 (2) ぴょんぴょんがえるとどんどんがえるの音楽会をする。 ①楽曲を歌いながら踊る表現を見合う。 ②イメージ楽器を鳴らしながら踊る表現を見合う。 ③好きな表現を選んで表現する。 AG：○拍の流れを感じて、ぴょんぴょん、どんどんの歌詞を歌ったり、楽器を鳴らしたりしながら踊ること。 BG：○拍やリズムを感じて、ぴょんぴょん、どんどんの歌詞を歌ったり、楽器を鳴らしたりしながら踊ること。 CG：○拍やリズム、強弱をより感じながら、簡単な歌詞を歌ったり、楽器を鳴らしたりしながら踊ること。 3．本時学習を振り返り、学習をまとめる。 ○表現への満足感、充実感	1．表現への意欲を高める支援 ○　ぴょんぴょんがえると歌ったり、踊ったりした前時学習のビデオ ○　ぴょんぴょんがえるに加えてどんどんがえるが登場するパネルシアター ○　拍やリズム、強弱が明快になる音色による伴奏 (ぴょんぴょんがえる)（ぴょんぴょんぴょんぴょん） (どんどんがえる)（どーん　どーん） 2．場面の情景、楽曲の拍やリズム、強弱をとらえて表現を生み出す支援 ○　楽曲の場面や動きをつかませる支援 AG：擬態語を強調したモデル演示 BG：動きを強調したモデル演示 CG：表現絵に着目させる声かけ  ○　表現を見合ったり、選んだりする支援  AG：擬態語や拍の流れを強調したモデル演示 BG：擬態語や拍、リズムを強調したモデル演示 CG：場に目を向けさせる声かけ、強弱を強調したモデル演示 3．満足感・充実感を味わわせる支援 ○　一人一人の表現を認める、賞賛や励まし

第５学年梅組　　算数科学習指導案

指導者　　松　本　良　一

題　　材　　おつかいに　いこう！（金銭）

指　導　観

○　梅組の子供たちは、精神年齢２歳から４歳程度の５年生３名で構成されている。３～１０程度の数までの数対象の取り出し、数唱ができる。金銭については買い物に対する強い興味・関心があり、保護者と一緒に買い物をした経験がある。しかし、金種の違いが意識できていない、値段は読めるが実際のお金と結び付いていない、１０円玉同志の以外の金種の組み合わせができないなど、値段の読みと実際のお金の結びつきが不十分である。これは、金銭を生活の中の数量として十分意識できていないためであると考える。

○　本題材のねらいは、必要な金種を取り出し、値段表と比べて、金額を合わせて、楽しく買い物をすることである。具体的には、①金銭を生活の中の数として意識すること、②値段表を読むこと、③値段表に合わせてお金を取り出すこと、④同じ金種を組み合わせたり違う金種を組み合わせたりして値段表通りのお金を構成すること、⑥５０円は１０円が５枚、１００円は１０円が１０枚などの等価変換の場面を経験すること、などである。この学習は、生活単元学習の金銭の学習と関連して、子供たちの生活をひろげることになり、将来の自立的な生活を考える上で意義深い。

○　本題材の支援は、①子供が買い物の必然性を感じるような「お使い」という場の設定を行う、②買い物の実際体験の活動（であう段階）→模擬体験の活動（あわせる段階）→実際体験の活動（いかす段階）という一連の活動を設定する、③その過程で、ア.一人一人の基礎的な数量概念の発達段階に応じてお金が取り出せるような買い物ノートを工夫する、イ.お客の役→お客の役とお店の人の役の選択という一連の活動を設定する、④学習したことと生活をつなぐための家庭との連携を行う、などである。

目　　標

１．１０円・５０円・１００円を使って、楽しくお使いをすることができる。

２．～十円、～百円、～百～十円などのお金の組み合わせを知り、値段表に合わせてお金を取り出すことができる。

計　　画（約５時間）

<table>
<tr><th>段階</th><th>であう（１時間）</th><th colspan="3">あ　わ　せ　る　（３時間）</th><th>いかす（１時間）</th></tr>
<tr><td rowspan="2">活動と内容</td><td rowspan="2">１．お母さんからの手紙を見てお使いに行く。
（実際体験）
○　お使いへの目的意識をもつこと</td><td colspan="3">２.色々なお店に楽しくお使いに行く。(模擬体験)</td><td rowspan="2">３．お母さんからの手紙を見てお使いに行く。
（実際体験）
○　買い物の生活化を図ること</td></tr>
<tr><td>(1)　自動販売機に行く。
○　同じ金種同志を組み合わせること</td><td>(2)　コンビニエンスストアーに行く。
○　２種類の金種を組み合わせること　（本時）</td><td>(3)　スーパーマーケットに行く。
○　３種類の金種を組み合わせること</td></tr>
<tr><td>支援</td><td>○　お使いの場の設定
・保護者からのビデオの手紙
・買い物の実際体験</td><td colspan="3">○　お使いの模擬体験の場の設定
○　個に応じた買い物の場の設定
・個に応じた買い物ノート
Ａグループ：値段表のお金の絵がついたノート
Ｂグループ：値段表の位取りが分かるノート
Ｃグループ：値段表の位取りが分かるノート、等価変換が分かる絵カード</td><td>○　お使いの場の設定
・継続的な家庭との連携
・お使いの実際体験</td></tr>
</table>

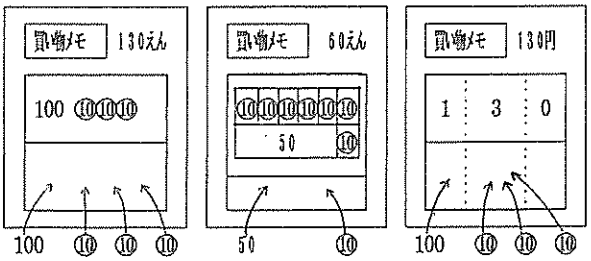
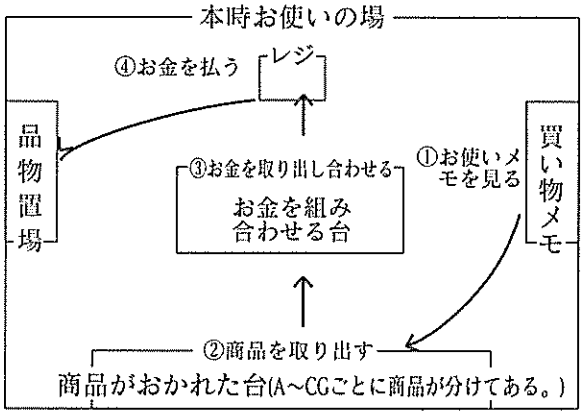
本時の目標（※Ｇはグループを表す。）

○　１００円と１０円、１０円と５０円など２種類の金種を組み合わせてお使いをすることができる。

AG：対応づけによりお金を取り出し組み合わせる。BG：数を見てお金を取り出し組み合わせる。CG：数を見てお金を取り出し組み合わせる。等価変換の場面について知る。

準　　備　お金、買い物ノート、買い物する商品、保護者からのビデオ　など

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
１．本時めあてについて話し合う (1) 保護者からのビデオの手紙を視聴する。 ○　お使いへの目的意識をもつこと めあて コンビニでじょうずにかいものをしよう。 (2) 代表児のモデル演示を見る。 ○　活動の手順と方法の把握 ①お使いメモを見る⇨②商品を取り出す⇨③お金を取り出し合わせる⇨④レジでお金を払う ２．楽しくコンビニにお使いに行く。 (1) お使いメモを見て、お使いに行く。 ○　２種類の金種の組み合わせを知ること AG：・買い物ノートのお金の絵に合わせてお金を取り出し組み合わせる BC：・買い物ノートの数に合わせてお金を取り出し組み合わせる CG：・数に合わせてお金を取り出し合わせる ・等価変換をする  (2) お店の人とお客さんに分かれて、お使いをする。 ○　金種の組み合わせを確認すること ・確認カードのお金の絵との対応づけで確認をする ・確認カードの数とお金の絵の対応で確認する ・確認カードの位取り表の数との対応で確認する ３．本時のお使いを振り返る。 ○　たくさんお使いができたことへの達成感・成就感を味わうこと	１．お使いの目的意識を引き出す支援 ○　保護者からのお使いをお願いするビデオ ○　お使いの場の提示  ○　教師と代表児による買い物の仕方のモデル演示 ２．お金を組み合わせるための支援 ○　個に応じた買い物ノート AG：金額のお金の絵がついたノート BG：金額の数の位取りが分かるノート CG：金額の数の位取りが分かるノート、等価変換を促す金額の掲示 ○　個に応じた買い物の場の設定 AG：10円と100円の組み合わせの金額の商品 BG：10円と100円、10円と50円の組み合わせの金額の商品 CG：10円と100円10円と50円100円と50円の組み合わせの金額の商品、等価変換の場面設定 ○　教師のレジでの評価 ○　個に応じたレジでの確認カード AG：お金の絵との対応づけ BG：数とお金の絵との対応づけ CG：位取りの数との対応づけ ３．達成感・成就感を味わわせる支援 ○　お使いをした品物の数への賞賛

—— メ モ ——

第一日目　午後の部

公開授業指導案

第１学年２組　　生活科学習指導案

指導者　　藤　木　寿美枝

単　　元　　わたしにしかできないがっこうしょうかい

指　導　観

○　本学級の子供たちは、１度目の学校探検以来、意欲的に自分たちで学校中を巡り、新しい発見を重ねて来ている。そして、子供によっては教室で飼われている様々な生き物に興味をもったり、給食の先生方と言葉を交して給食への先生方の思いに気付いたりしている。そこで、これまで自分たちが驚いたり、発見してきたことを出し合う活動を行えば、さらに学校への関心が高まり活気にあふれた学校生活が楽しめるようになると思われる。また、探検を続けることによって自分を取り巻く人々への思いに気付きながらこれらの人々とさらにかかわりを深めていけるようにしたい。

○　本単元は、より楽しく明るい学校生活が送れるよう、友達や学校職員、施設設備等とのかかわりを深めていくことをねらいとしている。具体的には、①学校内のさまざまな生き物や施設設備等に興味をもち、それらと自分とのかかわりに気付くことができる、②友達や学校の職員と話したり一緒に活動したりすることによってこれらの人々に親しみをもち、これらの人々とこれから共に生活することに対する期待感をもつことができる、③学校内を探検したり、学校内の人々と接したことを友達に話すことで自分が感じたことを自分とのかかわりで表すことができる、などである。

○　本単元の指導に当たっては、まず学校探検後の活動を注意深く見守り、子供たちがどのようなものに関心を深めているかをとらえたい。そこで、であう段階では、子供が興味や関心をもったものを取り上げそれを話し合う。ふれあう段階では、学校内を再探検し、その後子供たちそれぞれがみつけたひみつをもとにクイズをつくる。ふかめる段階では、他の友達に話す場を設定しそれを表現する場を設ける。この場を設けることによって、子供はさらに学校を楽しいものに感じることができるようにしたい。

目　　標

１．友達や学校の職員と話したり一緒に活動したりすることによって、これらの人々に対して親しみをもつことができる。

２．学校内を探検したり、学校内の人々と接したことで自分が感じたことを自分なりの方法で表すことができる。

計　　画（約５時間）

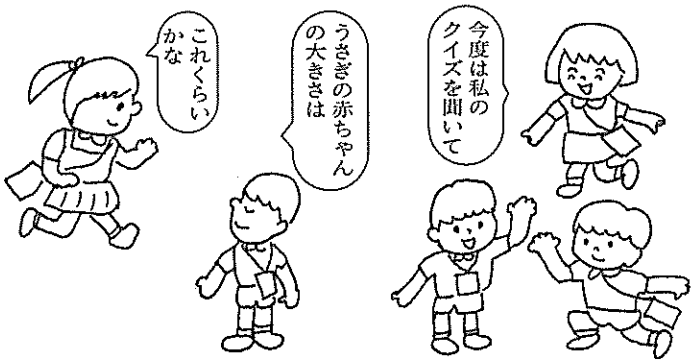
段階	で　あ　う（１時間）	ふ れ あ う（３時間）	ふ か め る（１時間）
活動と内容	１．学校探検後楽しかったことを話す。 (1)　学校探検後興味をもったことについて話し合う。　① (2)　探検後、興味をもっていることをうちの人に話す。　（課外） ○　学校生活の楽しさの感受	２．学校内を再探検して、発見したことや不思議に思っていることを探検絵本や表にする (1)　学校内を再探検する。　① (2)　再探検で感じたこと、気付いたことをクイズにする。　② ○　学校再探検と再探検の表現	３．自分が興味をもって調べたことを友達に紹介する。 (1)　再探検後、自分がつくったクイズを友達と出し合って楽しむ。　（本時）① (2)　新しい発見を求めて探検を続ける。（課外） ○　自分の興味への価値付け
支援	○　校内マップの提示 ○　学校生活の紹介	○　みつけたよカード ○　参考になるクイズの提示	○　多様なヒントの出し合い ○　クイズ発表の場の設定

本時の目標

○　自分が見つけた学校のひみつを友達に話すことを通して、もっとひみつを調べたいという意欲をもつことができる。

準　　備　　子供 ―― 探検クイズ、ヒント　　指導者 ―― 学校探検マップ

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．本時のめあてをつかみ、探険してきたことを表現することに意欲をもつ。 ○　探険したことを発表することへの意欲 ※　これまでの探険の変遷の提示 めあて わたしがみつけたがっこうのひみつくいずをしよう	○　どんなクイズを出したら友達はびっくりするかな。 ○　ぼくは、学校探険の後もずっと休み時間に探険していたんだ。
2．自分が見付けてきた学校のひみつをクイズにして友達と出し合い、多くのクイズに挑戦する。 (1) 学校探険マップを前に、これまでどんなひみつを見付けたかを話合い、いくつかのクイズを解き合う。 ○　活動への見通し ※　試しのクイズの実施 (2) 二人組でクイズを出し合い、できるだけ多くのクイズに挑戦する。 ○　自分独自の発見の表現　　○　友達の発見への気付き ※　自由にクイズに挑戦する場の設定 ※　クイズが解けたらシールを貼る「ひみつめぐりカード」によるひみつクイズへの意欲の喚起 〈予想されるひみつの内容〉 ・おへやのひみつ　・先生のひみつ　・友達のひみつ ・生き物のひみつ　・給食のひみつ ・わたしが知ってるお兄さんお姉さんのひみつ  	○　この似顔絵、誰だか分かるかな。ヒントをいっぱいあげるから当ててね。 ○　ぼくが大好きな生き物は何でしょう。青くて、ふわふわ泳いでいるよ。 ○　６年生のお兄さんお姉さんに今大人気の遊びは何でしょう。 ○　給食の先生って、給食をつくっていないときは何をしていらっしゃるのでしょう。 ○　ありの基地はどこにあるでしょうか。 ○　うさぎのまねをしてみましょう。 ○　うさぎさんは、何を食べているでしょう。
3．今日の活動で楽しかったこと、気付いたこと、これからしてみたいことを話し合う。 ○　自分や友達の思いや気付きの共有化 ※　クイズの中で出てきた人の思いの紹介	○　みんないろんなひみつを見付けたな。 ○　もっとたくさん学校のひみつを見付けたいな。

第２学年１組　　算数科学習指導案

指導者　　重　松　宏　明

題　　材　　大きな数をかぞえよう

指　導　観

○　本学級の子供たちは、１年生の学習において、ものの個数や順序を比べる、かぞえる、数を用いて表す、１つの数を他の数と関係づけて考えるといった算数の学習において価値ある活動体験を十分にもっている。例えば、まとまりを作り、正しくかぞえる活動体験、多くの数を記号や位置におきかえて簡単に表す活動体験、数直線や数表において、数の大きさと数の位置から並び方の決まりをみつける体験などがある。本題材では、これまでの活動体験を生かし、数の範囲を広げ、数の見方や考え方、数処理の活動体験をさらに豊かにしていきたい。

○　本題材は、大きな数（３位数と４位数）を工夫してかぞえたり、数の単位（位）に着目して数の大小を比べたり、数の並び方のきまりを考え予想したりする活動体験を豊かにし、数に対する見方、考え方、感覚を豊かにしていくことをねらいとしている。具体的には、①目的に従った観点から同じ大きさの集まりに分類し、工夫してまとまりを作りながら正しくかぞえる、②数の大きさを比べたり、小さい順・大きい順、またあるきまりに従って並べたり、並べ変えたりする、③数直線や数表の位置とその位置の数の大きさから数の並び方のきまりを予想し調べる、④指定された数をいろいろな数の組み合わせで作ったり、１つの数を目的に従って分解してそろえたりする、といった活動である。このような活動を中心に学習を展開していくことで、自分の活動や操作に対する不十分さの実感と同時に、数処理や数理のもつよさ、自分自身の高まりを感じとらせることができる。

○　本題材の指導にあたっては、大きな数をかぞえる、比べる、数の並びにきまりを見つける、１つの数を他の数の和や差として表すといった活動を様々な場や活動において十分に行えるようにしたい。そのために第１次では、ビンゴゲームで数を読んだりかいたりする活動、キューブや単位カードを指定された数だけ工夫して取り出す活動を行う。第２次では、数カードを使ってカード並べ競争や大小比べ遊び、数当てクイズの活動を行う。第３次では買い物遊びで、指定された金額（数カード）を、種類の違うお金（数カード）を組み合わせて揃える活動を行う。

目　　標

○　数遊びやゲームのなかで、大きな数（３位数、４位数）をかぞえたり、比べたり、数の並び方のきまりを考えたり、１つの数を他の数の関連でみたりする活動体験を豊かにすることができる。

計　　画（約１１時間）

段階	第1次　かぞえる体験（3時間）	第2次　数を比べる、関係づける体験（5時間）	第3次　1つの数を他の数の関連でみる体験（3時間）
活動と内容	１．ビンゴゲームをする。　① ○　３位数、４位数の数詞を使ってかぞえる体験 ２．具体物や数の単位カードを、速く、正確にかぞえる競争をする。　② ○　同じ数の大きさにまとめたり分類したりするなど３位数、４位数の数を工夫してかぞえる体験	３．数カードを小さい順に、大きい順に速く並べる競争や大きさ比べのカード遊びをする。　② ○　数の大小比較をする体験 ４．数あてクイズ遊びをする。（本時1／3）③ ○　数直線や数表において、数の大きさと数の位置から並び方のきまりを見つける体験	５．買い物遊びをする。③ ○　１つの数を他の数の和としてみる体験
手だて	○　３位数、４位数で作ったビンゴゲームの設定。 ○　1000、100、10の単位カードを混ぜてたくさん準備し、かぞえる競争をさせる活動の設定。	○　３位数、４位数の数カードを準備し、数並べ競争や数あて遊びの場の設定。	○　品物の値段とお金のカード（１円、５円、10円、50円、100円、500円、1000円）を準備し買い物遊びの場の設定。

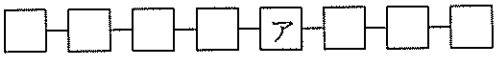
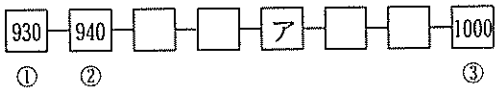
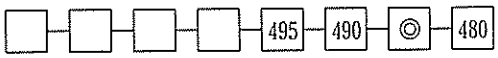
本時の目標

1．3位数、4位数の並び方に関心を持ち、数当てクイズを楽しく解くことができる。

2．あるきまりを持って並んでいる3位数、4位数の数の直線の並び方を知るために、自分が知りたい位置のカードを開き、カードの並んでいる位置と数の大きさから並び方の規則性を筋道立てて考え、説明することができる。

準　　備　45通りの数当てクイズ、数当てクイズの記録表、ゲームの仕方手順資料

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．数当て遊びのためしの活動を行い、遊びのルールとめあてをつかむ。 (1) 数当て遊びのためしの活動を行う。 ○　並び方に規則性のあることをつかむこと  ※　8枚のカードを伏せて並べておき、アのカードは何かを予想させる。  ※　上にかいてある順にカードをめくっていき、カードの並び方からアのカードを予想させる。 (2) 遊びの場と遊び方を確かめ、本時学習のめあてをつかむ。 ○　数あてクイズをたくさん解こうという意欲をもつこと ※　遊びを楽しくするために、右のような約束を決める。 めあて 数のならびかたをよそうし、数あてクイズをたくさんとこう。	○　数当て遊びって、どんなことをするのかな。 ○　全然数が出ていないのでわかるはずないよ。 ○　最初のカードが930で、次が940ということは、10ずつ増えている。 ○　8番目のカードが1000ということは、930、940、950…1000あ、10ずつ増えているんだ。そうするとアは970だ。 約　束 ・開くカードの数をできるだけ少なくして、数を当てること ・赤いカード…求める場所 ・水色のカード…開いてはいけない場所 ・白いカード…自由に選択してよい場所
2．数当て遊びを行う。 (1) 数当てクイズ解く。 ○　カードの位置と数から、系列化されている数の並び方を予想し調べること ※　以下のような数当てクイズを45通り準備し、①問題を解く（白いカードを必要なだけ開く。→きまりを見つけ、答えとともに並び方のきまりをノートにかく。→答えを確かめる。）②開いたカードをもとの形に直す。③次の問題をあいているクイズから選択し解く。という①②③を繰り返して行う数当て遊びの場を設定する。 （例1）◎（赤いカード）を当てる。  （番号は開いた順）　→　②　①　③ （例2）×（水色のカード）は開いてはいけないカード  (2) クイズを解いてみて、速く解くひみつを話し合う。 ○　並び方の規則性を見つけるまでの思考の筋道の表現・交流 3．本時学習をまとめ、次の学習を知る。	○　最初は490で、その前が495だから小さくなっているぞ。5ずつ小さくなっているのかな。3枚目を開いてみよう。やっぱり5ずつ小さくなっているから、ここ（赤いカード）は485だ。 ○　次の時間は、ぼくたちが数当てクイズを作るんだ。早く作りたいな。

第３学年１組　　音楽科学習指導案

指導者　津　本　修　一

題　　材　　むかし話のミュージックシアターをつくろう

指　導　観

○　本学級の子供たちは、音楽活動に対して意欲的に取り組むことができる。音楽をつくって表現する活動では、リズムまねあそび、リズム問答あそびなどの遊戯的な表現活動を通して、リズムを中心とした音楽的感覚を身につけてきている。一方、自分のイメージを音で表す活動については、これまでの表現科の学習のなかで、ほとんどの子が経験してきており、音を素材にした即興的な表現活動の楽しさを味わってきている。また、旋律による即興表現を経験してきている子は少ないが、ふしづくりに対する関心は高いようで、この機会に音楽をつくって表現する内容として取り上げていきたいと考える。

○　本題材は、「むかし話」を素材に、物語の場面から印象的な場面を自由に選択し、その場面の様子を効果音、ＢＧＭ、せりふの歌などで表現していくことをねらいとしている。具体的には、①物語の登場人物のせりふなどをもとに、旋律をつくって表現すること、②物語の情景からイメージしたことを音を使って即興的に表現すること、④物語の様子を想像しながら、表現の仕方を工夫することなどが内容である。このことは、表現科学習で様々な表現方法を選択的、総合的に用いて表現してきた経験を生かすことができるとともに、音楽での表現様式の特性に触れさせ、音や音楽に対する感性や創造性を育てるうえで、意義があると考える。

○　本題材の指導にあたっては、つかむ段階では、物語のなかから音楽で表現したい部分を選択し、音楽づくりのモデルビデオをもとに、表現方法の見通しをたてる。あらわす段階では、表現方法別に「効果音づくり」「ＢＧＭづくり」「歌づくり」の３コースに分かれて、音楽づくりの活動をする。ここでは、コース別にオリエンテーション、記譜の指導、個別指導などを行い、活動の支援を行っていくようにする。あじわう段階では、物語グループ別にミュージックシアターの発表会を行い、音・音楽による自己表現活動の達成感・成就感を味わわせるようにしたい。

目　　標

１．ミュージックシアターづくりの活動を通して、音・音楽による自己表現の楽しさを味わうことができる。

２．「むかし話」から想像したことを、効果音／ＢＧＭ／歌などで即興的に表現することができる。

計　　画　（約６時間）

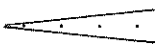
段階	つ　か　む（１時間）	あ　ら　わ　す（４時間）	あ　じ　わ　う（１時間）
活動と内容	１．素材となる「むかし話」を選択し、音楽づくりの構想をたてる。 ○　「むかし話」の音楽化の構想 ２．表現方法の見通しと計画をたてる。 ○　モデルビデオの視聴 ○　表現方法の具体的な構想と計画	３．「むかし話」に挿入する効果音、ＢＧＭ、歌をつくる。 ○　音素材・打楽器を用いた即興的な表現 ○　短い旋律をつくって表現すること ○　グループでのストーリーにそった表現　（本時3／4）	４．「昔話」のミュージックシアター発表会をする。 ○　つくりあげた音楽の即興的表現の発表 ○　ミュージックシアターの鑑賞 ○　感想カードの記入／交流
手だて	○　表現用ストーリーの作成援助 ○　モデルビデオ提示	○　表現方法別コースによるオリエンテーション ○　音楽づくりヒントボードの設置 ○　音階譜／音づくりカード	○　「むかし話」ミュージックシアターの発表会 ○　感想カードの交流

本時の目標

○　場面の様子に合う表現を考えて、効果音／ＢＧＭ／歌を即興的に表現することができる。

準　　備　・情景画　・音楽づくりヒントボード　・音階譜　・音づくりカード
・グループ図形楽譜

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．前時学習を想起し、本時のめあてについて話し合う。	
(1) 前時学習についてふりかえる。	○　ぼくたちのグループは、さるがかきをなげているところの様子をタンブリンを使って効果音をつくって表したな。
○　ペアグループによる交流表現	
※　それぞれの表現の特性やよさについて、感じたことを発表させたり、賞賛したりする。	
(2) 本時のめあてをつかみ、活動の見通しをもつ。	
○　音楽の練り上げの観点の把握	○　Ａクループのねずみのもちつきの歌は、おもしろいな。
・強弱　・速度　・奏法　・音の付加	
※　練り上げの観点については、交流表現後各自の表現主題に合わせて自己判断していくことをとらえさせる。	○　強さや速さ、音の出し方などを工夫すると音楽がよくなりそうだな。
めあて 場面のようすに合う表現をくふうして、音楽をつくろう。	
2．各クループごとに、音楽を練り上げる。	○　Ｂグループの火がもえる音のがだんだん強くなっていて、もえひろがるようすがよくあらわれていたな。
(1) グループごとに、各自の音・音楽を見直す。	
○　強弱・速度・奏法・音の付加などについての見直し。	
(2) 見直しの活動をもとに、グループの音楽を練り上げる。	
○　音楽の付加修正箇所の明確化	
○　音楽の練り上げ（音楽づくりとグループ図形楽譜の付加・修正）	○　Ｃグループのうたを参考にして、ぼくも楽器の音の出し方を工夫してみよう。
○　グループ内でのストーリーの展開にそっての再表現	
【グループ図形楽譜の付加・修正例】	
はやく：ラ ソ ソ（つよく） みがなれ：ミ ミ ミ ミ（タンブリンいれる） あかくな：ラ ラ ラ ラ  れ：ラ ○だんだん大きくする	○　ここのおじいさんがよろこぶ様子は、もっとたのしい感じが出るようにしたいから、もっと速く演奏してみよう。
※　交流表現活動での話し合いを参考にしながら、自分の表現主題が音としてうまく表現されているかを各自の表現主題に照らし合わせながら自己判断させ、修正箇所を明確化していくようにする。	
※　実際に表現させながら、音楽を練り上げさせ、必要に応じてグループ図形楽譜を付加，修正させる。	○　音をだんだん強くしてみると、さるが近づいてきている感じがでたぞ。
3．本時のまとめをし、表現活動の感想を発表する。	
○　代表グループの演奏と感想の発表	○　今日の活動で、音楽がよくなってうれしいな。
※　代表児数名に感想を述べさせる	

第４学年１・３組　体育科学習指導案

指導者　佐々木　壮一朗

単　元　３種競技を楽しもう（走・跳・投の運動）

指導観

○　本学級の子供たちは、走る、跳ぶ、投げるなどの基本的な動きを身につけて競争したり、記録に挑戦したりなどの喜びを味わいたい欲求をもっている。特に、動きをつくって試したり、工夫した動きで積極的に活動したりするのに関心を示している。中学年は非常に活動的で、いろいろな運動に興味や関心を示し、仲間と協力して活動する時期である。そこで、この期に子供たちが自ら動きをつくったり、場をつくったり、活動の仕方を決めたりなどして、友だちと協力して運動する楽しさを味わわせたい。

○　本単元のねらいは、子供が決めた走る、跳ぶ、投げるなどの動きの達成に向け、自己の目標に向けた運動をしたり、互いに競い合いったりすることにより動きづくりの達成・克服の喜びを味わわせることである。本単元の価値としては、①子供が自分の興味・関心により走る・跳ぶ・投げるなど各種の動きを行うので、持続的に運動を実践することができる。②子供自らが協力して競争や練習の場をつくり活動するので、場や人とのかかわりを深めることができる。などである。

○　本単元の指導にあたっては、子供が自分で動きづくりを行い、競争や記録達成の楽しさを味わうために協力して計画をつくりながら活動する必要がある。本単元では特に、子供が活動１→活動２→活動３の一連の活動により運動との一体感を味わうことができるようにする。そのためにまず、子供は興味・関心や運動実態に応じて、走・跳・投の３種目の運動を決める。そして、子供自らがつくった計画に従って、競争の場や記録挑戦の場をつくる活動をする。そこで、記録カードに記入したり、VTRを設置して動きをとらえたりなどの活動により自ら選んだ３種の動きづくりをする。また、記録に挑戦したり、相手をかえて競争したりなどの活動をして、楽しく３種競技ができるようにする。

目　標

１．子供自らがつくった走る、跳ぶ、投げるの動きで、記録に挑戦したり、競争し合ったりして３種競技の運動の楽しさを味わうことができる。

２．子供自らが計画づくり行い、運動にくり返し挑戦したり、相手をかえて競争したりして互いに高め合う活動をすることができる。

計　画（約９時間）

段階	活動１【運動の一体感をとらえる活動】３時間	活動２【運動の一体感をつくる活動】４時間	活動３【運動の一体感を深める活動】２時間
活動と内容	１．３種目づくりを行い、試しの活動をする。② ○　３種目ローテーションによる試技 ○　各種目に合った動きの工夫 ２．活動の仕方や場づくりについて話し合う。 ○　競争や記録達成を楽しむ活動の工夫① ○　場づくりの見通し（挑戦・練習の場 みんなが３種の運動を経験できる場	１．３グループに分かれ運動する。② ○　各種目に合った動きの工夫 ・選んだ種目のポイント、場の活用など ２．競争や練習の場をつくり、運動する。（本時2／2）② ○　できばえに応じた競争や記録の挑戦の場の設定 ・コース、得点、記録の仕方、競争の仕方や相手など ○　挑戦や練習の場での交流・援助と相互評価活動	１．自己の伸びを発表する大会を行う。② ○　大会の場や計画の設定 ○　評価活動 走…速く走るための動きづくり、競争の場づくり 跳…遠くに跳んだり、リズミカルに跳んだりするための動きづくり、競争の場づくり 投…遠くへ投げるための動きづくり、競争の場づくり
手だて	○　３種目運動モデル（走・跳・投） ○　視聴覚機材（ＶＴＲ） ○　活動計画表（場の設定） ○　学習ノート	○　３種目運動モデル（走・跳・投） ○　視聴覚機材（ＶＴＲ） ○　活動計画表（場の設定、競争や記録挑戦方法等） ○　学習ノート（記録グラフ、得点、記録表）	○　大会計画表 ○　視聴覚機材（ＶＴＲ） ○　学習ノート

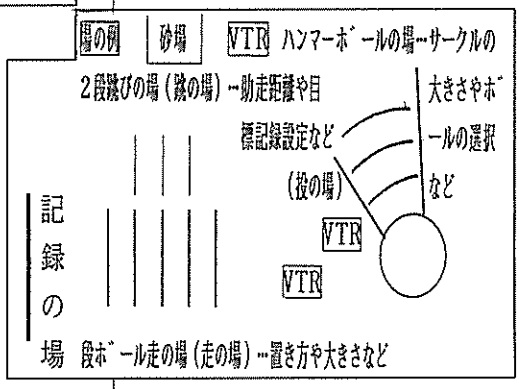
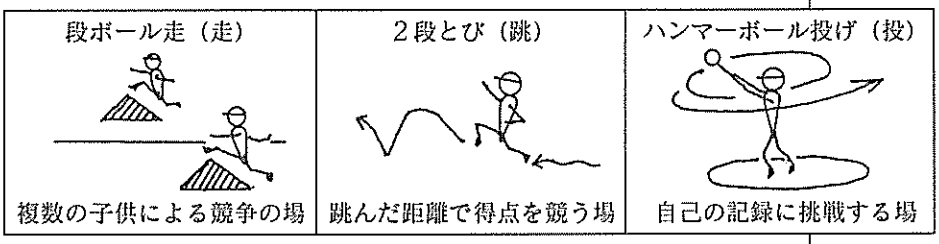
本時の目標

1．子供が、自らつくった計画に従い、速く走ったり、遠くへ跳んだり、遠くに投げたりして、段ボール走や２段跳びやハンマーボール投げなどの３種競技の楽しさを味わうことができる。

2．自分たちで場をつくり、自分が決めた目標の記録に挑戦したり、相手を決めて競争したりして楽しく活動ができる。

準　　備　ハンマーボール　段ボール　学習ノート　VTR　活動計画表　記録カード　など

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．自分でつくった本時活動の計画を発表する。 ○ 場づくりと種目の確認 ○ 個人の計画の確認 （例）・段ボール走による競争 ・２段とびによる競争 ・ハンマーボール投げの記録とりとＶＴＲ撮影 めあて 記録に挑戦したり、競争したりして３種競技を楽しもう。 ※ 学習ノートや記録カードを見て、本時活動の計画の確認をさせる。	○ 今日はどんな計画で行こうかな。 例 場づくり…ハンマーボール投げのサークルを広げよう。 競争の設定…２段跳びでの目標記録との差を合計してみよう。 ○ 段ボール走で△△チームと競争しよう。 ○ ハンマーボール投げをＶＴＲで撮影しよう。
2．自己の学習計画に従って運動する。 (1) 計画に従って、場づくりを行い運動する。 ○ 目標記録への挑戦 ・記録を棒グラフにして自己の伸びの把握と得点・記録表による評価 ○ 競争相手や仕方の工夫 ・対抗戦による競争や得点による競争など	
	○ 段ボール走での目標タイムは△△秒だ。 ○ ２段跳びは◇◇さんと記録の合計をして競争しよう。
※ 記録カードに記入したり、ＶＴＲで撮ったりさせる (2) 各活動の振り返りを行う。 ○ 自己の記録からの再挑戦 ○ 競争相手をかえての再競争 ・ 競争の仕方や目標記録の立て方の検討 ※ 目標記録との差や跳んだ距離の合計などの記録により活動を振りかえさせる。	○ ハンマーボール投げの記録が□m伸びたらいいな。 ○ 記録が伸びなかったからもう一度ハンマーボール投げに挑戦するぞ。 ○ 相手をかえて段ボール走で競争だ
3．本時学習をまとめる。 ○ 計画の充実感の発表 ○ 場づくりと動きの高まりの賞賛 ※ 本時の活動の様相をとらえさせ、次時へつなぐ。	○ 計画通りにいきました。 ○ みんなと協力して活動して楽しかった。

第4学年2組　「人間」学習指導案

指導者　植　松　伸　之

題　　材　長浜公園にふれあいをつくろう

指　導　観

○　「長浜公園」は、マンションや飲食店が林立する都市の中に設置された住民の憩いの場である。近年若者たちによるゴミの汚染がはげしい。地域に住む老人たちは、自分たちのやすらぎの場所が犯されることを憂い、１０年来、定期的な清掃のボランティアを継続している。本学級の子供たちは、そういうお年寄りの一人許斐都紀さんの思いに共感し、清掃活動や新聞書きを行い、公園の美化を訴えている。しかし、その内容は、一方的な若者批判が強く、そこに自分自身の公徳心の弱さを投影したり、若者の心情を探ろうという多面的な物の見方は少ない。したがって、許斐さんが若者に対話を試みながら、少しずつ公徳心を育てていこうとしている心根の理解は十分とはいえない。

○　許斐都紀さんは、環境破壊者で若者を「悪」と規定し一面的に批判するのではなく、その若さやエネルギーに理解を示しながら公徳心の向上を願って対話を試みている。また、長浜公園近辺の予備校に通う若者は、勉学の忙しさのために、長浜公園美化のための直接的な活動は行っていないが長浜公園を青春の思い出の場所として格別の思いを抱いている。このような人たちとふれあうことによって、子供たちは、長浜公園を愛する許斐さんの思いが、時代の変化の中で消えることなく、確かに若者に伝わっていくという人間に対する信頼を実感することができる。このような題材を学習することにより、①許斐さんや若者の心根にある思いを感じ取る感性と推しはかりの力　②批判ではなく対話を求めていこうとする判断力と実践意欲　③公共心の価値の内面的自覚を培う。

○　本題材の指導に当たっては、許斐さんの若者への願いを感受し、それをもとに若者との対話をもとめ、ともに公園を守っていく実践を行うために次のような支援を行う。①長浜公園の夜間閉鎖に賛成するか否かを考える交流の場の設定　②許斐さんを交え、公園を利用する若者との対話を行う交流の場の設定。③若者と共同で清掃活動やキャンペーンを行う場の設定　⑤共同清掃やキャンペーンを行ったあとの心情を振り返る場の設定。

目　　標

○　人を信頼し「共に公共心を発揮し公園を守ろう」という共感的な態度を持つことができる。

・許斐さんや若者の心根にある長浜公園への思いを感じ、推しはかることができる。

・若者に対する批判ではなく、対話を求めていこうとする判断力と実践意欲をもつことができる。

計　　画（約6時間）　　┌行う活動は長期的な活動になる

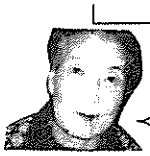
段階	感じる（２時間）	考える（２時間）	行う（１時間）	見つめる（１時間）
活動と内容	１．許斐さんの若者に対する思いを知り、願いをもつ。 ○　活動目標の明確化 ○　許斐さんの心情の推しはかりと若者と協力する実践意欲　（本時2／2） 若者と協力しながら公園を守っていこう	２．願いをもとに若者との対話集会をもつ。 (1)　許斐さんの思いをどう思うか対話を行う。 (2)　具体的活動を話し合う。 ○　思いの具体化と深化	３．協力して実践を行う。 ○　若者と子供たちが心を通わせる喜び ○　公園が美しくなる喜び	４．活動を振り返る。 ○　心が通じ合った喜びの感受 ○　お互いの気持ちの推しはかりと公園を守ろうとする態度
手だて	○　若者を交え長浜公園の夜間使用禁止の妥当性を判断する交流の場の設定	○　公園を利用する予備校生と具体的な活動を計画する交流の場の設定	○　清掃活動やキャンペーン活動等具体的活動の場の設定	○　活動時の感動が伝わる写真やビデオの提示及び交流

本時の目標

○　若者の良心を信じて、長浜公園の若者に対話を試みる許斐さんの思いを感じ、若者と一緒に協力し長浜公園を守っていこうという実践意欲を持つことができる。

準　　備　長浜公園の夜間使用禁止を訴える新聞記事　ゴミ増加のグラフ　長浜公園近辺の地図
長浜公園近辺で子供が取材した資料
公園を夜間利用する若者たちへのアンケート結果

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1.「長浜公園の夜間使用禁止要求」へ署名をさせ、本時めあてをきめる。 ○　新聞記事からの問題の発見と本時めあての明確化 ※　「長浜公園の夜間使用禁止要求」への署名に代表児童の名前を書かせる。 めあて 自分は、長浜公園を夜間使用禁止にしたほうがいいか、考えよう。 2．長浜公園の夜間使用禁止要求に自分は賛成か否か体験をもとに話し合う。 賛　成 ／ 反対１ ／ 反対２ ・自分の怒りをもとにした住民の人権の問題から ／ ・締め出された若者のその後の行動の予想から ／ ・若者が本当は好きだという許斐さんの心情から  許斐さん 若者が好きです。若者にはすばらしい若さがあります。だから本当は夜間使用禁止にはしたくないんです。 ○　自分の体験をもとにした許斐さんの心情の推しはかり ※　自分は「公園の夜間使用禁止」に賛成か否かという論題を設定し交流させる。 3．許斐さんの思いを生かす活動について話し合う。 予備校の方の声 確かに若者は悪い。しかし、みんながごみを落とすように誰だってごみを落としても大したことないという気持ちがあるはずだ。でも許斐さんの思いを知ったら変わる人がいるはずだ。長浜公園を利用する若者として、許斐さんと子供たちの思いに応えるためにできることをしたい。 ○　若者と一緒に公園美化の活動を行おうとする実践意欲 ※　許斐さんとの交流の様子を視聴した予備校の方（予備校生）から、感想を聞く。	○　これが実現すればきっと、地域の人も安心すると思う。 ○　でも、これは本当によい解決方法なのだろうか。 ○　許斐さんの願いにかなった解決方法なのだろうか。 ○　賛　成 ・公園の砂場にガラスを捨てて平気な人を公園に入れる必要はないから。 ・許斐さんが掃除をしている横で平気でごみを落とす若者がいるから。 ○反対１ ・若者を締め出すと、近所の住宅地に若者が流れ出し、近所の人にもっと迷惑をかけるから。 ○反対２ ・許斐さんは、若者が好きで対話を試みているから。 ・公園に若者が来ること自体は悪いことではない。掃除をしているお年寄りの側で平気でたばこを捨てる心が悪いこと。若者を締め出すことは本当の解決ではない。 ○　やっぱり、許斐さんの気持ちがわかってくれる若者がいるんだ。いっしょにしたい。 ○　長浜公園で許斐さんたちの思いを紹介するキャンペーンを開こう。

第５学年１組　　理科学習指導案

指導者　安永純二

単　　元　動物の誕生や成長とわたし

指導観

○　本学級の子供たちは、ほとんどの子がこれまでの生活の中で小動物を飼った経験がある。また、校内の飼育舎で、ウサギやニワトリなどの産んだ赤ちゃんをみている子供も多数おり、親に似た形で生まれる動物と卵の形で生まれる動物がいることに気づいている。さらに、高学年になり体形の違いなどから男女の意識も高まってきている。そこで、身近な動物と自分自身の誕生や成長の様子を考えていくことで、生命に対する見方や考え方を広げながら自分なりの解釈をもてるようにしたい。

○　本単元のねらいは、身近な動物と人とを関連づけながら誕生や成長について調べることができるようにすることである。具体的には、①動物や人の誕生には雌雄のかかわりが必要であり、動物には卵で生まれるものと人と同じように親に似た形で生まれるものがあること、②卵で生まれる動物は、日がたつにつれ卵の中の様子が変化し生まれること、③人も動物と同じように、母体内で成長して生まれること、などが主な内容である。これらの学習を通して、生命の連続性についての見方や考え方を自分自身と結びつけて広げ、生命を尊重する態度を育てることができる。

○　本単元の指導にあたっては、動物を飼育しその誕生や成長の過程を観察しながら自分自身の誕生や成長を関連づけて予想し調べることができるようにしたい。そのために、「見出す」段階では、身近な動物の誕生の様子を観察したり、自分自身の誕生について見直す場を設定し、誕生や成長についての説明できないことを明らかにする。「調べる」段階では、メダカやニワトリなどの動物をふ化させる中で、誕生や成長の仕組みを確かめ合うようにし、人の誕生や成長について予想できるようにする。「生かす」段階では、予想したことを二次情報などで調べていく中で、身近な動物と人の誕生や成長を関連づけて考えることができるようにする。

目　　標

１．育てている動物の誕生や成長と関連づけながら自分自身の誕生や成長の様子を考え、生命を尊重する態度を育てることができる。

２．飼育観察や二次情報から、動物や人の誕生には雌雄のかかわりが必要であることや、卵や母体内で成長していくことをとらえ、生命の連続性についての見方や考え方を広げることができる。

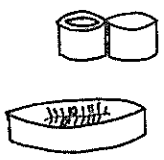
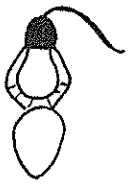
計　　画（計１８時間）

段階	見出す（４時間）	調べる（６時間）	生かす（８時間）
活動と内容	１．身近な動物や自分自身の誕生について話し合う。 (1)　身近な動物と自分自身との誕生や成長について話し合う　② ○　動物の誕生や成長についての問題把握 (2)　これからの学習計画について話し合う。　② ○　動物の誕生や成長と人の誕生や成長を比較していくこと	２．動物の誕生や成長を通して、気づいたことから人の誕生や成長について話し合う。 (1)　動物を飼育し成長の変化を観察する。　（課外） ○　動物の誕生や成長についての情報収集 (2)　集めた情報から、動物の誕生や成長の仕方を自分と比較しながら話し合う。　（本時3／6）⑥ ○　動物の誕生の仕組みの把握と人の誕生についての予想	３．二次資料から、自分自身の誕生や成長について調べ動物と比較する。 (1)　動物の飼育を通して人の誕生について問題と思ったことを調べる。　⑥ ○　母体の中での成長の仕組みの把握 (2)　人と動物の誕生や成長についてまとめる。　② ○　似ていることと違うことの確認
手だて	○　飼育舎の観察や様子を撮影したビデオの視聴 ○　動物の飼い方の資料	○　動物の飼育ノートの活用助言 ○　誕生や成長の様子を調べる観察用具の整備	○　動物の誕生の様子を観察した飼育ノートの活用 ○　人の誕生の二次資料

本時の目標

○　飼育しているメダカやニワトリの卵の成長の経過を調べ、そのことと関連づけて自分自身の母体内での様子を予想することができる。

準　　備　　飼育ノート

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．前時までの学習を想起し、本時学習のめあてを話し合う。 (1) 前時までに行ってきた学習について確認する。 ○　メダカやニワトリの卵のふ化を行いながら、動物と人の誕生や成長を関連づけて調べていること (2) 本時学習のめあてを話し合う。 ○　動物の卵の変化と人の誕生の仕方の関連づけ めあて メダカとニワトリの卵の観察をして、自分がお母さんのお腹の中にいたときの様子を予想しよう。 ※　メダカやニワトリの卵の成長の様子が観察しやすいように飼育の日程を調節しておく。	○　メダカやニワトリの誕生や成長を調べて、自分の誕生について不思議に思ったことを解決したいな。 ○　メダカやニワトリの卵が変化しているけど、自分はお母さんのおなかの中でどのようにしていたのだろう。
2．メダカやニワトリの卵の成長の様子を観察し、その結果から人の母体内での様子を話し合う。 (1) メダカやニワトリの卵の成長の様子を調べる。 ○　メダカやニワトリの卵の中の変化について 〈メダカの卵の観察〉  ・　シャーレに卵をとり中の様子を見る。 ※　ルーペを用意して卵の中の様子が詳しくみれるようにする。 〈ニワトリの卵の観察〉  ・　室内を暗くして、卵を上下から見る。 ※　検卵器を用意して卵の中の様子が想像できるようにする。	○　メダカやニワトリの卵はどのように変化してきたのかな。 ・　メダカの卵の中が動いているみたいだけどな。 →目が大きくて体が丸くなっている。 ・　ニワトリの卵は、何か変化が起こっているかな。 →血管があって、黒い体が液体の中で動いている。
(2) 自分が母体内でどのように育っていたのか予想し、話し合う。 ○人の母体内での成長の様子についての予想 ・お腹の中で、丸くなっていたのではないか。 ・お腹の中に液体があってその中にいたのか。 ・液体の中に栄養があって成長したのか。 ・へその緒で栄養をもらって成長したのか。 ※　メダカやニワトリを観察した結果やこれまでの生活経験から知っていることを基に、自分なりの根拠を持って母体内での様子を絵図に表現させる。	○　メダカやニワトリの卵と同じように自分もお母さんの体の中に入っていたのかな。 ・　メダカやニワトリの卵の育ち方と同じところや違うところはどんなところだろう。
3．人の誕生について今後調べていくことを確認する。 ○　人の誕生についての問題の整理 ※　話し合った絵図をもとに、それぞれの予想の違いを明らかにして今後の問題となるようにする。	○　お母さんの体の中に入っているときのことを予想したけど、わからないことがたくさんあるな。

第５学年２・３組　図画工作科学習指導案

指導者　樺島　穣

題　　材　布と針金で生みだされるもの　（材料をもとにした造形遊び）

指　導　観

○　本学級の子供たちは、第４学年において、身近な材料の特徴を生かして多様な発想を行い、形を分解・再構成をしながら創造的な形をつくりだす造形遊びを経験している。造形遊びに対する関心・意欲は高く、身近な人工材料を進んで収集したり、材料からの自由な発想をもとに、創造的な形を友達と共同的につくりだしたりすることに楽しさを感じてきている。しかし、材料の特徴の異なる布と針金などの相互の特徴を生かして、分解・再構成をするなどの創造的技能を発揮する経験はまだない。表現過程において、表現と鑑賞を一体的に行うことはできるようになっている。

○　本題材のねらいは、布と針金の特徴を生かして、創造的な形をつくりだすとともに、友達と共同的に再発想しながら、教室の空間を造形的にまとめ、創造表現の喜びを味わうことができるようにすることである。具体的には、①布と針金の特徴を生かした造形への関心・意欲・態度、②異質の材料の操作から想像力を働かせて形をつくったり、空間へ生かしたりする発想や構想の能力、③柔軟性、可変性などの特徴を生かして材料・用具を操作する創造的な技能、④造形活動を振り返り、友達の行為・態度を共感的に感受する鑑賞の能力など創造活動の基礎的能力を育てることができる。

○　本題材の支援は、布と針金の分解・再構成を通して、創造的な形をつくりだし、結果として総合的な感覚や能力が発揮されるようにする。具体的には、①布と針金の子供の収集活動への促しと共に教師が材料提供をすること、②分解・再構成などの材料操作から、多様な発想を促す演示やヒントを与えるなどの活動提案を行うこと、③布と針金の分解・再構成のための用具や接合材、彩色用スプレーなどの準備をすること、④形を空間へ生かすための試行的な環境設定や友達と共同的に再発想をしながら空間を造形的にまとめることができる環境設定をすること、などである。

目　　標

１．布と針金による造形操作から、思いを連続・発展させて創造表現の喜びを味わうことができる。

２．布と針金の分解・再構成を通して、創造的な形をつくりだすとともに、友達と共同的に再発想しながら、教室の空間を造形的にまとめていくことができる。

計　　画（約８時間）

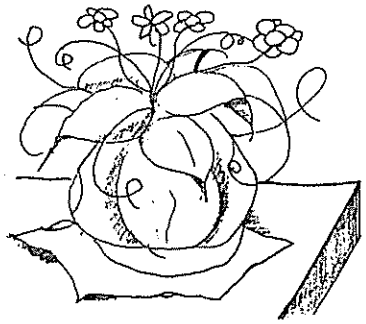
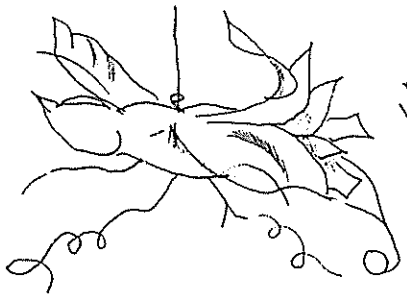
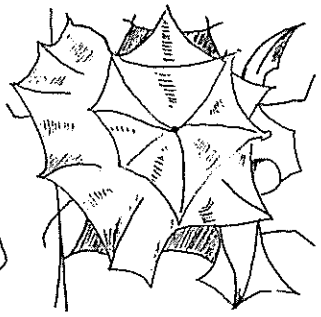
段階	発想を広げる（２時間）	表現を深める（３時間）	発想・表現をまとめる（３時間）
活動と内容	１．布と針金の材料操作をもとに新しい形をつくりだす。 ○　柔軟性、可変性への気付き ○　分解技能の獲得 ○　彩色技能の獲得 ○　試行的な再構成	２．布と針金による新しい形を生かして、楽しい形をつくりだす。 ○　視点変更による思いの変化 ○　置き方の変化による台場空間への気付き ○　つるし方、掛け方による壁面、浮遊空間の把握（本時2/3） ○　創造的技能の結果的な獲得	３．布と針金の楽しい形をもとに、友達と共同的に発想しながら空間を造形的にまとめる。 ○　形と形の相互関係からの再発想力 ○　形と形の空間意識からの共同的な思いの把握 ○　環境空間の造形的把握
手だて	○　材料収集への促し ○　材料・用具の提供 ○　ヒント演示	○　形を空間へ生かすための活動提案と試行的な環境設定 ○　活動過程の相互交流の提案	○　共同発想を促す活動提案 ○　造形空間のための環境設定 ○　活動過程の物語化への賞賛

本時の目標

○　布と針金を分解・再構成した新しい形をもとに、空間への生かし方を試しながら創造的な楽しい形をつくりだすことができる。

準　　備　試行的な環境設定、布材、針金、ペンチ、フック、カラースプレー、水彩道具

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．前時の造形活動を振り返り、本時の造形活動のめあてについて話し合う。 (1) 布と針金の分解・再構成をした新しい形を振り返る。 ○　分解・再構成から生命感、動勢感、空間性の把握 ○　相互交流による思いの連続的な変化についての気付き (2) 本時のめあてについて話し合う。 ○　布と針金による形の視点変更による題名の変化への気付き ○　布と針金による形の机上への置き方、空中へのつるし方、壁面への掛け方の違いによる意味付けの付加・強化 ※　形の空間への生かし方についてヒント演示を行い、試行的に空間に働きかけることができるように環境設定をする。	○　前の時間は、布と針金の形を変えて、切ったり、組み合わせたりして、新しい形をつくって楽しかったな。 ○　形の置き方を変えたり、つるしたり、掛けたりしたらもっと楽しくなりそうだ。 ○　形の空間への生かし方をいろいろ試してみよう。
めあて 布と針金でつくった形の置き方を変えたり、空中につるしたりしてもっと楽しい形にしよう。	
2．布と針金による形の空間への生かし方を試しながら、創造的な楽しい形をつくりだす。 ○　机上に置くことから台場空間への気付き ・不思議な花束 ・夢の海底植物など  ○　空中につるすことから浮遊空間への気付き ・白いベールと鳥 ・空に浮かぶペットなど  ○　窓辺に掛けることから布の陰影への気付き ・壁からの生物 ・夢の贈り物など 	
※　教室内に環境設定を行い、試行的に形を置いたり、つるしたり、掛けたりできるようにし、意味付けの変化を促す。 3．本時の活動を振り返り、次時の活動について知る。 (1) 活動過程と思いの連続・発展について振り返る。 ○　形の心象的な意味付けの変化と創造的な物語化 (2) 次時は、友達と共同的に発想を試みてもよいことを知る。	○　形の見方を変えると、楽しい題名が思い付いたよ。 ○　布と針金の形の空間への生かし方から、次々に物語ができた。形を友達と組み合わせたらどうなるかな。

第6学年1・3組　家庭科学習指導案

指導者　平山尚美

題　　材　家庭生活に役立つ物を製作しよう

指導観

○　本学級の子供たちは、第5学年において自分たちの生活に役立つ小物などを製作している経験をもっている。その中で子供たちは、自分が製作したものが生活に役立つことのよさや喜びを味わっている。しかし、家族や家庭を対象にして役に立つ物を製作した経験はない。そこで本題材では、家庭生活に役立つ物を製作していくことにより、家族の一員としての自覚をもって家庭生活をより創造的につくりだしていく力を伸ばしていきたい。

○　本題材のねらいは、家庭生活に役立つ物の製作を通して、家族とのかかわりを深め、家庭生活を一層明るく楽しく充実向上させようとする実践的態度を育てることである。具体的には、①家族への思いをもとに、情報収集をしながら製作の計画を立てること、②使用目的や家族の好みに応じた材料の選定、形・飾りなどを工夫して製作すること、③無駄のない採寸・裁断の理解や手縫い、ミシン縫いなどの特徴を生かして縫えることなどである。これらの学習を通して家族の一員として日常生活や家庭生活の身近な生活課題を解決する能力や態度を身につけることができる。

○　本題材の指導にあたっては、家族の一員として家庭生活を明るく楽しくしていきたいという子供たちの思いや願いを大切にして、製作活動を進めるようにする。つかむ段階では、自分の家庭生活に必要な物を家族からの情報収集をもとに決めさせていく。その際、使用目的を家族の思いとつないで「何を」「どうして」作りたいのか明確にもたせるようにする。調べる段階では、家族への思いに照らし合わせながら、布の材質・形・大きさ・色柄・飾りなどの視点にそって計画を立てたり工夫したりすることができる情報コーナーを設ける。生かす段階では、自分が製作した物を家族が活用した感想や様子から、自分の製作した物が家庭生活に役立つ有用感を味わわせたい。

目　　標

1．家庭生活に役立つ物の製作を通して、家族の一員として家庭生活をよりよく変えていこうとする態度を育てるとともにその喜びを味わうことができる。

2．自分の家庭生活を見つめる中から、自分の家庭生活をより豊かにする物を選んだり、製作することに必要な情報を収集したりすることができる。

計　　画（約12時間）

段階	つかむ（2時間）	調べる・つくる（8時間）	生かす（2時間）
活動と内容	1．家庭生活への思いをもとにして製作する物を決める。② ○　家庭生活の見直しと課題の把握 ○　家族の思いを受け止めての製作物の決定	2．計画を立て、製作する。⑧ (1) 製作目的に応じた材料・形・大きさなどを工夫して製作の見通しをもつ。本時1／8② ○　作る目的に応じた計画 (2) 計画にそって製作する。⑥ ○　家族の思いに応じた製作	3．製作物を通して家族生活のかかわり方の自覚の深まりについて発表する。② ○　相互の製作物のよさの理解 ○　家庭生活に役立つ喜びの感得
手だて	○　家庭生活を見直す視点につながる場面提示 ○　家族からの情報収集の促し	○　製作の見通しをもてる情報コーナーの設置 ○　家族の使用目的や好みに応じた情報収集活動の促し	○　製作物を使用してみての家族からの情報収集 ○　自己評価活動の促し

本時の目標

○　布地・形・大きさ・色柄などを使用目的や家族の好みなどの観点から、よりふさわしいものとして工夫し、具体的な製作の見通しをもつことができる。

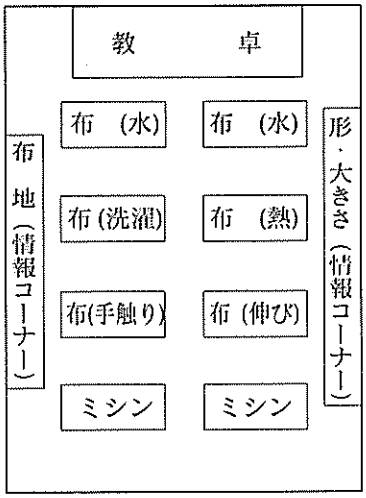
準　　備　　試し活動の場（布地・色柄・大きさ・形・縫い方）・ミシン・計画カード

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．前時学習を想起して、本時学習のめあてについて確かめる。 (1) 前時に立てた計画を確認する。 ○　製作カードをもとに計画を確認すること (2) 本時に試して解決する自分の課題を発表する。 ○　本時の自分の課題の確認 ※　布地・色柄・大きさ・形などの観点から試し活動をすることを確かめさせる。	○　ウォールポケットができるとリモコンや大事なものがなくならないで家族も助かるな。 ○　いろいろな物を入れるからじょうぶな布でないといけないな。今日は、布の厚みについて試していこう。
めあて 使う目的や家族の好みに合った物を製作するために、試しの活動をして見通しをもとう。	
2．試しの活動をする。 (1) 自分の課題にもとづいて調べたり・試したりする活動を行う。 ○　課題にもとづいた試しの活動の内容と方法の把握	○　一番厚い布地は、キルティングになるな。でも少し、やわらかくて壁にかけていると伸びてきそうだな。 ○　ひっぱっても伸びない布は、ないのかな。さがしてみよう。

使用目的に応じた布地の試し活動	形・大きさの試し活動	色・柄の試し活動
〈エプロン〉 ・耐水性の試し 洗濯して縮み方を試している 水をかけてはじき方を試している 〈壁掛け〉 ・丈夫さの試し ひっぱって伸び方を試している 厚さを試している	〈クッション〉 ・形の試し 丸い形に縫えるか試している 〈ウォールポケット〉 ・形、大きさの試し ポケットの形、大きさを縫って試している 〈ラジカセカバー〉 ・形、大きさの試し ラジカセの大きさに合った使いやすい形の試し	〈テーブルかけ〉 ・色・柄の試し カーテンや部屋の調度品と合わせて色、柄を選んでいる 〈棚をおおう布〉 ・色、柄の試し 台所にある棚をおおう布の色を回りとの調和で明るくすっきりする物を選んでいる

《試し活動の場》



※　情報コーナーを設けて子供たちが自分に必要なことを自主的に調べることができるようにする。

(2) 試し活動をもとに、自分の計画を見直し、付加・修正する。

○　計画についての付加・修正

※試し活動をして付加・修正したことを計画カードに書かせる。

3．本時学習についてまとめ、次時学習について確認する。

○　家庭への思いを大切にした製作活動への意欲化

○　布地情報コーナーでのびにくい布はデニムとわかったぞ。

○　試してみたらやっぱり伸びないぞ。これだったら、ぼくにもぬえてじょうぶだからいいな。

第6学年2組　社会科学習指導案

指導者　芋生修一

単　元　活躍する博多商人

指導観

○　本学級の子供たちは、これまで博多が中国や朝鮮との交流をとおして発展してきたことを学習してきている。その中で、特に僧侶や文化人による交流が盛んに行われ、日本の文化の発展につながる重要な都市として博多をとらえてきている。すなわち、中国や朝鮮との交流史の中で博多（福岡）の歴史を考え、自分の町としての博多やそこに生きた人々に対する考えをつくり上げてきている。そこで、中国との貿易・交流関係に関心をもち続けているこの時期に、博多商人の生き方を考えさせることで、博多の歴史に対する見方・考え方を深めていきたい。

○　本単元は、寧波（ニンポー）の乱後途絶えていた日明勘合貿易の再開とともに、その中心的な役割を果たした博多商人の繁栄とその考え方をとらえ、これからの博多がどのように発展していくか商人の立場から判断させるものである。具体的には、日明勘合貿易の様子と博多商人の役割、商業都市から自治都市への発展の様子と博多商人の考え方、戦国大名との関係や戦乱の中での博多商人の考え方などがあげられる。このような学習をとおして、室町から戦国に生きる博多商人の生き方や武士との関係をとらえ、自分たちの町としての博多の発展を願う態度を身につけることができる。

○　本単元の指導にあたっては、自治都市としての博多を支えた博多商人の考え方を調べたり、博多商人と当時の支配者との関係を考えたりしながら、当時の博多の発展の様子をとらえていく。そして、自治都市としてして機能していた博多の町が戦乱に巻き込まれた時の博多商人の考え方や行い方の違いを考え、これからの博多の発展を願う博多商人の生き方についての自分の考えをつくっていきたい。そのためには、追究視点を博多商人におき、博物館での調査・収集活動や比較活動を旺盛に行っていきたい。

目　標

○　日明勘合貿易において活躍した博多商人による自治都市「博多」の町作りの様子を多面的にとらえ、支配者との関係の中で生きる博多商人の生き方を判断することができる。

計　画（約7時間）

段階	事実と事実の関係をとらえる（4時間）	社会をつくる実践への判断をする（3時間）
活動と内容	1．博多の町の発展に関与した博多商人を調べる。② <u>どのようにして博多の町が自治都市として発展したのか調べる。</u> ○　勘合貿易における博多商人の役割の把握 ・　貿易都市として発展した原因 ・　博多の発展と博多商人の様子 2．町づくりの様子について話し合う。② ○　商業都市から自治都市として発展した根拠の意味付け（本時1／2） ・　商人の経済力と支配者（大内氏・大友氏） ・　年寄衆の役割と町づくり	1．戦国の世に生きる博多商人の考え方を調べる。② <u>戦乱の世に生きる博多商人の町づくりの考え方を調べ、判断する。</u> ○　戦乱に巻き込まれた博多商人の在り方 ・　博多の年寄衆の考えと博多を捨て唐津に避難した豪商「神屋家」の考え ・　明や朝鮮貿易から得た利潤の使用法 2．博多商人の考え方についての自分の考えをつくる。① ○　博多商人の考え方 ・　これからの博多の発展
手だて	○　博多の町の貿易・交流史の調査活動の設定 ○　博多と堺との比較による交流活動の設定 ○　支配者との関係をもたらす資料の提示	○　2つの型の博多商人の比較活動の設定 ・　博多から避難した商人の考え方の提示 ○　判断の根拠による交流活動の設定

本時の目標

○　自治都市「博多」への発展の様子を、博多の豪商たちの対明・対朝鮮貿易の在り方やその利潤による経済力をもとに考えることができる。

準　　備　室町から戦国時代の博多の町の様子の絵図、宣教師の言葉、日明勘合貿易の様子の絵図

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．本時学習のめあてについて話し合う。 (1) 商業都市「博多」から自治都市「博多」へと発展した博多の町作りに対する疑問を確認する。 ○　自治都市「博多」の発展の原因について めあて なぜ、自治都市としての「博多」に発展したのか、その原因を話し合おう。 ※　宣教師ルイス・フロイスの言葉をもとに当時の様子を話し合わせることによって、博多の移り変わりに対する疑問を再確認する。	○　フロイスの言葉から、当時の博多がとても繁栄していたことはよく分かる。どのようにして商業都市としての博多から自治都市としての博多になったのだろうか。 ○　貿易によって力を得たというが、どのようにして力を蓄えたのだろうか。
2．国際貿易都市から自治都市へと発展した博多について話し合う。 (1) 自治都市「博多」へ発展した根拠を豪商たちの経済力の面から話し合い、自治都市としての在り方を判断する。 ○　自治都市へ発展した原因の意味付け ・　対明・対朝鮮貿易での利益から ・　外国へ持ち出す特産品や銀の確保から ・　武士からの貿易権の認可による貿易の独占から ・　外国から見た博多商人の信頼性から ※　室町から戦国時代の博多の町の地図をもとに、町を支えていた商人の経済力や考え方を話し合わせることによって、自治都市として発展した博多の町をとらえさせる。 (2) ライバル自治都市「堺」との比較において、博多の貿易の仕方を検討する。 ○　博多と堺の共通点と差異点の取り出し ・　貿易の仕組みの共通点 ・　支配者の支援の仕方の違い ・　商人の考え方の違い ※　自治都市を防御する堀の作り方の違いに着目させ、自治都市「博多」の発展が、武士との関係によって成り立っていたことをとらえ、支配者との関係へ視点を向けさせる。	○　博多が貿易港としての条件として、刀や博多織物といった特産物をすぐに手に入れることができる都市だったからだ。 ○　明や朝鮮との貿易で、たくさんの利益を上げたのは、貿易の権利を独占することができたからだ。他の都市の競争相手がいないので安心して貿易できたのではないか。それは、博多を支配している武士との関係がよかったからではないかな。 ○　当時自治都市として有名であった「堺」とは、武士との関係が違う。それは、町を守る堀をだれがつくったかで分かる。
3．当時博多を支配者していた「大友氏」との関係から自治都市「博多」について話し合う。 ○　博多を支配する武士と博多商人との考え方 ・　大友氏…博多支配による利益と治安の維持 ・　博多商人…自治都市の認可と貿易権の認可	○　支配する武士にとって博多は、どんな価値があったのかな。武士も博多商人が活躍することで利益を得ていた。博多商人も武士によって守られていた。お互いにとって利益があったという関係だ。

第１・２学年ふじ組　　体育科学習指導案

指導者　　舛　元　俊　文

題　　材　「どうぶつむらのだいたんけん」(基本の運動)

指　導　観

○　本学級の子供たちは、精神年齢２才から４才程度の男子４名、女子２名で構成されている。子供達は、友達同志で一緒に遊ぶ姿はまだ見られないが、教師の声かけがあればみんなで同じ遊びをすることができる。また、ストーリー性のある鬼遊びは経験しているが、ストーリー性から課題克服をねらう運動についてはまだ未経験である。走る・とぶ・渡る動きについては、コースを意識して走れる子供から自分の力をだしきって走れない子供。目標物を意識してとべる子供からまたぐのがやっとの子供、自分で平均台を渡れる子供から補助なしでは渡れない子供など実態は様々である。

○　本題材のねらいは、おおかみにさらわれた動物村の動物達を助けに探検していく中で、走る・とぶ・渡るなどの多様な動きを経験させるものである。具体的には①動物村の動物達を助けるという目的意識をもって意欲的に運動する。②友達を助けに行く途中、器械・器具で構成された変化のある場に繰り返しかかわることで多様な動きを経験する。③走る・とぶ・渡るという多様な動きを経験し動きを広げることができる。このことは、運動に意欲的に取り組む態度を育成し、多様な動きを経験させることで調整力を中心に体力を養うことができ、今後の運動生活を活発にする上で意義深い。

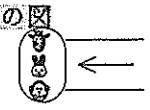
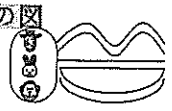
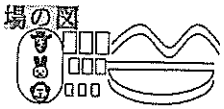
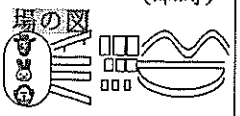
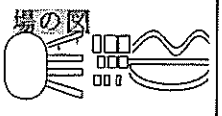
○　本題材の支援は、①次のような条件をもつストーリーを設定する。ア．動物村の動物達を助けるという目的がある。イ．走る・とぶ・渡るなどの運動内容が含まれる。ウ．子供が興味関心をもてる登場人物がいる。②ストーリーに合った自己選択できる多様なコースを設定すること③個に応じた器械・器具で構成された場を設定すること④個の運動に応じた声かけ、動作援助を行うことである。

目　　標

１．動物村の動物達を助け出すために、意欲的に探検を楽しむことができる。

２．走る・跳ぶ・渡るなどの運動を体力に応じて繰り返し行うことができる。

計　　画（約５時間）

<table>
<tr><th>段階</th><th>であう（１時間）</th><th colspan="3">ひろげる（３時間）</th><th>まとめる（１時間）</th></tr>
<tr><td>ストーリーと場</td><td>いじわるなおおかみにつれていかれた動物達を助けに行きました。
場の図
  </td><td>①　さらわれた動物達を助けに行きました。
②　道に迷わないように動物達を助けに行きました。
場の図
  </td><td>①　道に迷わないように動物達を助けに行きました。
②　岩をとび越えて動物達を助けに行きました。
場の図
  </td><td>①　道に迷わないように岩をとび越えて友達を助けに行きました。
②　橋を渡って動物達を助けに行きました。
（本時）
場の図
  </td><td>みんなはおおかみと一緒に遊びました。
場の図
  </td></tr>
<tr><td>活動と内容</td><td>１．動物達を助けるたんけんにであう。
○　ストーリーと場、動きとので会い。</td><td colspan="3">２．動物達を助けるたんけんをする。
○　走る動きを中心に動きを広げること。
○　走る動き、とぶ動きを中心に動きを広げること。
○　とぶ動き、わたる動きを中心に動きを広げること。</td><td>３．動物達を助けるたんけんをまとめる。
○　できるようになった動きでたんけんすること。</td></tr>
<tr><td>支援</td><td colspan="5">・ビデオによるストーリーのイメージ化　・個に応じた賞賛、声かけ　・自己選択できる場
・助けた動物たちが構成できる場　・個に応じた高さ長さの器機・器具
・イメージを膨らませるためのお面　・場の雰囲気を盛り上げるＢＧＭ</td></tr>
</table>

本時の目標（※Ｇはグループを表す。）

○　動物達を助ける探検をして、多様なとぶ動き、渡る動きをすることができる。

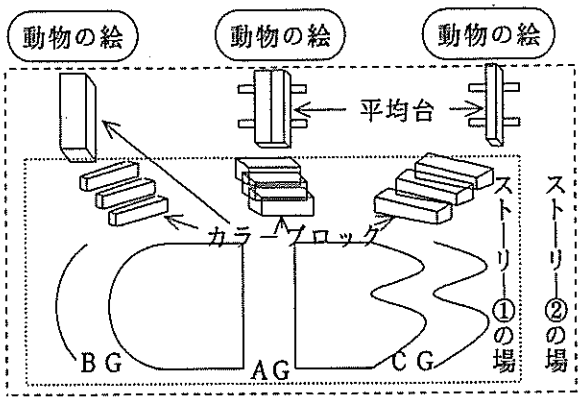
ＡＧ：高さ20㎝、幅10㎝の目標物をまたぎ越していくことができる。高さ20㎝、幅20㎝の橋を、横歩きやすり足で渡って行くことができる。

ＢＧ：高さ20㎝、幅20㎝の目標物を片足踏切でとび越していくことができる。高さ30㎝幅10㎝を２本並べた橋を、横歩きやすり足で渡って行くことができる。

ＣＧ：高さ20㎝、幅20㎝の目標物を交互足でとび越していくことができる。高さ30㎝幅10㎝の橋を横歩きやすり足、交互足で渡って行くことができる。

準　　備　ビデオ、ペープサート、固定遊具、跳び箱、カラーブロック、平均台、マットなど

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
１．本時のめあてを話し合う。 (1) 前時のビデオを視聴する。 ○　前時学習の想起 (2) 本時たんけんのめあてを話し合う。 ストーリー① みんながねているまに動物村のお友達がまたさらわれてしまいました。岩をとんでお友達を助けに行くことができるでしょうか。 めあて どうぶつむらのともだちをたすけよう ２．友連を助けるたんけんをする。 (1) 岩をとび越えて友達を助け出す探検をする ○　多様なまたぎこしの動き Ａグループ：低くて幅の狭い場でのまたぎこし。 Ｂグループ：低くて幅の広い場での片足踏切のまたぎこし。 Ｃグループ：高くて幅の広い場での交互足ふみきりまたぎこし。 (2) 橋を渡って友達を助け出すたんけんをする ストーリー② おおかみがみんなが助けにこれないように川をつくってしまいました。はしをわたってたすけることができるでしょうか。 ○多様なわたる動き Ａグループ：カラーブロック上で横歩き・すり足・交互足でわたる。 Ｂグループ：２本横につなげた平均台で、横歩きすり足・交互足でわたる。 Ｃグループ：縦に２本つなげた平均台で、横歩きすり足・交互足でわたる。 ３．たんけんの成果を発表し学習のまとめをする (1) 助けた友達を発表する。 ○　助けた友達の人数。 (2) 次時ストーリーの予告ビデオを見る。 ○　次時学習への意欲。	１．運動意欲を引き出すための支援 ○　前時の学習を想起させ、本時ストーリーをイメージさせるビデオの提示 ○　多様な動きを引き出す場  ２．探検の動きを広げる支援 ○　とぶ場での支援 Ａ・Ｂ・ＣＧ：教師のモデル演示。励ましの声かけ。動作援助。 ＡＧ：またぎ越すときの足の位置がわかる足型 ＢＧ：片足踏切の足の位置がわかる足型。 ＣＧ：交互足の位置がわかる足型。 ○　わたる場での支援 Ａ・Ｂ・ＣＧ：ストーリーのビデオの提示。横あるき、すり足、交互足での教師のモデル演示。励ましの声かけ。 ＡＧ：幅が広く低いはし、幅が広く高いはし。片手、両手での動作補助。 ＢＧ：拒が広く高いはし。２本桟につなげた平均台。片手ての動作補助。横歩きの足型 ＣＧ：高さのある平均台、長さのある平均台。 ３．学習への達成感・成就感を味わわせる支援 ○　一人一人への賞賛、励まし ○　次時への靭待を高めるスト÷リーの提示

第3・4学年さくら組　生活単元学習指導案

指導者　落合純哉

単　元　おみせやさんになってあそぼう

指導観

○　本学級の子供たちは、精神年齢3歳から5歳程度の子供たちで構成されている。これまでにものりものを作って遊ぶことなどを通して、活動を連続発展させながら遊ぶ経験をしてきている。このような遊びにおける課題解決の仕方を見てみると、教師の援助を受けながら、作ったものにより場に応じて遊んだり、友達に誘いかけて遊んだりすることができるようになってきている。こうした遊びの経験を通して、教師の援助があれば遊びの場を自分から作ろうとする姿もみられるようになりつつある。

○　本単元のねらいは、おみせやさんごっこの場やきまりを自分たちで作りながら、友達とのかかわりを深めたり広げたりできるようにするものである。具体的な学習内容は、①遊びの場の状況に応じて身近な素材に働きかけること、②自分の好きな店や品物を作ること、③お店の人と買い物をする人に分かれ、それぞれの役割を交替しながらごっこ遊びをすること、である。このことにより、課題を解決していこうとする態度、活動を生み出して構成する力、社会的なスキルなどの生活力が育ち、身の回りのもの・ひと・ことへ積極的にかかわり合おうとする態度の育成につながる。このことは、子供たちの現在及び将来のよりよい生活を考える上で意義深い。

○　本単元の支援は、①実際の買い物の体験を通して、商店で働く人や買い物をする人の様子を見学させ、活動への意欲を喚起すること、②自分の好きな店や品物を、実際の店の様子の写真を手がかりにしながら自分で作ることのできる場を設定すること、③店で働く人と買い物をする人とで繰り返し役割交替をしていく中で、友達とのかかわりを生み出すことができるような遊びの場を設定すること、である。

目　標

1．友達とかかわりながらの店や品物を作り、たのしくおみせやさんごっこをすることができる。

2．身近な素材を使って自分の好きな店や品物を作り、役割交替や友達とのやりとりを通して、友達と積極的にかかわろうとすることができる。

計　画（約5時間）

<table>
<tr><th>段階</th><th>であう（2時間）</th><th colspan="2">つ　く　る（2時間）</th><th>まとめる（1時間）</th></tr>
<tr><td rowspan="2">活動と内容</td><td rowspan="2">1　商店で働く人や買い物をする人の様子を見学し、買い物をする。
○　活動への意欲の喚起
○　場面の様子の理解</td><td colspan="2">2　おみせやさんごっこをする。</td><td rowspan="2">3　作り上げたお店屋さんを他の学級の友達に紹介し、一緒に遊ぶ。
○　達成感・成就感</td></tr>
<tr><td>(1)　身近な素材を使って、様々なお店屋さんを作り、役割を決めて友達と一緒に遊ぶ。
○　店の種類に応じた身近な素材の使い方
○　役割に応じた友達とのかかわり方</td><td>(2)　身近な素材を使って、自分の好きなお店屋さんを作り、友達と役割を交替しながら遊ぶ（本時）
○　好きな店の種類に応じた身近な素材の使い方
○　自由な役割交替に応じた友達とのかかわり方</td></tr>
<tr><td>支援</td><td>○　買い物の実体験</td><td colspan="2">○　身近な素材の提示と、使い方についてのモデル演示
○　店や品物、役割を自由に交替しながら遊ぶことのできる場の設定</td><td>○　作りあげたお店屋さんの提示</td></tr>
</table>

本時学習の目標

○　身近な素材を使って自分の好きな店や品物に合ったものを作り、友達とやりとりをしながら作り上げた店や品物で繰り返し遊ぶことができる。

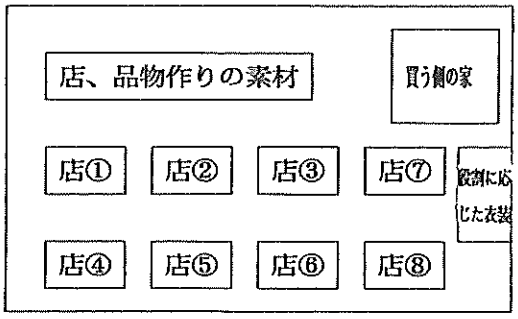
Aグループ：好きな店を選び友達の模倣をしながら、身近な素材を使って店や品物を作ることができる。
友達を意識しながら、他の友達のやりとりを模倣して遊ぶことができる。

Bグループ：店の特徴を見取りながら作ることができる。
やりとりの場面を部分的に見取りながら、友達とやりとりをして遊ぶことができる。

Cグループ：店の特徴や働く人の様子を見取りながら作ることができる。
やりとりの一連の場面を見通しながら、友達とやりとりをして遊ぶことができる。

準　　備　　身近な素材、材料、店や品物の写真

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．本時学習のめあてについて話し合う。 (1) 前時に作った店や品物を見て、本時の活動について知る。 ○　目的意識を喚起すること めあて だいすきなおみせやさんをつくって、ともだちとあそぼう。 (2) 手順と方法を知る。 ①作ってみたい店を選ぶ。②素材を選んで店や品物を作る。③役割を交替して遊ぶ。 2．自分の好きな店や品物を作って遊ぶ。 Aグループ　Bグループ　Cグループ (1) 自分の好きな店や品物を作る。 ○　自分なりに工夫して作ること 好きな店を選び友達の模倣をしながら作る。 | 好きな店の特徴を見取りながら作る。 | 好きな店の特徴や働く人の様子を見取りながら作る。 (2) 友達とやりとりをしながら、作った店や品物を使って遊ぶ。 ○　活動を自分なりに構成すること 友達の模倣をしながら役割に応じたやりとりをする。 | 場面を見取って動き、役割に応じてやりとりをする。 | 一連の場面を見取って動き、役割に応じてやりとりをする。 3．本時学習のまとめをする。 ○　作ったお店屋さんを他の学級の友達に紹介することへの意欲をもつこと	1．本時学習への動機を高める支援 ○　前時に作った店、品物 ○　店、品物づくり、おみせやさんごっこの場  2．おみせやさんごっこへの支援 ○　個に応じた作り方絵本 Aグループ：店や品物についての写真、絵図 Bグループ：店の様子についての写真、絵図 Cグループ：店の様子や、働く人の様子についての写真・絵図 ○　個に応じたことばかけ Aグループ：動作援助、役割を知らせることばかけ 「おかねをもらってから、わたすんだね。」 （売る動作をしてみせる） Bグループ：場面の状況をとらえさせることばかけ 「おきゃくさんがきましたよ。どうしたらいいかな。」 Cグループ：場面の状況をとらえさせたり、活動を見通させたりすることばかけ 「まず、おみせのじゅんびをして、それから、どうするのかな。」 3．次時学習への意欲を引き出す支援 ○　作った店や品物を友達に紹介する場 ○　賞賛

学習指導協議会（１日目）メモNo.１

学習指導協議会（１日目）メモNo.２

全　体　会（１日目）

○　あいさつ

学　長　　菰　口　　治
学校長　　高　橋　義　夫

◇　主題発表

「生きる喜びを生み出す教育課程の創造」

―― 子供主体の活動からみる教育課程の編成 ――

教　頭　　安　永　純　二

◇ 教科等発表

● 体 育 科

「主体的に運動にかかわる体育科学習」

体育科部　　佐々木　壮一朗

● 理　　科

「自然事象に対する新たな考えをつくり出す理科学習」

理科部　　今　林　康　治

◇ 教科等発表

● 社 会 科

「社会の形成者として社会生活をよりよくしていく社会科学習」

社会科部　後 藤 正 弘

● 国 語 科

「ことばを通して創造的に自己表現していく国語科学習」

国語科部　伊 藤 啓 二

第二日目　午前の部

公開授業指導案

第１学年１組　　算数科学習指導案

指導者　　加　藤　英　也

題　　材　　いくつになるかな（たしざん１、ひきざん１）

指　導　観

○　本学級の子供たちは、身の回りのものを数えたり、対応付けたりして、１０までの数について数の意味を少しずつ理解してきている。具体的には、①数える対象と数詞を１対１対応させて、正確に『数える』②数え棒やおはじきなどの具体物やドットの図などの半具体物や数字を使って、数を『表す』③数の大小を２つの集合の要素を１対１対応させて『比べる』④具体的な場面や絵の中で順番やものの位置を数で『表す』⑤２、３の数を１つの数に『合成』したり１つの数を２、３の数に『分解』したりする活動の体験をしてきている。

○　本題材は、具体物や半具体物を使って、遊びやゲームをしながら、加法や減法が使える場面をお話にしたり、式に表して計算ができるようになることをねらいとしている。具体的には次の内容がある。①増加や合併をたし算として、求残や求差をひき算としてとらえることができる。②たし算やひき算が使える場面を区別することができる。③具体物、半具体物、絵図を使って、たし算やひき算を説明したり、お話作りができる。④たし算やひき算の式を作り、計算ができる。この過程で、生活の中で加法や減法が使える場面を考えたり、取り出したりして作り出していこうとする態度を育てることができる。また、加法と減法を同時に扱うことで、どちらの場面かを判断する力を育てることができる。

○　本題材の指導にあたっては、遊びやゲームなどの活動を取り入れながら、合併、増加、求残、求差という操作を取り入れた活動の体験をたっぷりと持たせたい。そのためにまず操作の仕方を作る段階で、数の違う２枚の絵からお話を作ることを通して、数を増やしたり、減らしたり、２つの数を合併させたり、違いを比べたりする操作を取り出す活動を行う。次に場面と演算と操作を対応付ける段階では、合併、増加、求残、求差などの場面カードを分類し、加法と減法の場面を見極め判断する体験を持たせ、操作の違いを明らかにしたり、式に表したりする。生活と結び付ける段階では、生活の中の出来事を素材にして、式から加法や減法の場面の話を作る活動体験を持たせる。

目　　標

１．操作の違いや用いられる言葉の違いを根拠にして、たし算かひき算かを判断することができる。

２．たし算やひき算を行うことによって１０までの数を２つの数の和や差でみるといった見方を豊かにするとともに、式を基に生活の中から加法・減法の場面をお話として作り出すことができる。

計　　画（約１３時間）

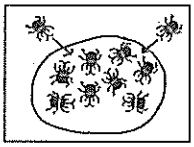
段階	操作の仕方を作る体験（２時間）	場面と演算と操作を対応付ける体験（８時間）	生活と結び付ける体験（３時間）
活動と内容	１．２枚の絵からお話を作り操作の仕方を取り出す。 (1)　お話を作る ○　数を操作する体験 (2)　お話を分ける ○　合併、増加、求残、求差の操作をする体験	２．加法や減法が用いられる場面を分類し、式に表す。 (1)　加法と減法の場面をたくさん取り出す　③ ○　たし算とひき算の演算式に表す体験 (2)　カード合わせゲームをする　（本時1／2）② ○　操作や操作を表す言葉による加法と減法を判断する体験 (3)　同じ答えを合わせるカードゲームをする③ ○　たし算とひき算の式と答えを関係付ける体験	３．たし算やひき算の場面のお話を作る。 (1)　紙芝居を作る　② ○　式と生活を結び付ける体験 (2)　お話を作って発表する　①
手だて	○　場面の絵の提示とお話の例の提示	○　半具体物、数図などを用いたたし算やひき算の場面を表す絵カードの提示 ○　子供たちが自由に選択できる活動の場の設定	○　多様な式から選択できる場の設定 ○　紙芝居の形式の提示

本時の目標

○　２つのゲームを通して、①加法と減法の場面と操作の仕方を表す絵カードや②操作を表す言葉をたし算、ひき算の式と対応付け、たし算かひき算かを判断し、分類する根拠を述べることができる。

準　　備　　裏に式が書いてある半具体物や数図を使った絵カード、言葉カード、場面の絵と具体物

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
１．本時学習のめあてをつかむ。 ○　お話を作り、数が増えるのか減るのかを判断し、活動の見通しを持つこと ・　お話によって、たし算になったり、ひき算になったりすること あかいさかなが６ぴきいます。 きいろいさかなが４ひきいます　⟶　あわせて何匹…６＋４ ちがいは何匹…６－４ ※　加法と減法の両方が取り出せる場面の絵の提示を行う。 めあて たしざんになるかひきざんになるかをかんがえて、たくさんげえむをしよう。	○　赤い魚が６匹います。黄色い魚が４匹います。あわせて10匹います。 ○　友達は、ちがいはいくつかというお話を作ったよ。 ○　僕のお話は６＋４のたし算になるけど、友達のは６－４のひき算になる。お話が違うと式も違ってくるよ。 ○　たし算とひき算のどっちになるのか考えないといけないな。
２．たし算になるか、ひき算になるか考えて、ゲームを行い、たし算とひき算を判別する仕方を話し合う。 (1) ゲーム１、２を選択して行い、おはじきを操作しながらたし算かひき算かを判別する。 ○　式カードと絵カードを対応させるゲーム１  ↔ 表　８＋２　裏　・一人が出した絵カード(式カード)に合う式カード(絵カード)を捜すゲーム ○　式に合う操作の言葉を当てはめるゲーム２  ↔ かいました／あげました／たべました／もらいました　・式に合うように空欄に合う言葉カードを選ぶゲーム ※　十題程度の絵カードや言葉カードを場に配布しておく。 ※　場面のお話や選んだわけを操作や言葉で表現させる。 ※　カードを裏返して、同じカードであれば、正解であると自己評価できるようにしておく。 (2) たし算とひき算の判別の仕方について話し合う。 ○「もらう」「あげる」などの言葉に着目すること ○　操作の仕方に着目すること ※　加法と減法の判断の根拠を操作をさせながら発言させる。 ３．本時学習についてまとめる。 ○　たし算とひき算にたくさん分けたこと	○　まずゲーム１からしよう。 ○　たし算とひき算のどっちになるのかな。 ○　増えるからたし算だ。 わーい、あっていたよ。 ○「かえりました」だから、少なくなるのでひき算かな。 ○　次はゲーム２をしよう。 ○　４－３になるようにするには、「たべました」にしたらいいのじゃないかな。 ○　これはたし算だから、「あわせていくつ」のカードだと思う。やっぱりそうだ。 ○　減るのはひき算で、増えるのはたし算だ。 ○　たし算とひき算にたくさんわけたよ。 ○　同じたし算でもいろんな言葉があるんだなあ。

第２学年１組　　表現科学習指導案

指導者　　津　本　修　一

題　　材　「もしも空をとべたなら」

指　導　観

○　本学級の子供たちは、これまで、自分の思ったことや感じたことを、文章表現や音楽的表現、造形的表現、身体的表現などの様々な方法を用いて表現する経験をしてきている。そのなかで、子供たちは表現活動そのものの楽しさや自分の思いを表現できた成就感、満足感を味わい、表現活動への関心・意欲を高めつつある。特に第１学年の終わりでは、題材「表現劇－ありときりぎりす－」のなかで、せりふや動きをつくって表現したり、自分の好きな登場人物になりきるために衣装やお面を工夫してつくったりするなど、個性を生かした創造的表現活動にひたり、自己表現への意欲が高まってきた。

○　本題材は、空を飛ぶものになって空を旅する様子を自由に想像し、体いっぱいつかって表現する楽しさを味わわせることをねらいとしている。具体的には、鳥や飛行機など自分がなりたいものを選択し、空の旅の様子を想像すること、感じたこと・考えたことを言語・身体・造形・音楽などの様々な表現方法をとりいれながら、なりきり表現をすることなどが内容である。本題材は、子供の主体的・個性的な表現活動を具現化していくうえで、次のような価値をもっている。

①子供一人一人が想像したことを自由に表現する場が保障される。②空の旅という表現が空間的、時間的な広がりをもち、多様な表現方法を用いることができる。③表現対象が鳥や飛行機などといった生活経験に身近なものなので、子供の感性を刺激し、イメージをふくらませることができる。

○　本題材の指導にあたっては、感じる段階では、「もしも空をとべたなら。」というテーマからなりたいものや空の旅について形、動き、音などといった点からのイメージ化を図り、計画カードに表現させることにより、表現意欲と見通しをもたせる。あらわす段階Ⅰでは、自分がなりたい空を飛ぶものそのものになりきる表現活動を造形的・身体的な表現方法を中心に展開していく。さらに、あらわす段階Ⅱでは、あらわす段階Ⅰで広がったイメージをもとに、個人あるいは、必要に応じてグループを組んで共同的に空のたびマップをつくり、ストーリーや造形物をつくったり、身体的表現を工夫したり、音楽的表現を取り入れたりして思い思いに表現していく。最後のあじわう段階では、個人、グループなどの表現単位ごとに発表会を行い、表現と鑑賞の一体化を図りたい。

目　　標

１．「もしも空をとべたなら」というテーマからイメージをふくらませ、生き生きと「空の旅」の表現活動に取り組み、なりきり表現の楽しさを味わうことができる。

２．自分の想像した「空の旅」を様々な表現方法を取り入れながら表現することができる。

計　　画（約８時間）

段階	感　じ　る	あらわすⅠ	あらわすⅡ	あじわう
活動と内容	１．テーマ「もしも空をとべたなら」について話し合う。　① ○　鳥・飛行機など、なりたいものについての話し合い ○　資料の収集／交流	２．自分がなりたい空を飛ぶもののイメージをもとになりきり表現活動をする。　② ○　なりたいものの衣装・お面づくり ○　なりたいものの動きの模倣 ○　なりたいものの効果音づくり	３．空の旅の様子を想像し、ストーリーをつくって様々な方法を取り入れて表現する　④ ○　グループでの話し合い ○　ストーリー・造形物・音楽的表現の採り入れと空の旅の表現　（本時3／4）	４．発表回を行い表現活動のまとめをする。① ○　「空の旅」発表会 ○　表現の交流（感想カード）
手だて	○　鳥・飛行機などの視覚的資料の提示 ○　イメージカードの作成	○　造形表現の材料の準備・提供 ○　視覚的／聴覚的資料の準備・提供 ○　選択的活動に応じた場の構成	○　「空のたびマップ」の作成 ○　個およびグループの表現の計画の把握 主題に応じた支援計画と実行	○　「もしももしもの空のたび発表会」の設定 ○　ビデオ収録及び鑑賞会の設定

本時の目標

○　グループや個人の計画をもとに、「空のたび」の表現を様々な表現を取り入れながら、豊かにふくらませていくことができる。

準　　備　・空のたびマップ・シンセサイザー・造形材料・音素材・打楽器類・表現ノート

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．前時学習を想起し、本時のめあてについて話し合う。 ○　代表グループの「空のたびマップ」の内容を発表すること。 ・虹の散歩の様子を表現する。 ・虹のすべりだいをすべる様子を表現する。 ※　グループごとの計画について、その表現方法の方向性や素材などの助言を与え、活動意欲をもたせる。 ○　めあての把握 めあて にじのくにのたびのようすを楽しくひょうげんしよう。	○　ぼくたちのグループは、にじをくぐりぬけてみたいな。 ○　わたしは、にじのすべりだいをすべってみたいな。
2．グループごとに「空の旅」の表現の工夫をする。 (1)　「空のたびマップ」の計画をもとに「空の旅」を表現する。 ○身体的表現からの工夫 ・体や翼の動き ・ダンス表現などの工夫 ○音楽的表現からの工夫 ・飛行機の音づくり ・挿入歌の工夫 ○言語的表現からの工夫 ・ストーリーの付加 ・せりふの工夫 ○造形的表現からの工夫 ・お面／衣装の工夫 ・小道具の工夫 ※　虹の場で、シンセサイザーで即興的に音楽を流し、子供の動きや歌唱などの表現に助言をする。	○　あらしの場面では、みんなでがんばってとんできたので、にじのくにでは、みんなで喜び合うようにしたいな。 ○　あっ。音楽がながれてきた。音楽に合わせて、にじのダンスをおどってみようかな。
(2)　モデルグループの表現をもとに交流活動をする。 ○　シンセサイザーの音楽に合わせた表現の工夫 ※　モデルグループの表現のよいところや参考になるところを話し合わせ、それぞれの表現に生かしていくように助言する。	○　Aグループのちょうちょうの動きは、音楽のやわらかい感じに合っているね。
(3)　グループごとに虹の場の「空のたび」の表現を工夫する。 ○　シンセサイザーの音楽のリズムに合わせた動きの工夫 ○　シンセサイザーの伴奏による歌唱表現の工夫 ※　表現グループの表現主題をたずね、それに合わせてシンセサイザーの音楽を即興演奏するなど表現活動の活性化を図るようにする。	○　ぼくたちのグループも、音楽のリズムに合わせて、にじのすべりだいをすべるようすを表してみよう。
3．本時のまとめをし、次時への見通しをもつ ○　自己評価により活動を振り返ること。 ・表現活動の感想 ・本時活動の満足度	○　今日は、にじのたびが、楽しく表せたのでよかったな。 ○　楽しかった。満足度は5

第3学年2組　体育科学習指導案

指導者　笠　宏照

単　元　スルーボールをしよう

指導観

○　本学級の子供たちは、2年生までに、ボールを使ったゲームの学習で、投げる・とる・蹴る・打つことを楽しみながら、友達と一緒に得点につながる動きを考えたり、使ったりすることができるようになってきている。中学年は、ルールを工夫し、簡単な技能を身につけていくことでよりゲームを楽しくすることができるようになってくる。よって、この期に、ルールを工夫させたり、ゲームを作ることやボールを投げたり取ったりする動きを身につけさせたりしながら、ゲームをする楽しさを味わわせたい。

○　本単元のねらいは、子供たちがルールを工夫し、ボールを投げてゴールに通過させたり、それを受け取ったりすることで得点を競い合う、という楽しさを味わわせることである。本単元の価値としては、①パスやシュートの場面で、友達と協力しながら動きを身につけたり、考えたりするなど、人とのかかわりを深めることができる、②ゴールの高さ・大きさ・位置などを自分たちの実態に合わせて変えるなど、場とのかかわりを深めることができる、③連続した動きの中、ボールキャッチからシュート・パスをする、といった素早い状況判断力を養うことができる、などである。

○　本単元の指導にあたっては、自分たちでルールを工夫させながら、投げる・とるという動きを身につけさせ、みんなでゲームをする楽しさや喜びを味わわせたい。そのために、とらえる活動では、大きさや重さの異なるボール、高さや大きさの異なるゴールなどを使った遊ぶ活動を通して、投げる・とるという動きやゴールにボールを通過させるスルーボールの特性を理解する。つくる活動では、通過させやすいゴールという点から位置、個数、高さなどを工夫し、作戦ボードなどを使った支援によって、得点に結び付く動きについて考える。深める段階では対戦チームごとに工夫してきたルールについて交流をしながら、ゲーム大会を行い、学習をまとめていく。

目　標

1．自分や友達の動きのよさを生かしたり、不十分さを克服したりしながら、みんなで協力して得点を競い合って楽しくゲームをすることができる。

2．スルーボールに必要なパスやシュート、ボールキャッチなどの簡単な動きを身につけ、ルールを自分たちで工夫することができる。

計　画（約8時間）

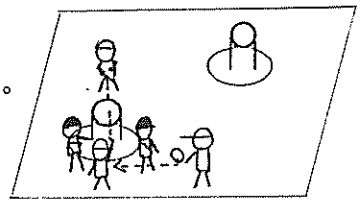
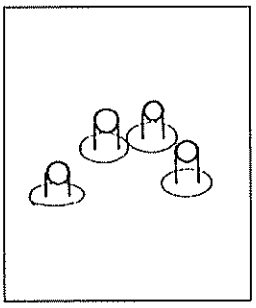
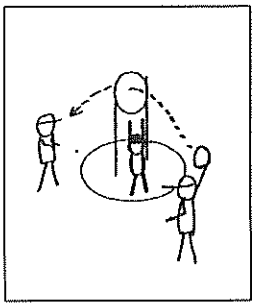
段階	運動との一体感をとらえる活動（3時間）	運動との一体感をつくる活動（3時間）	運動との一体感を深める活動（2時間）
活動と内容	1．スルーボールについて話し合う。② ○　ボールをゴールへ投げ入れる遊びの体験 ○　特性や動きの理解 2．試しのゲームをする。① ○　場作りの理解 ○　課題の見通し	2．ルールを考えながら、それに応じた動きを身につけてゲームをする。① (1)　基本的なルールを考える。 ○　ゲームをする人数、得点方法などの決定。 (2)　ゴールの位置や数などを考え投げ方、取り方をかえる。（本時2／2）② ○　ゴール数の増加 ○　高さの設定による投げ方の変更（動きの考案）	3．考えたルールと動きについて交流しながらゲーム大会をする。② (1)　ルールを紹介し、動き（作戦）を考えながら、ゲームをする。 ○　工夫点と動き（作戦）の交流 ○　高さの設定による投げ方の変更（動きの考案） (2)　学習したことをまとめる。 ○　友達といっしょに活動した楽しさの発表
手だて	○　多種類のボール ○　複数のゴール ○　学習ノート（課題の記録）	○　作戦ボード ○　移動式ゴール ○　学習ノート（ルールや動きの工夫の記録）	○　作戦ボード ○　学習ノート（課題達成の記録）

本時の目標

○　対戦チームごとにゴールの工夫しながら、みんなで楽しく攻めたり守ったりして、ゲームをすることができる。

準　　備　　ボール、移動式ゴール、ゼッケン、得点板、学習ノート

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．学習の場を作り、本時学習について話し合う。 (1) コートを準備してチームごとにボールを使って練習する。 ○　前時の場の設定 ○　3対2のミニゲーム (2) 学習のめあてについて話し合う。 ○　場作りの観点の把握 ・ゴールの位置、高さ、個数 コートの例（2つのゴールを離しておく）  めあて もっとみんなが楽しめるように、ゴールを工夫してゲームをしよう。	○　チームで、体を動かしながらゲームをしておこう ○　今回は、どこにゴールをおこうかな。 ○　ゴールの間を広げると、相手も守りにくくなるだろうな。 ○　ゴールの数を増やすと、もっとシュートができるよ。
2．スルーボールゲームをする。 (1) ゲーム1をする。 ○　設定した場を使ったゲーム ○　シュートや得点に結びつく場や動きの課題 (2) ゲーム1を振り返り、対戦チーム同士で場について話し合い、ゴールをかえたり、練習をしたりする。 ○　チームのゲーム様相の振り返り	○　シュートは、たくさんしているかな。決まっているかな。 ○　正面からシュートしているから、決まらないな。
［場の工夫の例］ ①　ゴールの数に目を向けて （内　容）ゴールの数を2つから4つに増やす。 （意識すること） ・はなれたところにおこう ・ゴールの前にたくさん動くといいね。  ②　ゴールの高さに目をむけて （内　容）ゴールの高さを高くしてみよう。 （意識すること） ・てきが届かないように ・ボールを高く投げると入るね 	
※　学習ノートやコート図を使い視覚的に理解させ、練習や場づくりをさせる。 (3) ゲーム2をする。 ○　動く量やシュート数（得点）の増加 ○　高く、大きくなど投げ方の多様化	○　ゴールを高くすると、シュートの仕方が変わるぞ。 ○　違った動きができて、楽しいな。
3．本時学習を振り返り、次時のゲームについて話し合う。 ○　場を変えたことによるゲーム様相の変化の把握 ○　次時ゲームへの意欲 ※　動きを賞賛しながら、楽しさを評価させる。	○　みんなで考えてケームができてよかったな。

第４学年１組　　生活環境科学習指導案

指導者　　芋　生　修　一

単　　元　　福岡市の交通

指　導　観

○　本学級の子供たちは、登下校の際に交通安全を支えている人の存在に気付いている。また、交通手段を利用する中で朝夕の交通渋滞が起きていることも知っている。しかも、それらが当たり前のように感じている。一方、これまでの学習で、「ごみ処理の問題」「水の確保の問題」など、福岡市が抱える課題について自分なりの考えをつくり上げてきている。その中で地域に対する関心の高まりとともに、地域社会の発展を願う態度も身に付きつつある。そこで、福岡市の交通に関心を持ち始めるこの時期に、自分の生活とのかかわりが深い交通渋滞の緩和・解消について考えさせることで、よりよい地域社会をつくる一員として、自分が住む市や町へのかかわりをさらに深めさせたい。

○　本単元は、警察署をはじめ、福岡市や運輸業者など、関係機関が協力し合って取り組んでいる福岡市の交通渋滞について、その緩和・解消のために自分の考えを出し合い、地域に提案できることをねらいとしている。具体的には、学校周辺の交通状況や渋滞の原因を調べること、渋滞の緩和・解消のための関係諸機関の取り組みを共感的にとらえること、学校周辺の渋滞の緩和・解消の考えをつくること、その考えを地域社会に提案することなどがあげられる。この学習をとおして、地域社会とのかかわりを深め、地域社会の安全な町づくりに少しでも寄与できる態度を育てることができる。

○　本単元の指導にあたっては、日常の交通状況の体験的な把握や渋滞緩和・解消のための取り組みの見学・調査など、具体的な活動や体験をとおして交通渋滞の緩和・解消に対する自分の考えをつくり上げたい。そこで、関係諸機関（警察、市、地域、業者など）への聞き取りや見学・調査の場や時間の設定、解決に必要な資料の提供など、子供の必要感に応じた支援を行っていく。また、自分の考えの強化を図る交流活動やリサーチ活動、視聴覚機器や統計的な手法を使った資料作りの活動を設定し、自分の考えに具体性を持たせていく。

目　　標

○　地域社会のよりよい生活をつくるために、交通渋滞を減らす関係諸機関の取り組みをとらえるとともに、学校周辺の交通渋滞の緩和・解消に対する自分の考えや態度をつくることができる。

計　　画（約１２時間）

段階	であう（２時間）	さぐる（７時間）	いかす（３時間）
活動と内容	１．通学路の交通状況について話し合い、追究課題を設定する。　② ○　交通状況の把握 ・　安全確保の施設 ・　時間帯によって渋滞が発生 ○　追究課題の設定 ・　渋滞体験の想起 ・　渋滞緩和・解消の方策	２．交通渋滞の緩和・解消のための取り組みを調べ、自分の解決策を考える。 (1)　地域の交通渋滞緩和・解消のための取り組みを調べる。　④ ○　渋滞原因や関係諸機関の見学調査 ○　関係諸機関の取り組みの状況の把握 ・　警察、市、地域社会、運輸業者の協力と取り決め→実際の状況との違い (2)　渋滞解消に対する考えをつくる。　③ ○　自分の考えの構築と吟味（本時2／3） ・　立場設定による交流	３．考えの再吟味を行い、市の都市計画に働きかける。 (1)　可能性についての吟味を行う。　② ○　市民への働きかけによる再吟味 (2)　自分の考えを市に働きかける。　① ○　働きかけとその結果の報告
手だて	○　交通状況の実地調査 ○　渋滞体験の交流	○　具体的な活動や体験活動の保障 ○　解決に必要な資料の提供 ○　考えの強化を図る交流活動の設定	○　再取材活動やリサーチ活動の設定 ○　報告会の設定

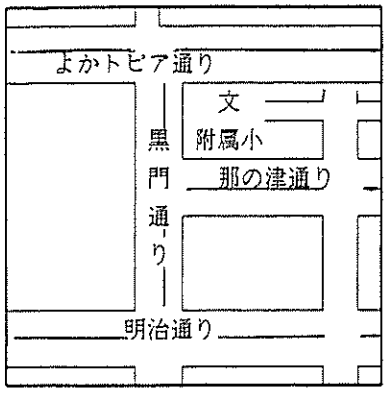
本時の目標

○　渋滞緩和・解消の推進のために考えた自分の解決策を吟味することによって、自分の考えのよさや十分でない点を明らかにし、具体性のある解決策にしていくための見通しをもつことができる。

準　　備　自分の解決策とその根拠を示す資料、解決策の有効性を訴える視聴覚資料や統計資料

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．関係諸機関の代表者の話を聞き、本時学習のめあてについて話し合う。 (1) 現在の渋滞緩和・解消のための取り組みとその推進の必要性を考える。 ○　地域の交通渋滞の緩和・解消を推進する必要性の把握 (2) 本時学習のめあてについて話し合う。 めあて 交通じゅうたいをさらに少なくする自分の取り組みについて、話し合おう。 2．渋滞緩和・解消に対する自分の考えを出し合い吟味する。 (1) 自分の考えの根拠を正当化する自作資料や他の資料をもとに、自分の考えを説明する。 ○　子供の渋滞緩和・解消のための考えの表現・交流 ・車の量を減らすこと　→交通規制、一方通行の設定 →ノーマイカーデーの法的規制 →バスレーンの確保 ・車の流れをよくする →ノーマイカーデーの徹底 →交差点の改良 →駐車している車の排除 →道路の拡張・整備 ※　映像や統計資料を活用させ、自分の考えの根拠を具体化させる。 (2) 説明内容について、自分の調査をもとに吟味する。 ○　子供が調査した根拠の吟味 ・期待できる効果の具体性（実践することでの成果） ・費用の実態（予算の限度や資金の調達） ・実現までの時間（実現するまでの日程と日数） ・市民の期待と実態（市民の意識、運転者の期待） ※　考えの根拠における専門性に関しては、ゲストの具体的な意見を聞きながら、吟味を進めていく。 3．自分の考えのよさや次時への見通しを明らかにする。 ○　自分の考えのよさや課題の明確化と解決の見通し ※　交通渋滞が緩和・解消できた例を取り上げ参考にできないかを話し合わせて、次時の見通しを持たせる。	○　交通渋滞が少なくなるようにするには、どんなことをしていけばよいのかな。 ○　自分の考えは、渋滞になる理由を考えた解決策になっているのだろうか。みんなの考えを聞いてみたい。 ○　ぼくの考えは、運転者への呼びかけをして、バスレーンを確保すること。そうすれば、バスが時間通りに来るので利用者も増え、車が減って渋滞がなくなるという仕組みだ。 ○　でも、バス専用レーンをバス以外の車がどんどん通っている。これではいけないのでもっと強いきまりが必要だ。 ○　学校周辺の交通規制をするというのは、具体的にはどんな規制をするのかな。 ○　一般の車の乗り入れを禁止して、車の量を減らそうとしているのは理解できるけど、困る人はいないのだろうか。 ○　あまりきまりをつくるのもよくないというけど、駐車禁止の取り締まりを行うと、渋滞が少しなくなるのでやはり必要である。 ○　一度にできないので、計画的に渋滞を少なくすることが大切だ。また、協力したり共同したりしている運送業者のような考え方が大切だ。



第５学年１組　　国語科学習指導案

指導者　　吉　田　正　樹

単　　元　　見方を変えて考えよう

指　導　観

○　本学級の子供たちは、科学的読み物への関心が高く読書にも意欲的である。また、段落相互の関係を考えて中心的事柄を読み取ったり文章全体の要旨をとらえたりする読みの力も育ってきている。しかし、読むことを通して自分のものの見方・考え方を広げ深め、生活の中で生かしていくような読みにはまだ至っていない。目的をもって積極的に文章に関わり、自分に必要な事柄を取り出したり、自分にとっての価値を見出したりしながら、読書や生活に開いていく読みの力を育てたい。

○　本単元は、複数の教材文を情報として生かして、見方を変えて考える発想の仕方を読み取るとともに、その発想を自分の例に置き換え考えることをねらいとしている。具体的には、①見方を変えて考えることに興味関心をもち、学習の目的をもつこと②目的達成に向けて、文章構成や叙述の工夫に着目したり複数の教材を比べたりして必要な事柄を収集・処理すること③自分の身近な事例や生活の中で見方を変えて考え、発見したことを発表し合うことである。このことは、自分に必要な情報を収集・処理していく読みの力と、自分の考えを他と伝え合う力を育てる上で価値がある。

○　本単元の指導にあたっては、子供たちが目的的に複数教材の読みに関わる、情報収集・処理の過程として学習を成立させたい。導入段階では、先行知識・体験と教材を生かして、見方を変える発想の面白さや大切さを話し合い、学習目的をもたせる。展開の段階では、「大陸は動く」を中心教材に据え、文章構成や叙述の工夫に着目したり情報の不足を補助教材で補ったりしながらウェゲナーの発想と研究を読み取る活動を行う。次に他の２人の科学者の紹介文と読み比べ、共通点や相違点を明らかにしながら、見方を変えた発想の仕方についての理解を広げ深めさせる。終末段階では、発表会の場を設けて、学んだ発想の仕方を積極的に生かし考え表現する活動ができるようにする。

目　　標

１．複数教材(説明文)から、新しい発見を生み出す科学者のものの見方･考え方に関する情報を収集・処理しながら「見方を変えた」発想の仕方を理解し、自分の見方･考え方を広げ深めることができる。

２．自分の身近な事柄について見方を変えて考えたことを、書きまとめ発表し合うことができる。

計　　画（約１１時間）

段階	導　入（２時間）	展　　開（６時間）	終　末（３時間）
活動と内容	１．見方を変えて考えることを話題に話し合い、学習の目的と見通しをつかむ。 ○　見方を変えて考えることの面白さと大切さの確認 ・だれがどんな見方を変える考え方をしたのか。	２．複数教材を生かして、見方を変えた考え方を読み取る。 (1)「大陸は動く」から、ウェゲナーの見方・考え方を読み取る。　③ ○　構成や叙述に着目した読み取り ○　情報の不足を他教材で補う読み取り (2)　ウェゲナーと比べながら、他の２人の科学者の紹介文を読み、見方を変えた発想の仕方を考える。　（本時3／3）③ ○　複数教材からの情報収集・処理	３．見方を変えて、自分の身近な生活を見つめ直す。 (1)　自分の例で分かったこと・考えたことをまとめる。② ○　自分の生活の中で情報を活用してみる (2)　発表会をする① ○　相互評価
手だて	○　知識・体験を生かした話し合い学習 ○　科学者の紹介	○　「地球は生きている」の補助教材化 ○　コペルニクス、ハーシェルの紹介文の資料教材としての活用（複数教材化）	○　身近な例を見つけるための支援 ○　相互評価の観点

本時の目標

○　ウェゲナー、コペルニクスと比べながら、ハーシェルの紹介文を読み取り、違いや共通点を明らかにしながら、見方を変えた考え方についての理解を広げ深めることができる。

準　　備　　3人の科学者についての教材文、学習の流れ図、学習ノート

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．前時学習を想起し、本時学習のめあてを話し合う。 ○　前時までの読み取りの振り返りとめあての把握 ※　代表児の考えについて話し合うことで、本時学習の必要感とめあてをもつことができるようにする。	○　ウェゲナーとコペルニクスは似ているところがあるが、ハーシェルはどうだろう。ずいぶん違うみたいだぞ。
ハーシェルの見方・考え方をウェゲナー・コペルニクスと比べて（違う点や共通点をはっきりさせながら）、見方を変えた考え方を読み取ろう。	
2．ウェゲナー・コペルニクスと比べながら、ハーシェルの見方を変える発想の方法を読み取る。 (1) 前時までに読み取ったことと比べながら、3人の見方・考え方の違いや共通点を学習ノートに図化する。 ○　複数の教材文から情報収集した事柄を処理する。 ※　色カードにまとめたり操作したりして、見方・考え方の違いや共通性を明確にできるようにする。 (2) 自分の読み取りの根拠を明らかにして話し合い、ハーシェルの見方を変えた考え方を考える。 ○　見方を変えた発想の仕方の違いを読み取る ○　追求の方法（考え方）を読み取る。 ※　他の2人の時と同じ2つの視点①どんな見方をしているか（見方がどう変わって）②どうやって考えを深めたり確かにしていったかで比べさせる。	○　ハーシェルの「自分の目で星を見たい」という願いが、宇宙の姿を見たいという願いに変わっている。 ○　ウェゲナーは、自分のひらめきを信じて、仮説を確かめていく研究をした。コペルニクスは結論をすぐに出さずに冷静に研究を進めた。ハーシェルはどうだろう。 ○　ハーシェルはウェゲナーやコペルニクスと違い、考え方をみんなに認められている。

ハーシェル	↔	ウェゲナー	コペルニクス
全体を見る・考える		大たんに見る・考える	反対に見る・考える
「本当の星の姿を自分の目でよく見たい」（願い） ・自作の望遠鏡の工夫と観察 ・天王星の発見 「もっと大きなもの（銀河系）を見たい」（願い） ・全天の星を数える。 ・銀河系の姿を見いだす。	↔	大西洋の東と西の大陸はつながっていたに違いない ひらめきを仮説に ・古い地層、化石の研究 ・動植物・氷河の研究 大陸移動説を唱える。 「すべての大陸は一つにつながっていた」	「天動説」へのうたがい ・自作の機械での星の観測 ・天文学の研究 ・なにものにもとらわれず ・冷静に考える。 「地動説」をまとめる。

※　「全天の星を数える」作業を考えることで、工夫と努力の点から他の2人との共通性をとらえさせる。

○　自分の発想や願いを大切にしている。信じている。
○　研究を工夫しながら追求している。努力を続けている。

3．話し合ったことをもとに、見方を変えた考え方についてまとめる。 ○　自分のノートを加除修正したり、感想をまとめる。 ※　色カードを用いて付加修正させる。	○　見方を変えるといってもいろんな方法があるみたいだぞ。 ○　どの方法を参考にして見方を変えて考えてみようかな。

第6学年1組　算数科学習指導案

指導者　重松宏明

題　　材　拡大・縮小をしよう

指導観

○　本学級の子供たちは、これまで図形を分類・整理する活動や図形さがしの活動、図形の性質を調べる活動など様々な活動体験を持っている。特に低学年では、形を構成する辺や頂点の数、大きさに着目し、身のまわりの事象から形を取り出す活動を、中学年では、平行・垂直といった形を構成する要素間の関係に着目し形を取り出す活動を行ってきている。5年生の合同の学習では、形そのものから、図形間の関係に目を向け、位置を変換するという活動を行っている。本題材では、これまでの活動体験を生かし、大小の変換という図形間の新たな見方を豊かにしていきたい。

○　本題材は、図形の形や大きさに着目して図形を分類したり、拡大・縮小したり、縮尺や縮図を活用したりする活動体験を豊かにし、図形に対する理解や感覚を豊かにしていくことをねらいとしている。具体的には、①対応している角の大きさの相等や対応する辺の長さの比の一定に着目し、図形を仲間分けする、②方眼を利用したり、1つの頂点に集まる辺や対角線の長さの比を一定にして拡大、縮小する、③縮尺を使って、実際の距離を求める、④測定しにくい部分を測定しやすい部分を測って求める、といった活動である。これらの活動を通して、身のまわりのものの形を変換という立場から見直し、図形間の関係に着目し、図形を見ていく見方を高めることができる。

○　本題材の指導にあたっては、それぞれの活動の場において、図形の形や大きさを調べたり、拡大・縮小したり、縮尺や縮図を利用して測定する活動などを十分に行わせていく。第1次では、縦や横を大きくしたり小さくしたりした様々な形を分類する活動を行い、拡大・縮小の意味を明らかにしていく。第2次では、グラデーションを作ることを目的に、様々な方法による拡大図、縮図をかく活動を行う。また、曲線を含む図形の拡大や運動場に拡大図をかいたりすることで、変換による図形の見方や技能を高めていく。第3次では、拡大図や縮図を生活に生かしていく観点から地図上の距離を求めたり、高い木やビルの高さを測定する活動を行う。

目　　標

1．図形の形や大きさを調べたり、拡大図や縮図をかいたりし、相似の概念の基礎となる図形の見方を深めることができる。

2．縮図を利用して、直接測定しにくい部分を測定し、縮図を活用するよさを味わい、それらを進んで生活に生かすことができる。

計　　画（約11時間）

段階	第1次　図形を観点をもって分類する体験(2時間)	第2次　拡大・縮小する体験（6時間）	第3次　縮図を活用し測定する体験（3時間）
活動と内容	1．形の仲間分けをする。 ○　形や大きさに着目して図形を仲間分けする体験 ○　拡大図・縮図から図形の共通点をさぐる体験	2．グラデーションを作る。　③ ○　方眼を使った拡大・縮小、角の大きさが等しいことを使った拡大・縮小、1つの角を共通にした拡大・縮小の体験 3．曲線を含んだ絵を拡大する。（本時）① ○　曲線を含んだ図形の拡大体験 4．運動場に大きな拡大図をかく。　② ○　大きな拡大図をかく体験	5．修学旅行の行程距離を調べる。　① ○　地図で道路の実際の長さを求める体験 6．校舎の幅や、福岡タワーの高さを調べる。　② ○　簡単な縮図をかいて長さや高さを求める体験 ・　角度測定器の活用体験
手だて	○　形をそのままに大きくしたり小さくしたりした図形とそれ以外の図形を類別させる活動の設定。 ○　類別した根拠を理由づけさせる助言。	○　活動目的の明確化の促し ○　拡大・縮小に使う図形や絵の工夫	○　縮尺を利用して距離を求めさせる場の設定 ○　縮図をかいて長さを求める場の設定（角度測定器の活用）

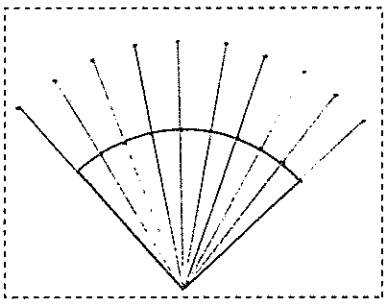
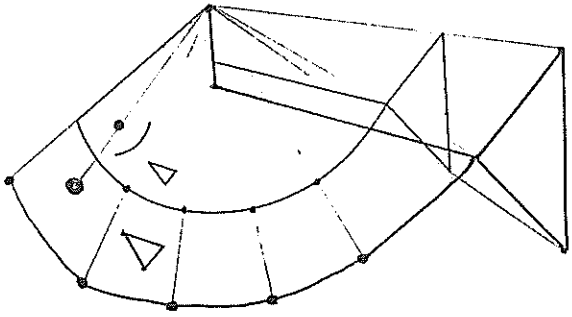
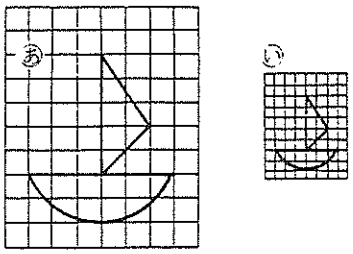
本時の目標

1．変換させる点や辺を自分で設定し、曲線の混じった図形を拡大する楽しさを味わうことができる。

2．曲線の混じった図形の拡大において、形と拡大する大きさに応じて、どの拡大の仕方が便利か感じとることができる。

準　　備　曲線を含んだ絵や形・拡大させる用紙（数種類）、円をかいたプリント、扇子

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．提示された曲線を含んだ絵をみて、拡大の仕方についての見通しをもち、本時学習のめあてをつかむ。 (1) 提示された形を見て、前時までの形との違いをとらえる。 ○ 曲線を含んだ形の拡大をしていくことをとらえること ※ 曲線を含んだ数種類の形を準備し、前時までの形と本時の形との違いを比較させる。 (2) おうぎ形の拡大図をかくことをためしに行い、拡大の仕方について話し合い、本時学習のめあてをつかむ。 ○ 曲線の拡大も、点の位置を決めていけばよいということをつかみ、拡大の仕方に見通しをもつこと ※ おうぎ形の拡大図を（コンパスを使わず）かかせ、点の位置を決めれば曲線に近い拡大図がかけることをつかませる。 めあて 曲線の移動場所を上手にきめて、拡大図をかこう。	○ えー、こんな形を拡大するの、できるかなー。 ○ 今までの形は、直線で囲まれた形だったけれど、今日の形は全部、曲線が混じっているよ。 ○ 曲線部分の形ができるだけ崩れないようにすればいいんだ。 ○ 曲線の部分にいくつか点をとって、その位置を決めればいいんだ。 ○ 方眼を使ってもできそうだ。  ○ 私はまず、簡単そうなこの絵からやってみよう。
2．曲線を含んだ絵や形を拡大し、活動の結果を話し合う。 (1) 曲線を含んだ絵や形を拡大する。 ○ 曲線部分の拡大をすること ○ 方眼を使った拡大、角の大きさが等いことを使った拡大、1つの角を共通にした拡大、など前時までの方法を生かして曲線の拡大をすること	
○ 1つの角を共通にした拡大の例  ○ 方眼を使った拡大の例  	
※ 与える形や拡大させる用紙を様々準備し、自分の選択で活動できるようにするとともにこの形は、「この拡大の仕方がよい」という考えをもてるように助言しておく。	
(2) 拡大してみた結果や感想を話し合う。 ○ 自分の活動（拡大の仕方）に対するよさや不十分さの自覚	○ 曲線の多い複雑な図形は、点をとって拡大させる方法では、面倒なので、方眼を使っての拡大の仕方がいいと思う。
3．本時学習をまとめ、次の学習を知る。 ○ 次時の運動場に拡大図をかくことに意欲を持たせること	

第6学年2組　「人間」学習指導案

指導者　中　原　　浩

題　　材　小さな友達から

指　導　観

○　本学級の子供たちは、6年生として、縦割り清掃や委員会、さまざまな行事と責任ある仕事を受け持つことが多くなり、最高学年としての自覚ができつつある。中でも、1年生とかかわることに喜びを感じ、始業前から1年生の教室に行き、一緒に遊んだり学校案内をしたりする姿が見られる。そのかかわりを通して、年少の相手の気持ちや思いを推しはかり、相手のことを考えて行動することの大切さを感じてきている。そこで、1年生や園児との交流を楽しみながら、異年齢の子供とのかかわり方や、自分の成長を見つめさせていきたい。

○　本題材のねらいは、1年生や園児との交流活動を通して、思いやりの心と実践的な態度を伸ばすとともに自分の成長とそれを支える人々の姿を見つめることである。具体的な活動として、行事や日常における1年生とのふれ合い、近くの幼稚園への訪問活動、夏季集落における附属幼稚園との交流活動、自分の出身保育園や幼稚園での保母さん、保父さん体験活動がある。これらの活動の過程を通して、①年少児の思いを感じ取る豊かな感性、②自分の成長の実感とそれを支えた人々のかかわりへの気づき、③思いやりをもって年少児と交流できる実践力を培うことができると考える。

○　本題材の指導にあたっては、1年生や園児との交流に楽しみをもって進んで取り組み、その中で自分の成長の実感を味わうことができるように次のような支援を行う。①1年生との交流活動ごとの日記による「かかわりによる喜びや思い」の取り出し及び賞賛、②幼稚園との訪問・交流の場と時間の確保と連絡、③自分のはたらきかけが喜ばれた有用感を味わい活動を広げるビデオの視聴、④自分の成長の気づきをはかる交流の場の設定。

目　　標

○　1年生や園児たちのことを推しはかり、思いやりの心をもって楽しく接することができる。

- 自分のよさや成長を感じ取ったり、年少児の思いを推しはかることができる。
- 相手のためになり喜ばれる交流活動にしようとする判断力と実践意欲をもつことができる。

計　　画（約8時間）

<table>
<tr><th>段階</th><th>感じる（1時間）</th><th colspan="2">考える（3時間）→　行う（3時間）</th><th>見つめる（1時間）</th></tr>
<tr><td rowspan="4">活動と内容</td><td rowspan="4">1．M幼稚園の園児たちと出会い、一緒に遊ぶ。
○園児たちとのふれ合いによる喜びの実感
1年生や幼稚園の子供たちとのかかわりを深め、自分のよさを見つめよう。</td><td>2．思いの具体化に向けて話し合う。</td><td>3．訪問や交流のふれ合い活動を行う。</td><td rowspan="4">4．活動を振り返り、そこでの思いや自分の成長について話し合う。
○交流の喜びと価値の実感
○自分のよさや成長の感得</td></tr>
<tr><td>(1)　M幼稚園への再訪問について</td><td>(1)　M幼稚園を訪問する。（訪問、招待の交流を年間5回行う）</td></tr>
<tr><td>(2)　夏季集落での附属幼稚園との交流について（2時間　本時　1／2）</td><td>(2)　海水浴やキャンプファイヤーなどを一緒に行う。（夏季集落）</td></tr>
<tr><td>(3)　出身園への訪問体験について（1時間）</td><td>(3)　出身園で保母さん、保父さん体験を行う。</td></tr>
<tr><td>手だて</td><td>○　ビデオによる活動想起
○　日誌による思いの取り出し</td><td>○　活動目標実現の観点（目的性、現実性）による助言
○　活動を広げる促しと諸機関への連絡</td><td>○　思いやり行為の取り出しと賞賛
○　具体的実践活動の場と時間の設定</td><td>○　活動時の感動やよさが見とれる写真やビデオの提示</td></tr>
</table>

本時の目標

○　M幼稚園や附属幼稚園の園児たちとの交流会について話し合い、幼い子の気持ちや安全を考えて行動することの大切さを感じ、楽しいふれ合いにしようとする意欲をもつことができる。

準　　備　ビデオ（訪問の様子）　ビデオ録画機器（２カ所）　便箋や封筒　人間ノート

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．本時学習のめあてについて話し合う。 (1) 前回訪問したM幼稚園との交流について話し合う。 ○　触れ合いの喜びや有用感、課題の想起 ＊　心温まる触れ合いの様子が伝わる写真やビデオの視聴から、そこでの喜びやとまどいなどの思いを想起させる。 (2) 夏季集落での附属幼稚園の園児との交流の計画があることを知り、本時のめあてをつかむ。 ○　本時目標の明確化と活動への意欲の喚起 めあて 小さな友達とのふれ合いを楽しいものにするための交流のあり方を考えよう。	○　「お兄ちゃん、お姉ちゃん」とみんながよってきて、とってもかわいくて楽しかったな。 ○　言ってることがよくわからなくて、ちょっと困ったこともあったな。 ○　今度交流する附属幼稚園の園児たちはどんな子だろう。 ○　附属幼稚園の子供たちもとても楽しみにしているようだ。期待にそうような交流会にしたいな。
2．M幼稚園や夏季集落での附属幼稚園との交流について話し合う。 〈M幼稚園との交流〉　前回の訪問の上に立って 〈附属幼稚園との交流〉　夏季集落の計画にそって 砂浜での交流会：・砂遊び　・浅瀬での水遊び　・記念写真 夜の部の交流会：・キャンプファイヤー（ゲームなど）　・星の観察（星座の伝説）　・雨のときの演芸会 ○　園児の思いの推しはかりや安全性を考慮した活動提案 ＊　交流のもち方の基本的な枠組み（時間や場、安全性などの配慮）は、幼小の担当者で連携を取り、事前に子供たちに示しておく。 ＊　前回行ったM幼稚園への訪問活動での体験をもとに、園児に喜んでもらえる接し方を考えさせていく。	○　どんな活動にしたらいいかな。気をつけることは、どんなことだろう。 ○　砂でお城やトンネルを作ったり、貝などをひろってあげたりしたら喜ぶだろうな。 ○　星座にまつわるお話をしてあげたら星に興味をもつのではないかな。 ○　前の触れ合いのときに、手をつないだり抱き上げたりしたらとっても喜んだから、今度もそういうスキンシップをはかりたいな。
3．自分が接する園児たちにメッセージを送る。 伝える方法：・手紙に書く　・ビデオで話しかける 伝える内容：・自己紹介　・交流への思いや期待 ……園児たちが安心して、わくわくして、交流を待ってくれるように ○　交流に対する自分の思いの見つめ ＊　ビデオ録画（２カ所）や便箋など、必要なものをコーナーに準備し、決まった子供たちから取り組ませていく。	○　まだ、文字をよく知らないから、またビデオで伝えよう。やさしそうなお姉さんだな、早く会いたいなと思ってくれたらいいな。
4．本時学習をまとめる。 ○　活動の価値づけと今後の活動への実践意欲の高揚 ＊　附属幼稚園の先生の話を紹介する。	○　かわいい園児たちとの二日間を過ごすために、計画や準備をしっかりしよう。

第４．５．６学年３組　　総合活動指導案

指導者　　後　藤　正　弘

単　　元　　世界の食事のよさを紹介しよう

指　導　観

○　本校の帰国子女学級の子供たちは、在留国であったアメリカやニュージーランドでの生活を通して、各国の食文化に直接触れる貴重な体験を持っている。そこから、日本の文化との違いに気付き始めそれぞれのよさや問題点に関心を持ってきている。しかし、海外での体験は文化の裏にある人々の考え方を十分にとらえるまでにはいたっておらず、国際理解として、相手の考えを尊重し、互いに伸びていこうとする態度の育成が必要である。このように、豊かな国際性を持つ日本人としての資質を培うために、子供自らが海外体験を学習に生かしていけるようにしていきたい。

○　本単元のねらいは、海外で得た食生活の具体的な情報をニュースにして学校の児童におくるという活動から、在留国の人々や日本人のもつ見方・考え方や行動様式のよさをとらえていくことである。具体的には、①在留国の人々の食に対する願いや考え方に関心をもち、その風土にあった食文化をよさとして理解すること、②在留国と日本の人々との共通の願いを追究しようとする態度をもつこと、③互いの食生活を比較して得た情報を分析して、自分なりの表現を工夫すること、などがあげられる。また、本単元は海外体験の異なる４・５・６年生が協力して学習するので、より広い海外の情報が集められ、多様な食文化に触れることができる。また、情報を収集、操作する立場に立つことによって、情報伝達への意欲や情報活用能力を育てることができる

○　本単元の指導にあたっては、学校の児童にアメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、アフリカの食生活と人々の考え方を表現方法を工夫して伝える活動を中核にすえる。そのために、導入では、海外のアナウンサーが各国の食事を紹介するビデオをみせ、紹介活動への意欲を喚起する。展開では、海外で生活して得た食生活にかかわる具体物（写真や実物など）を収集、分析し直して、その国の風土や習慣を調べながらそのよさを取り出す。次に、なぜそれがよさになるのか、同じ日本の食生活との比較を通して確かなものにさせる。また、子供から出された食文化についてのよさを表していくことができるように、表現メニューを提示して、自分の関心に応じた表現方法が選択できるようにしておく。まとめでは、自分なりの表現方法を使って発表会を開き達成できた喜びを味わえるようにする。

目　　標

○　日本と在留国の生活や人々の考え方を食生活を中心に表し伝えていく活動を通して、日本や在留国の風土にあった食文化のよさをとらえ、それらの人々の生き方に共感できる。

計　　画（約５時間）

段階	つ　か　む（１時間）	さ　ぐ　る（３時間）	まとめる（１時間）
活動と内容	１．海外で活躍するアナウンサーの様子を調べ、追究の意欲をもつ。　① ○　食に関するニュースビデオの視聴 ○　取材活動の見通し	２．在留国の食文化や考え方を調べ、表現物に表す。　③ (1)　在留国と日本の朝食を比較する。 ○　食体験と交流（本時２／３） (2)　自分なりの表現物をつくる。	３．表現物を発表する。① ○　ＴＰ、ビデオ、写真、英会話などの表現方法の表出 ○　保護者、児童の評価
手だて	○　海外のアナウンサーのビデオの視聴 ○　取材活動の体験	○　比較カードによる生活文化にある見方・考え方の取出し ○　表現メニューの提示	○　自由に表現できる空間をもった場づくり ○　視聴者の反応を聞く場

本時の目標

○　日本と在留国の食文化のよさを具体物や保護者の考えを情報に調べ、比較する活動を通して、そこに生きる人々の食に関する考え方を共感的にとらえることができる。

準　　備　日本と在留国の朝食　在留国の風土や特産物の掲示資料

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．本時学習のめあてを話し合う。 ○　日本と海外の食事のよさを体験したり交流したりして比べ、よさとして発表する内容を決めること。 ＊　海外生活体験者を紹介したり、もちよった食事について提示したりして活動の意欲を高める。 めあて 日本と海外の食事を比べ、その国のよさを考えよう	○　早く調べてみたいな。ぼくは、アフリカの朝食を食べたり、聞いたりしてアフリカの食事のいいところを考えてみたい。
2．日本と在留国の食事について調べ、食事の形態や取り方などの習慣を人々の考え方から比べ、よさを取り出す。 情報収集と交流の場 日本の朝食 米がよく取れ、発酵食品が多い ご飯、味噌汁、漬物 パン、コーヒー ・栄養を考えて 在留国の朝食 アメリカ…小麦が取れ、豊富な食料 シリアル、コーヒー ・みんなで楽しく簡単に オースリラリア パン、ミルク ・ゆっくりと野菜を多くとって アフリカ…暑く、食料が不足 とうもろこし、パン、クスクス ・家族が輪になって仲良く よさの気付き ○　試食して ・味や栄養の違い ・特産の利用 ○　聞き取って ・家族への思い ・食物を大切にすること ○　よさのとらえ（共通点の取り出し） ・家族のことを考えたその国ならではの食事 ・その国にとれるものを朝食にする知恵 ○　日本との比較の視点 ・食事の形態、取り方と特産物や風土から ・その裏にある人々の考え方から	○　アメリカの食事の仕方について発表します。パン食が多いけど食べるよりも、みんなで楽しく会話をしているところをビデオでみてください。これが、アメリカらしいところです。食事中でも相手と仲良くなれるところがいいと思います。 ○　それは、アフリカ(マリ)でも言えます。食事の台とかはないけど、この写真にあるように家族みんなが輪になって食べています。みなさんも食べてみてください。アフリカはあまり食料がないけれどあるものを工夫して朝食に出しています。 ○　～さんの話にあったように、つくってくれたものにみんな感謝して食べています。日本でも「いただきます」というようにどの国でも食事のあいさつをして感謝しています。 ○　それがいいところだと思います。調べてみると、その国に一番よくとれるものを朝食に使っているし、みんな健康によい食事だからです。どの人もいろいろと工夫しています。
＊　実際の朝食を味わったり、海外体験のある保護者の考えを聞き取ったりする場を設定する。 3．本時学習の感想について話し合う。 ○　在留国や日本のよさについて表したいこと。	

第３・４学年さくら組　体育科学習指導案　指導者　松本良一

題　　材　ぼうけんワールドであそぼう（おいかけボール遊び）

指　導　観

○　さくら組の子供たちは、精神年齢３歳から５歳程度の３年生２名、４年生５名で構成されている。追いかける・逃げるなどの簡単なきまりは、１対１の関係であれば、ある程度理解できる。ボール遊びに対する興味・関心は高いが、目標に向かってボールを投げる・けるなどのボール操作の技能は不十分である。日常の遊びの中で時々、友達とボールのやりとりをする姿が見られることから、簡単なきまりを守って、友達と一緒に遊ぶことができつつある段階にあると考える。

○　本題材のねらいは、簡単なきまりを守って友達と楽しく追いかけっこをする中で、多様な走る・投げる・跳ぶ・渡るなどの動きを経験することである。具体的には、①使うボールや一緒に遊ぶ友達、役割などの運動対象を自己選択して楽しく運動する、②ボール遊びに対する関心・意欲を高め、運動に親しむ態度を育てる、③友達と楽しく運動できるような簡単なきまりを理解する、④走る・投げる・跳ぶ・渡る動きを繰り返し経験する中で動きをひろげ高める、ことである。このことは、日常の運動生活を豊かにするとともに、生涯に渡って運動に親しむ態度の基礎を培う上で意義深い。

○　本題材の支援は、①運動を楽しむことができるようにコースや一緒に遊ぶ友達、攻守の役割などの運動対象を自己選択できる活動を設定する、②子供の運動しようという意欲が連続・発展するような変化のあるストーリーと運動の場を設定する、③個の運動の仕方に応じることのできる多様なコースを設定する、④友達とのかかわりから運動の楽しさが味わえるような攻守の役割があり、１回ごとに攻守が交代する簡単なきまりを設定する、⑤学習したことと日常の運動生活をつなぐように、人数を変えるなどの条件を設定したり、日常の運動環境を整備したりする、である。

目　　標

１．自分の好きなぼうけんを選んで、友達と一緒に楽しくぼうけんワールドで遊ぶことができる。

２．追いかける・逃げるなどの簡単なきまりを守って、走る・投げる・跳ぶ・渡るなどの動きをひろげることができる。

計　　画（約５時間）

<table>
<tr><th>段階</th><th>であう（１時間）</th><th colspan="3">ひ　ろ　げ　る（３時間）</th><th>いかす（１時間）</th></tr>
<tr><td>ストーリー</td><td>ぼうけんワールドのお姫様から助けを求める手紙が来ました。</td><td>怪獣のボールに当たらないように走って逃げます。</td><td>怪獣のボールに当たらないように跳んで逃げます。</td><td>怪獣のボールに当たらないように橋を渡って逃げます。</td><td>３つのぼうけんワールドがつながったぼうけんをします。</td></tr>
<tr><td>活動と内容</td><td>１．ぼうけんワールドにであう。
○　ぼうけんの目的意識をもつこと
○　基本の動きを体験すること
○　役割を意識すること</td><td colspan="3">２．楽しく３つのぼうけんワールドで遊ぶ。
(1)　走る怪獣のワールドぼうけんをする。
○　走る・投げる動きをつくりひろげること
(2)　跳ぶ怪獣のワールドでぼうけんをする。(本時)
○　走る・跳ぶ・投げる動きをつくりひろげること
(3)　橋の怪獣のワールドでぼうけんをする。
○　走る・渡る・投げる動きをつくりひろげること
○　攻守の役割の意識と理解・理解の深まり</td><td>３．他学級の友達をぼうけんワールドに招待して一緒に遊ぶ。
○　学習への達成感・成就感の感得</td></tr>
<tr><td>支援</td><td>○　ドラマ的ビデオの提示
○　遊び方のモデル演示
○　役割を意識させるお面</td><td colspan="3">○　各時間のストーリーのドラマ的ビデオの提示
○　活動を振り返るぼうけんノート
○　柔らかいボール、ブロックの橋などの用具・道具
○　ポストバーで直線や曲線、ジグザグのコース設定
○　個に応じた声かけ、動作援助、モデル演示
○　自己選択を促す声かけ、動作援助、モデル演示</td><td>○　合同体育の時間の設定
○　遊び方や動きの発表
○　日常の運動環境の整備</td></tr>
</table>

本時の目標（※Gはグループを表す。）

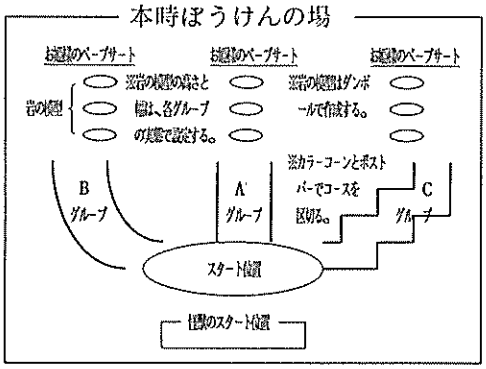
○　追う時・逃げる時のきまりを守りながら、走る・跳ぶ・投げる動きをひろげることができる。

AG：役割を意識して遊ぶ中で、直線的に力一杯走る・またぐ、目標を意識してボールを投げる。BG：役割を選んで遊ぶ中で、曲線をスムーズに走る・またぎこす、目標をねらってボールを投げる。

CG：役割を選んで遊ぶ中で、素早く方向を変えて走る・連続してまたぎこす、目標をねらって上からボールを投げる。

準　　備　お面、ボール、ブロック、ポストバー、ストーリーのビデオ、ペープサート、など

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．本時めあてについて話し合う。 (1) 前時学習のビデオを視聴する。 ○ 前時学習の想起 (2) 本時ストーリーをビデオで視聴し、がんばることを話し合う。 ビデオの内容 岩がごつごつの場所で後ろから怪獣が追いかけてくる。怪獣のボールに当たらないように岩を跳んでお姫様を助けに行く。 めあて いわをぴょんぴょんとんでおひめさまをたすけにいこう。 ○ 攻守の役割と動きの把握 2．楽しく跳ぶ怪獣のぼうけんワールドで遊ぶ (1) 追う役・逃げる役をして遊び方を知る。 ○ 走る・跳ぶ・投げる動きをつくる AG：・直線的に走る、目標物をまたぐ・逃げる人を意識してボールを投げる BG：・曲線を走る、目標物をまたきこす・逃げる人をねらってボールを投げる CG：・方向を変えて走る、助走をつけてまたぎこす・逃げる人をねらって上からボールを投げる (2) 変化した場で、役割やコースを自由に選んで遊ぶ。 ○ 走る・投げる動きをひろげること AG：・直線的に力一杯走り、連続してまたぐ・動く人を意識してボールを投げる BG：・曲線をスムーズに走り連続してまたぎこす・動く人をねらってボールを投げる CG：・変化をつけて走り連続して交互足でまたぎこす・動く人をねらって上からボールを投げる ※　1回ごとに攻守の役割を交代させる。 3．本時学習のまとめをする。 (1)　お姫様の人数や動きを発表する。 ○ 活動への達成感・成就感を味わうこと (2) 次時予告ビデオを視聴する。	1．運動意欲を引き出すための支援 ○ 前時学習のビデオの提示 ○ 本時ストーリーのドラマ的ビデオの提示 本時ぼうけんの場  ○ 役割を意識させるお面 ○ 代表児と教師によるモデル演示 2．動きをひろげるための支援 ○ 動きをつくる支援 AG：手を引いて逃げる動作援助、ボールを投げる相手を示す声かけ BG：ボールをよける・投げる動きのモデル演示、ねらう相手を示す声かけ CG：ボールをよける・投げる動きのモデル演示、タイミングを示す声かけ ○ 動きをひろげる支援 AG：役割の選択を促す声かけ、コースの選択を促す声かけ BG：コースの選択を促す声かけ、曲線の走り方のモデル演示 CG：素早い走り方のモデル演示、上からボールを投げる動きのモデル演示 ○ ボールを当てた人、助けたお姫様の人数を記録するぼうけんノート 3．達成感・成就感を味わわせる支援 ○ ぼうけんノートによる活動の振り返り ○ 動きへの賞賛・励まし

第5学年　梅組　　国語科学習指導案

指導者　　落　合　純　哉

題　　材　　あてっこあそびで　わいわいあそぼう

指　導　観

○　本学級の子供たちは、精神年齢2歳から4歳程度の子供たちで構成されている。これまでに体感的な遊びの場での体験を話して絵本に仕上げたり、げきあそびを通して表現をふくらませたりしていくことなどを通して、生活に身近な事柄について簡単な語句や文で話すことについて慣れてきている。そのため、生活の上で必要なことや身の回りの出来事について、自分からたくさん教師や友達に話しかけてくる姿がみられる。こうしたことから、語彙力・文字力・文法力などの話すための基礎力や、場面に応じて話すなどの表現力が高まりつつあり、ことばを生活の中で生かしていこうとする素地ができつつあるものと考えられる。

○　本題材のねらいは、友達と話しことばでのやりとりをしながら楽しく遊ぶことを通して、場面に応じて話す表現力を身につけさせるものである。具体的な学習内容は、①文字と音声、意味を結び付けたり、文型を意識したりして話すこと、②大事なことを落とさずに話すこと、③場面に応じて話すこと、である。このことにより、①相手と伝え合おうとする意欲的な態度、②文字力・語彙力・文法力などの話すための基礎力、③状況に応じて話す表現力などが育ち、言語活動の喜びを味わわせることができる。このことは、伝わる喜びを味わわせ、日常生活の中で積極的にことばにかかわろうとする態度を引き出し、言語活動を活性化していく上で意義深い。

○　本題材の支援は、①遊びの場を、個の話すための基礎力に応じた内容をもつ楽しい遊びで構成し、出会わせること、②場面に応じた表現力を身につけることのできるように、繰り返し言語活動のできる場を設定すること、③身につけた場面に応じた表現力を生かせるように、好きな遊びを選択できる場を設定し、個の話すための基礎力に応じながら話す内容の整理、話文の構成のさせ方などの支援を工夫すること、④身につけた表現力を実際の生活場面で生かせるように、他の学級の友達に好きな遊びを紹介したり一緒に遊んだりできる場を設定すること、である。

目　　標

1．好きな遊びの遊び方について、繰り返し友達と話しことばでやりとりをすることができる。

2．伝えたいことを場面に応じて友達に話すことができる。

計　　画（約7時間）

<table>
<tr><th>段階</th><th>であう（2時間）</th><th colspan="2">かかわる（4時間）</th><th>あらわす（1時間）</th></tr>
<tr><td>活動と内容</td><td>1．様々な遊びにであい、あてっこあそびについて知る。

○　目的意識の明確化
○　遊び方の理解</td><td colspan="2">2．友達と問題を出し合い、遊び方についてやりとりをしながら遊ぶ。

(1)　それぞれの遊びで繰り返し遊び、自分の遊び方を友達に話す。　②

○　話す基礎力
○　話し方の知識・技能

(2)　好きなあそびを選んで遊び、自分の遊び方を友達に話す。
②（本時1／2）
○　場面に応じて話す力</td><td>3．あてっこあそびを他の学級の友達に紹介し、遊び方をしながら一緒に遊ぶ。

○　達成感・成就感</td></tr>
<tr><td>支援</td><td>○　「あてっこあそび」の場の提示</td><td colspan="2">○　個へのことばかけ、遊び方ノート
Aグループ：音声模倣による1語文
Bグループ：援助による2語文
Cグループ：ことばを付加しながらの表現</td><td>○　友達に紹介し、一緒に遊ぶ場</td></tr>
</table>

本時学習の目標

○　好きな遊びや遊び方を友達に話したり、友達から遊び方を聞いて遊んだりすることができる。

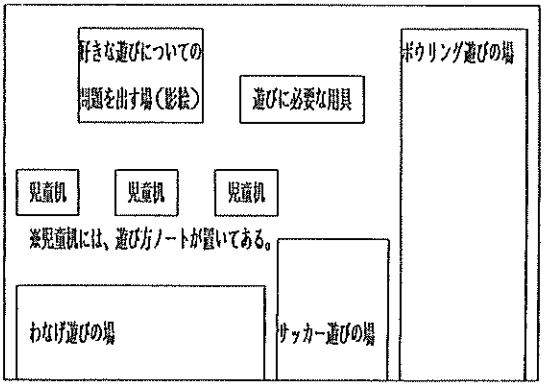
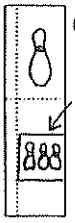
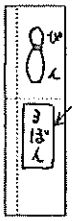
Aグループ:ボールを投げる位置を示しながら、「ここ。」などと話す。

Bグループ:ボールを投げる動作をしながら、「ここからなげるよ。」と友達に話す。

Cグループ:ボールを勢いよく投げる動作をしながら、「ここからびゅんところがすよ。」と友達に話す。

準　　備　　遊具、遊び方ノート、遊び方お知らせ板

学習指導の過程

活　動　と　内　容	個の活動を促す支援
1．あてっこあそびについて話し合う。 (1) 本時の活動について知る。 ○　目的意識の明確化 めあて じぶんのすきなあそびかたを　ともだちにはなしたり、ともだちからあそびかたをきいたりしてあそぼう。 (2) あてっこあそびの手順と方法を知る。 ①問題を出す方と当てる方に分かれる。②影絵の問題を見て、何の遊びかを当てる。③問題を出す方は、遊び方を話して教える。 2．あてっこあそびをする。 Aグループ　　Bグループ　　Cグループ (1) 好きな遊びについての問題を出し合う。 ○　表現するものの選択 遊びの名称について、動作を示して尋ねる。「なにかな。」(音声模倣で) 遊びの名称について、二語文で尋ねる。「これは、なんでしょう。」 遊びの名称、用具、について二語文で尋ねる。「これは、なんでしょう。」 (2) 友達に遊び方を話したり、友達から遊び方を聞いたりして遊ぶ。 ○　身につけた表現力の活用 遊び方を友達に動作で示したり音声模倣で話したりする。(指し示しながら)「ここ。」 遊び方を動作と結びつけながら二語文程度で話す。「ここからなげるよ。」 遊び方を一連の動作と結びつけながら三語文程度で話す。「ここからびゅんところがすよ。」 (3) 遊び方ノートを付加・修正する。 ※ (1) ～ (3) を繰り返す。 3．好きな遊び方を友達に紹介する。 ○　相手に伝わることの達成感・成就感	1．意欲を引き出す支援 ○　前時につくった遊び方ノートの提示 ○　「あてっこあそび」の場の提示  2．場面に応じた表現をつくる支援 ○　話す内容を整理させる遊び方お知らせ板  ※ボールやピンの絵カードを位置付けさせる。 ○　個の話す基礎力に応じた遊び方ノート Aグループ:絵カードによる話す内容の選択・貼付  Cグループ:語句カードによる話す内容の選択・文構成  Bグループ:語句カードによる話す内容の選択・貼付  ○　動きや場面と結びつける個に応じたことばかけ 3．達成感・成就感を味わわせる支援 ○　友達に好きな遊びを紹介する場

—— メ モ ——

第二日目　午後の部

公開授業指導案

第１学年２組　　表現科学習指導案　　指導者　　樺島　　穣(T1)・津本　修一(T2)

題　　材　　えのぐぬのあてあそびからでてきたおはなしやおとたち

指　導　観

○　本学級の子供たちは、材料や音などを中心に言葉や動きなどを取り入れて楽しく表現遊びをすることに慣れ親しみ始めている。また、表現遊びの過程で、想像力を働かせてお話をつくって教師や友達などに伝えようとしたり、表したい様子を声や打楽器などで音をつくったしりながら工夫する子供も見受けられる。自分の表現活動に必要な材料なども家庭の協力を得ながら準備をしようとする意欲をもっている。さらに、自分の表現遊びに楽しく浸り切りながらも、友達の表現遊びを見たり聞いたりすることに対して楽しさを感じ始めている。

○　本題材のねらいは、子供が絵の具布あて遊びから偶然できた形や色をもとに、想像してお話や音をつくりながら楽しく表現遊びができるようにすることである。具体的には、①絵の具、言葉、声、音などの表現素材をもとにした表現遊びに対する関心・意欲・態度、②形や色から思いを広げてお話や音をつくる想像力や表現の工夫、③表現遊びをより楽しくするための計画準備力、④自分の表現遊びに満足しながら友達のよさも感じ取る感受力などを総合的に育てることができる。このことは、豊かな感性と創造性の基礎を培い、表現する喜びを一層味わわせるうえで意義深い。

○　本題材の支援は、子供の多様な表現活動を保障するため２人の教師による協力、分担型の支援を行う。具体的には、①絵の具布あて遊びのための溶き絵の具や白ダンボール紙の準備、十分に活動ができる場所の確保(T1)、②絵の具布あて遊びで偶然にできた形や色に見立て・意味付けを行わせるためのカラーペンによる線描やお話づくりの促し(T1)、③想像したお話の様子や気持ちをより楽しく声や音でつくるための助言や打楽器の提供(T2)、④絵の具布あて遊びから出てきたお話や音づくりの楽しさに友達同士が気づいていくための賞賛(T1・2)、などである。

目　　標

１．絵の具布あて遊びからできた形や色をもとに、想像してお話や音をつくりながら楽しく表現遊びができる。

２．友達の絵の具布あて遊びから出てきたお話や音づくりの楽しさを感じ取ることができる。

計　　画（約６時間）

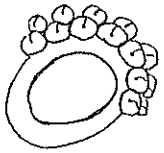
段階	感じる（２時間）	表　　す（３時間）	味わう（１時間）
活動と内容	１．絵の具布を白いダンボールにあてて遊ぶ。　②	２．絵の具布あて遊びでできた形や色をもとに想像してお話や音をつくって表現する。	３．友達の表現遊びと交流する。　①
	○　絵の具布を紙にあてて遊ぶ楽しさ	(1)　友達相互で見立て・意味付け遊びをする。　①	○　表現遊びの楽しさの感じ取り
	○　形や色の面白さへの気づき	○　形や色から見立てる想像力	○　形や色の面白さへの気づき
		(2)　線描で意味付けをしてお話や音をつくる。　②	○　お話や音づくりへの共感
		○　カラーペンなどによる意味付け（本時２／２）	
		○　お話の様子を声や楽器で表す楽しさ	
		○　想像的なお話の連続的な広がりと深まり	
手だて	○　絵の具布や白いダンボールの提供	○　見立て・意味付けのための交流の場の設定	○　表現遊びの賞賛
	○　活動場所の確保	○　カラーペンなどの造形材料の提供	○　友達との交流の場の設定
		○　声や楽器で音をつくるための助言	

本時の目標

○　絵の具布あて遊びからできた形や色をもとに思い付いたことを線描で表しながらお話や音をつくって表す楽しさを味わうことができる。

準　　備　　絵の具布あて遊びをした白ダンボール、カラーペン、打楽器類、スモック

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．前時までの表現遊びを振り返り、本時の表現遊びのめあてについて話し合う。 (1) 友達の途中の表現遊びの絵を見たり、お話や音づくりを聞いたりして、楽しさや工夫点について話し合う。 ○　絵の具布あて遊びの形や色を生かした線描きの工夫 ○　偶然できた形や色から思い付いたお話の面白さ ○　お話を楽しく表すための声や打楽器による音づくりの工夫 (2) 本時のめあてについて話し合う。	○　絵の具布あて遊びの形や色から線描きしてお話をつくって楽しかったな。また続けて遊びたいな。 ○　友達はペンで周りを描いたり、声や音で様子をくわしくしながらお話をつくっているから楽しいな。
めあて おもいついたことをぺんでかいたり、おはなしやおとをつくったりしてもっとたのしくしよう。	
※　前時までの表現遊びを振り返らせ、もっと楽しく表現するための工夫点をめあてとして考えさせる。（T1・T2協力型支援） 2．絵の具の形や色から思い付いたことを線描きで付け加え、その様子をお話や音でつくって表す。 ○　お話をより楽しくするためカラーペンで付け加えること ・「お日様のまわりに鳥や花たちもかき足してあげたい」 ・「動物の赤ちゃんや友達も楽しく遊んでいるようにしよう」 ・「お魚が海の中を泳いでいるようにあぶくやワカメをかくよ」 ※　教師がカラーペンを提供し、子供の想像的なお話がより楽しくなるように共感や助言をする。（T1分担支援） ○　お話をより楽しくするため声や打楽器で音づくりをすること ・「鳥や花がそよ風に吹かれている音を楽器でつくりたいな」 ・「動物の赤ちゃんの鳴き声を自分の声で工夫してみるよ」 ・「雨が降る音をアルミ缶に石を入れて振って出したいな」 ※　お話の様子がもっと楽しくなるように、教師が声の出し方や打楽器類の扱い方についての助言や賞賛を行う。（T2分担支援） 3．本時の表現遊びを振り返り、次時の表現遊びについて知る。 (1) 本時の表現遊びを振り返って話し合う。（T1・T2協力型支援） ○　自分の表現遊びがより楽しく工夫できたこと ○　友達の想像的なお話が続いていくことへの気づき (2) 次時は、友達の表現遊びを見たり聞いたりすることを知る。 ○　友達の表現遊びの面白さや楽しさへの共感	○　友達のよいところを取り入れてもっと楽しくしよう。 ○　カラーペンで付け加えてお話をもっと楽しくするよ。  ○　声や打楽器で音をつくりお話をもっと楽しくするよ。 ・「シャラシャラ」・「ザーザー」   ○　カラーペンで付け加えたり、音をつくったりしてお話が楽しくなってよかった。 友達は色や形からどんなお話や音をつくったのかな。

第２学年２組　　生活科学習指導案

指導者　　藤　木　寿美枝

単　　元　　あらつのおかの小鳥となかよくなろう

指　導　観

○　本学級の子供たちは、昨年度四季を通して西公園で遊んだ体験をもっている。子供たちが遊び場としていた西公園は，全国でも数少ない野鳥が生息できる公園であり、子供たちが遊んでいるときにも野鳥たちの鳴き声がよく聞こえていた。また、野鳥たちの姿も数多く見られ、「珍しい鳥がいるよ」と子供たちが話し合う姿もよくみられた。そこで、西公園に生息する野鳥を見たり野鳥が喜びそうなものを作ったりする活動を通して、鳥に親しむ楽しさや、生命の大切さを感じさせたい。さらに、野鳥を取り巻く自然や野鳥を大切にしている人たちの気持ちなどにも気付かせたい。

○　本単元は、鳥と親しむ活動を通して、自然に触れることの楽しさや鳥が自分たちと同じように命をもち成長していることに気付き、それらを大切にすることができるようになることをねらいとしている。具体的には、①鳥の様子を見たり、鳥のことを調べたりすることによって、鳥や鳥を取り巻く自然に関心をもつことができる、②野鳥の喜びそうなものを作ることによって、鳥の生活の様子や鳥による違いなどに気付くことができる、③日本野鳥の会の方々の話を聞くことによって、野鳥を愛し守っている人々の気持ちを思いやることができる、などである。

○　本単元の指導に当たっては、であう段階では、野鳥の会の方と共に西公園を探索しながら、鳥の種類や鳥のいる所などについての話を伺う。この鳥探検の後、鳥となかよくなるにはどんなことができそうかを調べたり考えたりする。ふれあう段階では、野鳥が喜びそうなバードリースやバードフィーダーなどを作る。その後、野鳥の会の方をお呼びして自分たちが考えたことを話し、自分たちが考えたものは本当に鳥が喜んでくれるようなものになっているかをアドバイスしてもらう。ふかめる段階では、鳥の喜ぶものを作る過程で気付いたことや、感じたことを交流し、パンフレットなどにまとめる。以上のような活動によって、野鳥ともっとなかよくなろうとする心情を高めていきたい。

目　　標

１．野鳥を見たり調べたりすることによって、野鳥やそれを取り巻く自然に対する関心をもつことができる。

２．野鳥を調べたり、世話をする活動を通して自分と鳥とのかかわりに気付くことができる。

計　　画（約１０時間）

段階	であう（３時間）	ふれあう（５時間）	ふかめる（２時間）
活動と内容	１．西公園で野鳥を探し、野鳥とどうしたらなかよくできるかを考える。 (1)　野鳥の会の方と一緒に鳥を探す。　② (2)　野鳥となかよくなるためにしたいことを考える。　① ○　野鳥への関心	２．野鳥が喜ぶものを作ったり、試したりする。。 (1)　野鳥の喜ぶものを作る。　② (2)　もっとなかよくなるために野鳥の会の方と相談する。（本時）① (3)　新しい方法で鳥を見たり世話をしたりする。　② ○　野鳥へのかかわりの深化	３．野鳥探検で調べたことや思ったことをクイズにしたり、フレットを作ったりする。 (1)　鳥となかよくなったことをクイズなどに表す。　① ○　野鳥の命への関心 (2)　野鳥の発表会をする。　① ○　気付いたことを表現
支援	○　野鳥探検の場の設定 ○　鳥日記の作成	○　野鳥の会の方の話 ○　図鑑等でのお世話調べ	○　バードクイズ作り ○　西公園以外の鳥調べ

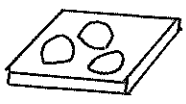
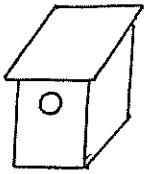
本時の目標

○　自分が作ったバードリースやバードフィーダーなどを野鳥の会の方と相談しながら、もっと野鳥が喜ぶように工夫することができる。

準　　備

子供 ── バードリース、えさ台など　　指導者 ── 野鳥の写真、図鑑、鳥の遊び場地図

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．これまでの鳥探検や自分たちが出会った鳥のことを話し合い、学習のめあてをもつ。 ○　鳥となかよくなることへの意欲。 ※　これまでの活動で作った巣箱やえさ台、鳥日記などを提示する。 めあて 鳥がもっとよろこぶようにくふうしよう。	○　西公園での鳥探検楽しかったな。 ○　鳥にえさをやったりしたけどあんまり食べてくれなかったなあ。
2．自分たちが作ってきた巣箱やえさ台を発表し、作ってきたときの疑問点などを野鳥の会の方に尋ねてみる。 (1) 自分たちが作った鳥となかよくなるものを発表する。 ○　自分の製作理由と取り付けた結果の表現 ※　自分の作ったものをもとに発表する。 ・巣箱を作ってあげたいと思ったけどなかなか入ってくれない ・えさがなくなっていた (2) 疑問に対して野鳥の会の方からのアドバイスを受け、鳥が喜ぶものを工夫する。 ○　自分たちの考えの確かめ、新しい活動への見通し ※　ペアで話し合いながら、作り直すよう勧める。 ※　アドバイスの根拠になるものを準備しておく。 例　空の巣箱 ※　実際に取り付けてみたい子供には、取り付けに行かせる。 ・えさ台を猫が来ないように高く上げる。 ・材料は鳥がとまりやすいよう自然のものにする。  バードフィーダー  バードケーキ  巣　箱  バードリース	○　巣箱はひなが大きくなったらもういらないんだって。 ○　鳥が好きな所って、もしかすると水のそばかな。 ○　鳥って、木のあるところがすきなんだって。
3．今日の活動を行って気付いたことや感想を話し合う。 ○　新しい気付きの発見 ※　野鳥のことを考えて、活動に熱中していた子供を取り上げ賞賛する。	○　今日教えてもらったことを早く鳥さんにしてあげたいな。

第３学年１組　　算数科学習指導案

指導者　　小　森　　晃

題　　材　　しらべたことで生活を見直そう

指　導　観

○　本学級の子供たちは、玉入や石けりなどのゲームの得点を○や×の記号で表したり、ある期間の出欠状況を調べたりしながら、その結果を分類整理して表やグラフの形に表す素地となる体験をしてきている。さらに、身の回りの事物の大小、相等関係を測定した数値で比較する体験もしてきている。これらの体験に加えて、本題材では、図書室を利用した実際の体験をもとに、自分たちの読書生活について見直していく。そして、読んでいる本を数量化して子供どうしで比較したり、本の種類ごとに比較して読んでいる本の傾向性を明らかにしていく。さらに明らかになったことから自分たちの読書生活を考えるといった統計的な活動体験を豊かにしていきたい。

○　本題材のねらいは、調べたい事柄の資料を収集、分類整理し特徴や傾向の読みとりをする統計的な活動体験を豊かにすることである。具体的には①どんな本をどれくらい読んでいるかを明らかにするために読書の資料を収集すること、②集めた読書の資料を落ちや重なりなく各人ごとや本の種類ごとに分類整理すること、③たくさん読んでいる人やたくさん読まれている種類がわかりやすい１次元の表や２次元の表、棒グラフに表現すること、④表や棒グラフから読書の傾向を読みとり自分たちの読書生活について判断をすることである。この学習を通して、漠然ととらえていたものを、数量化した資料から正確にとらえて根拠を持って判断していく数学的な態度を育てることができる。

○　本題材の指導にあたっては、子供たちが生活を見直してよりよくしていくために、テレビの視聴や食べ物の好き嫌い、遊びや好きな本などの情報を集めて分類整理させ、それぞれの項目ごとに大小、相等を１次元や２次元の表や棒グラフに表し、そこから特徴や傾向を読みとって自分たちの生活をよりよくする判断をさせていきたい。そのために、集める段階では自分たちの日頃の読書量や持ち物、遊びの種類などの観点を設けて情報を収集する活動の場を仕組む。まとめる段階では集めた情報を落ちや重なりがないように分類整理して、読みとりやすく１次元の表、２次元の表、棒グラフに表現し読みとる活動を仕組んで資料から根拠を持って判断していくようにする。最後に生かす段階では情報収集の範囲を広げて判断の根拠をより確かなものにする。

目　　標

１．目的を持って資料を収集、分類整理、判断する統計的な活動体験を豊かにすることができる。

２．集めた情報の大小、相等を読みとりやすく棒グラフに表現することができる。

３．自分たちの生活の様子調べ新聞づくりを楽しく続けることができる。

計　　画（約８時間）

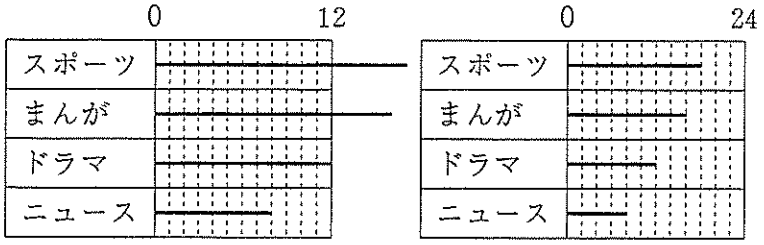
段階	情報を集める体験（１時間・課外）	情報を分類整理、表現する体験（５時間）	多くの情報の処理に生かす体験（２時間）
活動と内容	１．自分たちの生活を見直す観点を決めて、その観点からアンケートをつくって情報を収集する。　① ○　目的に応じて観点を決めて情報を収集する体験	２．生活に関わる事柄について収集してきた情報を分類整理して表や棒グラフに表す。 (1)　生活情報を分類整理して、表にまとめる。　② (2)　棒グラフに表す。（本時５／５）③	３．全部の学年から情報を収集、処理して傾向性の違いを明らかにしたり判断をより確かにする。② ○　情報の収集、整理、判断を生かす体験
手だて	○　自分の生活を見直す観点を決める話し合いと情報収集の場の設定	○　既習の表や絵グラフをもとに読みとりやすく整理したり表現したりする場の設定	○　調査範囲を広げて、自分たちで調査、判断したものを発表する場の設定

本時の目標

○　４０人分の情報を処理した経験をもとに棒グラフの最小目盛りの数量を自分で決めて、たくさんの人数の情報を棒グラフに分かりやすく表すことができる。

準　　備　今までに調べてきた資料、学習ノート、グラフ用紙

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
１．好きなテレビ番組や食べ物、遊びや本などを調べて表や棒グラフに分類整理して特徴や傾向を調べてきた経験をもとに、調査の対象をさらに広げて新聞づくりをするめあてをつかむ。	○　みんなでいろいろなことを調べて、新聞づくりをしてきたな。
(1) 好きなテレビ番組や食べ物、遊びや本の中から新聞に載せるものを取り上げ、３年生全体での特徴や傾向を予想する。 〔例〕好きなテレビ番組の予想 予想１…①スポーツ、②まんが、③ドラマ、④ニュース 予想２…①まんが、②スポーツ、③ドラマ、④ニュース	○　今日は３年生全体の表から棒グラフをつくるんだ。 ○　学校全体の棒グラフもつくって新聞に載せるようにしよう。
○　新聞づくりを進めるために、３年１組だけでなく調査する対象をさらに広げて棒グラフをつくる意欲を高めること	○　新聞に載せる用紙の大きさは今までつくってきたものと同じだ。
(2) 前時までに新聞づくりのために表に整理した情報から３年生全体や学校全体の子供たちを対象に好きなテレビ番組などを棒グラフに表現するめあてをつかむ。 めあて たくさんのじょうほうをぼうグラフにあらわして、しんぶんにのせよう。	
２．80人分の情報を表にまとめたものをもとに棒グラフに表す。	○　80人分は今までのグラフ用紙じゃあ入りきれないな。
(1) 80人分の情報を表す棒グラフを作成する。 ○　全体の数量に応じるグラフ用紙を選択、作成すること 〔例〕好きなテレビ番組調べ	○　80人分を入れるためにはグラフ用紙をどうすればいいだろう。
	○　自分で80人分入るように区切ってもいいのか。 ○　40人分のグラフ用紙でも間を区切れば80人分のグラフ用紙と同じになるぞ。
※　40に区切ったグラフ用紙や自分で自由に区切れるグラフ用紙を与えて選択させる。	
(2) 40区切りの用紙の１目盛りを１と数えていては数量が入らない例を取り上げ、多くの数量を表す方法について話し合う。	○　80に区切らなくても、目盛りの数を２にすればいいじゃないか。
○　１目盛り当たりの数の違いの読みとり	○　学校全体を表してみよう。
※　グラフ用紙の高さは２種類とも同じ高さにしておく。	
３．40区切りのグラフ用紙の１目盛りの数を自由に変えて、学校全体の情報を棒グラフに表し、目盛りの数を変えるよさを味わう。	
○　１目盛りの数の大きさを変えた棒グラフの作成	

第３学年２組　　生活環境科学習指導案

指導者　　今　林　康　治

単　　元　　あらつの虫たち

指　導　観

○　本学級の子供たちは、生活科の学習で学校にいる虫をさがしたり、日常生活においても家で虫を飼ったりした経験を持ち、それらの観察を通して虫の大まかな形態の特徴に気付いている。また、虫も自分たちと同じように尊い命を持っているという見方は育ってきている。

そこで子供たちには、学校内からあらつ地区に活動の範囲を広げ、そこに住む虫たちの生態を調べさせていきたい。そうすることによって、子供たちは、虫たちが環境とかかわり合って強く生きていることをとらえ、生命のたくましさを感じ取れるようになると考える。

○　本単元では、自分たちがいつも生活しているあらつ地区にいる虫たちが自分たち人間と同じように、それぞれの生育に適した環境の中で懸命に生きているといった見方や考え方を育てることをねらいとしている。具体的には、①あらつ地区に住む虫が、環境とかかわりながら独自の生き方をしているということ、②自分たち人間と同じように尊い命を持っているということ、である。

この学習を通して、子供たちは自ら身近な生き物にかかわり、感性豊かに自然を見つめることができるようになるとともに、生き物と心を通い合わせようとする態度を育てることができる。

○　本単元の指導にあたっては、子供たちが直接環境に働きかけていく活動を通して、虫の食べ物や住む環境の独自性をとらえ、それらを保護していく実践的な態度を育てるようにしていきたい。

そこで、であう段階では、西公園で虫さがしをさせ、どのような場所にどんな虫が住んでいるのかを観察させ、その違いをとらえる。さぐる段階では、校内に住んでいる虫たちの環境と西公園とを比較させる。さらに、関心を持った虫の住む環境や食べ物に独自性があるかを他の区域で継続的に観察・実験する。いかす段階では、共通・関連する虫たちで仲間わけをさせ、校内にも虫たちが住めるような環境をつくり、自分なりに計画して継続観察を行っていく。

目　　標

○　自分が興味を持った身近な虫の観察・実験を通して住む環境の違いをとらえ、それぞれの虫が環境とかかわりあって生きていることに気付き、大切にしていこうとすることができる。

計　　画（約１４時間）

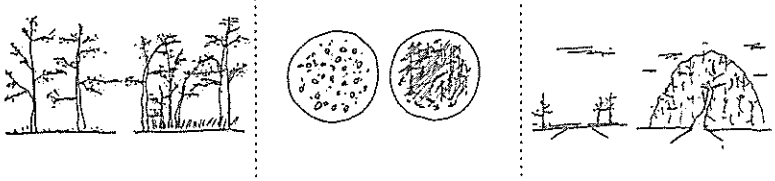
段階	であう段階（４時間 ＋課外）	さぐる段階（６時間＋課外）	いかす段階（４時間＋課外）
活動と内容	１．西公園にいって、自分の知っている虫や他の虫の様子を観察する。 (1)　西公園の虫を捜す。② ○　西公園の虫の種類 (2)　虫の環境を調べる。② ○　虫が好む環境	２．あらつ地区に住む虫の種類や数の違いから、その環境を調べる。 (1)　校内の虫を捜し、その環境を調べて西公園と比べる。　② ○　住む環境の比較（本時2／2） (2)　他の区域の環境を調べる。④ ○　虫の生活の独自性	３．あらつ地区に住む虫たちが、学校にもっと住めるように環境を整えて、継続的に観察する。　④ ○　虫たちが住んでいる環境づくり
手だて	○　生活場面で遭遇している虫に対する自分の解釈を確かめるための観察 ○　西公園に住む虫たちの環境物の観察	○　採集してきた虫たちの環境物の比較 ○　虫の種類別にグループ交流 ○　観察記録ノートの活用 ○　個の発想を尊重した観察・実験	○　共通・関連する虫たちの仲間分け ○　結果の解釈を深めるの自由研究 ○　継続観察記録

本時の目標

○　西公園の観察結果を用いて学校内の虫たちの住む環境を比較し、それぞれの虫たちが好む環境について考えることができる。

準　　備　　観察記録ノート、虫が住んでいた所の環境物、西公園に住む虫たちの資料等

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．前時活動を想起し、本時のめあてについて話し合う。 ○　学校内に住む虫が居た場所 ・虫が好んで住む場所が決まっていること。 めあて 西公園にすんでいる虫たちは、学校のどんなところにすんでいるのかしらべてみよう。 ※　前時での活動の様子を写真や床地図を使って想起させ、自分たちが調べたい場所やその方法を確認させる。 2．学校内に住む虫たちの環境を調べ、西公園に住む虫たちの環境と比べながら類似点と相違点について話し合う。 (1) 学校内にいる虫たちの住んでいる場所に行って、それらの環境を調べる。 ○　学校内に住む虫たちの環境 (2) 虫の種類でグループを作り、観察場所の環境物を使って学校内と西公園で似てるところと違うところを話し合う。 ○　学校内と西公園との環境の類似点と相違点について ・草や木の比較　・土の質の比較　・日当たりの比較  ※　観察記録ノートに書いたことと比べさせる。 ※　グループごとに西公園の写真や環境物を準備する。 (3) 話し合った結果を全体の場で出し合い、気付いたことや疑問に思ったことを話し合う。 ○　他の区域でも同じ環境に住んでいるのかについて ※　学校内と西公園にいる虫の写真を提示する。 3．話し合いで出された疑問を練り上げて追究していく問題をつくり、次時の活動の見通しをもつ。 ・大濠公園に住んでいる虫たちでも調べてみたい。 ・黒門通りに住んでいる虫たちでも調べてみたい。 ・西公園の前の通りに住んでいる虫を調べてみたい。 ○　自分が関心を持った区域の観察	○　西公園に住んでいる虫たちは種類によって住んでる場所が違ってたね。 ○　腐った木や葉っぱの中に住んでたよ。 ○　西公園だけじゃなくて、学校にも同じような場所に住んでるんじゃないかな。 ○　中庭にいって調べてみようかな。 ○　葉っぱの下じゃないけど、ブロックの下にいろんな虫がすんでるよ。 ○　クローバー園には違った虫も住んでたよ。 ○　草や木がいっぱいあるからじゃないかな。 ○　ブロックの裏にもいたから、暗いところが好きなんじゃないかな。 ○　西公園の落ち葉がたまって腐ったようなところもじめじめしてたから、湿ったところが好きなんじゃないかな。 ○　腐ったきや葉っぱを食べてるのかな。 ○　葉っぱの裏だから好きかと思っていたけど石の裏にもいる。 ○　大濠公園でも西公園と同じようなところに虫がいたりするのだろうか。 ○　違う場所でももっと調べてみたいな。

第４学年１組　　国語科学習指導案

指導者　　伊　藤　啓　二

単　　元　　松井さんはどんな人「白い　ぼうし」

指　導　観

○　本学級の子供たちは、登場人物の心情や場面の様子を考えながら音読を工夫することが好きで、意欲的に活動に取り組む。また、文章から想像をふくらませることもできる。しかし、音読という活動の楽しさが先行しており、自分で何か課題をもって読み進めたり、課題を解決するために話し合ったり読み合ったりする学習までには至っていない。そこで、物語の内容に対する課題を設定し課題解決のために読んだり、話したりしながら学習活動を進める経験をさせていきたい。

○　本単元は、「松井さん」の人物像をさぐる追究課題を設定し、いくつかの作品を情報として活用するなかで、文章を根拠として読み深め、人物像を創りだすことをねらいとしている。具体的には①あまんきみこの作品と登場人物に興味をもち、読みの課題をもつこと②課題を解決するために叙述内容や言葉に着目して想像し、理解すること③自分の読み取りを出し合い、交流して深めることである。このことは、物語文を通して、自分の課題を解決する読みの能力を育てることや自分の読みと他の人の読みを比較してお互いに交流して伝え合う能力を育てる上から価値がある。

○　本単元の指導にあたっては、あまんきみこの作品に共通して出てくる「松井さん」に興味をもたせ、作品の場面・状況での松井さんの行動・言葉を読み深めることによって、人物像を創造できるようにしたい。そのために導入の段階では、あまんきみこの作品を紹介し、共通して出てくる人物が松井さんであることを知らせ、読みの興味と課題を設定する。展開の段階では、まず、「白いぼうし」で松井さんの人物像を読み取る活動を行う。次に、他の２作品から違った松井さん像や共通する松井さん像を創造していく。終末段階では、３つの作品からあきらかになった松井さん像をもとに「松井さん紹介図」をつくるなど、話合いにより決定してまとめていきたい。

目　　標

１．幾つかの作品から松井さんの人物像に関する情報を収集し、行動や言葉をもとに松井さんの人柄について創造することができる。

２．複数の物語から課題を解決したり、違った読み方をしたりする楽しさを味わうことができる。

計　　画（約１０時間）

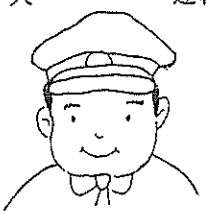
段階	導　入（１時間）	展　開（５時間）	終　末（４時間）
活動と内容	１．あまんきみこの作品に出てくる松井さんについて知り、学習課題を設定する。　① ○物語を読もうとする意欲の喚起 ○学習課題の把握 （予想される課題） ・松井さんがどんな人か調べよう。	２．課題を解決するために「白いぼうし」や他の作品を読み深める。 (1)　「白いぼうし」を読み、松井さんについて分かったことを図にあらわす。　③ ○場面や状況からの心情把握 ○文章から創造した人物把握 (2)　あまんきみこの他の２作品から松井さんの人物像をとらえ、「白いぼうし」のものと比べる。　② ○人物像に関わる情報収集	３．３つの作品から松井さん紹介図を作り上げる。 (1)　３つの作品から松井さんの人物像を話し合う。（本時2／2）② ○文章を根拠にした発表 ○交流による読み深め (2)　松井さん紹介図の活用方法を考え、きれいに製作する。　② ○簡単な紹介文での表現
手だて	○あまんきみこの作品の提示 ○松井さんへの焦点化	○課題を読み深める学習ノート ○「小さなお客さん」「山ねこおことわり」の資料教材としての活用	○松井さん紹介図 ○人物紹介の例の提示

本時の目標

○　「白いぼうし」の松井さんと他の２作品に出てくる松井さんの言葉や行動を比べて、松井さん紹介図を附加・修正し、叙述に則して人物像をふかめることができる。

準　　備　あまんきみこ「小さなお客さん」「山ねこおことわり」、人物像一覧表、学習ノート

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．前時までに全体交流で話し合ってまとめた松井さんの人物像を振り返り、本時学習のめあてを話し合う。 ○　課題に応じた読み取りの振り返りとめあての明確化 ※　前時までにみんなで話し合った松井さんの人物紹介図を振り返らせ、他の２作品で創造できる松井さんとの共通点や差異点があることを確認し、学習の見通しをもたせる。	○　松井さんは、男の子の気持ちを考える易しい人だ。 ○　男の子を驚かせたいといういたずらなところがある。 ○　他の２作品では、ちがう松井さんがわかりそうだ。
他の２つの作品からわかる松井さんの様子をもとにしようかい図を見直そう。	
2．グループで話し合い、「白いぼうし」で作った松井さんの紹介図に附加、修正する。 (1)　グループで２つの作品からわかる松井さんについて、文章やことばを根拠に意見を出し合う。 ○　読み取った人物像の根拠の取り出しと伝達 ※　人物像をあらわすことばとその根拠となることばや文章を出し合わせ、附加、修正する。 （予想される人物像の把握とその根拠）	やさしい人　運転手さん  ちょっといたずら好き

温かい心をもった松井さん	責任感の強い松井さん	やさしいけれどいたずら好きの松井さん
「松井さんは、自分まで心がほかほかしてきました。」（「小さなお客さん」より）	「おくってやろうかないやおくるべきだと松井さんは思いました。」（「山ねこ、おことわり」より）	「ぼうやたちが手伝ってくれたら、さぞ助かることだろうよ。」（「小さなお客さん」より）
○　男の子の兄弟が喜んでいるのを見て、自分まで嬉しそうにしている温かい人	○　事情を知って何とかして助けようとしている責任感の強い人	○　「白いぼうし」にでてきた松井さんと似ていて、いたずら好きな人

(2)　全体で交流して、松井さん紹介図に書き加える内容や今までのとらえ方との相違点をあきらかにする。 ○　共通点、差異点の把握と自分なりの根拠の発表 ※　同じ文章をもとに考えても、松井さんに対するとらえ方に違いがあることを出させ、読みの多様さを引き出す	○　なるほど、この文章にもやさしさが現れているのか。 ○　同じ文章だけど、ぼくのとらえ方と違うぞ、発表しよう

着目した文章	創造した人物像	違った見方をした人物像
おくってやろうかな。いやおくるべきだ…	→ 困っている人を助けるのは自分の仕事だと考える責任感	↔ 自分のことよりまず人の気持ちを大切にしているやさしい人

3．話し合った松井さんの様々な人物像をもとに、あまんきみこの本を読む人に紹介する方法を考える。 ○　紹介しようとする目的の設定と活動の意欲の喚起	○あまんきみこの本を読む人が興味をもつように、松井さんをポスターにしたらどうだろう。

第4学年2組　生活環境科学習指導案

指導者　山下浩徳

単　元　わたしたちの室見川

指導観

○ 本学級の子供たちは、かなりの子が室見川を見たことがあり、実際に室見川や近くの川で遊んだ経験もある。その中で川にはザリガニなどの生き物や大小の石などがあることに気づいている。さらに4月単元「わたしの福岡市を探検しよう」で身近な地域の自然や施設を見学し、それらの様子に関心をもってきている。そこでこれまでの川遊びの経験を生かして、室見川の様子を追究させたり、室見川と自分の関係を考えさせたりして、身近な環境に働きかけていく経験をもたせたい。

○ 本単元は、自分と室見川のよりよい関係を考え、室見川を大切にするために自分にできることはしようとする態度を育てることをねらっている。追究していく具体的な内容の例として、①室見川の生き物の種類や数は、水の汚れや水の流れの速さなどに関係があること、②室見川の下流で取水された水が、飲料水として自分たちのもとに来ていること、などがある。この学習を通して、室見川の諸事象と自分の生活を関係付けてとらえる見方や考え方、身近な環境を創造したり保護したりする実践的な態度などを育てることができる。

○ 本単元の指導にあたっては、子供それぞれの生き物や石、水などへの興味を大切にして、自分の興味に応じて追求の対象や方法を選択させ、自分と室見川とのかかわりを明らかにし、室見川とのよりよい関係を考えさせたい。であう段階では、室見川の上流、中流、下流の3カ所で遊ばせて、上中下流での水や生き物などの様子の違いに着目させ、これから調べたい問題をもたせる。さぐる段階では、室見川の生き物調査や水道局への取材などを通して、それぞれの問題に応じて調べさせたい。いかす段階では、室見川を大切にする気持ちから、空き缶拾いや節水など何か自分にできることを考えさせ、場や時間を設定して、実際に実践させたい。

目　標

1．室見川に親しみ、室見川を大切にするために、自分にできることを考え、実践することができる。

2．自分のかかわりの視点で室見川の様子を調べ、水と生き物や水道など事象相互の関係や室見川と自分との関係をとらえることができる。

計　画（約22時間）

段階	であう（9時間）	さぐる（9時間）	いかす（4時間）
活動と内容	1．室見川で遊び、遊んだことを話し合う。 (1) 室見かわの上流、中流、下流の3カ所で遊ぶ。⑦ ○ 上中下流の生き物や水の様子の違い ○ 下流での水道の取水 (2) 気づいたことを交流し問題をもつ。（本時1/2）② ○ 自分の問題の把握	2．自分たちの問題について水道や川の様子を調べる。 (1) グループでそれぞれの問題を追究する。　⑥ ○ 室見川での観察 ○ 水道局への取材 (2) 調べたことを話し合う ○ 水道水になる課程③ ○ 室見川の汚れと生物 ○ 自分と室見川の関係	3．自分と室見川とのよりよいかかわりを考え、室見川を大切にする。 (1) 室見川とのよりよい関係について考える。　① ○ 自分にできること (2) 考えたことの実践を行う。　③ ○ 自分にできることの実践
手だて	○ 室見川での川遊びの体験 ○ 床地図へ気づきの表現 ○ 気づきの交流	○ 生物指標表などの資料 ○ 観察や水道局見学の準備 ○ 調べたことの発表会	○ 活動の時間や道具の確保 ○ ゴミ拾いなどの実践活動 ○ 実践を振り返る表現

本時の目標

1．自分のかかわりの視点から、生き物や水など、室見川を調べていく問題をみいだすことができる。

2．室見川の水の汚れと生き物、水道などの事象と事象や事象と自分の関係を考えることができる。

準　　備　・室見川で遊んだビデオや写真　・室見川の地図　・室見川の各地点の水や生き物、石

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．前時の学習を想起し、本時のめあてについて話し合う。 ○　室見川で、それぞれが興味あることをして遊んだこと。 ・川の生き物、水、石などにかかわって遊んだこと。 ※　室見川で友達が珍しい生き物を見つけて喜んでいる姿などのビデオを提示し、自分や友達の気づきの紹介への意欲をもたせる。 めあて 室見川の上流、中流、下流で遊んで、気づいたことを紹介しよう	○　石や砂でダムを作ったよ。 ○　珍しい生き物を探したよ。 ○　友達は、いろんなことをしてるんだな。 ぼくがしたことも紹介したいな。
2．気づいたことを紹介し、不思議に思ったことについて話し合う。 (1) 一番印象的なことを床地図に表し、気づきの対象や場所が同じ同質グループで、気づいたことを話し合う。 ○　対象や場所の特徴の把握と、自分の興味の意識化 〈石や砂について〉・上流～下流での石や川原の様子 ／ 〈生き物について〉・上流～下流で見つけた生き物の様子 ／ 〈水について〉・上流での水のきれいな様子 ※　自分が取った写真をもとに、一番印象的な気づきをカードに書かせ、写真を使いながら気づきを紹介させる。	○　上流には大きな石があって、ダムがつくれた。下流では砂しかなくて砂遊びをした ○　上流にはカニやエビがいた、下流のカニとは種類が違うようだ ○　上流の水はきれいで冷たく、飲めるくらだ
(2) 全体で、気づきを紹介し、上流～下流のわかったことや違いについて話し合う。 ○　上中下流の様子を比べて、わかったことや疑問におもうこと ・上流～下流では石や川原の様子に違いがあること ／ ・上流～下流では、見つかる生き物の種類に違いがあること ／ ・上流～下流では水のきれいさの違いがあること ※　床地図に生き物の写真や水、石などを置き、上流～下流の石や生き物や水の様子が比べられるようにする。 ※　水の汚い下流に、取水場があったことを紹介する。	○　下流には石がないのはなぜだろう ○　上流と下流では、生き物の種類や数が違うのはなぜだろう。 ○　汚い下流に取水場があるのはなぜだろう。
○　上流～下流での様子の違いの理由の予想 〈石や砂について〉・石の大きさや形の違いと、水の流れの関係について ／ 〈生き物について〉・水の生き物の種類と、住む場所や水の汚れとの関係 ／ 〈水について〉・水の汚れと人のくらしの関係や水道水になる様子 ※　石や生き物や水の様子が、それぞれに関係していないか、示唆し、比べさせる。	○　石の大きさが違うのは水の流れのためかな ○　生き物が違うのは水の汚れと関係あるのではないかな。 ○　汚い下流から取水しているのは、水の量と関係あるのだろう。
3．自分のかかわりから追求したい問題を決める ○　自分の問題の決定 ※　体験活動での自分の遊びや興味などから選ばせる。	○　私は、生き物が好きだから、生き物について調べていこう。

第5学年2組　「人間」学習指導案

指導者　植松伸之

題　　材　バングラデシュに心を届けよう

指導観

○ 本学級の子供たちは、アジア・アフリカの開発途上国の貧困の状況は知識としては持っており、機会があれば、何か役に立ちたいという思いを持っている。しかし、その知識はあいまいで、どういう国にどういう協力が必要かを明快に答えることはできない。また、「貧しい国を支援したい」という意識はあるが、相手国の文化や国民性の豊かさに目を向け、その豊かさを守り伸ばすための協力という意識は少ない。そこで、自分たちの国際協力活動のあり方を考えたり、活動時の心情を振り返ったりすることで、相手国のすばらしさに目を向けようとする真心の大切さを内面的に自覚することが必要である。

○ バングラデシュには、お米のない家にお米を持っている人がそっと置いていく相互扶助の精神が生きている。そのために乳幼児の死亡原因の中に餓死は少ない。バングラデシュの方とふれあうことによって、子供たちは同情心からの援助ではなく、相手国のすばらしさを感じた上での自立支援の必要性を実感することできる。この題材を学習することにより、①バングラデシュの方の相互扶助の精神のすばらしさを感じ取る豊かな感性と推しはかりの力　②「自立支援」「心を贈る協力」という視点から、自分たちの国際協力のありかたを考え実践していく判断力と実践意欲、③自分の国際協力体験をもとに、相手国へ真心を持って接っする国際理解・親善の価値の内面的自覚を培う。

○ 本主題の指導に当たっては、相手国のすばらしさを感じ真心を持って接することの大切さを見出すために、次のような手立てを設定する。①バングラデシュの方の生命尊重・相互扶助の精神のすばらしさ、祖国の発展を思うラフマンさん（バングラデシュから留学）の願いを感じるためのラフマンさんとの交流　②「自立支援」「心を贈る協力」という視点から自分たちの国際協力のあり方を吟味するラフマンさんとの交流　③協力金が生かされた、手紙がバングラデシュの子供に届いた等のはたらきかけが成立したときの豊かな心情を振り返り交流する場の設定。

目　　標

○ 相手国のすばらしさを感じ、真心を持って接していく態度を持つことができる。

- バングラデシュの相互扶助の精神のすばらしさを感じ、推しはかることができる。
- 「自立支援」「心を贈る協力」という視点から、自分たちの活動を考える判断力と実践意欲をもつことができる。

計　　画（約8時間）

行う活動は長期的な活動になる。

段階	感じる（3時間）	考える（3時間）	行う（2）	見つめる（1時間）
活動と内容	1．ラフマンさんのバングラデシュへの自立支援の願いを感じるために話し合う。 ○ 相手国のすばらしさの感受 ○ 活動目標の明確化 バングラデシュの方の命を守り、自立を支援する国際協力を考え実践しよう。	2．思いを深め実践するための方法を考える。 (1) バングラデシュの方の自立支援、心を贈る協力という視点から支援の全体像をつくる。 (2) どんな医療支援が必要かを検討する。 (3) どんな教育支援ができるかを検討する。（本時） ○ 思いの具体化と深化	3．キャンペーン募金活動、手紙を送る等の実践活動を行う。 ○ 自分の計画・運営による実践 ○ 有用感・充足感の感得 ○ 学級の凝集性の高まり	4．実践活動時の感動を話し合う。 ○ 心が届いた喜びと共感 ○ 真心を持って相手国の人に接する価値の内面的自覚
手だて	○ バングラデシュの相互扶助の精神を感受するための料理・遊びの体験 ○ 自立支援、心を贈ることの大切さを感じるためのラフマンさんとの交流	○ バングラデシュの乳幼児の死亡率が高い原因や教育施設の現状を調べるための資料の提示 ○ 福岡県のNGO団体による医療支援の資料提示 ○ 支援の質を検討するためのラフマンさんとの交流	○ 子供の計画にそった具体的実践活動の場の設定	○ 活動時の感動が伝わる写真やビデオの提示及び交流

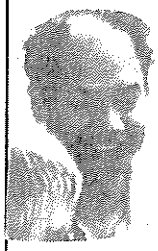
本時の目標

○ 「自立支援」「心を贈る協力」というバングラデッシュの方の願いを推しはかりながら、自分たちができる国際協力のあり方を判断することができる。

準　　備　判断の深化を認識する学習ノート

阪神大震災の義援金として自分の小遣いを贈ってきたウガンダの少年についての記事

学習指導の過程

活動と内容	子供の思考の流れ
1．ラフマンさんの言葉を想起し本時めあてについて話し合う。 ○ ラフマンさんの思いの想起と本時のめあての明確化 ＊ ラフマンさんとの交流場面のビデオを視聴させ、その願いが「自立支援」「心を贈る協力」にあることをつかませる。 めあて 「自立支援」「心を贈る協力」というラフマンさんの願いに応える「国際協力」のあり方を考えよう 2．「自立支援」「心を贈る協力」という視点から、自分たちができる国際協力について話し合う。 教育支援 文具の不足 → 文具を集める（7月にバングラデシュに行くNGOの方へ託すことを目標に） 学校の不足 → 募金活動を行おう（5年生修了までをめざして） ・全校によびかけて文具を集めよう。**物を送るだけの援助でいいのか。使い古しの文具を送っていいのか。** ・街頭で呼びかけよう。**「めぐまれない」人へという気持ちでお金を集めていいのか。**  ラフマンさん ウガンダ子供たちが阪神大震災のとき、毎日働いて50円にしかならない給料をためて、17,800円の義援金を贈ってきました。日本人が共同生活用のハウスを建ててくれたからです。 みんなが考えた一つ一つの方法はすばらしいことです。しかしより大切なのはお金でしょうか、心でしょうか。 ・文具には一人ひとりの心をこめた手紙をつけよう。全校児童にはたらきかけよう。 ・キャンペーンを開き、バングラディシュのすばらしさを訴え募金を集めよう。 ○ ラフマンさんの願いの推しはかりに基づく判断 ＊ ラフマンさんと交流し、再判断を行わせる。 3．ラフマンさんによる子供たちの交流の価値付け ○ バングラディシュの方のすばらしさへ応えようという意欲の喚起	○ こんなにすばらしいやさしさを持ったバングラディシュの人たちの命を救うための協力をしたい。 ○ 学校ができ、みんなが文字を覚えるようになったら、平和な心を生かす国が作れるようになる。 ○ 文具を集めるということはいいことだけど、物を贈るだけでいいのだろうか。 ○ 使い古しの文具を贈ることは心を贈る協力になるのか。 ○「めぐまれない人」という印象でお金を集めていいのだろうか。 ○ バングラデシュの子供たちの生活を考えたら、お金を沢山集めることが大切だ。 ○ お互いの人を助け合うそんなバングラデシュの方の心に応えることになるのか。 ○ 大切なのは心を贈ることだ。 ○ 相手の気持ちを考えて活動をすることが大切だ。 ○ 文具を集めるのはいいけど一人ひとりの児童が心をこめた手紙を添えることにしよう。それを全校に呼びかけよう。 ○ バングラデシュのすばらしさをキャンペーンを開いて伝えよう。そして、心が伝わった人からお金を頂こう。

第６学年１・３組　体育科学習指導案　　指導者　T1:佐々木壮一朗　T2:

単　　元　マット・とび箱にチャレンジしよう

指　導　観

○　本学級の子供たちは、器械運動において「高い跳び箱がとべる」「きれいに回ることができる」など、技に挑戦し、達成したときの喜びを味わいたいという欲求をもっている。また、いろんな技に挑戦するなかで、音楽に合わせてみたり、空間の使い方や技と技とのつなぎ方の工夫をしたりなどの運動への多様な取組みにも関心をもっている。高学年は互いに役割をもって仲間と協力して効果的な運動に取り組むのに適した時期である。そこで、この期に子供たちが自ら練習計画づくりや学習の成果を互いに評価し合って運動する楽しさを味わわせたい。

○　本単元のねらいは、子供自らが選択した技の達成に向け、自らがつくった学習計画に従って今できる技をさらに上手にしたり、もう少しがんばればできるような技に挑戦したりなどの活動により自己決定による克服や達成の喜びを味わわせることである。本単元の価値としては、①子供が自分の興味・関心に応じてマットや跳び箱の種目や技を選択できるので運動に意欲的に取り組むことができる。②子供自らが協力して学習計画を立てたり、練習の場をつくったりできるので場や人とのかかわりを深めることができる。などである。

○　本単元の指導にあたっては、子供が自分で計画を立て、技の克服や達成に向け旺盛な活動をする必要がある。そこで、子供が活動１→活動２→活動３の一連の活動により運動との一体感を味わうことができるようにする。子供が自ら練習計画を立て、場をつくる活動をしていく。そこで、ＶＴＲ撮影をしたり、練習課題をとらえ練習計画や発表計画などをつくったり、技の評価カードをつくって互いに動きの見直しや高まりをとらえたりして、楽しく器械運動ができるようにする。また、ティーム・ティーチングの指導形態により、子供一人一人が自分たちの立てた計画や課題に応じて運動ができるように、個人的な指導を行うようにする。

目　　標

１．子供自らが選択したマットや跳び箱の技の達成に向け、学習計画を立てて、運動する楽しさを味わうことができる。

２．練習計画づくりや運動の成果を互いに評価し合ったり、協力し合ったりして、運動することができる。

計　　画（約７時間）

	活動1【運動との一体感をとらえる活動】2時間	活動2【運動との一体感をつくる活動】3時間	活動3【運動との一体感を深める活動】2時間
活動と内容	１．いろいろな技に挑戦し、課題を決める。　① ○　マットや跳び箱のいろいろな技の挑戦 ○　マットや跳び箱の方向や高さや組合せ ２．選択の仕方や場づくりについて話し合う。 ○　自分に合った技の選択　① ・技の達成度、場への適用度からの判断 ○　課題解決の場づくりの見通し	１．選択した技で計画を立て運動する。① ○　練習計画にそった活動（条件を考えた場での運動） ・補助具の活用、動きの評価、練習の場の設定など ２．複数の技を選択し、練習計画や場づくりを行い、運動する。　（本時2／2）② ○　課題解決の場や自分が楽しみたい場など ○　演技の場や練習の場での交流・援助 ○　練習計画にそった相互評価	１．発表する場をつくり、練習する。　① ○　活動の場・流れなどの工夫 ○　自慢できる動きへと高める発表練習 ２．成果を発表し合う。　① ○　友達の克服・達成の喜びの受容と共有 ○　観る側の演技への共感
手だて	○　技の選択モデル ○　場づくり計画表 ○　技のメニュー表 ○　課題明確化のためT・T支援	○　視聴覚機材（ＶＴＲ他） ○　練習計画表 ○　技の評価カード ○　課題追求のためのＴ・Ｔ支援	○　視聴覚機材（ＶＴＲ他） ○　発表計画表 ○　課題達成のためのＴ・Ｔ支援

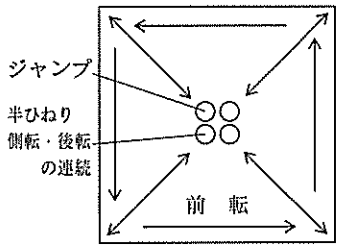
本時の目標

1．子供自らがマットや跳び箱の選択した技を使って、練習計画を立てたり、場づくりをしたりして友達と協力して運動する楽しさを味わうことができる。

2．選択した技を繰り返したり、複数の技を組み合わせたり、音楽に合わせて動いたりなどの多様な運動ができる。

準　　備　マット　跳び箱　ＶＴＲ　テープレコーダー　練習計画表　技の評価カード　など

学習指導の過程

活　動　と　内　容	子供の思考の流れ
1．前時までに選んだ技やつくった計画にそって練習したり、自己の動きを評価したりして活動のめあてをつかむ。 ……※Ｔ・Ｔ支援…… 各場での助言やＶＴＲ撮影を行う。 ○　動きの見直しと練習計画の作成 ○　新たな場と技の組合せの確認 （例）・音楽に合わせた集団でのマット技（単技のリズムの把握など） ・類似系の技の組合せによる練習（マットの回転系の技の選択など） めあて 自分たちの計画を見直し、マットとび箱に挑戦しよう ※　ＶＴＲに撮ったり、相互に評価したりさせて、自分の動きや練習計画の見直しをさせる。	○　練習計画はどうだったかな。 動き…集団マットをしよう。 場　…マットを６枚並べよう。 練習…補助具を使って練習しよう。 時間…演技の時間を１分にしよう。 評価…技のできばえはどうかな。 → 個人のめあての例 ・音楽に合わせよう。 ・同じような技をとり入れよう。 ・もう一度、今日の計画を確かめて立て直してみよう。
2．自己の練習計画に従って運動する。 (1) 練習計画に従って、場づくりを行い運動する。 場づくり例（集団マット）　跳び箱技の選択例  類似系の技 ①台上前転 ↓ ②ネックスプリング ↓ ③ヘッドスプリング ※Ｔ・Ｔ支援 各場での練習助言を行う。課題の把握と追求のための助言を行う。 ※　練習計画をもとに個々の活動の場をつくらせ、課題に取り組ませる。	集団マットの練習計画例 ○マット中央でのジャンプ、半ひねりはみんなで合わせてできるように練習しよう。途中５分程度、分かれて技の練習をし、最後に音楽に合わて、集団演技をしよう。 跳び箱技の練習計画例 ○台上前転、ネックスプリング、ヘッドスプリングの似た技を集めて練習しよう。高さを少しずつ変えて友だちに手のつきや姿勢を見てもらいながら練習しよう。
(2) 相互に評価する。 ○　評価の観点の話合いと見合い 観点例 ・連続技のとぎれがないか。【動きの観点】 ・マットや跳び箱の数や配置はどうか。【場づくりの観点】 ・協力して練習ができたか。【協力的態度の観点】 ……※Ｔ・Ｔ支援… 各グループでの相互評価の助言を行う。 ※　技の評価カードを参考に観点を明確にさせる。	○　スムーズに動いているかな。 ○　手のつきを見ていてね。 ○　協力して練習ができたかな。 ○　思い切って運動ができたかな。
3．本時学習をまとめ、発表会について話し合う。 ○　練習計画の充実感の発表 ○　場づくりの動きの高まりの賞賛 ※　本時の活動の様相をとらえさせ、次時へつなぐ。	○　練習計画通りにいきました。 ○　みんなと協力して活動して楽しかった。

ふじ・さくら・梅組　合同生活単元学習指導案

指導者　舛元俊文・落合純哉・松本良一・西原敦子

単　　元　　かいじゅうランドをつくってあそぼう

指　導　観

○　本校特殊学級の子供たちは、低学年ふじ組６名・中学年さくら組７名・高学年梅組３名の計16名で構成されている。子供たちはこれまでに、作って遊ぶ活動を通して、みんなで一緒に遊び場や遊ぶものを作り、作ったもので楽しく遊ぶという経験を積み重ねてきている。この経験を通して、低学年の子供たちは、みんなで遊ぶことの楽しさを、中・高学年の子供たちは、同学年や低学年の子供たちとかかわりながら遊ぶ楽しさを味わってきている。その中で、作ったものを通しての人とのかかわりの広がり、深まりがみられるようになってきている。

○　本単元のねらいは、かいじゅうらんどでの遊び方のきまりや場を自分たちで作りながら、友達とのかかわりを深めたり広げたりできるようにするものである。具体的な学習内容は、①遊びの場の状況に応じて身近な素材に働きかけること、②自分の好きなかいじゅうを作ること、③かいじゅうらんどでの遊び方のきまりを考えながら遊ぶこと、である。このことにより、活動を見取る力、人とかかわろうとする力、生活に生きる知識・技能が育ち、身の回りのもの・ひと・ことへ積極的にかかわり合おうとする態度の育成につながる。このことは、子供たちの現在及び将来のよりよい生活を考える上で意義深い。

○　本単元の支援は、①子供たちが遊んでみたいという思いをもてるように、かいじゅうらんどとの出会わせ方を工夫し、活動への意欲を喚起すること、②自分の好きなかいじゅうを自分で作ることのできる場を設定すること、③きまりを守って繰り返し遊ぶ中で、友達とのかかわりを生み出すことができるような遊びの場を設定すること、である。

目　　標

１．友達とかかわりながらかいじゅうを作り、たのしくかいじゅうらんどで遊ぶことができる。

２．身近な素材を使って自分の好きなかいじゅうを作り、きまりを守って遊んだり、友達とのやりとりをしたりすることを通して、友達とのかかわりを深めることができる。

計　　画（約４時間）

段階	であう（１時間）	つ　く　る（２時間）	いかす（１時間）
活動と内容	１．友達とかいじゅうで遊ぶ。 ○　かいじゅうの作り方や遊び方を知ること	２．楽しくかいじゅうらんどを作って遊ぶ。 (1)　自分たちの好きなかいじゅうを作る。 ○　作りたいかいじゅうを決めること (2)　友達とかいじゅうらんどで遊ぶ。（本時） ○　かいじゅうらんどでの遊び方を決めること ○　遊び方の理解 ○　人とのかかわり方	３．かいじゅうオリンピックをする。 ○　人とのかかわりの広がりやかかわり方の深まり
支援	○　友達と一緒に遊ぶ場の設定	○　個に応じたかいじゅうづくりの場 ・作りたいかいじゅうや素材を自由に選べる場 ○　遊び方を考えさせる場の設定 ・かいじゅうの置き方、数を自由に選べる場 ○　個に応じた教師の働きかけ	○　個に応じた賞状 ○　かいじゅうオリンピックの場

本時学習の目標

○　自分たちが作り上げたかいじゅうでの遊び方を決めながら、友達と一緒に繰り返して楽しく遊ぶことができる。

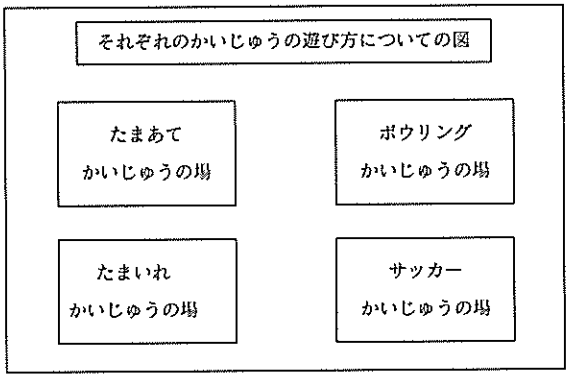
Aグループ:友達の誘いかけを受け入れながら、他の友達の模倣をして遊ぶ。

Bグループ:友達の誘いかけを受け入れたり、友達に働きかけたりしながら、遊びの場面の状況を見取って遊ぶ。

Cグループ:友達への誘いかけを積極的にしながら、遊びの場面の状況を見取ったり、遊び方を考えたりして遊ぶ。

準　　備　　前時の遊びのビデオ、遊び方の図

学習指導の過程

活　動　と　内　容	個の活動を促す活動
1．本時学習のめあてについて話し合う。 (1) 前時に作ったかいじゅうらんどの場を見て、本時の活動について知る。 ○　目的意識を喚起すること (2) 本時学習のめあてについて話し合う。 めあて じぶんのすきなかいじゅうをえらんでともだちとたのしくあそぼう。 (3) 手順と方法を知る。 ①自分たちの作ったかいじゅうで遊ぶ。②自分たちのかいじゅうを紹介する、③自分の好きなかいじゅうで遊ぶ。 2．かいじゅうらんどで遊ぶ。 自分たちのかいじゅうの場で遊ぶ。 ○　遊び方の深まり ○　友達を誘うかかわり方 友達にさそわれた場で遊ぶ。 ○　遊び方の広がり ○　友達を受け入れるかかわり方 Aグループ：○友達を意識しながら他の模倣をして遊びを楽しむこと Bグループ：○場面を見取りながら友達とやりとりをして遊びを楽しむこと Cグループ：○場面を見取りながら友達に積極的に働きかけて遊びを楽しむこと ※　教師は各場所で個に応じた支援をする。 3．本時学習のまとめをする。 ○　楽しく遊んだことへの成就感・達成感 ○　かいじゅうオリンピックへの意欲	1．本時学習への動機を高める支援 ○　前時にかいじゅうらんどで遊んだときのビデオ ○　かいじゅうらんどの場の提示  ○　遊び方のモデル演示 2．かいじゅうらんどで遊ぶことへの支援 ○　人とのかかわり方への働きかけ Aグループ：教師が媒介になった友達の働きかけの受け入れ Bグループ：教師の支援を受けながらの友達への働きかけを促すことばかけ Cグループ：友達への誘いかけを促すことばかけ ○　遊び方の理解を促す働きかけ Aグループ：動作援助 Bグループ：場面の状況をとらえさせることばかけ、遊び方の図 Cグループ：活動を見通させることばかけ、遊び方の図 ○　かいじゅうを置かせて場を作らせる。 3．次時学習への意欲を引き出す支援 ○　かいじゅうや遊び方を紹介する場 ○　賞賛

学習指導協議会（１日目）メモNo.１

学習指導協議会（１日目）メモNo.２

全　体　会（２日目）

○　あいさつ　　学校長　　高　橋　義　夫

◇　主題発表

「生きる喜びを生み出す教育課程の創造」

―― 子供主体の活動からみる教育課程の編成 ――

研究主任　　重　松　宏　明

◇ 教科等発表

● 生活環境科

「生活環境とのよりよい関係をつくり出す生活環境科学習」

生活環境科部　　山　下　浩　徳

● 領域「人間」

「ともに生きることの喜びを味わい豊かに実践できる領域「人間」学習」

領域「人間」部　　中　原　　浩

● 表 現 科

「豊かに感じ取り創造的に表現していく喜びを味わう表現科学習」

表現科部　　樺　島　　穣

◇ 全 体 講 演

演題「未来をひらく子供主体の学習活動」

文部省教科調査官　嶋 野 道 弘 先生

—— メ モ ——

研究紀要の部

生きる喜びを生み出す教育課程の創造

―― 子供主体の活動からみる教育課程の編成 ――

研 究 紀 要 目 次

生きる喜びを生み出す教育課程の創造
－ 子供主体の活動からみる教育課程の編成 －
教　頭　安永純二 …… 110
研究主任　重松宏明

生活環境とのよりよい関係をつくり出す生活環境科学習
－ 生活づくりの活動を重視した年間計画の作成 －
生活環境科部　芋生修一 …… 125
山下浩徳

豊かに感じ取り創造的に表現していく喜びを味わう表現科学習
－ 多様な表現活動の経験を豊かにする年間計画の作成 －
表現科部　津本修一 …… 140
樺島穣

ともに生きることの喜びを味わい豊かに実践できる「人間」学習
－ 人にかかわる体験活動とその経験化を図る年間計画の作成 －
「人間」部　植松伸之 …… 155
中原浩

ことばを通して創造的に自己表現していく国語科学習
－ 課題や目的をもった言語活動を重視する年間計画の作成 －
国語科部　佐々木保善 …… 170
水上栄一
伊藤啓二

社会の形成者として社会生活をよりよくしていく社会科学習
－ 社会をつくりだしていく活動を重視する年間計画の作成 －
社会科部　後藤正弘 …… 185

自ら数理を求め続ける子供を育てる算数科学習
－ 数学的活動の体験を豊かにする年間計画の作成 －
算数科部　重松宏明 …… 192
加藤英也

自然事象に対する新たな考えをつくり出す理科学習
－ 生活事象とのかかわりを見つめ直す活動を重視した年間計画の作成 －
理科部　今林康治 …… 203

身近な社会や自然に進んでかかわりを深める生活科学習
－ 人との継続的なふれあいを重視する年間計画の作成 －
生活科部　藤木寿美枝 …… 210

自分のよさを生かし豊かに自己表現する音楽科学習
－ 創造的な音楽活動を中核とした年間計画の作成 －
音楽科部　津本修一 …… 217

自ら家庭生活を創造する家庭科学習
－ 家族とのかかわりづくりの活動を位置づけた年間計画の作成 －
家庭科部　小嶋悦子 …… 224

主体的に運動にかかわる体育科学習
－ 運動との一体感を味わう活動を重視した年間計画の作成 －
体育科部　笠　宏照 …… 231
佐々木壮一朗

生活力を培う指導法の究明
－ 自主性・能動性の発揮を促す自己選択の活動を通して －
障害児教育研究部　松本良一 …… 242

進んで言語活動に取り組む国語科学習
－ 個々の表現力を生かすおはなしコーナーづくりを通して －
国語科部　落合純哉 …… 244

自ら運動にかかわる楽しさを味わう体育科学習
－「もの・人・きまり」の視点を取り入れた運動遊びの活動を通して －
体育科部　松本良一 …… 251

自ら表現する喜びを味わう音楽科学習
－ 個の音楽の楽しみ方を生かした活動を通して －
音楽科部　林田千枝 …… 258

研究主題

生きる喜びを生み出す教育課程の創造

── 子供主体の活動からみる教育課程の編成 ──

安永　純二　　重松　宏明

1．主題設定の理由

(1) 予想される21世紀の社会と望まれる人間像

21世紀を目前にひかえた今日、子供たちを取り巻く環境が急激に変化している。そこで、予想される21世紀の社会で望まれる人間像とそれを大切にした視点を次のように考えた。

〈21世紀の社会で必要とされる人間像〉	〈必要となる視点〉
○目標に向かって、自ら文化を創造し、自己表現できる人間	○人間の創造性と表現力をこれまで以上に大切に育んでいく。
○社会や自然に積極的に働きかけ地球市民として考え行動できる人間	○自分の存在価値や自分自身の働きかけを大切に、物事を考え実践させる。
○情報を的確に処理、判断し活用できる人間	○多様で多量な情報に対応・活用できる人間の育成を図る。
○心身ともに健康で、生涯学び続けていこうとする人間	○心と知力と体力の調和的発達と生涯学習力の育成を図る。
○価値観を確かに、自分らしい生き方を創りだしていく人間	○一人一人の価値観を認め育み、個性の伸長を図る。

上記のような人間像に迫りたいと考えたとき、次のような点で教育課程を見直していく必要性を感じた。

(2) 現行教育課程を見直していく必要性

① 現行教育課程実施上の問題点から

○ 豊富な体験をもてる教育課程にしていく。

今の子供たちは、知識・技能の高まり、思考力の育ちは確かにすばらしい。しかし、何かもの足らなさを感じるのである。それは、人間としての豊かさ、人間としてのやさしさ、人間としてのたのもしさにあるように思う。今の子供たちのものの見方・考え方、対処の仕方というのは、合理的、一般的、科学的すぎるように感じる。これはまさに体験の不足、子供自身が環境にかかわっていく活動の不足からだと考える。子供たちは、土台がないままに覚えることや理解することばかりを行っている。だから時間がたてば忘れてしまう。また自分でかかわりをもっていないので、本物を知らないのである。本物を知らない人間は、本当かうそかを考えたり、疑ったりする力がない。このことは、情報が多様化し、氾濫しているこの時代においてたいへん恐ろしいことである。

体験を大切にしていくことは、今、教育の世界では大きく叫ばれているし取り組みも盛んになさ

れている。しかし、それは方法論的な取り上げ方であって、現行の教育課程においては限界があるように思う。21世紀をたくましく生き抜く子供をめざして、教育内容を厳選し、具体的な活動や体験の時間が十分に保証できる教育課程が求められていると考える。

もっと子供が、自分の活動を通して、自分の理屈、解釈でものごとを認識していく過程が大事にされた学習がなされなくてはならないのではないだろうか。

② 教育課程の新しい課題から

○ 生きる力をもった子供の育成を図っていく。

第十五期中教審報告案では、子供に「生きる力」と「ゆとり」をもたせることを強調している。いじめやそれに伴う不登校などの問題が深刻化してきている今日、今後求められる資質や能力は、変化の激しい社会、多様な価値観の存在する社会のなかを生きる力と言及している。今の子供たちには、子供自身が生きることに喜びを覚えられるような心のゆとり、人間関係を豊かにもたせること、困難に対してもたくましく生きる意志と体力を育てることが必要であると考える。

報告案では、生きる力は（a)自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断したり、表現し、より良く問題を解決する能力、(b)自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心など豊かな人間性とたくましく生きるための健康や体力と説明されている。(註１)

本校では、この生きる力につながる子供たちに求める資質、能力を、「生きる喜びを味わう力としての学力」として、細かく分析・構造化してみた。後に詳しく説明するが、簡単に中身を述べると以下のようなことである。

> 豊かな心、鋭い感受力、豊かな創造力、柔軟な思考力、的確な判断力、
> 豊かな表現力、積極的な行動力・実践力、生きて働く知識・技能

上記のような力を総合して発揮できることが生きる力につながっていくと考える。

③ 学校教育を取り巻く環境の変化から

学校を取り巻く環境も、大きく変わってきている。以下のような点で教育の在り方も見直していかなくてはならないと考える。

ア、完成学校週５日制→指導時数の削減

完全学校週５日制に対応できるよう、教育内容は厳選され、ゆとりのある教育を回復していくことが求められている。

イ、学校、家庭、社会の教育の役割と枠組みの変化→学校教育の役割は？

家庭における教育力の減退、塾の加熱化や社会教育の拡大充実を考えたとき、学校教育の果たす役割については、再度見直していかなくてはならない。学校、家庭、地域の連携とバランスを今後考えていかなくてはならない。

ウ、生涯学習体系への移行→知識を教えるのではなく、学習のメカニズム、学習する楽しさや喜びを感じさせ、獲得させる。

今後、求められる資質や能力は、変化の激しい社会のなかでの生きる力である。自ら学び続けようとする心と知力と態度、また、かけがえのない自分、かけがえのない他者が共によりよく生きていく生き方を希求し、考え、実践していくことに（生きる）喜びを感じることのできる子供を育てていくことが必要である。

（註１） 第十五期中教審第一小委員会「審議報告」より

(3) 本校がめざす子供像

本校では「自立した子供」を中核にすえて、めざす子供の姿を次のように考えている。

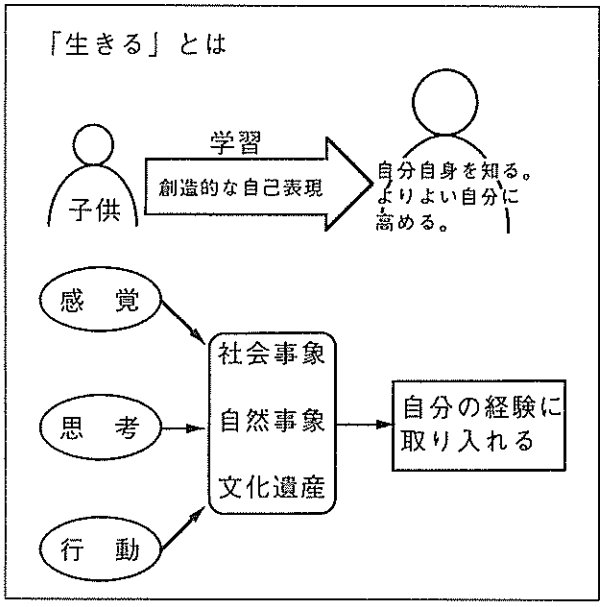
> ２１世紀の社会をよりよく生きる自立した子供
> a．社会や自然と調和し、心豊かな人間性をもった子供
> b．自分に自信をもち、自分を豊かに表現していく子供
> c．社会や自然に個性を発揮してかかわり、新しい文化を創造する子供

2．主 題 の 意 味

(1) 「生きる喜びを生み出す」とは

本校では、教育活動の過程における子供たちの生きる姿を次のようにとらえた。

「生きる」とは、自分自身を自分の求めるよりよい姿に高めていくために、目的をもってまわりの対象に働きかけ、その目的を実現していくまでの過程の、個性的かつ創造的な自己表現を行っている姿であると考える。(註１)



ここには、子供が対象に対して、「感じる」「考える」「行う」という３つの活動を相互に関連させながら、自分の課題に対して、自分らしい考えや表現、活動を通して物事を認知していく姿がなくてはならない。「感じる」「考える」「行う」とは、認知の過程である。しかし、教育の現状をみると、この過程を踏まなくても、事足りる風潮があり、それが「学校知」と誹謗される一つの原因でもあると考える。つまり、真の生きる力、社会を生きぬく力に結びついていないのである。「学校知」が、「生活知」「方法知」「人間知」まで広がり、磨かれるためには、教えられたり書物を読むだけの学習で培われるものではない。自分自身が様々なものにかかわる過程を大切にし、感じ、考え、行うということを繰り返し、そこでの体験の内容が少しずつ経験化されていったとき、「生きる力」になると考える。感じる、考える、行うについてのとらえ方を、もう少し詳しく述べると次のようになる。

「感じる」とは、自然や社会などの具体的な対象に直接的に働きかけ、知覚を通して得た情報から、さらに対象に働きかけ、具体的な情報から対象を認識する活動のことである。

「考える」とは、様々な情報を言語や数などに置き換え、自分なりに処理しやすい形に整えていくことができるように思考していく活動のことである。

「行う」とは自分なりに感じたり考えたりしたことをもとに行為や言語、造形物、身体などを通して、これまでの自分にはない新しいものを表現していく活動のことである。(註２)

「生きる喜び」とは、以上のような「感じる」「考える」「行う」という活動を繰り返し、創造的な自己表現を行っていくなかで、次のような状態に達することであると考える。

生きる喜び

① 感じたり働きかけたりする対象が広がっていくことを自覚していること
② 目的に応じた情報の処理活用の仕方が高まっていることを自覚していること
③ 感じたこと、考えたことやその表し方、行い方が高まっていることを自覚していること

子供がこのような自覚に達することが、社会や自然とうまく調和し、自分の存在に価値を見出し「生きる喜び」を感じているということができる。この生きる喜びは、子供がこれからの学習や生活に意欲的にかかわっていく力となり、生き方にまで大きく影響を及ぼすものになると考えている。

（註１）蜂屋慶編「子どもの自己表現と超越」『教育と超越』1985
（註２）蛯谷米司監修『新学力と学習』三晃書房1995 P51～52

(2) 生きる喜びを味わう力としての学力

21世紀の社会で必要とされる人間像を考えるとき、子供たちが身につけるべき資質・能力は、社会のなかで創造的な自己表現ができる力でなくてはならない。そこで育成される学力は、自分自身を自分の求めるよりよい姿に高めていく力としての学力、つまり生きる喜びを味わうことのできる学力でなくてはならない。本校で考える学力の中核をなす内層には「豊かな心」があり、これは生きること、また生きる喜びを生み出すことのエネルギーとなっていく。次の中層は、物事を認知していくための「感じ方」「考え方」「行い方」であり、「環境へのかかわり方」として、環境に旺盛に働きかけていくことのできる力が位置づいてくる。さらに外層には、かかわる過程において得る知識・技能として「生きて働く知識・技能」が位置する。私たちは、このような学力が21世紀をよりよく生きていくための豊かな人間としての「豊かな学力」と考える。豊かな学力の中身は以下のようなものである。

A、豊かな心

働きかけの主役は自分であるという意識と感性を大切に、よりよく生きていくために、さまざまな事象から課題を見出だしたり、よりよく解決したり、解決したことをこれからの活動に生かしていこうとする心の働きや高まろうとする意思・意欲である。

B、環境とのかかわり方

環境に旺盛に働きかけていく力を次のように考える。

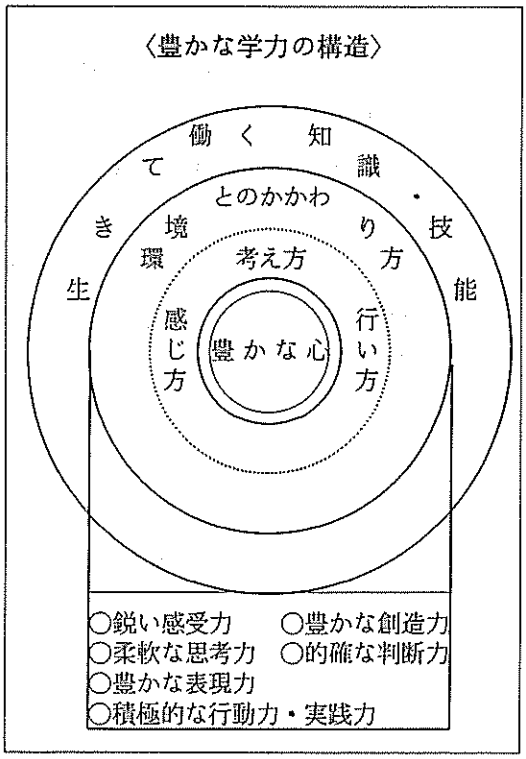
○「鋭い感受力」

自分の身の回りのさまざまな事象のなかから、問題を見出だしたり、素直に感動したり価値を感じとったりする力である。

○「豊かな創造力」

具体的な事象に出会ったとき、自らの体験と知識をもとにイメージを形成したり、イメージを表現活動として表出していく力である。

○「柔軟な思考力」



身のまわりのさまざまな事象や直接的に働きかけて得た情報から、論理的に考えたり、直観を働か

せたりして、事象のもつ価値や意味を見出していく力である。

○「的確な判断力」

情報の必要価値を見極めたり、かかわりのなかで直面した事実や事象が、「真実であるか、誤りであるか」「善いことか、悪いことか」などをはっきり見極めることのできる力である。

○「豊かな表現力」

感じたこと、想像したこと、考えたこと、調べたこと、他の人に伝えたいことなどを、言語、絵図、数式、造型、音楽、身体などで表していく力である。

○「積極的な行動力・実践力」

目的を達成するために考えたこと、判断したことを意欲的に実際の行動として表していく力である。

C、生きて働く知識・技能

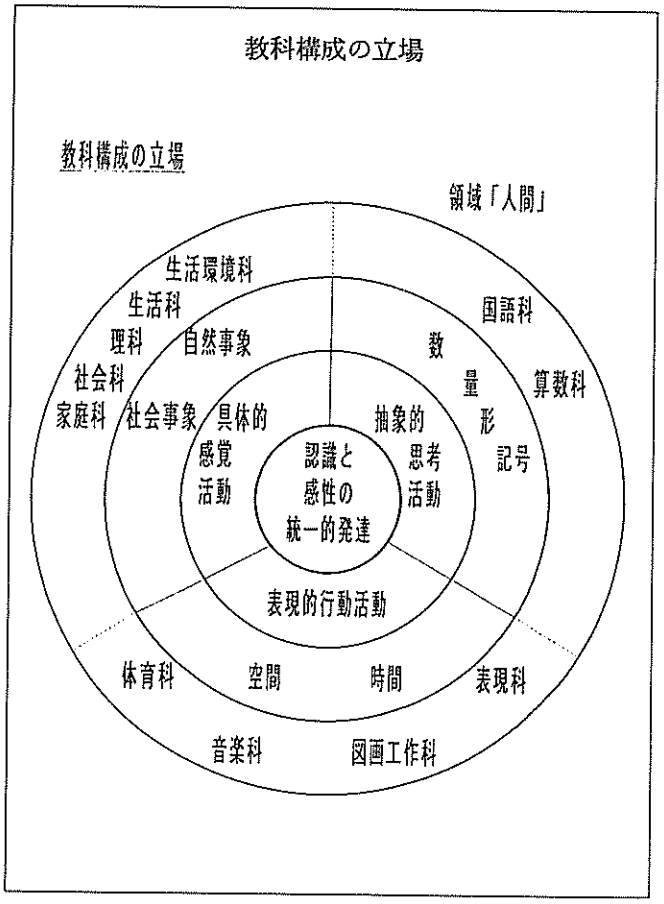
自分の生活・生き方、在り方に活用でき、身のまわりのさまざまな事象に働きかけていくことができるもととなる学習によって得た内容である。

(3) 「生きる喜びを生み出す教育課程の創造」

① 本校が考える教科・領域再編の考え方

子供が「生きる喜びを味わう」姿を求めて、本校では蛯谷米司氏の教科構成論を参考にし、学習者の感覚・思考・行動に対応させて教科構成の立場を考えてみた。

まず1つ目は、具体的感覚活動を基盤にする教科群として、生活科、理科、社会科、家庭科を設定した。2つ目は抽象的思考活動を基盤にする教科群として算数科、国語科を設定した。3つ目に表現的行動を基盤にする教科群として音楽科、図画工作科、体育科を設定した。また、これらの教科全体を支えるものとして、総合的に人としての在り方、生き方を考える領域として道徳と特別活動を設定した。(註1)

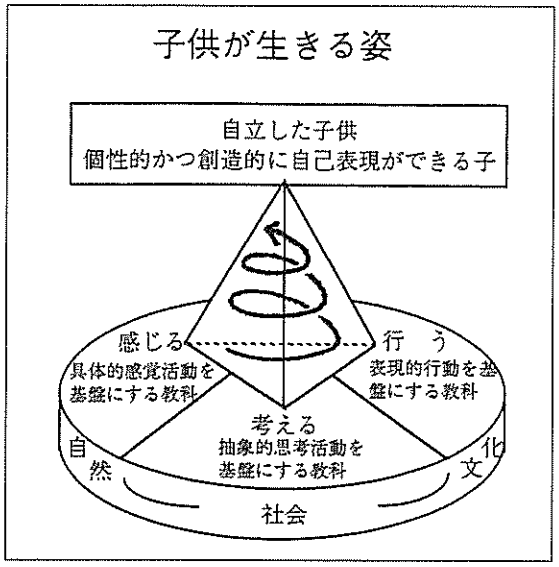


人間の基本的活動は、感覚・思考・行動からなると考えて、そうした活動の基盤と活動の対象とのかかわりにおいて合理的な教科群を設定し、感覚・思考・行動といった能力を伸ばしていこうと考えた。

そして、「生きる喜びを生み出す」という観点から、各教科群の目標と内容を見直し、教科構成の検討をさらに行っていった。

その結果、具体的感覚活動を基盤にする教科群のなかの中学年に「生活環境科」を表現的行動を基盤にする教科群のなかの低学年に「表現科」、そして、道徳と特別活動を領域「人間」と統合し、総合的単元として設定し、指導を行っていった方が、生きる喜びを味わうという目標に迫れると考えた。

本校では「感じる」「考える」「行う」という活動を繰り返し、創造的な自己表現を行っていくことを子供の姿としてめざしている。このことを具現化するために、すべての教科において「心をもって、対象にかかわる」ということが、学習を成立させる基本理念であると考えている。

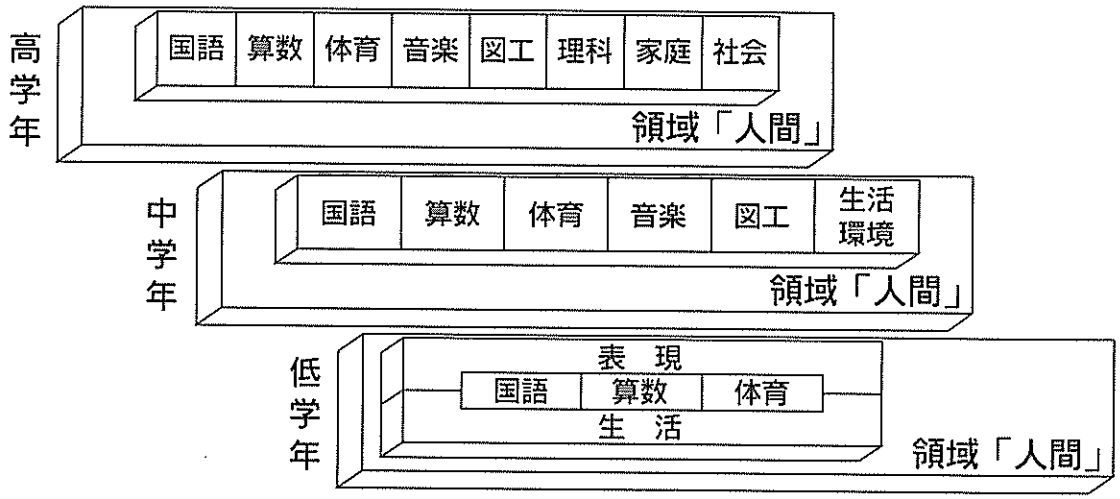


心をもって対象にかかわるということは、自分が学習のなかの主役であるということである。心をもって対象にかかわることによって、本当の認識が成立すると考える。この理念を核にすえ本校では、表現科、生活環境科、領域「人間」を新設し、他教科にも、この考え方を生かして年間計画を作成している。

本校では、新しい教科を含めた教科・領域の枠組を、下図のような形にし、認識と感性の統一的発達をめざした教育課程の編成をめざしている。

（註１）蛯谷米司監修『新学力と学習』三晃書房

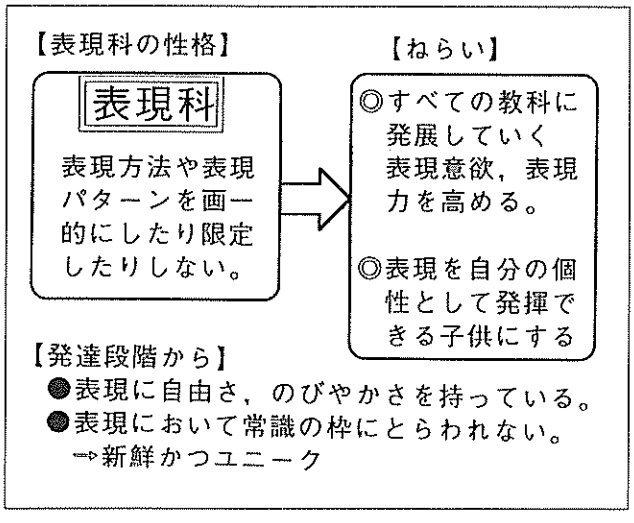
〈新しく仮説設定した教科、領域の枠組み〉



② 新設教科・新設領域の考え方

表現科

表現科は、生活科とともに、すべての教科に生きて働く心と能力・態度の基礎になっていかなくてはならない教科であると考える。つまり、すべての教科に発展していく表現意欲、表現力を高めるために、表現方法やパターンを集団・画一的にしたり、限定したりしない表現科を、自由でのびやかさをもっている小学校低学年に設定した。よって、表現そのものの質や内容をこれまで以上のものとし



て求めている。表現科は、子供一人一人の表現欲求を多様な表現方法を通して表していくことにより、表現の喜びを味わわせるとともに、その過程で感性や創造性、表現への関心・意欲・態度を育てていくことを目標としている。低学年表現科における表現の楽しさの追求は、中、高学年の音楽科、図画工作科において、学年を上げていくにつれて、表現の美しさへの追求へと変わっていく。

生活環境科

生活環境科を新設した理由を３つの観点から考える。

１つは、自分が生活している身近な環境の中での自分自身の在り方、生き方を考えさせ、自分が生活している環境へ主体的にかかわっていこうとする態度を育てていく教科の必然性からである。

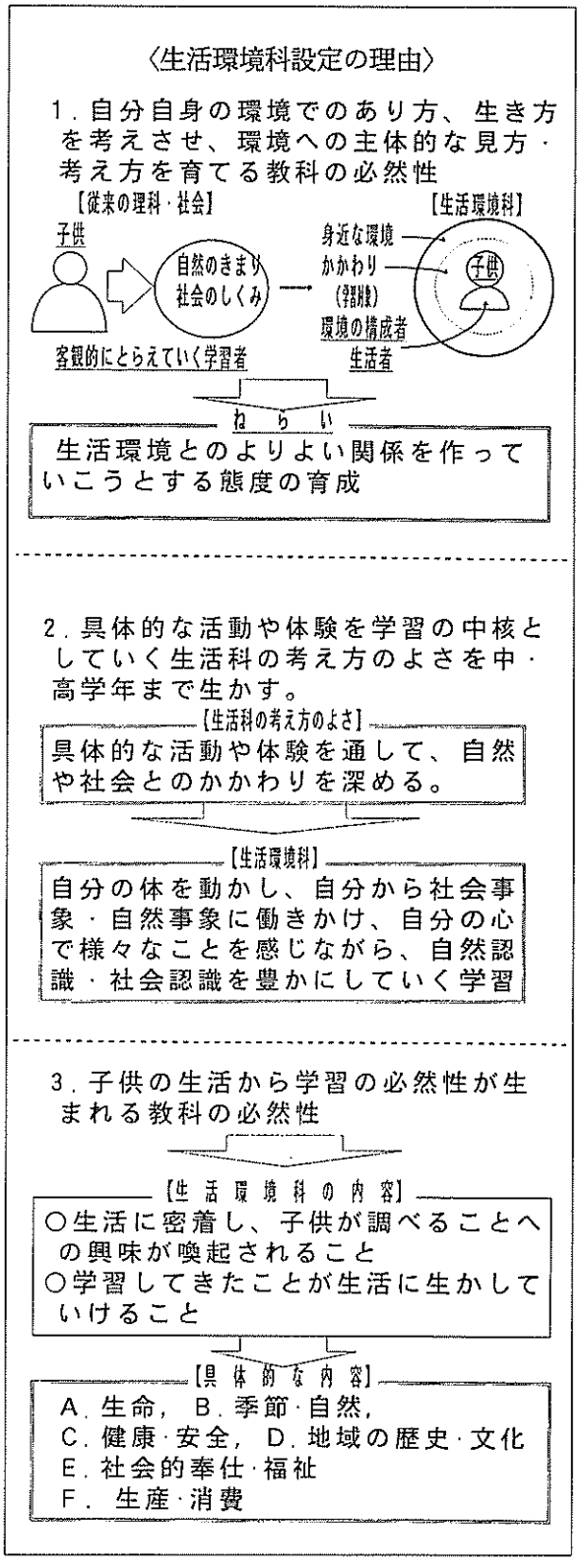
つまり、生活環境科では環境でのよりよいかかわり方、よりよい生き方を求め生活環境とのよりよい関係を作っていこうとする態度を育てることをねらいとしている。環境のなかでのよりよい生き方を求める子供を育てるには、子供を環境の外にいる学習者としてではなく、環境の中で生活する生活者としてとらえ、自分自身が環境とのかかわりを深めたり、広げたり、考えなおしたりすることを目標とする教科が必要であると考える。

２つは、具体的活動や体験を学習の中核としていく生活科の考え方のよさを中・高学年まで、受け継ぎ生かしていこうとする考えからである。

自分と環境とのかかわり方について、自ら納得してわかるためには、生活科が学習の中核としてきた具体的活動や体験を受け継ぎ生かしていくことが大切である。自分の体を動かして、自分から社会事象、自然事象に働きかけ、自分の心でさまざまなことを感じながら、自然認識、社会認識を豊かにしていく学習へ転換していかなくてはならない。

３つは、今、もっと生活に密着した、子供が学習することに興味が喚起されるような、また学習したことが生活に生きて働くような学習の内容が求められているということである。

私たちの身のまわりの自然事象や社会事象には、社会問題になっていること、社会的関心を高めていること、生活のなかによりよく活用できることなどがたくさんある。そういった内容を生活環境科に求めている。



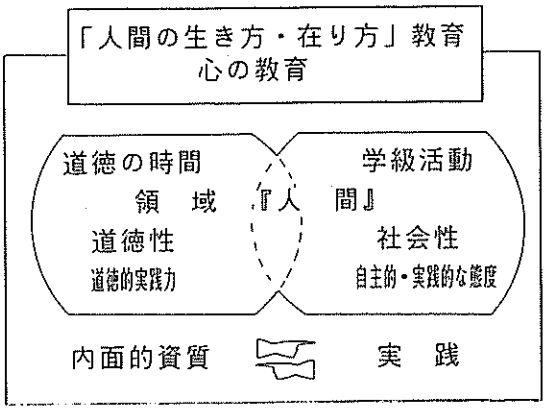
生活環境科は、具体的活動や体験を学習の核としている生活科の考え方を中・高学年まで受け継ぎ生かしていくことをねらっている。ここでは、豊かな生活をめざしてよりよく生きるという視点から社会や自然を含めて生活環境としてとらえ、自分なりの課題を解決するなかでこれからの自分の生活に生かしていくことができる学習を大切にしている。

以上のようなことを教科設定の理由に、生活環境科は、自分と身近な社会とのかかわりに関心をもち、具体的な活動や体験を通して、環境構成者としての主体的な見方・考え方を養い、生活環境とのよりよい関係を作っていこうとする実践的な態度を育てることを目標としている。

領域「人間」

「人間の生き方・あり方」という心の教育の中核を担う道徳の時間と特別活動（特に学級活動）との一体化を図った総合的な学習として領域「人間」を設定している。一体化を図っていく必要性を次の２点から考える。

１点目は、これまでの道徳の時間の学習は、自己の価値観の振り返りに重点がおかれ、価値観の形成過程は、個人の体験にゆだねられていた。しかし、子供の豊かな道徳的体験が希薄化している今日、価値形成の過程に具体的活動や道徳的実践を位置づけた総合的な学習が必要であると考える。こうすることで、道徳の学習で培った道徳的実践力を具体的活動、道徳的実践として行い、それら具体的活動から得た自分の体験をもとに、さらに内面を耕すといった、実践と内面の耕しとを統合させた教育を行うことができ、このことが今の子供たちに必要とされている。



価値観の形成を内面的資質の耕しと実践との統合の過程の中で図る必要性

豊かな社会的・集団的体験を通して、人間としての自分の生き方・在り方を求める必要性

２点目は、社会的・集団的体験が不足している今の子供たちに、社会的・集団的体験の場を組織しそこでの活動を通して、感性や実践力、社会性や協調性を高めていく教育の必要性からである。

このような理由から、領域「人間」は、人間尊重の精神に基づき、国際社会に生きる主体的な日本人の育成をはかるため、よりよい生き方を見つめ求める活動を通して、人間性豊かに生きる実践的な態度を育てることを目標としている。

③　教科・領域の時間数の再配分

新しい教科・領域の枠組みの設定、さらに内容の見直しを行うことで年間時数を［表１］のように考える。

どの学年も国語の時間が、現行の時間より減になっている。これは、国語の表現の領域の一部を他教科のなかの体験や具体的活動と連続して指導を行い、必然性のある場において発揮させた方が効果的であるという考えからである。よって国語そのものの内容を減らしているわけではない。

［新しく設定した本校の授業時数］　　［表１］

区分		第１学年	第２学年	第３学年	第４学年	第５学年	第６学年
各教科の総授業時数	国語	238 (7)	245 (7)	210 (6)	210 (6)	175 (5)	175 (5)
	算数	136 (4)	175 (5)	175 (5)	175 (5)	175 (5)	175 (5)
	生活	102 (3)	105 (3)				
	生活環境			210 (6)	210 (6)		
	社会					105 (3)	105 (3)
	理科					105 (3)	105 (3)
	家庭					70 (2)	70 (2)
	表現	136 (4)	140 (4)				
	音楽			70 (2)	70 (2)	70 (2)	70 (2)
	図工			70 (2)	70 (2)	70 (2)	70 (2)
	体育	102 (3)	105 (3)	105 (3)	105 (3)	105 (3)	105 (3)
道徳・学級活動(人間)		68 (2)	70 (2)	70 (2)	70 (2)	70 (2)	70 (2)
クラブ					35 (1)	35 (1)	35 (1)
総授業時数		782 (23)	840 (24)	910 (26)	945 (27)	980 (28)	980 (28)
現行総時数との差		－ 68	－ 70	－ 70	－ 70	－ 35	－ 35

３．副主題の意味

(1)　「子供主体の活動からみる教育課程の編成」の考え方

子供主体の活動からみる教育課程の編成とは、学習の主体者である子供の心を、具体的な活動や体験によって十分耕し、対象にかかわってみて生じる主観的な見方も大切にしながら、もの、人、ことについての認識を深めていく、そんな学習ができるように教育課程を編成していくことである。よって学習は、子供たちの具体的活動や体験が軸に構成されなくてはならない。

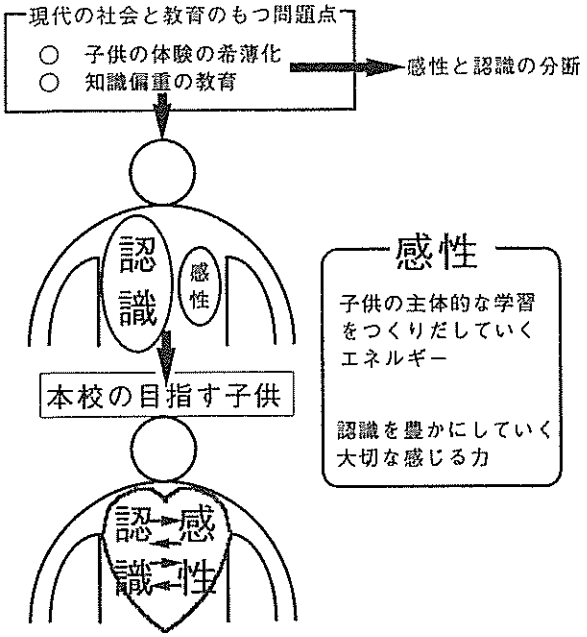
今、人間が社会のなかで積極的に生きている姿を考えるとき、変化の激しい社会、情報の氾濫している社会のなかで、自分自身がどのようにかかわり、考えをまとめたり行動や実践につなげたりすることができるかということが、人間に求められる資質・能力として問題になる。これからを生きる子供たちは、学習の対象に対して、他人ごとのような立場にたって客観的にものごとを理解していく学習だけでは十分でないと考える。今、求められている子供たちの学び方は、自分が見たり活動したりして感じたことに対し、自分の見方や考え方を大切にしながら働きかけ、そのものの本質を感じ、学びとるとともに、自分の在り方や自分の存在価値をも自覚していくといった主体的な姿である。

このような姿が学習において生まれてくる教育課程が編成されれば、本校がめざしている認識と感性の統一的発達ということの実現に向かっていくと考える。

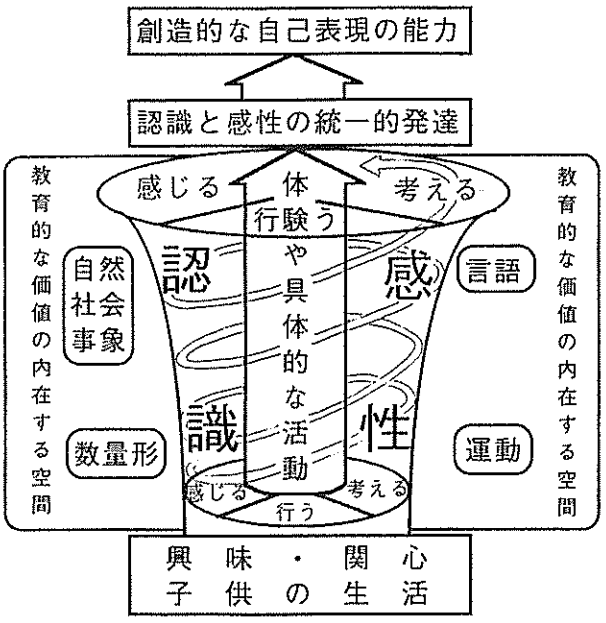
ここで、認識と感性の関係について考える。今、子供たちの感性は蝕まれている。学校はもう少し感性の教育に目をむけ、大切にしていかなくてはならないと考える。感性はカントもいうように認識の源泉であり、感性の豊かさが認識の深まりに強くかかわってくる。このように感性と認識とは分けることができない。しかし、現代の社会と教育のもつ問題点、つまり子供の体験の希薄化と知識偏重の教育の在り方が、感性と認識を分断してしまったと考える。今問題を感じることは、自分自身が使うことのできない知識、生きることに使えない知識が大部分をしめた子供が多いということであり、健全な形で認識が育ってきていない子供の現状である。

以上のようなことから、本校では認識と感性の統一的発達の姿を次のように考えている。

◎認識と感性の統一的発達のとらえ方



◎認識と感性の統一的発達の姿



感性の豊かさによって「よりよく生きる」ための認識が働き深まり、その認識の深まりによって、感性がさらに磨かれていく。この過程において、子供は、生きる意味、自分の存在価値、学びの喜び、自己表現の喜びを確かにしていく。このような姿で、環境と調和しながら生き、成長し続けることができることが、認識と感性の統一的発達に向かっている姿であると考える。

(2) 「子供主体の活動からみる教育課程の編成」を行なっていくための構想

子供主体の活動からみる教育課程の編成を行っていくために、内容の設定、目標の設定を次のような観点から考えていく。

① 内容取りだしの範囲と対象
- 教科・領域の考える教育的な価値が内在している環境とその環境のなかの「もの・人・こと」から

② 子供に求められている体験や知識・技能
- 子供が生きていく（生活していく）ことに身近で、必要不可欠な体験や具体的活動、知識・技能から

③ 子供に育成したい資質・能力
- 豊かな人間としての豊かな学力の育成から。具体的には資料Ｐ３、４に述べていること
  ●豊かな心、●豊かな創造力、●柔軟な思考力、●的確な判断力
  ●豊かな表現力、●積極的な行動力・実践力、●生きて働く知識・技能

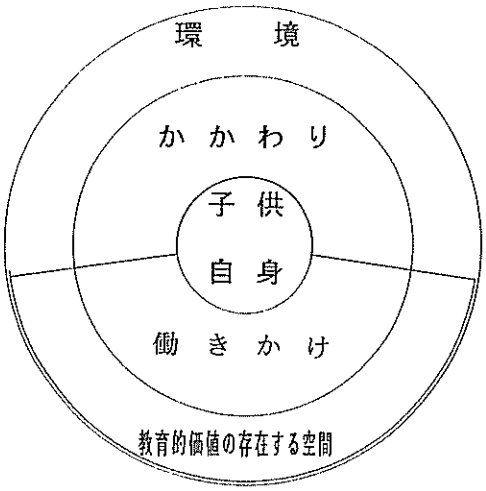
以上のような観点から考えられた目標・内容を、子供の発達段階に合わせ、教科のなかでの系統性、教科間の関連、指導時数を十分考えながら教育課程の編成を行っていく。

具体的に単元構想、授業構想を行っていく過程において本校では、「環境に一人一人の子供（自分）が旺盛にかかわっていっているか」ということを、子供の主体性を見ていく大切な視点と考えている。ここで言っている環境とは、教科・領域でねらう教育的価値の存在する空間であり、かかわりとは、子供たち自身による、その環境のなかに存在する教育的価値（子供にとっては、自分が問題解決あるいは課題解決をしていこうとするとき、自らもとめていくもの・人・こと）への働きかけである。子供たちは、自分の持った問題や課題の解決のために、思いや願いをもって、この環境の中で自分が求める「もの・人・こと」に働きかけていく。

働きかけの具体的な姿

○かかわっていく、もの・人・ことの選択
○もの、人、ことからの情報の収集、選択
○情報の加工・処理、
○もの・人・ことに対して感じとったこと、気付き、考えの表現、
○情報、感じとったこと、気付き、考え、表現物などの交換・交流
○もの・人・ことへかかわってみての判断・意思決定
○もの・人・こととかかわって学習し得たことの活用
○自分の考えやメッセージ、実践を、もの・人・ことに向けて発信

子供主体の活動とは



このように、環境に自ら働きかけることで、環境に対して何かを感じとる、環境にかかわりながら何かを感じとる、自分から発信する考えや表現、行為に何かを感じとる、自分が環境に発信してみて何かを感じとる、といった、感じとる力によって、自分と環境との間を密にしながら、ものごとの原理、法則にも気付いていくことができる。ここでは自分の働きかけでとらえた情報をもとに思考、判断、表現していく。よってここでのわかり方というのは、子供たち一人一人の持つ主観的なとらえ方と、より一般化、法則化していこうとする客観的なとらえ方がうまく調和されているようなわかり方でなくてはならない。子供たちが自分のもっている経験、見方・考え方・価値判断力を大切にしながら、さらにそれらの資質・能力を磨いていくのである。このような環境とのかかわりを大切にした学習によって、認識と感性の統一的発達がなされていく。それぞれの教科のなかで環境をどう考えるか、環境への働きかけの具体的姿をどう考えるかということは、各教科のなかで検討されていく。また特に今年は、子供が変わることをめざしている。子供の伸びの評価の観点は、以下のように考える。またこの観点は、本校が考えている生きる喜びを感じている子供像とめざすところは同じである。

子供の評価の観点

○子供たちの働きかけていく環境がどれだけ広がっているか。

○働きかけそのものが、質や量においてどれだけ高まっているか。

＝

生きる喜びを感じている子供

①感じたり、働きかけたりする対象が広がっていくことを自覚していること
②目的に応じた情報の処理活用の仕方がたかまっていることを自覚していること
③考えたこと、感じたことやその表し方が高まったとを自覚していること

4．各教科・領域の年間計画作成の立場

各教科におけるめざす子供像と年間計画作成の立場を次のように考える。

①は、めざす子供像、は年間計画作成の立場

国語科	① ことばを通して創造的に自己表現していく子供 ② 課題や目的を持った言語活動を重視するという立場での年間計画の作成
算数科	① 自ら数理を求め続ける子供 ② 数学的活動の体験を豊かにするという立場での年間計画の作成
生活科	① 身近な社会や自然に進んでかかわりを深める子供 ② 継続的なふれあいを重視するという立場での年間計画の作成
社会科	① 社会の形成者として社会生活をよりよくしていく子供 ② 社会をつくりだしていく活動を重視するという立場での年間計画の作成
理科	① 自然事象に対する新たな考えをつくり出す子供 ② 生活事象とのかかわりを見つめ直していく活動を重視するという立場での年間計画の作成
家庭科	① 自ら家庭生活を創造する子供 ② 家族（友達や地域の人々を含む）とのかかわりづくりの活動を位置づけた年間計画の作成
音楽科	① 音楽のよさを生かし、豊かに自己表現する子供 ② 創造的な音楽活動を中核とした年間計画の作成
体育科	① 主体的に運動にかかわる子供 ② 運動との一体感を味わう活動を重視するという立場での年間計画の作成
図工科	① 造形的な創造表現の喜びを味わう子供 ② 材料とかかわりながら想像表現を豊かにするという立場での年間計画の作成
表現科	① 豊かに感じ取り創造的に表現していく喜びを味わう子供 ② 多様な表現活動の経験を豊かにするという立場での年間計画の作成
生活環境科	① 生活環境とのよりよい関係をつくり出す子供 ② 生活づくりの活動を重視した年間計画の作成
領域「人間」	① ともに生きることの喜びを味わい豊かに実践する子供 ② 人にかかわる体験活動とその経験化を図る年間計画の作成

5．研究の成果

(1) 「生きる喜びを生み出す教育課程の創造」ということを研究主題にしている重要性から

◎ 生きる力をもった子供の育成をめざす教育課程の編成を行った。
◎ 認識と感性の統一的発達を促す教育を教育課程全体で行った。

現在、いじめや登校拒否、若者の自殺が大きな社会問題になっている。時と場を得た適宜指導も大切であるが、本校では、子供たちに生きる喜びを生み出すことを、新しい教育課程の研究を通して、また日々の授業を通して行っている。学校が楽しい、学習が楽しいと、子供たちが思うことが大切である。豊かな心を学力の中核にすえ、環境に旺盛に働きかけることを大切にすることで、一人一人の活動体験を豊かにし、生涯学習に向けての学び方を身につけさせ、自分の生活・生き方に活用できる知識・技能を身につけさせていることはたいへん価値があると考える。

(2) 子供主体の活動から教育課程を編成した成果から

◎ 子供に必要視されている体験の内容を重視し、年間計画の作成を行った。
◎ 自分自身の環境への働きかけを学習の基本にし、働きかけの具体的な姿を各教科で明らかにした。

今年度、「子供主体の活動からみる教育課程の編成」という副主題を設定し、子供の活動から年間計画を作る試みを行った。年度当初、子供の活動から年間計画を作成するとは、どういうことかを審議し、次のように研究の方向をとらえていった。現在、子供たちの体験の不足ということが、強く叫ばれている。すべてがそうではないが、今の学習内容というのは、教えられて覚えることで、あるいは、練習してできるようになることで、事が足りる内容もある。本校では「この教科のこの時期には、～のような体験をもっておくことが大切である」というように、子供にもたせておきたい体験の内容を子供の発達段階と系統性から考え、年間計画作成の立場とし、年間計画、年間指導計画作りと実践を行っていった。その結果、まだ十分とはいえないが、次のような子供たちの姿が目につくようになった。

○ 学習している全員の子供が、自分の考えや表現を作りだすことに意欲をもち、粘り強く学習に取り組んでいる姿
○ 活動や操作の仕方に慣れ、教師の指示や援助なしで自分で活動し、追求を進めている姿
○ 「実際～をやってみてわかったんだけど～」「～と話してみてわかったんだけど～」など、自分の働きかけを通して、感じ、考え、わかっていっている姿

子供たちの学びの姿は変わりつつある。子供の学習への能動性の発揮は従来よりも大きく伸びている。これは、個の能力差に関係なく、全員の子供が自己の存在価値を自覚でき、自分の高まりを感じることができる教育課程の編成が行われている成果だと考える。

また、子供主体の活動からの教育課程の編成は、内容をどのように統合したり、削除したりしていくかといった、これまでの課題であった内容精選の観点が、本校なりの考え方で明らかになりつつあ

る。例えば、算数科においては、内容はすでに精選されつくしているので、削除する内容はないとまで言われてきたが、子供に体験させておきたい数学的活動を核に、年間計画作りを考えると、例えば大きな数など、1000までの数、10000までの数などと分けて行っていた学習を統合することができる。つまり、その単元において価値ある数学的操作や活動を十分に体験させる学習で目標を達成できるのである。従来の指導書の内容に縛られない、独自の考え方による内容設定を行うことができる。

(3) 新教科、新設教科、新設領域の設定から

◎ 今後の教科の方向性を定めるうえで価値がある基本的な考え方を、各教科明らかにした。

新教科については、従来の学習像を一歩進めた学習像に迫りつつある。子供主体ということで、これまでも言われてきたことではあるが、内容の習得を大切に学習を考えると、あまり授業は変わらないのが現状であった。しかし、活動を大切にした本校の学習の立場は、方法論にとどまらず、活動を切り口に内容論にまで踏みこみつつある。

中教審委では、教科の再編には踏み込まないという報告があったが、本校で考える新設教科、新設領域の基本的な考え方は、今後の教育の方向性を定めるうえで、意味ある示唆を与えていくと考える。具体的には、生活環境科は、客観的な学習者から主体的な生活者を育てるという点で、従来の子供観を変えている。表現科は、表現の方法を教えるのではなく、表現者を育てるということで、これまでの音楽や図画工作とは目標を異にしている。領域「人間」は、人間の生き方・在り方を「実践と価値の内面的自覚の往復的な学習」を通して考えていくようにし、実行性までを大切にしている。子供の姿からも変容が見られる。生活環境科では、身近な社会的問題や関心を見過ごしてしまうのではなく、そのことに関心をもったり、積極的に働きかけようとしたりする姿が見られるようになってきた。また領域「人間」では、かけがえのない自分や他者を大切にしようとする思いやりの心、共生・共存の心などの伸長が図られてきている。また、どちらの教科も、目的達成のために、友達あるいは地域の人などと意欲的にかかわり、集団で学習をねりあげ、深めていく姿が見られるし、対人関係のよりよい在り方を学んでいる。

6. 課　　題

① 豊かな学力が身についた子供の評価が難しいこと

本校の教育課程における学習は、豊かな学力の育成といった観点から、資質・能力の高まった子供をこれまで以上に育てていると確信している。しかし、本校が考えている豊かな学力の身についた子供の評価は大変難しい。人間の評価観を大きく見直し、新しい評価の観点を明らかにしていくことが求められる。

② 学習環境、学習時間、指導体制等を含めて教育条件の弾力化等について考察を広げること

学習時間や指導体制の弾力化の必要性については、昨年度までの研究においても多くの教科から課題として上がってきている。特に新設教科・領域では次のようなことが課題として上がってきている。

○表　現　科…B型題材（表現経験を生かして、様々な表現方法で表す内容）では、1つの授業において様々な表現方法で表現できる場を準備し、子供に選択させ活動させていくので、効果的なＴＴ指導のあり方が課題になっている。

○生活環境科…子供の主体的な活動を進めていくと、学習の複線化や時間の弾力的な運用、外部人材の活用などの課題が出てきている。

○人　　間…現在週2時間の時間の枠のなかで行っているが、体験に要する時間と人間で取り扱う内容を考えたとき、配時にゆとりが欲しい。1年生から6年生までの内容領域ごとに、望ましい体験とそこで培う力との系統化を図ることや他教科、学校行事との関連を再度検討する必要がある。

③　今後も本校が作成した教育課程の完全実施を行うとともに、本校が考える教育課程の有効性を臨床的・実証的に検証し、この教育課程による実践の成果と課題をより明確にすること。

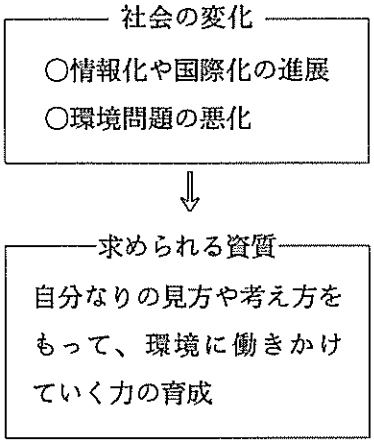
生活環境とのよりよい関係をつくり出す生活環境科学習

── 生活づくりの活動を重視した年間計画の作成 ──

生活環境科部　　芋生　修一　　山下　浩徳

1．生活環境科設定の理由

生活環境科は次のような理由から設定した。

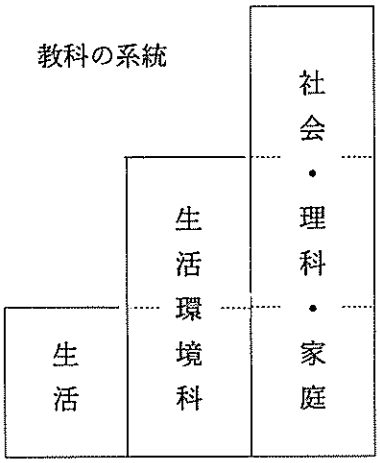


１つ目は、身近な環境の中で自分の生き方を考える教科の必要性からである。

情報化や国際化の進展にともない、私たちの身の回りの環境が目まぐるしく変化をしている。また生活環境の悪化が深刻な問題として取り上げられるようになってきた。このような社会変化にともない、自分が環境の中でどのように生きていくのか、一人一人の主体的な判断や行動が今まで以上に大切になる。つまり、これからの社会では、環境の中で主体的に生きていく力を身につけた人間が求められているのである。

そのため学校教育においては、一般化された知識ではなく、自分なりの見方や考え方をもって、環境に働きかけていく力を育てていくことが大切だと考える。このようなことから、具体的な活動を通して身近な環境に働きかけ、個々のよさを生かしながら共同で学びあう教科として、生活環境科が必要になった。

２つ目は、生活科のよさを中学年や高学年に伸ばしていこうという点からである。



これまで子供たちは、生活科の学習で、主体性や能動性を伸ばし豊かな発想力を育みながら、自己の願いをかなえてきた。このような体験を通して自己実現をしていくような学習をしてきた子供たちにとって、社会科・理科へ変わったときに、仮説をたてて行う問題解決的な学習の仕方や社会・自然事象のきまりや仕組みの追究に戸惑いを感じることがあった。実際、学年が変わったからといって急に知的な能力の発達があるわけではない。また、社会事象と自然事象を混然と未分化で取り扱ってきた子供たちに、突然社会事象と自然事象を分けて学習することにも無理がある。そこで、低学年生活科で育ってきた子供のよさを生かしながら、高学年の社会科・理科へと橋渡しをする教科として生活環境科を位置づけた。

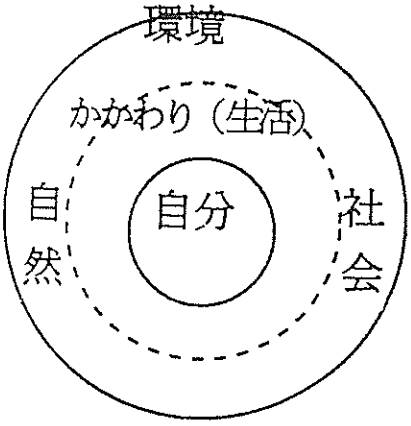
このような生活環境科の特徴として、身近な環境を社会事象と自然事象に分けずに一体的に取り扱うこと、具体的な活動や体験を重視することなどがあげられる。生活環境科は、生活科で身についた主体性や能動性、豊かな発想力、自己実現的な活動の上にたって、確かな社会認識や自然認識を行い、身近な環境について考えていく教科として考えている。

2．本校の考える生活環境科の目標

自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心を持ち、具体的な活動や体験を通して、環境構成者としての主体的な見方・考え方を養い、生活環境とのよりよい関係をつくっていこうとする実践的な態度を育てる。

生活環境科では、主題にあげているように、生活環境とのよりよい関係をつくっていこうとする実践的な態度をねらっている。そこで、学習において次のことを大切にしている。

１つ目は、子供を学習者から環境構成者としてとらえなおすことである。



まず、子供を学習者という立場から環境構成者という立場に立たせたい。環境構成者という立場に立つことで、子供は社会や自然の事象を客観的にとらえるのではなく、それらがもつ自分にとっての意味を考えていくことになる。そのことが、環境の中で自分の生き方を考えていくことにつながってくると考える。具体的には、子供を生活者という立場でとらえることで、これまでのように社会や自然の事象そのものを学習の対象にするのではなく、社会や自然の事象と自分とのかかわりを学習の対象として考えていきたい。かかわりを学習対象とすることで、社会や自然のきまりや仕組みを見いだすだけでなく、自分と環境との関係を見いだしたり、自分が環境の中でどう行動するべきかを考えていくことができる。

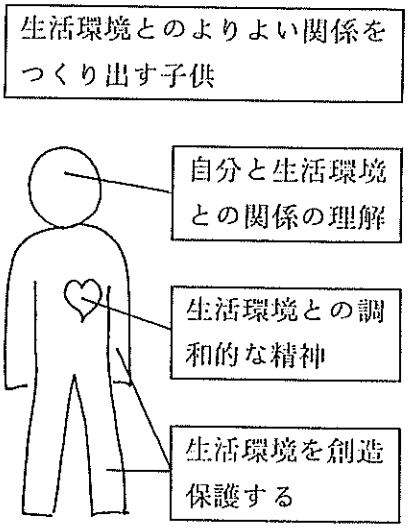
２つ目は、子供の具体的な活動や体験を大切にすることである。

生活環境科では具体的な活動や体験を通して学習することを基本とする。それは、これまで生活科で主体的に活動しながら学んできた低学年の子供たちにとって、体験的に学習をすることが、探求心を育んだり自ら納得して理解をしたりしていくのに大切だと考えているからである。また、願いを達成するような体験そのものも学ぶべき内容だと考えているからである。しかし、生活科のように体験そのものを内容とするだけではなく、生活環境科では体験を通してきまりや仕組みを見いだしていくことも大切にしたい。それは、中学年の子供たちが、「なぜ」「どうして」という疑問をもち、事象に潜むきまりや仕組みを明らかにすることに喜びをもつ時期だからである。

３．主題の意味と重要性

(1)　主題の意味

「身近な環境とのよりよい関係をつくる」とは、環境と自分との相互的な関係を認識するとともに生活環境との調和の精神をもって、生活環境に主体的に働きかけていくことである。これは次のような点に特徴がある。



１つ目は、子供が身につける知識や理解の内容についてである。社会や自然の事象の仕組みやきまりそのものが知識ではなく、社会や自然の事象と自分とがどんな関係にあるのかを知ることが知識である。そして、体験を通して学ぶ、その学び方も知識の中身である。このような知識は、環境構成者であるという自覚をうながすと共に、これから環境に働きかけるために使われる生きた知識となる。

２つ目に子供の心情についてである。自らの興味で、生活環境を単に利用したり楽しんだりするだけではない。生活環境に恩恵を受けるばかりではなくて自分もなにか役立ちたい、という調和の精神をもつのである。最終的には、このような子供は、例えば「自分たちの水源としての川」や「自分の好きな生き物を育む川」などの、「川への見方や考え方」をもって、川を大切にするためゴミを拾ったり水を大切にしたりする実践を行おうとするのである。

(2) めざす子供の具体的な姿

① 自分にとっての事象の意味を見直し、願いや問題意識を持ってよりよい関係を求めようとする姿。

② 事象に働きかけていく過程で、事象の持つ性質やきまりなどを発見したり、事象が持つ自分に取っての意味を考えたりして、生活環境と自分の関係を考えている姿。

③ 事象を追究する過程で得た知識や理解を、調和的な精神で自分の生活に生かしている姿。

④ 自分と生活環境のかかわりを振り返り、生活環境との関係の深まりや自分の成長を感じている姿。

(3) 内容の考え方

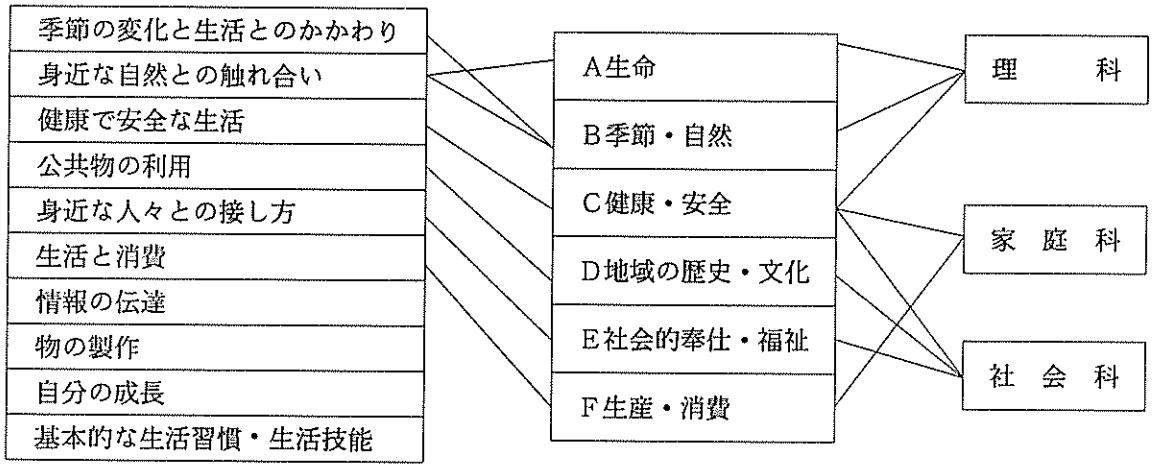
上述の目標や主題に迫るために、生活環境科の内容を設定するにあたって、次の点から具体的な内容を考えた。

基本的には自分と身の回りの社会や自然事象とのかかわりを学習していく。これを前提として、生活科の１０の視点の発展・統合や社会科・理科の内容へのつなぎを考慮して、子供と生活環境とのかかわりを「A生命」「B季節・自然」「C健康・安全」「D地域の歴史・文化」「E社会的奉仕・福祉」「F生産・消費」の６つの領域で考えている。

そして、設定した領域においてねらうべき知識や態度を考えた。具体的には自分と対象がどんな関係にあるかを理解することを獲得すべき知識内容とし、対象へ調和的な精神を発揮した姿を期待すべき子供の態度とした。

さらに、中学年の子供たちが調べたり、作ったり、育てたりして環境に主体的に働きかける姿から具体的な活動を明らかにしていった。具体的な系統や内容は以下のとおりである。

① 生活環境科の内容系統



② 生活環境科の内容

A生命	身近な動植物を育てたり人の体を調べたりして、その活動や成長の様子をとらえ、人や動植物の生命を大切にしようとする態度を育てる。
B季節・自然	身近な自然を観察したり四季の行事に参加したりして、地域や季節などの環境と人や動植物の関係をとらえ、環境を守ろうとする態度を育てる。
C健康・安全	生活で使われいる電気や磁石、水などを調べ、それらをうまく利用して、よりよい生活を願う態度を育てる。

D地域の歴史・文化	地域の歴史や文化、伝統を調べ、自分たちもそれらを守ったり参加したりする態度を育てる。
E社会的奉仕・福祉	地域での奉仕活動や福祉活動の様子を調べ、進んで自分たちも参加・協力する態度を育てる。
F生産・消費	地域の環境を生かした生産活動や自分たちの消費活動の様子を調べ、地域人々や自分の生活に役立つよう工夫することができる。

4．副主題について

(1) 副主題の意味

「生活づくり」とは、自分の生活を支えている事象と自分との関係を調べ、環境の中でよりよく生きるため自分がどう行動したらよいのか考え、環境の創造・保護などの活動を実践していくことである。そのために、生活づくりの活動においては次のことを大切にしている。

1つ目は自分の価値観をもった活動である。同じ事象に対してもそれぞれの生活を背景として見るため、一人一人の見方や考え方は違う。例えば、前述のように川の価値は水源としても生き物を育てるものとしても意味付けることができる。そこで子供の事象に対する願いや意味付けを大切にして、何をどのように調べ、行動するか自ら選択して行う活動であることを大切にする。

2つ目は創造・保護などの実践を行う活動である。生活づくりは自分と環境との関係を知ることを目的とした、手段としての活動ではない。環境と自分の関係をどのように高めていくか、考え、やってみる目的的な活動である。そこで、自分の生活で実践していくことを大切にする。

単元においては、体験を通して自らの問題を見つけ、問題を追究して自分と事象との関係を見いだし、見いだしたことを自分の生活の中で生かすことを行う。このような活動を繰り返し行うことで、環境と自分との相互的な関係や調和的な精神を学んでいくのである。

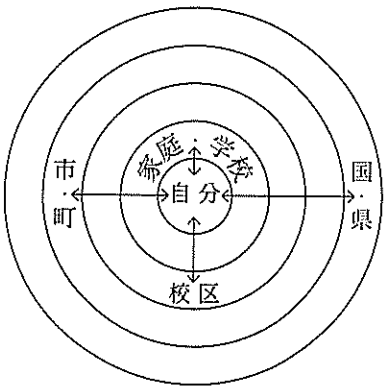
(2) 生活づくりの活動を重視する年間計画作成の考え方

年間指導計画作成にあたっては、子供たちが生活づくりの活動をする中で、生活環境とのかかわりを広げたり深めたりしていけるように配慮している。具体的には、次の2点を考慮した。

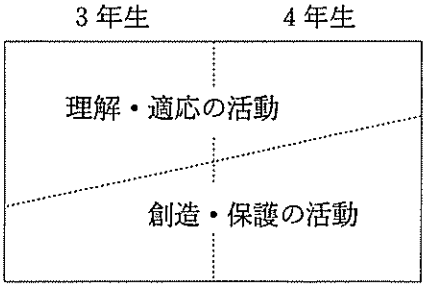
1つ目は、子供たちにとってすぐ操作して直接に体感できる身近な事象から、だんだん操作しにくい事象へとかかわりが広がるように配列している。そのため、基本的には、見たり聞いたりする経験の多い空間的に身近な事象や現在の事象から、空間的に離れている事象や時間的に過去や未来の事象へと配列している。実際的には、3年「荒津ウォークラリーをしよう」から4年「私の福岡市を探検しよう」のように学年が進むにつれ、空間的に身近なものから遠くのものを取り上げている。また、時間的には学年の最後に「未来の福岡を考えよう」のような単元をおいている。

2つ目は、環境に働きかける活動が、環境を理解し適応することから環境の創造や保護へと向かうようにしている。これは、一年間を通して環境をつくり出す力が高まるように配慮したからである。子供は始めからよりよい環境を創造、保護することは難しい。まず、事象に働きかけ事象を知ることから始まる。そして事象を追究して

学習対象の同心円的広がり



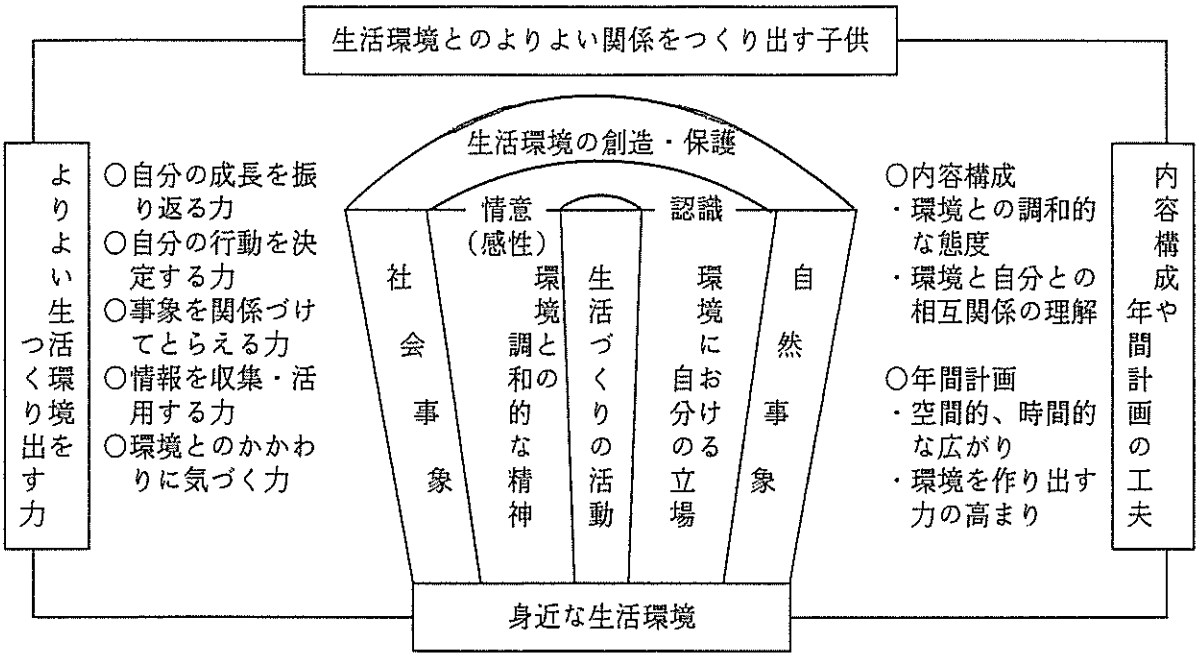
環境に働きかける力の高まりの



知ったことを自らの生活に生かしたり、自分がどうあるべきか考えたりする。そのために、「わたしの福岡市を探検しよう」のように、学年の前半は事象や事象と自分との関係を追究する活動を多くして、自分と環境とのかかわりに気づく力や情報を収集・活用する力、事象を関係付けてとらえる力などを育てる。後半は「未来の福岡を考えよう」のように、環境の創造や保護などの活動を多くして、自分の行動を決定する力や自分の成長を振り返る力などを育てる。

また、生活づくりの活動の様相から、家庭生活を起点として主に活動が外へ向かう「町づくり」と、生活の質的な見直しをしていく「季節にあった生活づくり」に類型化している。

5．構　想　図



6．指導の実際と考察（次頁参照）

7．研究のまとめ

生活環境科について、学習への意識の様子を調べてみた。すると、「自分の考えで学習を進める」「生活環境科で学習したことを家庭でもやっている」など、学習への主体性・能動性や日常化などの点で、理科・社会を学習していたときと比べて高い伸びが見られた。また、実際の子供の姿でも、事例１、２のように、自主的に自分の問題に応じて、地域の人や施設に調べにいく姿が見られた。そして、最終的には地域の祭りに参加したり、室見川の清掃や節水をしたりして、自分の生活の向上をはかる活動を行っていった。このようなことから、生活環境科の内容を６つの領域と子供の活動の姿から設定したことは、子供の主体的な活動や環境に対する見方・考え方を育てるうえでよかったと考える。また年間指導計画の作成においても、年間を通して理解から創造へ向かうという配列の仕方は、環境に働きかける力を育てるとともに、初めに環境に対する理解をもっていることで、単なる感情的ではない働きかけへと高まっていった。

内容面における改善点は、自分自身の成長を取り扱う単元を入れることである。どの単元も自分とのかかわりを中心にすえて学習しているが、自分自身そのものを取り扱う単元がなかった。自分自身の成長や体の仕組みなどを学習する単元を設定する必要がある。指導面での改善点は、子どもの主体的な活動を一層進めるために、学習の複線化や時間の弾力的な活用、ゲストティーチャーの活用などを行うことである。

〈参考文献〉　無藤　隆著　　『体験が生きる教室』　金子書房　　１９９４年

第３学年　生活環境科年間計画（210時間）

月	単　元　名	ね　ら　い	内 容
4月	1．わたしの町作り（２８） ①荒津ウォークラリーをしよう１	○自分たちの学校の周り（地域）の様子に関心もち、調べたい内容を明確にすることができる。	ＡＢ ＣＤ ＥＦ
5月	②花いっぱいの町にしよう１	○地域を花一杯にするために、植物の成長に必要な土作りを行い、花を植えることができる。	ＢＥ
5月	2．季節にあった生活作り（２０） ①生活の中の音について考えよう	○生活の中での音の働きについて調べ、音を通して自分の生活をよりよくすることができる。	Ｃ
6月	②夏の虫と仲良しになろう	○虫の成長や活動の様子を調べ、自分の生活の中で楽しく育てることができる。	ＡＢ
6月	3．わたしの町作り（１３） ①花いっぱいの町にしよう２	○花の設置場所を吟味・決定し、地域の人々と一緒に花一杯の町にすることができる。	ＢＥ
7月	②太陽の光を利用しよう	○太陽の動きや日向・日陰の様子を調べ、花を設置する時に役立てることができる。	ＢＣ
7月	4．季節にあった生活作り（１１） ①夏を楽しくする道具を作ろう	○夏を楽しく過ごすために、水や空気の性質を使った使ったおもちゃを作ることができる。	ＢＣ
9月	5．わたしの町作り（４２） ①草花や野菜を育てる土作りをしよう	○草花や野菜を育てるときに必要な土作りを自分たちで行うことができる。	ＢＣ
9月	②とよのか苺を育てよう	○農家の苺作りを調べ、自然とのかかわりをとらえ、自分の苺栽培に生かすことができる。	ＢＦ
10月	③買い物作戦をしよう	○これからの買い物に関心をもち、品質・価格や環境保全や資源保護を考えた買い物ができる。	ＥＦ
10月	6．わたしの町作り（３０） ①荒津ウォークラリーをしよう２	○地域に残る伝統的な祭りや楽しい催しを調べ、探検マップに表現することができる。	ＢＤ
11月	②地域の祭りに参加しよう	○地域に残る伝統的な祭りを調べ、祭りの意味を考えて楽しく参加することができる。	ＢＤ
12月	7．季節にあった生活作り（２７） ①寒さに負けない工夫をしよう	○太陽の光の性質を明らかにするとともに、光を生活に活用することができる。	ＢＣ
1月	②自分たちの体について考えよう	○体を大切にする心情や生物を愛護する態度を身に付けるとともに、冬の過ごし方を考える。	ＡＢ Ｃ
2月	8．わたしの町作り（３２） ①荒津ウォークラリーをしよう３	○地域の変化と発展を関連付けてとらえ、自分たちの地域のよさを再発見することができる。	ＢＣ Ｄ
3月	②きれいな町をつくろう	○磁石の性質を使って、きれいな町にするとともに、自分たちの町を自慢することができる。	ＣＥ

第４学年　生活環境科年間計画（210時間）

月	単　元　名	ね　ら　い	内 容
4 月	１．わたしの町作り（１６） ①　わたしの福岡市を探検しよ	○福岡市にはさまざまな自然や社会の施設があることに気づき、利用できるようにする。	ＢＤ
5 月	２．季節にあった生活作り（１６） ①　わたしの町は自然がいっぱ （春）	○生き物を育てたり世話をしたりして、春の動植物の様子をとらえる。	ＡＢ
6 月	３．わたしの町作り（１８） ①　リサイクル作戦をしよ	○自分とごみとのかかわり方を見直し、ごみ処理の対策や事業に協力できる態度を育てる	ＡＢ
7 月	４．季節にあった生活作り（２２） ①　夏のくらしを工夫しよう(10) ②　わたしの町は自然がいっぱ （夏）(12)	○人の活動は季節によって特徴があることに気づき、夏に応じた生活を送るようにする ○生き物を育てたり世話をしたりして、春から夏にかけての動植物の変化をとらえる。	ＢＣ ＡＢ
9 月	５．わたしの町作り（３５） ①　電気を使おう(13) ②　私達の室見川(22)	○身近な電気や光の働きを調べるとともに電気の有効な使い方を考える。 ○室見川の働きを調べ、川の生き物や水道水などを通して自分とかかわっていることに気づき、室見川を大切にする。	Ｃ
10 月	６．季節にあった生活作り（１０） ①　わたしの町は自然がいっぱい （秋）	○生き物を育てたり世話をしたりして、夏から秋にかけての動植物の変化をとらえる。	ＡＢ
11 月	７．わたしの町作り（２９） ①　便利な交通プランを作ろう(15) ②　他の地域の人々と友達になろう (14)	○交通機関に、自分が恩恵を受けていることに気づき、交通渋滞や事故の防止のために積極的なかかわり方を考える。 ○福岡市と他地域との関係を調べ、それぞれの特色から、自分にとっての郷土を考える	ＣＥ ＤＥ
12 月	８．季節にあった生活作り（２５） ①　冬のくらしの工夫をしよう(15) ②　わたしの町は自然がいっぱい （冬）(10)	○人の活動は季節によって特徴があることに気づき、冬に応じた生活を送るようにする ○生き物を育てたり世話をしたりして、秋から冬にかけての動植物の変化をとらえる。	ＢＣ ＡＢ
1 月	９．わたしの町作り（１２） ①　水の行方を探ろう	○水の行方を調べ、水の循環や下水道の仕組みなど、自分と水がかかわっていることに気づき、水を大切にする。	ＢＣ Ｅ
2 月	10．わたしの町作り（２７） ①　未来の福岡を考えよう(15)	○地域の人々の生活の向上や地域環境から、地域開発について、自分の考えをもつ	ＤＥ
3 月	②　くらしと世界(12)	○外国の人々との交流を通して、共通点や相点をとらえ、外国への関心を高める。	ＤＦ

6．指導の実際と考察１

(1) 単元名　　地域の祭りに参加しよう（第３学年）　　芋生修一

(2) 年間計画における本単元の位置付け

本単元は、３年生後半の単元であり、生活環境の素晴らしさに触れ、それらを保護しようといった「生活づくりの活動」を位置付けた単元である。

これまで、「町作りⅠやⅡ」の単元で地域の活動に参加しながら、学校周辺の地域の人々の様子や町作りに対する思いを学習してきている。また「町作りⅢ」では、福岡市の人々の生産・消費に関する出来事を追究して、自分たちの消費生活の在り方を考えてきている。このような中で自分の生活を支えるものとして、地域社会に対する見方・考え方を深めてきている。

そこで本単元では、地域に残る伝統的な祭りにおける歴史的な変遷や祭りをつくり出す人々の努力・工夫、祭りのもつ意味などを調べていく過程で、地域の変化の様子や伝統、文化に対する人々の願いや思い入れをとらえ、地域の発展を願う態度を育てようとするものである。このことは、子供の変化に対する見方・考え方を深めるとともに、事象を積極的に自分の生活の中に取り入れ、それを守っていこうとする環境の保護へ向かう態度を育てる上からも意義深いと考える。

(3) 目　　標

① 地域に残る伝統的な祭りや催しを調べ、祭りや催しの意味や人々の願い、努力・工夫を考えて、それらを積極的に守ったり自分が楽しく参加したりしていこうとする実践的な態度を育てる。

② 祭りの様子をマップに表現したり、祭りを支える人々の努力・工夫を調べたり、祭りの性格の違いを比較検討したりしながら、祭りに対する自分のかかわり方について考えることができる。

(4) 計　　画（約２４時間）

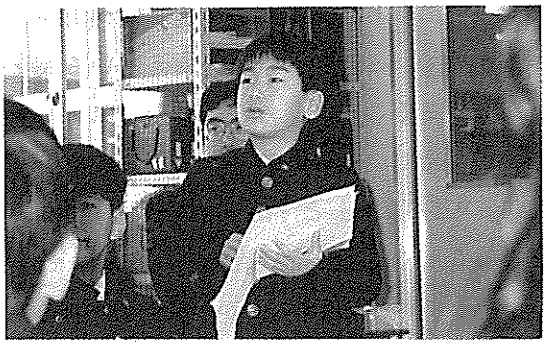
ね　ら　い	学　習　活　動	配　時
○ 自分が体験したり調べたりした祭りの様子を語り、祭りに対する人の生き方にふれる。	１．福岡市や自分たちの住んでいる地域の祭りを調べ、祭りマップに表現する。	７時間
	(1) 福岡市や地域の主な祭りについて調べる。	③
	(2) 調べた祭りをマップに表現し祭りの多さを再発見する。	③
	(3) 祭りに真剣に取り組んでいる人を紹介し、『どんたく』や『山笠』などを調べる学習問題を設定する。	①
	＜学習問題＞『どんたく』や『山笠』などの祭りの様子について調べよう。	
○ 祭りに詳しい人々や祭りを中心的に進めている人々を取材し、祭りに対する情報を集める。	２．福岡市の祭りについて調べ、その歴史や特色、祭りを支える人々の様子、祭りの性格の違いなどを話し合う。	12時間
	(1) 福岡市に残る伝統的な祭りとしての『博多山笠』や『博多どんたく』などについて調べる。	⑥
	(2) 調べてきたそれぞれの祭りの様子や人々の願いを発表し合い、祭りの性格の違いから新たな課題をつくる。	②
	＜新たな課題＞『博多祇園山笠』は、『博多どんたく』と同じような市民の祭りだろうか。	
	(3) 祭りに対する願いやそれぞれの性格の違いを比較し、祭りに対する自分の考えについて話し合う。	④
○ 再度自分の地域の祭りを調べ、祭りに楽しく参加する。	３．自分たちの住んでいる地域の祭りについて再度調べ、積極的に祭りに参加していく。	５時間
	(1) 祭りを再度調べ、人々の参加の様子や意識などを調査し発表する。	④
	(2) 自分の地域の祭りへの参加の計画を立てたり、実際に参加した様子を祭りマップに位置付けたりする。	①

(5) 子供の反応と考察

［祭りと出会う段階］…祭りへの関心を高め、学習問題をつくる。(1～7／24時間)

ここでのねらいは、自分が体験したり調べたりしてきた祭りの様子を語り、祭りへの関心を高め、学習問題を設定することである。

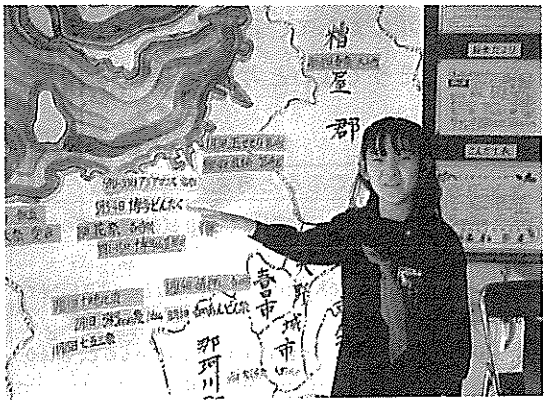
そこでまず、祭りへの関心を高めるために、自分たちが知っている祭りをたくさん出し合わせた。子供たちは、自分の住んでいる地域での祭りの様子やそれに参加したときの体験談を得意になって語ってくれた（写真①)。



＜写真①祭りの様子を語るＡ児＞

様々な体験談を語る中で、まだまだたくさんの祭りが福岡市にはあるようだという見通しをもち、どんな祭りが行われているかを調べるようにした。

次に、地域の人々や家族への聞き取りによって調べた祭りは「いつ、どこで行われているのか」といったことをカードに記入した。そして、福岡市とその周辺を描いた白地図に位置付け『祭りマップ』を作成した（写真②)。



＜写真②祭りマップへの位置付け＞

『祭りマップ』を作成すると、祭りの多さとともに、祭りの種類や時期も明らかになっていった。たくさんある祭りの中から子供たちがよく知っている『博多どんたく港祭り』と『博多祇園山笠』の様子や祭りに参加している人々の様子をＶＴＲで見せた。子供たちは、２つの祭りが福岡市の代表的な祭りであることを知ると、それらの祭りについてもっと詳しく調べていこうとする学習問題を設定した。

考察１

子供が祭りについての関心を高め、もっと祭りについて調べてみたいといった思いや願いをもたせるために、これまで体験した祭りについて語らせたり地域の祭りを調べて『祭りマップ』に位置付けたりする活動を行っていった。祭りに参加したことのない子供も、友達の楽しそうな祭りの話に引き込まれ、自分たちも祭りに参加したい、もっと祭りについて調べたいといった祭りに対する関心を高めていった。また、福岡市及びその近郊で行われる祭りの数を数値化し資料として提示したり、学級のみんなが知っていた『博多どんたく港祭り』や『博多祇園山笠』を推進している人々やその人の願いをVTRで紹介したりした。そのことで、自分たちが住んでいる福岡市の祭りの多さに対する驚きとともに、もっと祭りのことについて調べたいといった意欲を引き出し、学習問題を設定する結果となった。このことは、子供の地域における変化の様子を追究する契機をつくる上で有効であったし、何よりも伝統的な祭りに対する関心をもち、自ら地域に働きかけようとする意欲あふれる姿を引き出す上で有効に働いたと考える。

［祭りの意味や人々の姿を探る段階］…祭りに対する自分の考え方を深める。(8～19／24時間)

ここでのねらいは、祭りに詳しい人々や祭りに命を懸け、一生懸命になている人々を取材し、中心的に祭りを推進している人々への共感やそれぞれの祭りの性格の違いから、祭りに対する自分の考え方を深めていくことである。

子供たちは、早速『博多どんたく港祭り』や『博多祇園山笠』の祭りの様子やその意味、祭りを支える人々の様子などを調べるために、祭りを推進する人々への聞き取りや博物館、神社などの見学・調査などを行い、祭りに対する資料を収集して自分なりにまとめていった。そして、子供がまとめた資料や

教師の資料をもとに、自分が調べた『博多どんたく港祭り』や『博多祇園山笠』といった祭りについて発表していった（写真③）。この発表の中で子供たちは、どの祭りにも祭りの始まった理由や人々の願いが生きていること、祭りを支えている人々の努力・工夫があること、祭りが人々のふれあいや生活に潤いを与えていることをとらえていった。それと同時に、『どんたく』と『山笠』では、祭りの形態に違いあることに疑問を持ち始めていった。そこで、もっと祭りに対する自分のかかわりや考え方を深めていくために、「博多山笠は、市民の祭りといえるか否か」といった新たな課題を設定し、その課題についての自分の考え方を交流することにした。子供たちは、新たな課題に対して、市民に尋ねたり新たな資料収集を行ったりしていった。市民の祭りであると考えた子供とそうでないと考えた子供の根拠は下の＜表１＞のとおりである。



＜写真③調べた祭りの発表＞

子供たちの考えの根拠＜表１＞

市民の祭りであると考えた主な根拠	市民の祭りではないと考えた主な根拠
① たくさんの見物客もいて、市民を楽しませてくれる(テレビや新聞の資料、自分が見物にいった体験から) ② 昔は博多の町だけの祭りであったけど、今では天神などにも山笠を見せている。（文献資料から） ③ 『博多祇園山笠』を真似て、『子供山笠』なども行っているので、市民の中に取り入れられている。(子供山笠に参加した体験をもとに) ④ 福岡市の祭りとして全国でも有名になっているし、外国でも紹介されている。(市民の意識調査や情報案内版の資料をとおして)	① 『どんたく』はだれでも参加できたのに、「山笠」に実際に参加する人々は、一部の人に限られている。女の人は参加できない。 ② 博多区の一部で場所も限られている。(これまで調べてきた祭りの特色をもとに) ③ たくさんの人々が楽しみ、嬉しい気持ちになるのは、みんなが参加できる『どんたく』であり、『山笠』ではない。(どんたくのねらいやどんたくを推進する人々の願い) ④ 山笠の始まりが、博多の人に流行った疫病をなくすために行った山笠だから、博多の人々を救う祭りなので博多の人の祭りである。

子供たちは、祭り振興会の人をゲストとして教室に招き、『山笠が市民の祭りか否か』についての自分の考えとその根拠を交流していった。子供たちの論争の焦点は、「誰でも参加できる祭りが市民の祭りであり、見物者も祭りの参加者であるかどうか」といった祭りのとらえ方の違いにあった。このような論争の根拠の吟味を行った後、ゲストの人の話を聞くことにした（写真④）。根拠の吟味とゲストの話によって子供たちは、



＜写真④ゲストによる話＞

○祭りはみんなの力が重なって初めて作り出すことができるのだ。見物者の協力も必要だ。
○女性もいろんなところから祭りに参加していると言うこと、見物者も参加者だと考えてよいことから市民の祭りだといえる。また、地域の人との結び付きが大切だと感じた。

など、祭りに対する考え方の深まりが見られた。

考察２

子供たちは祭りを推進する人々への聞き取りや博物館、神社の見学・調査など、主体的な活動を連続的に行っている。これは、祭りに対する関心が高まっている姿であり、自分とのかかわりがもてた姿でもあると考える。また、追究活動をとおして、祭りを支えている人々の生き方や願い、人々の生活における祭りのもつ意味、祭りの歴史的な変遷や由来をとらえることができている。さらには、２つの代表的な祭りの意味を追究する活動から、祭りの形態や位置付けの違いを取り出し新たな課題を設定している。この時点での子供の祭りに対する考え方の共通性は、みんなが参加できる祭りが市民の祭りである

ということである。そこで、市民の祭りと考えた子供は、博多の町だけでなく、天神や香椎などにも飾り山笠が設置してあること、女の人なども洗濯や食事作りで参加していること、祭りの見物者も水をかけたり声をかけたりしてみんなでその祭りを盛り上げ参加していることをその根拠としている。一方、市民の祭りと考えない子供は、一部の人の参加であること、人々の願いが博多の人々の健康を願っていること、山笠の起こりが博多の町の人々を対象にしていることなどを根拠としている。自分の体験（自分の身内や通り掛かりの人に聞いて調べたこと、資料から考えたこと、自分の実際の体験）をもとに、考え方の違いを交流していったことは、地域の広がりとして祭りを考えている子供、人の広がりとして祭りを考えている子供など、子供たちの祭りに対する自分の考えを引き出すことに有効に働いたと考える。しかし、『見物者』についての解釈の違いをもっと具体化して吟味することで、子供一人一人の祭りとのかかわり方に迫っていくことができたと考える。



<写真⑤祭りの様子の違いを調べるA児>

[地域の祭りに生かす段階]…進んで地域の祭りに参加する態度を身につける。(20～24／24時間)

ここでは、再度自分の地域の祭りを調べ、祭りに対する関心をより一層もつとともに、進んで地域の祭りに参加する態度を身につけることをねらいとしている。

祭りに対する考え方が深まった子供たちの中には、自分の地域で行われている祭りに関心を示し、再度自分の地域の祭りを調べ、参加したいと願う子供がみられた。そして、早速、祭りに参加しその様子を発表したり、参加した祭りについて新たに祭りマップへ位置付けたりする子供も現れてきた。

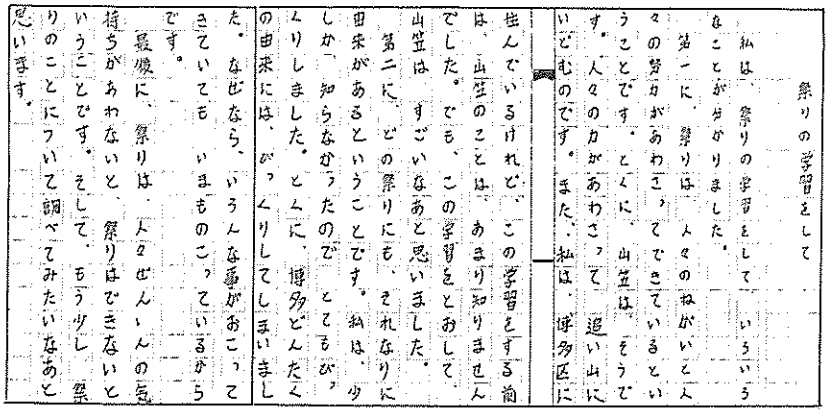
考察3

祭りの学習を行っていく中で、自分も祭りに参加したいと願う子供が多くなってきている。参加の仕方はどうであれ、地域の行事に関心をもつことは変化に対する見方・考え方の高まりだけでなく、地域に積極的にかかわっていこうとする子供の姿を見い出すことができた。

(6) 全体考察

「生活づくりの活動」を位置付けた祭りの学習を行う中で、T子は、自分たちの地域のよさの再発見を行ったり、祭りが生活とどのように結び付いているのかといったことをとらえようとし、さらに自分も祭りに参加し、もっと調べてみたいと感想を述べている。これは、自分の地域に対する積極的な働きかけの姿であり、「生活づくりの活動」に取り組む姿でもある。このような姿から、祭りといった環境に対して自ら積極的に働きかけ、活動を広げていったこと（考察2）、活動を広げる過程で、祭りに対する自分なりの考え方が高まっていったこと（考察2）、身近な地域の祭りに関心をもち、積極的に参加しようという意欲や態度を養うことができたこと（考察3）が成果として考えられる。このことは、生活環境を保護する立場での内容設定の妥当性を示すものでもある。課題として、祭りへの積極的なかかわりの姿は見られたものの、追究対象としていた祭りへの直接的な体験や調査が得られなかったことから、この学習を行う時期を考慮する必要がある。

<祭りの学習を終えたT子の作文>



祭りの学習をして

私は、祭りの学習をして、いろいろなことがわかりました。

第一に、祭りは、人々のねがいと人々の努力があわさってできているということです。とくに、山笠は、そうです。人々の力があわさって、追い山にいどむのです。また、私は、博多区に住んでいるけれど、この学習をする前は、山笠のことは、あまり知りませんでした。でも、この学習をとおして山笠は、すごいなあと思いました。

第二に、どの祭りにも、それなりに由来があるということです。私は、少しか、知らなかったので、とてもが、くりしました。とんに、博多どんたくの由来には、がっくりしてしまいました。なぜなら、いろんな事がおこってきていても、いまものこっているからです。

最後に、祭りは、人々せんいんの気持ちがあわないと、祭りはできないということです。そして、もう少し、祭りのことについて調べてみたいなあと思います。

指導の実際と考察2

(1) 単元名　わたしたちの室見川（第4学年）　　山下浩徳

(2) 年間計画における本単元の位置づけ

子供たちはこれまでに、3年生の学習で学校の近くの地域を中心として活動し、花作りをしたり祭りに参加したりして、身近な事象に働きかける経験を積んできた。また、4年生では単元「わたしの福岡市を探検しよう」の学習で、福岡市の特徴ある社会や自然事象についての一般的な理解を深めている。

そこで、本単元は室身川の生き物の様子や水道の仕組みを調べ、室身川が自分の生活を支えていることを理解すると共に、室身川をきれいにしたり生き物を保護したりして、室身川を大切にする態度を育てることをねらいとしている。このことは、子供の生活範囲を学校の近くから福岡市へと広げていくとともに、社会や自然の事象に対するかかわりを、遊んだり使ったりすることから、自ら保護したり創造的に活用したりすることへと高める上で意義がある。

(3) 目　　標

① 自分のかかわりの視点で室見川の様子を調べ、室見川と川の生き物や水道、など事象相互や室見川と自分との関係を考え、室見川が私達の生活を支えていることを理解する。

② 室見川を調べることを通して、室見川に親しみ、室見川を大切にするため、川をきれいにしたり、水の使い方を工夫したりする態度を育てる。

(4) 計　　画（約22時間）

ねらい	学習活動	配時
○ 室見川で遊ぶ体験活動をして、問題を見いだす。	1 室見川で遊んで、追究したい問題を見つける	9時間
	(1) 室見川で遊んだ友達の話を聞き、室見川に行く願いをもつ。	①
	(2) 室見川の上、中、下流に行って自分のしたいことをする。	⑥
	・ 石を積んでダムや池を作る　・ 水の生き物を探す	
	・ 水のきれいな様子を調べる	
	(3) 室見川で気づいたことを出し合い、調べたい問題をもつ。	②
	・ 上、中、下流での生き物や水、石に違いがある。	
	・ 上中下流で石の様子が違うのは、水と関係があるか。	
	・ 上中下流で生き物が違うのは川の汚れと関係があるか。	
	・ 室見川の水がどのように水道の水となるのだろうか。	
○ 自分の問題について、水道局や室見川の様子を調べる	2 自分たちの問題について、資料や観察で調べる。	9時間
	(1) それぞれの問題について、グループを作り問題を追究する。	⑥
	・ 水道局への取材をする。	
	・ 流れる水や指標生物などの室見川の観察をする。	
	(2) 調べたことを紹介して、気づいたことを交流する。	③
	・ 室見川の水が水道水になるまでの様子を紹介する。	
	・ 室見川の汚れと生き物の住む場所の違いを紹介する。	
	・ 生き物を育て、飲み水にもなる室身川を大切にしたい。	
○ 自分と川とのよりよいかかわりを考える。	3 室見川を大切にしたり、もっと調べたりする。	4時間
	・ 川にゴミを捨てないようにする。ゴミを拾う。	
	・ 節水のポスターを作る。	

(5) 子どもの反応と考察

① 室見川と出会う活動・・・（1～9／22）

室見川に出会い、これから室見川にかかわっていく視点をもたせることをねらっている。そのための支援として、室見川や近くの川で遊んだ体験を話し合わせた後、実際に室見川の上流、中流、下流の3カ所に連れて行き、遊ぶ体験を行う。その後気づいたことを交流し合い、自分たちが追究したい問題へと練り上げていく。ここでの子供たちの活動の様子は次の通りである。



写真1 上流:オイカワだよ

【Ｉ児】魚取りをしたいという願いをもって室見川に来た。
上流では淵になった所で魚をすくおうとするがなかなか取れない。近くで魚を釣っていた人に話しかけ、どんな魚がいるかなど教えてもらう。釣り人からたくさんオイカワをもらって大喜びをする。（写真１）そのほかエビやカゲロウなどいろんな生き物を見つける。
②中流でも魚を探すが、オタマジャクシばかりいるのに気づく。そこでオタマジャクシとりに熱中する。（写真２）



写真2 中流:オタマジャクシがたくさん

③下流では目立った生き物を見つけられなかった。結局、砂地を掘ってカニやウミニナを取る。
【全体】子供たちの室見川への多様なかかわりが見られた。大別すると、生き物、水そのもの、石への興味である。その中で、上流のきれいな水を飲み（写真３）、下流の汚い水に驚く声や、上流できれいな石を探していたのが中流ではこけの生えた丸い石ばかりでがっかりしている姿があった。



写真3 上流:きれいな水はおいしいな

《交流をして》活動して気づいたことを室見川の床地図に表しながら発表していった。（写真４） その結果、上流、中流、下流の様子を比べて「室見川の上流と中流、下流では石の大きさや形が違うのはなぜだろう。」「住んでる生き物が違うのはなぜだろう」という疑問を持った。また、水の汚れていた下流に水道の取水口があることを知らせたことで「なぜ、下流から水道の水を取っているのだろう」という疑問も生まれてきた。



写真4 疑問がいっぱい

考察１ ここでは、体験から下線のような自分の追究課題が生まれている。これは、生活科と同じように、室見川で自分の興味ある体験をさせたことが、個性的な気づきや、子供が本当に追究したい問題を生み出していったのだと考えられる。Ｉ児は自分のかかわりから、なぜ上、中、下流で生き物が違うのか調べることに決めている。ここでの子供の活動や疑問は、いくつかに類型化できた。興味の方向こそ違え、いずれも室見川に対する興味であり、子供が室身川にかかわりをもつ姿である。

② 室見川を探る活動・・・（１０～１８／２２）

上、中、下流での石や生き物の違いや、取水口が下流にある理由など自分の問題を調べるとともに、その過程で水の汚れや生き物、水道などの事象が相互に関連していることや自分と室見川とのかかわりに気づいていくことがねらいである。そのための支援として、それぞれの問題を自分たちで追究できるように、複数の資料や観察の用意をする。時間も弾力的に運用し、グループによっては次の段階に移ることも認める。また、調べたことは発表会を開いて事象相互の関連や自分とのかかわりに気づかせる。こ

こでの子供の活動は次の通りである。

【Ｉ児】①生き物の違いは、水の様子と関係があるという予想をもって、資料を調べる。そして、本や指標生物表から生き物は水の汚れや流れによって住む場所が違うことを知る。

室見川にいき、実際に水の汚れや流れと比べながらどんな生き物がいるか調べる。（写真５）

室見川にいた生き物を、水の汚れや流れの様子と関係付けながら上流、中流、下流で分類して表に整理する。

【Ｓ児】①下流で取水することに疑問をもち、室見川にある取水場を見学にいく。室見川には、田畑への水利権もあって自由に水が取れないことを知る。（写真６）

②今度は下流の汚い水がどのようにきれいになるのか興味を持ち、資料やビデオで浄水場の様子を調べる。

③川をきれいにすることや水をむだ使いしないことを表にまとる。

【全体】本や資料を集めたり、見学に行ったり、観察や実験をしたりと、それぞれ自分の問題を意欲的に調べていった。調べたことや思ったことは表や新聞、紙芝居などの形で自由に表していった。意欲的に11号もの新聞を発行をした班もあった。

《交流をして》それぞれのグループで調べたことを、発表させた。（写真７）その結果調べたことは違っても共通に大切にしたいことがでてきた。それは「川を汚さない」「水を大切に使う」「もっと調べたい」である。「川を汚さない」理由は、「生き物が増えてくれるように」「水道局の人が大変だから」「私たちの飲み水だから」など、それぞれ自分が調べた室見川と自分とのかかわりからの理由づけだった。（資料１） また、まだ分からない点や自分の家の近くの川はどうなのかなどがもっと調べたいこととしてでてきた。



写真5 どんな生き物がいるかな



写真6 取水場で調べたよ

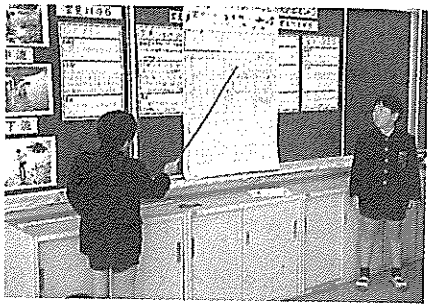
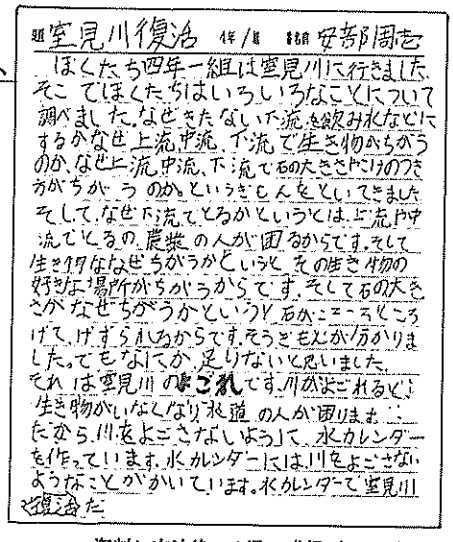


写真7 室見川の秘密を発表します



題 室見川復活 作/[illegible] 名前 安部周也

ぼくたち四年一組は室見川に行きました。そこでぼくたちはいろいろなことについて調べました。なぜきたない下流を飲み水などにするかなぜ上流、中流、下流で生き物がちがうのか、なぜ上流中流、下流での大きさだけのつくり方がちがうのかというぎもんをもってきました。そして、なぜ下流でとるかというと、上流や中流でとると農薬の人が困るからです。そして生き物がなぜちがうかというと、その生き物の好きな場所がちがうからです。そしてその大きさがなぜちがうかというと石がごろごろところげてげずられるからです。そうぎもんが分かりました。でもなにか足りないと思いました。それは室見川のよごれです。川がよごれると生き物がいなくなり水道の人が困ります。だから、川をよごさないよう」て、水カレンダーを作っています。水カレンダーには川をよごさないようなことがかいてあります。水カレンダーて室見川を復活

資料1 交流後のA児の感想:室見川復活

考察２ ここでは、水の汚れと生き物の違いなど、事象を結び付けて問題を解決することができた。そして問題の追究の中で下線部や資料１のように、単に事象のきまりが分かるだけでなく、自分と室見川のかかわりを意識することができた。このことは、調べたことを発表する際に顕著に表れ、子供たちはそれぞれの理由から室見川を大切にしたいという気持ちへ高まってきている。これは、自分のかかわりから問題をもち、体験的な活動を通して調べたからだと考えられる。また、進んで新聞を書く主体的な姿も見られた。この段階で留意することは、節水のポスターを描いたりして、すでに次のかかわりの段階へ進んでいくグループもあることである。課題に応じた資料の準備や時間の弾力的な運用、ＴＴの活用などが必要である。

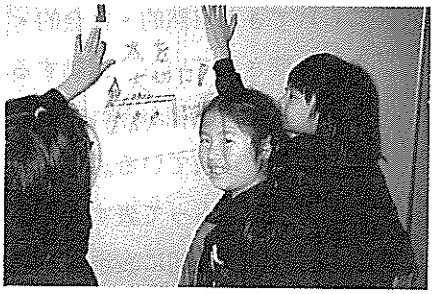
③ 創造・保護、適応する活動・・・（１９～２２／２２）

「川を汚さない」「水を大切に使う」「もっと調べたい」などの思いをもとに、室見川とのよりよい関係を自ら求めていくことがねらいである。そのための支援として、願いに応じて新たなグループを作りこれまで調べたことを生かして活動させた。ここでの子供の活動は次の通りである。

【Ｉ児】①Ｉ児は、生き物を育てるという理由から、室見川のゴミを拾うことを決める。同じくゴミを拾う人とグループを作る。
②室見川の下流、取水場のところで空き缶を拾う。（写真８）
③その空き缶を区役所にある、シールと交換する機械のところに、放課後みんなで持っていき、シールに変える。


写真8 室見川での空き缶拾い

【Ｓ児】①Ｓ児は、室見川の水を飲み水として大切に使いたいという理由から、室見川の岸で見かけた、水を大切に使うことを呼びかける看板を作ることを考える。
②取水場で話を聞くが、看板を勝手に立てることは規則上難しいことから、学校にポスターを貼ることにする。
③休み時間を利用して書いたポスターを手洗い場に貼る。（写真９）
④また、友達と休日に室見川にいき、川エビをつかまえてくる。
⑤生き物はその場に応じて住んでいるということを、友達が発表したことから、休みの日には室見川にいって新しい水を汲んでくる。


写真9 ポスターをはる

【全体】Ｉ児やＳ児のように室見川を保護する活動のほかに、生き物に迷惑にならないような室見川の遊びとして、ハトやカモメにえさをやる遊びを考えるグループも見られた。（写真１０）また、直接に室身川にかかわるのではなく、室見川で学習したことを生かして、室見川と大濠公園や自分の家の近くの川の様子を比較して調べるグループも見られた。（写真１１）


写真10 トリさんエサをどうぞ


写真11 大濠公園にもエビがいる

考察３　この段階では、いままでの調べグループが解体し、それぞれの願いに沿って新たなグループができている。ここではＩ児やＳ児のように、自分の調べたきたことをもとに、自分がすることを自己決定し実践する姿が見られる。また、ここでは、真に自主的な活動が見られ、Ｉ児のグループが区役所に空き缶のリサイクルにいったり、Ｓ児が室見川のエビを育てたりなど、教師の手を離れたところで主体的に活動する姿が見られた。家の近くの川と室見川を比較して調べることも、学習したことをもとにもっと自分に身近な川へ適応しようとする姿と考えられる。

(6)　全体考察

本実践の成果としては、一つ目は、子供の主体的な活動の姿が見られたことである。考察３にあるように、自分の願いをもって区役所で空き缶のリサイクルをしたり室見川のエビを育てたりと、自主的・主体的に活動を広げていく子供が育っている。このような姿が見られたのは、それぞれの子供が自分にとって価値を感じる活動をしているからだと考えられる。そのため、興味や関心などに応じた活動をおこなわせたことは、主体的な活動を促す上でよかったと考えられる。

成果の二つ目は、感性と認識の高まりが見られることである。はじめに室見川に行ったときには遊びだけにしか目がいかなかった子供たちが、最後には室見川の汚れを感じて空き缶を拾っている。また、家の近くの川を新たな目でとらえ直そうとしている。これは、室見川を大切にしたいという調和的な精神の高まりと、室見川が自分にとって大切な役割をしていることへの認識があるからだと考えられる。

豊かに感じ取り創造的に表現していく喜びを味わう表現科学習

── 多様な表現活動の経験を豊かにする年間計画の作成 ──

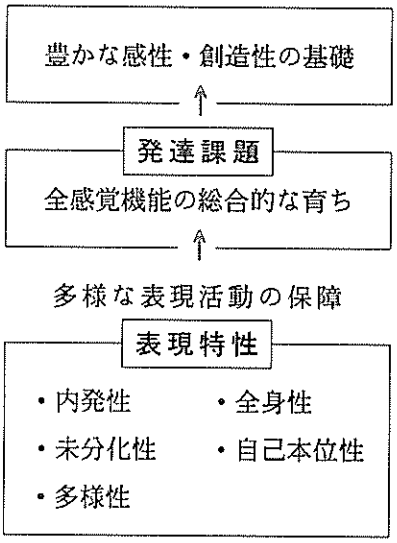
表現科部　津本　修一　樺島　穣

1．表現科設定の理由

(1) 未来社会に求められる人間像から

現代社会の急激な変化は、子供の育ちに様々な影響を与えている。従来、子供たちの遊びの中で育てられてきた自然的・社会的・文化的体験が失われつつある中で、感性の未熟さや生きる活力の乏しさが指摘されている。激動するこれからの未来社会を生き抜いていく子供たちは、これまでにも増して心身ともに調和がとれ、主体的に考え、創造的に生きるための資質や能力を総合的に発揮していくことが求められている。そのためには、子供一人一人が他者と認め合いながら、自分自身のよさを実感し、自信をもって表すことができるような豊かな感性と創造性の基礎を身につけることが大切である。子供が創造的に表現する喜びをより一層味わうことができる教科設定の必要性がここにあると考える。

(2) 低学年児童の発達課題と表現特性から



人間の感覚機能が急速に発達する時期は、幼児期から小学校低学年期であると言われている。低学年の子供たちにとって必要な発達課題は、全感覚機能を総合的に育てることにあり、そのためには、言語、身体、音楽、造形などの多様な表現活動の経験を単独的、複合的、総合的に豊かにしていく必要があると考える。

また、低学年の子供たちの表現特性は、①本能的な表現欲求を有する内発性、②全感覚機能を働かせて表現する全身性、③生活表現と想像表現の未分化性、④自分本位の表現に浸り切る自己本位性、⑤様々な表現方法を複合的・総合的に取り入れる表現の多様性などがあげられる。このような表現特性の中に、この後に育ちゆく豊かな感性と創造的な自己表現の発達の芽を内包していると考える。

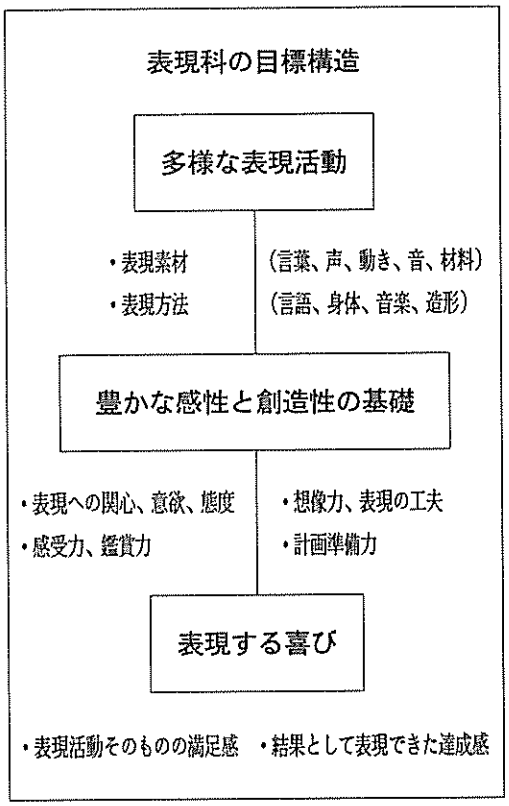
(3) 音楽科、図画工作科の教科枠の限界性から

現行の音楽科、図画工作科は、これまでにも音楽性や造形的な創造力などを育成し、多くの価値を担い成果も挙げてきた。しかし、専門的な教科枠や分化した表現技法にとらわれ、子供の表現欲求や表現内容、自由性のある表現方法の選択などの面で限界性があり、子供の多様な表現活動を十分に保障するまでには至らなかった現状がある。

以上のように、求められる人間像や低学年における発達課題と表現特性に基づき、表現枠に限界性のある従来の低学年音楽科、図画工作科などの表現領域を拡大、発展させ、新たに「表現科」を設定した。つまり、表現科は、低学年の子供たちが価値ある表現対象や表現素材のよさや美しさを全感覚機能を総合的に働かせて感じ取り、言語、身体、音楽、造形などの様々な表現方法で多様に創造的に表現を工夫しながら、表現する喜びを味わうことのできる教科である。また、表現科は、低学年の子供たちに創造的に自分を表現していくことを保障するとともに、自己を実現していくことができる教科として価値があると考える。さらに、表現科で育てられた旺盛な表現への関心・意欲・態度と表現する喜びの実感は、全教育活動の“表し”の素地になると考える。

2．本校の考える表現科の目標

多様な表現活動を通して、豊かな感性と創造性の基礎を培うとともに表現する喜びを味わわせる。



「多様な表現活動」とは、子供が言葉、声、動き、音、材料などの表現素材や、言語、身体、音楽、造形などの表現方法を単独的・複合的・総合的に取り入れて思いを表していく活動のことである。また、個人的な表現活動から共同的な表現活動へと発展していく場合もある。

「豊かな感性と創造性の基礎を培う」とは、子供が全感覚機能を働かせて刺激を受容する感覚や感情の育ちとともに、自分の価値判断で表現を工夫する過程と結果を積極的に見守ることである。

「表現する喜びを味わわせる」とは、自分の思いを表現していく過程そのものに浸り切る満足感や結果として表現できた達成感など生きる喜びにつながる快の感情を味わわせることである。表現科における学びの力を、表現への関心・意欲・態度、想像力、計画準備力、表現の工夫、感受力・鑑賞力ととらえる。これらを総合的に働かせていくことによって豊かな感性・創造性の基礎の育ちとともに表現する喜びを味わわせることができると考える。

3．主題の意味と重要性

(1) 主題の意味

「豊かに感じ取り」とは、子供が、過去の生活経験や身近な環境の中から、全感覚機能を総合的に働かせて表現対象のよさや美しさや楽しさなどを感受し、表現活動に向かうための想像性や表現されたものへの共感性を自ら発揮していくことである。

「創造的に表現していく」とは、子供が価値ある表現対象から全感覚機能を総合的に働かせて想像性を広げたり、深めたりしながら様々な表現素材や表現方法を工夫して表現する行為である。

「豊かに感じ取り創造的に表現していく喜びを味わう」とは、価値ある表現対象から全感覚機能を総合的に働かせて、よさや美しさを感受し、様々な表現素材を生かして表現方法を取り入れ、表現活動そのものの楽しさに浸り切りながら自分の成長を自覚し、満足感や達成感を味わっていくことである。

(2) めざす子供の具体的な姿

○　表現対象から体全体を働かせて感じ取り、自分の思いをもとに表現活動そのものを楽しみ、自分の成長を自覚している姿〔表現への関心・意欲・態度〕

○　多様な表現活動を通して、自分の思いを広げたり深めたりしながら、表現の工夫をしている姿〔想像力・表現の工夫〕

○　自分の思いをもって、表現のための計画や準備を進んで行う姿〔計画準備力〕

○　表現対象から美しさを感じ取り、表現活動のよさや楽しさを味わう姿〔感受力・鑑賞力〕

(3) 内容の考え方

全教育活動の“表し”の素地となる学びの力は、価値ある表現対象から感じ取った思いを様々な表現素材や表現方法で表していくという表現への関心・意欲・態度が中心となる。

そこで、多様な表現活動を表現方法の面から大別すると、中心となる表現素材や表現方法で表わされる場合と既習の表現経験を生かして様々な表現素材や表現方法を取り入れて表わされる場合に分けられる。内容構成は、この２つの表現方法により大きくＡ内容とＢ内容に分ける。

さらに、よさや楽しさを感じ取り味わう内容をＣ内容として単独では取り扱わないようにし、Ａ内容、Ｂ内容と関連した内容として一体的に取り扱う。

「Ａ：中心となる表現素材や表現方法で表す」内容

(1) 言葉、声、動き、音、材料などの中から、中心となる表現素材で楽しく表現遊びをする。

(2) 言語、身体を取り入れながら、音楽、造形を中心とした表現方法で楽しく表現する。

「Ｂ：表現経験を生かして様々な表現方法で表す」内容

(1) 言葉、声、動き、音、材料などの様々な表現素材を取り入れて楽しくなりきり表現をする。

(2) 言語、身体、音楽、造形などの様々な表現方法を取り入れて楽しく劇的に表現する。

Ａ内容・Ｂ内容に関連して一体的に取り扱う

「Ｃ：よさや楽しさを感じ取り味わう」内容

(1) よさや楽しさなどを体全体を働かせて感じ取る。

(2) 表現されたもののよさや楽しさを味わう。

Ａ内容の(1)は、音素材としての声、手づくり楽器、打楽器などによる音集めや音づくりを楽しむ表現遊びや紙類、粘土、描画材などの材料をもとした表現遊びの内容である。表現素材をもとに、感覚、感情、想像性などを育てることがねらいである。

それぞれの表現素材が単独的に取り入れられる場合もあれば、単独的から複合的に取り入れられて表現遊びが発展する場合も柔軟に認めるようにする。

Ａ内容の(2)は、音楽的表現、造形的表現を中心として楽曲や題材を設定し、主題を表現していくものである。音楽的、造形的な表現活動の内容設定は、相互の時間配分の均衡を考慮して行うようにする。

Ｂ内容の(1)は、自然物、動物、虫、乗り物などの表現対象に、言葉、声、動き、音、材料などの様々な表現素材を取り入れて楽しくなりきる表現活動の内容である。全身的な表現活動により表現対象と一体的になりきり、模倣的表現から想像表現へと高めていくようにする。

Ｂ内容の(2)は、時間的流れや空間的な広がりをもつ創作的なお話や物語などを劇的に表現することを中心とした内容である。なりきり表現と相互に関連し発展する場合も考えられる。

Ｃ内容の(1)は、自分が表現対象や自分の表現活動から感じ取ることを主とした内容であり、Ｃ内容の(2)は、友達が表現したもののよさや楽しさを味わうことを主とした内容として、表現活動と一体的に設定する。

4．副主題について

(1) 副主題の意味

「多様な表現活動の経験を豊かにする年間計画の作成」とは、既習の表現内容や表現方法が次なる表現活動へ生きて働くように、低学年の２年間を通して、中心となる表現素材や表現方法で表す内容から既習の表現経験を生かして様々な表現方法で表す内容へと表現経験の深まりと広がりを考慮しながら題材開発と題材配列をしていくことである。

全授業時数の内容の配分については、年間を通して、「Ａ：中心となる表現素材や表現方法で表す」内容と「Ｂ：表現経験を生かして様々な表現方法で表す」内容の均衡を図るようにする。

また、Ａ内容の題材の類型をＡ型題材とし、Ｂ内容の題材類型をＢ型題材として２つに分け、２年間の発展を考慮した題材配列を行う。

(2) 多様な表現活動の経験を豊かにする年間計画作成の考え方

表現科の年間計画を作成する上で次の３点を大切にする。

① 表現素材による表現遊び、表現対象からのなりきり表現や劇的表現の題材開発と題材配列

表現素材をもとに感覚、感情、想像性を育てる表現遊びの題材開発や価値ある表現主題から想像性や共感性を育てるなりきり表現、劇的表現の題材開発を行う。表現素材による表現遊びの題材を１学期に多く配列し、なりきり表現、劇的表現の題材を２学期以降に多く配列する。

〔第１学年　表現遊びとなりきり表現・劇的表現の題材配列の例〕

	表現遊びの題材数	なりきり表現・劇的表現の題材数
第１学期	５題材（２０時間）	２題材（１２時間）
第２学期	３題材（１０時間）	５題材（４０時間）
第３学期	０題材	２題材（２０時間）

② 季節や学校行事、他教科との関連を考慮した題材開発と題材配列

子供の身近な生活実態に応じるように、春、夏、秋、冬の季節感や遠足、学芸会などの学校行事、国語科や生活科などの他教科の学習経験との関連を図った題材開発と題材配列を行う。

〔第２学年　季節感や生活科と関連した表現科題材の例〕

季節	生活科単元		表現科題材
春	あらつの春をたんけんしよう	→	春の花たちのパーティー
夏	あらつの夏とあそぼう	→	雨つぶたちの大ぼうけん
秋	あらつの秋を楽しもう	→	秋をみんなであらわそう
冬	あらつの冬をあたたかくすごそう	→	雪さんとどうぶつたちがであったら

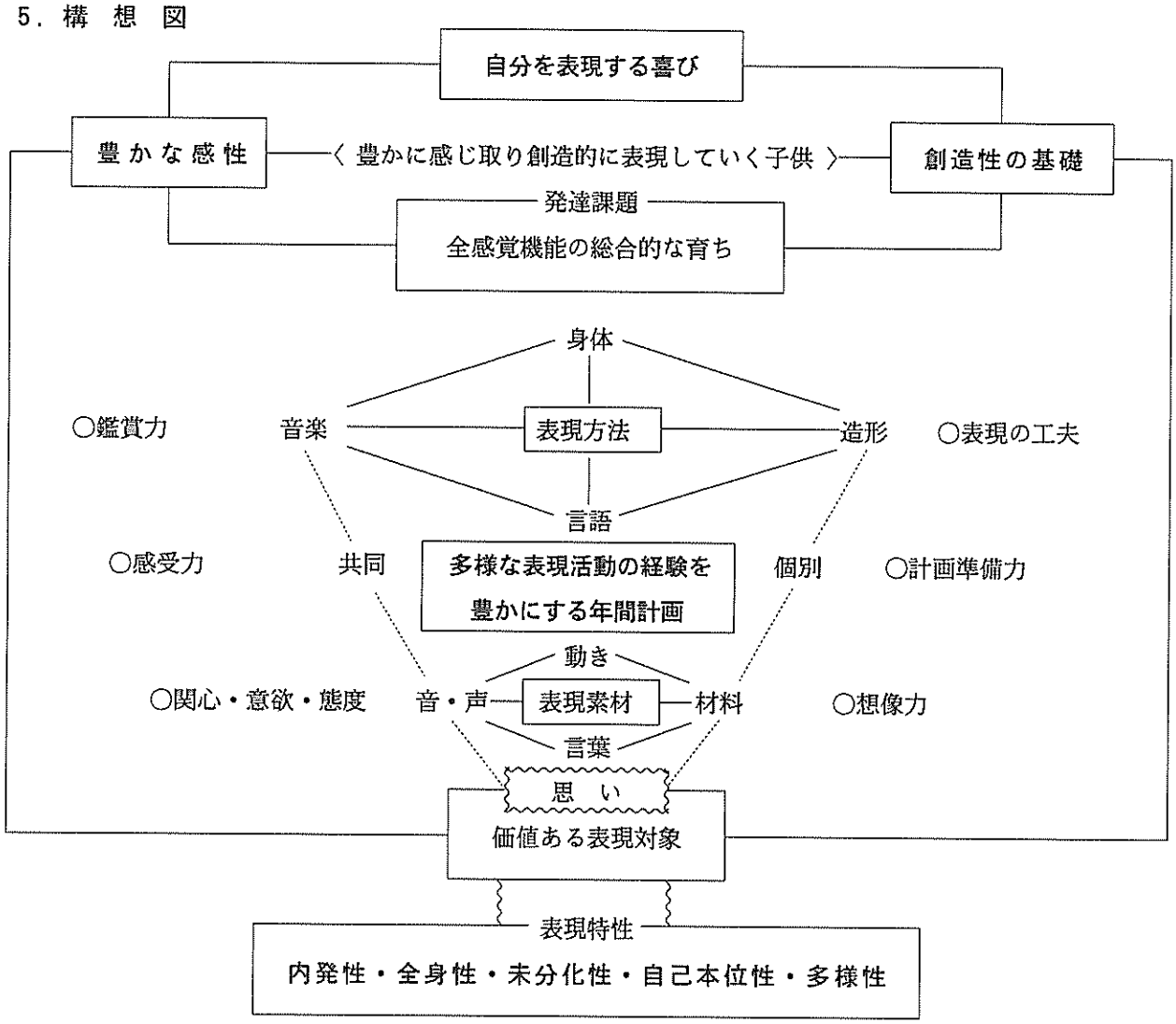
③ 低学年の２年間を通して、表現内容や表現方法の発展を考慮した題材配列と題材構成

第１学年て経験した表現内容や表現方法が第２学年に発展していくように、多様な表現活動の経験を徐々に豊かにしていきながら、既習の表現経験を生かして様々な表現方法を取り入れて思いを総合的に表すことがきるような題材配列を行う。

〔２年間の発展を考慮した題材配列の例〕

第１学年題材		第２学年題材
むしとなかよし	→	きれいなふくをもらった虫さんたちの人形げき
あきの木のみやはのおはなし	→	秋をみんなであらわそう
ミュージカル「ありときりぎりす」	→	ミュージカル「はだかの王さま」

5．構　想　図



6．指導の実際と考察（次頁参照）

7．研究のまとめ

(1)　研究の成果

第1学年「ふぞくどうぶつえんのショータイム」では、自分が表したい動物の姿、鳴き声、動き、表情などを既習の表現経験を生かして、材料、動き、声、音などの様々な表現素材や表現方法でなりきり表現を楽しむ子供の姿が見られた。なりきり表現をショータイムという形態で表現と鑑賞を一体化したB内容の第1学年の１１月題材として年間計画上に有効に位置づくと考える。

また、第2学年「秋をみんなで表そう」では、秋の自然の様子を体全体で感じ取り、想像力を働かせて様々な表現方法で共同的に劇的表現の楽しさを十分に味わう子供の姿が見られた。

第1学年での既習題材「あきの木のみやはのおはなし」の発展として、また生活科単元「あらつの秋を楽しもう」との関連を考慮して年間計画上に位置づけたことは、子供の生活実態や表現経験をもとに多様な表現活動の経験を豊かにするという点から効果的であった。

(2)　今後の課題

年間計画作成上の課題として、次の3点があげられる。

①　内容構成の再検討と2学年を通したA内容B内容の時間配分の検討

②　A内容、B内容における表現経験の年間計画上の関連性と題材配列の条件の吟味

③　A型、B型の題材類型をもとに価値ある題材（表現対象）開発の視点の明確化

第１学年表現科年間計画（１３６時間）

月	題材名	ねらい	題材類型	他教科との関連
4 ④	1．はるかぜさんとたのしくうたおう(4)	○ 春にちなんだ歌を歌ったり、歌に合わせて踊ったりすることができる。	A	
5	2．なににかこうかな(3)	○ 身近な材料に感じたことや思ったことを絵に表すことができる。	A	
	3．たのしいリズム(3)	○ 鈴・カスタネット・トライアングルなどの打楽器に親しみ、楽しくリズム打ちができる。	A	
⑫	4．えのぐぬのあてあそびからでてきたおはなしやおとたち(6)	○ 絵の具布あて遊びからできた形や色から想像して、お話や音をつくりながら楽しく表現遊びをすることができる。	A	
6	5．ねんどだいすき(4)	○ 粘土に親しみながら手を働かせて立体に表すことができる。	A	
	6．がっきでたのしく(4)	○ ハーモニカ・鍵盤ハーモニカなどの旋律楽器に親しむことができる。	A	
	7．こんにちはどうぶつさん(4)	○ つくりたい動物の形や色、つくり方を考えてつくることができる。	A	
⑯	8．うみはひろいなおおきいな(4)	○ 自分が感じたり想像した海の様子を様々な方法を用いて表すことができる。	B	
7	9．わらべうたであそぼう(4)	○ むかしながらの遊び歌に親しみ、楽しく遊びながら歌うことができる。	A	
⑫	10．おもちゃのくにでパーティーをしよう(8)	○ 自分がなりたいおもちゃを想像し、様々な方法を用いて表すことができる。	B	
9	11．お月さまとおともだち(6)	○ 月に関するテーマで歌や合奏をしたり、楽しく劇をしたりすることができる。	B	
	12．なんでもねんどランド(4)	○ 粘土に親しみながら、思いのままに立体に表すことができる。	A	
⑯	13．「おむすびころりん」のせかいにとびこもう(8)	○ 「おむすびころりん」のお話をもとに、好きな登場人物になりきり、様々な素材や方法を表すことができる。	B	国語科「おむすびころりん」と関連
10	14．なんでもペッタン(2)	○ 身近な自然物や人工の材料の形に関心をもって、思いついた版遊びをすることができる。	A	
	15．むしとなかよし(4)	○ 自分のなりたい虫になりきって、様々な方法を用いて表すことができる。	B	
⑯	16．ならべてつんでどこまでも(4)	○ 身近な材料をもとに、並べたり積んだりして思いついた造形遊びをすることができる。	A	
11	17．あきの木のみやはのおはなし(8)	○ 秋の木の実や葉の変化から想像的なお話をつくり、様々な方法を用いて演じることができる。	B	生活科10月単元「あらつの秋あそび」と関連
	18．たのしいがっそう(6)	○ これまでの音楽経験を生かして、楽しく簡単な合奏曲を合奏することができる。	A	
⑯	19．ふぞくどうぶつえんのショータイムをしよう(8)	○ 自分の好きな動物になって、衣装、動き、鳴き声などを工夫して簡単なショーをすることができる。	B	
12	20．音のカルタをつくってあそぼう(4)	○ 打楽器の色々な音を探したり、音あてカルタあそびをしたりすることができる。	A	
⑫	21．ほしのせかいにいってみたら(6)	○ 星の世界に行ってみた様子を想像して、様々な方法を用いて表すことができる。	B	
1	22．たきびをかこんで(6)	○ たき火の様子を思い浮かべて、歌ったり、踊りを工夫してつくったりすることができる。	A	
⑫	23．おかあさんのおなかの中にいたころ(6)	○ お母さんのおなかの中にいたころのことを想像し、絵に表すことができる。	A	
2 ⑫	24．みんなでかみしばいをつくろう(8)	○ 経験したことや想像したことをもとにお話をつくり、グループで紙芝居をつくって表すことができる。	B	国語科「きりかぶの赤ちゃん」と関連
3 ⑧	25．ミュージカル「ありときりぎりす」(12)	○ 「ありときりぎりす」の話をもとに、簡単な音楽劇をつくることができる。	B	

※ ○内は、月あたりの指導時数を示す。
※ 題材類型　A型 …… 「A：中心となる表現素材や表現方法で表す」内容の題材構成
　　B型 …… 「B：表現経験を生かして様々な表現方法で表す」内容の題材構成

第２学年表現科年間計画（１４０時間）

月	題材名	ねらい	題材類型	他教科との関連
4 ⑧	1．春の花たちのパーティー(4)	○　春の花たちに思いを寄せ、絵、詩や文などで表すことができる。	A	生活単元「あらつの春をたんけんしよう」と関連
	2．明るいうたごえひびかせて(4)	○　春に関する歌や楽しい集いの歌を歌ったり、踊ったりすることができる。	A	
5 ⑫	3．紙テープをゆうぐにつけてみると(4)	○　紙テープなどをもとに、身近な遊具とかかわりながら造形遊びを楽しみ、遊んだことを絵や文で表すことができる。	A	
	4．みんなにもおしえてね(4)	○　楽しかったことや心に強く残ったことを楽しいカードや手紙にして、友達に伝え合うことができる。	A	
	5．リズムの国であそぼうよ(4)	○　リズムの国の飾りをつくったり、リズム模倣やリズム問答をしたりして、即興的にリズムをつくって表すことができる。	A	
6 ⑯	6．雨つぶたちの大ぼうけん(8)	○　雨粒が大冒険していく様子を豊かに想像し、動き、言葉、飾り、音などで楽しく共同的に表すことができる。	B	生活６月単元「あらつの夏とあそぼう」と関連
	7．ねん土でなにができるかな(4)	○　粘土に親しみながら形を考えたり、材料を付け加えたりして、思いのままに立体に表すことができる。	A	
	8．楽しいな！うたのおいかけっこ(4)	○　簡単な輪唱に親しみ、楽しく歌うことができる。	A	
7 ⑫	9．もしも空をとべたなら(8)	○　空を飛んで旅をする様子を豊かに想像し、動き、飾り、声、音などで楽しく共同的に表すことができる。	B	
	10．すきないろとせんのお話(4)	○　好きな水彩絵の具を使っていろいろな線を描き、できた形から想像的なお話をつくることができる。	A	
9 ⑯	11．ようこそ！わくわくマリンワールドへ(8)	○　教室を水族館に見立てて飾ったり、水族館の生き物の様子を動き、飾り、音などで楽しく共同的に表すことができる。	B	
	12．リズムにのってタン！タン！タン！(4)	○　タンブリン、ウッドブロックなどの打楽器に親しみ、歌ったり、リズム伴奏をすることができる。	A	
10 ⑯	13．きれいなふくをもらった虫さんたちの人形げき(6)	○　透明材料をもとに想像的な虫やお話をつくり、舞台や音をつくりながら楽しく共同的に人形劇で表すことができる。	B	
	14．うつしてあそんでそれからそれから(4)	○　様々な版の材料に親しみ、思い付いたことを絵に表すことができる	A	
	15．スイミーのものがたりのつづきはどうなるの？(10)	○　スイミーの物語の続きをつくり、登場物になりきって動き、言葉、飾り、音などで楽しく共同的に表すことができる。	B	国語６月題材「スイミー」と関連
11 ⑯	16．つつんでしまえばこっちのもの(6)	○　身近な道具や物などを大きな紙で包んだり、飾ったりして思い付いた造形遊びをすることができる。	A	
	17．秋をみんなであらわそう(8)	○　秋の自然の様子から感じ取ったことから想像して、動き、言葉、音、絵、飾りなどで楽しく共同的に表すことができる。	B	生活10月単元「あらつの秋を楽しもう」と関連
	18．音のサラダもおいしいよ(4)	○　好きな音を探してつないだり、リズム、強弱などを工夫して即興的に表すことができる。	A	
12 ⑫	19．自分が主人公になったものがたりのはじまりーはじまりー(6)	○　自分を主人公にした物語をつくり、その様子を動き、絵、音などで楽しく共同的に表すことができる。	B	
	20．ひらいてむすんでつないでみたら(4)	○　箱を切り開いたり、つなぎ合わせたり、ひもなどで結んだりしながら、思い付いた造形遊びができる。	A	
1 ⑫	21．できたらいいな!こんなこと(5)	○　自分が想像した夢や願いを思いのままに絵や立体、お話に表すことができる。	A	
	22．雪さんとどうぶつたちがであったら(9)	○　雪と動物たちが出会った様子を想像し、動き、音、言葉、飾りなどで楽しく共同的に表すことができる。	B	生活1月単元「あらつの冬をあたたかくすごそう」と関連
2 ⑫	23．みんなあつまれ!ねん土ゆうえんち(3)	○　粘土に親しみながら楽しく共同的に立体に表すことができる。	A	
	24．みんなで楽しいがっそう(5)	○　「こぎつね」「トルコ行進曲」などの鍵盤楽器、打楽器を中心とした楽曲を合奏することができる。	A	
3 ⑧	25．ミュージカル「はだかの王さま」(10)	○　「はだかの王さま」をもとに、登場人物になりきって歌ったり、動き、飾りなどを工夫して音楽劇で表すことができる。	B	

※　○内は、月あたり指導時数を示す。

※　題材類型　　A型 …… 「A：中心となる表現素材や表現方法で表す」内容の題材構成

　　B型 …… 「B：表現経験を生かして様々な表現方法で表す」内容の題材構成

6．指導の実際と考察１

(1) 題材名　ふぞくどうぶつえんのショータイムをしよう　（第１学年）　津　本　修　一

(2) 年間計画における本題材の位置づけ

本題材は、内容Ｂ－ア「言葉、声、動き、音、材料などの様々な表現素材を取り入れて楽しく表現する。」で題材構成された題材である。つまり、内容Ａの中心となる表現方法で表す内容で構成された題材を基礎としながら、そのなかでの表現活動の経験を総合的に生かしていくという意味をもっている。また、本題材のこの11月という位置づけは、系統的にいえば１学期の研究発表会の題材「おもちゃのくにでパーティーをしよう」の発展的な題材である。表現対象は、１学期の「おもちゃ」から「どうぶつ」へ変化しているものの、なりきり活動としての基本的な表現の道すじはほぼ同じである。このことは、この時期までに身につけてきた表現方法や学び方をもとに活動することができ、子供の主体的で多様な表現活動を活性化するうえで価値高いものである。

(3) 目　標

① 自分の表したい動物の姿・鳴き声・動き・表情などを材料・動き・声・音素材など多様な表現素材や表現方法を用いて楽しく表現する体験を豊かにすることができる。

② 「ふぞくどうぶつえんのショータイム」という表現活動を通して、パフォーマンス的な表現の楽しさを味わうことができる。

(4) 計　画　（約８時間）

ね　ら　い	学　習　活　動	配　時
「かんじる段階」 ○ 自分の表現したい動物を選択する。 ○ 表現したい動物の様子と表し方を計画する。	1．動物との出会いによる感動体験を想起する。 自分がスケッチした動物や好きな動物の様子や感じたことについて話し合う。 2．表現したい動物とその様子について構想をたてる。 ・ショータイム計画カードの作成	1時間 1時間
「あらわす段階」 ○ 様々な表現方法を採り入れながら自分のなりたい動物を表現する。	3．表現の構想をもとに様々な表現方法で選択的・総合的に表現する。 ・お面／衣装づくり　・動きの工夫 ・鳴き声の模倣　・ショーの内容の説明	4時間
「あらわす段階」 ○ ショータイムの表現内容や表現方法を工夫する。	4．「ふぞくどうぶつえんのショータイム」の表現をつくりあげる。 ・ものまねショー　・サーカスショー ・ファッションショー　・ダンスショー	2時間
「あじわう段階」 ○ 表現の成就感・満足感を感得する。	5．「ふぞくどうぶつえんのショータイム」発表会を行う。 ・ショータイム感想カードの記録	課　外

(5) 指導の実際

「かんじる段階」(第１時～第２時)

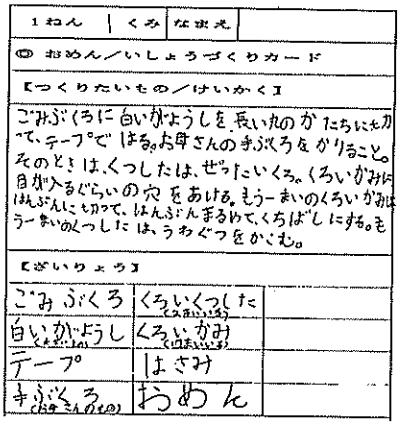
ここでは、本題材の表現活動への意欲づけと活動の大まかな見通しをもたせることをねらいとしている。そこで、１０月に動物園にスケッチ大会に行った体験を想起したり、好きな動物について話し合ったりしながら、自分がなって表現してみたい動物を選択したり、表現してみたい動きや鳴き声を想像させたりした。

【子供の反応】

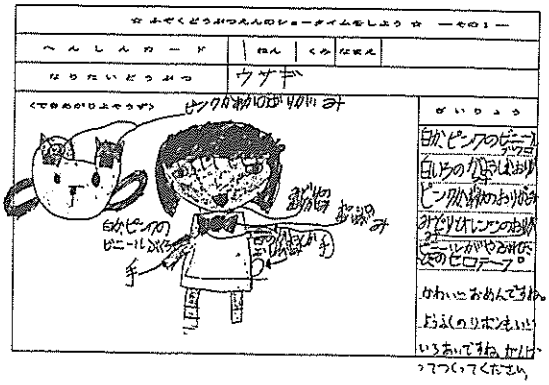
子供たちは、それぞれいろいろな動物を選択していた。特に、人気があったのは、ペンギンで、クラス４０名中１０名が選択していた。また、女子は２０名中９名がうさぎを選択していた。

次に、選択した動物になりきるためにどんなものが必要か、その動物になって表すためにどんなものが必要か、その動物になって表してみたいことについて、計画カードや造形物の完成予想図などに自分の思いを書き表していった。資料①は、A児の計画カード、資料②は、B児が「こんな衣装をつくってみたい。」と書いた衣装の完成予想図である。

【資料①】A児の計画カード



【資料②】B児の衣装完成予想図



考　察

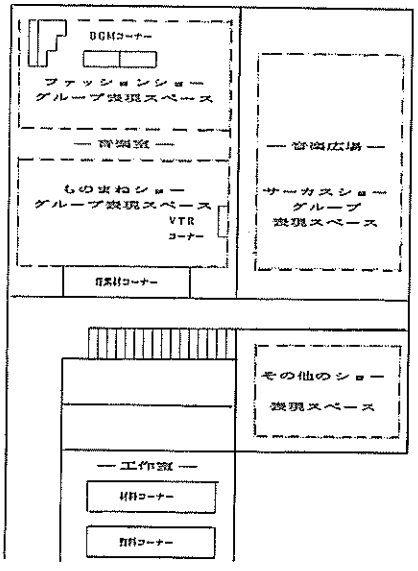
資料①の「つくりたいもの／けいかく」欄や「ざいりょう」欄にみられるように、教師側からの指示がなくても表現へのイメージを明確にさせてやることによって、自分なりに表現素材や表現方法を工夫していこうとしていることがうかがえる。このことは、豊かな感性と創造性の基礎でいう準備・計画力の表れとして見取ることができる。

また、テーマで「動物」を設定したことは、この時期の子供の興味・関心といった面からも適したものであったようである。

「あらわす段階」(第３時～第６時)

ここでは、「かんじる段階」でもった表現へのイメージをもとに実際に様々な方法を用いて自分のなりたい動物を表現させていくことをねらいとした。そこで、材料コーナー、資料コーナー、ビデオコーナー、表現スペースなどといった活動の場（資料③）を構成し、子供たちの表現活動の支援を行っていくようにした。

【資料③】活動の場の構成図



【子供の反応】

子供たちは、それぞれの表現意図にしたがってお面づくり、衣装づくり、動きの模倣、鳴き声の模倣など、様々な表現手段や表現方法でなりたい動物を表現していった。写真①は、お面づくりの参考として、資料コーナーで動物図鑑を調べているところである。写真②は、衣装をつくっているところの様子で、写真③は、ビデオコーナーで動物の動きを参考にしているところである。また、この段階から、子供たちは、毎時間活動の計画と反省を「がくしゅうのけい

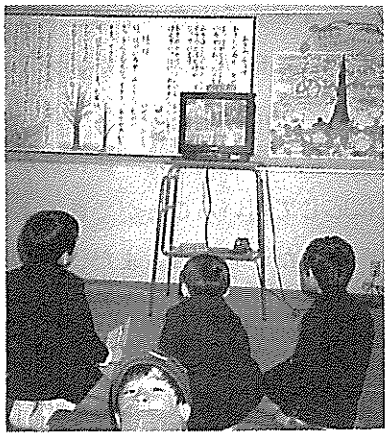
かく／かんそうカード」に記録していき、表現活動の達成感や満足感を実感していった（資料④）。



【写真】資料コーナーにて



【写真】衣装づくり



【写真】ビデオコーナーにて

考　察

資料③のように場の構成を工夫したことは、写真の子供の姿や表情からもうかがえるように子供が主体的、意欲的に表現活動に取り組むうえで有効であったといえる。表現科では、このように空間的・物的・時間的な支援が特に大切であると考える。また、資料④のC児の「がくしゅうのけいかく・かんそうカード」からも見て取れるように、継続的に表現活動の計画・反省を行う自己評価活動を位置づけたことは、子供が表現活動に意欲と見通しをもたせることや活動の達成感・満足感を実感させるうえで有効であったと考える。

「あらわす段階」（第７時～第９時）

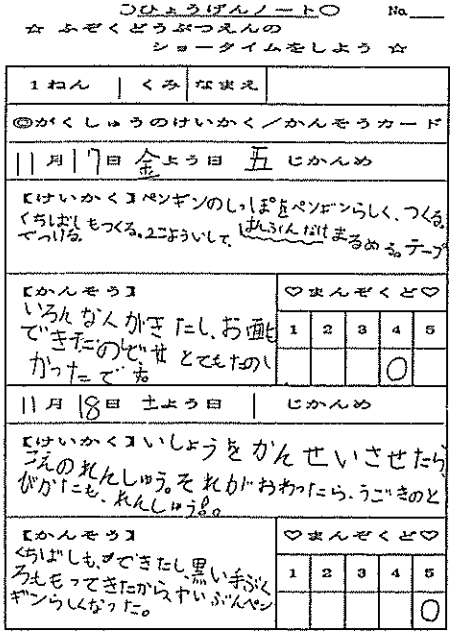
ここでは、これまでのなりきり活動を「ふぞくどうぶつえんのショータイム」というかたちで、発表形式の表現へ構成させていくことをねらいとした。そこで、「ものまねショー」、「サーカスショー」、「ダンスショー」などを例として提示しながら自分が動物になりきって表現したいショーの内容を決めて、表現の工夫をさせていった。

【子供の反応】

子供たちは、例示を参考にショーの内容を決めて、ショータイムカードにおおまかなショーの構成を動きや鳴き声などの様子を時間的経過にしたがって言葉・絵・図などを用いて、自由に書きながら構想を立てていった（資料⑤）。

この段階から、同じショーを共同で表現することも認めたところ、子供たちは、お互いに誘い合ってグループを組んだり、二人組になったりして表現しようとしている姿も見られた。そして、ショーの内容についての構想がある程度できあがったところで、実際にお面や衣装を身につけ、ショーの内容を生き生きと表現していった。写真は、D児とE児の「しかとバーバリーシープの対決ショー」での表現、写真は、F児の「海亀のものまねショー」での表現の様子である。

【資料】学習計画感想カード



つひょうげんノート○　No.___

☆ ふぞくどうぶつえんの
ショータイムをしよう ☆

1ねん	くみ	なまえ	

◎がくしゅうのけいかく／かんそうカード

11月17日 金ようび 五 じかんめ

【けいかく】ペンギンのしっぽをペンギンらしく、つくる。くちばしもつくる。ようういして、あんぜんだけまるめる。テープ

【かんそう】いろんなかざりたし、お面もできたのでせいとてもたのしかったです。

♡まんぞくど♡	1	2	3	4	5
				○	

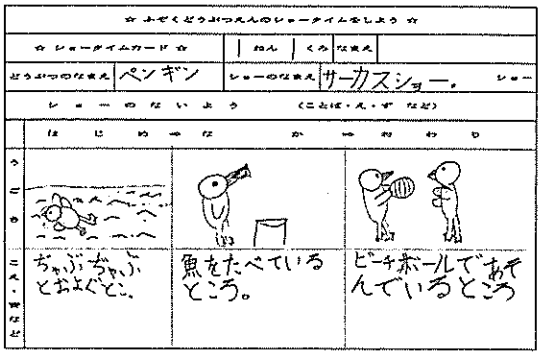
11月18日 土ようび | じかんめ

【けいかく】いしょうをかんせいさせたらこえのれんしゅう。それがおわったら、うごきのとがりにも、れんしゅうを。

【かんそう】くちばしも、ぜできたし、黒い手ぶくろもってきたからすいぶんペンギンらしくなった。

♡まんぞくど♡	1	2	3	4	5
					○

【資料】ショータイムカード



☆ ふぞくどうぶつえんのショータイムをしよう ☆

☆ ショータイムカード ☆ | ねん | くみ | なまえ

どうぶつのなまえ：ペンギン　ショーのなまえ：サーカスショー。

ショーのないよう（ことば・え・ず など）

はじめ	なか	おわり
ちゃぷちゃぷとおよぐところ。	魚をたべているところ。	ビーチボールであそんでいるところ

考　察

ショータイムカードは、ショーの表現の内容を構成立てていくのには有効であったが、カードを書くこと自体に時間をとられ、表現活動が停滞してしまった子供も見られた。本時のように全員の子を対象に一律に書かせるのではなく、選択的に必要に応じて用いることができるような提示の仕方を工夫する必要があったと考える。また、ショーという発表形式を位置づけたことにより、目的意識が明確になり、表現意欲の高まりにつながったようだ。

「あじわう段階」（課外）

この段階は、「ふぞくどうぶつえんのショータイム」の発表会を行うことにより、題材のまとめをし、表現活動の成就感・満足感を味わわせることをねらいとした。

【子供の反応】

発表会では、簡易ステージを設定し、それぞれのショーのグループ・ペア・個人ごとに発表をしていった。写真⑤・⑥は、発表会の様子である。また、発表のあとに発表会および題材全体の感想を書いた。G児は、資料⑥のように、自分の表現だけではなく、友達の表現についても感想を述べている。

考　察

題材のまとめとして発表会を行ったことによって子供一人一人が表現活動の成就感・達成感を味わうことができた。また、資料⑥のG児の感想文からもうかがえるように、発表会のなかで友達の表現を鑑賞することによって、表現の多様性や個性的な表現のよさについて感得することができた。

(6)　全体考察

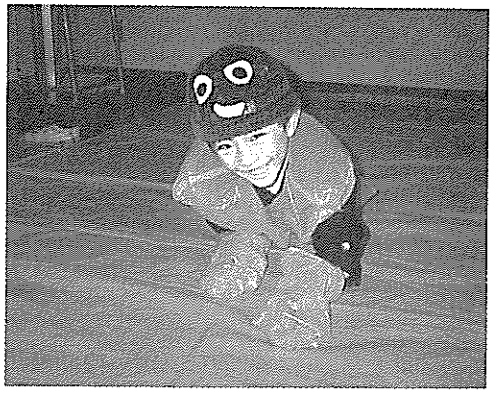
本題材の指導過程における子供の「学習計画感想カード」や「ショータイムカード」などから、子供の主体的な表現活動への取り組みや自己表現のプロセスの展開が見て取ることができる。また、写真の表情や感想文から表現活動の成就感・満足感を味わうことができたことがうかがえる。さらに、動物園のスケッチ大会後という年間計画上の位置付けは、時期的にも子供の学習意欲を高めるうえでも有効であったと考える。

今後の、改善の視点としては、子供の興味・関心・想像力を刺激する素材の吟味と教材化、適切な年間計画への題材の配列、効果的なT・T指導のあり方、学習ノートやカードの内容条件の明確化などがあげられる。

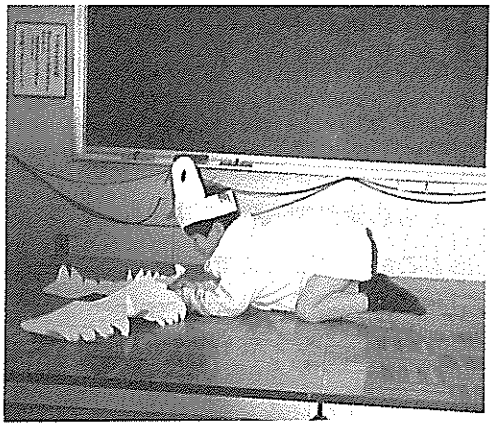
【参考文献】『領域表現』角尾　稔編著　同文書院
『感性と表現に関する領域表現』黒川建一著



【写真④】D児とE児の表現

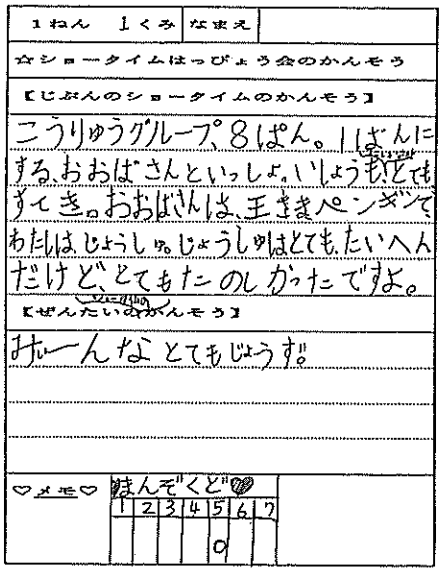


【写真⑤】F児の表現



【写真⑥】ショータイム発表会の様子

【資料⑥】G児の感想ノート



1ねん　1くみ　なまえ

☆ショータイムはっぴょう会のかんそう

【じぶんのショータイムのかんそう】

こうりゅうグループ、8ばん。1ばんにする。おおばさんといっしょ。いしょうもとても すてき。おおばさんは、王さまペンギンで わたしは じょうしゅ。じょうしゅはとても たいへんだけど、とてもたのしかったですよ。

【ぜんたいのかんそう】

みーんな とてもじょうず。

♡メモ♡　ほんそ"くど"♡

1	2	3	4	5	6	7
				○		

指導の実際と考察2

(1) 題材名　秋をみんなで表そう（第2学年）　　樺島　穣

(2) 年間計画における本題材の位置づけ

本題材は、第1学年表現科題材「秋の木の実や葉のお話」や第1・2学年生活科単元「秋を楽しもう」と関連、発展し、秋の自然の様子を体全体で感じ取り、自分の思いを言語、身体、音楽、造形などの様々な表現方法で表現していく11月題材として年間計画に位置づくものである。

秋の雲、落ち葉、虫の鳴き声などの自然の美しさや不思議さを体全体で豊かに感じ取り、自分らしい思いをもとに多様な表現活動で創造的な自己表現をしたり、友達と共同的に表現することは、豊かな感性と創造性の基礎を培うとともに、表現する喜びを味わわせるうえで価値がある。

(3) 目　標

秋の自然の美しさや不思議さを体全体で感じ取り、自分の思いをもとに想像力を働かせて言語、身体、音楽、造形などの表現方法を工夫し、友達と共同的に表現していく喜びを味わうことができる。

(4) 計　画（約8時間）

ねらい	学習活動	配時
○ 秋の自然の様子を体全体で感じ取り、想像力を働かせて思いを絵や文で表現する。	1．秋の自然の様子を体全体で感じ取り、想像力を働かせて思いを表現する。 (1) 秋の自然の様子から体全体で感じ取ったことを話し合う。 ○見えるもの、聞こえるもの、肌に感じるものなど ○不思議さ、美しさ、面白さなど (2) 感じ取った秋の自然の様子から想像し、思いをノートに表す。 ○表したいこと……雲の様子、落ち葉の様子、虫の様子など ○表現する方法……言葉、動き、音、材料、一人、友達	2時間
○ 秋の自然の様子を言葉、声、動き、音材料などをもとに、友達と共同したりして多様な表現活動を楽しむ。	2．自分が表したい秋の自然の様子を多様な表現活動で楽しむ。 ○動物みたいな雲が浮かんでいる様子 ／ ○木の葉が風で吹き飛ばされる様子 ／ ○虫がきれいに鳴いている様子 ↓ 一人動き、声に出す、絵に表す、飾りづくり、音づくりなど ↓ 《個別的表現から共同的表現へ》 ↓ 共同動き、お話づくり、替え歌づくり、歌や合奏など ↓ ○雲たちによる劇遊びへ ／ ○落ち葉たちの歌と踊りへ ／ ○虫のこえの歌や合奏の音楽会へ	5時間
○ 自分や友達が表現した秋の自然の様子を振り返り、よさや美しさを感じ取り味わう。	3．自分や友達が表現した秋の自然の様子を振り返り、楽しく見たり、聴いたりする。 (1) 自分たちが表現した秋の自然の様子を振り返る。 ○想像的な思いを多様に表現できた楽しさと満足感を味わうこと (2) 友達の表現を楽しく見たり、聴いたりする。 ○友達の表現のよさや楽しさへ気づくこと	1時間

(5)　指導の実際

【秋の自然の様子を体全体で感じ取る段階】（１～２時間／８時間）

ねらい　秋の自然の不思議さ、美しさ、面白さなどを体全体で感じ取り、想像力を働かせて思いを絵や文で表現する。

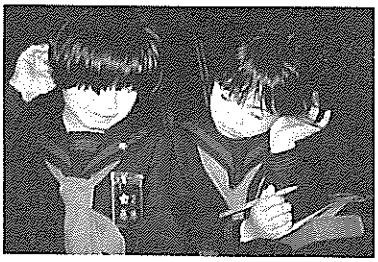
○秋の自然の様子



〈写真　秋空に浮かんだ動物のような白い雲の様子〉



〈写真　色が変わり風に吹かれる木の葉の様子〉



〈写真　虫の鳴き声に耳をすまして聴く〉

○子供の反応

T:外に出て秋を見つけたり、感じたりしてみよう。
C:わー。なんだか雲が動物みたいに見える。ふしぎだな。
C:ほら見てー。あの雲は、ウサギみたいに見えるよ。
C:雲たちがみんなで手をつないでうかんでいるみたい。
T:きっと雲たちもあの空の上で楽しく遊んでいるかもね。

T:秋の木の葉はいろいろな色があるね。
C:イチョウさんが黄緑からだんだん黄色になっている。
C:もみじさんも真っ赤になってとってもきれい。
C:あー。風がふいて葉っぱさんがとばされている。
C:イチョウの葉っぱさんが風でおどっているみたい。
T:きっと踊りながら風といっしょに歌っているかもね。

T:ほら、何か聴こえるよ。耳をすましてごらん。
C:わー。きれいな虫の声だー。鳴き声が違うよ。
C:これはコオロギ。あれはスズムシじゃないかなー。
C:ぼくは家にコオロギを飼っているから鳴き声でわかる。
T:すごいね。虫の声が分かるって。
C:鳴き声が重なってきれーい。

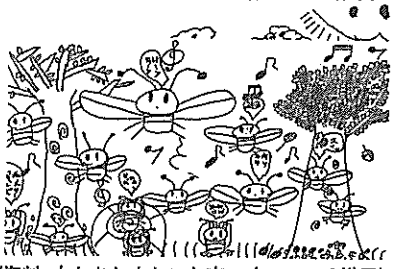
○感じ取りノートから



〈資料 雲たちが楽しく浮かんでいる様子〉



〈資料 落ち葉が風で吹かれて落ちていく様子〉



〈資料 虫たちがきれいな声で鳴いている様子〉

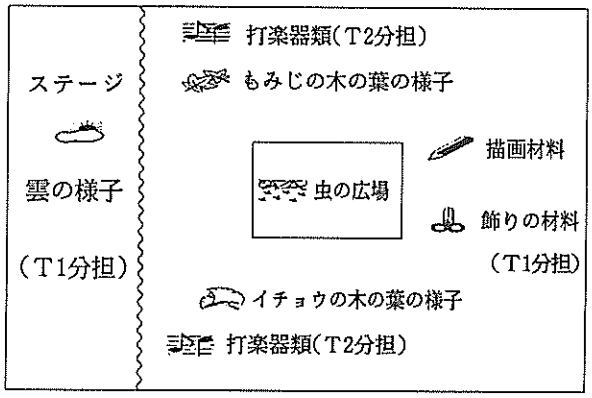
考察１

子供たちは、秋の空の雲の不思議さ、落ち葉や虫の声の美しさなどを体全体を通して感じ取っていった。感じ取りノートや音づくりカードをもとに子供の思いを絵や文で表現させたことは、子供らしい想像をふくらませ、表現への意欲につながり効果的であった。

【秋の自然の様子を多様な表現活動で表す段階】（3～7時間／8時間）

ねらい　秋の自然の様子を言葉、声、動き、音、材料などをもとに、友達と共同したりして多様な表現活動を楽しむ。

○秋をみんなで表す場の設定（体育館）



○T・Tを取り入れた表現活動別の支援

秋をみんなで多様に表現できる場を設定し、表現活動別にT・Tを取り入れた支援を行った。

雲の様子、木の葉の様子、虫の様子と表現主題別にグループ化を図り、一人動き、飾りづくり、音づくりなどを個別に補助や助言を行った。

同じ表現主題の子供たちが、既習の表現経験をもとに個別的な表現から友達との共同的な表現へと移る姿も見られ、各グループに助言を行った。

○雲の様子を表現した子供の反応





〈写真④ 想像した動物雲の様子を絵で表す〉 → 〈写真⑤ 雲になりきって一人動きで表す〉 → 〈写真⑥ 雲の飾りをつくり共同動きで表す〉

雲たちの劇遊び

『くーもめ、くもめー。くーものなかのひこうきはー。いーついーつであーう。よあけのばんに、くーもと月がぶつかった。うしろのしょうめんだーれだ。』(かごめの替え歌)

○イチョウやもみじの落ち葉の様子を表現した子供の反応



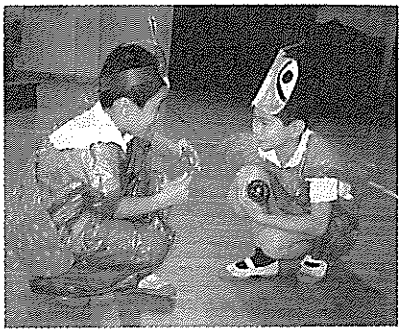


〈写真⑦ 落ち葉の飾りをつくる〉 → 〈写真⑧ 落ち葉が風で散る様子を共同動きで表す〉 → 〈写真⑨ イチョウともみじが出会った時の歌と踊り〉

落ち葉たちの歌と踊り『イチョウともみじー、きれいないろよ。でもね、サクラもきれいないろよー。どのはっぱ見てもきれいだなー。』(チューリップの替え歌)

『ちらーちらーゆれる、きれいなイチョウ。きいろやみどりー、きれいなイチョウ。イチョウの音楽会。みんなで音楽会。』(キラキラ星の替え歌)

○虫たちのきれいな鳴き声を表現した子供の反応


〈写真⑩ 虫の飾りをつくる〉 → 〈写真⑪ 虫の鳴き声の音を楽器でつくる〉 → 〈写真⑫ 虫のこえの歌や合奏の音楽会〉

虫のこえの歌や合奏の音楽会 『あれ まつ虫がないている チンチロチンチロ チンチロリン(トライアングル) あれ すず虫もなきだした リンリンリン リン リーンリン(鈴) あきのよながをなきとおす ああおもしろい 虫のこえ』(虫のこえの歌と合奏)

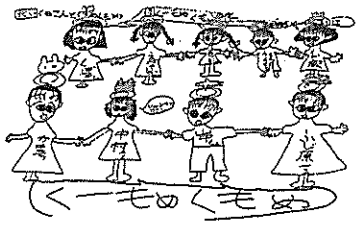
考察 2

雲の様子を表現した子供たちは、絵で動物雲などの様子を表した後、他のグループの動きを取り入れながら、共同的な劇遊びを行っていった。また、落ち葉の様子を表現した子供たちは、飾りをつくった後、共同的に動きを考え、踊りながら替え歌をつくっていった。さらに、虫の鳴き声を音で表現した子供たちは、楽曲と出会いながら虫の音楽会という歌や合奏へと発展させていった。これらは想像力を働かせた思いをもとに、創造的に表現していくための場の設定や個人的な表現から友達を誘うことを教師が促したり、共同的な表現へとまとめていくための提案が効果的であったためと考える。

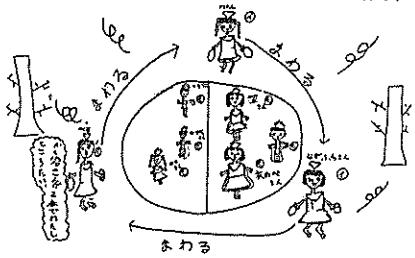
【みんなで表現した秋の自然の様子のよさや美しさを味わう段階】(8時間・課外／8時間)

ねらい　自分や友達が表現した秋の自然の様子を振り返り、よさや美しさを感じ取り味わう。

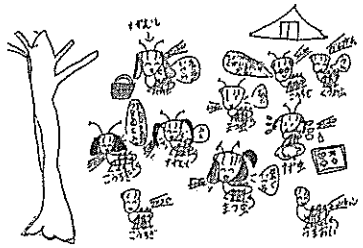
○振り返りカードから



〈資料④ K児が友達とくもめの劇遊びで表した様子〉



〈資料⑤ N児が友達と落ち葉たちの歌と踊りを表した様子〉



〈資料⑥ Y児が友達と虫のこえの歌や合奏の音楽会をした様子〉

動物雲の不思議な様子を絵で表していたK児は、次に雲になりきって一人動きで表し、他のグループの動きなどから影響を受けて、友達との共同的な動き(資料④)へと発展していった。「雲のふしぎなかんじを絵やうごきや歌であらわせたので楽しかったです。みんなでくもめの歌あそびをやりながらNさんたちのうごきが本とうの雲らしいのでとりいれました。」と感想を述べている。

また、イチョウの葉が風で吹かれてもみじに出会う様子を動きや替え歌で表したN児(資料⑤)は、「KさんやSさんたちとおちばが風にふかれてちるところをまわるうごきでくふうできました。」と感想を述べている。これは、自分の思いをより工夫して楽しくするために共同的な表現の必要性を感じている姿であると言える。

さらに、すず虫の鳴き声を様々な打楽器を探しながら音づくりを行ったY児は、「すず虫のなき声を音であらわすことをくふうしたし、歌や合そうを友だちときょう力してできたのでたくさんの虫たちのいろいろななき声がだせました。」と感想を述べている。これは、創造的な音づくりへの取り組みと共同的な歌や合奏の満足感を味わっている姿(資料⑥)であると言える。

考察3

秋の自然の様子から体全体で感じ取った子供たちの初めの思いについて振り返らせたことは、多様な表現活動を取り入れながら想像が広がり、表現活動そのものの楽しさを味わうことにつながった。

他の友達のグループの表現活動を見たり聴いたりする中で、自分や友達の表現活動のよさに気づき自分たちの表現活動に取り入れる姿が見られたことは、表現活動と感じ取り味わう活動の一体的な活動が効果的であったためであると考える。また、感じ取ったことを過去の生活体験や既習内容をもとに替え歌などで再構成していくことも創造的な表現活動として認める必要がある。

(6) 全体考察

本題材において、子供たちは、秋の自然の様子を体全体で感じ取り、想像力を働かせて言葉、動き、材料、音などをもとに、既習の表現経験を生かしながら個別的な表現から友達との共同的な表現へと発展させ、創造的に表現する楽しさを味わう姿が見られた。これは、本題材を第1学年の既習題材の表現経験を生かした発展や生活科と関連させて年間計画に位置付けたことが効果的であったためと考える。今後の年間計画作成上の課題として、題材相互の表現経験の関連性をさらに検討し、価値ある表現対象の開発、年間を通した題材配列の条件をより明確にすることがあげられる。



ともに生きることの喜びを味わい豊かに実践する「人間」学習

── 人にかかわる体験活動とその経験化を図る年間計画の作成 ──

「人間」部　中原　浩　植松　伸之

1．領域「人間」設定の理由

いじめの問題に象徴されるように、今日ほど子供の豊かな心の回復が切望されている時代はない。

いじめの問題は、いじめられる子供の生命の救済が緊急の課題であるが、それだけでは根本的には解決しない。総じて加害者になる子供たちは「怒り・欲求不満・ストレス」等の心理的状態がともなっている。観衆・傍観者側に立つ子供も同じであろう。つまり、全ての層の子供も苦しみ、生きる喜びを見出せない状態にあるのである。いじめの克服は、いじめっ子、いじめられっ子双方の心をいやし、互いをいつくしむ生の喜びを回復することによって成り立つ。だからこそ、こんな子供を育てたい。

> かけがえのない自分、かけがえのない他者を深く感じ、その双方が共によりよく生きていく生き方を希求し、考え、実践していくことに喜びを感じる子供

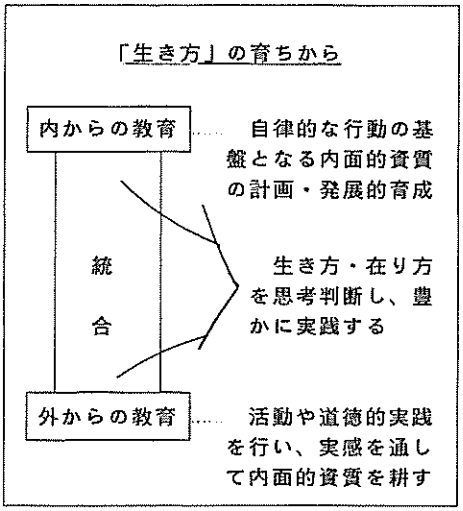
「他者との調和的生き方を希求・思考・実践する子供を育てるべき」という論は、これまでも多く語られてきた。しかし、それが子供に内面化されず、生き方の憧れになっていないために、いじめに象徴される心の荒廃が生じている。要は、一人ひとりの子供が生きることの喜びを感じるような経験をいかに積むかということである。

「生の喜びを実感できる」学習を、わたしたちは、次のように考える。

> ◎　自分をとりまく「もの・人・こと」の生命を大切にし、思いやりをもってかかわろうとする共生の精神を発揮する学習
> ・「よりよい生き方」を思いや憧れの域から、はたらきかける実践の域まで高める学習
> ・実践を振り返り、価値や意義を見出し内面的自覚を深める学習
> ・その両者をくり返す「実践と価値の内面的自覚」の往復的な学習

従来の道徳の学習では、子供の価値観の形成が個人の体験に委ねられ、道徳の時間は、その価値観を振り返り内面的に自覚する時間として位置づいてきた。そのために、道徳の時間で育った心情をもとにして意図的な実践活動を設定することはその趣旨からはずれることになる。一方、学級活動は集団の問題の自主的・自治的な解決過程を実践することを目的としてきた。したがって、実践過程での価値観の深化・統合はその特性から重視されてこなかった。

ところが、子供の側から見たとき、豊かな実践を行うことと、豊かな価値観や心情の形成が別々に生じることはない。豊かな価値観や心情によって、豊かな実践が生まれ、豊かな実践によって、豊かな価値観や心情が育っているはずである。その両者が深まったときに「共生の喜び」が実感される。そして、それは、仲間とともに活動し、思考するなかでこそ、より深く味わえることができる。



こうした考えをもとに、わたしたちは「人間の生き方・在り方」教育の中核を担う「道徳の時間」と「特別活動」特に「学級活動」を統合して、領域「人間」を仮説設定した。

その設定理由は、大きく以下の3点である。

(1)　「生き方」の育ちの面から ── 子供の心の内からの耕しと外からの耕しの統合の必要性

例えば、特別養護老人ホームを題材として学習するとする。必要なのは、自分の命をふりしぼりながら真摯に生きぬいている人に対して、「自分はどうあるべきか」という自分の生き方の発見

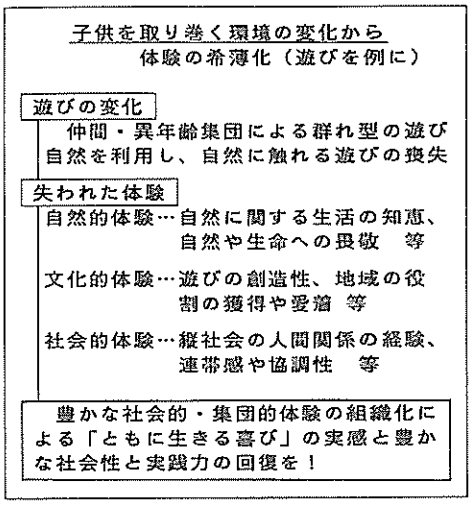
や実践である。そのような生き方の発見や実践を生み出す要件はなんだろうか。

そのひとつは、お年寄りの生き方に接したときに、「何かをせずにはおれない」という思いを種として、何ができるかを判断し、実践することである。この感受・判断・実践の過程で自分の心の豊かさが実感されるはずである。これを外からの心の耕しと位置づける。これに対して内からの心の耕しが存在する。つまり、立ち止まって、自分の心を振り返り、その豊かな心をもとに、自分が大切にしたい心情や生き方を自分の実感をもとに意味づけし、つくり出すことである。

この内からの教育と外からの教育が統合されることによって、子供の心は確かに育っていくのではないだろうか。内からの教育と外からの教育という統合的学習を領域「人間」は担うのである。

(2) 子供を取り巻く環境の変化から ——— 豊かな体験の必要性

子供を取り巻く環境の変化は著しい。遊びの中で、自然に触れ、自然や生命のすばらしさを体感したり、仲間や異年齢の中でルールや連帯感のよさを実感したりすることは、子供の発達課題である。しかし、そのような豊かな体験が希薄化している現実がある。従来の道徳の学習は、子供の豊かな道徳的体験があることを前提として、心を振り返る時間として位置づき、多くの成果をおさめてきた。しかし、子供の豊かな体験が希薄化している今日、道徳学習の前提が揺らいできている感がある。学習の中に子供の豊かな体験を設定することが必要となっている。領域「人間」では、この豊かな体験を位置づけた総合的な学習をめざしている。



(3) 21世紀の社会に必要とされる資質・能力の面から ―― かかわりを求められる環境

豊かな体験が希薄化している子供たちの現実とは裏腹に、子供たちが生きる21世紀の世界は、子供の人間性の豊かさがなければ解決できない問題が林立する。福祉、環境、国際理解の問題がそれである。それらの問題には、知識よりもむしろ、どうかかわっていくかという生き方こそが問題の根幹にある。また、生き方の核には思いやりの心、生命への尊敬・畏敬の心が存在するという共通点がある。したがって、そのような問題に対応できる資質を育てる学習が必要である。そのためには、実際にそのような世界と子供がかかわりを持ち、実際に実践する学習として領域「人間」は重要性を持つ。

2．本校の考える領域「人間」の目標

> 人間としてのよりよい生き方を求め実践する活動を通して、人間性豊かに生きる実践的な態度を育てる。

人間としてのよりよい生き方を求め実践する活動を通すとは、領域「人間」の学習原理、学習対象を示す。「人間としてのよりよい生き方」を思いや憧れの域から実践の域に高めること、逆に、実践からその価値や意義を見出し思いを深めていく「実践と思いの往復」的な学び方を意味する。この精神は、生き方の探求についての自己教育力の伸長と、学習を道徳的実践力の育成にとどめず道徳的実践にまで高める立場を強調している。

人間性豊かに生きるとは、領域「人間」でねらう指導目標を示す。かけがえのない自分、かけがえのない他者を深く感じ、その双方が共によりよく生きていく生き方を希求し、考え、実践していくことに喜びを感じることと、その喜びを核として自らの生き方を主体的に切りひらいていくことを意味する。つまり、他者との共生の精神を自覚して調和的に生きる姿をめざしている。この精神を２つの方向で育てたい。ひとつは、子供の心に目覚めた素朴な共生の精神を、しだいに子供の生き方の原理としての人間愛の精神にまで高めることである。もうひとつは、高まっていく共生の精神を身近な人に対する日常の思いやりとして実践できる態度である。

3．主題の意味と重要性

(1) 主題の意味

ともに生きる喜びを味わうとは、かけがえのない自分、かけがえのない他者を深く感じ、その双方が共によりよく生きていく生き方を希求し、考え、実践していくことに喜びを感じることを意味する。人は他者とのかかわりの中で、自分の力が発揮できた、自分の存在が認められた、自分が他者の役に立てたという感情を味わう。他者とのかかわりの中でそのような充実感・安定感・有用感を実感することが「ともに生きる喜びを味わう」ことである。

豊かに実践するとは、「自他の思いや願いを感じ・推しはかり」「推しはかりを基によりよいはたらきかけを判断・実行し」「判断・実行をもとに自分にとって大切な生き方をつくりだす」ことを意味する。この活動によって生きる喜びを味わい、味わった喜びが次の活動の意欲の基盤になる。

(2) めざす子供の具体的な姿

① 自分の生き方がゆさぶられる「もの・人・こと」に出会ったときに、そのすばらしさを感じとったり自他の思いを推しはかったりしながら、自分の思いを行為にあらわそうとすることができる。

② はたらきかけの活動を自他ともによりよく生きるという面から考え判断し、友や人との交流によって深めることができる。そして、深まった判断を友や人と協力し実践することができる。

③ 自分の感じ方・考え方・行い方を振り返り、これから大切にしたい心を見出し内面的に自覚し、自分なりの生き方をつくることができる。

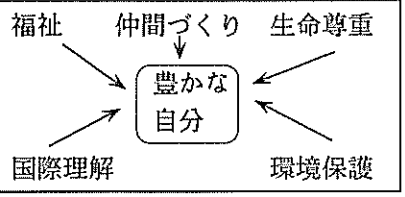
(3) 内容の考え方

人は、日々の生活におけるさまざまなかかわりを通して、人間としてのあり方を自覚し、よりよい生き方を求めていく。そのかかわり方の中核になる精神は「思いやり」と「生命への畏敬」から成り立つ「共生の精神」である。いじめの問題も単なる「身近な友」との接し方の問題に留まるものではない。幼いうちから自分をとりまく他者との経験を通した共生の精神の育ちが不足していることにその根はある。そこで、領域「人間」は、共生の精神をもとに次の２つの方向で内容の構成を行う。

① 21世紀に生きる子供にとって、子供たちが出会う大切な「かかわり」の対象を想定すること。

② 「かかわり」の対象は、自分を起点として広がっていきつつ、つねに身近な「人間関係」、自分自身（豊かな自分づくり）に還元されること。

そこで、「生命尊重、豊かな人間関係、国際理解・協力、福祉、環境保護」を内容の視点とする。このうち「思いやり、生命尊重」を全ての内容の基盤として位置づける。

かかわり		深めたい「共生」の心	内容の視点			各内容の関係
自分自身	他者	友達・教師との「共生」	仲間づくり	生命尊重	思いやり	
	社会	老人や障害がある人との「共生」	福祉			
	社会	人・異文化との「共生」	国際理解・協力			
	自然	人や自然との「共生」	環境保護			

4．副主題について

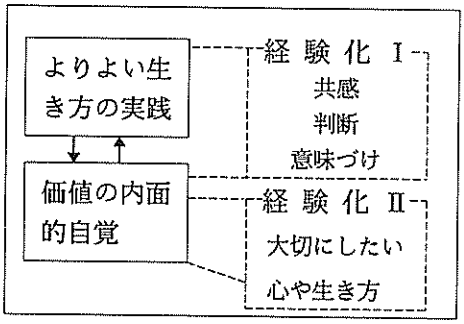
(1) 副主題の意味

人にかかわる体験活動とは、自分の「ともによく生きたい」という思いや願いにもとづいて、他者・社会・自然と心を通わせる体験活動を意味する。

人にかかわる体験活動とその経験化とは、「実践と価値の内面的自覚の往復的な学び」の中で一人一人の子供が獲得する学びである。よりよく生きたいという思いや願いが起きたあと、「人にかかわる体験活動」がはじまる。それは、共通の体験活動であるが、一人一人の子供は、その子なりの感じ方で「もの・人・こと」への共感を得たり深めたりする。また、その子なりの実感で、大切にしたい心や生き方を見出す。

そのような体験からの学びが「経験化」である。

つまり、「人にかかわる体験活動」の過程において生じる共感・判断・意味づけ（経験化Ⅰ）をもとにして、自分が大切にしたい心や生き方を自覚すること、自分なりの道徳的原則をつくりだし深めること（経験化Ⅱ）を意味する。こうした経験化を積み重ねることによって、感性は耕され、考え方・行い方も徐々に変容し、その子の道徳性と実践力の高まりがはかられていく。



(2) 人にかかわる体験活動とその経験化を図る年間計画作成の考え方

年間計画を作成する上で次の3点を大切にする。

ア.「共生」の精神を中核とした各内容が、学級集団の質の高まりへ還元される配列
イ. 子供の生き方をゆさぶる価値ある体験の設定
ウ.「感じる・考える・行う・見つめる」学習過程の継続的配列

ア.「共生」の精神を中核とした各内容が、学級集団の質の高まりへ還元される配列

「かかわり」が、生き方の原理としての人間愛の精神に高まること、日々の身近な人との接し方に反映されるよう、内容配列の系統性を次のようにとらえる。

▼6年間を通した年間計画配列の系統

	低学年	中学年	高学年
仲間	支持的風土	創造的学級組織・学級の連帯感	全校の支持的風土と連帯感
福祉	身近な人への感謝	地域福祉への参加	生命の畏敬の視点からの仲間・福祉・環境への自分のかかわりの自覚と活動
生命	生命への感動	生命を大切にする態度	
環境	身近な環境の美化	地域美化への参加	
国際		世界の子供への関心	自分の生き方を問う国際協力
自分	自然や人にやさしく接することのできる自分	自然や人におもいやりを持ってかかわり、ともに活動することに喜びを味わう自分	はたらきかけの活動から自分の生き方の原理をつくり、より高い価値をもとめていく自分

⇩ 豊かな ⇩ 自分づくり ⇩

→ 豊かな自分づくり

▼1学年内での年間計画配列の系統（3年生の場合）

	1学期	2学期	3学期
仲間	学級の組織化・支持的風土	仲間意識の深まり創造的組織	自分と学級の成長の味わい
福祉	福祉精神の感受と活動開始	福祉精神の深化と活動の発展	福祉活動の継続による有用感
生命	生命の大切さの感受	生命を大切にする活動の開始	生命を大切にする活動の継続
環境			身近な環境問題との出会い
国際			世界の子供への興味・関心

イ. 子供の生き方をゆさぶる価値ある体験の設定

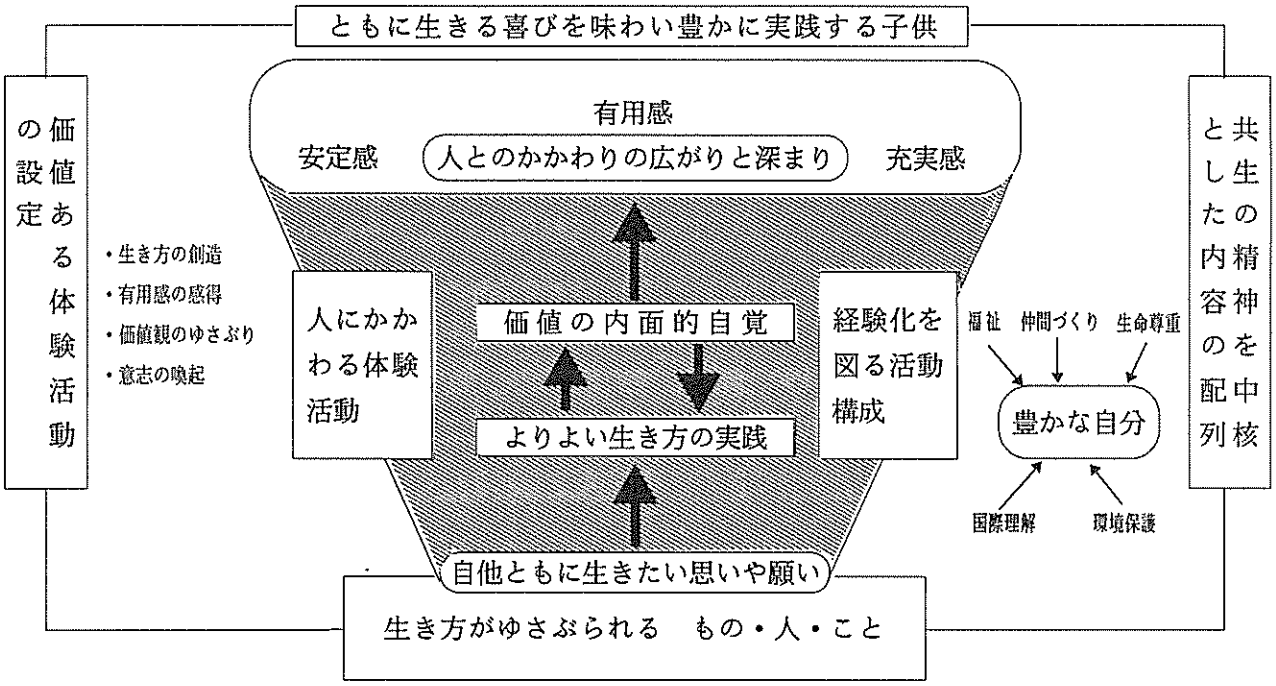
領域「人間」における価値ある体験を「かかわりによって生まれる自分の心のひだにふれる出会いや働きかけ合い」ととらえる。その条件は次の通りである。

① 感性がゆさぶられ「こうせざるを得ない」という意志が喚起される体験
② 活動の過程で、自分のこれまでの生き方や価値観が揺さぶられる体験
③ 行うことにより有用感や充足感が得られる体験
④ 行うことにより新しい生き方や価値観が創り出される体験

ウ．「感じる・考える・行う・見つめる」学習活動の継続的配列

段階	感　じ　る	考　え　る	行　　う	見 つ め る
ねらい	出会いによる心情の耕しと活動意欲の喚起	よく生きるための在り方の思考・交流・判断	よく生きるための行いの実践とかかわりの実感	活動の評価と生き方の創造
活動	心がゆさぶられる事象との出会い	自他の状況の推しはかりと在り方の交流	協同での実践活動	学びのふり返りと生き方の創造

5．構　想　図



6．指導の実際と考察（次頁参照）

7．研究のまとめ

事例1（耳が不自由な方とのふれあい活動を行おう）では、子供たちは、聴覚障害者協会の方、ワークセンターの方々　（ともに耳が不自由な方）とかかわる中で、その方々のたくましく生きる姿に感動を覚えている。また「手話によって多くの人と言葉や心を通わせたい」という願いに応えるために、自分たちができることを考え、行い、その活動から、障害がある方に真心をもって接していこうという生き方をつくっている。それは、必死でお互いの手話を理解しようとする努力によって、心が通じ合った連帯感を感じたこと、相手の喜びを自分の喜びとしている「自分」や、そのことのすばらしさに気づいたことによる。

事例2（輝く心をみつけよう）では、自分の祖父やボランティア活動に携わる方、歴史上の人物にかかわる中で、その生き方を支える思いやりの心やたくましさに感動を覚え、自分の「生き方の原理・原則」をつくりだしている。また、子供たちは共通の体験を設定するのではなく、自分の願いにそって、個々の体験そのものを自分で作り出している。これは、単にこの題材の学習のみで成立するものではない。領域「人間」の学習の積み上げによって「体験を経験化」する資質が伸長していることによって成り立つものである。

以上の2事例及び、多くの実証授業と子供の育ちの姿から、実践と価値の内面的自覚の往復的学習を継続する年間計画の有効性を感じる。

しかし、そのような体験の経験化の力が学年ごとにどのように系統的に伸長させていかなければならないか、そして、それを伸ばすための内容の系統性はどうあればよいかについてはまだ不十分である。その点をさらに細かく検討することが今後の課題である。

第３学年　「人間」学習年間計画（70時間）

月	題　　材　　名	ね　　ら　　い
4	1．ようこそ３年○組へ（４）	◎　よりよい学級生活のスタートをきることできる。
5	2．３年○組仲良し大作戦（５） 3．お父さん、お母さんに心のプレゼントを（３）	◎　立案や運営協力の仕方を学ぶとともに、集団生活の喜びを味わうことができる。 ◎　父母への敬愛を深め家族の一員として明るく楽しく家庭を作ろうとすることができる。
6	4．さくら組の友達とおかしをつくろう（４）	◎　さくら組の友達との心のつながりを深めていくことができる。
6 7	5．給食の残菜を減らそう（３） 6．盲導犬の大切さを伝えよう（４）	◎　給食栄養士さんや調理員さんたちの工夫に感謝する態度持つことができる。 ◎　目が不自由な方の心を推し量かり、自分ができるボランティアを行うことができる。
9	7．耳が不自由な方とのふれあい活動をしよう（前半）（４）	◎　耳が不自由な方と心が触れ合う喜びを味わうことができる。
9	8．教生先生をお迎えしよう（３）	◎　教生先生を温かく迎えることができる。
9 10	9．楽しい学級をつくろう（４）	◎　自分たちの創意工夫を生かして楽しい学級づくりの自主的自発的な取り組みを行うことができる。
10	10．一人一鉢を大切にしよう（７）	◎　自然や動植物のすばらしさに触れ、自分の接し方を考えることができる。
10 11	11．３年○組の宝物を作ろう（４）	◎　思いやりの心を持って、友達を助け合う心情を高めるとともに学級への誇りを持つことができる。
11	12．耳が不自由な方とのふれあい活動をしよう（後半）（４）	◎　耳が不自由な方との心が通い合う喜びを味わい真心を持って接することの大切さを自覚することができる
12	13．おとしよりに、心のプレゼントをおくろう（４）	◎　祖父母を敬愛する心を深め、家族の一員として明るく楽しい家庭をつくろうとすることができる。
1	14．おめでとう１９９６年（４） 15．心に残る本を探そう（２）	◎　自分の姿をみつめ、成長への意欲を持たせるとともに、新年の抱負を具体化することができる。 ◎　世界の子供たちのお正月の過ごし方を知り、異文化への興味・関心を持つことができる。 ◎　自然や人の生き方の偉大さに感動する本を捜し味わい自分の生き方と比較することができる。
2	16．長浜公園を守ろう（４）	◎　きれいな街づくりを行った自分の心情を振り返り地域を大切にしようという意欲を持つことができる。
3	17．４年生へ大きくはばたこう（７）	◎　１年間の自分や学級の成長を確認し、充実感を味わうことができる。

第５学年　「人間」学習年間計画（70時間）

月	題　　材　　名	ね　　ら　　い
4	1．さあ『○○（学級イメージ像）』の出発だ　（４）	◎　一人一人の願いや夢を出し合い、学級目標や学級組織をつくり、学級生活のスタートを切る。
5	2．ぼくらの学級シンボルを作ろう　（７）	◎　共通のめあてに向かって協力する活動を通して、集団活動の喜びを味わうことができる。
	3．心と体の成長　（３）	◎　自分の体や男女の体の違いなどを知り、互いの命や人権を尊重し仲良く生活することができる。
6	4．バングラデシュに心をとどけよう　（６）	◎　外国の人々に対して、理解と愛情をもち、その幸福のために役立とうとする態度を育てる。
7	5．思い出深い、楽しい夏季集落にしよう　（４）	◎　夏季集落の目的と日程を知り、自主的に活動できる部分を分担・協力して実施する。
	6．夏休みの計画を立てよう　（２）	◎　１学期の生活を振り返るとともに夏休みを充実したものにするための計画を立てることができる。
9	7．２学期の計画を立てよう　（２）	◎　自分なりの夏休みの成果を発表するとともに、２学期の目標を立てることができる。
	8．教生先生との触れ合いを楽しもう　（３）	◎　教生先生を迎える会やお別れの会の計画や運営を通して教生先生や友達との人間関係を深める。
	9．秋の夜長を読書で楽しもう（２）	◎　読書に親しみ、よい本をすすんで読もうとする。
10	10．本当の美しさ　（４）	◎　人間の行為や心情の美しさを感じ取り、自分の生き方にいかしていこうとする。
	11．バングラデッシュに心をとどけよう　（２）	◎　６、７月の活動の成果をふり返り、有用感を味わうとともに、今後の協力活動を考え実践する。
11	12．輝く心を見つけよう「わたしの生き方モデル」（１２）	◎　自分の尊敬する人物の生き方をさぐり、まとめる活動を通して、人間のすばらしさを感じ取る。
12	13．２学期の生活をふり返り、新年の抱負を語ろう　（１）	◎　１学期の課題をもとに自分の成長をふり返り、新年への意欲を高める。
1	14．決意を伝統文化で表そう　（２）	◎　新年の抱負や目標を掲示して意欲を高める。
	15．テーマ『人間・命・いじめ、そして、わたしは』　（６）	◎　自他の命のかけがえのなさを知り、楽しい学級生活を支えるやさしく強い心を培う。
2	16．西公園から、ぼくたちの自然へのかかわりを見なおそう　（６）	◎　西公園清掃で思ったことをもとに、かけがえのない地球、自然を守る方法を考え実践する。
3	17．最高学年にむかって「６年生と語り合おう」　（４）	◎　６年生の卒業を祝うとともに、６年生からその役割や責任を学び、自分が何をなすべきか考える。

6．指導の実際と考察１

(1) 題材名　　耳が不自由な方とのふれあい活動を行おう（第３学年）　　植　松　伸　之

(2) 年間計画における本題材の位置づけ

本題材は、「福祉」の内容領域である。３年生では、「福祉」に関する題材を次のようなねらいにもとづいて配列している。

題　材　名	時 期	おもな活動	ね　ら　い
盲導犬の大切さを伝えよう	１学期	盲導犬の大切さを追究、里親を捜す新聞発行	障害がある方のために役立ちたいという願いの芽生え
耳が不自由な方とのふれあい活動を行おう(前半)	２学期前半	耳が不自由な方の願いに応える活動の企画会議	障害がある方の気持ちを推し量り触れ合い活動を行おうという願いの具体化
耳が不自由な方とのふれあい活動を行おう(後半)	２学期後半	耳が不自由な方との手話による交流	障害がある方へ真心をもって接していこうとする態度の内面化

つまり、１学期に育った「障害がある方のために役立ちたい」という願いを、具体的な活動で実現し、さらに、その活動をもとに、障害がある方と触れ合うときに大切にしたい自分の態度（生き方）を見出し、内面化していくことが本題材のねらいである。

さらに、この福祉内容の学習で育った共感性や判断力・経験化の力が、他の内容領域に発展したり、自分の身近な仲間との豊かな人間関係づくりに還元されたりすることをねらいとして、本題材の後に「長浜公園を守ろう」（環境保護）「さくら組の友達とおかしをつくろう」（豊かな人間関係）を設定する。

(3) 目　　標

① 「耳が不自由な方の願い」に応えるという視点に立った触れ合い活動を計画・実行することにより、自分の有用感と耳が不自由な方と心が触れ合う喜びを味わうことができる。

② 自分の心を振り返り、自分の体験の豊かさを実感し、障害がある方へ真心を持って接することの大切さを内面的に実感することができる。

(4) 計　画（約９時間）

ね　ら　い	学　習　活　動	配　時
○ 生き方をゆさぶられる体験活動 ・授産施設に行き、自分なりの手話会話を試みて、手話の大切さと耳が不自由な方の願いを知る。	１．手話の大切さを知り、耳が不自由な方とふれあい活動を行おうという意欲を持つ。 (1) 耳が不自由な方の生活の一部を模擬体験することにより、耳が不自由な方の苦労を想像し、手話の大切さを知り練習する。 (2) 簡単なあいさつを手話で練習する。 (3) 授産施設に行き耳が不自由な方の苦労を知るとともに、自分の手話が少し通じる喜びや未熟さを感じる。	１時間 課　外 ２時間
	手話をもっと練習して耳が不自由な方とのふれあい活動を行おう	
○ 願いを推しはかり判断する交流活動 ・耳が不自由な方の願いに応えるよりよいふれあい活動を企画する。	２．耳が不自由な方の心を推し量りながらふれあい活動を企画する (1) 「手話による交流を広げたい」という耳が不自由な方の願いを生かすという視点から、ワークセンターでの会話はどのようにすれば成功するか話し合う。　＜１次会議＞ (2) 金丸さん（耳が不自由な方）に耳が不自由な方の苦労をききながら手話や手話による歌を習う。	１時間 １時間
○ 判断を実行しふれあう体験活動 ・精いっぱいの手話劇、手話による会話を試み	(3) 「手話による交流を広げたい」という耳が不自由な方の願いを生かすという視点から、劇を成功させるためにはどのようにすればよいかを話し合う。　＜２次会議＞	１時間

る。 ○　生き方をつくりだす交流活動 ・ふれあい活動時の豊かな心を振り返る。	3．実際にふれあい活動を開き自分の有用感と共に生きる喜びを味わう。 4．今までの自分たちの練習の様子やワークセンターでのふれあい活動の様子を映したビデオをもとに、活動時の豊かな心情を振り返り、真心を尽くすことの大切さを内面的に自覚する。	2時間 1時間

(5)　指導の実際

生き方をゆさぶられる体験活動…耳が不自由な方との出会い、耳が不自由な方の願いに応えたいという願いの喚起

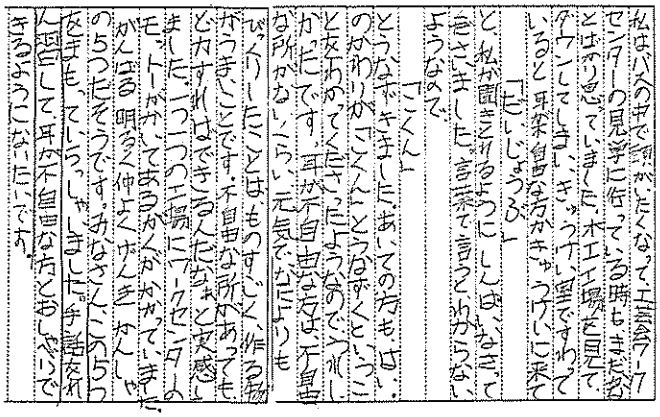
ねらい　耳が不自由な方の願いを知り、その願いを発展させようという意欲を持つことができる。

《授産施設での調査、自分なりの手話会話の試みによる耳が不自由な方の願いの感得》

①　聴覚障害者用の字幕入り日本語ビデオを視聴し、耳が不自由な方の苦労を疑似体験を通して知り、さらに探っていこうという意欲を持つ。（1／9時）

②　聴覚障害者の授産施設工芸会ワークセンターに行き、耳が不自由な方の願いを知る(2.3／9時)

資料① ワークセンターでの子供の感想文



私はバスの中で頭がいたくなって工芸会ワークセンターの見学に行っている時もまだなおっていました。ボエエ場を回っているとき耳が不自由な方がきゅうけいじかんまでずっとしごとをしていました。

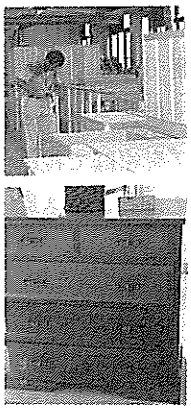
「たいへんだろうな」

と私が思ったようにしんぱいもなくてさっさとしごとをしていたのでびっくりしました。言葉で言うことわからないようなので、

「こんにちは」

というようなやさしいあいてのおもいやりがこころにつたわってくれたようなのでとてもうれしかったです。耳が不自由な方は元気でなにごとにもいどむ人たちだなと思いました。

写真① 子供が感激した施設の方の作品と作業の様子



考察　ワークセンターの見学前の子供たちの「かわいそうだから何かをしてやりたい」という意識は、資料①のように、耳が不自由な方のやさしさや努力のすばらしさに触れてゆれてきている。また、手話を覚え思いに応えたいという願いが生まれている。

願いを推しはかり判断する交流活動…耳が不自由な方の思いに応えるよりよいふれあい活動の企画

ねらい　「手話によって言葉や心を通い合わせたい」というワークセンターの方の願いに応えるよりよりふれあい活動を企画することができる。また、耳が不自由な方の願いを推しはかりながらよりよいふれあいのあり方を判断する「共感に基づいた判断力」を深めることができる。

《聴覚障害者協会ではたらく金丸さんから情報を得たり、金丸さんへ手話による会話を試みたりする活動を行いながら、工芸会ワークセンターでのふれあい活動の計画をつくることによる共感と判断力の深化》

自由会話は手話で行うかについて　<一次会議の中心場面>（4／9時）

A、手話を練習して自由に話せるようになるべき。B、紙に書いて伝えるべき。

C1:Aの方法だと、耳が不自由な方の願いにかなっていて耳が不自由な方が喜んでくれる。

C2:工芸会ワークセンターに行ったとき、手話で自分の名前を伝えたけれど、たったそれだけのことでもとても難しかった。手話は、そんなに難しいのだから、うまく伝わらなかったら言葉や心を伝えることにはならない。

C3:今は少ししか覚えられないけど練習して手話で伝える方がワークセンターの方は喜ぶと思う。

T1 手話はそんなに簡単なのでしょうか。逆に難しいのでしょうか。だれか金丸さんと手話で話をしてみてください。

写真金丸さんに手話を試みる



友が手話を試みるのを他の子供たちも自分の指を動かしながら真剣にみつめる。指文字が逆になっていることを指摘されると「ああ、こうしたらいいんだよ」というつぶやきがもれる。

C4:手話は難しいけど、一生懸命練習して、できるだけ手話で伝えよう。そして、それで、伝わらないところは、口話や紙に書いて伝えよう。

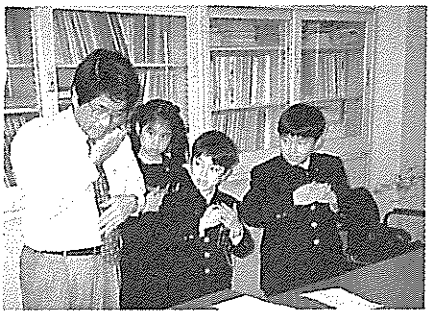
劇のせりふの手話をどうするかについて　＜二次会議の中心場面＞（５／９時）

A、手話にしないで文字やＯＨＰで表す。　B、練習してできるところは、手話で表す。

C、大事なところは手話で表す。　D、全部を手話にする。

C1:ＡとＢの方法を合わせた方がいい。できるところは手話で、できないところは口話でやれば耳が不自由な方もわかるから。金丸さんが手話を教えるのは、人々に少しでも手話を覚えてほしから、その願いを生かしたい。

写真③　金丸さんに劇の場面を手話に訳してもらい練習



C2:耳が不自由な方の願いを考えて、できるだけ手話にした方がいい。

C3:金丸さんも喜ぶし、この前はできなかったのにできるようになったら、すばらしいよくがんばったと思って喜んでくれると思う。

C4:なるべく手話をいっぱい入れる。金丸さんは、「失敗してもかまわないし、忘れたら、身振りでもいい」と言っていたから。

C5:耳が不自由な方の願いは手話を使って心を通い合わせたいということ。紙やＯＨＰでも伝わると思うけど、手話の方がもっと伝わる。

C6:文字を紙やＯＨＰで伝えると、自分たちでやったがんばりが通じないので、やっぱり自分たちで手話をやった方がいい。手話なら自分たちの心や気持ちが通じると思う。

この福祉会議のあと、子供たちは、金丸さんに手話を習いに行ったり、手話による会話のパターンをおさめたビデオテープを家庭で視聴し練習したりした。

考察　金丸さんが手話を伝えようとする姿を見て、子供たちは手話の大切さや金丸さんの願いにこだわるようになっている。また、交流を重ねていくうちに、「手話」を覚えることは、単に伝達技術を習得することではなく、それを覚える努力が「心を伝えることになる」という真心の価値を発見している。以上のことから、金丸さんとの交流体験は、子供たちに、その子独自のエピソードにもとづいた「真心の価値の発見」という体験の経験化を促したと考える。

判断を実行しふれあう体験活動…せいいっぱいのふれあい活動の実行による心が通い合う喜びの実感（７．８／９時）

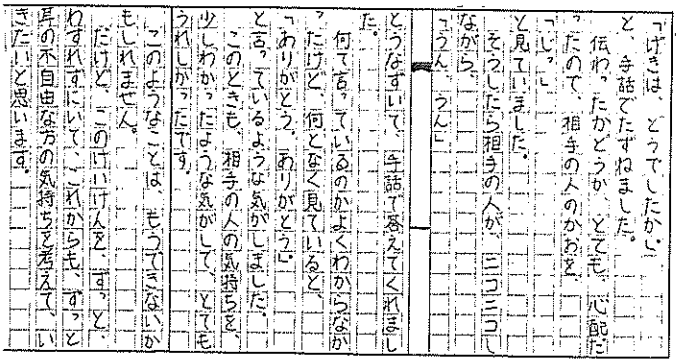
ねらい　心をこめたふれあい活動を行うことを通して、手話を通した心の通い合いを感じ、充実感・安定感・有用感を感じることができる。

《実際に工芸会ワークセンターに行き、劇を公開し、手作りのプレゼントを渡し、自由会話を試みて》

写真④　手話で会話を試みる



資料②　はたらきかけが終わったあとの児童の感想文



「げきは、どうでしたか。」と、手話でたずねました。伝わったかどうか、とても、心配だったので、相手の人のかおを、じっと、見ていました。そうしたら相手の人が、にこにこしながら、「うん、うん」とうなずいて、手話で答えてくれました。

何てゆっているのかよくわからなかったけど、何となく見ていると、「ありがとう、ありがとう」と言っているような気がしました。

このときも、相手の人の気持ちを少しわかったような気がして、とてもうれしかったです。

このようなことは、もうできないかもしれません。だけど、この出会いを、すてずわすれずにいて、これからも、ずっと耳の不自由な方の気持ちを考えていきたいと思います。

考察　ほとんどの子供が資料に示したような、耳が不自由な方の真剣な対応への感謝、心が通じ合った喜びを記している。出会う段階では子供たちは耳が不自由な方に対して「かわいそうだから～してやりたい」という同情心を持っていたが、行う段階では、それが真心の意識に変容している。それまでの耳が不自由な方のすばらしさの感得、手話文化の共有、心の通い合いの喜びによると考える。

見つめる段階…活動時の豊かな心情の振り返りをもとにした自分の生き方の創造（９／９時）

ねらい　「耳が不自由な方との触れ合い」活動の体験時の心情を振り返り、これから自分が大切にしたい心を見出すことができる。

《手話による劇や自由会話の場面、真剣に劇を鑑賞したり何度も手を振って別れを惜しむワークセンターの方の表情を写した写真やビデオの提示》

▼ 交流時の子供の発言

C1:プレゼントを渡すとき「劇はおもしろかったですか」と手話できいたら、にこにことして拍手をしてくれたうれしかった。
C2:手話でお話をしたとき、何と言っているかはわからなかったけど、心が通じたような気がした。
C3:プレゼントを渡したとき、ありがとうを何回も言ってくれたのでうれしかった。手話係を決めて手話を練習しよう。地域の人にも手話を覚えてもらおう。
C4:あんなに真剣に劇を見てくれて、ありがとうと言ってくれた人と私は心が通じている。相手が喜んでくれることが自分の喜びになる。相手の心を一番に考えてこれからも触れ合い活動を続けたい。

▼ A児の体験の経験化

ワークセンターでの手話体験

個人的に調査した聾学校での取材

経験化Ⅰ
「手話で心が通じたときは本当にうれしかった。」
「みんな真剣に見てくれた。」
「心をこめて、ありがとうと言ってくれた。」
だからもっと手話を練習しよう。
こう感じた

経験化Ⅱ
「あんなに真剣に見てくれて、ありがとうと言ってくれた人と私は心が通じている。」
「相手が喜んでくれることが自分の喜びになる。相手の心を考えて活動を続けたい。」
こう生きたい

心をつくす意識

考察 子供たちは、行う段階までの体験活動によって、同情意識から真心意識と変容した自分の心情をその子独自のエピソードをもとに振り返っている。また「相手が喜んでくれたことが自分の喜びになる。相手の心を一番に考えて活動を続けたい」という発言が示すように、その子なりの実感のこもった生き方を見出している。ワークセンターでの触れ合いで子供が得た心の通じ合いの喜びが大きかったことによる。したがって、「真心の価値の大切さが内面化される」という体験の経験化がはかられたと考える。

(6) 全体考察

ア、「共生の精神」の広がりと深まりを考慮した題材の配列の面から

資料③に示したように子供の共感性をもとにした判断力は高まっている。その要因は、①1学期に行った「盲導犬の大切さを伝えよう」の学習で子供たちが体が不自由な方の役に立ちたいという意欲を強くもたこと、②自分の体験をもとに目が不自由な方の心を推しはかることによってその思いを深く感じる経験を行ったことによる。つまり、そこで育った実践意欲と推しはかりの態度が本題材に発展しているのである。この意欲と推しはかりの態度、有用感は、異なる内容の題材にも転化し「長浜公園を守ろう」という環境保護の学習でも、長浜公園の清掃活動を続けるお年寄りへの共感から、清掃をしようという意欲を持つとともに、せっかく掃除した公園が汚され続けても、生き生きと活動を続けるお年よりの生き方のすばらしさを学んでいる。

資料③子供の共感性をもとにした判断力の変容

	題材名	達成人数
福祉	盲導犬の大切さを伝えよう	28
福祉	耳が不自由な方との活動	38
環境	長浜公園を守ろう	36
仲間	さくら組の友達とおかしを	39

N＝40人

はたらきかけの活動の計画を判断するときに自分の体験をもとに相手の心情を推し量った根拠を作ることができた児童数

学習後の触れ合い活動の有用観

とても役立っている60%	役立っている40%

イ、学級集団の質の高まりへと還元される題材の配列の面から

本題材のあとに行った「豊かな人間関係」（さくら組の友達とおかしを作ろう）の学習でも共感性をもとにした判断力は高まり（資料③）さくら組の友達が喜ぶ姿に喜んでいる自分の心に気づき「さくら組の友達は大切な仲間である」という意識を持ち、学習後もさくら組の友との遊びを続けている。また、福祉係という係活動が生まれ、朝の会を用いて児童は自発的に手話の練習を継続している。したがって、福祉を中心にして育った資質は、学級集団の質の高まりへ発展すると考える。

ウ、体験の経験化をはかる学習活動の設定の面から

実践の各段階の考察に記したように、子供たちは「感じ・考え・行い・見つめる」という学習活動を通して、共通体験の中から自分にしかないエピソードを見出し、自分が大切にしたい生き方をつくり出している。

エ、課題…活動で育った共感性が学習の中で設定される「豊かな人間関係づくり」に転移していくことは検証できた。今後は日常生活の中でその共感性が発揮される方法を究明することが課題である。

6　指導の実際と考察2

(1)　題材名　輝く心を見つけよう　「わたしの生き方モデル」（第5学年）　　中　原　　浩

(2)　年間計画における本題材の位置づけ

本学級の子供は、楽しいだけの活動、与えられた活動だけでは満足できず、今までしたことのない活動や価値あると思われる活動を望みつつある。一方、大いなる未来への翼を羽ばたかせる時期であるにもかかわらず、実際には、自分の将来への夢や希望、尊敬する人物を考える機会が少なく、生きる上での指針となる展望や人物をもつことができていない。「今の子供は夢がない。現実的である。損得や仕事の苦楽にめざとい。」と言われる姿に重なる部分がある。こうしたことは、自分の可能性を自ら閉ざしてしまうし、自分が「生きる」ことの意義を見失わせるものとなる。また、他者への思いやりの心も貧しいものにしてしまう。

そこで、自分の生き方の指標となるような生き方や人物を、子供自らに探らせていく学習体験が必要であると考える。そして、その人物の生き方を支えた思いに触れた子供の思いを生かしながら子供自らが取り組める活動を構想していくことを意図して本題材を位置づける。具体的には、思いやりの心に支えられてたくましく生きる人間のすばらしさやかけがえのなさにふれ、感動を深めるとともに、自分はどう生きるかという考えを深め、自分の生き方に生かしていくものである。

このことは、今までの人とのかかわりを思いやりという価値から見直すとともに、次の活動への意欲を高め、方向性をもたらすものである。また、3学期の題材『人間・命・いじめ、そしてわたしは』、そして6年題材『自分史をつづろう』へとつながるものである。

(3)　目　　標

①　人間のたくましさやすばらしさ、思いやりの心の大切さにかかわるテーマを立て、考えをまとめ、交流することを通して、自分を見つめ今後の活動を創り出していくことができる。

②　人間の生きる姿への関心を高め、すばらしい生き方への感動を深めることができる。

(4)　計　画　（約12時間）

ね　ら　い	学　習　活　動	配　時
○　生き方との出会いによる感動 ・対比的な人物の生き方と出会い、追究意欲をもつ。 ○　生き方を探る体験活動 ・人物の行いや考えを探りまとめる。 ○　調べた生き方の交流活動 ・友達の調べた人物と比べながら聞く。 ○　経験化を図る体験活動 ・自分が今後の生き方のモデルとしたい価値を取り入れる。	1．人間の生きる姿や思いやりの心について話し合い、自分の調べていきたいテーマを考える。	3時間
	(1)　資料をもとに、思いやりや人間の生き方について話し合う。	②
	(2)　自分の調べたいテーマを決め、計画を立てる。	①
	2．テーマと計画にしたがい、人物の生き方を調べる。	5時間
	(1)　「わたしの生き方モデル」の資料を集め、生き方をさぐる。	③
	(2)　調べたことや自分の考えをまとめる。	②
	3．「わたしの生き方モデル」発表会を行う。	2時間
	(1)　テーマグループごとに発表会を行う。	
	(2)　各グループを回覧し、メッセージカードを書いてわたす。	
	4．思いやりの心やすばらしい生き方について話し合う。	2時間
	(1)　『新ちゃんがないた』をもとに、たくましく思いやりの心をもって生きることのすばらしさについて話し合う。	①
	(2)　どんな心をもって生きたいか、今までの学習をまとめ考える。	①
	(3)　学びをもとに、自分や学級の生活とその心を見つめる。	（課外）

(5)　指導の実際

感じる段階 …思いやりの心やたくましい生き方への感動を深める人物と出会い、自分のテーマを決める。（1～3／12）

ここでのねらいは、題材の導入として、思いやりの心やたくましい人間の生き方への感動を深める人物との出会いを設定し、その感動を基盤として、人間の生き方に関する問題意識や追究意欲を高め、自分の探究テーマを決めることである。そのために、『くもの糸』（芥川龍之介作）のカンダタと二度も命綱を他人に譲って亡くなったウィリアムズ氏という対比的な人物に出会わせ、その行い方や心情を見つめさせることによって、思いやりとその生き方に対する関心を高めていった。

カンダタとの出会い

「自分のことしか考えない思いやりのない人」

・状況の把握と思いの推しはかり

・自分がカンダタの立場だったら

「下りろと叫ぶのは仕方がないのではないか」

《人間の弱さ、醜さへの気づき》

↓

《善を希求する心のうずき》

自分だけ助かりたい、自分さえよければという心はだれもがもっている心だろうか。

ウィリアムズ氏との出会い

「普通の人にはできない」

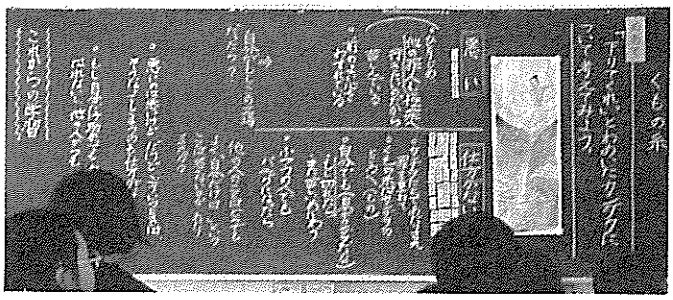
「なぜ命を捨ててまで他人に譲れたか」

「カンダタが当たり前だとは言えない」

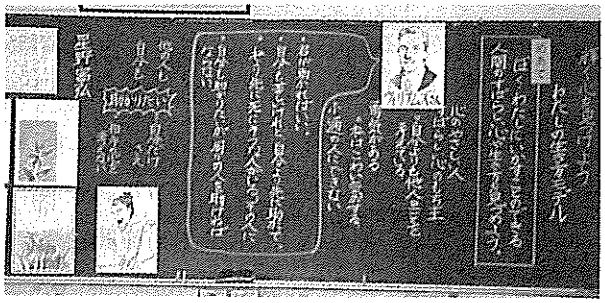
「自分より相手を大事にする人もいる」

他にも本当に思いやりのある行動をとった人がいるのではないか。

自分のテーマ（調べていきたい、見つめていきたい心や人物は）



写真①　1時間目（カンダタについて）の板書



写真②　2時間目（ウィリアムズ氏について）の板書



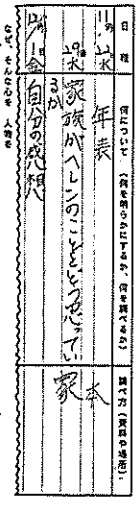
命綱、他人に譲る

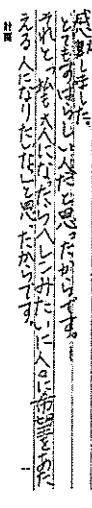
60代男性 2人の身代わり

資料①　学習(2時間目)に用いた新聞記事



資料②　人物を選んだ理由(山下清、ヘレンケラー)





優しさと思いやりの心を中心に

ナイチンゲール　アンネフランク

マザーテレサ　ボランティアの心

自分の祖父　先生やみんなの考え

たくましくくじけない心を中心に

田中正造　野口英世　キューリ夫人

ベートーベン　ガリレオ　王貞治

明るく希望を与える心を中心に

山下清　デズニー　ヘレンケラー

資料③　テーマ一覧

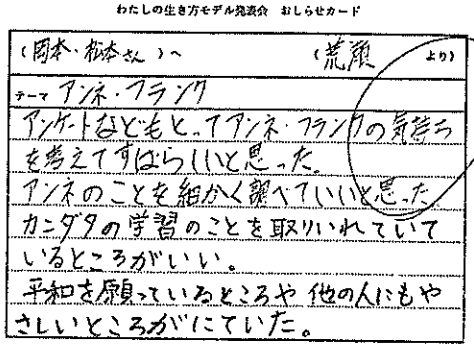
考察１　資料②からわかるように、子供たちは自分の生き方に取り入れるためにテーマを決めて調べていこうとする姿が見られる。このことは、対比的な行為からそこにある思いやりという心情・価値に焦点化して学習を構成していったことで、自分が今までもっていた経験や価値観を思いやりという面から見直すとともに、人間のたくましさへの感動を深め、自分もそうありたいという思いをもたせて今後の活動への意欲を高めた結果であると考える。

考える段階…自分の追究テーマとその計画にもとづいて資料を収集・整理・処理し自分の考えをまとめる。（4～8／12）

ここでのねらいは、図書やアンケート、実際体験やインタビューなど自分なりの方法で資料を収集、活用させ、自分の考えを作りまとめていくことである。学校や地域の図書館に行って調べたい人物の資料を探しまとめる子、自分の亡くなった祖父の生き方を調べるために父や親戚に聞いたり日記をひもといた子、思いやりの心や奉仕の心を調べるために地域の子供会の世話をされてある方や老人ホームの世話をなされる方にインタビューに行った子など、多様な活動を行っていった。

行う段階…「わたしの生き方モデル」発表会を行う。（9～10／12）

ここでのねらいは、「わたしの生き方モデル」発表会を行い、自分や友達が調べてきた人物の生き方のすばらしさについて考えていくことである。まず調べてきたテーマや人物ごとに４つのグループ（思いやりの心1…ボランティア活動に携わる人や自分の祖父や友達を中心に、思いやりの心2…ナイチンゲール、マザーテレサなど歴史上の人物を中心に、たくましくやり抜く心…ベートーベン、野口英世など歴史上の人物を中心に、生きる希望を与える心…山下清、ヘレンケラーなどを中心に）に分けて発表し、その後は回覧方式をとって発表会を行った。また、感想カードをもとに、意見や賞賛の声を交流できるようにした。


わたしの生き方モデル発表会　おしらせカード

（岡本・松本さん）へ　（荒張　より）

テーマ　アンネ・フランク

アンケートなどもとってアンネ・フランクの気持ちを考えてすばらしいと思った。

アンネのことを細かく調べていいと思った。

カンダタの学習のことを取りいれていているところがいい。

平和を願っているところや他の人にもやさしいところがにていた。

資料④ 発表者への感想カード


写真③ 発表を行う子供の姿

考察２　調べてきたテーマや人物ごとに４つのグループに分けて、４つの場で発表会を行ったことにより全員の発表ができる機会と自分なりに興味をもった人物やテーマについて見ていける機会がもてた。資料の感想カードから分かるように、子供たちは自分の調べてきたテーマや人物と重ねたり比べたりしながら友達が探った人物の生き方を興味深く聞き入っていった。

見つめる段階…人間のすばらしさや思いやりの心の大切さについて話し合い、今までの自分のテーマにかかわらせて考えを深める。（11～12／12）

ここでのねらいは、自分なりに調べてきた人物の行為や心情を、たくましい生き方、思いやりの心という価値のもとに、自分の心の中に蓄積させ、そこから自分を見直したり、今後の生き方を考えることである。そのために資料「新ちゃんがないた」を用い、その人物への感動と自分が調べてきた人物の生き方への感動との共通点を探り、その感動の中核となる価値を明らかにしていかせた。

T　自分たちが調べてきた「生き方モデル」と新ちゃんを比べて共通することはありますか。

H1　足が不自由でも、自分の足で歩こうという強い意志をもっていることがすごい。その強い意志がみんなの生き方モデルにもあり、共通点がある。

（熱心にビデオを見て…学習ノート「輝く心とは」の記述）

H2　輝く心とは「人のことを考えて行動に移すこと」だと思う。『新ちゃんがないた』で剛は、新ちゃんのことを思っていろいろなことをしてあげている。ぼくが聞いたボランティアの人の話でも「人の役に立ててうれしい」といってあったことからそう思う。

（学習を終えて…聞き取りより）

H3　この学習は楽しかった。思いやりの心を調べたが、思いやりとは行動に移すことが大切だということが分かった。自分も思いやりのある人になりたい。人のことをきちんと考え、他人からされてうれしいことを自分もどんどんしていきたい。


写真④　「新ちゃんがないた」のビデオを見る子供たち

考察３　子供たちは今までの自分の「生き方モデル」で学んだ輝く心を、物語『新ちゃんがないた』の新ちゃんや剛に重ねて考えていった。H1やH2の生き方モデルとの共通点や自分が直接出会って聞いた人物との思いから考えている発言からうかがわれる。これは、自分の追究活動や学び（「思いやりの心やたくましい生き方」という価値）を経験化していく資料をもとにした話合い活動を次のように構成したことが有効であったからであると考える。

ア、四肢性マヒという障害や意地悪にも負けない新一のたくましさを「だから、ぼくだって！」につづく言葉として考えさせる

イ、「健全な精神とは、どのようなものであろうか」という発問のもとに、人間の精一杯生きる姿のすばらしさやたくましさ、思いやりの心の大切さなどの価値に焦点化させる

ウ、「自分が見つけた輝く心」を書かせ、今までの学習をまとめ、自分の生き方に生かしていこうとする場を設定する。

(6)　全体考察

子供の反応を見ると、どの子も、学んできたこと（すばらしい生き方とそれを支える心）を自分の今後に生かしていこうとする姿が見られる。また、資料⑤⑥のように、自分の身の回りにあるささいな行為の中にある「輝く心」を見取っていく温かい目（感性）の育ちが感じられる。このことから、次のことが考えられる。

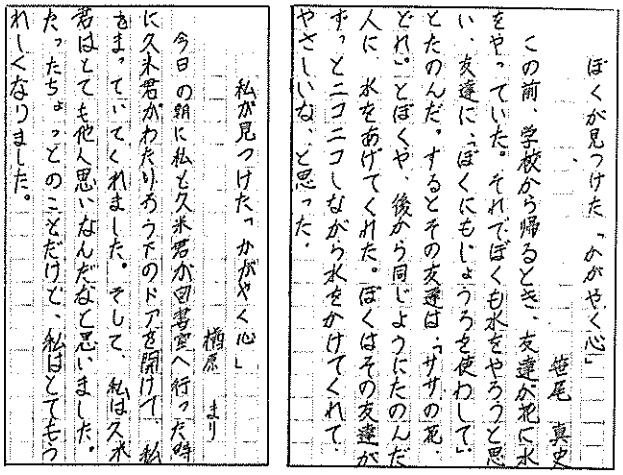
ア、「輝く心を見つけよう『わたしの生き方モデル』」の題材は、高学年の子供たちにとって、自分の生き方を見つめる指針となり得ることとともに、自分たちの生活を思いやりという面から見つめる機会となり得る題材であること

イ、４つの活動構成（①対比的な生き方の人物への出会いによる感動をもとにした追究意欲の喚起と自己追究テーマの決定、②追究テーマと計画に基づいた生き方への探究、③「わたしの生き方モデル」発表会によるさまざまな生き方への関心の高まりと感動の深まり、④学びを経験化していく資料の打ち込みと話合い）は、子供が自分で価値に迫り、それを自分のものとして自分なりに経験化していく上で有効であること

また、課題として次の点があげられる。

ウ、子供の調べていく人物や心が、伝記上の人物にかたより、身近な人や直接触れ合える人へはたらきかけ学んでいくという学習になりにくくなっている。このことは、すばらしい生き方、その心を、特別なものとして見てしまう危険性がある。活動１（感じる段階）で出会わせる人物の考慮が必要である。

今後、心に響き生き方を高める体験を組織化する力量と子供の輝きを見つめ、見逃さない豊かな感性を磨き、同行者として歩んでいきたい。

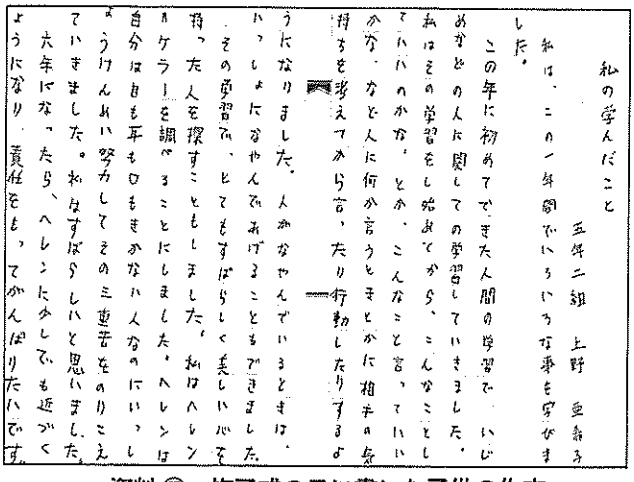

ぼくが見つけた「かがやく心」　笹尾　真史

この前、学校から帰るとき、友達が花に水をやっていた。それでぼくも水をやろうと思い、友達に「ぼくにもじょうろを使わして」とたのんだ。するとその友達は「サザンの花、どれ？」とぼくや、後から同じようにたのんだ人に、水をあげてくれた。ぼくはその友達がずっとニコニコしながら水をかけてくれてやさしいな、と思った。

私が見つけた「かがやく心」　楠原　まり

今日の朝に私も久米君が図書室へ行った時に久米君がわたりろうかのドアを開けて、私もまって、いてくれました。そして、私は久米君はとても他人思いなんだなと思いました。たったちょっとのことだけで、私はとてもうれしくなりました。

資料⑤⑥　学習を終えて1週間後、2週間後に書いた子供の作文


私の学んだこと　五年二組　上野　亜希子

私は、この一年間でいろいろな事を学びました。

この年に初めてできた人間の学習で、いじめなどの人に関しての学習していきました。私はその学習をし始めてから、こんなことしてはいけないかな、とか、こんなこと言っていいかな、など人に何か言うときとかに相手の気持ちを考えてから言ったり行動したりするようになりました。人がなやんでいるときは、いっしょになやんであげることもできました。その学習で、とてもすばらしく美しい心を持った人を探すこともしました。私はヘレンケラーを調べることにしました。ヘレンは自分は目も耳もきかない人なのにいっしょうけんめい努力してその三重苦をのりこえていきました。私もすばらしいと思いました。六年になったら、ヘレンに少しでも近づくようになり、責任をもってがんばりたいです。

資料⑦　修了式の日に書いた子供の作文

参考・引用文献　佐藤州男作「新ちゃんがないた」文研出版 1986　伊藤隆二著 伊藤隆二著作集全5巻 福村出版 1996

ことばを通して創造的に自己表現する国語科学習

── 課題や目的をもった言語活動を重視する年間計画の作成 ──

国語科部　水上　栄一　佐々木保善
伊藤　啓二

1．本校の考える国語科の目標

主体的な言語活動を通して、ことばを正確に理解し、適切に表現する能力を育てるとともに思考力や想像力および豊かな言語感覚を養い、国語に対する関心を深め、国語を尊重する態度を育てる。

国語科教育は「言語の教育を重視する」という立場から、教材のもっている価値を間違いなく理解できるような読解指導や、わかりやすい話し方・文章の書き方を学習し、その技術・方法を生かして上手に話したり書いたりする表現指導を工夫してきた。しかし、興味や意欲をもったとき、子供はすでにもっている知識や技能が十分でなくても、自分にとって必要な表現方法を模倣してみたり、文章の意味を分かろうとして調べてみたりする創造的な姿を発揮する。この事を考えたとき、これからの国語科教育は、言語活動を主体的に進めていく能力を育てていくことを重視していかなければならない。その過程や結果として身につけた個性的で創造的な理解や表現の力を評価していくことが大切である。これは現代の教育課題である生涯にわたって生きて働く自己学習力を国語科としてとらえた結果でもある。

2．主題の意味と重要性

(1)　主題の意味

ことばを通して創造的に自己表現していくとは、知りたいことを教えてくれる文章、話などの言語情報に自ら関わっていき、言語を媒体として心を働かせて理解したり、感じたことや考えたことを表現したりするなかで言語感覚を磨き、自分なりの表現の仕方を見つけ出したりしていくことである。具体的には、

①　自分のもっている経験を生かし、言葉や文章から必要な情報を収集し活用していること

②　自分なりに解釈した意味や思いや見方、考え方、感じ方を伝達していること

である。したがって、国語科学習のなかにの活動があらわれてくるように内容や場を工夫していくことが必要である。また、言葉や文章から必要な情報を取り出したり、自分の考えや感じたことを相手に分かってもらえるように伝えていくことは、国語科だけでなく、すべての教科の学習に活用されていく。このことは、全体テーマであげていた生きる喜びを味わうことのできる豊かな学力の一端をにない、よりよく生きる上で価値があるものと考える。

(2)　めざす子供の具体的な姿

○　さまざまな文献や文章を読み、自分なりに解釈をして理解し、活用している子供

○　自分の思いや考えを分かりやすく伝えることばや方法を考え、コミュニケーションを図っている子供

○　ことばを通してものの見方や感じ方、考え方を広げ、深めている子供

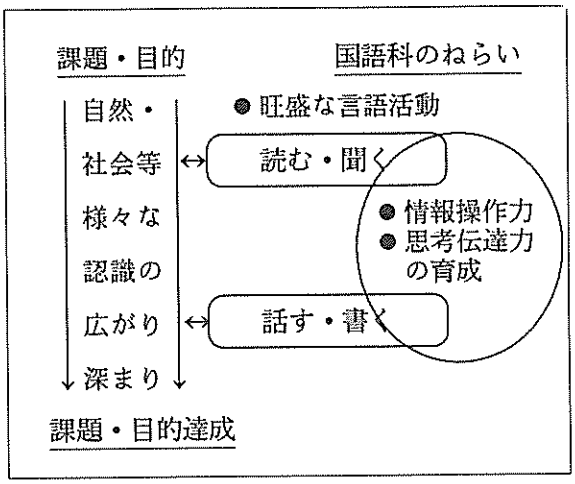
(3)　内容の考え方

今までの国語科は、理解と表現の領域の中で教え育てる言語能力、つまり、適切に書いたり話したりする表現力、正確に読み取り、聞き取る理解力、それに伴う言語に対する知識・理解を学習の内容として系統的に位置づけてきた。しかし、本校の考える国語科では、教え育てる言語能力ではなく、経験を通してつかみ、自ら創造する言語能力へと転換を図っている。したがって国語科の内容は、子供が課題や目的をもって主体的にことばに働きかけ、言語情報を必要に応じて取捨選択したり、納得したことを相手に伝える言葉を選んだりしていく言語活動そのものとなってくる。

3．副主題について

(1) 副主題の意味

課題や目的をもった言語活動とは、知りたい、調べてみたい、書き表したいといった意欲、態度を喚起し、様々な認識を広げたり深めたりする過程で、主体的にことばと関わりながら、読む・聞く・話す・書くといった活動を行い、技能を身につけていくことである。課題や目的をもつことで国語科学習の実の場が生まれてくる。この実の場を通して、子供たちは、主体的にことばや文章に働きかけて言語情報を収集、処理し、自分の思いや考えを表し伝達していく能力を培っていくことを考えている。



そのためには、従来の教材文中心の国語科学習から課題や目的をもった国語科学習へと転換を図らなければならない。子供に行わせたい言語活動や情報操作力・思考伝達力などの育てたい能力を考えた年間計画を構想することが必要である。

(2) 課題や目的をもった言語活動を重視する年間計画作成の考え方

子供が、自分の課題や目的をもって主体的にことばに働きかけていくこと、自分で納得のいく理解をし、自分の納得のいくことばや形態で表現していくことを求める姿としたとき、学習者が目的をもって読んだり書いたりしていく学習者主体の言語活動を組織的に年間計画に位置づけていく必要がある。したがって、国語科では次の３点を年間計画作成の観点として構成を考えていきたい。

① 学年の興味・関心や他教科学習との関連を図った認識対象の教材化およびその配列
② 情報操作力・思考伝達力の各段階を単元ごとに重点化した位置づけ
③ 読む・書く・聞く・話すの４つの言語活動を組み合わせたり、総合したりする単元の設定

① 学年の興味・関心や他教科学習との関連を図った認識対象の教材化およびその配列

自然・社会・自己・人間・文化・国際化・環境・言語などを学習の媒材や追究の課題として設定し、学年の実態に合わせて位置づけるようにしていく。

言語活動は、表現・理解活動の側面と認識活動の側面が絡み合って行われている。子供が国語科学習を行うとき、言語そのものがいつも学習の対象ではない。言語を媒体として、その意味する外延にある自己、自然、社会など様々な認識を広げている。その中で、理解・表現活動を繰り返し、言語能力を身につけていく。したがって、各学年の興味・関心、他教科の学習と関連した認識の対象を教材化して国語科の学習内容を設定することで、子供の主体的な言語活動を促し、知識や技能だけではない以下に示すような言語能力を育てることができる。

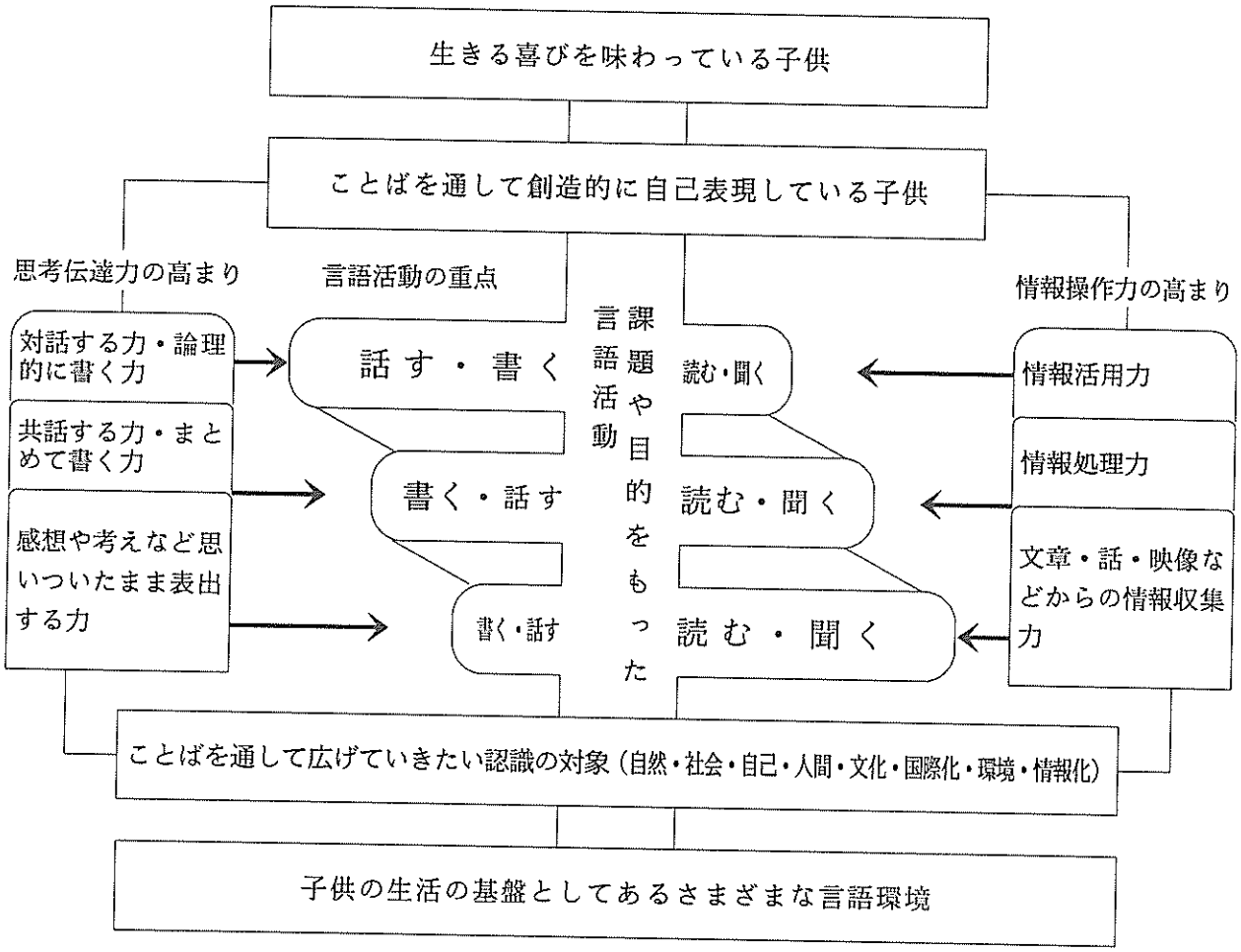
② 情報操作力・思考伝達力の各段階を単元ごとに重点化した位置づけ

２つの能力を重要視して考えるのは、主体的に言語活動を活性化するために必要な能力としてとらえているからである。自分の目的に向けて言語情報を選択、処理、加工し、考えを作り上げていく情報操作力とそのことを言語化して伝えていく思考伝達力は、読解力や表現力と大きく関わっている。したがって情報操作力を情報収集する力、情報処理する力、情報活用する力の面で、思考伝達力を感想・意見を表出する力→共話する力→対話する力の順に段階的にカリキュラム構成の中心として位置づけるようにする。

③ 読む・書く・聞く・話すの４つの言語活動を組み合わせたり、総合したりする単元の設定

子供が情報操作力や思考伝達力を発揮していくように考えたとき、言語活動は、理解や表現といった領域でくぎった中で行われることはない。4つの言語活動は、それぞれに手を組み、一体となりながら子供の必要に応じて行われていく。たとえば、情報を収集するなかで読む活動が行われ、収集したことを表出するときに話す活動や書く活動が行われる。したがって、カリキュラムを作るためには、4つの活動が組み合わされたり、総合したりする単元にする必要がある。年間の単元の構成にあたっては、学年の最初の時期には教材文を中心的に読む活動を主にした単元を位置づけ、最終的には、子供の課題に応じて教材となる文章を資料として活用し、書く、話すことを主とした単元へと発展させていく。このことによって、より言語活動が個性的で創造的になっていくものと考えている。

4．構　想　図



5．指導の実際と考察（次頁参照）

6．研究のまとめ

子供たちは、紙芝居を作る、劇を作る、本を作るという目的のなかで、自分たちなりの共通の話題や課題をもって読む、聞く、話す、書くといった言語活動を進めていった。確かに教材の価値を教えよう、育てようとしなくても要点や中心をとらえていったり、必要性から文章の構成を考え、自分で活用していったりする活動の様子がみられた。情報を操作する単元の組織、自分の思考した事柄を対話しながら深めていく単元の組織があって、子供の主体的な言語能力の育成の一端をこの研究を通して明らかにできたと考えている。しかし、今後の課題としては、子供たちは、今までにもまして意欲的に活動しているのであるが、まだ国語科という枠を意識した指導になっている。他教科との関連をもっと密接に図り、国語としての内容と他教科の内容との積極的な関連が図られなければならない。そして、国語の資質・能力の評価を行っていくことが今後は必要である。

5．指導の実際と考察１

佐々木　保　善

(1)　単元名　　紙人形劇をしよう『スーホの白い馬』（第２学年）

(2)　年間計画における本単元の位置づけ

本単元は、読む・書く・聞く・話すの４つの言語活動を組み合わせたり、総合したりする単元を設定するというカリキュラム作成の視点に基づき２年生物語単元として２学期に位置付けたものである。

前単元は、隣に座っている友達と２人で楽しく話し、場面毎の登場人物の言ったことや思ったことを吹き出しに書いて、挿し絵を詳しくしていくことを目的として学習してきた。つまり１対１で話すことによって共同して場面の様子を構成していったのである。子供たちは、場面における登場人物の言動や心情、様子など自分で読んだだけではっきりしなかったものが、２人で話すことによってだんだんとはっきり分かってくるという楽しさを味わっている。

本単元は、さらに話す・聞くという言語活動を旺盛にし、はじめにもった自分の読みを練り上げていくことをねらいとしている。ここでは、子供の目的は「紙人形劇をする」ということである。紙人形劇をするために子供たちは、登場人物の動きや台詞はどのようにしたらいいのだろうかという課題をもって叙述に働きかけていく。数人で１つの場面の登場人物の動きや台詞を共同で作りあげていくので、この場面では、動きや台詞をどうするのかという話合いも必要とするようになる。そして、作りあげていった動きや台詞は人形劇発表会で演じるために記録する。

このように、紙人形劇をするという目的をもち読む・書く・話す・聞くという活動が総合的に高められる単元である。本校国語科が大切にしている思考伝達力の高まりでは、「共話」の段階である。

次の単元では、ある一つの共通的の作品を読んでその中に込められている人々の願いを話し合う。そして、作品の中に込められた人々の願いという観点で他の作品を個々人が捜して読む。子供たちは、自分が読み味わった作品の中に込められた願いがどんな形で語られていたのかについて話し合う。

このように、話すという活動が幅を広げる学習に発展していくのである。

(3)　目　標

①　意欲的に文章を読み、文章を読んで感じたことや考えたことを書き、自分らしい読みをもつことができる。

②　共話をしながら相手の考えを自分の考えに採り入れて自分で作った紙人形の人物の動きと台詞（自分らしい読み）を練り上げることができる。

(4)　計　画（約１４時間）

ね　ら　い	学　習　活　動	配 時
○　意欲的に文章を読み自分の読みを作る。	１．作品「スーホの白い馬」に出会い、ペン読みをし、読んで考えたことを書く。	５時間
○　叙述に立ち返り、自分で人形の動きや台詞を作る。	２．自分で紙人形劇を作る。 (1)　場面分けをし、自分の好きな場面を決める。 (2)　登場する人物の紙人形を作る。 (3)　自分の好きな場面での人形の動きと台詞を作る。	３時間 ① 課　外 ②
○　共話をして自分の読みを練り上げる。	３．共話相手を求め、自分が作った人形の動きや台詞と共話相手が作った動きや台詞を総合して、その場面の人形の動きや台詞を作る。	２時間
○　意欲的に紙人形劇を発表する。	４．紙人形劇を場面ごとに発表する。	４時間

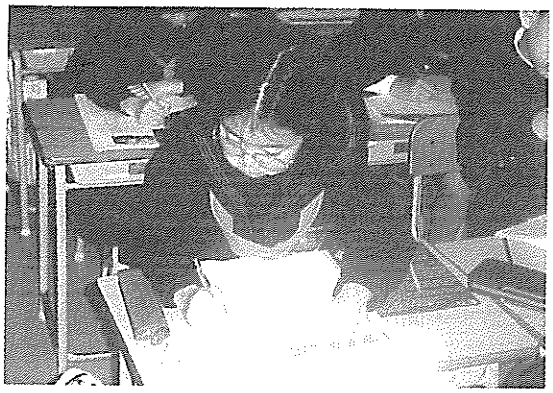
(5) 指導の実際

① 自分の読み作りの段階（１／１４～５／１４　時）

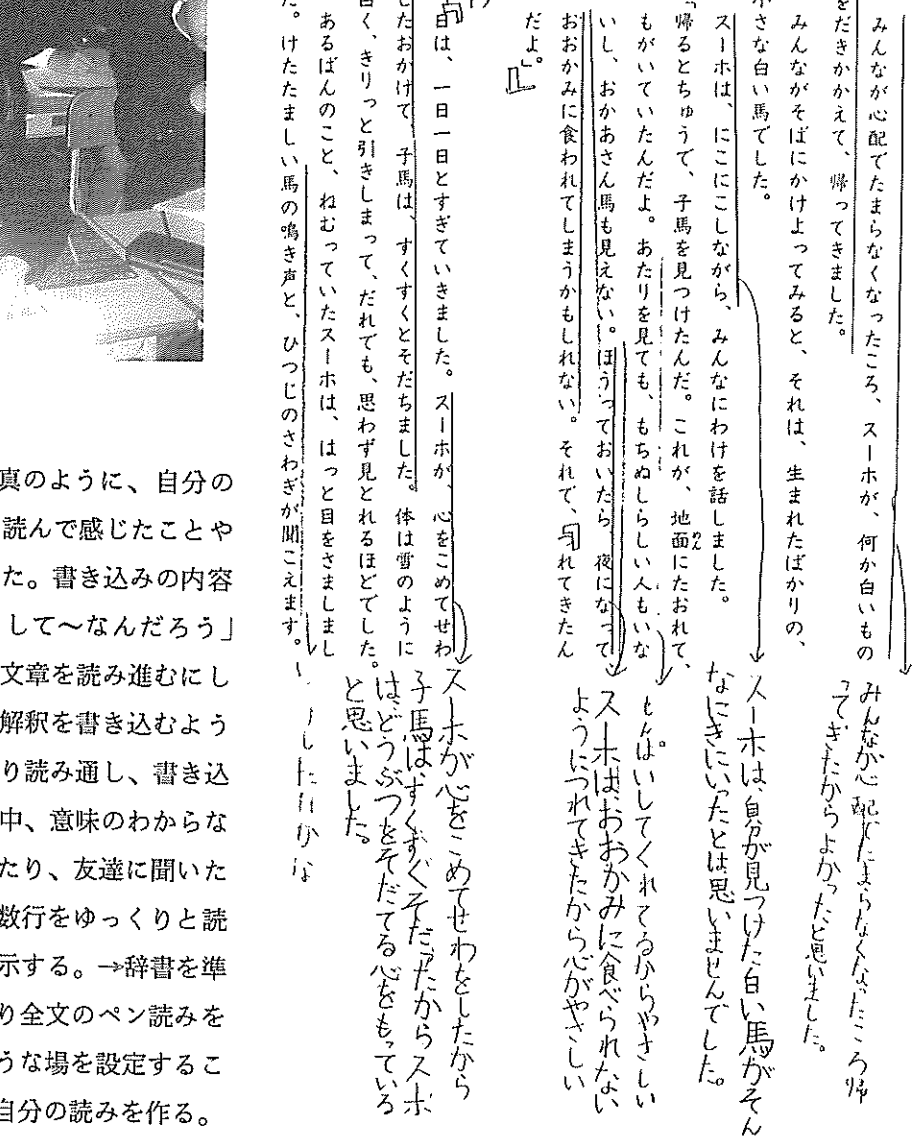
ここでのねらいは、作品に素直に出会わせ一人一人に自分の読みを作り出させることである。そのための援助として、前単元で経験しているペン読みを振り返らせるための数行のペン読みを一緒に行う。本文のペン読みが始まったら、全員が一通り全文をペン読みを終えるまで時間を保障する。子供たちは、十分に書き込みができるノートを準備した。一人一人に確実に自分で全文を一通り自力で読み終えたことへの満足感を味わわせることができると考えた。

※　ペン読みとは、文章を自力で読んで、行間に感じたこと考えたことを書き込んでいくことである。その時、読めない語句があれば調べてその横に意味を書いたり、読み仮名を付けたりもする。

写真①意欲的にペン読みをする子供たち



資料①ペン読みをした子供のノート



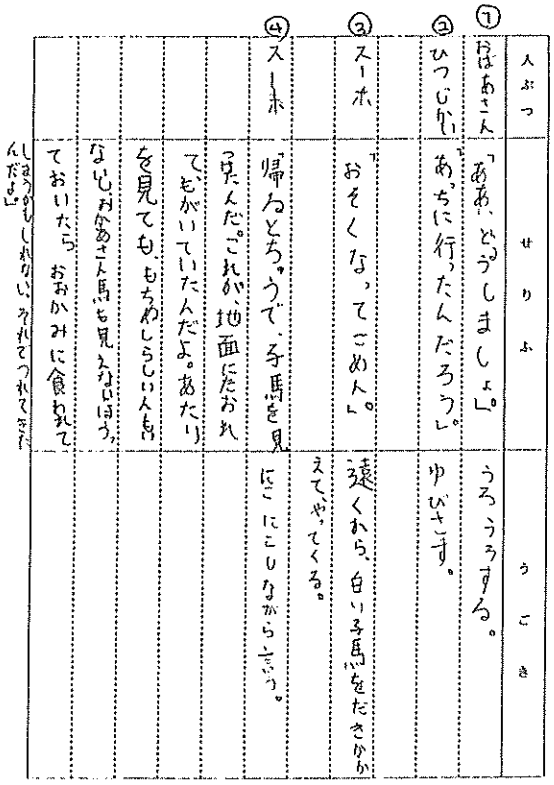
考察　ペン読みのノートや写真のように、自分の力を十分に発揮して、文章を読んで感じたことや考えたことを書き込んでいった。書き込みの内容は、はじめは「ここは、どうして～なんだろう」という疑問型が多かったが、文章を読み進むにしたがってしだいに自分の考え解釈を書き込むようになった。全員が文章を一通り読み通し、書き込みを終えることができた。途中、意味のわからない語句に出会うと辞書を引いたり、友達に聞いたりして調べる姿も見られた。数行をゆっくりと読み、ペン読みのサンプルを提示する。→辞書を準備しておく。→どの子も一通り全文のペン読みをする時間を確保する。このような場を設定することによってどの子供も確実に自分の読みを作る。

② 人物の気持ちや様子をより豊かに想像する段階（６／１４～８／１４　時）

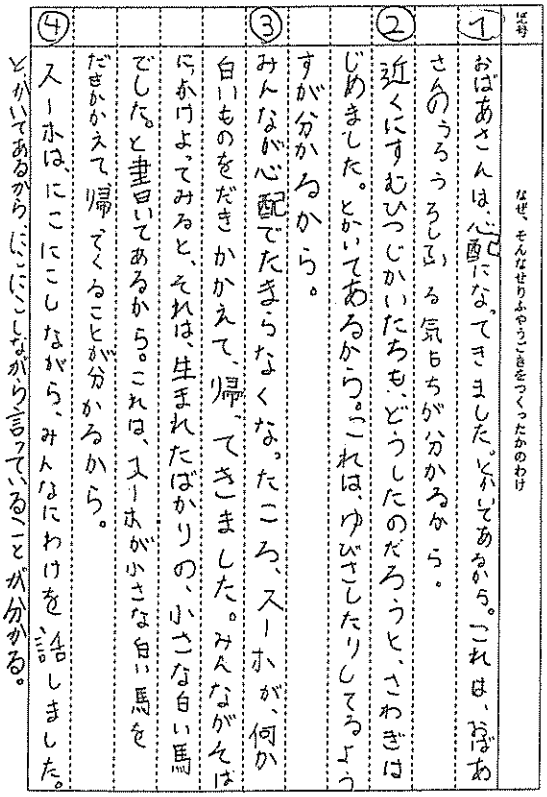
ここでのねらいは、人形劇をつくるという活動に対する意欲を喚起し、人物の気持ちや場面の様子を豊かに想像するために叙述への立ち返りを強化することである。そのために次のような援助をした。はじめに、紙人劇をするという活動目的をもたせるために、教材文の表題に着目させたり、教材文と連続で取り扱うようになっている教材文（教科書Ｐ８２～８３　光村図書）を読ませる。次に好きな場面（場面は、文量を考慮し９つの場面に分けておいた。）を選ばせその場面における登場人物をペープサートに作らせた。

さらに、選んだ場面では登場人物がどんな台詞を言い、どんな動きをしたのか、でるだけ想像してその場面での人形劇を作らせていった。ただし、台詞は一人の人物に対して2回までという条件を付けておいた。次のノートは、K児のものである。

資料登場人物の台詞と動きのノート



資料③そのような台詞や動きを作ったわけ



考察　資料②と③　を合わせて見ると、資料③の中の「～とかいてあるから」というように、子供は、人物の台詞と動きを考えるために叙述へ立ち返りを必要とした。このことから、人形劇をするという活動目的と、そのために登場人物の台詞と動きを考えていくという課題をはっきりともつことによって場面の様子や人物の気持ちをよりよく想像しようとして叙述への立ち返りを強化することができる。

③　自分の読みの練りあげと共話力を高める段階（8／14～10／14　時）

ここでのねらいは、友達と共話をして一緒に人形劇を作りながら、自分の読みを練り上げ豊かにしていくことである。とともに、共話する力を高めていくことである。そのために、クライマックスというべき場面の人形劇を作っている子供に人形劇を演じさせた。次に共話の仕方は学習の手引きとして掲示し、必要なときに見て参考にするようにさせた。

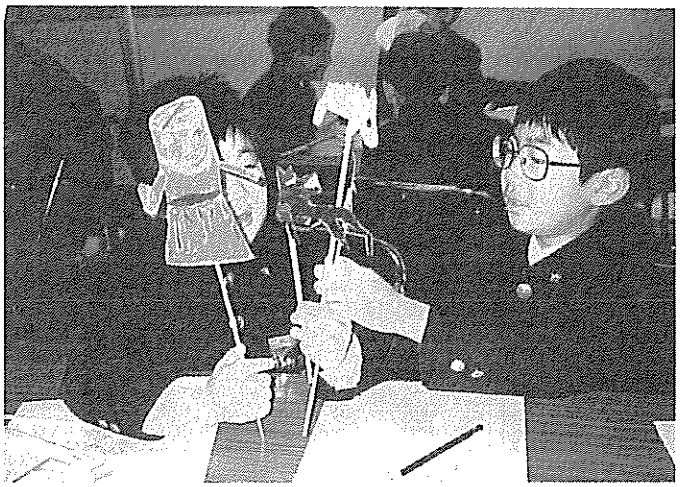
資料④K児の共話の様子

T　自分の話相手が見つかったら友達と一緒に同じ場面の人形劇を作り始めましょう。

K1 学習ノートをもって（共話相手を求めて）、移動する。

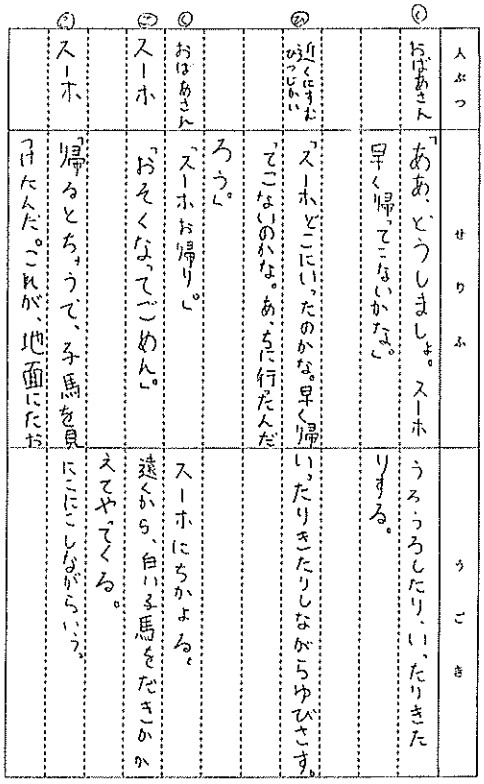
K2 Aさん、Dさんと一緒に話を始める。

写真②共話しながら人形の台詞と動きを作る子供



K3 みんながまとめている（一人で作っていた台詞や動き）分を取り入れたりして、新しいものを書くと言い、張り切っている。

資料⑤共話をしながら書いたK児のノート



K4 A児、D児の意見を聞いている。
K5 おばあさんの台詞で「ああ、どうしましょ。」と「スーホ早くかえってこないかな。」をくっつけて書こうと思うけど、どっちを先に書いたらいい？。
D1 「ああ、どうしましょ。」が、先の方がいいのでは？。
K5 「スーホ早くかえってこないかな。」の動きはどうしよう。いったりきたりする？。
A1 うろうろする。
K6 意味は似ているからいいけど。どちらにしようかな。

考察 資料②と資料⑤とを比べてみると、資料②にある台詞に加えて、付加された部分がある。例えば、資料②の「ああ、どうしましょ。」の後に、資料⑤では、「スーホ早く帰ってこないかな。」や「スーホどこに行ったのかな。早く帰ってこないかな。」となっているところである。これは、資料④のように相手の考えと自分の考えとをうまく調和させて練り上げていこうとする話合い（共話）が行われたためである。このことは、自分の個性的な読みを大切にしながらも共話をした相手の読みを言語情報として収集し、処理・活用した姿であり、自分の読みを一方的に言うだけなく、相手の読みと自分の読みとを比べて、より豊かな読みへと高めていくとともに共話そのものの力を高めていった姿だと考える。

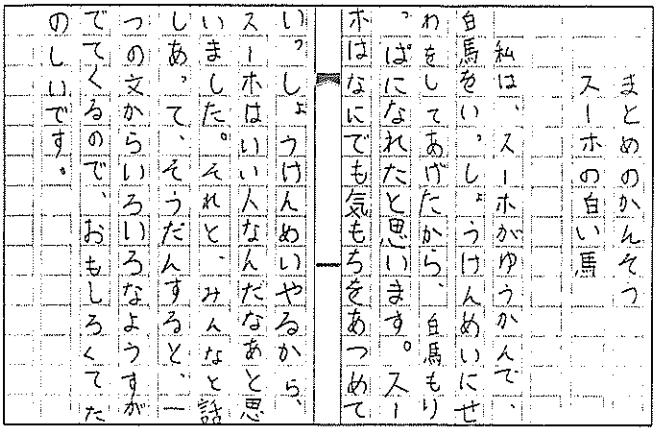
④ 読みの高まりを自覚する段階

（１１／１４～１４／１４　時）　ここでのねらいは、人形劇を発表し、活動目的を達成した成就感とともに自分の読みの高まりを自覚することである。そのために、場面毎に、ペープサートを動かしながら人形劇を友達と一緒に演じさせた。

写真③みんなの前で、紙人形劇を演じる子供たち



資料⑥学習を終えてのK児の感想



まとめのかんそう
スーホの白い馬
私は、スーホがゆうかんで、白馬をい、しょうけんめいにせわをしてあげたから、白馬もりっぱになれたと思います。スーホはなにでも気もちをあつめていしょうけんめいやるから、スーホはいい人なんだなあと思いました。それと、みんなと話しあって、そうだんすると、一つの文からいろいろなようすがでてくるので、おもしろくてたのしいです。

考察 感想文から、共話をするおもしろさと価値を感じ取っていることが分かる。

(6) 全体考察

話す・聞く・読む・書く言語活動を総合した単元を２年生の物語単元として位置付けたことは、一人一人が、意欲的に文章にかかわり、共話のおもしろさと価値を感得させることができる。

5．指導の実際と考察2　　水　上　栄　一

(1)　単元名　紙しばいを作ろう（第3学年）

(2)　年間計画における本単元の位置づけ

本単元は、3年生の物語文の読みのまとめにあたる。そのため、自分の持っている経験をもとに子供たちが自分なりに物語りを読み味わい、その感動を他の友達と交流しあうことによって、他の読みの良さを認めたり、自らの読みを確かにすることをねらいとしている。理解領域の学習であるが、単に自己の読みを作ることだけをねらいとするのではなく、根拠を明らかにしながら話したり、友達の話を聞き取ったりすることを大切なねらいとして年間計画の最後に位置づけた。本単元では特に、作品を選ぶ活動・場面を分ける活動において、交流する必然性が生まれることに特徴がある。本年度国語部では、音声による表現活動を重視し、学年に応じて、子供が聞き話す活動を多く取り入れるように指導計画を編成している。読みの学習においても、一人一人読み取って終わりにするのではなく互いの読みの違いを認めあったり、互いの読みに影響を与えあったりする話合いの場を重視し、理解・表現という領域の枠を越えた総合的な言語活動を展開する。そして、二人から数名のグループの中での話合いが国語の力をつける基本的な形態である「対話」を生み出し、読みの学習を通して子供たちに情報活用の力や思考伝達の力をつけることにつながっていくと考える。

(3)　目　標

①　自らの経験を言葉に反映させながら心に残るところを取り出し、紙芝居にする作品と絵で表す場面を自分なりに決定することができる。

②　自分が作品や場面を選んだ理由を、その根拠を明らかにしながら聞き手に伝わるように話したり、相手の伝えたいことを正確に聞き取ったりして、お互いに考えを理解しあうことができる。

(4)　計　画（約15時間）

ね　ら　い	学　習　活　動	配時
○　単元全体を貫くめあてを自分たちで設定する。	1．単元全体のめあてについて話し合う。＜つかむ段階＞ (1)　これまで学習した物語り文の筋を思い返し、楽しかったところや心に残ったところについて自由に話し合う。 (2)　自分の好きな物語りをどう表現するかについて話し合う。	1時間
3年生で学習した、物語り文の中で好きなものを宮崎の友達に紹介するために紙芝居で表そう。		
○　自分自身で、紙芝居にする作品と絵に描く場面を決定する。 ○　互いの主張を伝え合いまとめたり、違いを認め合ったりする。	2．七つの作品を読み返し、紙芝居で表現したい作品と、絵で表したい場面とその理由を学習プリントに書き込む。＜決める段階①＞ 3．自分が選んだ作品や、描きたい場面について、相手を見つけて話し合い、紙しばいをつくるグループ、描く作品、描く場面などについて決定していく。＜決める段階②＞ (1)　どの作品を描くか、誰と描くかについて話し合う。 (2)　どの場面を描くかについて話し合う。	3時間 3時間
○　言葉から場面をイメージして、絵で表す。	4．役割分担をした箇所ごとに絵を描き、文章を視写して、紙芝居を作成する。＜つくる段階＞	5時間
○　表現する喜びを味わう。	5．作品の発表とビデオテープの作成を行う。＜いかす段階＞ ○　場面の様子が良く伝わるような、声の大きさ、スピード、抑揚など。	3時間

(5) 指導の実際

《つかむ段階》

この段階は活動のめあてをつかむための段階である。まず、宮崎県では本校とは異なった国語の教科書を使っており、そのため、こちらの教科書でどんな物語を勉強したか知りたがっているという旨の話をした。その直後、教科書の「紙しばいを作ろう」という単元を読ませることによって、

「３年生で学習した物語り文を紙芝居で表して、宮崎の友達に紹介しよう。」

という意欲が高まっていった。

《決める段階》

この段階は、二つの段階に分かれる。前半はこれまで学習した物語文を読み返して、描きたい作品描きたい場面を自ら決める段階。後半は、それぞれの思いを出し合い、話し合って描くグループと描く場面を決める段階である。ここでは話合いを活性化するために１対１の対話の場を設定した。

＜決める段階＞について

それぞれが、これまで学習した物語り文を読み返して、描きたい作品描きたい場面を自ら決める段階である。ここでは本文をプリントしたもの、自らの思いを記入するノートを活用して、自らの思いを引き出せるように工夫した。子供は＜資料１～４＞に挙げるようなノートを作りあげている。

本文に線を引き描く場面を決める＜資料１＞　　その場面を描きたい理由を書く＜資料２．３．４＞

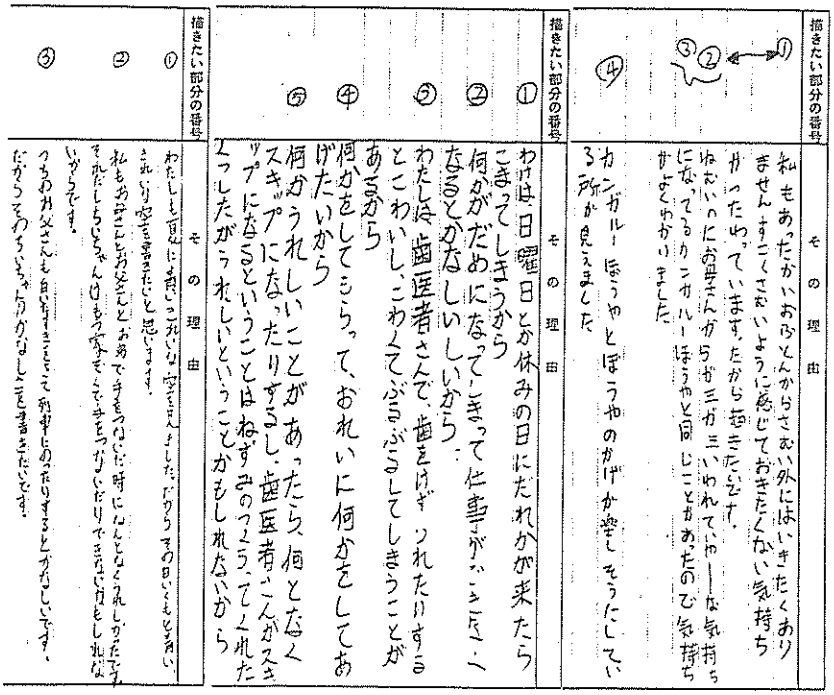
ぼうやは、お母さんのおなかのふくろからはい出しました。

①「さむいよ。いやだよ。」

ぼうやはもんくを言いました。

②「ぼく、まだ、ほんの子どもなのに。いつまでも、赤ちゃんみたいなこと、言ってないの。」

お母さんはわらいながら言いました。

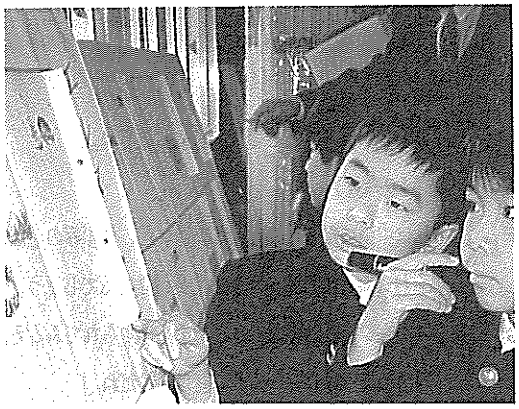


考　察　物語すべてを読み返して、心に残った場面に線を引いた子供たちは、特に描きたい場面を◎でかこみ、（資料１参照）◎が多い作品を紙芝居に表すことに決めた。子供のノートを見てわかるように、自らが布団の中からおきられなかった経験や、歯医者にかかったときの経験をもとに登場人物の気持ちを想像し、そこを印象に残った場面として記入している。これは、物語の読みにおいて最も大切な自らの経験を反映させた豊かな読みができていることの証しである。

しかし、この単元では、本文をコピーしたプリントと本文に線を引いた理由を書くためのノートを準備したに止まり、特別な手立てをうっているわけではない。そのような状況でこうした経験を反映読みができているのは、これまでの読みの学習で、劇つくり、群読などの表現を目的とした読みの学習を年間を通して取り上げ、その表現の根拠として自らの経験を基にした読みを積み重ねてきた成果であると考える。

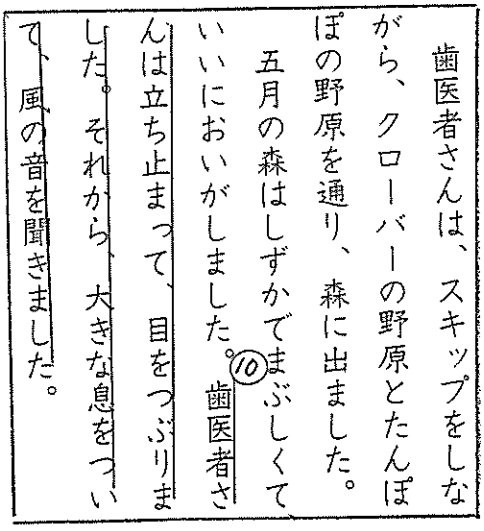
＜決める段階②＞について

それぞれの思いを出し合い、話し合って描くグループと描く場面を決める段階である。ここでは＜写真１＞にあるような掲示板を用いた。それぞれの作品ごとに掲示板を設置して、そこに自分が選んだ作品のノートを貼付する（スプレーのりを用いているため、貼る・はがすは自由である）。そうして掲示された友達のノートを見比べることによって話し合う相手を決め、自分がなぜその作品を選んだか、その場面をどうして描きたいと思ったかについての話合いを行っていった。対話の相手を決めるために掲示板に向かう児童の様子として次のようなものが見られた。



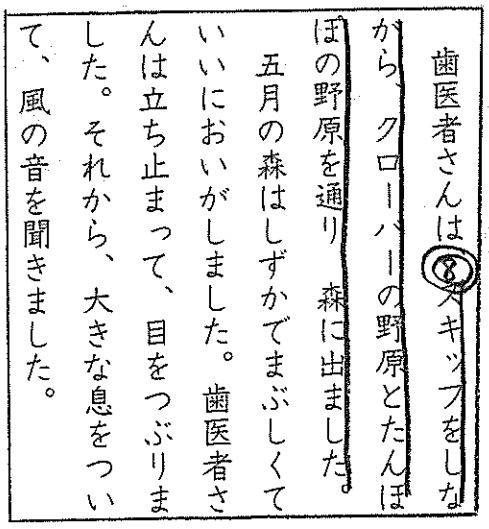
＜写真１＞掲示板を基に話し合う相手を決めている様子

＜資料５＞M児のノート



歯医者さんは、スキップをしながら、クローバーの野原とたんぽぽの野原を通り、森に出ました。
五月の森はしずかでまぶしくて、いいにおいがしました。⑩歯医者さんは立ち止まって、目をつぶりました。それから、大きな息をついて、風の音を聞きました。

＜資料６＞M児の対話希望を受けたT児のノート



歯医者さんは⑧スキップをしながら、クローバーの野原とたんぽぽの野原を通り、森に出ました。
五月の森はしずかでまぶしくて、いいにおいがしました。歯医者さんは立ち止まって、目をつぶりました。それから、大きな息をついて、風の音を聞きました。

＜資料７＞掲示板に向かう抽出児Mの様子

M児→日常からよく発言し学習にも意欲的に取り組む児童

N児(自分と同じような箇所に線を引いている児童のノート)→T児(自分とは異なった箇所に多く線を引いている)→H児(ほとんど同じような箇所に引いている)→T児のノートに戻り、自分のものと比べ、T児のボードに対話希望のシールを貼る。

＜理由＞「線が同じようなところに引いてあったら話合いにならないから楽しくない。自分と違う考えの人と話し合ってみたい。」

左の資料５と６に見るように、M児は自分とは異なった部分に線を引いたT児を対話の相手として選んだ。

また、比較的控えめで、話すことがあまり得意でない別の抽出児Kは、対話の相手を選ぶ際に、ボードの前で次のような動きを見せた。

＜資料８＞掲示板に向かう抽出児Kの様子

S児（ほとんど同じ箇所に線を引いている。）→U児（S以上にKと同じような箇所に線を引いている。）S児とU児のノートをしばらく見比べて、迷った様子を見せるが、自らうなずいてU児のノートに対話希望のシールを貼る。

＜理由＞「同じところに線を引いた友達をさがしています。どうしてそこに線を引いたか尋ねていきたい。」

掲示板を利用して、対話の相手を決めた児童は、それぞれの組で１対１の対話を開始する。

＜資料９＞対話の内容

（KとUの組）

U「カンガルーぼうやとおなじようにお母さんから怒られたことある。」　K「あるよ」

U「どういう理由で」　K「7時ごろ起きて、早く用意しなさいと怒られた。私はそんなことよくある。Uさんもそんなことあるの。」

U「ある。ふとんの中でいつまでもじっとしてたら、こらってね。だからこの『もう、起きない』ってだだをこねるカンガルーぼうやの気持ちよくわかる。」

K「うん、わかる。ここの場面絵にしようね。」

（TとMの組）

T「私は虫歯になったことはないけれど、ねずみの毛が逆立ってこわそうだからねこだってこわいときは毛を逆立てるでしょう。とてもこわそう。」

M「ちがうね、私は歯医者さんで歯をけずられてふるえたことがあるから。」

T「理由は違うけれど、描く場面は同じだね。」



＜写真２＞1対1の対話で思いを出し合う

M「私は、歯医者さんがスキップするところでなくて森のにおいをかぐところにしたんだけど、Tさんはなぜここに線を引いたの」

T「うれしいことがあると、スキップするし、ねずみが作ったのがうれしいかもしれないから。ここの歯医者は本当に楽しそう。森のにおいをかぐとこも好きだけど、それだと動きが見えにくくて絵でかきにくいんじゃないかな。」

M「そうか、わかった。同じようなところならスキップの方が楽しそうだね。」（スキップの箇所に線を引く）

考　察　掲示板という手立てで自分の話し合いたい相手を選び、一対一で対話することは、それぞれの意見を自由に引き出し、活発な話合いを生み出すために効果的だったと言える。ＫＵの組では、それぞれが自分の経験をもとにして印象に残った場面について話し合い、話合いが苦手なＫ児も互いの思いを強化する話合いを行うことができた。また、ＴＭの組では、描く場面は同じでもその理由が異なる場合の話合いがなされ、相手の思いを理解しあうことができている。同じく、自分の気がつかなかった観点を相手から示されることにより、新たな場面を描くことに同意する話合いも展開されている。単に読みのまとめとして、本単元を考えるのではなく、話し合う力の完成もねらう総合的な単元として考えたことにより、子供達は教師側が話合いの手順を示したり、条件を整えてやったりしなくても、相手に思いを伝え、相手の思いを理解するという活動を自然に行うことができたのである。

＜つくる段階・生かす段階＞について

話合いの輪を広げ、描く場面で同意した者同士で集まって＜写真４＞のように紙芝居を描いて言った。完成した紙芝居は宮崎県の小学校に送付することによって、子供達は活動の有用感を味わうことができた。



＜写真３＞仲良く紙芝居を作る

(6)　全体考察

本来は、読みのまとめとして設定された単元を、聞く・話す力のまとめの単元としても位置づけて学習指導を行った。読むことに加えて互いの思いを聞き合う言語活動を重視するからである。そのために、個人として心に残った場面を描くのではなくグループとして作品を作る必要を持った場を設定した。その上で、話し合う相手を決める掲示板の活用や、一対一対話などの手立てを打ってみた。それぞれの個性や話し合いたいという思いに応じるためである。その結果、互いに考えを進んで交流し合い共感したり、考えの修正を行ったりする子供達の姿を見ることができた。また、目的実現のため、お互いの考えを調整して問題を解決している姿も見ることができた。このことから、学年のまとめとしての単元は、それまで１年間を通して培ってきた力を総合的に発揮できる単元を仕組むことで子供の意欲を促し、活動を活発にすることが明らかになった。

5．指導の実際と考察３

伊　藤　啓　二

(1)　単元名（事例１）人と人の心を結ぶ『ことば』　「方言と共通語」「手と心で読む」（第４学年）
（事例２）調べたことを伝えよう　「体の仕組みや働き」　（第４学年）

(2)　年間計画における本単元の位置づけ

事例１は、方言や点字について書かれた説明文教材を資料として読み、読み取ったことを新しい情報として、自分の見方や考え方をもつことを目的としたものである。事例２は、体に関する図鑑や辞典などの教科書教材以外の文章を、課題解決のために読み、取り出した情報を整理して説明的な文章として書きまとめることを目的としている。事例１での情報を取り出し自分の思ったことや考えたことをまとめる学習が生かされ、事例２では、広い範囲の情報源を活用して、その中から必要な事柄や見方、考え方を取り出す学習へと発展し、さらに情報を選択・加工して説明的文章の形に再構成するようにつながっている。この二つの単元のつながりを表にすると以下のようになる。

単元・時期	人と人の心を結ぶ『ことば』（９月）	調べたことを伝えよう（１月）
教材文の扱い方	資料教材 ┆ 調べる資料として読む	補助教材 ┆ 学習目的をもつ補助
主な言語活動	読　む　・　聞　く　→	読　む　・　書　く
育てたい能力	情報収集・情報処理能力　→	情報処理・情報活用能力

(3)　目　標

（事例１）方言や共通語、点字などの言葉について書かれた文章を読んで情報を取り出し、聞いたことや体験したことと関連させて自分なりの考えをまとめることができる。

（事例２）自分が興味をもった体の仕組みや働きについて書かれた様々な資料や人の話の中から必要な情報を取り出し、選択・加工して、説明的な文章を書くことができる。

(4)　計　画　　事例１（約１０時間）

ね　ら　い	学　習　活　動	配 時
○　追究課題をもつ。	１．方言の役割・点字の働きについて話し合い、課題をもつ。	２時間
○　実際の場面や話、文章のことばを自分なりに解釈して必要な情報を得る。	２．説明文教材「方言と共通語」「手と心で読む」やビデオ実体験を通して情報を集める。	６時間
	(1)　教材文を自分で読み、必要な情報を取り出す。	②
	(2)　自分の体験やビデオから必要な情報を取り出す。	②
	(3)　方言や点字の働きについて調べたことをもとに話し合う。	②
○　情報を整理して自分の考えを創る。	３．調べたこと・考えたことをもとに作文を書く。	２時間

事例２（約１２時間）

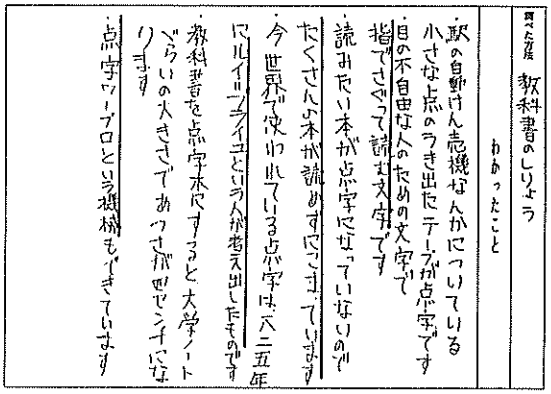
ね　ら　い	学　習　活　動	配 時
○　説明文を読み、説明内容を読み取る。	１．説明文教材「体を守る仕組み」を読み、筆者の伝えている事柄や書き方について話し合う。	２時間
○　追求の課題をもって様々な文献を読んだり話を聞いたりして情報を得る。	２．体の仕組みや働きについて資料を調べて情報を集める。	５時間
	(1)　調べたい事柄を決め、調べ方を話し合う。	①
	(2)　図書室の本や保健の先生の話など多様な資料の中から必要な情報を取り出す。	④
○　伝えたいことが分かるように選択・加工して再構成する。	３．調べた事柄を整理して説明的な文章を書いてまとめる。	５時間
	(1)　情報を整理し、分かりやすく書く順番を考える。	②
	(2)　構成をもとに体の仕組みや働きについて説明文を書く。	③

(5)　指導の実際

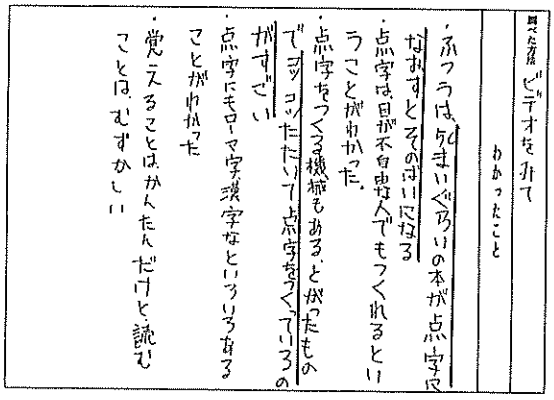
事例１・課題を解決する資料として教材文から情報を収集し、整理する段階

〈ねらい〉方言や共通語、点字などのことばとその働きについて自分なりに説明文を読んだり話を聞いたりして必要な情報を取り出し、整理して考えをまとめる。

【反応】単元の導入として、私たちの使っている言葉について話し合った。便利さとともに、一口に言葉といっても色々なものがあることが発表された。その中で方言はなぜあるのか、点字や手話はどんな働きをしているのかという疑問を投げかけ、「言葉の働きを調べてみよう」という課題が設定された。子供たちには、「方言と共通語」「手と心で読む」という教科書の説明文教材と方言や点字を使っている人の様子や話をおさめたビデオを与え、自分なりに活用するように促した点字について興味をもった子供は、自分で読んだり聞いたりして、資料①、②のように点字とはどのようなものか、点字はだれがどのようにして作っているのかといった事柄や点字を打つ機械のことなど点字について初めて知った事柄を多く書き留めていた。しかし、自分に必要な情報かどうかを考えさせたとき「点字がどんなものか、誰が作ったかというのは分かるけど、ことばの働きのことはよく分からない。」と集めた情報に不備があることを述べていた。



資料①　読んで得た情報

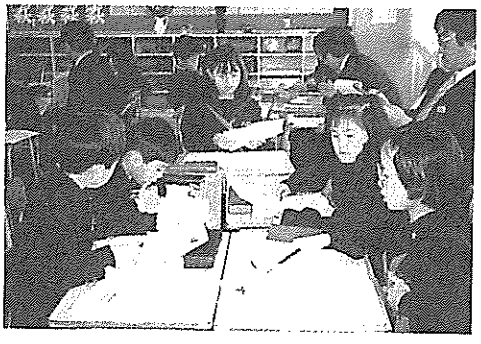


資料②　聞いて得た情報

考察　子供のもった課題は「ことばの働きを調べてみよう」である。説明文教材「手と心で読む」には、点字のもつ働きを筆者なりの経験をもとに述べている。資料①にある「たくさんの本が読めずに困っています。」という部分は、課題を意識して取り出した情報として考察できる。しかし、それは一部分で、資料①、②のように子供が最初に取り出す情報は、点字の説明、点字を打つ機械について、点字を作る人についてなど課題に直接結びつかないものが多い。この事から、子供たちは課題意識はあっても、まだ十分に文章を解釈して情報を取り出すまでには至っていないと考察できる。これは、自分の課題にあった情報を取り出す観点をもって読むという活動が、まだ十分できていないからだと考えられ、その観点を明確にする学習が必要だと考える。

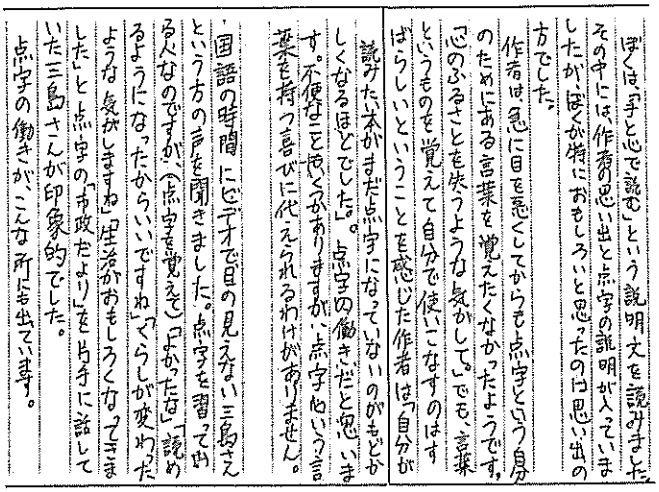
【反応】次に、どんな観点で読んでいけばことば働きがわかるか話し合った。「点字を覚える前と覚えたあとの気持ちを考えれば、どんなに点字が役に立っているかが分かる。」という発言から説明文にもビデオにもその点に関する情報があったことが出され、その観点で説明文を読んだりビデオをもう一度見直したりして情報として取り出していっ

Ｃ１：第２段落の親しんだ文字をはなれるのは、心のふるさとを失うように思えたという所から文字があるというのは心をやさしくする働きがあるとおもいます。
Ｃ２：読みたい本が点字になっていないのがもどかしいというのは生きがいということだとおもいます。
Ｃ３：点字に限らず、生活を明るく楽しくしていると思うから、それがことばの働きだとわかりました。
Ｃ４：ビデオで三島さんは仕事ができるようになったのは点字のおかげといっていた。



写真①　話し合いながら情報を取り出す子供たち

た。最初はあまり取り出さなかった、第２段落の筆者の経験が書かれた段落に目を向け、読み取ったことをノートに書いていった。資料の下線部のように、グループで自分の読み取ったことをもとに筆者の気持ちを話し合い、そのことからどんなことばの働きが分かるかを考えていった。最後に子供たちは、資料の傍線部のように読み取ってきたことや体験したことを整理して、点字について新しい見方や考え方を創りだしていった。

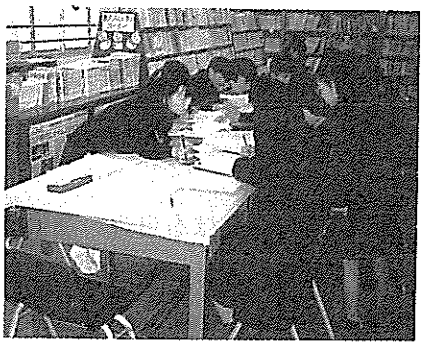

ぼくは、「手と心で読む」という説明文を読みました。その中には、作者の思い出と点字の説明が入っていましたが、ぼくが特におもしろいと思ったのは思い出の方でした。
作者は急に目を悪くしてからも点字という自分のために作る言葉を覚えたくなかったようです。「心のふるさとを失うような気がして。」でも、言葉というものを覚えて自分で使いこなすのはすばらしいということを感じた作者は「自分が読みたい本がまだ点字になっていないのがもどかしくなるほどでした。」点字の働きだと思います。不便なことやくやしいですが、点字という言葉を持つ喜びに代えられるわけがありません。
国語の時間にビデオで目の見えない三島さんという方の声を聞きました。点字を習っている人なのですが、「点字を覚えてよかったな」と思えるようになったからいいですね」「くらしが変わったような気がしますね」生活がおもしろくなってきましたと点字の「市政だより」を custom に話していた三島さんが印象的でした。
点字の働きがここな所にも出ています。

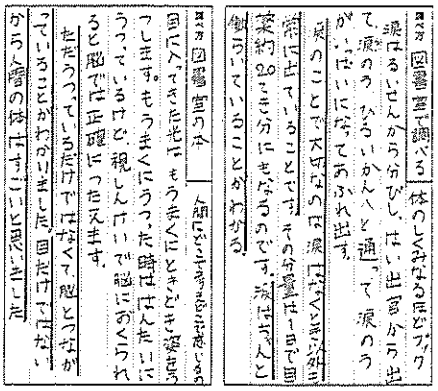
考察　ことばの働きをとらえるためにその言葉を使う前と使ったあとの気持ちの変化から読もうとしている。これは、資料③のような話し合い活動によって、書かれていることそのままではなく、解釈して理解し、情報として取り出そうとする能力の育ちだと判断できる。Ｃ１、Ｃ２の下線部のように文章の叙述と結び付けて点字の働きを考えているのがその部分である。Ｃ３は、とらえた情報をもとにことば全体の働きとして考えていることがわかる。資料①、②の情報の取り出しと比較すると、課題に沿った情報収集の高まりが考察できる。資料④の傍線部には文章の意味を自分なりに解釈して課題である点字の働きと結び付けているところが考察できる。このことから、課題をもつだけでなく、どうやって情報を取り出すか観点をもって文章を読む学習を仕組んだことは、子供の情報収集、処理能力を育てる上で有効であったと考えられる。

事例２・教材文以外の文章から自分に必要な情報を読み取って収集する段階

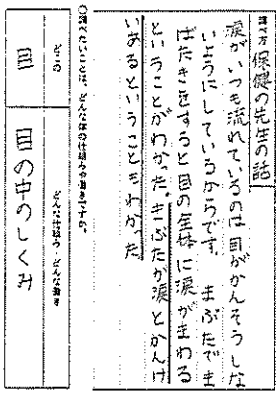
〈ねらい〉体の仕組みや働きについて調べようとする課題を解決するために図鑑や辞典などを読んだり、人の話を聞いたりして情報を収集することができる。

【反応】説明文教材「体を守る仕組み」を読んだ子供たちは、筆者の説明していることを読み取り、書いていることに興味をもったあと、１ 他にも体には、不思議な仕組みがたくさんある事を出し合った。そして、調べてみたいという意欲をもち、「体のふしぎについてもっとくわしくなろう。」という学習の課題がはっきりしてきた。何のどんなことを調べるかという話し合いのなかで２ 「どんな構造をしているのか、どうしてそうなっているのかとかこっちがこうなればこっちがこうなるというようなことが分かれば仕組みと働きがわかる。」という意見がでた。さらに調べる方法として「図書室に血の話という本があった」「保健の先生は詳しいのではないか」といった発言からどうやって情報を得るかがはっきりしてきて、読む・聞くの活動が始まった。


写真②　図書室での情報収集



資料⑤　本を読んで得た情報



資料⑥　話を聞いて得た情報

写真②のように図書室を学習の場としてお互いに情報交換をしながら、資料⑤や資料⑥のように本を読

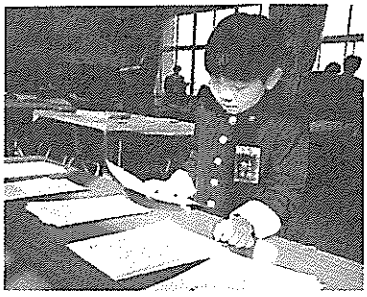
んだり話を聞いたりして情報を収集した。

考察　下線部１から、子供の学習課題は教材文の内容理解ではなく、他の体の仕組みについて調べることに向いていることがわかる。説明文教材がきっかけとなって学習の課題が出てきて、意欲的に他の文章を読んで課題を解決していこうとしている。下線部２は、課題を解決するにあたって、構造や働きやそれぞれのつながりなどを観点として読み取ることを意識していることがわかる。これは、事例１で課題解決には観点をもって読むことを学んだことが生かされた結果である。資料⑤、⑥の傍線部には、教材文のようにまとまった形式ではない本や話から構造や働き、つながりを意識し、情報として収集していることがうかがえる。これは、事例１での観点をもった情報収集の学習が事例２での広い範囲からの観点をもった情報収集に反映した結果だと考察できる。

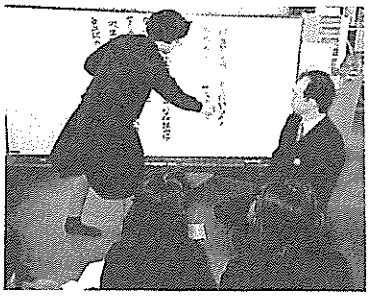
事例２・調べたことを本にするために情報を整理、活用して説明文を書く段階

〈ねらい〉調べた事柄を分かりやすく説明するために書く順序を考え、書き方を工夫して情報を選択・整理し、説明文を書く。

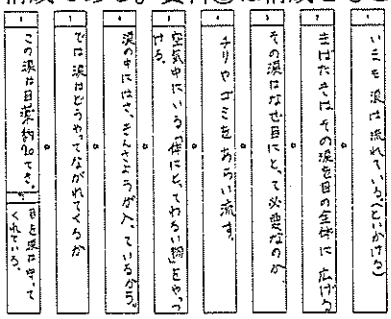
【反応】自分なりに調べて分かってきた段階でこの情報をどのように処理するか話し合った。その結果、教科書の説明文教材のような文章に書いてみんなのものを合わせた本を作るように決まり、説明文を書く活動へと学習を進めた。今までの説明文を参考にしたり、支援として作成したヒントカード（写真③）「体を守る仕組み」の構成を考える場（写真④）などを活用し構成表を作った。資料⑦は子供が説明文教材の書き方を参考にして作った構成である。資料⑧は構成をもとにして書いた説明文である。



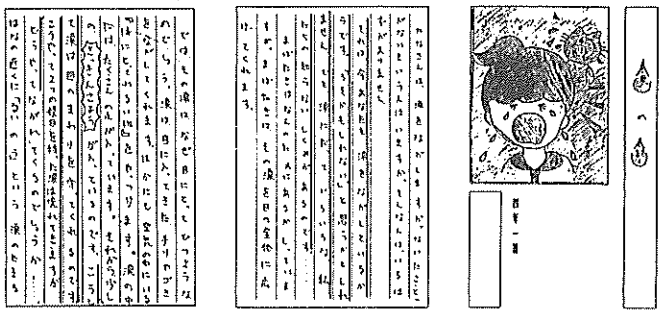
写真③　ヒントカードを選ぶ子供



写真④　構成を考える子供たち



資料⑦　説明文教材を参考にして作った構成



資料⑧　子供が書いた説明文「涙の話」

考察　体の仕組みや働きについて調べるうちに分かったことを書いて残したいという思いが強くなって本という形でまとめるようになったと考えられる。子供たちは今までの説明文の文章や書き方を参考にして文章を書こうとしていた。Ｓ児の資料からもわかるように説明文に書くために情報の順番を考えている。Ｓ児は「目の外側から段々中の事へと説明していく」という考えで構成を考えた。説明文教材が意識された結果だと考察できる。また、友達との対話によってさらに整理されている。交流が生かされて整理されたことが資料④からわかる。

(6)　全体考察

事例１から事例２を段階的に位置づけることで、課題に応じて必要な文章やことばを自分なりに解釈して情報として取り出す能力を４年生なりに広げることができた。図書室の資料も教科書の文章と同様に学習に活用していけることを経験させることができた。また、情報をもとに自分の考えをもつ単元から、情報を活用して説明的文章にして表現する単元へと高めたことで、受け身的に情報を受け取るだけでなく、生産していく経験をさせることができた。

社会の形成者として社会生活をよりよくしていく社会科学習

── 社会をつくりだしていく活動を重視する年間計画の作成 ──

社会科部　　後　藤　正　弘

1．本校の考える社会科の目標

自分と我が国の国土や歴史とのかかわりに関心をもたせ、社会に対する主体的な見方・考え方を養うとともに、国際社会に生きる民主的、平和的な国家・社会の形成者としてよりよい社会をつくりだしていく実践的な態度や能力を育てる。

これからの社会はより一層の価値観の多様化が予想され、多様な価値観の対立の中で、社会生活をつくり、営むための自分なりの意思決定が日常的に要求されるようになる。そこで、社会で生きる主体的な見方・考え方を育て、自分の生き方をつくりだしていくような社会科の学習が必要になってきている。自分の生き方をつくりだしていくには、子供たちが自分の周りにある社会を認識し、自分とのかかわりを十分に感じ取っていく活動がまず必要である。その活動を基盤にして社会にはたらきかける意識を高め、そのために必要な判断をしていく活動を展開していくのである。このような社会と子供の相互作用を通して、社会の形成者として社会を大切にし、社会生活をよりよくしていく主体的な子供を育成していきたいと考えている。また、本校教育課程においても、社会の形成者として必要な見方・考え方を育て、自分の生き方を探っていくような社会科学習の展開を求め、第３、４学年に新設の生活環境科との関連を図っている。

2．主題の意味と重要性

(1)　主題の意味

社会の形成者として、社会生活をよりよくしていくとは、社会が自分を支えていることや社会での自分の役割や責任に気付き、そのことから民主的、平和的な社会をつくりだしていくために、自分がどう行動の選択をしていったらよいか考え、判断しながら実践していくことである。

その具体的な実践の姿として、社会のしくみをつくり、機能させていくことを重視していく。ここでいうしくみとは、「このために、こうすれば、こうなる」という社会にはたらきかける手段と目的をもっており・組織的、計画的に行動する、・社会的な役割と組織としての分担がある、などの人の作用である。また、しくみを機能させるとは、自分がよりよい社会に向けて判断したことを生かして社会に参加したり、提案したりして社会にはたらきかけることである。

このように、子供たちが実際に身の回りの社会に向けて、しくみをつくり機能させることで、①社会のよさを学び、社会の一員としての自覚を促す、②社会をつくっていく主体的な意欲や判断力を身に付け、③目的に応じて必要な情報を集めたり、活用したりする力を身に付ける、などのこれからの社会生活に必要な公民的資質の基礎を培えると考える。

これらのことをまとめると、本校の社会科は、社会事象に対してその中で自分が生きていることを自覚し、今ある社会に適応するだけでなく、よりよい社会をつくりだしていくという主体的なかかわりの深まりを実践力の醸成から目指している教科であると言える。

(2)　めざす子供の具体的な姿

○社会の中にいる自分の役割や責任、人の作用などに気付く子供
○社会事象から自分なりの価値判断をするための情報を収集し吟味する子供
○社会事象の本質を人間の知恵・人権・平和・文化の視点でとらえる子供
○社会がどうあるべきか、また社会の中でどう生きるか考え、その目的に向かって社会をつくりだしていくことができる子供

(3) 内容の考え方

これまでの社会科の内容は、中学年で地域社会に関する内容を取り上げ、高学年では我が国の国土や産業、歴史を取り扱ってきた。この内容の取り上げ方について、第5学年と第6学年に設定した社会科では、子供自身の社会の形成者としての生き方、実践力を培うという特色から、対象学年でも従来の内容系列に地域にかかわる内容を付加する。このため、この地域に関する内容は、子供の地域生活の向上や地域への愛着の高まりが基盤となった地域独特の・産業・歴史・政治・国際関係・地域環境ということになる。

3．副主題について

(1) 副主題の意味

社会をつくりだしていく活動を中心にした年間計画とは

子供が自分の生活を支えている社会のしくみや機能をとらえ、社会の中で生きていく役割や責任を多様な体験活動を通して感じ取り、実際にそのしくみをつくり機能させて社会にはたらきかける活動が中核にすえられた計画のことである。特に、生活環境科からの接続教科として次のような基本的な年間計画作成の考え方をしていく。

生活環境科は、子供の生活圏つまり、福岡市内を学習範囲としている。まず、この発展として、生活にかかわる福岡市や県内の産業、歴史、政治から日本の産業や歴史、政治がとらえられるようにする。また生活環境科は環境の中にある自分のあり方、生き方を考える教科であるので、地域の一員としての自覚を促す役割がある。本校社会科では、この考え方を受け継ぎ、地域の一員であることに対する自覚と責任を感じながら自分自身の生き方をさらに求めていくような活動を年間計画の中核にすえる。具体的には、①自分の生き方にかかわる社会事象を意味付けていく活動、②自分自身の社会生活の仕方を考え、よりよい社会づくりに向かって実践していく活動、が位置付くことになる。ここでいう自分の生き方とは、社会生活をより平和的、民主的に過ごしていくための行動の仕方であるととらえている。その行動の仕方として次のような方向性を設定し、よりよい社会のしくみをつくりだしていく活動を中心とした年間計画の視点とする。

○ 地域や日本の事象を人を核にして環境、資源、情報の面からとらえしくみをつくりだす。
- 地域生活の充実、発展をめざす。 → 日本や世界の平和や発展をめざす。
- 地域の中の人と協力、協調していく。→ 様々な考えの人々と協力、協調していく

(2) 社会をつくりだしていく活動を重視する年間計画作成の考え方

子供が、よりより社会に向かって、社会のしくみをつくりだし機能させていくには、社会事象を自分とのかかわりから意味付けていく活動と社会に向かって実践していく活動が年間を通じて行われる必要がある。そこで、このような子供の主体的な活動を重視する次の3点から年間計画を作成していく。

① 社会が自分の生活を支えていることに気付き、自分の社会的役割や責任を感じ取って、それらを意味付けていく活動を年間を通じて設定する。

子供が直接的に社会の人やもの、ことにかかわる調査的（取材やリサーチ）、臨場的体験活動を設定し、実感をもって社会事象の特色をとらえ、自分と社会とのかかわりを「～するとまわりが変わる」「～のために～しなくてはならない」と感じ取るまでに深め、そのことから社会にはたらきかけていく問いを生んでいく活動を各学期に配列する。

② 自分の問いをもとに社会に提案したり、参加したりする実践活動を年間を通じて設定する。

社会のしくみをつくり、その機能をはたらかせる制作的体験活動や模擬的体験活動と地域の人や

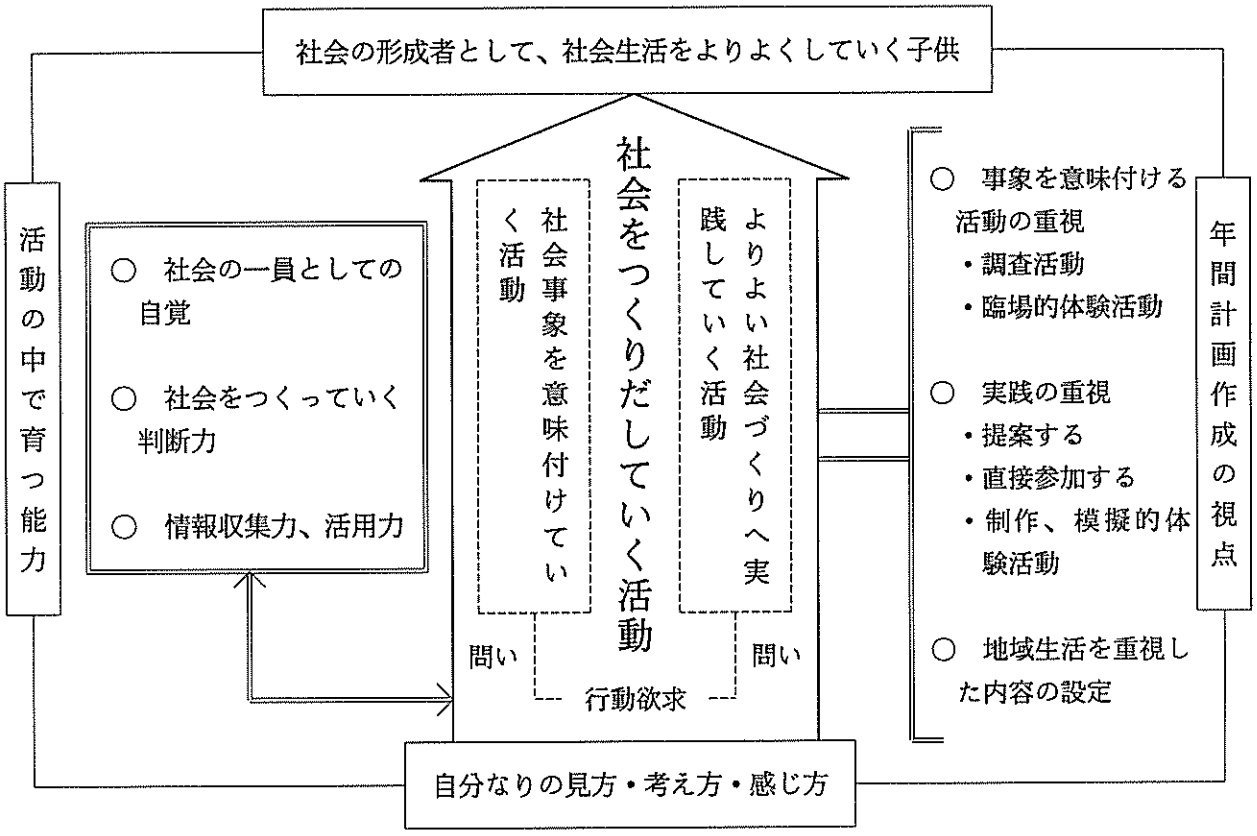
友達との交流体験活動から「～には～することが大切だ」「自分は～のようにしていこうと考えている」などと自分の行動の意味をとらえたり選択したりする活動を各学期に配列する。

③　年間計画に子供の活動が地域に根ざすような内容を設定し、単元化する。

社会をつくりだす活動を年間計画の中核としていくと、従来の内容が地域生活とより密着したものになり、地域の社会事象をそのものを追究して日本全体の事象とかかわらせたり、地域社会での自分のかかわり方を追究したりする学習の設定が必要となる。そこで、第５・６学年の内容項目を次のように設定し、年間計画の中に位置付け単元化の基盤とする。

第　５　学　年	第　６　学　年
ア　地域生活と我が国の食料生産とのかかわり	ア　地域生活と歴史事象とのかかわり
イ　地域生活と我が国の工業生産とのかかわり	イ　地域生活と政治とのかかわり
ウ　地域生活と我が国の運輸、通信業とのかかわり	ウ　地域生活と外国とのかかわり
エ　地域生活と我が国の環境とのかかわり	

4．構　想　図



5．指導の実際と考察（次頁参照）

6．研究のまとめ

第５学年における情報産業の学習において、子供たちは、実際に情報を伝えるしくみをつくり発信していった。「どうしたらうまく伝えられるのか」と問いをもち、情報メディアの特色や受信者の願いを生かしながら情報を収集し、伝える活動を楽しんでいる。これは、単に知識を獲得する姿でもなく、現実を知らずにただ「良いか、悪いか」の判断を強要されている姿でもない。「どのように」と「どうするか」という問いが自分と社会とのかかわりの中で生じ、社会を確かにとらえながら自分の社会実践をしていくとき、社会をよりよくしていく喜びが子供の中から生まれてくるのである。

5．指導の実際と考察

(1) 単元名　　わたしたちの情報をおくろう（第5学年）

(2) 年間計画における本単元の位置付け

第5学年の年間計画においては、産業に関する地域生活の重視のもと年間カリキュラムを作成している。本単元はそのなかで情報の視点からの情報産業に関するものである。ここでは、情報が生活を支えていることをとらえ、地域にある情報産業の働きを生かして自分たちも情報を発信していくという活動を設定している。

この単元設定により、情報に関する意味付けが生きた知識となって、情報をどのように利用し提供していくか自分の行動の価値を判断していくことにつながっていく。また、情報社会に生きる自分の役割を意識し自分の行動の仕方を考え、実践していくという情報に主体的にかかわる実践的な態度や能力が育成される。さらに情報産業の特色やそれに携わる人々の工夫や努力が、情報を提供するしくみをつくり機能させることで実感的共感的にとらえられ感性の深まった社会認識が獲得できる。このような意味をもった単元を設定することで、情報に支えられた社会生活をよりよくしていく主体的な子供が育成できると考える。

(3) 目　標

① 附属情報センターづくりに向けて、放送局や新聞社を取材し、記録性や具体性などの特色をとらえるとともに情報提供者としての役割に気付き、メディアの特色を生かして、相互の協力性に着目した番組や新聞などの情報伝達のしくみをつくり発信することができる。

(4) 計　画（約13時間）

ね　ら　い	学　習　活　動	配 時
○ 生活の中にある情報のよさを調べる体験をする。 ○ 情報発信の効果を調べ、情報提供のしくみを調べる。 ○ 放送局、新聞社の情報を集める体験を豊かにする。 ○ 取材した内容から情報制作のしくみをつくり情報を発信する。 ○ 受信者の立場に立った情報の伝え方や内容を吟味しあう。 ○ 日常的に情報発信にかかわるしくみをつくり実践する。	1．生活と情報のかかわりについて問題をもつ。 情報はわたしたちの生活にどのように役立っているだろう 2．情報の種類やメディアについて調べる。 ○ 阪神大震災の情報の流れ方　○ 情報伝達の大切さ 3．情報発信者としての役割について話し合う。 ○ よりよい生活のための情報発信 4．情報センターづくりについて話し合う。 情報センターでは、どのようにして番組や新聞をつくっていったらいいのだろうか 5．情報センターを機能させる取材や番組制作をする。 (1) 放送局と新聞社を取材する。 ○ 情報提供までの流れと働く人の様子 (2) 取材したことをもとに番組や新聞をつくる。 ○ 組織づくりと情報づくり (3) 全体会議で番組や新聞を見直す。 (4) 番組を放送し、新聞を発刊するとともにリサーチする。（課外） (5) リサーチの課題から2回目の番組と新聞づくりについて話し合う。 6．これからの情報とのかかわり方について話し合う。 ○ 情報受信者と発信者の立場からのかかわりの意欲	1時間 2時間 1時間 1時間 7時間 ②＋総合 ③ ① 課外 ① 1時間

(5) 指導の実際

情報産業が生活を支えていることに気付き、情報発信への意欲をもつ段階

この活動のねらいは、生活の中にいかに多くの情報があり、自分たちがそれを利用して生活していることに気付くとともに、自分たちも情報を積極的に発信していこうとする意欲をもつことである。そのために、阪神大震災の情報がどのように報じられているか関心をもたせ、新聞のテレビ欄や新聞の見出し、実際のテレビ放送の様子などの調査活動にはいった。そして、その速さや具体性について次のように話し合った。

C1「テレビでは、阪神大震災について一日中報道していました。映像でもその時の恐さがよく伝わってきました。一年たっても、地震の恐ろしさを伝えてくれています。また、テレビで生放送をしていて慰霊祭の様子がすぐに伝えられています。」
C2「新聞も一面トップで取り上げています。放送と違うのは、大震災の様子がずっと残り、必要な時に見ることができることです」
C3「こうしてみると新聞もテレビ放送も大切なことを必死になってみんなに伝えてくれていることがわかります。」



写真1　阪神大震災について調べる子供

情報やメディアの大切さをとらえた子供たちは、学校で問題になっている給食の態度について、情報を使ってみんなに知らせ、もっといい学校にしていきたいと願った。そこで、他の学校の新聞や放送番組を見せて、情報発信の可能性と見通しをもたせた。

C4「情報というのは、伝えたいことを速く、多くの人に伝えることができます。私も、給食の話題についてみんなに知ってもらい、学校全体がもっとよくなるようにしたいと思います。」
C5「早く情報センターをつくってみたいです。つくったものがみんなの役に立つことはとてもいいことだと思うからです。」
C6「でも、どうやってつくったらいいのかわかりません。学校には放送施設があるけどつかえるのかなあ。できたらつかってみたいな。」
C7「放送局ができるといいです。それから、新聞もつくってみると放送と新聞のよさがお互い引き出せてうまく伝わると思います。」

考　察

阪神大震災の話題がどのように伝えられているか調査する活動は、C1～C3の反応から、具体的に新聞と放送の特色をとらえながら情報の大切さを感じ取ることにつながった。さらに、それがもとになって現実の学校生活を見直し、自分もみんなのために情報を提供できると考えるようになった反応（C4、C5）があり、情報提供者としての意欲を生ませることができたといえる。これは、生活と情報の結びつきを体験的に学習した成果がもとになっているのである。つまり、年間計画の中核となる生活と社会事象とのかかわりを意味付ける活動を設定したことが、自分の行動欲求を喚起させ新たな行動の仕方、つまり情報発信への意欲の喚起に効果的であったと考えられる。

情報を発信するしくみをつくり、実際に提供する段階

この活動のねらいは、情報センターの組織をつくり、その中で放送と新聞の特色をとらえ、それをお互いに協力、利用しながらどう情報を伝えていくか判断していくことである。

子供たちは、情報センターを組織し、機能させるために放送局と新聞社の見学を行った。見学の視点として、・情報がつくられ伝えられるまでの流れ・働く人々の仕事の仕方・放送局と新聞社の関係などが情報センターを組織するために必要であることを話し合った。

以下は、ある子供の放送局と新聞社の見学の感想である。

アナウンサーに興味をもっているB児の感想文

B1「私は、見学に行った時、アナウンサーの表情や目線、しゃべり方などを附属情報センターの中で生かしていきたいなあと考えています。本番以外の時のほうが真剣になっているのがとても勉強になりました。しっかり準備することが大切なんです。」

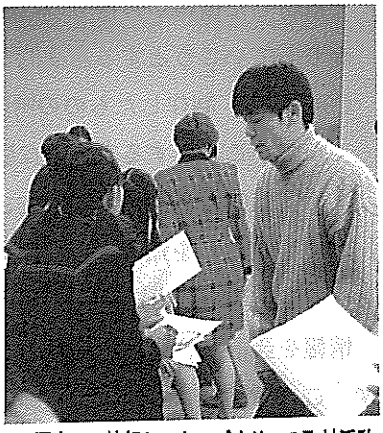


写真2　情報センターづくりへの取材活動

見学後、いよいよ情報センターを組織し、情報をつくっていく活動に入っていった。

＜情報提供の組織づくりの活動＞

子供たちの興味・関心に応じて放送の部と新聞の部に分かれ、見学で収集した情報発信までの手順に応じて組織をつくっていった。校内スタジオをセンターとして利用し、スタジオセットやデスクを資料１のような内容に分かれて設置していった。

C8「スタジオの調整室がちょうど放送局と同じ役割をするから、これを使いこなしたい。操作の仕方も調べなくてはいけない。」
C9「取材は、この机に資料を集めて両方が使えるようにしよう」

資料1　組織づくりに活用したい見学の内容

放送	新聞
・編集の仕方 ・調整の機能 ・アナウンスディレクターの機能 ・放送の手順	・編集の仕方 ・新聞制作の分担 ・発送の手順 ・印刷方法

共通 → 取材内容の相互協力

＜情報づくりと吟味の活動＞

組織を明確にした子供たちは、自分の役割を実行にうつしていった。まず、編集会議を開いて給食のマナーをよくしようというテーマを・給食の準備と後始末、給食の先生のお話・アナウンスでの説明と呼びかけ（放送）・大きな見出し（新聞）で構成しようと決めた。写真３は、給食のマナーの大切さを気持ちを込めて言えるようにアナウンス部のＢ児たちがリハーサルをしているところである。

次に構成の内容にしたがって実際に取材や編集を繰り返し、試作した新聞と番組について、うまく伝わるかという視点で吟味しあった。

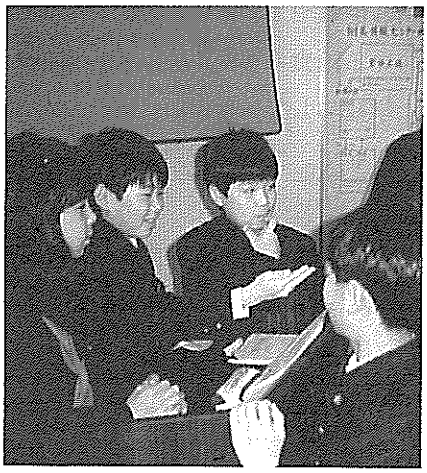


写真３　放送リハーサルする姿

C10「新聞は一番言いたいことをもっと大きくしたらいい。」
B2「アナウンスがまず、言いたいことを伝えます。その後映像で説明するといいです。よくわかるよう心をこめて練習します。」
C11「学校のみんなも期待しているので、新聞と放送が協力しないといけない。放送で上級生のいいところを映すので、新聞も写真でその場面を撮ってもらいたい。そうすると、みんなの心に残って給食のマナーの大切さがよく伝わると思う。」

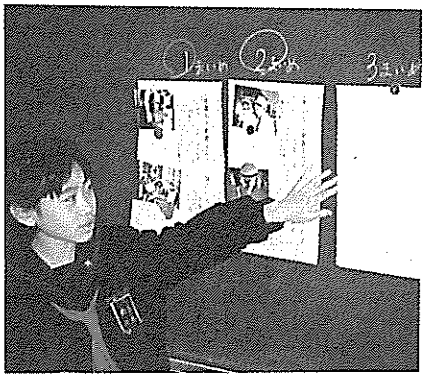


写真４　新聞の内容の吟味

考察

放送局を取材したＢ児の反応から、自分の役割を果たすために放送局の情報を役立てて実践していることがわかる。これは、放送局で取材した情報から自分の行動の判断をして、放送までの準備をしっかりしていこうとする意欲的な姿だと言える。また、組織づくりのC9の反応、制作したものの吟味の場でのB2の反応は、放送部と新聞部が協力して情報を送るしくみをつくっていこうとする主体的な姿である。このような姿は、情報発信のしくみをつくり、制作していくという実践的な活動によって生まれてきたと考える。さらに、C11の反応のように、校内の児童から期待されていることを知り、自分の役割を意識して行動しようとする姿についても、一方的に発信するのではなく受信者のことを考えている点で、社会をよりよくしている子供像と言える。

情報を発信し、受信者の反応から自分の行動について判断をしていく段階

この活動のねらいは、実際の番組や新聞を提供し、受信者の反応を調べてよりよい情報をつくりだしていく価値判断、実践判断をしていくことにある。

＜情報を発信し、リサーチする活動＞

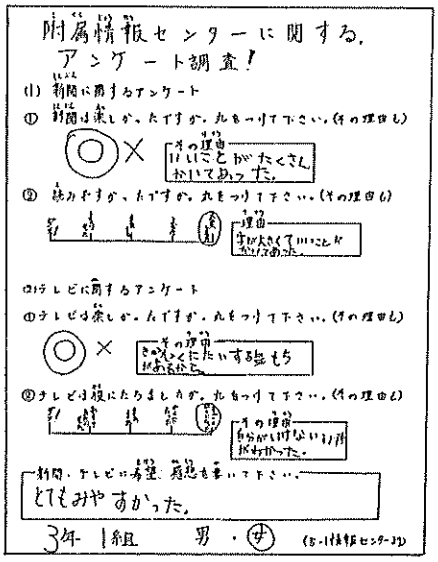
吟味した内容はそれぞれ新聞と放送によって校内の児童に提供された。子供たちは、その反応を調べるために、自分たちで資料２にあるアンケートを取り、写真５のように内容の評価をしていった。

C10「楽しさ度が放送も新聞も半分なのは、映像や説明が分かりにくくて、何を伝えているのかよくわかってもらえなかったから。新聞も説明が難しいので低学年に評判がよくなかったのでは。」
C11「役立ったと答えてくれた人が６０％もいるのでうれしい。」
C12「それをもっと上げるために、まず、低学年にわかる表し方を工夫しよう。それには、放送と新聞が共通に取り上げるものと、それぞれのいいところ生かすところに分けて考えるといい。」
C13「放送は給食以外の楽しい話題を映像で表すともっと人を引き付けると思う。新聞にも記事のおもしろさとぱっとみて感動できるものがいい。伝えたいことをもう一度決めよう。」
B3　「アナウンスも、映像を映しているときに話すといいと思う。次は実況中継をして分かりやすい番組にしたい。」



写真５　リサーチを生かした話し合い

資料２　手作りのアンケート


附属情報センターに関する、アンケート調査！
(1) 新聞に関するアンケート
① 新聞は楽しかった、たのしくなかった、丸をつけてください。(その理由も)
○ × その理由 はじめてのことがたくさんかいてあった。
② 読みやすかった、よみづらかった、丸をつけてください。(その理由も)
○ × 理由 字が大きくてはじめてのことがたくさんあったから。
(2) テレビに関するアンケート
① テレビは楽しかった、たのしくなかった、丸をつけてください。(その理由も)
○ × その理由 もっとくわしくたいする話もちがあるから。
② テレビは役にたちましたか、丸をつけてください。(その理由も)
○ × その理由 わからないはじめてのことがわかった。
新聞・テレビへの希望、意見を書いてください。
とてもみやすかった。
3年 1組 男・女 (5-1情報センター)

考察

リサーチ活動は子供たちが自分でつくり、そして評価していった(C10～C12)。C12とC13の反応は、そのなかでも特に、受信者のために、よりよい情報の内容や方法を新しく決める判断ができている。

これは、受信者の声から自分たちの制作内容や方法を見直し、いかに分かりやすく伝えていくか考え、判断していくという主体的な見方・考え方が育っていった姿として意味あるものと考える。

(6)　全体考察

情報センターの活動後に、A児は右のような作文を書き情報をつくり提供した喜びを表している。これをみると、実際に情報を発信することで、自分の周りにある社会のことを考え、喜んでもらえるために活動することに価値を見いだしていることがわかる。この姿は、相手と共に生き、人のために自ら役割を意識して活動する主体的な姿として本校の社会科で大切にしていきたいものである。同時に、働く人についても自分の活動のために仕事の仕方を学びながら、そのひたむきな人たちの情報づくりをするどく観察することができている。さらに、今までの情報の見方を見直し、注意深くみるようになったという生活の仕方の変化が見られる。このことから、情報と生活とを結びつけた年間計画の中で大切にしている、・情報を意味付ける活動と情報を発信していく活動が社会をつくりだす活動として効果的に働いたと考える。

A児の作文

実際に、自分がテレビ局で活動しているように、その仕事に対して、しんけんに活動をすることが楽しかったです。例えば、テレビ局のディレクターは、本番中でも、まわりのことをよく見ていろいろな指示をしていました。その時の顔は、すごくまんぞくしていて、するどい目をしていました。私は、情報というのは、簡単にできる物ではなく、いろんな人たちがいっしょけんめいに働いて、できることがわかりました。私もそれを見習って、しんけんにセンターの情報をつくりました。情報をつくって迷う時は、附属小のみんなが思っていることを大切にしていく事にしました。みんなが番組を見て、役にたったとうれしくなることが、一番うれしかったです。この学習で、情報とは、人々の生活にとってなくせないものだと思うようになってきたし、今では、テレビの見方にしても、何を伝えようとしているのか、集中して見るようになってきました。

単元終了後も子供たちは、空き時間を見つけては情報センターに足を運ばせている。こんな話題がおもしろいとか、今度は生放送をしたいとか情報に様々なかかわりを求めている。生活にかかわる活動を社会に向けて実践していくこと。そこに、感性と認識の一体化した育ちがあると考える。

自ら数理を求め続ける子供を育てる算数科学習

── 数学的活動の体験を豊かにする年間計画の作成 ──

算数科部　　重松　宏明　　加藤　英也

1．本校の考える算数科の目標

> 数学的活動を通して、数量や図形についての基礎的な知識と技能を身に付け、日常の事象について見通しを持ち筋道を立てて考え、表現する能力を育てるとともに、数理的な処理のよさや美しさを味わい、進んで生活に生かそうとする態度を育てる。

これからの算数科において、大切にされなければならないことは、①子供たちが主体的に身の回りの事象とかかわりながら数理を生成・発展させていくこと②数理のよさや美しさを子供自身が実感し、とらえていくこと③身に付けた数学的見方・考え方、操作、知識、技能を、その後の子供たちの活動に生きて働く力にできることであると考える。そのためには、数理の獲得に迫るための意味や価値のある数学的活動を通すことによって、育成されることが大切であると考える。なぜなら、子供たちが、自分の思いや願いを実現させるためには、事象に対して数学的活動を繰り返し行いながら、考えを練り上げることが必須の条件だからである。また、数理や数学的処理のよさは、子供がよいと感じた見方・考え方、操作を使って、新たな事象に対して活動する体験を経ることによって価値あるものとして、子供たちの中に位置付けられるからである。

以上のように様々な事象に繰り返し働きかける数学的活動の体験を豊かに持たせることが新しい問題にであったときの転移する力となり、子供自ら数理を求め続ける姿を生み出すと考える。

2．主題の意味と重要性

(1)　主題の意味

自ら数理を求め続けるとは、

> 事象に対する自分の見方、感じ方を大切にしながら、必要な情報を収集し、意欲的に活動を繰り返したり、発展させたりする中で、数学的思考力や表現力を身に付けながら情報を処理・判断し、生成した数理を使って他の事象に働きかけ続けていくことである。

子供は、事象に出会ったときに、事象に対する自分なりの見方や事象から受ける印象を持っている。その見方、感じ方を基に「こうしたらどうなるだろう」「こんなふうに感じるけれどこれでいいのかな」という知的好奇心を抱く。その好奇心を活動のエネルギーとして、自分の生活経験や活動体験あるいは、身の回りから必要だと思われる情報を収集し、数学的思考を働かせながら活動を繰り返すことによって、自分の活動の仕方を工夫し、数理を生成する。そして、進んで新しい事象に働きかけることによって数理をより確かにしていくとともに、そのよさや美しさを活動を通して実感し、表現することができると考える。これらの一連の過程での子供の姿が自らが数理を求め続ける姿であるととらえる。

このことによって、子供たちに次のような資質や能力を育てることができると考える。

○　問題に関心を持ち、粘り強く追究活動を繰り返す関心、意欲、態度

○　自分なりの解決過程や考えた筋道を簡潔に分かりやすく表そうとする数学的表現力

○　問題解決に必要な数学的情報を環境や経験から収集したり活用したりする情報操作力

○問題解決を筋道立てて考えていく数学的思考力・判断力

(2) めざす子供の具体的な姿

○「こんなふうにしたい」「どうなるのだろう調べてみたい」などの好奇心を持って、粘り強く追究活動を繰り返すことで自分なりの数理を作り出す子供

○よりよい問題解決を目指して、活動を工夫したり、必要な情報を環境や経験から取り出して活用したりする子供

○「なるほどやっぱりそうか」というように活動体験を通して得た数理に納得している子供

(3) 内容の考え方

算数科における新しい内容は、子供の数学的活動である。従来の数理内容は、数学的活動を行うことによって生み出されるため、その中に内包されていると考える。つまり、こんな事象に対してこんな活動を行った結果、こんなことが分かったというように、1つの行動様式の総体として内容をとらえる。

3．副主題について

(1) 副主題の意味

数学的活動の体験を豊かにするとは、

数学的活動の体験を豊かにするとは、数学的意味や価値をもつ数学的活動を質的、量的に高め、広げていくことである。具体的にいえば、①1つの活動を様々な事象に適用し、数理的処理ができる事象を広げること②ある事象にいろいろな活動の仕方で働きかけ、数理的処理の仕方を多様にすること③活動がそのまま使えない事象に、活動の仕方を工夫して働きかけ、よりよい数理的な処理をすること④活動すること、考えること自体を楽しむことである。数学的活動の体験とは、自分の周囲のどんな事象に対して、どんな数学的活動を行い、どんな結果を得たかということ、つまり、かかわる前の事象の見方、感じ方とかかわった後の事象の見方、感じ方の違いを自分自身が事象に働きかけた結果として意味付けることである。数学的活動の体験を豊かにすることによって、自分の処理できる事象を広げることができるし、見方、感じ方を鋭くすることができる。事象に働きかけ続けることによって、子供は、数える、集める、測る、などの数学的活動を多様に生み出すことができる。つまり、数学的活動の体験を豊かにするためには、子供が自分で納得の行くまで、事象に対する働きかけ（活動）を繰り返すことが大切であり、そのことによって、より簡単な、より確かな方法はないかと自分自身に問いかけることから、表現や数理的処理の仕方のよさや美しさの感得が行われると考える。このことが認識と感性の統一的な発達をしている姿である。

(2) 数学的活動の体験を豊かにする年間計画作成の考え方

上で述べた目標より、数学的活動を通すことを算数科学習の基本的な立場としているので従来の内容構成による年間計画よりも、数学的活動を核にした活動構成による年間計画が適していると考える。そこで、算数科の年間計画の作成にあたって次の2点を大切にしたい。

① 子供たちに体験させておきたい数学的活動が、連続・発展するように構成し、系統的に配列する。 ② 数学的活動ごとに題材を統廃合したり、新設したりする。

① 子供たちに体験させておきたい数学的活動が、連続・発展するように構成し系統的に配列する。

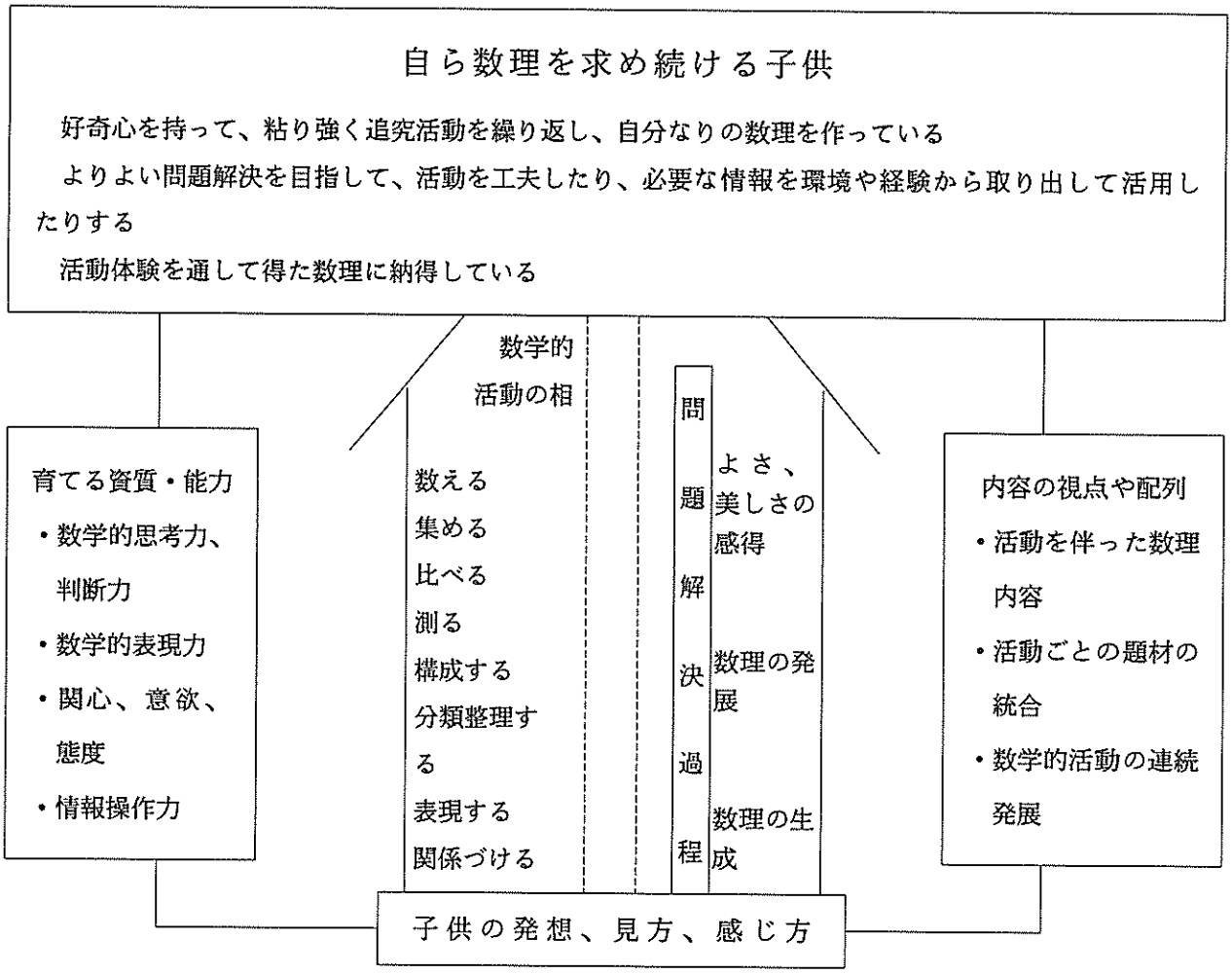
子供たちに体験させておきたい数学的活動とは、事象とかかわり、数理を生み出すために必要な活動であり、大別すると、数える、比べる、測る、構成する、集める、分類・整理する、関係付ける、表現するなどをさす。1つ1つの活動において、かかわる事象を変えることによって生み出される多様な操作の仕

考力を育てることをねらっている。

② 数学的活動ごとに題材を統廃合したり、新設したりする。

算数科の内容を活動によって構成する際に、関連題材の中で1つにまとめられるものは1つにまとめ、指導時数の削減を図る。それと共に、必要な数学的活動を生み出すために、新しく題材を新設すことも考える。

4．構　想　図



5．指導の実際と考察（次頁参照）

6．研究のまとめ

算数の学習を活動を中心に行ったことで、子供は自分の見方・感じ方を大切にしながら、身の回りの事象に対して、繰り返しかかわっていくことで、自分なりの数理を生成・発展していくことができた。それは、以下のような子供の姿が見られるようになってきたことからうかがい知ることができる。すなわち、①問題解決の過程でうまくいかないという不十分さを味わっても、途中であきらめることなく、自分の納得の行くまで事象に繰り返し働き続けることができるようになってきたこと②またそのとき、数学的な処理や数理のもつよさを実感として味わい、他の事象に試してみようとする態度が見られるようになってきたこと③環境に働きかけていくときに、自分の必要とする情報の収集や選択ができることで、自分自身の思いや願いを実現できたという自分自身の高まりを満足感や充実感として自覚できたこと④頭で分かったということも実際に活動を通して改めて実感できた子供の姿が見られるようになったことなどである。このような子供の姿が算数科における認識と感性が統一的に発達してきている姿であると考える。

5．指導の実際と考察1

(1) 題材名　大きい数を調べよう（第1学年）　　重松宏明

(2) 年間計画における本題材の位置づけ

1年生の数と計算領域の学習は、大きく2つに分けて考えることができる。

1つは、数を比べる、数える、表す、関係づけるといった活動体験を豊かにしていく学習である。つまり、簡単な3位数までの整数において、ものの個数や順序を比べる、数える、数を用いて表す、1つの数を他の数と関係づけて考える、といった算数の学習において価値のある活動体験を、子供たちにたっぷり持たせることである。もう1つは、先に述べた数学的活動を通しての数の理解を踏まえて、加法、減法ができるようになることである。つまり、加法、減法を用いる場面がわかり、場面の構造を話したり、絵図や式にあらわしたりすることが豊かになること。また、1位数や2位数において加法・減法ができるようになることである。

そこで、本題材は、数の範囲をこれまで学習してきた20までの数から100を少し超える数まで拡張し、大きい数において上手に数える、表す、比べる、数を関係づけて考えていく活動をたっぷり行い、数の見方や数を通しての考え方を豊かにしていくものである。

(3) 目　　標

① 数学的活動体験を豊かにする。

数遊びやゲームのなかで、大きな数（2位数と簡単な3位数）をかぞえたり、絵図や数字に表したり、数の並び方のきまりを考え、予想したりする活動体験を豊かにすることができる。

② 大きな数へのかかわり方を深めていく。

・かぞえる、表す、きまりを考えるといった活動のなかで、早く数えるために、正確に数えるために、わかりやすく表すために、簡単に表すために、きまりを筋道立てて考えるために、などといった工夫を行うことができるとともに、そういった数学的処理や数理のもつよさを感じ味わうことができる。

・学習したことを発展させ、数遊びやゲームを自分で考え、作り、楽しく行うことができる。

③ 数学的情報操作を自分で行う。

その学習の目的や時間、約束に従って、数えたりする具体物、数える工夫に使う道具や材料を選択したり、問題の解決に必要な情報を自分で集め、解決のための処理をしたりすることができる。

(4) 計　　画（約9時間）

ねらい	学習活動	配時
○ かぞえる体験を豊かにする。 ・100までの数詞を使ってかぞえる。 ・まとまりを作り、正しくかぞえる。	1．かぞえよう (1) 止めている息の長さをかぞえたり、秋の木の葉集めをし、集めた葉の数を数える。 (2) 具体物(釘、輪ゴム、ビーズ、ストロー、絵にかいた虫など)を、速く、正確にできるだけ多くの種類をかぞえる競争をする。	3時間 ① ② 2時間
○ あらわす体験を豊かにする。 ・多くの数を記号や位置におきかえ、簡単に表す。	2．記録しよう 数字を使わないことを条件に、かぞえたものを正確に、速く、わかりやすく記録する競争をする。	
○ 数を比べる、関係づける体験を豊かにする。 ・数の大小比較をする。	3．数カードを並べたり、数あて遊びをしよう (1) 数カードを小さい順に、大きい順に速く並べる競争をする。 数カードを使って大きさ比べのカード遊びをする。	4時間 ①

• 数直線や数表において、数の大きさと数の位置から並び方のきまりをみつける。	(2) 数の直線を使って、数あて遊びをする。	①
	(3) 数表を使って、数あて遊びをする。	①
	(4) 学習のまとめと評価をする。	①

(5) 指導の実際

第1時 みんなでかぞえよう。

本時は数詞を使って、100までの数を確かにかぞえることができるようにすることをねらいとしている。そのために、誰が一番長く息を止めていることができるか、がまんくらべをしたり、集めたきれいな桜やいちょうの葉っぱをかぞえたり、指定された数だけ葉を集めたりする遊びを設定した。がまんくらべでは、みんなが声を合わせ、リズムよくかぞえていた。数人、順序よく数を唱えることが不十分な子がいたが、みんなのかぞえるのに合わせることで、かぞえることが少しずつ確かになっていった。また集めた葉をかぞえる活動では、はじめ、葉をただ地面に広げかぞえていた子供たちが、写真2で見られるように一列にきれいに並べたり、10ずつ列を作って並べたりする工夫がみられるようになっていった。



写真1 止めている息の長さをかぞえる子供たち



写真2 集めた葉っぱを工夫して並べかぞえる子供たち

考察 子供が生活のなかで経験として持っている活動場面の設定であったが、子供たちは、時間の長さとして数を唱えたり、葉の数をかぞえる活動に、1時間中ひたることができた。そして、正確にわかりやすくかぞえるための工夫を子供自ら考え、創りだすことができた。

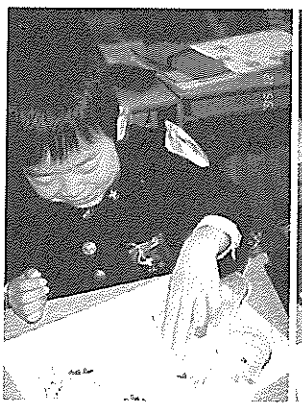
第2、3時 じょうずにかぞえよう。

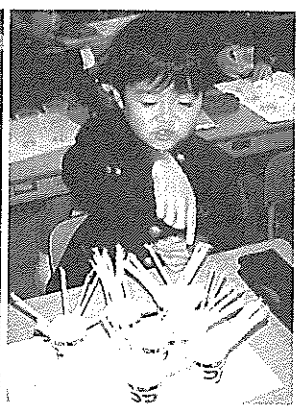
本時は、様々な具体物をたっぷりかぞえる活動をとおして、まとまりを作ってかぞえることの簡単さとわかりやすさを実感させることをねらいとしている。そのために、時間内に多くの対象をかぞえていくことを競うゲームを以下のように設定した。

ゲームの内容	準備したもの	教師の支援
用意した具体物を、さまざまな数で45通り（子供が40人分＋5）ケースに入れて準備し、1つかぞえ終わったら、自分からあいている場所に移ってかぞえる対象を変え、より多くより正しく、ケースの中のものをかぞえたものが勝ちというゲームである。	○かぞえさせたもの 輪ゴム、釘、押しピンストロー、1円玉、ビーズ、絵にかかれた虫や動物、積み木 ○まとまりを作るもの 輪ゴム、カップ、台紙	ストローなどを束ねるゴム、かぞえたものをかたまりとしておいていく台紙、かたまりとして入れていくカップなどを多数準備し、必要に応じて自由に選択利用できるようにしておく。

写真3 具体物を工夫してかぞえる子供たち







I児は、はじめもくもくと釘の数をかぞえていた。……91、92、93、とかぞえていたとき、まわりの音に気がいって、自分の数がわからなくなってしまい思わず隣りの子に「今いくつだった

？」と尋ねたが、答えはかえってこなかった。交流で友達から５や10といったかたまりを作っていけば、途中でわからなくなっても大丈夫だと気付いたＩ児は、カップや台紙を利用して、かたまりを作ってかぞえはじめた。

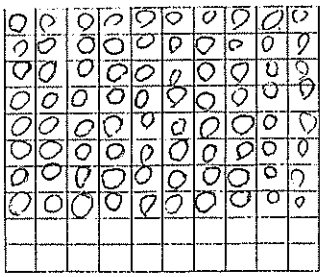
（Ｉ児の作文より）　ぼくは、くぎを1にずつかぞえて100ちかくまでいっていたのに、まわりの人の2、4、6、……というこえがきこえて、かぞえていたかずがわからなくなったので、また1からかぞえなおすことになってしまいました。それで、このつぎぼくは、カップをもってきて、10このかたまりをカップにつくっていきました。そうしたら10このかたまり9つとあと7こで97あるということがはやくかぞえられました。このやりかたはかんたんです。

考察　全員の子供たちが与えられた時間かぞえることに没頭できた。これはゲームのおもしろさからだと考える。また、Ｉ児の作文からもわかるように、数が多いために１つずつかぞえることの危険性と、まとまりを作ってかぞえることの簡単さ、わかりやすさを実感した子供は多かったと考える。

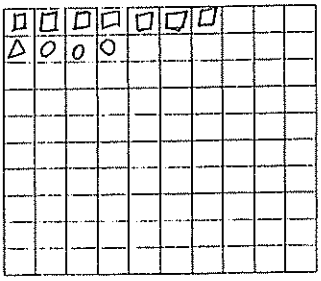
第４、５時かぞえた数を工夫して簡単に記録しよう。

本時は、おきかえの操作による表現の簡略化のよさ、数字を使って数を表すことの簡単さやすばらしさをよさとして実感させることをねらいとしている。ここでいう「おきかえ操作」とは、例えば１を表す○（白丸）10個を、●（黒丸）１個で表すといった、表現を簡単にするための記号や数字でのおきかえをさす。そのために、時間内にかぞえた数を、速く正しく記録していくことを競うゲームを次のように設定した。ゲームの場や活動の設定は前時学習とほぼ同じである。ここでは、ケースに入っている前時使った具体物の数を数字を使わないという条件で、できるだけ速く、わかりやすく表現（記録）していくというゲーム設定である。「数字は使えないけれども、自分でかぞえた数がわかるように工夫しなさい。」ということを指示した。Ｋ児は、はじめ資料１のように、かぞえた数だけ○をかき、数を表していた。しかし、４つケースを調べたとき、「きつい」と言っていたので「もっと簡単に数がわかるようにできないかな。」と助言でゆさぶると、少し考えたあと資料２のように表していった。「これはいくつなの」というと「78です」という答えがかえってきた。交流段階ではＫ児を中心に次のような交流が見られた。

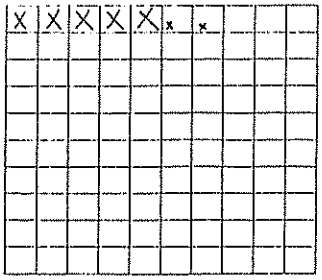
資料1 K児の最初の表現



資料2 K児の表し直した表現



資料3 へのケースの中の数を図で工夫して表す

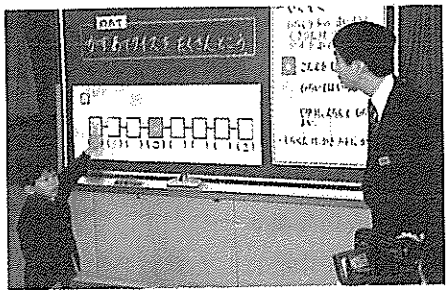


Ｋ児：私はスのケースを、このように(資料2)表しました。私は、□を10にして、△を5にして、○を1にすることにしました。なぜかというと最初、私はある数だけ○をかいていたんだけど、78個も○をかいていたらたいへんだったからです。こうすると、10が7個、5が1個、1が3こで78が簡単にかけます。

Ｓ児：ぼくもKさんと似た考えだけどちょっと違います。(前に出てきて図を書きはじめる。)ぼくは、へのケースを調べたんだけど、このように(資料3)記録しました。大きいXが10で、小さいXが1です。だからこれは52です。

このような交流によって、多くの子供たちが表現を簡単にするための工夫をはじめることができた。また、最後に数字を使って数をかかせると、口々に「数字を使えば、もっとたくさん調べられたのに。」と数字の便利さを感想として言っていた。

（写真４）

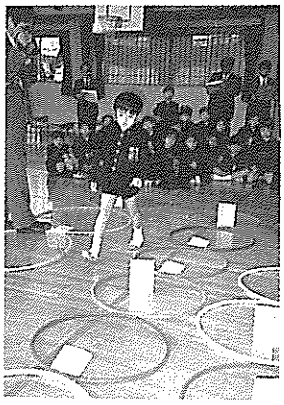


第７時　数あてクイズをしよう。

本時は、ある決まりをもって並んでいる100までの数の直線の並び方を知るために自分が必要と思う位置のカードを開き、カードの並んでいる位置と数の大きさから並び方の規則性を筋道立てて考え表現できるようにすることをねらいとしている。（写真４参照）

まず導入で数あて遊びを行った。写真５のようにフラフープの中に、数カードをあるきまりをもって並べ（カードはふせている）、教師が「30のカードはどこにあるかな？30のカードと思うところを見つけてください。」と呼びかけた。意気込んで出てきた○児が、まず手前か

ら３つ目の27のカードを開き、次に出てきたＹ児が手前から８つ目の42を開く。３人目、４人目がカードを捲って５人目の子が30のカードを当てた。途中、何人かの子供たちが３とびにカードが並んでいることに気付きはじめた。この数あて遊びを３度行って、本時数あてクイズの学習に見通しをもたせた。



（ためしの活動）

Ｔ：赤いカードの数わかるかな?

ア イ ウ エ オ カ キ ク

（全体）;何もカードを開かない状態で数を意味なく予想している子供が半数ほどいる。

Ｔ：1枚カードをめくる。アの部分の40を開ける。

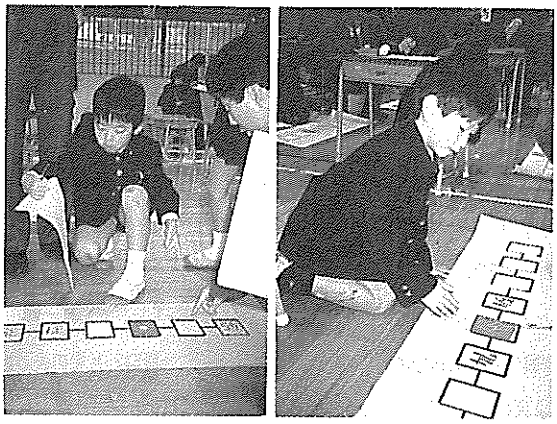
（全体）;44だとか、56だとかまだいろいろな答えを予想している。H児:(44といった答えに対して)首を振る。まだわからない。あと1つ赤い所の左側をめくればよい。（写真５）

Ｔ：2枚目のカードをめくる。クの部分の75を開ける。

(全体);わかった、わかった60だという声が聞こえる。H児:わかった。40から5ずつ増えているんだ。

S児:首をかしげ、わからなさそうにしている。他の子供の発表のとき、友達のしているのをじっと目でおっている。

D児:60と思う。最後が75で5ずつ増えているから。ゲームのやり方の提示に対して、一生懸命見てはやくやりたい様子。



（写真6）数あてクイズに熱中する子供

（調べる活動…数あてクイズを解く。）

S児　ア イ ウ エ オ カ キ ク

テ

①エを開き、54がでる。②カを開こうとする。(さっき、同じような問題で(赤いカード)をはさんでやったらわかりやすかったから)74がでる。③54(エをさして)、74(カをさして)で10ふえると思うから、64。

I児　ア イ ウ エ オ カ キ ク

ソ

Ｔ：まずどれをはぐろうと思っていますか?

I児:左はし(ア)を開きます。それは、1枚目をめくって次(イ)をめくったら、何こずつ減っているか、増えているかがわかるから。

I児:ア(31)→イ(33) をめくって考えたあと、次にカを開く。そして41が出たのを見て、31,33,35,37 だからCは、39だ。

考察　子供たちは、ためしの活動にしても、数当てゲームの場においても、数とカードのおいている場所を関連づけてよく考えていた。解き方にスピードの差はあれ、全員がよく考えながら活動を行っていた。また全員が活動を行っているうちに、「１か所では数を予想することはできない」ということに気づき、自分なりに予想がたつまでは、２まい、３まいとカードをめくっていった。Ｓ児は、「知りたいカードの両端をあけるようにすればいい。」と考え、Ｉ児は、「続けて２まいカードをあければ、だいたい並び方のきまりが予想できる。」と考えている。またH児は、赤いカードの場所によって臨機応変に対応している。これらはすべて、自分なりの考え方の筋道であり、活動を通して、「このやり方がよい」と確信してきている姿で、自分なりに一般化がはかられている姿だと考える。

(6)　全体考察

本題材では、大きな数をかぞえる、表す、数と数の関係においてきまりを見つけるといったことを様々な活動や場において、題材を通してたっぷり行わせた。また数学的処理や数理のもつよさを感じさせるために、子供が、これまでに経験として持っている数への働きかけ方で、まず自分なりに活動させ、活動を通して改善点をつませたり、交流によってよさの追求に対する相互補足を行わせたりした。このことは、のちに活動が高まったとき、数理的処理や数理のもつよさ、自分の高まりを十分実感させることにつながった。活動を中心にした算数の学習は、子供たちに自分の活動の不十分さやよさなど、様々感じさせることがあるようである。そのことが、子供たちにとって算数を学習する楽しさであり数理の理解も深めている。これは、算数科における認識と感性の統一的発達の一つの姿であると考える。

5．指導の実際と考察2

(1) 題材名　関係を取り出そう　（第6学年）　　加　藤　英　也

(2) 年間計画における本題材の位置付け

本題材は、比例と反比例として位置付けられてきた2題材に相当する題材である。比例と反比例は、数学という学問の系統から設定された学習内容であるが、そこで行う2量を『関係付ける』という数学的活動の面から考えると、子供にとってみれば、別々に分けて学習する必然性はない。そこで、年間計画構成を行う上で、2量を『関係付ける』という数学的活動を中心におくことで、比例や反比例だけでなく一般の2量の関係まで考察の対象を広げることで、日常の事象から伴って変わる2量を取り出し、必要とする情報を集め、変化と対応という視点から2量を関係付ける活動の体験を豊かにすることができると考える。そこで、本題材では実験や実測を行いながら必要なデータを収集し、2つの量の関係の特徴を調べていく活動を位置付ける。実験や実測を行うことによって、連続量の場合に測定の誤差が生じる。この誤差をどう処理するかということが、実験値と理想値の違いを考えてデータを理想化するという情報操作力を育てるとともに、日常の事象を数理的にとらえることを身に付け、関係付ける活動の対象を広げ、活動体験を豊かにすることができる。このことは論理的に物事を考えたり、およそ……であると見なしてよいというマクロな物の見方が育ってきたりしている高学年の発達段階に適した活動であると考える。この体験が中学校での関数の学習に向けての基礎となる。

(3) 目　標

①　2量を関係付ける活動の体験を豊かにする。

・身の回りの事象から伴って変わる2変量を取り出し、表や式、グラフなどを用いて表現しながら、関係を調べる活動をいろいろな事象に対して行うことができる。

・ある量とそれに伴って変わる量の関係付けから、伴って変わる2量の関係付け、さらには、2量の関係の生活への利用へと関係付ける活動を高めていくことができる。

②　自分で必要な情報を操作する。

実験や実測などの活動を通して、関係を取り出すのに必要な数の情報の収集や情報を理想化する処理のしかたなどを身に付けることができる。

③　関数的な見方・考え方を深める。

様々な2量の関係を変化と対応という見方からとらえたり、分類したりすることができる。

(4) 計　画（約14時間）

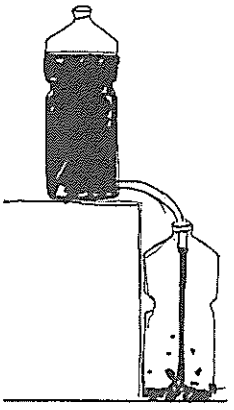
ね　ら　い	学　習　活　動	配時
○　1つの変量に対して伴って変わる変量をとりだす。 ○　2量の変化のきまりを見つけるために情報を収集する。 ○　日常事象から伴って変わる2量を取り出す。	1．日常の事象から伴って変わる2量を取り出す。 (1)　紙の枚数が変わると変わる量を探す。 (2)　時間が変わると伴って変わる量を探す。 (3)　時間とともに変化する量を利用して時計を作る。 ・変化の様子を表に表す ・変化の様子をグラフに表す ・対応の決まりを見つける (4)　一方が変われば、もう一方も変わるものを探す。	6時間 ① ① ③ ①

○　自分で必要だと思うデータを実験などを通して収集する。 ○　いろいろな2量の関係を調べる。 ○　2量の関係を分類する。 ○　2量の関係を生活の場面に利用する。	2．自分の追究する事象を選択して、2変量の関係を調べる。 (1)　一方が増えればもう一方も増えるものを調べる。 ・画鋲の数と重さ ・バネの全体の長さとおもりの重さ ・紙を折る回数と重なる枚数 ・箱に入った積み木の個数と全体の重さ ・振りこの糸の長さと1往復にかかる時間　　など (2)　一方が増えればもう一方は減るものを調べる。 ・ジュースを分ける人数と1人分の体積 ・トイレットペーパーを使った長さと残りの直径 ・ボールの弾む回数と跳ね返る高さ ・面積が一定の長方形の縦の長さと横の長さ 3．比例関係などを利用して、間接測定や推測をする。 (1)　不定形の図形の面積を重さを使って間接測定する。 (2)　1冊の本を読むのにかかる時間を推測する。 (3)　使い掛けの歯磨き粉があと何日でなくなるか推測する。	4時間 ② ② 4時間 ① ② ①

(5)　指導の実際

第3～5時…変化のきまりを見つけるために情報を収集する

本時は、自分の集めた情報から、2量の間に変化のきまりを見つけようとすることをねらっている。そのために、時間という目に見えない量を目に見える他の量を使って表せないかという問題を設定した。子供たちは、第2時に探した、時間に伴って変わる量を使って時計のようなものを作ればよいという見通しを持って、自分なりの時計を考案するために使えそうな量を選択した。選択の基準は、変化の仕方が一様で、短時間の実験によってとらえやすく分かりやすいと予想されるものが多かった。



資料2 K児の水時計の設計図

資料1 〈第2時で取り出した時間と伴って変化する量〉

・砂時計の砂の量　・歩く距離　・影の位置や長さ
・自転車のタイヤの回転数　・脈搏数　・呼吸数
・火の付いたろうそくの長さ　・氷の解け方
・振り子の振れ数　・水を入れるときの水の嵩
・気温　・地温　・水温　・線香の長さ
・字を書くときの鉛筆の芯の減り具合　・雲の位置
・メトロノーム　・消しゴムの減る量

→

〈時計作りに使えると判断した量〉

・砂時計の砂の量
・脈搏数　・水温
・火の付いたろうそくの長さ　・水のかさ
・振り子の振れ数
・線香の長さ
・歩く距離



写真1 K児の水時計の製作の様子

子供たちが考案した時計は、水や砂を使って、時間とともに減っていく体積や高さの関係で時間を計ろうとする水時計・砂時計、ろうそくや線香を燃やして、燃えた長さや残りの長さとの関係で計ろうとする火時計、時間と脈搏数の関係を使って計ろうとする脈時計、水を電熱器で暖め、水温変化で表そうとする水温時計、熱の伝導した距離を使う伝導時計などがあった。時計を作るのに必要な材料や道具は自分で準備させた。

子供たちは、１分、２分…と一定時間ごとにデータを取り、その変化の様子に一定の決まりがあるかどうかを探っていった。

時間(分)	0	1	2	3	5	8	
ろうそくの長さ(cm)	5	4.7	4.5	4.3	3.9	3.3	

表1　N児の時間とろうそくの長さの関係を調べるために取り出したデータ

N児は、ろうそくを燃やす実験をしながら、３分まで１分ごとにデータを取り出した後１分ごとに0.2㎝ずつ減っていくのではないかという予想を立て、表１にあるように、時間を飛ばし、５分、８分とそのあとも同じような変化をするのかを確かめていった。

Ａ児は、アメリカンクラッカーのようなおもちゃを回転させて、その回転数で時間を計ろうとしていたが、（写真２）回転数が一定ではないので、時計として使えないと判断し、もし、機械のように一定の速さで回せたら時計として使えると結論付けた。



写真2 自分なりのおもちゃ時計で時間を計るA児

Ａ児の感想　回す速さが違うので少し変わってくるようだ。同じにしたらいいと思う。機械的に回るものだったら時計ができる。振り子でもメトロノームなど一定の速さで動くものだったらうまく測れる。

Ｋ児はペットボトルの下の方に穴を開け、水を入れて水量の変化で時間を計る水時計を作り、実験を始めた。５００mlの水が出るのに、17.5秒かかったことから、全部の水が出るの２倍の35秒かかると予測し、実際にデータを取らずに、計算によって表の中に数値を記入していった。本当にそうなるか実際に確かめてごらんと助言すると、もっと詳しいデータを取っていった。Ｋ児は、時間の経過とともに、水の高さが低くなってくると水圧の関係で、水の出方が少なくなることに気付き、データを数多くとらないと関係はつかめないことをとらえていった。

Ｋ児の感想　予想では、ずっと同じ時間ずつ水が出されると思ったんだけど最後のほうで水の圧力の影響でちゃんと時間を求めることはできなかったので予想外だった。

考察

自分なりの時計を使って時間を計るという活動を仕組んだことで、子供たちは、時間とともに変化する量を選択し、実際にデータを収集する中で変化のきまりに自ら着目していった。Ｎ児のように変化の仕方が予想通り一定だった例、Ａ児のように、データを取っていくうちに一定でないために時間が計れないことに気付いた例、Ｋ児のように少しのデータで立てた変化の予想通りにはいかず、データをたくさん収集する必然性を感じとっていった例のいずれもが、自分でデータを収集していくことを通して、体感できることである。

第７時…いろいろな２量の関係について調べる。

本時は、実験や実測をしながら増え方の決まりを見つけていく活動をいろいろな伴って変わる２量に当てはめながら関係を見つける対象を広げていくことをねらいとしている。そこで、前時に子供たちが取り出した伴って変わる２量（資料３）の中から、一方が増えれば他方も増える関係にあるものをさらに取り出し、自分で選択したものを調べるという活動を設定した。子供たちは、１０組の２量から、増加関数になる６組の２量を取り出し、その中から１つを選択し、実験を行いながらデータを取り、それらを表やグラフに表現しながら、次々と２量の関係を見つけ出していった。その結果を交流していく中で、①増えれば増えるものの中でもある一定量ずつ増えるものとばらばらに増えるものがあること、②アとイの事象は変化の仕方は、どちらも同じ数ずつ増えていて、グラフにするとどちらも直線にな

ア　（画びょうの数、重さ）
イ　（バネの全体の長さ、おもりの重さ）
ウ　（正方形の一辺の長さ、面積）
エ　（1.2ℓのジュースを分ける人数、一人分の体積）
オ　（振りこの糸の長さ、１往復にかかる時間）
カ　（紙を折る回数、重なる枚数）
キ　（面積が24㎠の長方形の縦の長さ、横の長さ）
ク　（トイレットペーパーを使った長さ、残りの直径）
ケ　（箱に入った積み木の数、全体の重さ）
コ　（ボールの弾む回数、はね返る高さ）

資料3 子供が取り出した伴って変わる2量

るけれど、アの方は2倍になれば2倍になる関係があってイの方はそうならないし、グラフも原点を通るものと通らないものに分かれることなどに気付いていった。

A児の感想　積み木とか1つ1つのせたりしていくのは大変だったけど全部○gずつ増えていて、正比例とただのふえるものとがすぐ区別できた。

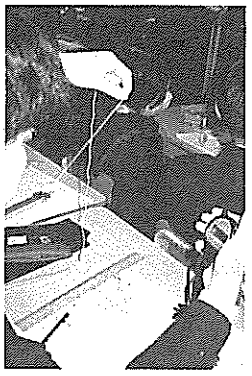
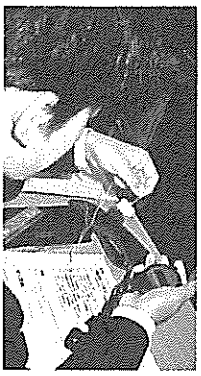





写真3、4 糸の長さを変えて、往復の時間を調べているS児　写真5 積み木の数と重さの関係を調べているA児　写真6 事象を選択している子

考察

子供たちは、身の回りから取り出した伴って変わる2量の関係を調べていく活動を様々な事象に当てはめていきながら、一方が2倍3倍…になれば、他方も2倍3倍…になる比例関係にあるものを取り出し、資料3のイのような一次関数やその他の関係との違いをとらえることができた。このことは、活動による題材構成によって比例関係だけでなく他の関係まで内容が拡張できたことを意味している。

第12、13時…1冊の本を読み終わるのにかかる時間を推測する。

本時は、実際にデータを取ることが困難な量を、一部のデータから推測することで2量の関係の調べ方を生かせるよさを実感させることをねらいとしている。そのために、生活の中から読書をする場面を取り上げ、1冊の本を読み終わるのにかかる時間を推測する活動を仕組んだ。子供は、全部読まなくても時間と読んだページ数の関係を調べれば、およその時間は分かるという見通しを持ち、一冊の本を取り出し、各自時間を計りながら、何ページ読んだかをデータとして記録していった。その結果、正確には分からないけれど、およそ比例すると考えれば、1冊全部を読み終える時間は推測できるということをとらえることができた。

M児の感想　自分の本を読む速さがほとんど同じなので、びっくりした。自分の本を読む速さでもちゃんとした大体の時間が計れるのだなあと思いました。

S児の感想　完全に比例はしていなかったけれど、それは1ページの字数や読む速さが一定でないから、誤差が出たのだと思う。それを無視すれば、正確ではないけれど大体の時間が分かる。

N児の感想　ふだんよくやる行動の中で時間が計れるなんておどろいた。1ページにかかる時間が分かればこの本は時計の役目をはたせる。



写真7 本を読みながら時間を計っているR児

考察

上の感想から分かるように、2量の関係を使って、生活の中の事象を推測することができることに、子供たちはよさを感じている。また、多少の誤差を認めて、比例関係を柔軟にとらえる見方が育ってきている姿であると考える。

(6)　全体考察

本題材においては、1つの量に伴って変わる量から伴って変わる2量の関係へさらに関係付けを生活に生かすという一連の活動を子供たちが取り出した様々な事象に対して行わせた。その際に、自分で実験や実測などを通して、データを収集する活動を題材全体を通して行わせた。このことによって、子供は環境へのかかわり方の一つとして情報操作の仕方を身に付けると同時に、比例と反比例はもとより一次関数などの関係も取り出すことができた。また、関係付けの活動の高まりとして、生活の場面に利用できるというよさを実感として味わう姿が見られた。このことは、算数科における認識と感性の統一的発達の一つの姿であり、数学的活動を基に内容構成を再編していくことで、子供が自ら数理を生成し、考えを確かにしていくことができるということが明らかになった。

自然事象に対する新たな考えをつくり出す子供を育てる理科学習

── 生活事象とのかかわりを見つめ直していく活動を重視する年間計画の作成 ──

理科部　今林康治

1．本校の考える理科の目標

> 自分と自然事象とのかかわりに関心をもち、観察・実験などを通して問題解決を図る中で科学的な見方・考え方を養うとともに、自然とのよりよい関係をつくっていこうとする実践的な態度を育てる。

これまでの理科の学習では、問題解決の能力を育て、科学的な見方や考え方を養うために、自然事象がどのような過程で起きてくるのかといったわけを調べてきた。しかし、そこでは自分の科学的な行為の根拠となる反省的な見方や考え方を生かして、自然と共存していくための「自ら学ぼうとする心」や「自らの生活づくり」といった生活に生きて働く力を育てるまでには至ってはいなかった。

これからの理科で求めていかなくてはならないものは、生活者としての自分を含めた人が自然と共存していくための自己の反省と自覚及び思考力・判断力・創造力・実践力である。そのためには、これらの行動の原動力となる自然に対する感覚・感情（感性）と自然事象を主体的に追究する理解面（認識）とを共に合わせて指導していく必要がある。

2．主題の意味と重要性

(1)　主題の意味

自然事象に対する新たな考えをつくり出すとは、子供が自然事象に働きかけて得た情報と自分がすでに持っている知識とを関連づけて、そこに新しいまとまりのある解釈をうちたてることである。

つまり、学校で得た知識と生活経験の中で得た知識との往復的な学びを繰り返すなかで、自然事象をより広く理解していくことである。

そして、解釈をうちたてていく過程で、わずかずつではあるが日常生活のなかでつくりあげられた知識は、より分化したり、新しい言葉をつけ加えられたり、より構造化されたりする。そのことは、学習してきたことが学校の枠だけにとらわれず、生活に広がっていくことになる。さらに、この解釈する過程を繰り返すことによって、子供は生活を科学する態度を身に付け、自分と自然事象とのかかわりにおいて科学的な思考と的確な判断や行動ができるようになるのである。

これらのことから、次のような資質や能力が育つ。

①生活経験における自然事象に対する自分なりの見方や考え方を反省し、自覚する。

②生活のなかにある自然事象を自分なりの見方や考え方をもとに思考・判断する。

③生活事象を科学的に解釈できるようになった見方や考え方を生かして創造的に実践する。

この資質や能力は、自然に向かう自分を作り上げていく生きる力となり、よりよく生きていくために自分の自然を知る力を評価・反省し、自然へ働きかける自分の力を育てることにもなる。さらに、生活者として、自然との共存を考える力を身に付ける上で大切になる。

(2)　めざす子供の具体的な姿

> ①生活経験で身に付いた見方や考え方を使って、自然事象の要因を取り出している。
> ②生活事象に対する解釈の曖昧さをとらえて、自分の学習問題を設定している。
> ③自分の発想を生かしながら、要因と要因との関係をつなげて自然事象を追究している。
> ④生活事象とのかかわりが明らかになるように自分なりの見方や考え方を見直している。
> ⑤科学的に解釈できるようになった自分の見方や考え方を身の回りのことに生かしている。

(3) 内容の考え方

自然科学の体系を生活を科学するといった観点から見直したとき、従来の領域と変化はないが、主体的・創造的な活動を重視しているためその時間が必要となり、従来よりも内容が精選される。

また、人が生活していく上で大切にしていかなくてはならないという観点から、人と自然事象とのかかわりを見直し、次のようなことを大切にしていく。

生物とその環境へのかかわり	人が健康に生活していくためには、自分自身の体を知ることと共存していく生き物の生態を知ることが大切である。この動植物は、単なる食物としての存在ではなく心を和ませてくれる存在でもある。
物質とエネネギーへのかかわり	人が便利に生活していくためには、その物質の性質や働きを知って使いこなしていけるようになることが大切である。この物質やエネルギーは、自分たち人間の営利だけを目的として考えるのではなく、環境への影響も考慮する。
地球と宇宙へのかかわり	人が安全に生活していくためには、身近な土地の成り立ちや天気の変化の規則性を知って、適応していけるようになることが大切である。この地質や天体は、その規則性だけでなく、そのものの神秘さにひたらせてくれる存在でもある。

3．副主題について

(1) 副主題の意味

生活事象とのかかわりを見つめ直していく活動とは、生活の中にある事象に対してどのように考えどのように見ているかを子供たちに見直させてその矛盾や曖昧さに気づかせ、解消させていきながら生活の中にある科学の普遍的なものをつきつめていくことである。

そのためには、生活事象を科学的に解釈していく活動を再度行って子供が日常の生活経験によって獲得した知識（生活的知識）を構造化していく必要がある。そこでは、①子供たちがすでに知っていることをうまくまとめあげる働きをどれほど生活的知識が担うことができるか、②その知識によって自分たちの知らなかった事についてどれほど詳しくもっともらしい予想を行うことができるか、③その予想が正しいことが実際に検証されるか、といったことを考えながら学習が進められていく。

(2) 生活事象とのかかわりを見つめ直していく活動を重視する年間計画の作成の考え方

① 単元の配列と学年ごとの配時を次のように考える。

○ 観察・実験に適した時期に関連のある事象から
○ 日常生活おいて経験が豊富な事象から
○ 生活経験が科学的に解釈しやすい事象から
○ 具体的に五感を通してとらえやすい事象から

内　　容	学年と配時			
生物とその環境	5	36	6	37
物質とエネルギー	年	40	年	41
地球と宇宙	生	29	生	27

② 生活経験の再体験活動を単元を通して行う。

再体験活動を取り入れるのには二つの理由がある。一つ目は、自分の生活事象に対する解釈の曖昧さが意識され、対象に対して興味・関心を強く示すようになるということである。二つ目は、子供の生活に直接かかわる体験活動によって感性をゆさぶり、主体的に対象に働きかける活動を通して、認識を深めていくことができるということである。

③ 生活経験の再体験活動を行っていく上で、次の5点を大切にする。

○ 体験から科学的知識を獲得するために、生活的知識の曖昧さに気付かせるようなゆとりのある導入指導を行う。そこでは、決められた学習問題を与えるのではなく、新たな体験へ自分を導けるように自らの生活経験を通して選んだ問題を見出させる。

○ 生活経験に基づいた個人の発想を認めるために、それぞれの生活的知識を見直しながら自己の責任

に立って解決していくような主体的な学習を尊重する。

○　自分と生活事象とのかかわり方を反省させる自己評価を大切にし、自己の判断と直感を信じて行動させながら個人の潜在性を開発するとともに問題点を自覚させる。

○　生活事象の潜在性に気付かせるための自由研究をさせ、そのための活動時間を確保して成し遂げた喜びの瞬間を大切にし、自分のやり方への尊重と自覚を持たせる。

○　再体験によって子供の思いが連続するような教材を考える。

◦必要性 ── 曖昧な考えで過ごしてきた内容を含む生活経験から学習する価値が生まれるもの。

◦科学性 ── 生活事象がどのようにして成り立っているのか自分なりに実証が可能なもの。

◦発展性 ── 生活的知識によって科学的に再度見つめ直しながら、応用していけるもの。

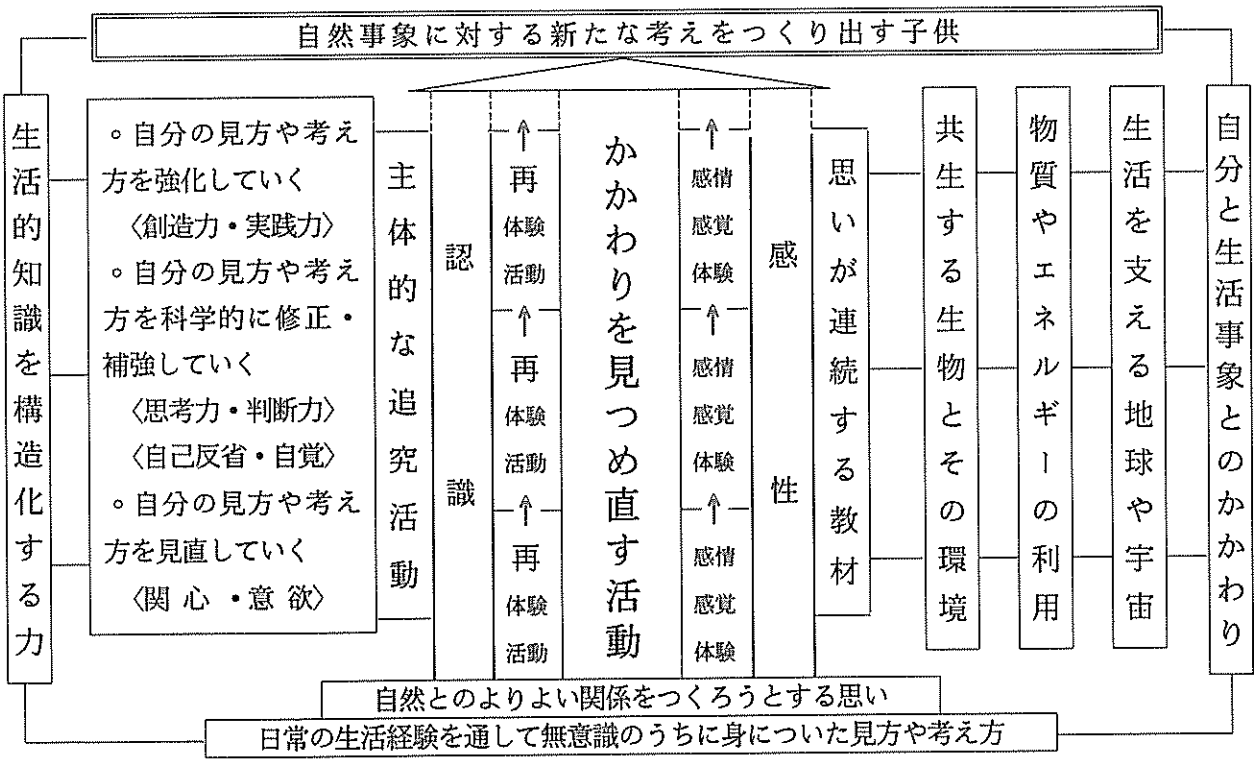
④　生活経験の再体験活動には次のような価値がある。

○　生活事象の再体験を通して生まれた課題を主体的に追究する過程で、その結果から自分の論理を構成し直すため、自分の見方や考え方の変容を納得しながらとらえることができる。

○　自然事象についての知識・理解のみでなく、学習したことが生活のなかで価値付けられる。

○　年間を通して体験と知識を積み重ねていくことで、自ら自分なりの見方や考え方を科学的な見方や考え方に再構成していく力と自然を見る目を育てることができる。

4．構　想　図



5．指導の実際と考察（次頁参照）

6．研究のまとめ

かかわりを見つめ直していく活動は、子供たちに生活的知識の曖昧さを自覚させ、主体的な追究活動を生み出すことができた。また、達成感を味わう経験を積み重ねていくことで自分の考えや判断に自信が持てるようになり、自ら生活に生かしていこうとする実践的な態度を育てることができた。

【参考文献】

波多野　誼余夫、稲垣　佳世子著　『知力と学力 ── 学校で何を学ぶか ──』　岩波新書

森本　信也著　『子どもの論理と科学の論理を結ぶ理科授業の条件』東洋館出版社

5．指導の実際と考察

(1) 単元名　　生活の中の水溶液（第６学年）

(2) 年間計画における本単元の位置づけ

本単元は、「物質とエネルギーのかかわり」から内容を規定し、第５学年単元「生活の中で水にとけるもの」の学習の発展となる。生活経験において子供たちは、飲み物・調味料といった水溶液とのかかわりが多く、再体験を行ったときに生活的知識を基に予想できたり、実際に検証を行いやすいという意味から６月に位置づけている。

(3) 目　標

① 生活的知識を基に自分なりの方法で意欲的に調べ、自分の見方や考え方を見直すことができる。

② 塩酸・水酸化ナトリウム水溶液や身近な水溶液を用いて、その働きによる変化や性質の違いをとらえることができる。

(4) 計　画（約１０時間）

ね　ら　い	学　習　活　動	配　時
○ 洗浄剤と自分とのかかわりを見直し、興味関心を持ちながら生活のなかでのその利用や物との反応を体験を通して見直す。	１．洗浄剤を使って手荒い場の汚れを落とす再体験活動を行いその反応をじっと観察して、ラベルに書かれた洗浄剤の成分を見直して、自分なりの問題を設定する。 問題 身の回りの物と塩酸や水酸化ナトリウム水溶液とはどんな反応を示すのだろうか。	２時間
○ 塩酸や水酸化ナトリウム水溶液と物との反応を調べてその違いをとらえ、水溶液の使われ方を主体的に追究する。	２．注意書きに書かれたことを確かめるために、塩酸や水酸化ナトリウム水溶液と身の回りの物との反応を調べ、その変化から生活経験における使いわけを見直す。 ◦液性によって反応するものが違うため使われる目的も違う 問題 身の回りにある他の水溶液にも、性質の違いはあるのだろうか。	２時間 ３時間
○ 水溶液には性質があることから、身の回りにある水溶液の性質を主体的に調べ、生活との関係を見つめる。	３．水溶液の性質の違いから、生活経験で知っている水溶液を自分の家からフィルムケースに入れて持ち寄り、その性質を調べて仲間分けをし、環境に対する影響を考える。 ◦身の回りにある飲み物や食べ物には酸性のものが多い 問題 ◦使用上の注意には意味があるのだろうか。 ◦環境汚染や公害を起こさない方法はないのだろうか。	３時間
○ 学習を生かして応用発展できる内容を取り出し、自ら活動の計画を立てて実行する。	４．自分なりに納得がいくように、調べてきたことを生かした自由研究を計画し、そのための情報を集めたり水溶液について自分なりに再度実験・観察をしてまとめたりする。 ◦安全性や環境にやさしいものを考えて使っている ◦生活の中で水溶液をうまく利用していく	

(5) 指導の実際

見出す段階．洗浄剤の使われ方を見直して自分の問題を設定する活動（１～２／１０）

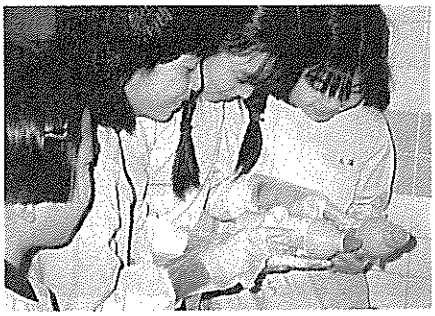
この段階でのねらいは、洗浄剤と自分とのかかわりに関心をもち、生活の中で洗浄剤がどのように利用されているのかを見直しながら、日常生活の中の汚れとの反応を調べ、反応の様子から自分の問題を設定していくことである。

そのためにまず、洗浄剤を使う生活場面を想起しながら、手荒い場の汚れを落とすといった体験を行った。（写真①）Ｎ児は、反応をじっと観察して「白い泡が出てきた」「汚れと洗剤の何が反応してるのか」といった驚きや疑問をもつ姿が見られた。（資料①）



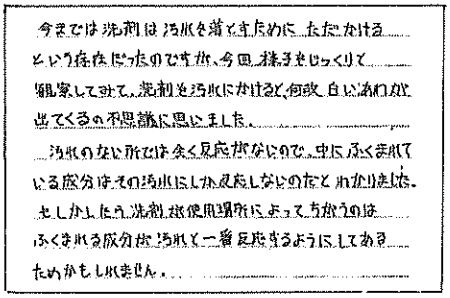
（写真① 手洗い場の汚れを落とす体験）

その後、洗浄剤の中に含まれている何が汚れと反応して白いあわを出しているのかを成分表示を見て確かめていた。（写真②）そして「塩酸や水酸化ナトリウムはどんな役目をはたしているのか。」ということを問題にし、物との反応を調べていきたいという願いをもつことができた。



（写真② ラベル調べを行っている子供たち）

考察１　洗浄剤を使った汚れ落としの体験を通して生活事象を想起させたことにより、子供たちは、反応に関心を示している。資料①にあるように「今まで洗浄剤は汚れを落とすために、ただかけるだけの存在だった。」と書いていることから、子供は、生活経験において反応がなぜ起こるのかといったことは問題にしていないこと分かる。また、日常生活では目も止めなかった成分表示に目を向け、その成分や注意書きを読んで、洗浄剤の使い分けに対する自分の意識の足りなさや何がどのように反応しているのかといった解釈の曖昧さにも気付いてきている。また、資料①にあるように「洗浄剤が使用場所によって違うのは、含まれる成分が一番反応するようにしてあるのかもしれません。」と感想を書いていることから、子供たちは日常生活における洗浄剤の見方や考え方を見直しているものと考えることができる。



今までは洗剤は汚れを落とすために、ただかける
という存在だったのですが、今回、様子をじっくりと
観察してみて、洗剤を汚れにかけると、何故、白い泡が
出てくるのか不思議に思いました。
汚れのない所では全く反応がないので、中にふくまれて
いる成分はその汚れにしか反応しないのだとわかりました。
もしかしたら、洗剤、使用場所によって違うのは
ふくまれる成分が汚れて一番反応するようにしてある
ためかもしれません。

（資料① 活動後のＮ児の感想）

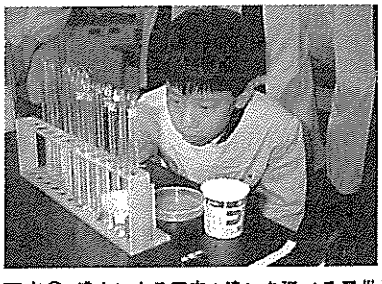
調べる段階．水溶液の使われ方を主体的に追究する活動（３～７／１０）

この段階でのねらいは、身の回りにある物との反応及び水溶液の性質の違いを自分の方法で主体的に追究し、塩酸と水酸化ナトリウム水溶液の働きや水溶液の性質を理解して生活的知識を見直しながら、自分なりの見方や考え方を科学的な見方や考え方へ構造化していくことである。

そのためにまず、成分表示から取り出した塩酸や水酸化ナトリウム水溶液を使って調べてみたいという願いから、注意書きに書かれたことを確かめるために身近な物との反応を調べていったり、濃さによる反応の違いを調べていったりした。（写真③④）



（写真③ 物との反応を調べるＮ児）



（写真④ 濃さによる反応の違いを調べる子供）

洗剤が成分によって使用場所を区別しなくてはいけないのは汚れを一番とかしやすいからだと思っていたのですが、成分の中にふくまれる塩酸、水酸化ナトリウム水溶液を使って物をとかす実験をして、洗剤にふくまれる成分が汚れだけではなく、本体(汚れのついていない物)までとかしてしまっては困るためだとわかりました。
成分によって、酸性、アルカリ性、中性があるのにはおどろきました。

（資料② 活動後のＮ児の感想）

このときに持ち寄った身近な物とは、洗浄剤の注意書きに書かれた「金属製品、塗装品、紙・布・木・コルク製品、獣毛製品の洗浄には適しません。」という内容から、自分が選んできた物であった。

> N児．塩酸は主に金属と反応して、水酸化ナトリウム水溶液は植物性の物や毛糸などに反応しています。つまり、塩酸が入った洗剤は金属でできた鍋などには使えなくて、水酸化ナトリウムが入った洗剤は毛糸を使ったセーターなどには使えないのだと思います。

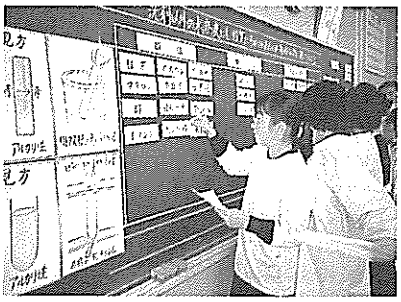
実験後の交流において、N児は実験の結果と洗浄剤に書かれた注意書きの内容とをつなげて、考えを述べることができた。

また、活動後の感想には自分の見方や考え方を見直し、使う目的についてとまとめている。（資料②）

次に、物との反応の違いから洗浄剤の性質に違いがあることに気づき（資料②）、他の洗浄剤の種類を調べた後に身の回りにある水溶液の性質についても調べて仲間分けを行っていった。（写真⑤）



（写真⑤ 身の回りの水溶液を調べるN児）



（写真⑥ 結果を交流する子供たち）

身の回りにある物の性質などはほとんど気にしたことがなかったのですが、ある薬品を加えることによって何性かがすぐにわかるので、性質調べがおもしろくなりました。酸性、アルカリ性は人体に悪いのではないかという思いこみがあったせいか、身の回りによくある水溶液では中性が多いと思ったのですが、結果は酸性が一番多くびっくりしました。

（資料③ 活動後のN児の気付きと感想）

このときに持ち寄った身近な水溶液は、子供の生活経験から飲み物や調味料が主であった。

> C全．酸性の水溶液が多いね。
> C１．アルカリ性が少ないのは体に悪いからかな
> C２．だけど、アルカリイオン水は体にいいと聞いたことがあるから違うんじゃない。
> N児．洗浄剤にも手肌に悪いと書かれていたりしてるから、酸性でも体に悪いんじゃないかな。

実験後の交流において、N児は身の回りの水溶液に酸性が多いことに容易に気付く事ができた。しかし、どうして、酸性が多いのかについてははっきりとした説明ができなかった。（写真⑥）

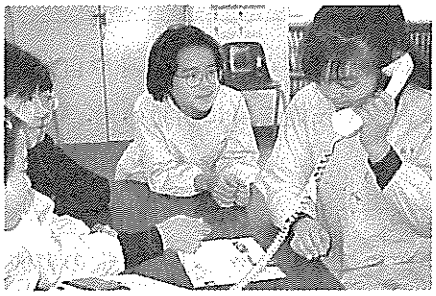
考察２　ラベルに書かれた注意書きを確かめる活動で、N児は「なぜ、石に使ってはいけないと書かれているのか」「なぜ、セーターの洗浄には適さないのか」「なぜ、金属製品には使えないのか」といった疑問から、それぞれ身の回りにある物と反応させて調べている。はじめ子供は資料②にあるように「洗浄剤が成分によって使用場所を区別しているのは、汚れを一番とかしやすいから」と考えています。しかし、実験を通して「洗浄剤に含まれる成分が汚れだけでなく本体までとかしてまっては困るためだ」と書いていることから、実験を通して自分なりの見方や考え方を見直し、生活上の洗浄剤の使い分けについても納得できていると考えられる。さらに「洗浄剤の他にも身の回りには酸性やアルカリ性の水溶液があるにちがいない」と考え、身の回りにある水溶液を使った仲間分けの活動へと連続していくことができた。N児は、ジュースや醤油といった家庭にある水溶液をフィルムケースに入れて持ち寄り、リトマス紙やＢＴＢ溶液を使って調べていきながら酸性・中性・アルカリ性の仲間分けを行っている。子供は資料③にあるように「身の回りによくある物の性質などはほとんど気にしたことがなく」「人体に悪いという思い込みから身の回りによくある水溶液には中性が多い」と思っていました。それが活動後に感想から、身の回りには酸性の水溶液が多いことに驚き、自分の生活的知識を見直して水溶液に対する見方や考え方をつくりかえていくことが分かる。

生かす段階．生活に生かす活動を計画、実践する活動（８～１０／１０）

この段階でのねらいは、自分の生活の中での水溶液の利用を見直し、学習してきたことを生かして応用・

発展できる内容を取り出し、自ら活動の計画を立てて実行することである。

そこで、N児たちはこれまで気にも止めなかった洗浄剤づくりに興味を示し、せっけんづくりについてメーカーの方に電話で取材している。(写真⑦) 他には、酸性とアルカリ性が互いに打ち消し合うのであれば、生活の中でもバランスよく酸性とアルカリ性を混ぜて捨てれば、環境に悪い影響が無いことが明らかになると考えて実験に取り組む子供もいた。また、いつでも液性が見分けられるように身近なもので指示薬はつくれないか調べる子供もいた。(写真⑧⑨)



(写真⑦ せっけん作りを取材する子供たち)

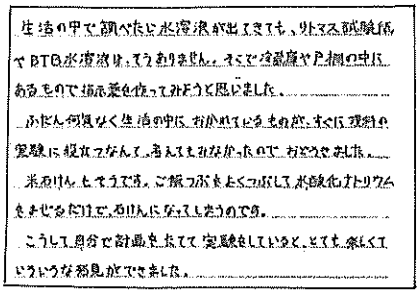


(写真⑧ 中和して調べる子供たち)



(資料⑨ 植物の汁から指示薬をつくる子供)

考察3　学習してきたことを生かした自分なりの自由研究を仕組んだことで、子供たちは自分の見方や考え方を生かして、環境に対する影響を考えたり身近な水溶液をさらに調べていくといった活動を生み出すことができた。特にこの段階では、子供の自由な発想と計画をもとに自分なりの追究ができたことによって自分の考えや方法に自信を持ち、資料④にあるように達成した喜びを味わうことができたと考えられる。



生活の中で調べたら水溶液が出てきても、リトマス試験紙でBTB水溶液は、そうありません。すぐに家庭や身近の中にあるもので指示薬を作ってみようと思いました。

ふだん何気なく生活の中にあるものが、すぐに理科の実験に役立つなんて、考えもしなかったので、おどろきました。

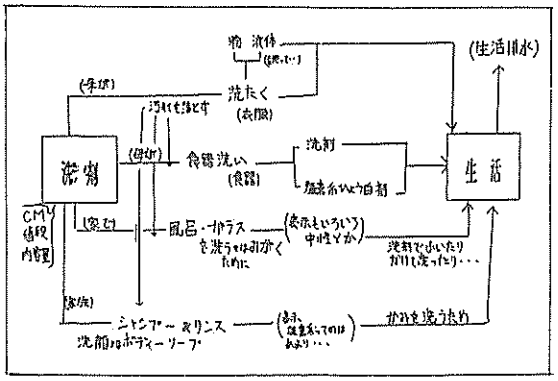
米のとぎ汁でできる、ご飯つぶをよくつぶして、炭酸水ナトリウムをまぜるだけで、石けんになるなんてふしぎです。

こうして自分で計画を立てて実験をしていると、とても楽しくていろいろな発見ができました。

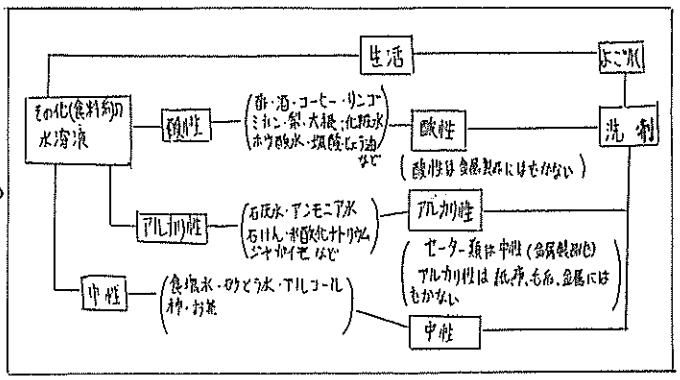
(資料④ 学習の最後に書いたN児の感想)

(6)　全体考察

具体的な生活経験の再体験から、子供たちに水溶液に対する自分の見方や考え方をとらえさせることができた。また、身の回りにある物や水溶液を使って納得した追究を行ったことは、子供たちにこれまでの見方や考え方を見つめさせ、生活を科学的に見ていく態度を身に付けさせることができた。このことは、学習の終わりに書かせた概念地図において、洗浄剤の使い分けと水溶液の仲間分けを性質によって総合的につなげて考えられるようになっていることからも分かる。その変容から、子供が生活の中の水溶液の利用についての生活的知識を見直して日常の生活経験に裏付けられた科学的な見方や考え方に再構成していることが分かる。(資料⑤⑥)



(資料⑤ 見出す段階でのN児の概念地図)



(資料⑥ 生かす段階でのN児の概念地図)

今後は、概念地図の比較を行って子供自身が自分の見方や考え方の変容をより意識できるようにし高まった喜びを味わえるようにしていきたい。また、活動が複線化することから、一人一人の評価を的確に行うようにして、子供の認識の過程を科学的に分析できるようにしていきたい。

身近な社会や自然に進んでかかわりを深める生活科学習

── 人との継続的なふれあいを重視する年間計画の作成 ──

生活科部　　藤　木　寿美枝

1. 本校の考える生活科の目標

> 具体的な活動や体験を通して、自分と身近な社会や自然に進んでかかわりながら、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。

本校の生活科の目標においては、自分と身近な社会や自然に進んでかかわりをもとうとする子供の育成を強調している。かかわりをもつということは、身近な社会や自然を客観的にとらえるのではなく、自分がその中でどのようにあればよいかを考えることである。そこで、本校ではこれをさらに進め、日常的にも身近な社会や自然と自ら積極的にかかわっていこうとする子供を育てることをねらいとしている。さらに、学習によって得られた関心や、態度及び気付きなどを次の学習に生かし、日常的にも学習が生活のなかで生かされ継続していくことを重視している。

2．主題の意味と重要性

(1)　主題の意味

身近な社会や自然に進んでかかわりを深めるとは、身近な社会や自然が自分自身にとってもつ意味に気付き、身の回りにある事象をもう一度見直し、自分なりの思いをもって調べたり、考えたり、表現したりして自分の生活をよりよき方へ変えていこうとすることである。

例えば、自分とのかかわりで社会をとらえるとは、学校や社会の様子が分かるというだけでなく、そこに生活する者としてよりよく生活できるようになることである。このように、身近な社会や自然に進んでかかわるということは、よき生活者としての自分がどのようにそれらとかかわるかということでもある。したがって、このことは、自分の役割や自分の行動について考え、自分の判断で行動できる生活者を育てる上で意義があると思われる。

(2)　めざす子供の具体的な姿

a　身近な自然や社会とのかかわりに興味・関心をもち、自ら活動しようとする子供

自分でめあてをもち、進んでその解決に当たろうとする子供。外から与えられたものではなく、自分の興味・関心に支えられた自分の思いを果たすために、進んで活動しようとする自発性をもった子供。

b　仲良く助け合って、粘り強く活動する子供

こうすればできるのではないかと、頭と心を働かせ、友達と協力しながら最後まであきらめずに追求しようとする協調性と持続性をもった子供。

c　自分がかかわった事柄や人との結びつきを大切にし、それを自分の生活の中に生かそうとする子供。

自分がかかわった地域の人と親しくなったり、地域のよさを感じたり、地域を大事にしたり、さらには、楽しい生活を考えようとするような子供。

(3)　内容の考え方

内容構成としては、学習内容の基礎的な10の具体的な視点は変えないが、人とのかかわりを深めていく

ことをこれまで以上に大切にして教材化する。これは、自分の身近な人々がどう社会や自然とかかわっているかを体験させることを通して、子供たち自身にも社会や自然とかかわることの大切さを学ばせることができるためである。また、人とのかかわりを通すことによって、その後の継続した学習への発展が期待できると思われる。

3．副主題について

(1) 副主題の意味

人との継続的なふれあい活動とは、子供が自分の生活でかかわっている人や自分の生活圏に居住している人、具体的には、家族や友達、近所の人あるいは、地域で働いている人などと共に活動したり、その人たちの活動を調べたり、その人たちの考えを聞いたりすることを繰り返し行っていく活動である。

人々の活動の背景となっているそれぞれの生き方を自分に照らし合わせたとき、身近な社会や自然とのかかわりが明らかになってくる。例えば、公園に咲いている花はどんな人の手によって保護されたり、楽しまれたりしているかという人とのかかわりを探索することにより、自分は花にどうかかわっていけばよいかに気付くことができる。

そして、このような一連の活動を繰り返し行い継続していくことによって、新しいより価値高いかかわりへとかかわりの質が高まっていくと思われる。

(2) 人との継続的なふれあいを重視する年間計画作成の考え方

年間計画作成にあたっては、次の3点を考慮した。

① 人との継続的なふれあいを重視する

生活科の各単元の中で、できるだけ多く人とふれあう場面を設け、人を通して社会や自然とのかかわりを学ばせたい。このためには、人とのふれあう機会が一度だけでは不十分であり、何度も継続的にかかわっていくなかでその人の考えや見方などに親しめると思われる。

【人との継続的なふれあいを大切にした活動とかかわりの変化】

	で あ う	ふ れ あ う	ふ か め る
子供の思い	おもしろそうだなやってみたいな	そんな考え・やり方もあるのか	もっとおもしろくしよう
学 習 活 動	対象に出会い、自分なりの思いや願いをもつ	対象に働きかけ、豊かな体験を生み出す活動	自分なりの工夫を取り入れた活動
か か わ り	対象への興味・関心に基づく能動的かかわり	五感を通して感じる体感的かかわり	活動を通して生み出した個性的かかわり

② 身近な社会や自然へのかかわりが広がり、深まるような人とのふれあいを支援する

地域には、様々の世代の人や特技の持ち主や職種、あるいは考え方の人たちがいる。この人々と活動を共にすることによって、新たな視点を見いだしたり、新たな活動を生み出したりすることができるようにしたい。

【身近な社会や自然へのかかわりが広がり、深まるような人】

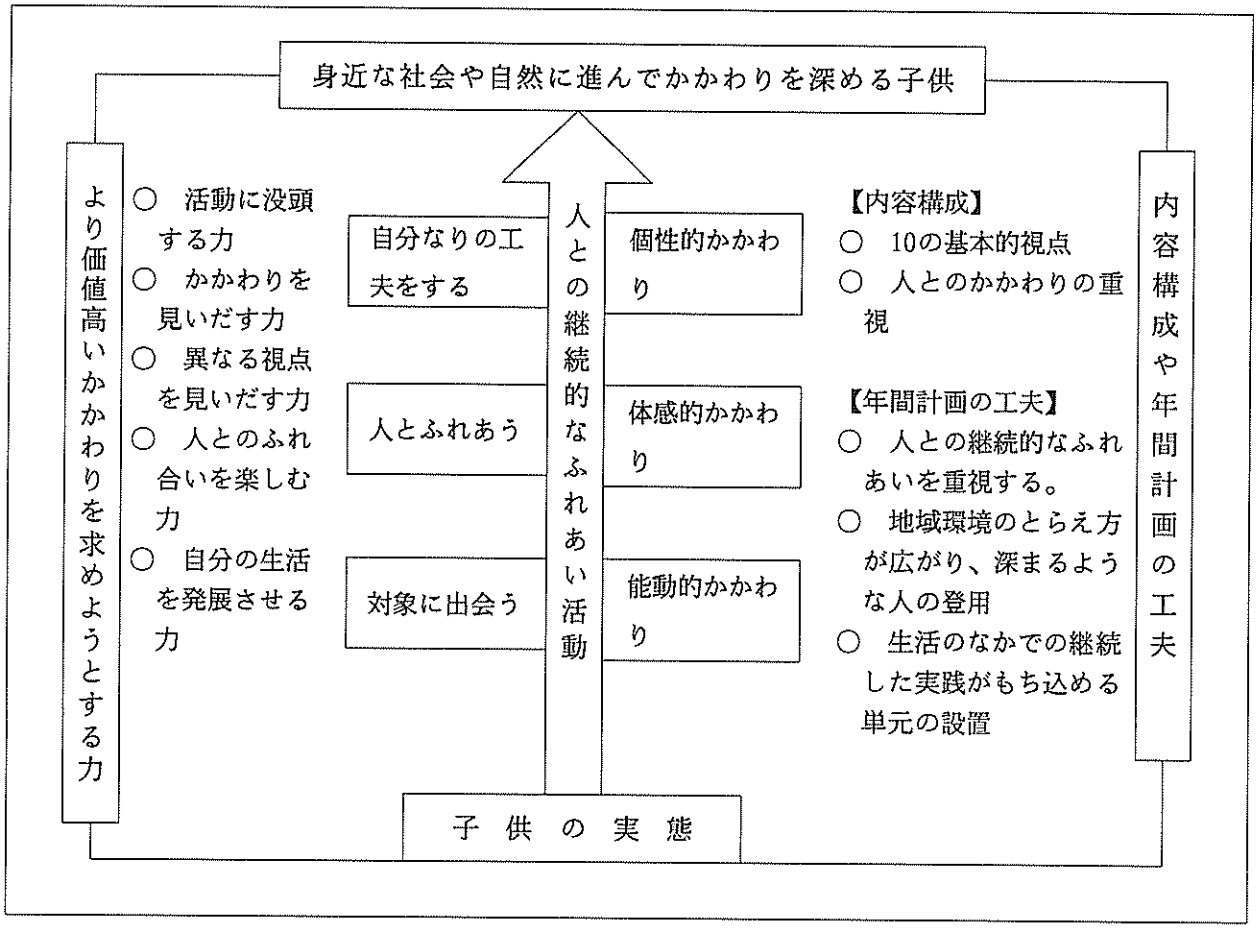
- 地域に居住し、幼いときからその地域で遊んできた人
- その地域で生産・販売などに携わっているあるいは携わっていた人
- その地域で行われる地域活動に携わっているあるいは携わっていた人
- 異年齢の人

③　内容配列

○　一度行った活動が日常生活で繰り返されていくうちに自分なりの意味付けがなされ、それをもう一度学習の場へもち帰れるように活動の発展を計画し単元を配列する。

○　自分の身近な人から、地域の人へと目が向けられるような活動を行えるように単元を配列する。

4．構　想　図



5．指導の実際と考察（次頁参照）

6．研究のまとめ

人との継続的なふれあいを重視する年間計画を立て、それを実施することにより、子供たちにかかわり方の変化が現れてきた。

4月当初の子供たちは、顔見知りの友達もほとんどなく、こころもとなげな状態であった。このような子供たちと人との継続的なふれあいを重視した生活科の学習を行うことにより、子供たちは自分のまわりには、家族や友達を始め自分を大切にしてくれる人がたくさんいること、そしてその人々が自分と同じようによりよい生活を送ろうとしていることに気付いてきた。

このような人への信頼感や共感のもと、この人たちはどんな願いをもち、どんな考え方をしているのかということに興味をもち始めた。そして、自分のまわりにいる人々の社会や自然とのかかわり方を自分と比べ、自分にないところや関心がもてるところは積極的に取り入れようとする姿がみられた。このため、身近な社会や自然に対するかかわりも以前とは異なり、より自分の生活の向上を目指すかかわりへと変化していった。

＜参考文献＞

『生活科の理論と方法』中野重大　1993　東洋館出版

『生活科と低学年カリキュラム』水越敏行・吉本 均　1993　ぎょうせい

5．指導の実際と考察

(1) 単元名　遊び名人にチャレンジしよう（第１学年）

(2) 年間計画作成における本単元の位置づけ

本単元は、地域のお年寄りに冬の遊びを教えてもらい、自分たちなりにそれをもっと自分たちもお年寄りも楽しめるように作り変えてお年寄りを再び招き、自分たちが作った遊びを一緒に楽しむことをねらいとしている。遊びを通して、異年齢の方とのかかわり方を学ぶ単元である。

さらに、この単元は、これまで春、夏、秋と遊んできた西公園での冬の遊びの一環である。また、家族、友達、学校の職員、地域の人とかかわりをひろげてきた子供たちにとっては、前単元でかかわってきた社会福祉協議会の婦人部の方々とともに、地域の老人会の方々とのふれ合いが期待できる単元でもある。

(3) 目　標

① 地域の遊び名人とかかわり、地域に伝わる遊びを楽しむとともに、それらをもとに遊びを工夫して作ることができる。

② 地域の遊びを調べたり、知っている人に尋ねたりしてこれらの遊びを楽しむことができる。

(4) 計　画（約11時間）

ねらい	学習活動	配時
○ お年寄りに、冬遊びを教えてもらいめあてを作る。	1．冬の西公園でお年寄りと一緒に冬の遊びを行う。	3
	(1) 春・夏・秋と遊んできた西公園で、冬を見つける。	①
	(2) 西公園での遊びを近くのお年寄りに教えてもらう。	②
	・ねんこ　・山茶花の葉笛　・坂をつかった紙飛行機	
○ 教えてもらった遊びをもとにお年寄りと一緒に遊べる遊びを工夫する。	2．習った遊びをもとにお年寄りと一緒に遊べる冬の遊びを工夫する。	3
	(1) お年寄りと一緒に遊べる遊びを作り出す。	②
	・ぼうさし　・ぼうたおし　・ぼう投げ　・松ぼっくりゴルフ	
	(2) 考えた遊びがお年寄りと楽しく遊ぶ遊びになっているか確かめながら遊ぶ。	①
	めあて お年寄りと一緒に冬の遊び大会を開こう	
○ お年寄りを招いて一緒に遊び、冬を楽しむ。	3．お年寄りを招待して冬の遊び大会を開く。	3
	(1) 冬の遊び大会の準備をする。	①
	・遊び道具を作る。　・招待状を書く。	
	(2) 冬の遊び大会をする。	②
○ お礼状を書いたり、遊びを表現したりする。	4．お年寄りへの手紙を書いたり、教えてもらった遊びや自分たちで作った遊びを次の1年生に伝える「遊びたまてばこ」を作ったりする。	2
	(1) お礼の手紙を書く。	①
	(2) 教えてもらった遊びや自分たちで作った遊びを、絵本や紙芝居などにし、「遊びたまてばこ」につめる。	①

(5) 指導の実際

第２・３時　始めのかかわりをもつ活動

＜ねらい＞　この時間は、お年寄りに西公園での冬の遊びを教えてもらい、自分たちが考えた以外にも西公園では、これまで色々な遊びがあったことに気付くことをねらっている。このために、地域の老人会の方々を招き、自分たちが小さい頃西公園で遊んだ遊びを子供たちに伝えてもらう。

＜子供の反応＞

【全体】前時、冬の西公園で遊びながらも、冬は虫もいないし、今までの遊びはできないし、もっと楽しい遊びはできないかなという声があがった。そこで、お正月の遊びをおそわった老人会の遊びの名人先生たちにまた遊びを教えてもらおうということになった。（写真１・２）

名人先生方は、山茶花の葉を使った葉笛や笹舟、坂の多い西公園を利用して紙飛行機、わき道付近に生えている楠のわき芽を利用して作った先のとがった棒を投げて行う「ねんこ」を教えてくださった。

【Ｉ児】Ｉ児は、一枚の葉から澄んだ音色が出ることに驚き、この葉笛で「ちょうちょ」の曲がひかれた名人に尊敬の眼差しをむけていた。そこで、どんな葉が笛になるかを聞いたり、唇の当て方を聞いたりしていた。

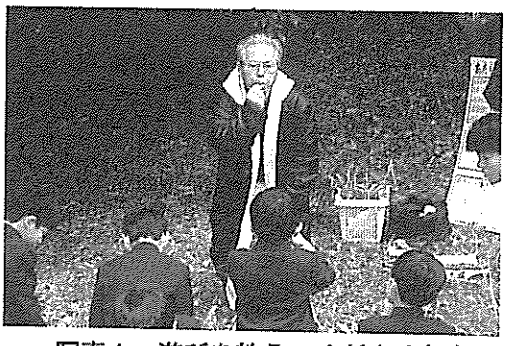


写真１　遊びを教えてくださる名人



写真２　名人に遊びを教えてもらう

きょう、にしこうえんでめいじん先生とあそびました。いちばんたのしかったのは、かみひこうきです。さかの上からとばすとよくとびます。わたしは、そのひこうきのつくりかたをしりませんでした。つくりかたはかんたんでした。

あらつフェスタによびたいです。そして、いっしょにおみせをまわりたいです。

資料１　子供の感想１

きょう、めいじん先生とにしこうえんであそびました。あそびをたくさんおしえてもらったので、わたしはめいじん先生にバラのみつをすうことをおしえてあげました。「あまいね。おしえてくれてありがとうね。」といってくれました。めいじん先生は、小さいころは、けん玉とちゃんばらばっかりしていたそうです。めいじん先生は、すごくたのしそうな顔をしていました。わたしも、すごくたのしかったです。また、めいじん先生といっしょにあそびたいな。

資料２　Ｉ児の感想

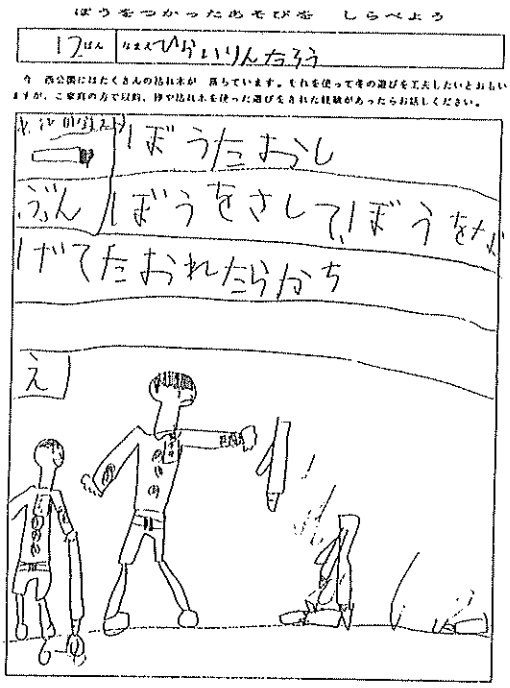


写真３　調べた棒遊び

考察　お正月の遊び以来２度めの名人先生を、今回の西公園の遊びに招待したので、子供たちは、顔見知りになっていたせいもあり、大喜びで名人先生を出迎えることができた。

今回は、西公園での遊びということで、「自分たちも春・夏・秋と西公園での遊びを経験してきているので、よけいにどんな遊びを教えてもらえるのだろうと意欲が高かった　教えてもらった遊びは、今まで自分たちが気が付かなかった木の葉や木の枝、また秋には自分たちが滑り降りていた坂で飛行機を飛ばすという知恵を教わり、また新しい西公園の魅力を発見したようであった。名人とのかかわりの様子では、前回お正月遊びのときは、最初なかなか近寄り難く、遊びを良くご存知だから教えてもらおう。という反応を示していたのに対し、今回は、資料１・２の子供の感想１にみられるように自分の生活のなかに名人が

入ってくれたらいいなという感想を抱くようになってきている。

第４・５時　　名人のことを考えながら自分たちの遊びを作り出す活動

＜ねらい＞ここでは，教えてもらった遊びを基に、お年寄りと一緒に遊ぶ工夫をすることをねらいとしている。このために、前時お年寄りと遊んだときのことや自分のおじいちゃんやおばあちゃんにきいたこと（資料３）などを重ね合わせて、お年寄りと一緒に遊ぶときのことを考え、自分たちなりの遊びを工夫した。

＜子供の反応＞

【全体】教えてもらった遊びのなかで工夫して名人にチャレンジできそうなものは「ねんこ」だろうということになり、これなら西公園に枯れ木がたくさんあるからみんなで考えられそうだということで「ねんこ」を応用・工夫した遊びを考えだした。子供たちが考え出したのは、次の遊びであった。

・ぼうさし（棒を地面にさして、さされば１点）・ぼう投げ（遠くに飛ばした方が勝ち）
・ぼうたおし（王様の棒を倒したほうが勝ち）・ぼうあて（目標物を決めて置いて、当たったら得点）
・まつぼっくりゴルフ（棒をゴルフのクラブにみたて、松ぼっくりを穴に入れるゲーム）
・パチンコ（又分かれした枝にゴムを付けて、的をねらう）（写真３・４・５）

ぼくたちは、ぼうまとあてを作りました。木のえだでへいたいを９人作り、そのうしろにふとい木で王さまを作りました。ブーメランみたいにまがった木を見つけて、その木を王さまめがけて投げます。この木の名前は「ブーメラじゅう」といいます。めいじん先生がつかれないように走ってあそぶゲームでないものをぼくたちは考えました。

資料４　子供の感想２

【Ｉ児】Ｉ児は、自分のおばあちゃんが「遠くまで歩くのは大変」と言われたことを思い出し、そう歩かずに済む棒投げをすることにした。（資料４参照）



写真３　ぼうさし



写真４　棒　倒　し



写真５　パチンコ

考察　教えてくださった遊びの中から、遊びが発展変化しやすいものを選択するよう工夫できそうな遊びを選択させた。その結果出てきたのが「ねんこ」であり、棒をつかった遊びであった。棒での遊びとしては、棒を投げる、ころがす、さす、叩く、などの動作のあることを示し、その動作に応じた遊びの場を設定することによって遊びの創造を援助していった。この結果出た遊びが上記の六つの遊びである。さらに、お年寄りと楽しく遊ぶという観点を付け加えていった結果、お年寄りの気持ちや体のことを考えた遊びを考え出した。また、考えることによって資料５にみられるように名人への思いが高まっていった。

こんどでめいじん先生がくるのは、さいごだ。めいじん先生とどこかであいたいな。めいじん先生にあえなくなるのはさびしい。さいごだからすごくやさしくしたい。木のぼうもいっぱいさがさなきゃ。ぼくは、いっぱいみつけた。ほんとにめいじん先生とあいたいな。

資料５　子供の感想３

第９時　新しいかかわりを楽しむ活動

＜ねらい＞ここでは、名人先生と遊ぶために子供たちが考えた遊びを実際にお年寄りを招いて遊ぶ段階である。そこで、冬の遊び大会として、遊び大会にお年寄りを招待するようにした。こうして、主催者の立場に立つことによって、『自分だけでなく、お年寄りもともに楽しめる活動を工夫して作り出すことをねらいとした。

【全体】ここでは上述の６つの活動をコーナーとして、設定し、名人先生を迎えて冬の遊び大会を行った。各コーナーとも名人先生に遊びのルールを教えたり、順序を名人先生を先の方に入れたりして、名人先生を大切に扱いたいという気持ちを表していた。遊び段階に入ると、自分たちも遊びに夢中になり、名人先生は招待を受けた人であると同時に、子供たちの遊びの審判になったり、遊びのコーチになったりと大急がしであった。そんな名人先生の様子をみながら、子供たちは、お正月の遊びのときは、どこかよそよそしかった態度がまるで、自分のうちのおじいちゃんと遊ぶように、名人先生の話を聞いたり、接したりするようになってきた。

（写真６、資料６参照）

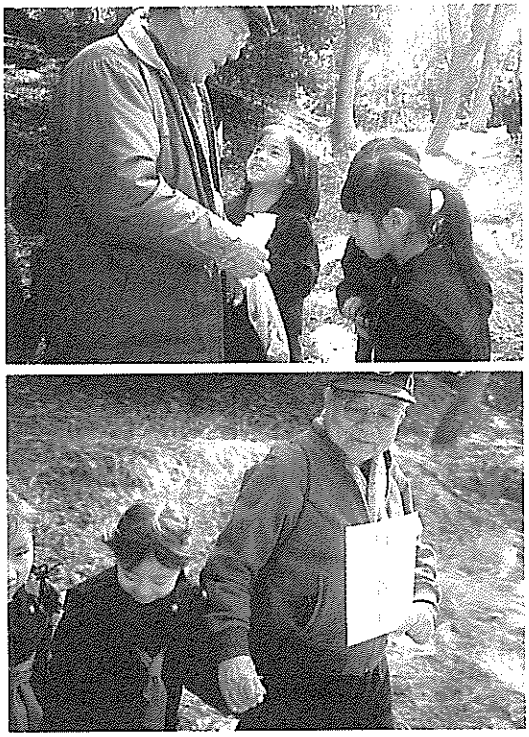


写真６　名人との遊び大会

きょう、名人先生とぼうゴルフをしました。わたしは20てん入りました。だけど名人先生はなかなか入りませんでした。ゴルフのあなが小さかったとおもいました。でも、つるとカメラとひこうきのおりがみをしょうひんにあげました。

資料６　子供の感想４

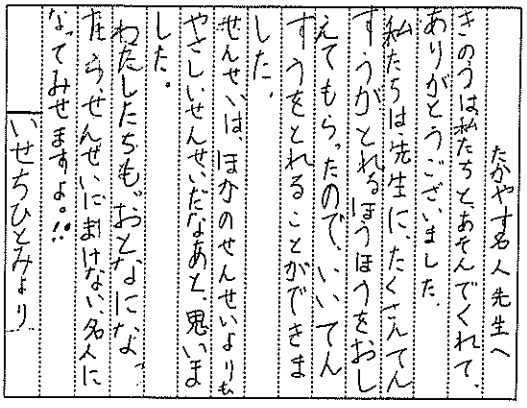
【Ｉ児】Ｉ児は、棒投げ班の班長になり、友達の遊びの世話をしたり、名人先生にルールを説明したりしていた。棒が落ちた地点の点数をお年寄りは聞こえにくいからと大きな声でいう姿もみられた。

考察　これが最後の名人先生との遊びということで、姿がみえたときから駆け寄っていく様子が見られた。これは、何回もかかわってきたことによって、名人先生への思いが変化していったことが伺える姿である。また、遊びも始めの遊びから、名人先生を意識することによって、楽しく遊びためには、自分たちがけんかをせずに楽しむことが名人先生も嬉しいことだということに気付き、ルールが分かりやすい遊びに変わっていった。

(6)　全体考察

子供たちは、これまで自分たちだけで遊んできた遊びを名人先生と遊ぶという場を設定することによって、これまでと違う遊びの素材を発見したり、違う遊び場が目に入ったりするようになった。また、遊びの作り方もただ自分がおもしろければ、人はそれに従うだろうという考えから、人にはそれぞれ体調や好みがありやりたい遊びも違うのだということや、人と遊ぶときには遊び方がみんなにはっきり分かるものであること、なかよくすることが楽しい遊びにつながることなどの対人的なルールに気付いていくことができた。

人とのかかわりかたとしても、お正月の遊びのときには、教えてくださる人といった存在であったものが、回数を重ね名人のことを考えた遊び作りをすることによって、名人個人のことを知りたいと思うようになったり、自分と同じことに喜びを感じる人であることに気付いたりして、親しめる存在であることを実感していった。このため、遊びを共にする人といったとらえ方でなく、一緒に生活していけたら楽しいだろうな。また、会いたいなあといった愛情へと子供の思いが変化していったことが伺える。



資料７　名人先生へのお礼の手紙

自分のよさを生かし豊かに自己表現する音楽科学習

── 創造的な音楽活動を中核とした年間計画の作成 ──

音楽科部　津本修一

1．本校の考える音楽科の目標

> 創造的な音楽活動を通して、音楽に対する豊かな感性と音楽性の基礎を培うとともに、生涯にわたって音楽を愛好する心情を育て、豊かな情操を養う。

子供たちをとりまく音楽的環境は、非常に多種多様になってきた。このようななかで、子供が自分と音楽との関わりをどのように自分の生きる力につなげていくかが、これからの音楽科教育における重要課題になってくる。新音楽科では、特に、低学年表現科での表現活動の経験を生かしつつ、子供一人一人が音楽を味わおうとし、表現していこうとする主体的な態度を育てていくことを大切にしていくようにする。そのためには、子供が音楽を通して自分のイメージや心情を自己表現していくことができる創造的な音楽活動をこれまで以上に重視していく必要がある。このことは、子供が主体的に音楽と関わりをもとうとする態度につながり、生涯にわたって音楽を愛好し、音楽を生活のなかに取り入れ、生活を潤いあるものにしていこうとする情操豊かな人間形成に大きく寄与するものであると考える。

2．主題の意味と重要性

(1)　主題の意味

①「自分のよさを生かし」について

「自分のよさを生かす」とは、子供自身が主体的に音楽に関わりをもち、自分の感じた音楽のよさや表現への思いを自分の音楽表現に生かして、より音楽活動を楽しもうとする態度を示したものである。子供一人一人が音楽活動において「自分のよさを生かす」ためには、一人一人の音楽的経験に基づいたそれぞれの感じ方を認め、それを自分の表現へ生かしていくことができるような指導が大切になってくる。

②「豊かに自己表現する」について

音楽で「自己表現する」とは、子供が自分のもった感じ・思い・願いなどを音楽に託して表現することである。この音楽での自己表現を豊かにしていくためには、子供自らが感じ、考え、表現していくという創造的表現のプロセスを経験させていく必要がある。そのためには、副主題であげている創造的な表現活動が活性化されるような音楽活動が望まれる。この創造的な音楽活動を豊かに経験していくことによって、子供たちは、音楽を通して「豊かに自己表現する」能力や態度を身につけることができると考える。

(2)　めざす子供の具体的な姿

新音楽科でめざす子供の具体的な姿は、おおきく次の3点から述べることができる。

① 音楽をすすんで聴いたり演奏しようとする、音楽との関わり方を身につけた子供。

② 自分の表現意図に合った表現手段（楽器・音素材など）や表現方法（唱法・奏法・音楽的要素などの工夫）について、思考・判断・選択できる子供。

③ 自分の音楽的な経験の積み重なりによる充実感や音楽的な成長を実感し、それを喜べる子供。

これらの3点は、音楽を単に芸術としての対象にするのではなく、自己と音楽との関わり合いを積

極的にもとうとする態度を具現化していくうえで重要な意味をもつ。

(3) 内容の考え方

新音楽科における内容については、基本的には、「Ａ表現」及び「Ｂ鑑賞」の２領域で構成するが、従来の内容「Ａ表現」(4)「音楽をつくって表現できるようにする」を次に示すように現行の２項目を４項目に増やすことにより、自己表現に関わる内容の充実を図るようにする。

［現行の「(4)音楽をつくって表現することができる。」の内容（中学年）］

ア．旋律や音の組み合わせを工夫して表現すること。 イ．即興的に音を選んで表現すること。

【新音楽科の「(4)音楽をつくって表現することができる。」の内容（３－６年）】

ア．自分のイメージをもとにリズム・旋律・和声などをつくって表現すること。 イ．簡単な詩やことばの情感や抑揚を生かして旋律をつくって表現すること。 ウ．自分のイメージをもとに自由な発想で即興的に表現すること。 エ．音そのものの音色や響きを生かして、重ね方や組み合わせを工夫して表現すること。

3．副主題について

(1) 副主題の意味

「創造的な音楽活動」とは、子供が楽曲やテーマから抱いたイメージや心情をもとに表現を工夫して歌ったり、演奏したり、リズムや旋律、和声などをつくって表現したりすることなどを指している。このような子供を育てていくために、これからの音楽科教育においては、次のような点に留意した学習活動を中核に学習指導を行っていくことが大切であると考える。

ア．子供のイメージや心情を十分にもたせる手だてを工夫する。

イ．自己表現活動にかかわる内容を含み込んだ活動構成の工夫をする。

ウ．日常的に音楽活動ができる時間的・空間的・物的な環境をつくる。

エ．自分と音楽の関わりや音楽的成長を実感できる自己評価活動や音楽活動の記録を適宜行う。

(2) 創造的な音楽活動を中核とした年間計画作成の考え方

年間計画作成にあたっては、子供自ら音楽に関わりをもち、その関わりからもった自分のイメージや心情を自己表現していこうとする主体的な態度を育てていくことをめざしている。そこで、このようなめざす子供像を具現化していくために、できるだけ子供自らの感じ取りを大切にし、一人一人の個性を生かせるような創造的な音楽活動を重視していくことを基本に据えながら、次のような視点から、年間計画作成を行っていく。

① 教材化おける視点から

・季節や学校行事などにちなむ子供の生活に身近な素材を教材化する。

・子供の表現の特性や表現技能の実態に応じて、柔軟に楽曲の編曲をおこない、子供の実態に密着した教材化をおこなう。

・表現と鑑賞の一体化を図るため、鑑賞曲のテーマを素材とした歌唱曲または器楽曲への編曲を工夫し、題材に組み込む。

② 題材構成における視点から

・表現および鑑賞の２領域については、表現テーマなどで有機的に内容を関連させた題材構成も年間計画時数の半分程度行うようにし、鑑賞領域の学習で培ってきた感性が、表現領域の学習にも生きてはたらくようにする。

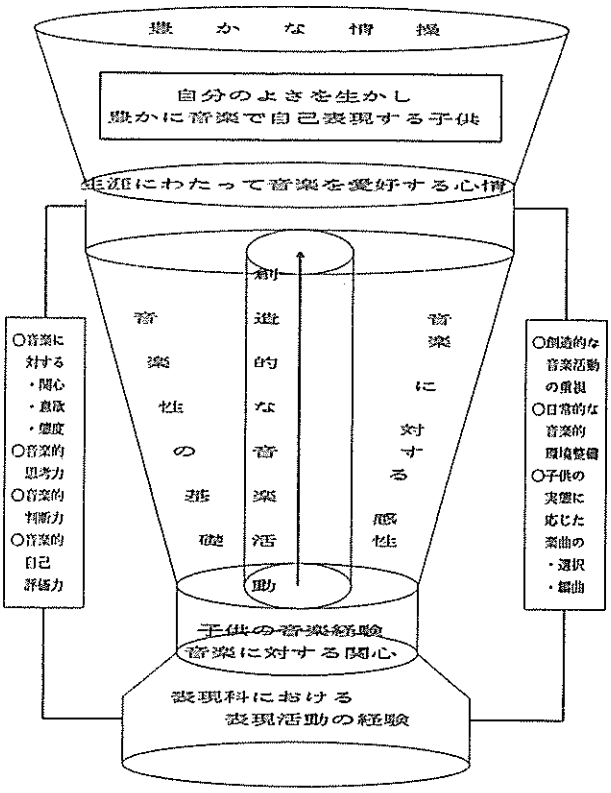
・子供一人一人の音楽的な感じ方や表し方を大切にする指導計画を題材構成に位置づける。

③ 題材の年間計画の配列における視点から

・季節や学校行事、他教科との時期的な関連を図り、子供の創造的な表現活動の積み重ねを重視した題材の配列を行う。

・子供一人一人の表現の発表を目的とした題材を設定し、カリキュラム上に位置づけ、より主体的な音楽活動を活性化していくようにする。

4．構　想　図



5．指導の実際と考察（次頁参照）

6．研究のまとめ

(1) 研究の基本的な構想について

これまでの創造的な音楽活動に関わる題材構成としては、主題による題材構成の考え方から指導内容を達成させるために、どのような表現テーマ（表現のイメージの媒体）に出会わせるかという考え方がほとんどであった。しかし、音楽による自己表現は、まず子供の思い（心情・イメージ）が出発点であり、そこからどのような音楽的な様式・手法で表現していくかを子供自身が選択していくことができるようにしていくことが大切であると考え、研究を行ってきた。そこで、創造的な音楽活動の展開を可能する題材開発として実証授業「ミュージックシアター『三年とうげ』をつくろう」を行った結果、題材の仕組み方や表現方法の選択のさせ方がだんだん明らかになってきた。

(2) 研究で明らかになってきたこと

○子供の音楽表現へのイメージをもたせるために有効な素材を子供の学習した国語教材などに求めたことは、子供の興味・関心を引き出し、他教科との関連性を図る一つの視点になった。

○音楽活動へのオリエンテーション的活動として児童による「モデル表現ビデオ」を教材として活用することは、活動の見通しをもたせるとともに、表現の多様性に気づかせていくうえで有効に働いた。

○音楽づくりの活動において、①せりふの歌づくり、②旋律的なＢＧＭづくり、③効果音づくりの３つの表現手法を提示し、子供たちに選択させたことは、子供の表現主題を生かすことや個人的な表現技能に応じた表現活動を可能にすることにつながった。

(3) 今後の課題点

○子供一人一人の音楽経験や表現技能を生かせるような創造的な表現活動を可能にする題材構成のあり方の究明。

○「音楽をつくって表現する」新内容項目による題材開発とその学年の系統化および年間計画への位置づけ。

5．指導の実際と考察

(1) 題材名　ミュージックシアター「三年とうげ」をつくろう（第3学年）

(2) 年間計画における本題材の位置づけ

本題材は、物語文を素材にして、登場人物の様子や心情、動き、背景の様子などからイメージしたことを音や音楽で（効果音・ＢＧＭ・せりふの歌）表し、物語の朗読によって順次表現していくものである。舞台装置や演技を伴わない点、即興的性格が強い点においてオペレッタとは異なる。

系統的な位置づけからみてみると、6月題材「おはやしをつくろう」でのリズムや音を中心とした即興表現活動と１０月題材「わたしの花におくる音楽をつくろう」での短い旋律づくりの発展的・統合的な題材として位置づけている。すなわち、6月題材の内容(4)－イを中心とした学習と１０月題材の内容(4)－アをを中心とした学習を技能的なベースにおきながら、他教科との関連を図ったり、発表会という目的的な表現活動を仕組むことにより、これまでの音楽活動の経験を生かしていくことができるように配慮した。また、本題材は、3月題材「ものがたりをげきに」で、さらに造形活動なども採り入れ、より総合的な表現活動へと発展していくように考えている。

(3) 目　標

① 物語「三年とうげ」の場面の様子や登場人物の心情からイメージしたことを即興的に効果音や簡単な旋律をつくって表現することにより、音や音楽での自己表現活動の体験を豊かにすることができる。

② ミュージックシアター「三年とうげ」づくりを通して、音や音楽に対する感性と音楽をつくって表現する楽しさを味わうことができる。

(4) 計　画　（約6時間）

ね　ら　い	学　　習　　活　　動	配 時
○「美しい三年とうげ」に出会い、物語を題材にした音楽表現のおもしろさに気づく。	1．ミュージックシアター「三年とうげ」づくりへの意欲と見通しを立てる。	2時間
	(1) 歌唱曲「美しい三年とうげ」に出会い、ミュージックシアターづくりに意欲・関心をもつ。	①
	・「三年とうげ」の印象的なところの話し合い。	
○ 音楽づくりの手法の参考となるモデルビデオを鑑賞する。	・歌唱曲「美しい三年とうげ」の歌唱	
	(2) ミュージックシアターづくりの活動の見通しを立てる。	①
	・表現モデルビデオの鑑賞	
	・ミュージックシアター計画カードづくり	
○ 一人一人の選択した表現場面のイメージにもとづいた効果音／ＢＧＭ／せりふの歌づくりをする。	2．ミュージックシアターづくりをする。	3時間
	(1) 表現方法別コースで効果音、ＢＧＭ、せりふの歌づくりをする。	②
	・音選び／楽器の選択	
	・効果音づくり／ＢＧＭづくり／せりふの歌づくり	
	・音づくりカード、音階譜などへの記譜	
	(2) ミュージックシアターのためしの活動をする。	①
	・全体を通した表現と交流活動	
	(3) つくった音楽の見直しと練り上げをする。	課　外
	・音楽の練り上げと音づくりカード、音階譜の付加修正	

○ 発表会を行い、ミュージックシアターづくりの成就感・達成感を感得する。	3．ミュージックシアターの発表会とビデオ鑑賞会を行い、題材のまとめをする。 ・物語の朗読に合わせた表現の発表 ・ビデオ鑑賞会とメッセージカードの交換	1時間 課　外

(5)　指導の実際

「つかむ段階」（第1時－第2時）

ここでは、国語科教材文「三年とうげ」をもとにしたミュージックシアターづくりの活動への意欲づけと活動の見通しをもたせることをねらいとしている。そこで、まず、「三年とうげ」（資料①）のあらすじや国語科の授業で読み取った登場人物の心情や感想について話し合わせ、導入歌唱曲「美しい三年とうげ」（自作曲＝資料②）に出会わせ、物語と音楽の結びつきに関心をもたせるようにした。次に、物語を題材にした効果音や旋律づくりの様子の「モデルビデオ」を鑑賞させることにより、ミュージックシアターづくりへの活動の見通しをもたせるようにした。

〈資料①〉国語科教材「三年とうげ」


三年とうげ

ある所に、三年とうげとよばれるとうげがありました。

あまり高くない、なだらかなとうげでした。

春には、すみれ、たんぽぽ、ふでりんどう、とうすみれ、がまずみ、ぬるでの葉、とうからふもとまでさきみだれました。れんげつつじのさくころは、だれだってたの鬼の出るほど、よいながめでした。

秋には、かえで、がまずみ、ぬるでの葉、とうげからふもとまで美しく色づきました。白いすすきの花もころは、だれだってため息の出るほど、よいながめでした。

三年とうげには、昔から、こんなすいつたえがありました。
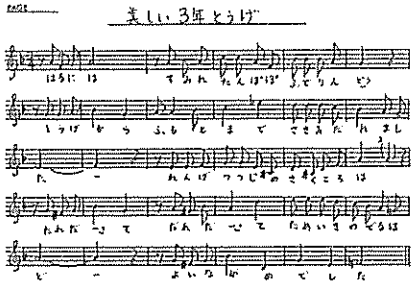
【子供の反応】

子供たちは、すでに国語科の授業で物語のあらすじや登場人物の気持ちについては、読み取ってきているので、特に印象的な場面やおもしろかったところなどについて発表していた。

C.1「おじいさんが『ころころころりん。』とわざところげるところがおもしろかったです。」

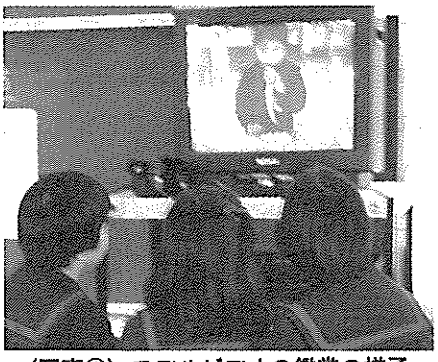
C.2「『三年とうげでころぶでない。三年とうげでころんだならば…。』というところがリズムがあって楽しかったです。」

〈資料②〉歌唱曲「美しい三年とうげ」



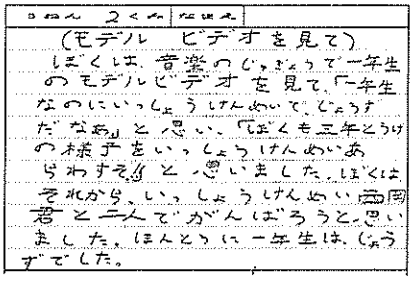
また、歌唱曲「美しい三年とうげ」に出会った子供たちは、その歌詞内容が、本文の「春には、すみれ、がまずみ、ぬるでの葉」という出だしの部分がそのまま使われていることに気づいて、関心をもったようで、美しい三年とうげの様子を想像しながら気持ちをこめて歌っていた。

次に、1年生が演奏する同じく国語科教材文「おむすびころりん」を題材にした効果音づくりや即興的な旋律づくりの様子を録画した「モデルビデオ」を鑑賞した子供たちは、資料③の感想に見られるように、自分たちも「三年とうげ」で、効果音や旋律づくりをやってみたいという意欲をもったようである。



〈写真①〉モデルビデオの鑑賞の様子

〈資料③〉モデルビデオの鑑賞後の感想


（モデルビデオを見て）

ぼくは、音楽のじゅぎょうで一年生のモデルビデオを見て、「一年生なのにいっしょうけんめいで、じょうずだなあ」と思い、「ぼくも三年とうげの様子をいっしょうけんめいあらわすぞ」と思いました。ぼくはそれから、いっしょうけんめい同じ君と二人でがんばろうと思いました。ほんとうに一年生は、じょうずでした。

「つかむ段階」の活動を通して、子供たちは、ミュージックシアターづくりの活動への意欲づけと活動の見通しをもつことができたと考えられる。

考　察

既習の国語科教材文「三年とうげ」を題材にとり、歌詞内容を本文からとった歌唱曲「美しい三年とうげ」を導入曲として用いたことは、上述の子供の反応からうかがえるように、本題材への関心を

もたせることにつながったようである。これは、国語科の授業の学習において、物語の内容のおもしろさや登場人物の心情を読み取ったりしている経験がイメージを豊かにしていくうえで効果的にはたらいたためであると考える。また、本校１年生の表現による「モデルビデオ」を視聴させ、「ミュージックシアター計画カード」に記入させたことは、身近でしかも１年生のモデルということから表現への自信と意欲をもたせるとともに表現内容や表現方法についてのアウトラインを思い描かせ、表現活動に対する見通しをもたせることに有効にはたらいた。

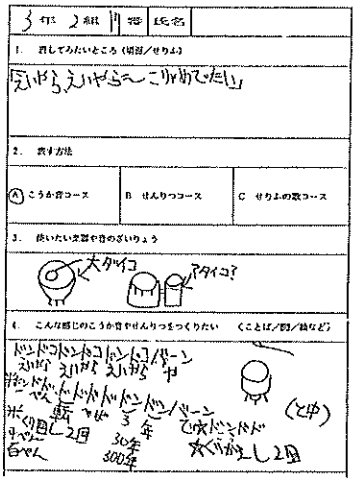
「あらわす段階」（第３時－第５時）

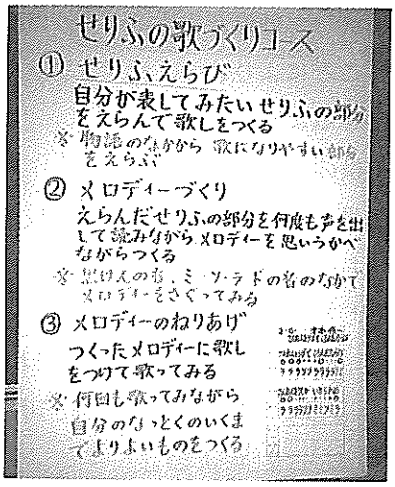
ここでは、子供がイメージした表現内容や表現方法をもとに、実際に音や音楽による表現をつくりあげていくことをねらいとしている。そこで、まず、音や音楽による表現を大きく表現方法別に(a)効果音づくり、(b)ＢＧＭづくり、(c)せりふの歌づくりの３コースに分け、それぞれに資料⑤のような「音楽づくりヒントボード」をもとに、その手順や留意点についてオリエンテーション的な指導を行い、音・音楽づくりに取り組ませていくようにした。次の音・音楽づくりについては、子供に表現内容や表現方法についてあらかじめ把握しておき、モチーフ例の提示、記譜の仕方、演奏法などについて個別指導にあたっていくようにした。

【子供の反応】

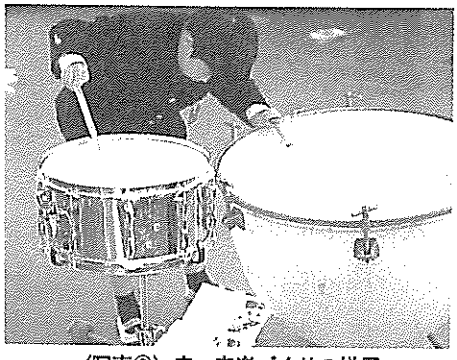
子供たちは、前段階でつくった「ミュージックシアター計画カード」をもとに、①音選び／楽器選び　→　②効果音づくり／ＢＧＭづくり／せりふの歌づくり　→　③音づくりカード／音階譜などへの記譜というステップで音・音楽づくりに取り組んでいった（写真③）。そして、ある程度それぞれの表現ができたところで、「三年とうげ」のストーリーにそって、順次各自のつくった音・音楽を表現する「ためしの活動」を行った。子供たちは、それぞれの表現箇所で物語の朗読にストップをかけ、自分たちがつくった効果音／ＢＧＭ／せりふの歌を表現していった。同じ箇所での表現が重なったところは、演奏する順番を決めて表現していくようにした。子供たちは、「ためしの活動」の後、意見交換を行い、自分たちの音・音楽の修正や付加を行い、楽譜を書き換えたり、演奏したりして表現を練り上げていった。資料⑤－⑦は、それぞれのコースで子供のつくった音・音楽である。

〈資料④〉ミュージックシアター計画カード



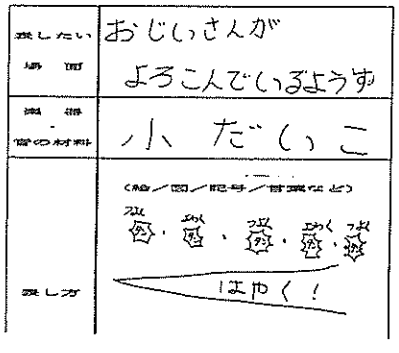


〈写真②〉音楽づくりのヒントボード

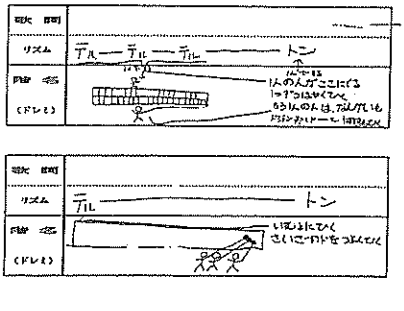


〈写真③〉音・音楽づくりの様子

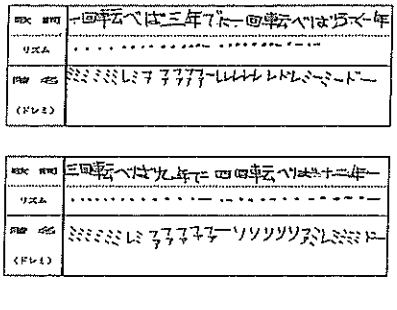
〈資料⑤〉よろこぶおじいさん（aコース）



〈資料⑥〉おじいさんが転んだところ（bコース）



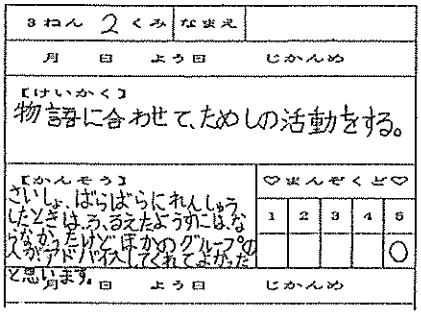
〈資料⑦〉教えてくれるトルトリ（cコース）



考　察

音や音楽による表現を大きく表現方法別に３つのコースに分け、「音楽づくりヒントボード」をもとに、活動の手順や留意点について指導を行ったことは、子供たちが主体的に音・音楽づくりに取り組むことにつながったようである。これは、「ヒントボード」のプロセスがこれまでの音楽をつくって表現する活動の道筋を基本的にふまえていることから、子供たちが過去の経験を生かしながら表現活動に取り組むことができたことにその理由であると考える。

〈資料⑧〉「ためしの活動」の感想


３ねん　２くみ　なまえ
月　日　ようび　じかんめ
【けいかく】
物語に合わせて、ためしの活動をする。
【かんそう】
さいしょ、ばらばらにれんしゅうしたときは、うまくえんそうできなかったけど、ほかのグループの人がアドバイスしてくれてよかったと思います。
♡まんぞくど♡
1　2　3　4　5
○
月　日　ようび　じかんめ

また、「ためしの活動」を行ったことによって「ミュージックシアター」の全体像をとらえ、表現の練り上げの視点をつかむことができたことが、資料⑧の子供の感想からうかがえる。

「あじわう段階」（第６時／課外）

ここでは、「ミュージックシアター三年とうげ」の発表会を行うことにより、題材のまとめをし、音楽をつくって表現する活動の成就感・満足感を味わわせることをねらいとした。

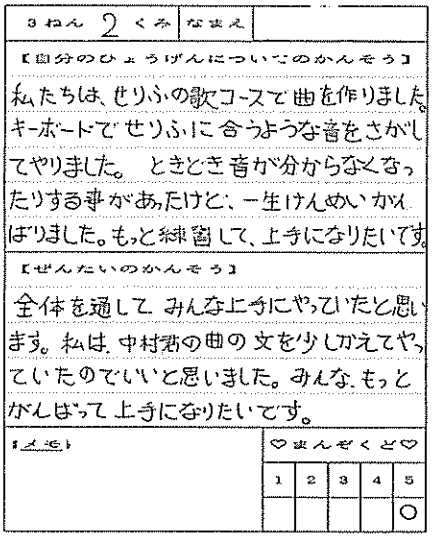
【子供の反応】

発表会では、「ためしの活動」と同様に、物語のストーリーにそって、順次つくりあげてきた表現を展開していった（写真④）。「ためしの活動」からずいぶん練り上げられたもので子供たちも満足そうであった。事後、そのときのビデオ鑑賞会を行い、子供たちは、資料⑨のような感想をまとめていった。



〈写真④〉ミュージックシアター発表会の様子

〈資料⑨〉ミュージックシアター発表会の感想


３ねん　２くみ　なまえ
【自分のひょうげんについてのかんそう】
私たちは、せりふの歌コースで曲を作りました。キーボードでせりふに合うような音をさがしてやりました。ときどき音が分からなくなったりする事があったけど、一生けんめいがんばりました。もっと練習して、上手になりたいです。
【ぜんたいのかんそう】
全体を通して、みんな上手にやっていたと思います。私は、中村君の曲の文を少しかえてやっていたのでいいと思いました。みんな、もっとがんばって上手になりたいです。
♡まんぞくど♡
1　2　3　4　5
○

考　察

題材のまとめとして、発表会およびビデオ鑑賞会を行ったことは、資料⑨の子供の感想文からもうかがえるように、ミュージックシアターづくりの成就感・満足感を味わわせるうえで、有効であったことがうかがえる。また、ビデオ鑑賞会で友達の表現を鑑賞することにより、音楽表現の多様性や一人一人の表現のよさについて感得することができた。

(6)　全体考察

これまでの音楽科においても物語を題材にした音楽づくりには、たくさんの実践例があった。しかし、表現科で大切にしている①子供一人一人の表現主題（イメージ）を大切にする、②表現方法に選択性をもたせる、という点を大切にしたミュージックシアターは、子供の主体的な活動や成就感・満足感の感得している姿から、表現科から音楽科への橋渡し的な役割を果たし、新たな表現様式としての価値性は立証できたと考える。また、このような創造的な表現のプロセスを大切にした題材を年間計画のなかに位置づけたことは、新音楽科で目ざす自分のよさを生かし、音楽で豊かに自己表現していく子供を育てていくうえで、子供の音楽作品の多様性、活動性ある音楽活動の様子から有効であったことがうかがえる。さらに、本題材までの子供たちの音楽をつくって表現する活動の経験をもとに表現手法を選択的に取り扱ったことは、子供一人一人の表現意図や表現技能を生かしていくことができたことから、年間計画への配列の仕方として、適切であったと考える。

【参考文献】「自己表現活動の楽しいプラン集」小原光一編著　明治図書

自ら家庭生活を創造する家庭科学習

── 家族とのかかわりづくりの活動を位置づけた年間計画の作成 ──

家庭科部　小　嶋　悦　子

1．本校の考える家庭科の目標

> 家庭生活に関する実践的な活動を通して、日常生活に必要な情報を生かすとともに、自分の生活に対する見方・考え方を養い、家族の一員として家庭生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる。

家庭科においては、生活環境の変化に主体的に対応し、生活上の課題を解決して自ら家庭生活をつくりだしていく力を身につけることをねらいとしている。これは、生活環境科の発展として、環境構成者としての自分が家庭生活や家族にどのような役割や責任をもてばよいのか、どのような見方・考え方をもてばよいのかを自らの生活環境に働きかける中で考えさせていくものである。

昨今の社会のめまぐるしい変化は、子供たちの家族や家庭生活にも大きな変化をもたらしてきている。その中でも、核家族化や少子化など、家族形態の変化が進み家庭内の人間関係がうすれてきたことがあげられる。その結果、子供たちは、いままで家族を通して学んでいた家庭生活の役目や家族の一員としてのあり方を学ぶ機会を失ない、家庭科学習の中で意図して取り上げなければ、気づきにくい状況になっている。また。このような生活環境では、自分の生活のありかたや見方・考え方に疑問を抱かず、家族の一員として家庭生活をよりよくしていくために自ら働きかけようという意識をもてないままでいる。

このような現状を考えた時、家族や自分を取り巻く人々との豊かなかかわりを通して家庭生活の意味や家族のありかたについて考え、自ら家庭生活に働きかけることの価値を味わわせていくことが大切である。

そのために、実践的・体験的な活動を通して人々の思いや願いに触れ、そこで、多様な情報を収集・処理し、状況に応じた活用のしかたや心情豊かな判断や実践ができるようにしたい。このような中で、子供たちは、自らの家庭生活に対する見方・考え方を養うとともに知識や技能を習得し、家族や環境構成者の一員として存在する価値を見いだして家庭生活に働きかける喜びを感得していくことができると考える。

2．主題の意味と重要性

(1)　主題の意味

自ら家庭生活を創造するとは、それぞれの子供が思いえがく家庭生活の現実化を図っていく過程の中で、自分のよさを生かしながら家庭生活への新たな見方・考え方・かかわり方をつくりだしていくことである。このことは、自らを家庭生活に対する受動的な立場の一員としてではなく、家族を構成しているひとりの実践者として、その役割を担う能動的な立場にいることを自覚し、家庭生活をつくっていく主体者としての生き方を求めていくことである。

そのために、家族や友達・地域の人々などとの豊かなかかわりを通して自らの家庭生活の創造に生かすことのできる情報を集め、どの情報が自分の今の生活に生かされ、人とのかかわりを豊かにするか多様な観点から判断すること（情報収集・処理能力）、人とのかかわりを重視した実践を行い家庭生活をよりよくすること（情報活用能力）が大切である。具体的には、次のような資質や能力が必要である。

①　家族の工夫や苦労、努力から自分の課題を感じ取りその関係を把握する力

②　課題解決に必要な情報を家族や友人、地域の人々から収集し、家庭の状況に合わせて活用する力

③　新たな見方・考え方・かかわり方から意思決定し、実践する力

④　新たな家族や家庭生活へのかかわり方から自分の成長を評価する力

(2)　めざす子供の具体的な姿

本主題でめざす子供の姿としては、家族とのかかわりや家庭生活に対する見方・考え方・かかわり方の広がりや深まりを意識し、自分が家庭生活をつくっていく主体者として家庭生活に働きかけ、役立つ存在であることを自覚していくことである。具体的には、

①　家庭生活の実態から家庭生活の役目や家族の一員としての自分の役割を考えようとする姿。

②　自分の思いえがく家庭生活をイメージし、そこに迫るために情報を収集したり試したり、確かめたりして創意工夫している姿。

③　自分の新たな家族へのかかわりは、家族の自分へのかかわりを変化させることに気がついている姿。

④　自分の成長や家族の一員として家庭生活に役立った自分を実感している姿。

(3)　内容の考え方

上述の主題より次の2点を大切にしていきたい。

①　家族にかかわる意味や家族の一員としての立場や役割を考えていくという視点の重視

②　家族との人間関係を中核としての内容の位置づけ

①　家族にかかわる意味や家族の一員としての立場や役割を考えていくという視点の重視

これからの家庭科において、家族にかかわる意味や自分の立場や役割を考えさせていくためには、従来の住居領域における「家族との生活」を食や被服領域の中でも取り上げ、家族との生活における家族関係から総合的に自分の生活のあり方を見直していく必要がある。そのために、「家族の生活と食物」「家族の生活と被服」という領域を設定していく。

②　家族との人間関係を中核とした内容の位置づけ

内容は家族にかかわるという視点から家族関係を中核に位置づける。そして、家族との関係から衣生活や食生活、住生活の内容を取り出し家族や家庭生活を総合的に関連しあったものとして構成していく。さらに、豊かにしていく視点から生活環境科の健康・安全、消費・生産を継続・発展して取り上げ、環境保護・管理、製作・調理の視点と関連させて構成していく。家族との人間関係を中核に位置づけることで従来の内容の削除、第5学年や第6学年の内容の統合化や領域の関連化を図っていく。

ア、家族関係　：家族の一員としての自分の立場や役割を考え、家族に協力して実践しようとする態度を育てる。

イ、健康・　安全　：家族と健康に安全に生活するためにはどのような生活のあり方がよいのか調べ実践していく態度をそだてる。

ウ、消費・保護・管理：消費生活や環境の保護・管理に関心をもち、家族との生活をよりよくしていくための工夫や判断を行い、家庭実践しようとする態度を育てる。

エ、製作・調理　：家族との生活を健康に豊かにしていくために調理や製作に関心をもち、自分なりの工夫や改善をおこない、実践する態度を育てる。

3．副主題について

(1) 副主題の意味

「家族とのかかわりづくり」とは、自分の生活の基盤である家庭生活をともに構成している人々との関係を今以上によりよく、豊かに、心のふれあうものにしていくために、家族からの情報収集を生かして自分なりの工夫を行い、家族に働きかけていくことである。

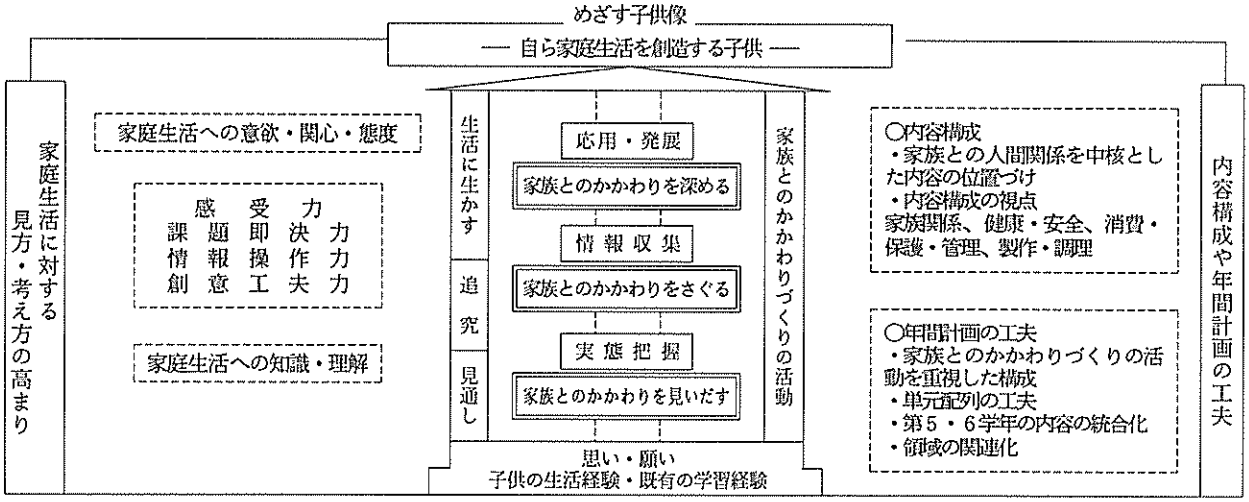
「家族とのかかわりづくりの活動」とは、家族の一員としての立場や役割を意識して学習の目的意識を持つことのできる活動である。この活動では家族や家庭生活と自分との関係を意識させるとともに、家族の一員として家族にかかわる意味を子供に感じとらせていく。また、自分の課題に対してどのようなかかわりがよいか自分なりの見方・考え方をもって意思決定し、実践していく活動である。実践することで家族との関係をより高めることができる。

(2) 家族とのかかわりづくりの活動を重視する年間計画作成の考え方

「家族とのかかわりづくりの活動を重視する年間計画」とは、家族の一員としての役割や責任を感じとって、家庭生活に働きかけていく活動が中核にすえられた計画である。

単元の配列においては、家族の中の一員として自分はどのように生活しているか家庭生活全般をとらえるために3領域を関連した単元から入る。そして、家族に対してどのようなかかわりが必要かを具体的に追究していくために各領域へ入り、次に各領域で学んだことを生かして、総合単元へ、また各領域へと配列する。特に指導の発展性や系統性を考慮し、季節、学校行事、他教科などとの関連を図っていく。さらに、内容を関連させた単元や第5・6学年の内容を統合することで子供が自分の実態に応じた学習活動を選択し、それぞれのよさを生かした学習の展開ができるように工夫していく。

4．構　想　図



5．指導の実際と考察（次頁参照）

6．研究のまとめ

家族との人間関係をつくっていくことを中核にそれぞれの領域の内容を関連付け、2個学年の内容を見通した学習を設定してきたことは、子供の活動の選択の幅を広げるとともに、自分と家族がどのようなかかわりをもっていたのか、あるいはもとうとするのかを意識させていく上で有効であった。また、家族の一員としての自分の立場や役割を考えようとする姿を見とることができた。これは、家族との人間関係を中核にすえたことで、家庭生活に関する情報を家族との関係の中から収集し、その結果を家族にかえしていくというサイクルが生まれ、今まで以上に子供たちと家族とのつながりが豊かになっていったからであるといえる。家族とのかかわりづくりの活動は、自らの活動を通して家庭生活に対する基礎・基本を身につけさせ、家庭生活を創造する喜びを味わわせる上で有効である。

参考文献　「家庭科授業の創造」　柳　昌子・甲斐純子編著　建帛社　１９９５

5．指導の実際と考察

(1) 単元名 「わたしの自慢の住まい方大作戦Ⅰ」（第5学年）

(2) 年間計画作成における本単元の位置づけ

本単元は、家族との人間関係を重視する立場から「家族の生活と住居」領域の導入の学習として位置づけ、他の領域の内容と関連づけて2個学年の学習内容を見通して統合したものとして教材を準備した。特に、自分なりの住まい方の工夫を家族とのかかわりの中で追究することで、整理整頓や掃除のしかたができるだけでなく、家族との生活を望ましい環境作りという視点から見直し、家族とのふれあいのあるなごやかな場づくりを意識し、よりよい家庭生活をつくっていく喜びを味わわせることができる。

(3) 目 標

① 思いえがく住まい方にせまるために家族にかかわりながら意欲的に情報収集したり実践したりすることによって家族の一員としてのあり方を考え、家族にかかわる喜びを味わうことができる。

② 住まい方を清潔さや安全性、快適さや機能性などの観点から考え、自分の家庭生活にあった工夫を行い、住まい方に対する見方・考え方を高めることができる。

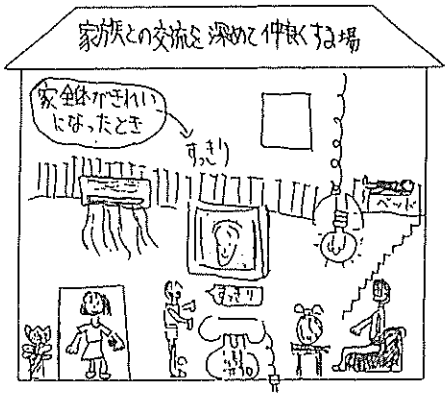
(4) 計 画（約11時間）

ね ら い	学 習 活 動	配 時
○ 住まいのもつ働きについて考えるとともに自分が思いえがく住まい像を明らかにする。 ○ 家族の思いや自分の思いから学習課題を決める。	1．住まいの役割について考え、自分が思いえがく住まい像を表現するとともに家族の住まい方の工夫から自分の学習課題を設定する。 (1) 住まいの役割について話し合い、自分の思いえがく住まい像を表現する。・家族と快適に楽しくすごす場 (2) 家族の住まい方の工夫を交流するとともに自分の課題を把握する。 ・家族の住まい方の工夫の交流から家族の思いを考える。	3時間 ① ② 7時間
○ 住まい方の工夫にむけての学習計画をたて情報収集し、家庭の状況に応じた工夫をおこなう。	2．自分の課題を解決するために文献調べや家族や友達からの情報収集を行い、自分なりの住まい方を追究する。 (1) 学習計画を立て確かめ活動にむけて情報収集する。 ・家族の住まい方の工夫の仕方をくわしく調べる。 (2) 確かめ活動を通して家庭への生かし方を考える。 ・家庭と似た状況の場所で情報収集したことを確かめる。 ・自分なりに家族が快適に楽しく住まう工夫を発表する。 ・色を変え、物を飾ると雰囲気がかわることを紹介する。 ・家族から情報収集したことのよさを紹介する。	③ ④
○ わたしの自慢の住まい方の実践を交流し、家族の役にたった喜びを味わう。	3．家庭実践する。 4．自分の実践の結果を発表しあい家族にかかわっていくよさを表現する。 ・家族とのかかわりの高まりを意識する。	課外 1時間

(5) 指導の実際

① 家族とのかかわりを見いだす活動……１／１１時

＜ねらい＞ 自分たちが住まいに対しどのような思いや願いをもっているか明らかにし、住まいの役割や住まい方について考え、これからの学習に対する目的意識を感じ取ることがねらいである。そのために、整理・整頓された居間で家族が楽しく過ごしているという状況を設定し、自分の住まい方を明らかにする劇での表現活動と、思いえがく住まい像を表現する活動を仕組んだ。



〈資料① Ｔ児が表現した住まい像〉

（反応） 教師が場の状況を説明し、子供が役割を演じた。

Ｔ：ここはみなさんの家の居間です。家族が集まってきました。きれいに飾られてきちんと整理された部屋です。

Ｃ１（弟の役）：きれいで気持ちがいいな。だれがきれいにしたの。ここで本でも読もう。

Ｃ２（父の役）：何を読んでいるんだい。父さんも新聞でも読もうかな。おっ花がいけてある。

Ｃ３（姉の役）：みんななにしてるの。ここいいね。わたしも本読もう。（本棚から本を取り出す）

Ｔ：しばらく家族のみんなは自由に居間ですごしました。そこにお客さんがやってきました。

Ｃ４（母の役）：いらっしゃいませ。こちらへどうぞ。（散らかっているのを見て）あら大変。みんなどうにかしてよ。

Ｃ１（弟の役）：ぼくじゃないよ。

Ｃ３（姉の役）：何いってんの。本を読んでそのままじゃないの。きちんと片付けなさいよ。父さんも早く。

子供たちは家族とのかかわりがみえる形で我が家の状況を劇化し、劇を見ている子供もそれぞれの自分の生活を想起しながら発言していった。そして、住まい像に住まいや住まい方に対する自分の思い・願いを表した。資料①の絵には「家族との交流を深めて仲良くする場」という言葉が書かれ、きちんと整理された空間や家族が楽しく生活している様子がえがかれている。

考 察

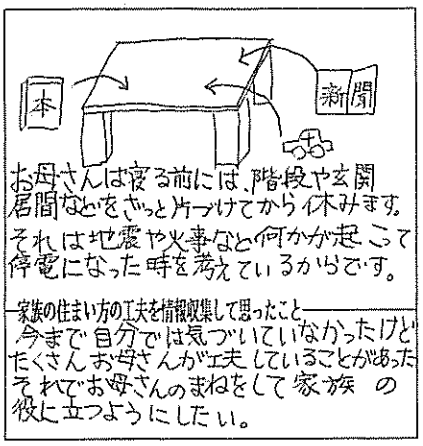
単元の導入を家庭生活における自分と家族との関係から住まいの内容の視点（整理・整頓や清掃、だんらん、空間の利用のしかた、雰囲気づくりなど）をとらえることができるように居間の場を工夫して設定し、自由に劇化させたことは、Ｃ１やＣ３の言葉にもあるように整理・整頓された部屋の気持ちよさや家族のだんらんの様子に目をむけさせることができた。また、Ｃ３の姉の役の言葉にあるように住まいがもつ働きや自分や家族の役割を自分の日常生活と関連させて、意識させることができた。さらに、資料①から自分の住まいをきれいにしたいという思いや気持ちよくすごしたいという住まい方に対する願いを子供自身が感じとったことをみとることができる。このように第５・６学年の「家族の生活と住居」領域の学習内容を大きく包含して家族とのかかわりを意識した住まい方への思いを表現していく活動を仕組むことは、家族の一員として自分はどのように住まい方にかかわっていくべきか考えさせていくきっかけとなった。また、これらのことは、これからの学習への目的意識を感じ取らせ今後の子供主体の学習をつくりだしていく上で効果的である。

② 家族とのかかわりを見いだす活動……２～３／１１時

＜ねらい＞ ここでは、家族にかかわりながら情報収集することを通して、それぞれの家族が快適で住み心地のよい住まいになるように多様な工夫をしていることや家族の思いを見いだし、自分の課題を家族とのかかわりの中で再度見直していくことがねらいである。そのために、それぞれの家族から情報収集したことの発表を通して気がついたことを交流し、家族の自分への思いを考えたり、自分の家族への思いを表現したりする活動を設定した。また、これらの活動を通して、住まい方にはそれぞれの家族なりのいろいろな方法があることやそのことを通して、住まい方の観点に気がつき学習の見通しがもてるようにすることをねらった。

（反応）Ｔ児は、家族のいろいろな住まい方の工夫を情報収集し、資料②のように家族の安全にくらすた

めの工夫をみいだしてきた。その時の交流の様子は以下の通りである。



<資料② T児の家族からの情報カード>

Ｃ５：家族は自分のアトピー予防のために毎日の掃除を念入りにしているそうだ。自分の見ていないところでしている

Ｃ６：私の母は家族が居心地がよいようにと花を飾ったり、時々部屋の雰囲気を変えたりしている。

Ｃ７：Tさんのように母さんは、物が倒れてこないように支えたりいらないものは整理したりしているよ。

Ｃ８：だにの発生を防ぐために天気のよい日は押入れを開けて風を通したりふとんをほしたりしているみたい。

Ｃ９：我が家は風呂場の窓を開けて風通しをよくしてかびの発生をふせいでいるよ。いろいろ考えてるんだね。

Ｃ５：タンスの中は物が取り出しやすいように丸めて入れる工夫をしているよ。僕がすぐぐちゃぐちゃにして困るって

Ｃ６：そういえば、季節がかわるころタンスの場所をかえたり、いままで置いてあったものを全部片づけて、他のをもってきたりしている。家族のみんながびっくりするんだ。大変だろうな。ぼくたちは気持ちがいいよ。

そして交流の後、自分の課題をつかんだ。子供達の課題はひとつではないが主になるもので分けると次の通りである。

児童の主な課題

課題	整理・整頓	清掃	模様替え	空間利用の仕方
人数	１６	１５	8	3

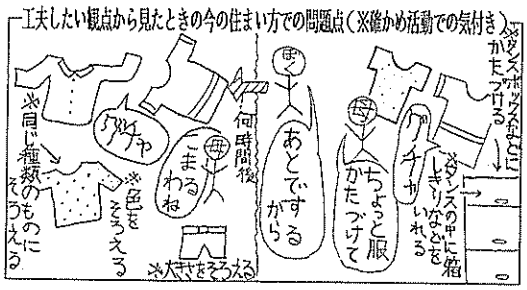
考　察

家族にかかわりながら家族の住まい方の工夫を情報収集したことは、資料②からもわかるように今まで当たり前と思っていた事柄に対し、家族が日頃から努力していることや自分は何もしないままであるという課題をつかませる上で有効であった。また、友達との交流は、Ｃ５，Ｃ６，Ｃ７のように健康、安全、空間の利用や雰囲気づくり等という観点から住まい方の工夫に気付かせることができた。この家族や友達からの情報収集は、家庭生活に対する新たな見方・考え方をもたせる上で有効であった。また、課題からも分かるようにこれからの学習における多様な活動の視点を生み出していくきっかけとなった。このような家族とのかかわりを見いだす活動の設定は、家族の工夫や苦労、努力や知恵に触れさせ自分と家族とのかかわりを考える機会となった。さらに、２個学年の内容を統合した観点を生み出しやすくし、従来より多様な活動へとつながっていった。

③　家族とのかかわりをさぐる活動……４～１０／１１時

<ねらい>ここは、自分なりの工夫を見いだすためにさらに家族や友達から情報収集し、家庭の状況に合わせた課題解決ができるようにすることをねらいとしている。そのために、どのように課題解決していくか計画をたて、自分なりの住まい方の工夫を追究していく活動を設定した。

（反応）まずT児は、家庭での状況をふりかえって絵に表現し、自分の課題をもっと明らかにした（資料③）。そこでは、特に「衣類が多く、ごちゃごちゃしている」ことに目をむけ家族とのかかわりの様子を表現している。そして、どのように解決していくか、家族からさらに情報収集した。（資料④）さらに、それを学校で確かめる活動をおこなった。ここでは、それぞれの子供が学校で試すことのできる場所として、家庭の状況と似ている場所を探し、情報収集したことを生かして活動した。T児は１年生のワークスペースの箱の中が整理されていないことをみつけ、ここをきれいに整理・整頓していく計画をたて活動した（写真①）。S児は、母親が居間を明るく模様替えしたいといっていたこと、自分も居心地のよい雰囲気づくりをしたいと考えていたことから模様替えをすることを課題とし、学校の殺風景な場所を選んで雰囲気のよい部屋にする活動を行った（写真②）。そこでは、いままで情報収集してきたことを生かして活動したり、友達と相談したり、その場に応じた方法を考えてみたりするなど状況に応じて活動する姿がみられた。そして、その結果、この活動を通して気がついたことを家庭の状況に置き換えて考え、赤ペンで資料③の図の中に書き込んだ。

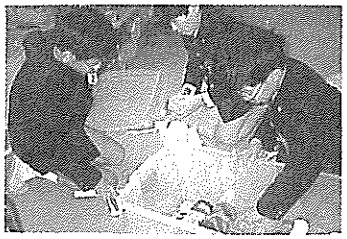


<資料③T児の家庭の状況図>

・我が家の状況
衣類が多くて　部屋がワークスペースなのでお母さんが注意するけど無視している。自分から部屋をきれいにしたい。

・家族に尋ねたり、本で調べたりしたこと
1.色をそろえる。
2.大きさをそろえる。
3.同じ種類の物をそろえる

<資料④T児のノート>



<写真①きれいにしよう>

全体交流して家庭生活への生かし方を考えた様子は以下の通りである。



<写真②模様替え活動>

T　：確かめ活動ではどんなことをしましたか。そこでどんなことがわかりましたか。

C８：ぼくはワークスペースで箱の中を整理しました。色や大きさをそろえるとよいことを調べていたのでやってみました。箱がいくつもあるので種類毎にわけたらいいと思いました。中も見えるので外からみてもきれいに見えるように整理しました。

C５：子供スタジオでじゅうたんのそうじをしました。母がじゅうたんは毛の流れに逆らってかけると毛の中に入っているごみがとれると言っていました。Kさんはおばあさんからしみには塩をまくといいと聞いてきたのでやってみました。しみはお湯でふいてみました。

C６：わたしは、相談室で応接セットを動かしたり、テーブルの上にカバーをかけたり、花をおいたり、季節を感じられるものを置いたりしました。友達といっしょだったのでその人の好みで置き方や色の使い方が違うことがわかりました。とても楽しかったです。

C９：ぼくは部屋の雰囲気を変えるためにどんな色にかえればいいか考えるために、部屋の模型をつくって家の居間と同じ状態をつくりました。そして、そこにいろいろな色紙を置いて見てどんな色が温かく感じられるか考えました。母から座布団の色を変えてみたらどうかという意見を聞いていたので、灰色のじゅうたんに合う色をさがしました。オレンジがあいました。

C10：家の食器棚がごちゃごちゃしているので、家庭科室の食器棚をつかって試しました。気がついたことは、整理する前に棚の中をまず掃除しないとすみずみが汚れているということです。

考　察

子供の交流の様子から、C５のように家族の工夫を生かして確かめたり、C８やC10のように状況に合わせて自分なりに工夫したりする姿が明らかになった。このように自分の課題にそって自分で計画させ追究させることは家族の苦労や工夫を納得させるとともに、実際にやってみることの大切さや自信をもたせていく上で有効であった。

④　家族とのかかわりを深める活動……１１／１１時

どこでどんなことをした	家族の言葉ほめたり教えてもらったりした事
12/8 自分で部屋のたなを(本)整理せいとんをした。	きれいになりすぎていて感動した本をとり出しやすいように本の位置も考えるともっといいよ。
12/9 居間を季節にあうようにざぶとんなどの色をかえてみた。	いつもとふんいきが違って気持ちがいい。それにざぶとんの色も赤だからあたたかい感じがするわね。
12/10 玄関がきたなかったのできれいにしてみた。	自分でも砂などをとるために新聞紙を使うときれいになったと思うお客さんがきた時びっくりするわね。

<資料⑤T児の実践カード>

<ねらい>家庭実践を通して実感したことを交流し、家族との関わりの深まりを味わうことがねらいである。

考察　T児の実践における家族からの言葉の記録を読むとTが生き生きと実践し、家族とかかわりを深めたことやそのことに喜びを感じている姿を見とることができる。特に、前時、友達との交流から得ていた玄関をきれいにするための工夫の実践は家族から「お客さんがきたらびっくりするとわね。」と認められている。このように、家族からの言葉を記録させたことは、子供たちの家族へのかかわりをさらに増やしていくことになったといえる。

(6)　全体考察

本単元は、家族との関係を重視して、領域を関連させ、第５・６学年の内容を統合した形で位置づけたことで、家族とのかかわりを豊かにしながら自分の住生活を望ましい環境へとつくりかえる姿をみとることができた。家族と豊かなかかわりをもたせることは自分の働きかけの価値を実感させ、よりよい家庭生活の創造に有効に働いたといえる。

主体的に運動にかかわる体育科学習

── 運動との一体感を味わう活動を重視した年間計画の作成 ──

体育科部　　佐々木　壮一朗　　笠　　宏照

1．本校の考える体育科の目標

日常生活に関連する運動経験や心身についての理解を通して、運動する喜びを味わわせるとともに、健康の増進と体力の向上を図り、生涯における健康で明るい生活を営む態度を育てる。

これまでの学校体育に課せられた役割は、一貫して心身の健全な発達と健康の増進である。特に、「発達刺激としての運動」が強調され、さらに、「人間形成としての運動」のあり方が強調され、社会的態度の育成が重視されてきた。これを受け、新たに強調されてきたのが「運動の楽しさや喜びを味わう活動」である。これからは、これらの考えを基本にしながら、自ら進んで運動に親しみ、日常生活を明るく楽しいものにできる態度を培うことが大切である。

運動は元来、楽しむためのものである。どの運動も自分自身の手で運動に親しんだり、合理的に実践したりすることで、子供の生活は潤いあるものになる。

このような生涯体育の考えを進める上で、①子供が運動を楽しいと感じ、主体的に運動にかかわる態度、②子供が学校は生涯体育の場であると同時に、学校外で運動を実践する基礎をつくるということの理解の2点が大切である。子供が運動とのかかわりを学ぶことなしには、生涯にわたって運動する主体にはなり得ないと考える。また、子供と運動とのかかわり方は運動の興味・関心や能力などの違いから多様であり、より望ましいかかわり方を追求していくことが重要となる。

2．主題の意味と重要性

(1)　主題の意味

主体的に運動にかかわるとは、子供が運動を対象化し、意欲的に動きに挑戦したり、新たな動きを発見したりして、運動に対する楽しさを味わうことである。

子供が運動を対象化するとは、子供が運動の特性（運動固有の価値）に気づき、運動とのかかわりにおいて自分自身をその運動の構成者として、自己を主張できる姿へ高めていくことである。すなわち、自己の目標や運動課題を明確に持ち活動することである。自分を伸ばしてやることは子供がより主体的に活動することである。

運動に対する楽しさとは、運動することで自分のもっている達成動機が満足され、その運動はよいものとして判断されたときに生ずる快の感情である。できなかったことがやっとできるようになったときの感激、全力を出しきって運動した後の爽快感、これらは運動の内発的な楽しさの代表である。また、この楽しさは、運動の場における様々な他者や運動と子供との一体感のなかから生まれる。

子供が運動とのかかわりを求め、応答的な状態になれば「やってみよう」「挑戦してみよう」という気持ちが生まれてくる。また「できた」ときの感激、「思い切ってやった」ときの爽快感などの運動とのかかわりで得た楽しさを味わうと、子供の意欲は高まり、学習は継続される。

(2)　めざす子供の具体的な姿

○　「思いきり遊ぶことができた」「運動して楽しい」「もっとやってみたい」などの積極的・継続的に運動を親しんでいく態度をもった子供

○　「たくさんゴールをきめたよ」「もっと動きを工夫するぞ」「新しい動きを発見したよ」などの課題を克服し、運動を創造する子供

○　「いっぱいあせをかいたな」「運動の仕方がわかった」「これだとやれそうだ」などの運動の価値や

必要性を認識する子供。

3．副主題について

(1) 副主題の意味

運動との一体感を味わう活動とは、子供が運動と出会い、自ら動きを創意工夫し、仲間と教え合ったり、励まし合ったり、共感し合ったりして運動の楽しさを味わいながら運動をつくり出すことである。この運動の楽しさは、子供が運動とかかわる視点を明確にもち、それを自分のものとして運動を実践するときに意識化していくことで味わうことができる。ここでは、子供が運動に働きかける要素として場や人とのかかわりから、運動をとらえていく。

場とのかかわりとは、運動を行う場や運動を行う上での規則、取り組み方などを自分に適用できるように考えたり、そこから新たな運動特性を発見したりすることである。

人とのかかわりとは、グループや学習集団の形成されたなかで、自分の動きや自分の役割から仲間の動きや様子を見ていくことで、運動をつくり出したり、活動を旺盛にしたりすることである。

子供が人や場とのかかわりを深め、一体感を味わうためには次のような具体的な活動を行わせ、体験を積み上げさせていくことが必要である。

【運動との一体感を味わう活動】

1．運動との一体感をとらえる活動【運動とのかかわりに気づかせる】

友達や場の関連から自分の動きをとらえ、自分の課題を明確にする

2．運動との一体感をつくる活動【運動とのかかわりをもたせ、運動を創造させる】

進んで友達や場にかかわりをもち、動きを磨き合いながら課題に立ち向かう

3．運動との一体感を深める活動【運動とのかかわりを深めさせる】

友達や場とのかかわりを深め、動きを高める

【場や人とのかかわりからとらえた活動】

	場とのかかわり	人とのかかわり	条　件
低学年	設定された多様な場に親しむ	仲間と仲良く運動をする。	具体的な活動につながるもの
中学年	場をつくり運動の楽しさを味わう	仲間意識をもち協力して運動する。	学習方法の多様につながるもの
高学年	場を活用して、運動の楽しさを味わう	仲間とのかかわりを深め自他の運動を高める。	多様な思考につながるもの

(2) 運動との一体感を味わう活動を重視した年間計画作成の考え方

① 子供の発達特性から見た内容設定

体育は、子供の全人的発達を促す目的を内在するものであると考える。

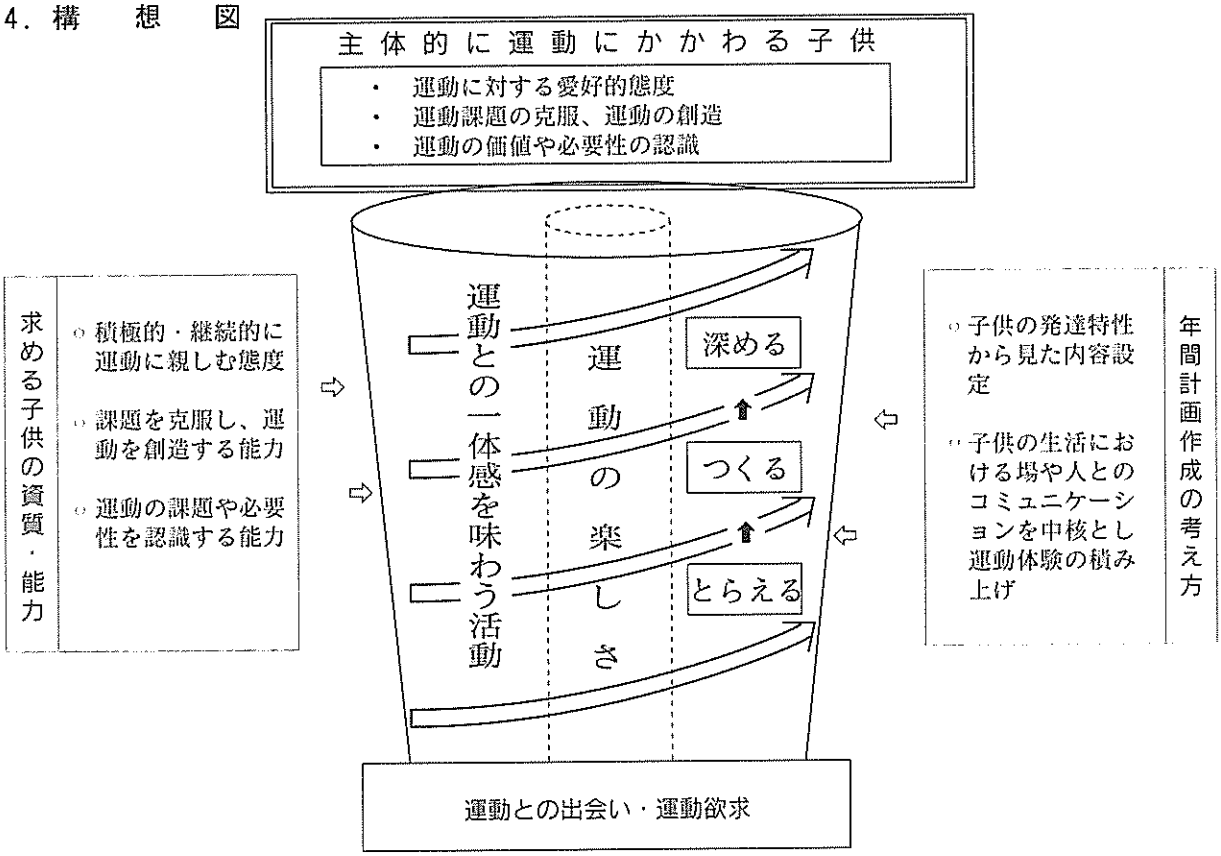
体育科で中心的課題となる運動技能面「できる」については、子供の身体面の発達特性から、低学年では、遊びの場で思いきり活動し、友達と仲良くしながら、さまざまな感覚を運動体験で系列的、体系的に身につけさせる。中学年では、場を作り、友達と協力しながら、基本的な動きを習得させる運動体験を徹底させる。高学年では、場を活用し、友達同士ともに高め合いながら、低・中学年で習得した動きを基礎として、より発展した技術を習熟させる、ことが重要である。また、運動技能面だけではなく、学習内容についての認識「わかる」を強調した内容を組み込んでいく必要がある。子供は、学年が上がるにつれて、自分が学習している運動のしくみ、学習の順序性、友達との関係のしかたなどがわかる。そこで、子供の発達に即して技能や態度の内容だけでなく、認識の課題をとらえさせ、追求させるための内容設定をしていく必要がある。

② 子供の生活における場や人とのコミュニケーションを中核にした運動体験の積み上げ

生涯体育に生きて働く力を育てたいという考えに立ったとき、生涯体育とは、子供の生活を表現するものであるととらえることができる。体育の学習の意味は、子供の生活へ連続することであり、子供の生活における遊びを中心とした運動体験が、学習の中に生かされたり、学習した内容が遊びに生かされたりしながら、運動の楽しさを味わうことを重視する。子供が生活へ連続された運動や遊びを行うとき、運動にかかわっていく自分、運動を行う仲間、運動を行う場などに対してコミュニケーションを図り、積極的なかかわりを自ら求めていくことが大切である。

そこで、子供が、場や動きを創意工夫し、友達と教え合ったり、励まし合ったり、共感したりして他者とのコミュニケーションの中で「自分や友達との運動の意味をつくり出していく」こと、すなわち、課題を感じとり、課題解決の方法を構造化しながらねばり強く追求していくことは、子供の現在や将来において運動を実践していく上で非常に重要なことである。この考えを基底にして、場や人とのかかわりから子供の発達を考え、内容を配列していく。

4．構　想　図



5．指導の実際と考察（次頁参照）

6．研究のまとめ

子供が主体的に運動にかかわるために、運動との一体感を味わう活動を重視して年間計画を作成し実践したことを通して、子供たちが、動きや技能を高めながら、自分たちでルールや用具を創造したり、操作したりする姿や友達と協力して教え合ったり、共感し合ったりする姿などが見られた。実践では、場や人とのかかわりを通して、自分たちで練習を創造し、三角コーンやフープなどの用具を使って練習の場を構成し動きを作っていったこと、得点に結びつく動きを成功させるためにチームの友達がお互いに声をかけ合いながらいっしょに活動していったこと、など運動との一体感を深めていく姿を具現化することができたものと考える。また、子供たちは、それぞれ活動を通して、運動の特性を十分に楽しむ様子は、主体的に運動にかかわる姿を具現化したものであると考える。

5．指導の実際と考察１

(1) 単元名　ポンポンボールゲームをしよう（第２学年）　笠　宏照

(2) 年間計画における本単元の位置づけ

本単元は、低学年ゲーム領域であり、次のような価値がある。相手と直接的な接触がなく、チームの友達と一緒に動きを考えたり、ボールをつないだり、返したりするなど、人とのかかわりを深めることができる運動である。自分たちでボールを選んだり、ネットの高さを調整したり、コートの広さを考え、それを使って十分活動したりするなど、場とのかかわりを深めることができる運動である。ボールを打つ・はじくことは、身体的発達特性から見て、完成時期にかかる神経系の発達を促すことになり、また、運動の系統性から見て、中学年のハンドベースボール・プレルボール、高学年のプレルテニスにおける動きに発展するものである。ネット型の運動は、レクリエーションや生涯スポーツとしても普及しており、この型の運動の楽しさを経験することは、積極的に運動を継続し、実践する態度を育てることにつながるものである。このことを踏まえ、第２学年のゲームでは、ポンポンボール、ドッジボール、シュートボール、ボールけりゲームの順に配列を行った。人とのかかわりでは敵・味方を意識しやすいネット型から入り乱れ型へとつながるようにしている。場とのかかわりではいろいろなコートの型でゲームをしながら、場に親しむようにしている。動きでは、ボール操作の難易度をとらえ手から足へと展開している。

以上のことから、本単元では、お互いのチーム同士で、ボールを打つ・はじく動きを通して、友達と協力したり、励まし合ったり、共感し合ったりしながら、つなぐ動きを工夫したり、打ち返したりする活動を十分に行いながら、運動をする楽しさや喜びを広げていくものである。

(3) 目　標

① ポンポンボールにおける簡単なルールに親しみ、自ら場を操作しながら、ボールを打ち上げるつなぐなどの動きをして楽しくゲームをして遊ぶことができる。

② チームの中で、お互い声をかけ合ったり、協力し合ったりしながら、相手にボールを打ち返して、得点を競い合う楽しさを味わうことができる。

(4) 計　画（約８時間）

ね　ら　い	学　習　活　動	配　時
○ 運動との一体感をとらえる活動をする。 ・ いろいろなボールを打ったり、はじいたりする。 ・ 友達との遊び方を考える。	１．ポンポンボールゲームの学習について話し合う。 (1) いろいろなボールを使って、自由に遊ぶ。 (2) ネットをはさんで、ボールを打ち返して遊ぶ。 ○ ２人で遊びを考えながら、１対１になってお互いにボールを打ち返す遊びをする。 ○ ネットをはさんで４人が、２対２になってボールを打ち返す遊びをする。	３時間 ① ① ①
○ 運動との一体感をつくる活動をする。 ・ 場やルールを考える。 ・ ボールの触り方を工夫する。 ・ 友達と協力して、動きを作る。	２．ルールを考えて、チームで相手にボールを打ち返しながらゲームをする。 (1) みんなでボールを上げる動きを工夫する。 (2) ゲームを楽しみながら、みんなでボールをつなぐ動きを工夫する。	３時間 ② ①
○ 運動との一体感を深める活動をする。 ・ ネットの高さを決めてゲームをする。 ・ 学習してきた動きを使う。	３．ボールの触り方を工夫したり、ネットの高さを決めたりしながら、ゲーム大会をする。 (1) 決定したネットの高さで、ゲームをする。 (2) 本単元について、工夫したこと、上手になったことなどについて話し合う。	２時間

(5) 指導の実際

運動との一体感をとらえる活動をする段階(第１・２時)

この段階のねらいは、ボールを使った打つ・はじく遊びを通して、ポンポンボールの運動特性を理解し、友達との遊びを考えさせることである。そのために、子供たちが打ったり、はじいたりしやすいボールやまとに向かって遊ぶことができる場を用意した。

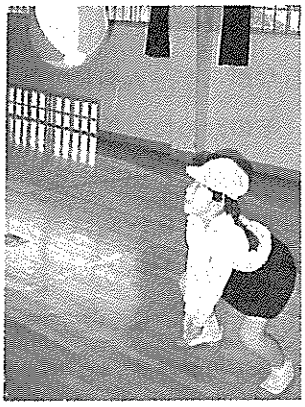
子供たちは、ビーチボールやキャンディーボールなどを使って、写真①のように片手でボールを上げたり、写真②のように両手でボールを上げる遊びをした。輪をまとにした遊び場では、写真③や写真④のように、輪の中にボールを入れようとして高いところでボールを触ったり、また、上にボールを上げるなどの遊びをした。

一人の遊びを十分楽しんだ後に、子供たちは、友達同士がお互いにボールを打ち返す・はじき返すという遊びを行った。「バレーボールのようにネットが欲しい。」という子供の意見から、ネットを用意した。

写真① 片手で打ち上げる姿



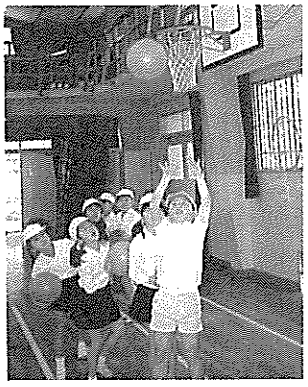
写真② 両手で打ち上げる姿



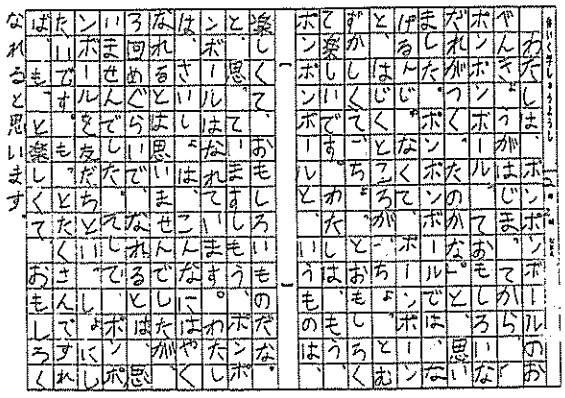
写真③ 前のまとをねらって遊ぶ姿



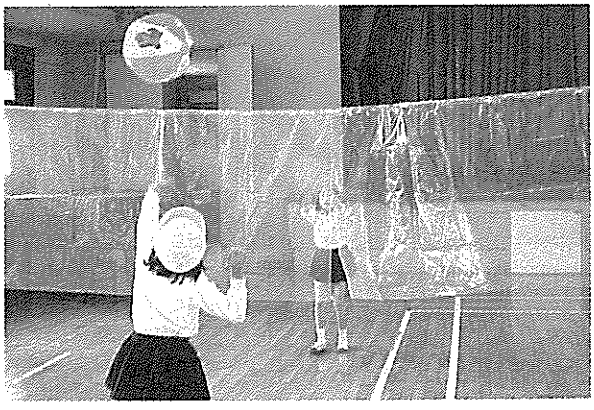
写真④ 上のまとをねらって遊ぶ姿



資料① 子供の作文(第2時のもの)



写真⑤ 2人(1対1)でネットをはさんでボールを打ち返して遊ぶ姿



すると、写真⑤のようにネットをはさんで、お互いボールを打ち返すような遊びを行っていった。さらに、子供たちは、資料①に見られるように、１対１だけではなく、もっと多くの友達と一緒に遊びたいという願いを持つようになった。

考　察

子供たちは、ボールを使って自由に遊んだり、いろいろな打ち方・はじき方でまとをねらって遊んだりするなど、活動を十分楽しみながらポンポンボールの運動特性を理解できたと考える。これは、遊びで経験したことのある風船やビーチボールなどの遊具を準備し、そのボールを打つ・はじく遊びを想起させたこと、多様な動きが出るようにまとを用意したこと、などによるものといえる。また、ボールを打つ・はじくという動きは、子供たちにとっても新奇性があり、活動意欲を増加させたと考える。学習過程を、ボールとの出会い→一人遊びによる、運動特性への接触→友達との遊びによる、ゲーム感覚の芽生え、などのように、子供の発想に合わせたことが、ボールをはじく・打つという活動を十分に経験させることにもな

り、多様なはじき方・打ち方や友達と一緒に遊びを作るなど、自分の動きをとらえたり友達と交流したりすることにつながったと考える。

運動との一体感をつくる活動をする段階(第５・６時)

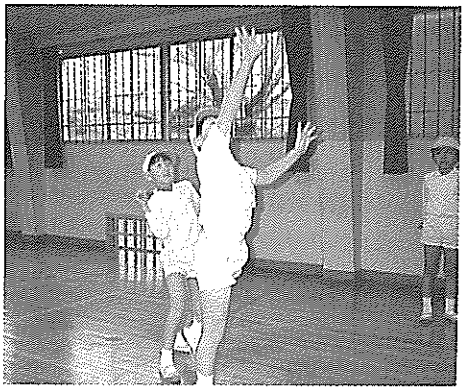
この時間のねらいは、チームで動きながら、ボールを上げたり、つないだりして、チーム同士が打ち返しながらゲームをして遊ぶ楽しさや喜びを味わうことである。

そのために、第５時では、高いネットを用いて、ボールを上げる動きが出てくるような場を設定した。子供たちは、資料②のように、高いネットに出会いながら、ボールにどのように触るかということを考え、写真⑥のように、バウンドさせずに直接、高いところでボールを打ち返す動きをしたり、写真⑦のようにバウンドを利用して高くボールを上げるなどの動きをした。ゲームを進める中で「アウトかセーフかをきめるコートがほしい。」という意見を出してきた。ラインテープでコートを作ると、２対２から３対３、４対４など、いろいろな人数でゲームを行い、コートの広さにあった人数を自分たちで探していった。その結果、３対３という人数でゲームを行うことを、決め、資料③にあるように、さらにボールに触れたり、活動したりできるようになったことに満足しながらゲームをすることができた。

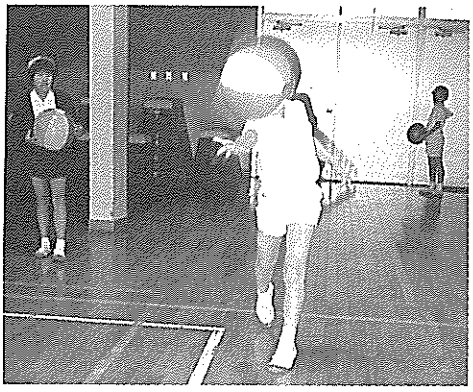
資料② 高いネットと出会ったときの子供たちの発言

C1:ほんとうのバレーボールのようだ。
C2:ホールを高くしないといけないな。
C3:～さんのように、バウンドしたボールをつかったらいい。
C4:ボールにつよくさわったらいい。
C5:高いところで上にポーンと、うったらいいよ。

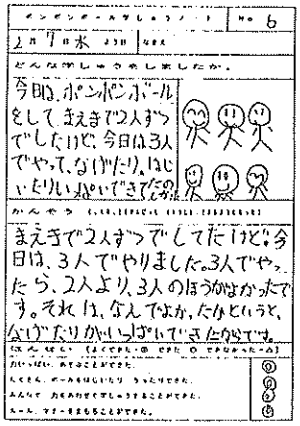
写真⑥ 高い所で



写真⑦ バウンドを使って



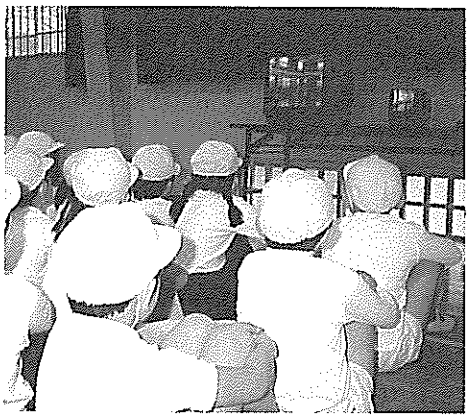
資料③ 子供の学習ノート



まえきで２人ずつでしてたけど、今日は、３人でやりました。３人でやったら、２人より３人のほうがよかったです。それは、なんでかな、たかとくんと、ないだりがいっぱいでさたからです。

次に、第６時では、ゲームにおいて、チームの友達を意識しながら、協力してボールをつないで、相手コートに返すことを意識させるために、写真⑧のようにビデオの視聴を行った。このビデオは、コートの外側に友達がはじいたボールを３人が協力して相手コートに打ち返すというものであり、動きの中で人とのかかわりが深まっていくという内容である。子供たちに見せるときには、実際の動きをスロー再生しながら、ボールをつないで相手コートへ返すための動き方やボール打つ方向などについて助言を行った。子供たちは、資料④に見られるように、つなぐということを、具体的な動き方を通して、意識するようになった。そして、実際のゲームにおいては、写真⑨のようにボールをつないでいこうとする動きが出てくるとともに、チームの

写真⑧ ビデオを見る子供たち

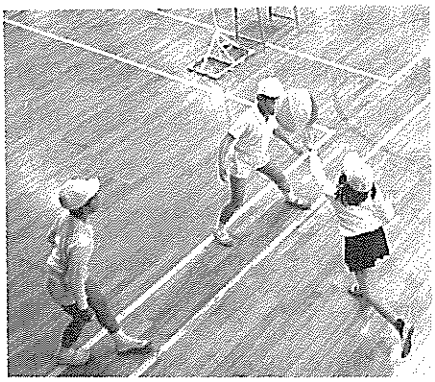


資料④ ビデオを見た後の子供たちの発言

C1:すばやく、ボールのほうに動いている。
C2:あしをまげて、ひくいところでボールにさわっている。
C3:ボールにさわっていない人も、ボールのほうをむいている。
C4:友達にはやさしく、上にボールをやりよる。

友達同士が、声をかけ合ったり、教え合ったりする姿も多く出てくるようになった。

写真⑨ ボールをつなぐ子供たち



考　察

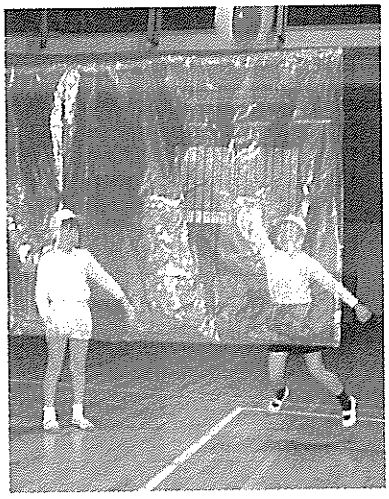
高いネットを意識して、ボールを高く上げる動きを工夫することや活動を通してコートの広さに応じたプレイする人数を決めることができた。これらは、設定してある場を十分とらえながら、それに応じた動きや人数を自ら考え実践しているということで、自分たちの遊び場に親しんでいるという、場とのかかわりを深める姿であると考える。また、友達と協力してボールをつないで返す動きをすることができるようになってきたが、これは、友達とのかかわりを深めている姿であると考える。

運動との一体感を深める活動の段階(第７時)

この段階のねらいは、学習してきたボールを上げたりつないだりする動きを生かしたり、自分たちでネットの高さを変えたりしながら、ゲームを行い、学習をまとめさせるというものである。

いろいろなネットの高さでやってみたいという欲求から、対戦チームごとに『みんなの手が出る高さ』や『腰の高さ』など自分たちで話し合いながら場を作りゲームを行った。その中では、３人でボールをつなぎながら相手に打ち返したり動きを考えたりする姿がより多く見られた。また、写真⑩から写真⑪のようにネットの高さを変えたことによって、ボールを軽く前に返すなどの今までになかった動きが出てきた。

写真⑩ 高いネットでゲームをする子供た



写真⑪ 低いネットでゲームをする子供た



考　察

それぞれの対戦チームごとに、自分たちでネットの高さを決め、その場に応じた新しい動きでプレイをすることができた。また、より多くボールをつないだり、打ち返したりする動きがみられ、友達同士の声かけも大きなものになってきた。これは、特に、つくる活動で培ってきた動きを生かしている姿であると考える。

(6)　全体考察

子供たちの遊びに視点をあて、ボールを打つ・はじく活動を十分経験させながら、場や人とのかかわりの深まりから生じる動きに気づかせていった。このことは、子供たちが楽しくゲームをする中でコートの必要性を提案したり、ネットの高さに応じた動きを工夫したり、プレイする人数を決めたりする姿や「みんなといっしょにできてたのしかった。」「わたしが、いっしょうけんめい上げたボールを、～さんがあいてチームにかえしてくれたことがうれしかった。」などのようにチームの友達同士が共感していく姿など、場や人とのかかわりを深めながら自分の実態に合わせて、運動を変化・工夫することにつながった。また、ボールをつなぐという活動において、どのように動いたらいいのかどのようにボールに触ればいいのか、プレイする友達同士がどのようなことを注意すればいいのか、など動きの意味をとらえ、ゲームで活用しながらポンポンボールの楽しさを得ることができている。これは、体育科で考える、認識と感性の統一的発達の姿の一つであると考える。

5．指導の実際と考察2

(1) 単元名　スリーゴールサッカーを楽しもう（第4学年）　佐々木　壮一朗

(2) 年間計画における本単元の位置づけ

単元を通して、子供が運動対象に積極的に働きかけ、みんなで協力して旺盛な運動を行うことができる姿を明らかにするものである。具体的には、子供が自分で場や練習をつくったり、作戦を生かしたりしてスリーゴールサッカーを楽しむことになる。このことが運動との一体感を味わう姿であると考える。

本単元は、特に運動とのかかわりの面を重視して授業を構想した。この運動とのかかわりをふまえ、スリーゴールサッカーのゲームの場面で攻防を多く体験させる活動を取り入れた。具体的に本単元を取り上げる価値として次の3点があげられる。

① ゴールを3方向に3つ置くことによって、シュートの機会が増え、集団での攻めや守りを意識し、集団技能を高めたゲームができる。

② コートの有無や形の変化、ゴールの数などの場づくりができる。

③ 本単元の展開中段までは攻守交代制でゲームを行うので自分たちで立てた作戦を協力して実行できる。

このように、戦術的行動に着目したところからボール運動（サッカー系）を見直し、ボール運動種目を価値付け、新しい運動種目（スリーゴールサッカー）を設定したことは、年間計画に位置づける際の要件になってくるし、運動とのかかわりを深めることになる。

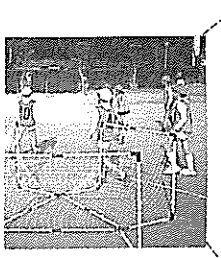
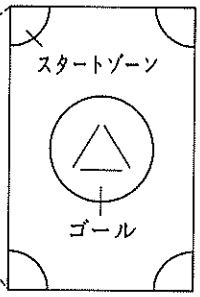
(3) 目　標

① 子供自らがルールや場づくりや作戦づくりを行い、チームで攻めたり、守ったりしてみんなで協力してスリーゴールサッカーを楽しくできる。

② パスをつないだり、すばやく動いてシュートしたりなどのタイミングのよい動きや連携した動きを使って、得点を競い合ってゲームを楽しくできる。

③ 自分の課題を発見したり、課題解決に向け方法を見い出したり、楽しさを求めて活動の工夫をしたりすることができる。

(4) 計　画（約7時間）

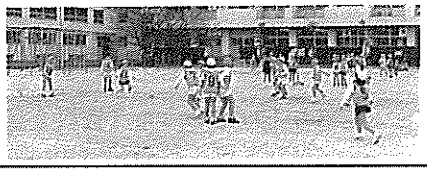
ねらい	学習活動	配時
○ コートをつくったり、ルールやチームの役割を決めたりしてゲームを行い、課題を明確にする。 【運動との一体感をとらえる活動】	1．ゲームの方法を話し合い、楽しくゲームを行う。（活動1） (1) ゲームの方法や規則について話し合う。 主なルール チーム…1チーム5人　時間…7分ハーフ コート…正方形（コール3つ） 攻守交替制など   ・コートやルールの活用を考える。 ・ゲームの進め方について考える。 (2) ゲームを行い、課題を明確にする。 ・ゲームの様相から課題を取り出す。 ・課題解決の見通しを持つ。	2時間
○ 自チームや相手	2．ハーフコートで楽しくスリーゴールサッカーを行う。（活動2）	3時間

チームの活動の様相をつかみ、作戦、練習、場やルールをつくって動きを旺盛にする。 【運動との一体感をつくる活動】 ○ 自チームの作戦や練習を生かしたゲームを行う。 【運動との一体感を深める活動】	(1) ゲームの中から、自チームの特徴をつかむ • 自チームの活動の様相をつかむ。 • 場やルールをつくる。 (2) 自チームの特徴から作戦や練習を考える。 • 作戦や練習をつくってゲームで試す。 • 朝の活動や休む時間に練習やゲームをする。 3．ロングコートにしてゲームを行う。（活動３） ○ コートを拡大して、攻防切り替えのゲームを行う。 • 作戦を使った攻防を行う。 • ゲームの中で自チームの特性を生かす。	2時間

広がりを意識した動き（守り）



ロングコートによるゲーム



(5) 指導の実際

活動１（２／７）【運動との一体感をとらえる活動】

本時はスリーゴールサッカーを把握し、自分たちでコートをつくったり、ルールやチームでの役割を決めたりしてゲームを楽しむことができるようにすることをねらいとしている。ここでは、攻めや守りなどの観点をあげ、ゲームを行う中で子供たちに課題を明確にしていく活動を行った。

子供はハーフコートによるスリーゴールのサッカーのゲームを行う中で「広がってパスをしたい」「ゴールの向こうにパスをしたい」などの課題を持ち、コートの広さを１４ｍから１６ｍにコートを広げたり、「ゲームが中断しないようにしたい」ということで４隅にスタートゾーンをもうけたりして場をつくりかえた。また、攻守交代制での時間制による交代や得点による交代などのルールでゲームを行い、最終的にはゲームを一定の時間続けて楽しみたいということで、時間制を選択していった。攻め方や守りの位置などを決めてゲームを行うので、動きがとらえやすいという理由からである。

写真１　密集した動き



ゲームの様相については、子供たち自らが作戦板をつかって写真１にあるような「密集型でパスがつながらない」、「チームでの協力した動きが見られない」などの動きを明らかにしていった。そして、攻めや守りなどで色分けしたカードに課題を記入した（資料１参照）。

考察

資料１　子供が提示した課題（色分けカードに記した課題）

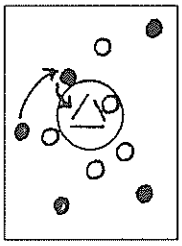
攻　め	みんながシュートできるようにする。パスをつないでシュートする。
守　り	ゴールの前を固く守る。一人一つのゴールを守る。遠くにけり出す。
その他	負けても文句を言わない。受け玉をこわがらない。作戦を守る。練習は協力してする。

ゲームの様相を色分けカードや作戦板によってとらえさせたことによって子供は課題を明確にすることができ、活動の意欲を持続することができた。スリーゴールサッカーに出会わせたことにより、最初子供は、興味をもってかかわりゲームを行った。しだいにスリーゴールサッカーの持っている特性を味わい自己の動きの不十分さを感じ課題を持つことができた。課題としては資料１にあるように「みんながシュートできる」や「パスをつなぐ」が特に多かった。これは、子供が集団を意識したことやいろんな方向からシュートができるスリーゴールの特性をとらえたからである。

活動２（４／７）【運動との一体感をつくる活動】

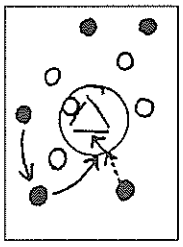
自チームや相手チームの特徴をつかみ、練習や作戦を自分たちでつくり、攻めや守りを行い、旺盛な動きでゲームを楽しむことができるようにすることをねらいとしている。

そのために、次のような練習や作戦の例を提示した。



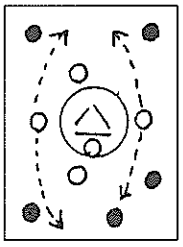
・すばやくゴールに近い人にパスをして、シュートをする。

【攻めの活動の発想支援】



・空いているところに走り込みシュートをする。

【攻めの活動の発想支援】



・２人が動いて広く守る。他はゴール近辺を守る。

【守りの活動の発想支援】

まず、子供はゲームのなかから、自チームの特徴をつかむ活動を行った。攻守交代制のルールでゲームを行うことで、攻めや守りを考えながらよさや問題点をとらえていった（写真２参照）。特に、パスをつなげていくことや確実にシュートをしていくことだけでなく、スローインやヘディングといった新たな個人的な動きに着目していき練習を考えた。また、「協力して作戦を成功させる」などの態度面にかかわる課題にもふれゲームを盛り上げていった（資料２参照）。

色分けした課題カードに表記された課題を見直し、新たに課題カードを付加して、練習や作戦づくりをした（資料３、写真３参照）。また、ビデオでとらえた自分たちの動きのよさや不十分さから特に「パスをつないで攻める」「味方や相手の動きに応じて守る」などの集団での動きに気づくことができた。さらに写真４にあるように朝の活動や休み時間にパスやシュートの練習やボール操作の練習をし、技能を高めていった。

資料２　空間（場とのかかわり）や集団（人とのかかわり）を意識した課題

C1…空いているところが多いから、空かないように守るようにしたい。みんながパスできるようにちらばったらいいと思う。
C2…ボールにかたまっている。
C3…キーパーと反対側が空きすぎているので、そこをかためたほうがいい。
C4…３つのゴールのどこでもうてるようにしたら点が入る。
C5…協力して作戦を成功させる楽しさをめざす。
C6…みんなちらばって、パスをしてゴールすればいいと思う。

写真２　激しい攻防（動きのよさ）



資料３　攻め・守りの作戦例（作戦づくり）

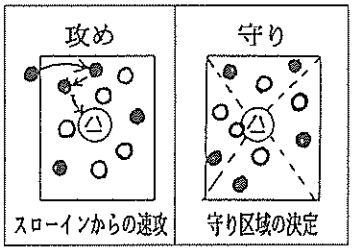


写真３　作戦づくり

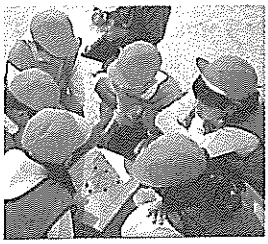
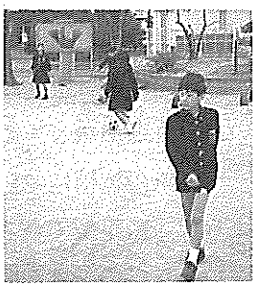


写真４　朝の活動での練習



作文抜粋

N児…今までは作戦を立ててもうまくいかなかったけれど、別の作戦をためしてみるとうまくいき得点できたので、とてもうれしかった。（写真５）

T児…前の時間では、どういうふうに自分のチームの人にパスをすればいいのかわからなかったけれども、今日は、「ゴールに一番近い人にパスをする。」ということを考えながらゲームをしました。すると前よりもける回数も多くなり、とても楽しかったです。

考察

集団や場とのかかわりに着手し、連携的動作を中心にゲームづくりをさせたことが有効に働き、子供はみんなで協力して旺盛な活動を行い（資料４参照）、スリーゴールサッカーの楽しさを味わうことができた。ここでは、T児の作文にあるようにスリーゴール

資料４　ゲーム１での活動の様相例

空間を意識したゲーム
・ボールとゴールとの最短距離での守り
・ボールのけり出し（クリアーボール）
・すきを見て人がいないところへの移動
・「広がって」の声かけ
・ゴールと正対したキーパーの動き

ゲーム２での活動の様相例

集団を意識したゲーム
・シュート、得点！ガッツポーズ
・活発な動き（ゲーム１との比較）
・マークのない人へのパス
・作戦の実行（おとり作戦）
・「自分から積極的」などの声かけ

写真５　シュートに歓喜



サッカーを自分に引きつけ、動きをしっかり考えて運動を行うことで十分に楽しさを味わうことができた。このことが、本単元の認識と感性の統一的発達の姿であると考える。

活動３（６／７）【運動との一体感を深める活動】

資料５　技能の高まり 対象児４２名

シュートができるようになった→17名（１時は10名）
パスがつながるようになった　→36名

資料６　日常的な遊び

休み時間　27名
帰宅して　44名

ロングコートで、ハーフコートでの活動で身に付けた集団的技能、作戦や練習を生かして、子供が楽しくゲームをできるようにすることをねらいとしている。

ここでは、子供の「コートを広げてほしい」や「ハーフコートをつなげてプレイしたい」などの欲求をもとに場を構成していった。特に、ハーフコートでの経験が生かされ、ボールのけり出し（クリアーボール）や攻守の切り替えをスムーズにしてた（写真６，７参照）。

写真６　クリアボールだ！



写真７　攻めをすばやくしよう(作戦)

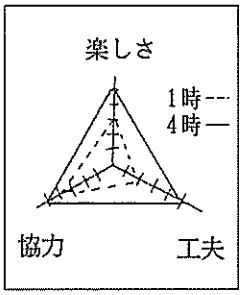


考察

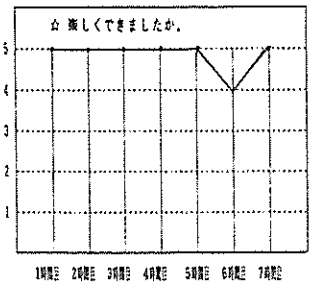
子供のロングコートへの活動欲求があったし、ハーフコートで攻守交代の切替えやスリーゴールを意識したすばやい動きを身に付けていたので、ロングコートでの場でも攻守の切替えやパスのつなぎなどの集団的技能や協力的態度を生かして楽しくゲームをすることができた（資料５参照）。

(6)　全体考察

資料７　A児の自己評価



資料８　見直しグラフ



本単元を通して、子供一人一人が活動を旺盛にしてスリーゴールサッカーの楽しさを味わうことができた（資料７、８）。これは、スリーゴールサッカーの特性をとらえ、味方との連携プレイなどで得点を競い合うことができたからである。特に、攻守交代制でゲームを行わせたことで、チーム内で協力し合って作戦を立てることになったからである。また、子供自らが場やルールをつくっていき、運動との一体感を味わう活動を本単元だけでなく年間を通して積み上げいったことが有効であったと考える。場や人とのかかわりを大切に指導してきたことで子供は運動への主体的なかかわりをもち、活動も旺盛になり、楽しさも味わうことができるとともに、学習したことが、子供の日常生活での運動経験にも結びついたものと考える（資料６参照）。

資料９　　見直しグラフでの評価にかかわっての感想

１時	コートがせまかったのであまり楽しくなかった。ちゃんとけれたから楽しかった。など
３時	ボールについていけたので楽しかった。うまく攻めたり守ったりすることができた。など
４時	パスがつながらずダンゴになってしまった。今日は同点だったのでくやしかった。など
５時	たくさんパスをうけたので楽しかった。攻めの方法が完成してよくなった。など
７時	シュートができたのでうれしい。遠くの人にパスがつながるようになった。など

本単元の年間計画作成上、中学年の発達特性を配慮して指導にあたった。一つは体力面から、身体を目的にそって動かすことができること。二つめは運動能力から、対人的で連携した動きができること。三つめは人間関係面から、協力して運動すること。資料９にあるように、子供は、自分たちのゲームでの様相から、作戦や練習を考え、そこからスリーゴールサッカーの楽しさも得ている。これは体育科における認識と感性の統一的発達の一つの姿であると考える。また、子供自らが旺盛な場づくりやルールづくりを行ったことで、主体的に運動にかかわる姿に迫ることができたと考える。

生活力を培う指導法の究明

── 自主性・能動性の発揮を促す自己選択の活動を通して ──

障害児教育研究部　落合　純哉　松本　良一
林田　千枝　大谷　繁実

1．主題の意味と重要性

(1) 主題の意味

精神発達に遅滞のある子供たちの生活の姿を見てみると、自分から、自分で身の回りのもの・人・ことに働きかけたり、また、働きかけた結果に喜んだりする姿が少ない。これは、障害の特性により興味・関心の範囲が限定されがちであったり注意の集中が持続しないこと、子供が何かに取り組もうとする前に回りが援助を与えてしまうという受動的な生活環境になりがちであること、などが原因であると考える。

本校では、このような精神発達に遅滞のある子供たちが、自主性・能動性を発揮して学習に取り組む中で確かな力をつけていく姿を具体化するために「内発的動機づけの研究」や「個に即した指導内容と方法」などの研究が進められ、「動機・熱中・発展」の学習過程や「変化と繰り返しのある活動」などの学習原理が究明されてきた。その中で、子供たちは、自分のもてる力を十分に発揮し、生き生きと学習に取り組む姿を具体化することができた。しかし、学習場面で身につけたことが、生活の中で生きる姿を具体化できたかという点で不十分さが残る部分があった。この一つの原因として次のようなことが考えられる。①学習場面で知識や技能などを身につけても、その使い方が身についていないこと、②学習して身につけたことを使う場がなかったり、使う経験が不足していたこと、③学習してきたことを生活に生かす上で必要な自主性・能動性の育ちが不十分であったこと、などである。そこで、子供たちが自主性・能動性を発揮しながら、学習の中で身につけたことを使う姿を具体化することで生活に生きて働く力である生活力を培う、という視点に立った指導法の究明を行う必要があると考える。

ここでいう生活力とは、子供たちの生活に生きて働く力のことであり、興味・関心、意欲などの情意的なものと思考力・判断力・課題解決力・表現力などの能力的なもの、コミュニケーション・身辺自立・移動・作業・集団参加などに必要な知識・技能的なものの総体である。

(2) めざす子供の具体的な姿

子供たち一人一人を見てみると、自分の欲求のままに活動したり刺激に短絡的に反応したりして、情緒の安定や意欲の面、学習内容の到達の状況、行動や課題解決の仕方、などが様々で個性的な存在である。この子供たちが、身の回りの「もの・人・こと」に自主性・能動性を発揮して積極的にかかわっていく中で、自分の生活への満足感・充実感を味わう姿を、生活力が培われた姿であると考える。具体的な姿を、次のように考える。①「おもしろそうだな、たのしそうだな」と課題に興味・関心をもったり、「やってみたいな」と課題を意識したりする姿、②「～したら～できそうだ」と課題への見通しをもつ姿、③「～をやろう」「～ちゃんとあそぼう」と自己選択をしながら繰り返し課題に取り組む姿、④「できた」「やった」という達成感・成就感や、「じぶんでやれた」「～ちゃんといっしょにやれた」と効力感・有用感を味わう姿、⑤「やすみじかんに、やきゅうをしよう」「こんど、おばあちゃんにおてがみをかこう」など、休み時間や家庭で学習したことが生活に生きる姿、などである。

このような子供の姿を具体化するためには、これまでも行ってきた子供一人一人の実態に即した指導内容の設定や子供の興味・関心に応じた教材の開発、子供の課題解決の仕方に合った活動構成の工夫を行うとともに、子供たちの生活を見つめ直し、「こんなことができるようになれば、この子の生活がよりよくなる」という視点で子供の実態の見直し、指導内容、指導方法の見直しを行っていく必要があると考える。

2．副主題について

自主性・能動性の発揮を促す自己選択の活動とは、学習してきたことを生活に生かすことができるように、選択性のある場で、身につけた知識や技能などを使う体験を繰り返すことである。これは、知識や技能などの学習内容を獲得する学習から、獲得した知識や技能などを使う学習へと、学習を発展させることを意味する。ここでいう自主性・能動性の発揮とは、子供が学習対象に出会った時に、学習への興味・関心をもち、自分から自分で学習対象に働きかけていくことである。この自主性・能動性の発揮を促す自己選択の活動を、具体的に次のように考える。

(1) 指導内容について

自主性・能動性の発揮を促し、学習してきたことを生活に生かすために、子供一人一人の実態を発達段階という側面と生活経験という側面の２側面からとらえる。具体的なそれぞれの側面の観点は、次の通りである。

① 発達段階の側面

障害の状態、感覚・認知、認識・思考、言語・数量、表現、性格・行動、情動・情緒、運動・体力、社会性・社会生活能力

② 生活経験の側面（状況的側面）

生育歴・生活環境、興味・関心、認知の仕方、思考の仕方、課題解決の仕方、表現の仕方

以上の２側面からとらえた子供の実態に、「このようなことが今の子供にはできそうだ」「このようなことができたら子供の生活が変わる」「このようなことが今の子供には必要だ」「このようなやりかたをこの子は好きだ」という学習対象への働きかけ方の視点をもって、具体的な指導内容の設定を行う。

(2) 指導方法について

自己選択の活動を、知識や技能を身につける自己選択の活動と、知識や技能を使う自己選択の活動の２活動で考え、「動機・熱中・発展」の３段階の学習過程の中に位置づける。また、学習したことが生活に生きるように、生活に近い条件を取り入れた活動、日常の生活の中での継続的な活動が行えるような環境づくりを取り入れる。

① 学習内容を身につけていくための活動の選定
- 身近な生活経験のある素材　・遊び化、ゲーム化できる素材
- 子供が目的意識をもてる素材　・学習したあとに生活に生かせる素材

② 自主性・能動性を発揮できる活動の構成
- 知識や技能を身につける自己選択の活動（個の学習対象への働きかけ方に応じた活動）
- 知識や技能を使う自己選択の活動（個の学習対象への働きかけ方をひろげ高める活動）

→

国語：個々の表現力を生かすおはなしコーナーづくりの活動を通して、進んで言語活動に取り組む子供をめざす。

体育：「もの・人・きまり」の視点を取り入れた運動遊びの活動を通して、自ら運動にかかわる楽しさを味わう子供をめざす。

音楽：個の音楽の楽しみ方を生かした活動を通して、自ら表現する喜びを味わう子供をめざす。

【基本的な指導のしくみ】

	動　機	熱	中	発　展
活動と内容	１．学習対象と出会う体験をする。 ○課題の意識化 ○意欲の喚起 ○見通し	２．対象に繰り返しかかわり楽しく活動する。 (1)個に応じたコースで活動する。 ○基礎的・基本的内容の習得	(2)自由に自己選択して活動する。 ○基礎的・基本的内容の活用	３．学習してきたことを生かす。 ○学習したことの応用 ○基礎的・基本的内容の応用・発展
支援	○感動体験や成功体験ができる場の設定や素材の選定 ○実際体験の場	○個に応じた指導内容の設定 ○個に応じた学習コースの設定 ○子供が自己選択できる対象の設定と選択の仕方への個に応じた働きかけ		○生活場面に近い条件の場の設定 ○生活環境の整備 ○家庭との連携

進んで言語活動に取り組む国語科学習

── 個々の表現力を生かすおはなしコーナーづくりを通して ──

障害児教育研究部（国語科）　落　合　純　哉

1．主題の意味と重要性

(1)　主題の意味

進んで言語活動に取り組むとは、精神発達に遅滞のある子供たち一人一人が、話しことばや書きことばを使って、相手と伝え合おうとしたり、文字による表現物、ことばあそび、コミュニケーションの場、とのかかわりを広げたりしていくことを通して、身につけた表現力を生活の中で積極的に生かしていくことである。文字による表現物、ことばあそび、コミュニケーションの場、とのかかわりを広げるとは、自分の興味ある（得意な）表現を選んで表現することを繰り返すことにより、身につけた表現力を自分の生活の中に生かしていくことである。つまり、個々の思いをもとにした、話したり書いたりという言語活動を通して様々な表現力を身につけ、それを生活の中で使っていくことである。ここでいう、表現力とは、知っていることばを使って表現したり、順序を考えて表現したりするなどの他に、他の人とのかかわりを受け入れながら表現をする、状況の理解を深め、様々な状況での要求の出し方や答え方を知る、などがあげられる。身につけた表現力を生活の中で積極的に生かしていくとは、「おもしろかったことを友達に話したら、とても喜んでくれた。」など、身近な人とのやりとりを通して味わう快の感情をもとに、継続的な交互作用を生み出し、自ら表現の対象や表現する相手を広げていくことである。

(2)　めざす子供の具体的な姿

子供たちが進んで言語活動に取り組む姿を次のようにとらえている。

①体験や教材文に出会い、「楽しかったことを、○○くんと話してみたいな。」と、表現をすることへの興味・関心をもつ姿、相手と繰り返しやりとりをしている姿、②状況を理解しながら相手とやりとりをしている姿、友達のかかわりを受け入れながら、動作化や音声化、および文字化を繰り返している姿、③「今度は○○のことを、話してみたいな。」と相手とやりとりをした経験をもとに、表現したいものを選択している姿、「○○をしたよ。」→「どうするの。」など、身につけた表現力を生かしながら、相手とやりとりをしている姿、④「友達と一緒に話したり書いたりして楽しかったな、お母さんにも返事をもらったぞ。」「わたしの作ったノートが（おはなしコーナーに）また増えたぞ。」と言語活動をしたことへの達成感・成就感を味わう姿、などである。

(3)　国語科で培う生活力

よりよい生活を営んでいくために、国語科において培う生活力を次のように考える。①ことばを生活の中で使っていこうとすることへの関心・意欲・態度、②語彙力・文字力・文法力など、ことばの基礎的な力、③状況に応じた表現の知識や技能、状況を認知する力、人とかかわっていこうとする力（表現力）など、である。

2．副主題の意味について

個々の表現力を生かすとは、子供たち一人一人の興味や関心、認知や社会性の程度、などを生かしながら、自分の興味や関心に合ったものを選んで繰り返し表現していくことを通し、状況に応じた表現力を身に付け、それをもとに多様な言語活動をしていくことである。

ここでいう多様な言語活動とは、具体的には①ことばを使うことへの興味や関心、自信をもつこと、②様々な状況における話し方や書き方を知ること、③状況に応じて、自分の表現したいものを選んでことばを使うこと、などが考えられる。

個々の表現力を生かすおはなしコーナーづくりとは、一人一人の興味・関心、認知や社会性の程度、などの実態をとらえたことをもとに、読んだことを話す、話したことを書くなど、多様な言語活動により教室の言語環境を作っていくことである。ここでいう、一人一人の興味・関心とは、表現しようとするものについての傾向であり、認知や社会性の程度とは、生活の様々な場面における状況の理解の程度、ことばによる人のかかわりを受け入れたり、積極的に人にことばで働きかけたりするなどの人とのかかわりの程度のことである。これらの実態をもとに学習内容を設定することで、個々の特性を生かしながら能動的に伝え合おうとする姿を引き出そうとするものである。また、多様な言語活動により教室の言語環境を作っていくとは、自分の表現したいものを選んで話しことばや書きことばで表現し、他の友達や家の人と一緒に活用できる場を作っていくことである。これは、学習を通して身につけたことを、家庭生活や学校生活の中で日常的に生かしていこうとするものである。具体的な活動としては、伝えたいことを家族や友達に案内するために、案内ビデオに話したり、案内ノートに書いたりすることで自分の好きなことについての表現物を継続的につくり、学級のおはなしコーナーとして作り上げたり、休み時間などに遊べるようなことば遊びのコーナーを作ったりすることなどがあげられる。

3．活動づくりの具体的な方途

(1) 児童の実態のとらえ方

具体的には、子供たちの言語活動の実態を次のような視点でとらえる。

① 言語活動への興味・関心:これまでの生活経験からくる、表現しようとするものについての傾向、また、音声言語、文字言語、いずれかによる表現の傾向。

② ことばの基礎力:語彙力・文字力・文法力など、言語活動をする上で基礎となる力の発達の程度。

③ 表現力：語句や文を読んだことをもとに友達に話したり、ノートに書いたりする、友達の話したことを聞き、それに応じて話すなど、状況の理解や社会性に応じた表現の程度。また、状況に応じた話し方や書き方についての知識や技能の程度

(2) 学習内容の設定

これらの言語活動の実態が生きるようにするために、内容構成については、次のように行う。

（「話すこと」における内容例）

段階	ことばの基礎力（文法力について）	話し方の知識・技能	状況や相手に応じた表現
Ⅱ	一語文で	簡単なことばであらわす。	自分の意志をあらわす。
Ⅲ	助詞を意識した二語文で	知っていることばを使って話す。	必要なことを相手に話す。
Ⅳ	基本文型にそった二語文で	順序を考えて話す。	経験を相手に話す。
Ⅴ	基本文型にそった三語文で	大事なことを落とさずに話す。	場の状況に応じて話す。
Ⅵ	基本文型にそった多語文で	順序正しく要点を押さえて話す。	様々な状況に応じて話す。

(3) おはなしコーナーづくりの活動の活動構成

おはなしコーナーづくりの活動を「であう段階」「かかわる段階」「あらわす段階」の３段階で　構成する。具体的には、次の通りである。

① であう段階

楽しい遊びの体験や教材文をもとに、そのことについて話したり書いたりするなど、多様な言語活動を体験する活動。

② かかわる段階

多様な言語活動の経験から、話し方の知識・技能、状況や相手に応じた表現を身に付けるとともに、身につけた表現力をもとに、表現したいものを選んで使う活動を繰り返し行う。

③ あらわす段階

身につけた表現力を生かして、生活の中で友達と伝え合う活動。

［基本的な指導のしくみ］

	動　機	熱　中	発　展
活動と内容	1．体験や教材文に出会う。 ○ 体験や教材文への意識の明確化	2．繰り返しことばにかかわる。 (1) 動作化や音声化、文字化をする。 ○ 言葉の基礎的な力、表現力、理解力 (2) 表現物を選択し、言語活動をする。 ○ 言語活動をする力	3．発表したり、活用したりする。 ○ 体験や教材文の選択 ○ 言語活動の創造 言語活動の拡充
支援	○ 多様な言語活動の体験	○ 個のかかわりに応じた支援 ○ 言語活動の場の設定	○ 言語活動を広げる場の設定

(4) 教材化にあたって

教材化にあたっては、次の点に留意する。

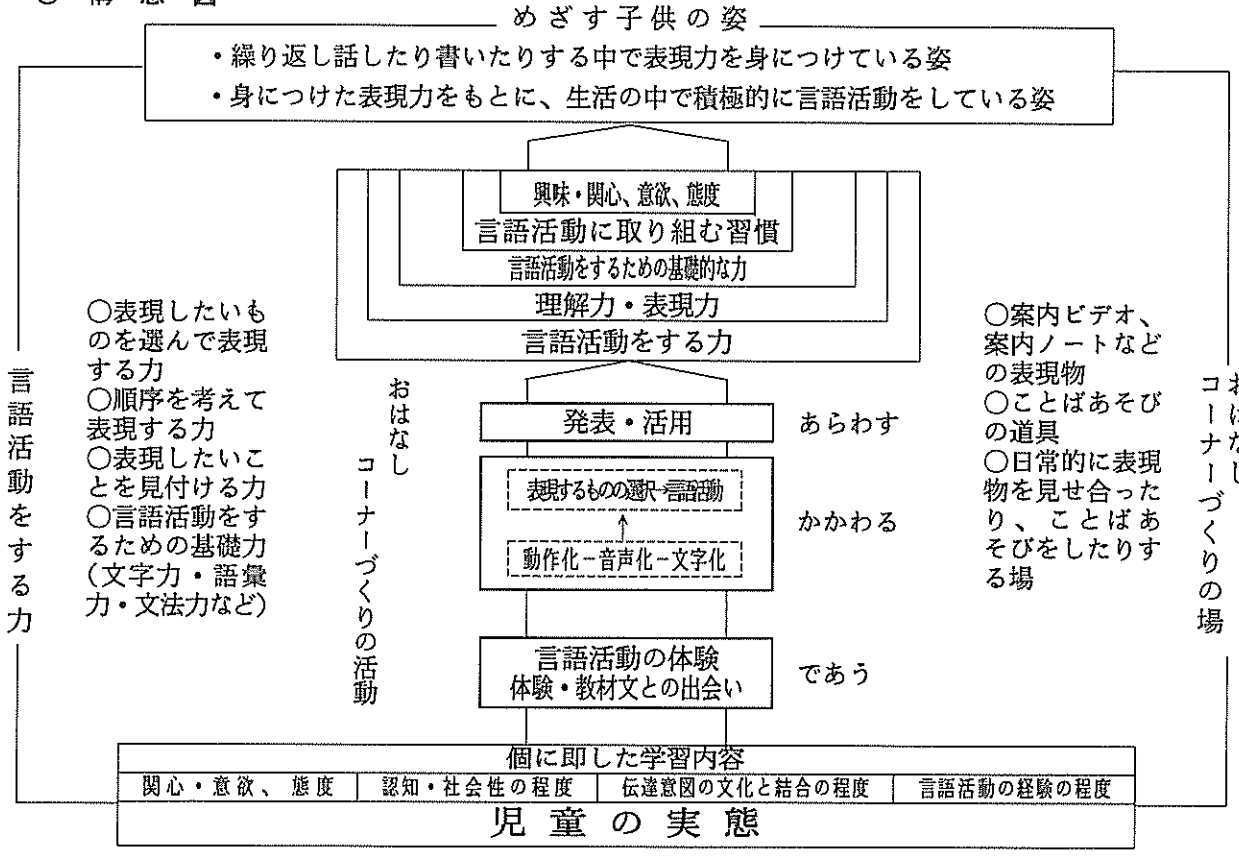
① 遊びの場が、個の語彙力・文字力・文法力に応じた内容をもつ遊びから構成されていること。

② 個に応じたことばかけなどの支援が工夫されていること。

③ 好きな遊びについて、話したり書いたりすることのできる多様な言語活動の場が設定されていること。

④ 学級や他の学級の友達に、好きな遊びについて紹介したり、一緒に遊んだりできる場が設定されていること。

○ 構　想　図



4．指導の実際と考察

(1) 題材名 「おてつだいめいじんのコーナーをつくろう」第3・4学年さくら組

(2) 児童の実態

	意欲・態度	語彙力・文字力・文法力など	表現力
A児 (Aグループ)	相手の話や書かれたことを自分なりに理解しようとする。友達や教師に対し、自分から積極的に身振りで意思を伝えようとする。	音と文字が結び付いていないが、名前などは文字の違なりで判別する。身近な事柄についての語彙はもっている。自分の意思を1語文で話したり、身振りで表現したりする。	話をする中では、指差しやジェスチャーによる表現をしている。書くことについては、友達などの書く字形を模倣している。
B児 (Bグループ)	あまり積極的ではないが、興味や関心のあることがあると、自分から身の回りのことを話そうとする。名前や必要な語句などを自分から書こうとする。	ひらがなやカタカナについては、清音・濁音・半濁音・促音について読んだり書いたりできる。身の回りの出来事について「○○が○○を○○した。」などと2～3語文程度で話す。	主に話をする中で、場面について説明をしようとすることが多い。書くことの中でも、場面や状況を説明するようになってきている。
C児 (Cグループ)	身の回りの出来事について自分から相手に伝えようとする。友達の名前など、身近な語句を読もうとする。なぞり書きの課題を与えると一生懸命に取り組む。	ひらがなやカタカナの語句、漢字(1年生程度)。簡単な文について読んだり書いたりすることができる。身の回りの出来事について、相手にわかるように順序よく話すことができる。	話したり書いたりする中で、場面から印象的な体験を取り出したり、場面について説明をしたりして表現をすることができる。

(3) 目　標

① 自分がやってみたいお手伝いの場面を選びながら、楽しくおてつだいめいじんのコーナー（学級おはなしコーナーの一部）をつくり、友達や家族に紹介することができる。

② 語句や文を読んで自分のしてみたいお手伝いの練習をし、自分の表現したい場面に応じて、友達と一緒に話したり書いたりすることができる。

(4) 計　画（約7時間）

ねらい	学習活動	配時
○ 伝えようとする意識をもとに、話したり書いたりする。	1．おてつだいめいじんのコーナーづくりについて話し合う。 (1) 家でしているおてつだいについて、話したり書いたりして紹介しあう。 (2) おてつだいめいじんのコーナーを作り、家の人や友達に紹介することを知る。	2時間 ① ①
○ 話したり書いたりすることをもとに、表現力を身につける。 ○ 身につけた表現力を活用する。	2．おてつだいめいじんのコーナーをつくる。 (1)「あらう」などのことばを中心に、お手伝いしたことを話したり書いたりする。→表現したいものを選んで友達と一緒に話したり、書いたりする。 (2)「たたむ」などのことばを中心に、お手伝いしたことを話したり書いたりする。→表現したいものを選んで友達と一緒に話したり、書いたりする。 〈課題〉お手伝いに挑戦したことを紹介する案内ビデオや案内ノートを持ち帰り、家の人に見せる。	4時間 ④
○ 他の学級の友達にコーナーを紹介し、達成感を味わう。	3．おてつだいめいじんのコーナーを友達に紹介する。 (1) 自分の案内ビデオや案内ノートを見直す。 (2) 他の学級の友達をコーナーに案内する。 	1時間

(5) 子供の活動と考察

① であう段階の活動（1／7時・2／7時）

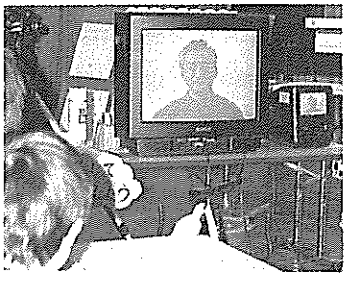
教師の支援	子供の活動
○ おもちゃのコーナーの提示 ○ おてつだいの場の提示	①T.（前題材のおもちゃのコーナーを提示） K1（喜んでおもちゃのコーナーから、案内ビデオや案内ノートを取り出す。)T.「どうやって遊ぶの」 K2（案内ノートを読みながら）「ぼうをおしこみます。」と話し、空気鉄砲の玉を飛ばす。K3「ポンと音がしてとびます。」T.「ポンって飛んだんだね。お母さんは何て言ってた？」K4（母親の返事を見返し、うれしそうに）「じょうずになったねって。」 ②T.（おてつだいの場の提示） K5（さらをあらう動作をしながら）「おさらをあらう。」と話し、「おさらをあらう。」とノートに書く。T.「だれに教えようか。」K6「おかあさんにもおしえたい。」と話す。  多様な言語活動に取り組む子供たち

考察1

前題材の案内ビデオや案内ノートを持ち帰り、それらに対する問いかけや励ましのことばを家の人に書いてもらったことにより、K4のような家の人とのやりとりを通した快の感情を味わっている。その快の感情がもとになり、お手伝いの場を提示してお手伝いの体験をさせると、子供たちは家でしているお手伝いについて話したり、ノートに書いたりする言語活動に積極的に取り組んでいる。また、その結果、K6のように新たな相手意識や目的意識を持って言語活動に取り組もうとする姿を引き出すことができた。既習の経験の提示や言語活動を体験させたことが、家族とのやりとりを意識させ、おはなしコーナーづくりへの目的意識を明確化させる上で有効に働いたものであると考える。

② かかわる段階の活動

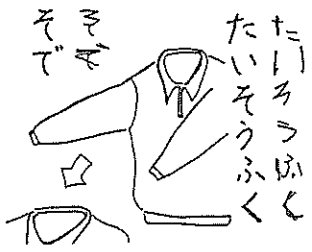
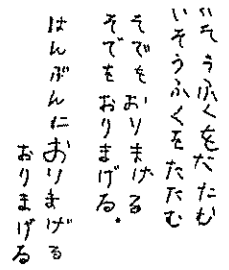
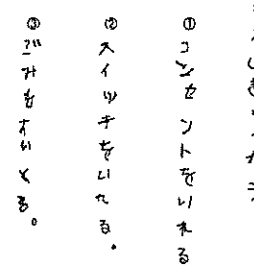
ア．多様な言語活動をもとに、表現力を身につけていく活動　（3／7時）

教師の支援	子供の活動
○ 案内ビデオ、案内ノートをつくる場	①T.（家の人によるビデオおたよりの提示） ビデオ「どんなことをするのかおしえてね。」 F1ビデオの映像を見てうなずきながら、うれしそうに「はい。」と応える。 ②（案内ビデオづくりの場で）T.「どんなことをしたの。」K1「おさらいをしました。」T.「どんなふうにしたの。」K2「せんざいをつけました。」  家の人によるビデオおたよりを見る子供たち

考察2

前時に作った案内ノートや案内ビデオについて、ビデオの映像をもとにした、家の人との即時的なやりとりをさせたことより、F1にみられるような言語活動に取り組もうとする意欲を高めることができたものと考える。また、K児はお手伝いの模擬体験の場でしたことを、家の人からのビデオや、教師とのやりとりを通して、案内ビデオに話したり案内ノートに書いたりする言語活動を繰り返し、その中で教師の問い掛けに対してK1やK2のように応えていることから、やりとりの繰り返しの中で、「どんなことをしたの。」という問いかけに対する表現力を身に付けることができているものと考える。

イ．身につけた表現力をもとに、表現したいものを選んで表現する活動　　（６／７時）

教師の支援	F児の活動	A児の活動	K児の活動
○　前時の案内ビデオ、案内ノートの提示 ○　母親の返事の読み聞かせ ○　おてつだいめいじんのコーナーづくりの場の提示 ○　自分の表現したい場面に応じて案内ビデオ、案内ノートをつくる場  ○　案内ビデオに話すC児 ○　案内ビデオ、案内ノートを発表する場	F1家の人からのビデオを見て「わーっ」と喜ぶ。 ●ほうきを使う場で F2友達の様子を見ながら「ゆかをはく」と書かれた文カードを案内ノートに貼り、視写する。案内ビデオに話す場に行き、はく動作をして話す。 T.「ほうき。」 F3「ほー。」 ●たたむ体験の場で F4たたむ動作をしてからノートに語句を視写して書く。  A児の書いた案内ノート F5案内ノートを声を出して読む。家の人に見せることを知ると、手をたたいて喜ぶ。	A1家の人からのビデオを見て「おかあさん。」と言って喜ぶ。 T。「だれにおしえるの」 A2「おかあさん。」 A3案内ビデオに話す場に行って、教師の問い掛けに応える。T。「なにをしたの。」A4「セーターをたたむ。」と話す。 A5案内ノートに、[そでを]と[おりまげる]の語句カードを続けて正しく貼ったり、さらに[はんぶんに]と[おりまげる]の語句カードを続けて正しく貼る。いずれも正しく視写をする。  B児の書いた案内ノート A6案内ノートを「たいそうふくをたたむ。」、「そでをおりまげる。」などと指でなぞりながら読む。	T.「だれにおしえるの」 K1「おとうさんやおかあさんにおしえたい。」 T.「何と言ってたの。」 K2「上手だねって。」 ●たたむ体験の場で K3たたむ動作をしてから案内ノートに「たいそうふくをたたむ」と書く。「まず」、「したにおく」と友達に話しながら靴下をまるめる動作をしてたたみ方を教える。 ●掃除機を使う場で T.「どうするの。」 K4「コンセントをいれる。」などと話し、案内ノートに正しい文で書く。  C児の書いた案内ノート K5案内ノートを友達に発表する。 T.「だれにみせるの。」 K6「おとうさんやおかあさんにおしえたい。」

考察３

Ｔ児はＦ２にみられるように、友達の様子を模倣しながら印象的な場面を文字と結び付けて書き、さらに、案内ビデオに話す場に行き、教師の模倣をしながら話している（Ｆ３）。Ａ児は、Ａ１・２にみられるように、家の人からの返事のビデオによりお母さんに伝えようという意識を明確にしている。そして、前時までの話し方や書き方を生かしながら、教師とのやりとりをもとに案内ビデオの場で話したり（Ａ４）、案内ノートに繰り返し書いたりしている（Ａ５）。Ｋ児は、家の人へ伝えたいという思いをもとに（Ｋ１・２）、模擬活動の場から様々なお手伝いを選び、話したり書いたりしている。その中で、Ｋ３にみられるように、接続詞を使う表現に高まりがみられた他、掃除機を使ったことについて、案内ノートに順序よく書

いていく姿（Ｋ４）がみられた。できるだけ順序よく表現しようとする姿に、友達や家族にわかりやすく知らせたいな、という思いが伺われる。これらの姿から、課外の時間に、家の人に自分の思いが伝わる喜びを味わう経験をさせることを繰り返したこと、家の人からの返事のビデオにより、新たな言語活動への意欲をさらに高めたこと、身につけた表現力をもとに自分の伝えたいお手伝いを選択させたことが、目的意識や状況の理解を明確にしながら、身につけた表現力を積極的に生かしていく姿を引き出す上で有効に働いたものと考える。さらに、身につけた話し方や書き方を生かすことのできる案内ビデオ・ノートづくりの場を提示したこと、個のことばの基礎力に応じた語句カードをもとに書かせたことなどが、ことばの基礎的力や、話し方の知識・技能、状況や相手に応じた表現などの表現力を高めていく上で、有効に働いたものと考える。また、発表では、Ｆ５やＫ６から、友達に紹介させる場を設定したことにより、伝わった喜びや家族にも読んでもらえるという期待感を味わわせ、言語活動をさらに連続発展させることができたものと考える。

③　あらわす段階の活動（７／７時）

教師の支援	子　供　の　活　動
○　おてつだいめいじんのコーナーを紹介する場	A1お手伝いの模擬体験の場で皿を洗っている。 他学級の児童（お手伝いの様子を側で見ている。）A2皿の洗い方について、他学級の友達がわからないことを「こうするのよ。」と話して繰り返し教えながら、一緒にお手伝いをする。A3案内ビデオの場へ行き、自分のしたことを話して教えながら案内ビデオを友達とうれしそうに見ている。 K1（他学級の友達を誘っておてつだいめいじんのコーナーを見せる。）（案内ノートを見ている。）Ｋ２自分の書いた案内ノートを見せながら、これまでに作ったあんないノートや、自分のしたお手伝いについて話す。



友達に案内ノートを読み聞かせるC児

他学級の児童

考察４

他の学級の自分の好きな友達を、自分の得意なお手伝いのコーナーにつれて行き、お手伝いの仕方を丁寧に話して教えたり、案内ノートや案内ビデオを見せたりする姿がみられた。その中で、自分から人とのかかわりを広げようとしたり、「こうするのよ。」と友達にお手伝いの仕方を教えるなど、身につけた表現力を、学校生活の中においても生かそうとしている姿を引き出すことができたと考える。これは、これまでの表現物を自由に利用できる「おてつだいめいじんコーナー」の場をもとに、伝えたい友達を選ばせながらやりとりをさせたことが有効に働いたものと考える。また、合同での学習や休み時間に、友達と伝え合う姿も多くみられるようになっている。



他学級の友達と一緒に案内ビデオを見る子供たち

(6)　全体考察

国語科学習において、個々の表現の実態を生かしながらおはなしコーナーを作り上げていくことを通して、日常の場面でも、友達や教師に、自分の思いを積極的に表現したり、相手の表現を受け入れたりしようとする姿がみられつつある。これは、①目的意識を明確にしながら話したり書いたりする体験をもとに表現力を身につける、②身につけた表現力をもとに表現したいものを選んで話したり書いたりする、③伝えたい相手を選んで紹介する、からなる活動を構成したことが、子供たちがことばを生活の中で積極的に生かしていく姿を引き出す上で有効に働いているものと考える。

自ら運動にかかわる楽しさを味わう体育科学習

―― 「もの・人・きまり」の視点を取り入れた運動遊びの活動を通して ――

障害児教育研究部（体育科）　松本良一

1．主題の意味と重要性

(1) 主題の意味

運動にかかわる楽しさを味わうとは　子供たち一人一人が能動性・自主性を発揮して運動対象に働きかける中で、働きかける運動対象がひろがったり働きかけ方が高まったりすることで味わう、「たくさんうごけた」「ちからいっぱい、うごけた」などの自分の動きへの達成感・成就感のことである。「能動性・自主性の発揮」とは、運動対象に出会った時に子供が「おもしろそうだ」「やってみたいな」という運動への興味・関心をもち、自分から、自分で運動対象に働きかけようとすることである。「働きかける運動対象がひろがったり働きかけ方が高まったりする」とは、運動対象へ働きかける中で、一つの動きが上手になり動きが高まったり、様々な動きができるようになり動きがひろがったりすることである。ここでいう運動対象とは、子供たちが運動するときにかかわる対象となるものであり、具体的には、ボールや器械・器具などの用具や道具である「もの」、一緒に運動する友達や教師である「人」、運動するときに守らなければならない、または、つくる「きまり」の3者である。「自分の動きへの達成感・成就感」とは、運動をしたときに味わう快の感情のことであり、子供が運動をするときのエネルギーとなるものである。その感情は、子供によって様々であり、「こんなうごきがじょうずにできるようになった」と自分を振り返ることもあれば、「～ちゃんといっしょにできて、たのしかった」と友達に向けられることもある。

以上のような姿を具体化することで、運動への興味・関心、運動に親しむ態度、自分の好きな運動を選んで行う力、運動を楽しむための技能や体力などの子供たちの運動生活を豊かにする力が培われ、子供たちの現在及び将来のよりよい生活を考える上で意義深い。

(2) めざす子供の具体的な姿

具体的に「運動にかかわる楽しさを味わう」子供の姿を次のように考える。①「やってみたいな」と運動への興味・関心をもつ姿、②「ボールをなげるんだ」「へいきんだいをわたるんだ」など運動対象を意識する姿、③「このゴールをあそこに置こう」など用具や道具を操作する姿、④「～ちゃんといっしょにやろう」とまわりの友達に働きかける姿、⑤「こんどはこんなふうにやろう」「こんどはこれをやろう」と学習したことを生かして、自分の好きな運動を選び、繰り返し運動する姿、⑥「～ができるようになった」「～くんといっしょにやれて、おもしろかった」など運動への達成感・成就感、効力感を味わう姿、⑦「こんどは、やすみじかんに、やきゅうをみんなでやろう」と、友達に働きかけて生活の中で運動する姿、などである。

(3) 体育科で培う生活力

体育科では、めざす子供の姿を具体化する中で、運動対象に働きかける力を培いたいと考える。具体的には、①情意的なものとして、運動への関心、意欲、態度や自分への自信、②能力的なものとして、自分の好きな運動を選ぶ力や友達と協調的に運動する集団参加の力、③知識・技能的なものとして、生活に必要な動作を支える基本的な動き、運動を楽しむための技能、運動への知識やきまりの理解、などの力である。これらの力が培われることにより、結果的に生きていくためのたくましい体力が培われ、生活力につながっていくものと考える。

2．副主題の意味について

「もの・人・きまり」の視点を取り入れた運動遊びの活動とは、子供自らが運動対象を選びながら繰り返し多様に働きかける中で、自分の動きをひろげたり高めたりすることである。ここでいう「もの・人・きまり」の視点を取り入れるとは、子供たちが運動するときに働きかける用具や道具（もの）、友達や教師（人）、きまりへの働きかけ方を学習内容として設定することである。具体的に、ボールの操作の仕方や器械・器具の克服の仕方、友達の動きへの対応の仕方、きまりに応じた動き方や勝敗の決定の仕方などである。ここでいう「運動遊び」とは、一つの運動内容の中に遊びの原理（かけ・競争・めまい・変身模倣の４つ）を取り入れた、子供の能動性・自主性の発揮ができる選択性のある活動のことである。この運動遊びは一人遊びから集団の遊びへ、単一の動きの遊びから複数の動きを組み合わせた動きや連続した動きの遊びへと発展していく。さらに、現在の生活においては、学校での遊び、家庭での遊び、地域での遊びに生かされ、将来の生活においては、自分の余暇の利用や職場集団におけるレクリエーションなどに生きると考える。

3．活動づくりの具体的な方途

子供自ら運動にかかわる楽しさを味わう姿を具体化するための、「もの・人・きまり」の視点を取り入れた運動遊びの活動を行うために、具体的に、児童の実態の把握、学習内容の設定、活動構成、教材化という視点で研究を行う。

(1) 児童の実態のとらえ方

子供の運動とのかかわりの実態を、学習場面と日常生活の場面で次のような観点からとらえる。

① 能動性・自主性の発揮
- 運動に対する興味・関心→どのような運動が好きか、どのような運動の仕方を知っているか

② 子供たちが働きかける運動対象と働きかけ方
- 運動対象の種類→どのような用具・道具の操作経験があるか、どの程度の人数で一緒に活動できるか、どの程度のきまりを理解できるか
- 運動対象への働きかけ方→走る・跳ぶ・投げる・渡る・回るなどの基本的な動きがどの程度できるか、どの程度の用具・道具の操作ができるか、どのような友達への働きかけをするか

(2) 学習内容の設定

以上のような観点からとらえた児童の実態から、「もの・人・きまり」への働きかけ方という視点で学習内容を設定する。具体的には、次の通りである。

段階	ものへの働きかけ	人への働きかけ	きまりへの働きかけ
Ⅰ	自分一人で単一の動きをする。	一人で遊ぶ。	友達を押さない、たたかないなどのきまりを守る
Ⅱ	一つの用具・道具に働きかけて単一の動きをする。	友達の誘いを受け入れて１対１で遊ぶ。	順番を守る、勝敗の決定を聞くなどのきまりを守る。
Ⅲ	複数の用具・道具に働きかけて連続の動きをする。	友達に誘いかけて１対１で遊ぶ。	攻守の役割、勝敗の決定などのきまりを守る。
Ⅳ	複数の用具・道具に働きかけて組み合わせの動きをする。	友達に誘いかけて小集団で遊ぶ。	攻守の交代、勝敗の決定などを自分で行う。
Ⅴ	活動の場を自分でつくり連続・組み合わせの動きをする。	チームをつくって、小集団対小集団で遊ぶ。	攻守の勝敗の決定などのきまりを自分でつくる。

(3) 選択性のある運動遊びの活動の活動構成

運動遊びの活動を「であう段階」「ひろげる段階」「いかす段階」の３段階で構成する。具体的には、次の通りである。

① であう段階

新しい運動を体験することで、もの・人・きまりの運動対象を意識する活動。

② ひろげる段階

もの・人・きまりの運動対象を自己選択しながら、繰り返し運動する中で、自分の動きをひろげたり高めたりする活動。運動対象への働きかけ方を知る自己選択の活動→運動対象への働きかけ方を使う自己選択の活動、の2活動で構成される。

③ いかす段階

学習してきたことを、生活に近い条件の場や生活の場で応用する活動

【基本的な指導のしくみ】

	であう段階	ひろげる段階	いかす段階
活動と内容	1．新しい運動遊びを体験する。 ○新しい運動への関心意欲 ○もの・人・きまりの意識化	2．運動対象を自己選択しながら楽しく運動遊びをする。 運動対象への働きかけを知る活動 くり ↑ ↓ 返し 運動対象への働きかけ方を使う活動 ○動きのひろがりと高まり	3．学習してきたことを生かして、楽しく運動遊びをする。 ○学習の場での応用 ○生活の場での応用
支援	・ゴールしたりシュートしたりすることを豊富に体験させる成功体験	・簡単な運動対象から複雑な運動対象への対象や内容の配列 ・子供が自己選択できる場の設定 ・個に応じた支援	・合同体育の場の設定 ・生活の場で応用できるような運動環境の設定

(4) 教材化にあたって

教材化にあたっては、次のことに留意する。

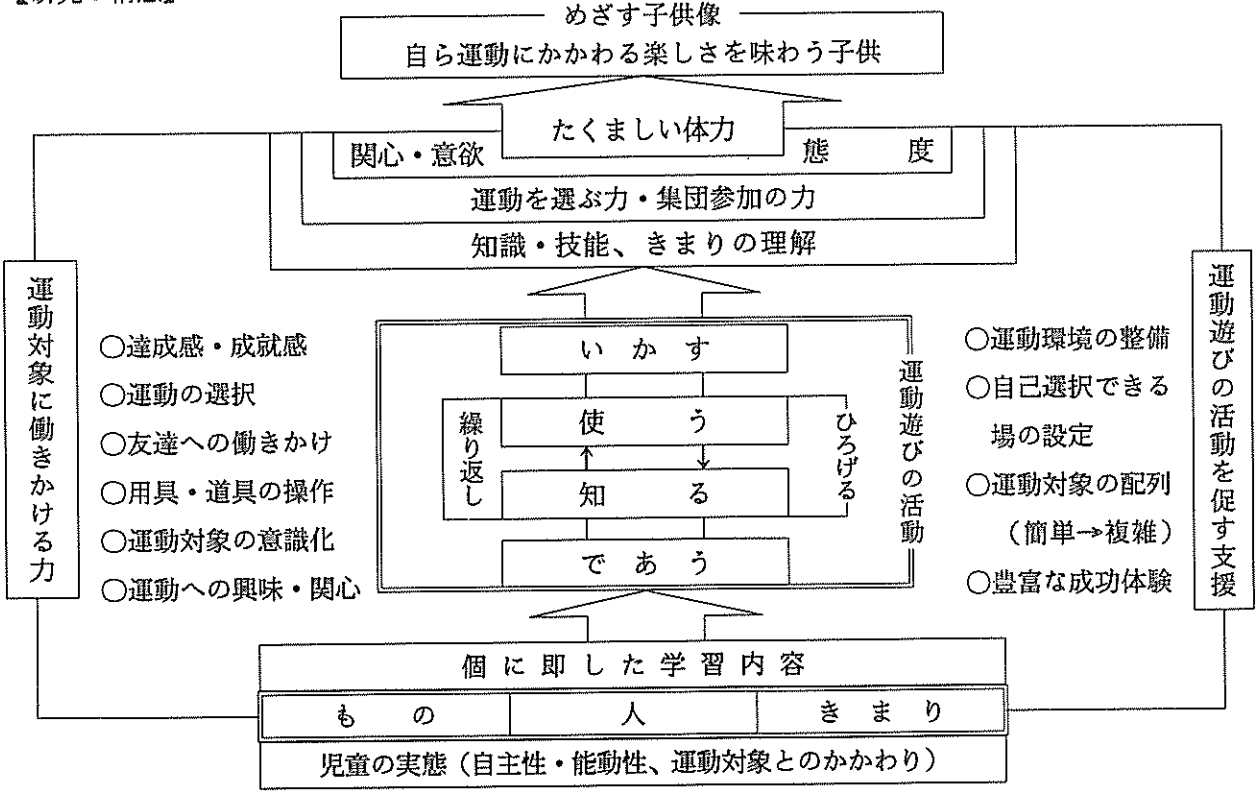
① 子供の興味・関心に応じた運動を素材として選定すること。

② 子供がきまりを理解しやすいように、攻守分離の形態の運動を選定すること。

③ 多様な動きを経験できるような運動内容を含んだ運動を選定すること。

④ 生涯体育の基礎となるような運動文化財につながる運動を素材として選定すること。

【研究の構想】



4．指導の実際と考察

(1)　題材名　「ボールランドであそぼう！（運動遊び）」（第３・４学年さくら組）

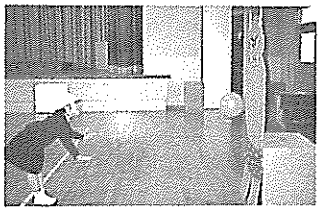
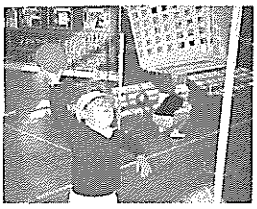
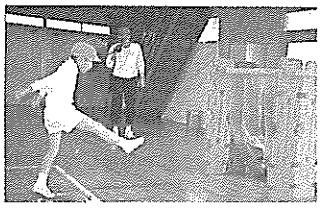
(2)　児童の実態と個に応じた学習内容

	自主性・能動性の発揮	運動対象へのかかわり	個に応じた学習内容
A児 （Aグループ）	自ら運動を行うとすることは少ないが、ボールを使った運動への興味・関心は高い。バスケット遊びやサッカー遊びのやり方を知っている。	ボールを操作する細かな動きはできるが、移動を伴う大きな動きが不得手である。活動中や休み時間の遊びでは一人でじっとしていることが多い。	○目標を意識した多様なボール操作の動きをすること【もの】 ○友達の誘いかけを受け入れて一緒に遊ぶこと【人】 ○勝敗の決定を知って遊ぶこと【きまり】
B児 （Cグループ）	自分から運動を行おうとすることが多いが、持続しない。バスケット遊びやサッカー遊びのやり方を知っており、高学年の友達に誘われて行う。	ボールを操作する細かな動きが不得手である。簡単なきまりを守って活動することができるが、友達ときまりを介して活動することはできない。	○課題を意識した多様なボール操作の動きをすること【もの】 ○友達を誘って一緒に遊ぶこと【人】 ○勝敗の決定を知り簡単なきまりを守って遊ぶこと【きまり】

(3)　目　標

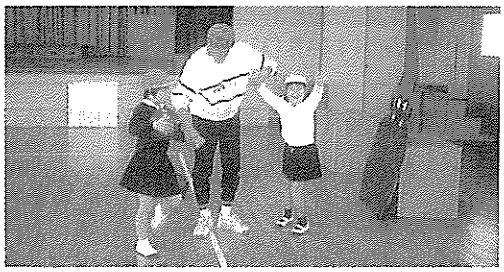
◎　自分の好きなボールランドの遊びを選んで楽しく遊ぶことができる。【運動にかかわる楽しさ】		
○　投げる、ける、つく、走るなどのボール操作を基本とした動きをひろげることができる。【もの】	○　自分が選んだ遊びに友達を誘う、友達の誘いかけを受け入れるなど、友達と一緒に遊ぶことができる。【人】	○　攻守の役割、勝敗の決定などの簡単なきまりを守って遊ぶことができる。【きまり】

(4)　計　画（約７時間）

ね　ら　い	学　　習　　活　　動	配 時
○　ボールランドでの遊びの成功体験をして遊びの楽しさを味わう。	１．「ボールランドであそぼう！」の遊びを体験する。【であう】    ボール投げ遊び　　バスケット遊び　　サッカー遊び	１時間
○　それぞれの遊びに必要な動きや友達とのかかわり方簡単なきまりを知る。 選択の対象：ボールの種類、ゴール、スタート位置、一緒に遊ぶ友達、など ○　身につけたことを使い、遊びと友達を選んで遊ぶ。 選択の対象：遊び、きまり	２．楽しくボールランドでの遊びを繰り返し行う。【ひろげる】 (1)　３つの遊びをそれぞれ行う。 【ボール投げ遊び】ボールを投げたり転がしたりして、鬼を倒す　↓　早く鬼を倒した人の勝ち。 【バスケット遊び】ボールを投げてゴールに入れる。　↓　早くゴールに入れた人の勝ち。 【サッカー遊び】ボールをけってゴールに入れる。　↓　早くゴールに入れた人の勝ち。 ※　ゴールを子供が目標を意識できるよう工夫する。（活動１の写真参照） ※　対戦相手と勝敗の決定をするための教具を工夫する。 (2)　自分の好きな遊びを選んで友達と一緒に遊ぶ。 ①自分がやりたい遊びを選ぶ。→②自分が一緒にやりたい友達に誘いかける。③→友達の誘いを受け入れて遊ぶ。 ※　個に応じた支援で友達とのかかわりや動きをひろげる。	５時間 ③ ② ③
○　生活に近い条件で遊び方を生かす。	３．合同体育や休み時間にボールランドでの遊びを行う。【いかす】 (1)　他学年の友達にボールランドでの遊びを紹介し、一緒に遊ぶ。 (2)　休み時間に、自分のやりたい遊びをする。 ※　休み時間に自由に使える道具・用具を準備し、運動環境を整える。	１時間 ① 休み時間

(5) 子供の活動と考察

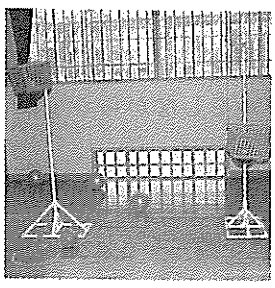
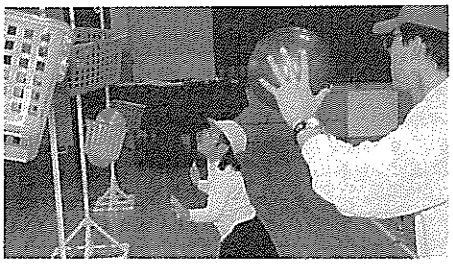
① であう段階の活動…ボールランドでの遊びの楽しさを味わわせる。(1／7時)

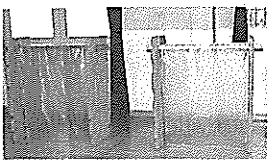
教師の支援	子　供　の　活　動
○ボールランドの場の提示 ○柔らかいボールの準備 ○遊び方のモデル演示 ○全員の子供に成功体験をさせること ・ボール当て遊び ・バスケット遊び ・サッカー遊び	全員の子供がボールを投げる、ボールを入れる、ボールをける動きと、的を倒す、ゴールに入れるという遊び方を体験した。また、それぞれの遊びの中で成功体験をし、ボールを投げたり入れたりして喜ぶ姿や、「もっと遊びたい」とつぶやく姿が見られた。   ボールランドでの成功体験をして喜ぶ子供たち

考察1　子供たちが楽しくボールランドでの遊びを体験する姿や、次時からの遊びへの動機を高める姿が見られた。この中で、ボールというものを介して投げる・けるなどの動きを体験する姿、友達と一緒に遊ぶ中で人を意識する姿も見られた。このような子供の姿を具体化できたのは、次のようなことが有効であったからだと考える。ア．倒す・入れるという子供が目的意識をもちやすい遊びを設定したこと、イ．全員の子供に成功体験をさせたこと、ウ．柔らかい様々な大きさや種類のボールを準備したこと。

② ひろげる段階の活動自己選択の活動を通して遊び方を知り、その遊び方を使う。

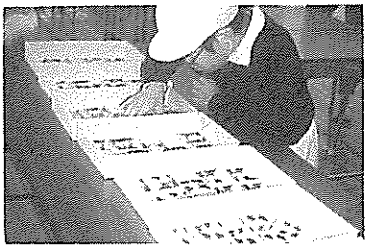
遊び方を知る自己選択の活動（動きや友達への働きかけ方、簡単なきまりを知る活動）　※ 活動内の（）部分は教師の具体的な支援（2～4／7時）

教師の支援	A　児　の　活　動	B　児　の　活　動
○子供が楽しく遊べる場の設定 ・ボール投げ遊び  鬼の標的 ・バスケット遊び  高さが選べるゴール	【ボール投げ遊びの活動で】 A1．ボールを持ってじっとしているが教師のモデル演示（両手で上からボールを投げる動き）を見てボールを上から投げる。 【バスケット遊びの活動で】 A2．教師のモデル演示（下から両手でボールを投げる動き）を見てボールを下から投げ出し、入るまで粘り強く投げる。 A3．下から投げる動きをした時に、教師のモデル演示（両手で上から投げる）を見て、上から投げてシュートする。 【サッカー遊びの活動で】 A4．モデル演示（ゴールの前にボールを置いてける動き）を見て、ボールをゴールにけり入れる。 【人とのかかわりやきまりの理解】 A5．教師の声かけ（～が一緒にやろうっていって	【ボール投げ遊びの活動で】 B1．両手でボールを上から繰り返し投げるが、教師のモデル演示（片手で上から投げる動き）を見てボールを片手で上から投げる。 【バスケット遊びの活動で】 B2．自分で色々な高さのゴールを選んで繰り返しシュートするが、教師の声かけ））（もっと遠くからシュートできるかな）を聞き遠くから繰り返しシュートする。  教師の声かけとモデル演示を受けてシュートするB児（B4．の姿）

・サッカー遊び  シュートが意識できるゴール ○個に応じた教師のモデル演示、声かけ ○得点ボード	るよという媒介の声かけ）を聞き、一緒に遊ぶ。 A6. 友達や教師の勝敗の決定（～君の勝ち、負け）を聞き喜んだり、悔しがったりする。  友達とかかわりながらボール投げ遊びをするA児（A5.の姿）	【サッカー遊びの活動で】 B3. 止まってボールをけるが教師のモデル演示（助走をつけてける動き）を見て、助走をつけてボールをシュートする。 【人とのかかわりやきまりの理解】 B4. 得点ボードを使い、一緒に遊ぶ友達を選んで友達に働きかけ、複数の友達と一緒に遊ぶ。 B5. 得点ボードを使って勝敗を決定する。

考察２　ボールランドでの３つの遊びを体験する中で、運動対象への働きかけ方を知る姿を見られた。ものにかかわる動きについては、投げる・入れる・けるなどの動きを知る姿（A1.～A4 、B1.～B3.）が見られた。また人とかかわることについては、友達を誘ったり誘いかけたりして活動する中で得点ボードを使い、友達への働きかけ方を知る姿（A5.B4.）が見られた。さらにきまりについては、得点ボードと教師の声かけを聞き、勝敗の決定をする中できまりを知る姿（A6.B5.）も見られた。以上のような子供の姿から、運動対象への働きかけ方を知る姿を具体化する上で、次のようなことが有効であったと考える。ア．ボール操作の動きを基本に、投げる、入れる、けるなどの変化のある遊びを設定したこと、イ．子供たちがゴールや一緒に遊ぶ友達などを選んで楽しく遊べるような場の設定を行ったこと、ウ．ボール操作の動きのモデル演示や動きへの賞賛、子供同士の媒介となる声かけなど個に応じた教師の支援を随時行ったこと。

知った遊び方を使う自己選択の活動（動きや友達への働きかけ方、簡単な決まりの理解の活用）　（5・6／7時）

教師の支援	A 児 の 活 動	B 児 の 活 動
○自己選択を促す場の設定 ・３つの遊びの場 ・友達の写真カード ・得点ボード ○自己選択をうながす個に応じた支援 ・個に応じた遊びへの誘いかけ ・教師が媒介となってかかわりをひろげる声かけ  遊んだ友達を発表するB児（B4の姿）	A1. 教師の声かけ（友達の仲を媒介する）を聞きバスケット遊びを選び、友達と一緒に繰り返し遊ぶ。 A2. ドリブルの動きをした時に教師の声かけ（すごいね、そのままシュートできるかな）を聞き、ドリブルからシュートをする。 A3. 教師の声かけ（友達との遊びを進める）を聞き、「オッケー」とはっきりと意志表示をして、対戦相手の写真を自分から取りに行く。  対戦相手の写真を選ぶA児（A3. の姿） A5. 教師の「次はどれがやりたい」という声かけで、自分からボール投げ遊びへ行く。	B1. 自分から友達「～ちゃん、いっしょにしよう」と誘いかけて一緒に遊ぶ。 B2. 教師の声かけ（Bちゃんの勝ちだったね）を聞きながら得点ボードをめくり勝敗の決定をして喜ぶ。  得点ボードで勝敗の決定をして喜ぶB児（B2. の姿） B3. バスケット遊びで、友達の動きを見て、ドリブルをしながらシュートする。 B4. 得点ボードで学習を振り返り、一緒に遊んだ友達を嬉しそうに発表する。

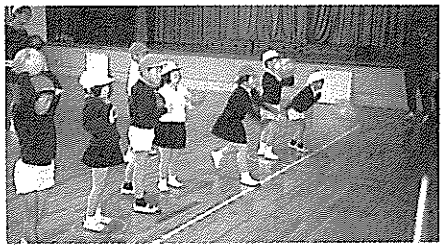
考察３　自分の好きな運動対象を選んで遊ぶ中で、運動対象への働きかけ方を使う姿が見られた。その働きかけ方も教師の支援を受けていたものが、徐々に自分から働きかける姿に変容していった（A1.3.5.B1.）。その中で、働きかける運動対象のひろがり（表Ⅰ）やきまりの理解の深まり（B2.）、動きの高まり（A2.B3.）が見られた。以上のような子供の姿から、運動対象への働きかけ方を使う姿を具体化する上で、次のようなことが有効であったと考える。ア．３つの遊び場の中に、友達の写真カードや得点ボードを置いた自己選択を促す場の設定、イ．３つの遊びと３つのきまり、一緒に遊ぶ友達を選択の対象として設定したこと、ウ．子供の好きな遊びに応じた教師の遊びへの誘いかけや友達との媒介をする声かけなどの支援を随時行ったこと。

表Ⅰ．子供の自己選択活動の結果（１時間当たり）

	遊び	計	友達
A児	ボール投げ遊び …2回 バスケット遊び …5回 サッカー遊び …4回	11回	3人のべ11人
B児	ボール投げ遊び …6回 バスケット遊び …5回 サッカー遊び …3回	14回	4人のべ14人

③　いかす活動…生活に近い条件で学習してきたことを応用させる。（７／７時）

教師の支援	子供の活動
○合同体育の時間での遊びの紹介の場の設定 ○運動場にボールランドの遊びの道具を準備した運動環境の設定	合同体育の時間にボールランドでの遊びを低学年や高学年の学級の友達に紹介して、一緒に遊ぶ姿が見られた。また、休み時間に運動場で、低学年の友達や学級の友達を誘って、バスケット遊びやサッカー遊びをする姿も見られるようになった。


合同体育の時間に他の学校の友達と一緒に遊ぶ子供達の姿


楽しく遊べたことを喜ぶ子供達

(6)　全体考察

①　選択性を取り入れた運動遊びの活動について

右の写真にあるように、わずかではあるがさくら組の子供たちの休み時間の過ごし方が変わってきた。一人でじっとしることの多かったA児がボールで遊ぶようになってきている。また、B児は、低学年の友達とかかわって遊ぶようになってきた。以上のような子供の姿から、次のようなことが有効でと考える。ア．選択性を取り入れた活動は日常の運動環境を整えることと関連して、運動の日常化に有効である。イ．選択性を取り入れた活動を、知る自己選択→使う自己選択の２活動で構成することにより、子供自ら運動にかかわる中で、動きをひろげ高めることができる。


休み時間に他の学校の友達と一緒に遊ぶさくら組の子供たち

表Ⅱ．子供の動きのひろがりと高まり（３－(2)学習内容による変容）

	知る活動			使う活動
A児	ものへの働きかけ	Ⅱ	⇨	Ⅲ
	人への働きかけ	Ⅰ		Ⅱ
	きまりへの働きかけ	Ⅰ		Ⅲ
B児	ものへの働きかけ	Ⅱ		Ⅲ
	人への働きかけ	Ⅱ		Ⅳ
	きまりへの働きかけ	Ⅱ		Ⅳ

②　もの・人・きまりの視点を取り入れたことについて

表Ⅱにあるように、子供の動きのひろがりや高まりを見ることができた。このことから、もの・人・きまりの視点を取り入れ、運動対象への働きかけ方を運動遊びの内容として設定したことは、子供自ら運動にかかわる楽しさを具体化する上で有効であったと考える。

自ら表現する喜びを味わう音楽科学習

――個の音楽の楽しみ方を生かした活動を通して ――

障害児教育研究（音楽科） 林 田 千 枝

1．主題の意味と重要性

(1) 主題の意味

自ら表現する喜びを味わうとは、楽曲が流れる中で、子供たちが楽曲の場面や動きを想い描きながら、友達と一緒に、歌ったり、踊ったり、楽器を鳴らしたりして身体全体を動かして繰り返し楽曲にかかわって表現する姿である。

精神発達に軽・中度の遅れのある子供たちの歌ったり、踊ったり楽器を鳴らしたりする姿は、身近な動物や花や虫、乗り物などを好んで表現することが多い。また、音楽的表現の様子を見てみると、次のような特徴が見られる。①楽曲が流れると身体全体を揺らすことから、手や足を動かしながら表現する。②身体の動きが徐々に分化してくることにともなって、楽曲のリズムに合わせて、身体を動かしながら進んで楽器を鳴らして表現する。③音程や楽曲の場面や動きをとらえて部分部分であるが楽曲に合わせて動きながら歌って表現する。

このように、子供たちは、身体表現をベースとしながら器楽表現、歌唱表現を織り混ぜながら、表現している。楽曲の場面や動きを広げて、身体全体を使って表現したり、楽器を使って表現したり、歌って表現したりしながら音楽的な要素を感じ取っていくものである。

(2) めざす子供の具体的な姿

具体的に、「自ら表現する喜びを味わう」子供の姿を次のように考える。

①「～したい」と楽曲に興味・関心を示している姿。

②「～なって～したい」と場から楽曲の場面や動きを広げている姿。

③「（楽器を持って）～したい」「（お面をもって）～したい」と自分なりの表現方法を選んで表現している姿。

④「やった」「たのしかった」と達成感・成就感にひたっている姿。

以上のような子供の姿を具体化することによって次のような資質や能力が養われると考える。

①楽曲に興味・関心を持ち、友達と楽しく表現しようとする意欲や態度。

②楽曲の場面や動きをイメージする力。

③表現する力（身体表現する力、歌唱表現する力、器楽表現する力）

④音楽的要素を感じ取る力、などの資質や能力を育てていくことが大切である。

このように、音楽が流れる中で体を動かして自ら表現することで音楽の楽しみ方を知り、生活への積極性を生み出すことができると考えられる。

2．副主題について

個の音楽の楽しみ方を生かした活動とは、子供一人一人の表現特性を生かしながら子供たちの自主性・能動性を発揮させながら表現していく活動である。具体的には、子供が「～になって、～をもって、～したい」と得意な表現方法や好きな表現方法を自分で選んで表現していく活動である。

「個の音楽の楽しみ方」とは、子供一人一人の①表現するものへの興味や関心、②表現技能（身体表現、器楽表現、歌唱表現）、③楽曲の要素のとらえ方、④楽曲の場面や動きのイメージの仕方
以上4点からみることができる。

子供たちは、楽曲や場に興味・関心をもって、「～したい」「～になって～したい」と場面や動きをイ

メージして身体を動かしながら表現していく。この中で、①表現するものへの興味や関心、②表現技能（身体表現、器楽表現、歌唱表現）、③楽曲の要素のとらえ方を身につけていくものである。しかし、場面や動きをイメージして表現していく時には、一人一人のイメージの持ち方が異なってくると考えられる。個の音楽の楽しみ方の違いは、一人一人のイメージの持ち方の違いに見ることができる。「リズムから」「楽曲に登場してくるものや歌詞から」のイメージの持ち方に大きく分けて見ることができる。

個の音楽の楽しみ方を生かしていくとは、子供一人一人が表現方法を選択していくことである。子供自身が選択した表現方法は、好きな表現方法や得意な表現方法であり、一人一人の音楽の楽しみ方が生かされている。これは、子供一人一人にとって最も自ら表現する喜びが大きくなると考えられ、ひいては、子供自身が音楽の楽しみ方を広げ、生活に結びつきやすいと考えられる。

3．活動づくりの具体的な方途

自ら表現する喜びを味わう姿を具体化するために、以下のように実態をとらえ、内容を設定し、基本的な指導のしくみを明らかにした。

(1) 児童の実態のとらえ方

精神発達に軽・中度の遅れのある子供たちの音楽科学習指導では、これまでも、子供たち一人一人の実態を興味・関心、表現する力や楽曲の要素を感じ取る力などを視点にとらえてきた。また、学習方法もイメージを広げながら身体全体を使って表現していく中で楽曲の要素を感じ取らせていた。子供のイメージの仕方についても、発達段階から考えておおまかにリズムから歌詞へと学習を構成してきた。しかし、子供たちの姿を細かくどのような時にどのような方法でという具合に分析してみると、イメージの仕方は、一人一人特性があり、リズムからイメージを広げていく子や歌詞からイメージを広げていく子と様々である。

具体的には、①リズムからイメージしていく子供は、楽曲の擬態語や擬声語とリズムがあっていたり登場してくるものの動きがリズムとあっている部分で身体を動かしたり、楽器を鳴らしたり、歌ったりして表現することが多い。その表現方法として楽器を選んで表現することを好む子供は楽曲のリズムからイメージして表現している場合が多い。②楽曲に登場してくるものや歌詞からイメージしていく子供は、楽曲に登場してくるものとこれまで自分が知っているものをつなげて特徴的な動きをまねたり、歌詞から場面や動きを想い描いて身体を動かしたり、楽器を鳴らしたり、歌ったりして表現することが多い。その表現方法として歌詞に登場してくるお面や表現絵を選んで表現することを好む子供は、楽曲に登場してくるものや歌詞からイメージして表現していると考えられる。

(2) 学習内容の設定

精神発達に軽・中度の遅れのある特殊学級では、身体表現が中心の内容である。子供の実態から身体表現や器楽表現、歌唱表現の内容と分けにくく、すべて身体表現ととらえる。

身体表現			楽曲の要素
身体を使っての表現	楽器を使っての表現	歌っての表現	
楽曲の場面や動き、音楽的要素をとらえて身体全体を使って表現すること。	楽曲の場面や動き、音楽的要素をとらえて身体を動かしながら、楽器を鳴らして表現すること。	楽曲の場面や動き、音楽的要素をとらえて身体を動かしながら、簡単な歌詞を歌って表現すること。	楽曲の拍の流れやリズム、強弱、速さなどをとらえて表現すること。

(3) 個の音楽の楽しみ方を生かした活動の活動構成

具体的な活動構成としては以下のようになる。

	であう	あらわす	まとめる
活動と内容	1.楽曲や表現の仕方に出会う。 ◦意欲の喚起 ◦楽曲や表現の仕方を知ること	2.自分なりの表現方法を自由に表現する。 (1) 多様な表現をする。 ◦楽曲の要素を感じて表現の仕方を広げること。 (2)表現方法を選択する ◦自分の好きな表現方法を選んで、表現の仕方を深めること 知る → → → 選ぶ	3.表現を生かして活動の達成感成就感を味わう。 ◦学習、生活の場での応用。
支援	・楽曲・場面・ペープサート ・装飾絵	◦情景画・楽曲の要素を強調する楽器 (リズムから) ◦楽器 ◦手づくり楽器 (登場するものや歌詞から) ◦お面 ◦装飾品	・音楽環境の整備 ・家庭との連携

(4) 教材化にあたって

子供自らの表現を引き出すための場の条件を以下のように設定する。

①子供が興味・関心を持ちやすく動きが想い描きやすい身近なものが登場する楽曲であること。

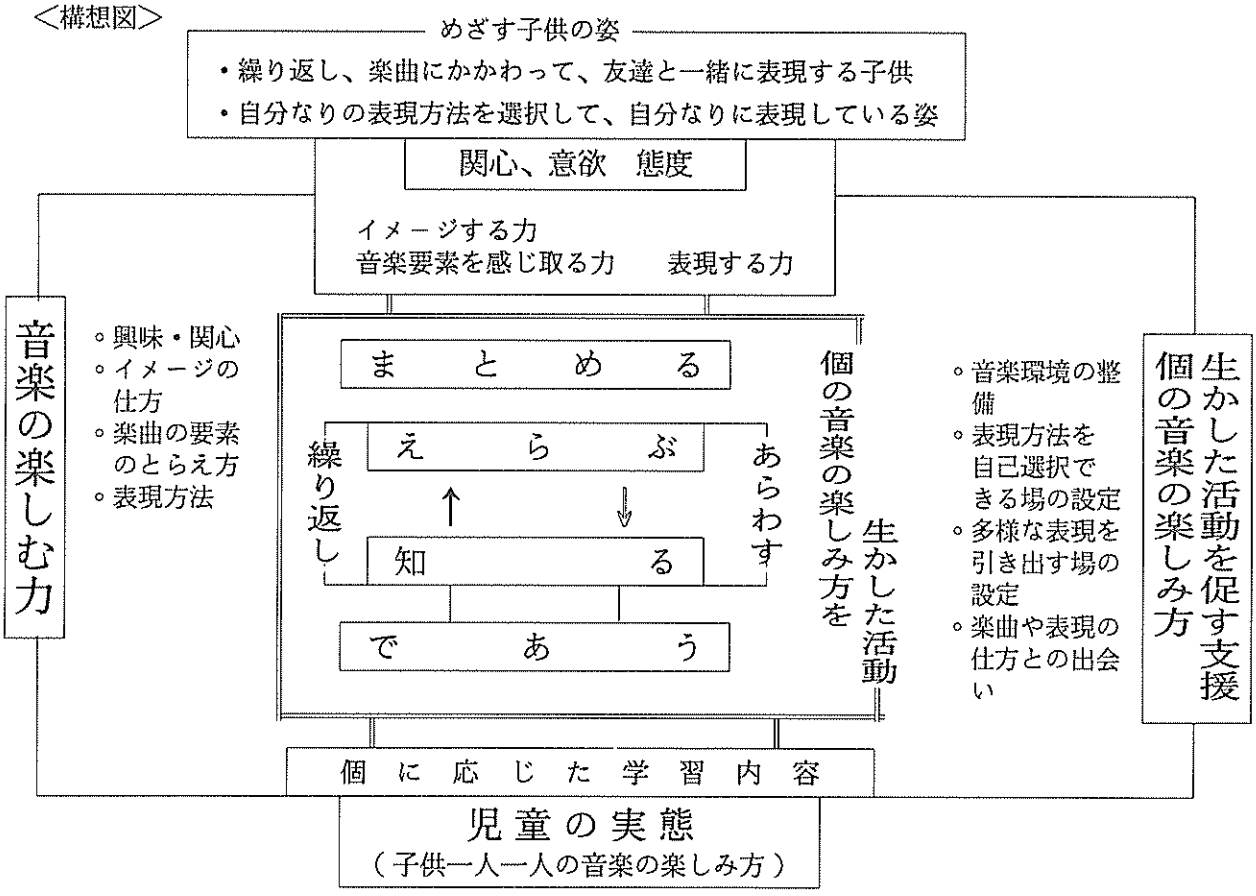
②簡単な歌詞で、繰り返しが多く、擬態語や擬声語が含まれていること。

③登場してくるものの特徴的な動きとリズムがあっていること。

④楽曲の場面に応じた情景画や楽器、表現絵等があること。

⑤子供が自由に表現できる場があり、表現方法を選べる自己選択の場があること。

<構想図>



4．指導の実際と考察

(1) 題材名 「のりものになってうたおう」 （第１・２学年 ふじ組）

(2) 児童の実態

	学習の取り組み	歌って表現	身体を使っての表現	楽器を使っての表現	音楽的要素	楽曲のイメージの仕方
A児	興味・関心のあることには積極的に取り組もうとするが持続しにくい面も見られる。	擬態語や擬声語楽曲に登場してくる名称などを部分的に歌う。発音が不明瞭である。	楽曲にでてくる動物の特徴的な動きを手まねしたり、跳んだりして表現する。	動きと歌詞やリズムがあった部分で自分から楽器を打ったり、吹いたりする。	おおまかな拍の流れや強調されたリズムを感じ取れる。	歌詞の擬態語や擬声語と動きにあったリズムの部分で特徴的な動きを想い描いて表現する。楽器を鳴らしながら体を動かしたり、歌ったり表現することが多い。
B児	強調された演示があると活動の手順や方法をつかむ。繰り返し指示が必要である。	擬態語や擬声語特徴的な歌詞を正確ではないが歌う。楽曲と少しずつずれながら歌う。	楽曲に登場してくる動物や乗り物の最も印象的な動きを跳んだり、走ったりして表現する。	楽曲が流れ出すと鈴を振ったり強調された部分で打楽器を鳴らしたりする。	強調された拍やリズムの部分を感じ取る。	歌詞から場面や動きを想い描くことが多い。特に、擬態語や擬声語や登場してくる動物や乗り物の名称と歌詞の動きを結びつける。登場してくる表現絵を選んで表現することが多い。

(3) 目 標

１、教師や友達と一緒に、自分の好きな乗り物になって表現することができる。

２、野原や山を走っている好きな乗り物を想い描いて、楽曲の拍やリズム、強弱や速さの変化をとらえて身体全体を動かしたり、楽器を鳴らしたりしながら、自分なりに歌って表現することができる。

Ａ児：楽曲の拍や特徴的なリズムの強弱、速さの違いをとらえて擬態語や擬声語を歌って表現することができる。

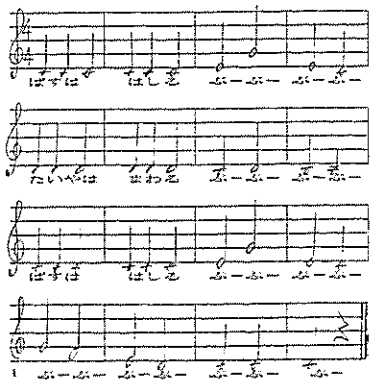
Ｂ児：楽曲の拍やリズムの部分や強弱、大まかな速さをとらえて特徴的な歌詞を歌って表現することができる。

(4) 指導内容
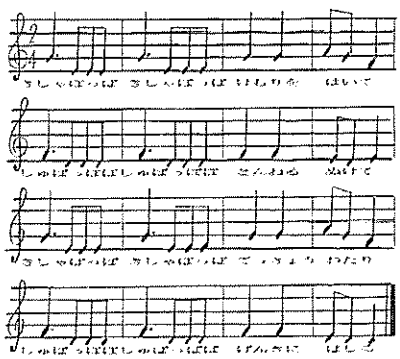
身体表現			楽曲の要素
身体を使っての表現	楽器を使っての表現	歌っての表現	
Ⅰ、身体を揺らす。 Ⅱ、印象的な動きをする。 Ⅲ、跳んだり、走ったりする。 Ⅳ、手振りをつける。 Ⅴ、手振り身振りをつける。	Ⅰ、曲が流れる中で鳴らす。 Ⅱ、強調された部分で鳴らす。 Ⅲ、印象的な部分で鳴らす。 Ⅳ、特徴的なリズムで鳴らす。 Ⅴ、特徴的なリズムや歌詞で	Ⅰ、擬態語や擬声語で声を出す。 Ⅱ、擬態語や擬声語を歌う。 Ⅲ、特徴的な歌詞を歌う。 Ⅳ、簡単な歌詞を歌う。 Ⅴ、歌いながら手振りをつける。	Ⅰ、拍の部分をとらえる。 Ⅱ、拍の流れをとらえる。 Ⅲ、特徴的なリズムをとらえる Ⅳ、強弱をとらえる。 Ⅴ、速さをとらえる。

(5) 教材・教具

＜バスの歌＞



＜汽車の歌＞



※「世界の遊び歌集」より引用、編曲した。

(6) 計　画

ねらい	学習活動	配時
○楽曲や場に出会い、表現の仕方を知る。	1、乗り物の楽曲に出会い、自由に踊ったり、歌ったりする。 (1) いろいろな乗り物の歌を歌う。 (2) いろいろな乗り物になって踊って歌う。 (3) いろいろな乗り物になって楽器を持って踊って歌う。	1時間
○音楽の楽しみ方を生かして、楽曲の場面や動き楽曲の要素をとらえる。	2、好きな乗り物（バスや汽車）になって、踊ったり、歌ったりする。 (1) 野原の場面で大きな乗り物や小さな乗り物になって踊って歌う。 ①大きな乗り物になって踊って歌う。<強弱中心に>　知る ②小さな乗り物になって踊って歌う。 ③好きな乗り物になって踊って歌う。　えらぶ (2) 山の場面で好きな乗り物になって踊って歌う。<速さ中心に> ①上りの場面で好きな乗り物になって踊って歌う。　知る ②下りの場面で好きな乗り物になって踊って歌う。 ③好きな乗り物になって踊って歌う。　えらぶ	2時間 (1) (1)
○生活場面での達成感・成就感を味わう。	3、好きな乗り物になって朝の会の時間や休み時間にみんなと一緒に踊って歌う。 (1) 朝の会の時間にみんなと一緒に踊って歌う。 (2) 休み時間に自分で好きな乗り物の楽曲を選んで踊って歌う。	1時間 (課外)

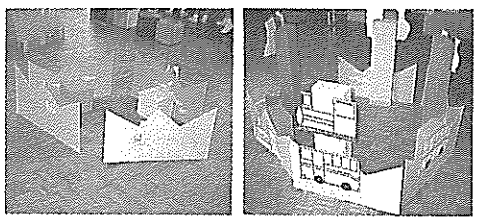
(7) 子供の反応と考察

①第1次　乗り物の場や楽曲や表現の仕方に出会って、表現への意欲を高める。

支援・援助	子供の反応
乗り物の場 ・楽曲 ・絵譜 ・ペープサート ・お面 ・楽器	乗り物の楽曲が流れてくると、「あ、バス」などといいながらバスの絵譜に駆け寄る。汽車のバスのお面や楽器を掲示すると嬉しそうにお面をかぶったり、すぐ楽器を振ったりする。楽曲が流れると笑いながら広場を走り回ったり、歩いたりする。授業後、「今度は汽車したい」などという。

考察　子供たちは、楽曲が流れる中で、「またしてみたい」と表現の意欲を持つことができた。このことは、子供たちに身近で興味・関心のある楽曲を選定したこと場面絵やペープサート、お面、楽器などを提示し、自由に表現させたことが意欲の喚起や表現を知っていくことにつながったと考えられる。

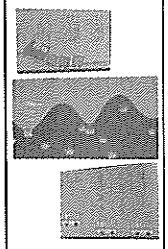
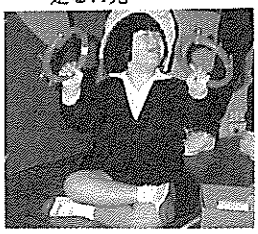
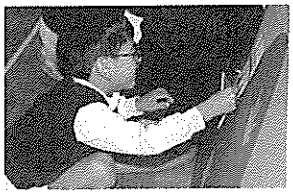
②第2次　野原の場面で好きな乗り物になって楽曲の強弱を感じ取って表現させる。（1／2 時）

支援・援助	子供の反応
大小の乗り物の場 ・強弱のある楽曲 ・絵譜 ・大小のペープサート ・大小のお面 ・楽器	「あかちゃんのバスする」といってお面をとって、小さなバスの場に行って座る。小さなバスの楽曲が流れ出すとにこにこ笑って立ち上がり、ちょこちょこ歩きで歩いたり、「ぶーぶー」と高い声でときどき歌う。 (小さな場)　(大きな場) 

考察　子供たちは、自分から「あかちゃんバスしたい」といって自分の表現したいものを選んだり自分からお面をとって小さなバスの場へ行ったり、楽曲を聞き分けて、強弱を感じ取ってちょこちょこ歩いて身体表現したり、高い声で部分的に歌ったりする姿がみられた。このことは、大小の乗り物の場を子供たちにわかりやすくはっきり分けたこと、楽曲の音色を大きな乗り物の時は低音にしたり小さな乗り物の時は高音にしたことが楽曲の場面や動きの強弱をとらえた表現を生み出すのに有効だったと考えられる。また、自分の好きな乗り物を好きな表現させたことによって、自分から場に行ったり、楽曲を聞き分けるなど意欲的に表現させることができたと考えられる。

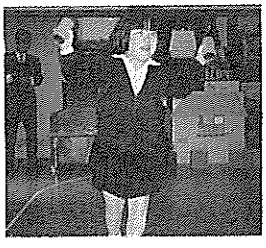
③第２次　山の場面で好きな乗り物になって楽曲の速さを感じ取って表現させる。（2／2 時）

ア、歌ったり、踊ったり、楽器を鳴らしたりして表現を知って行く活動

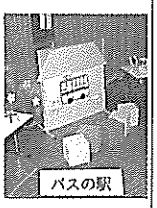
支援・援助	A 児 の 反 応	B 児 の 反 応
山の場 ・場面絵 ・絵譜 ・ペープサート ・表現絵 ・お面 ・楽器  山の場	A1 汽車のペープサートを持って山の絵の前で「ちしゃぽっぽ～」と繰り返し歌いながらペープサートを動かす。 A2 汽車の表現絵をつけて楽曲が速くなると嬉しそうに笑いながら「ぽっぽー」と歌いながら走り回る。A3 次に輪の鈴を掲示すると楽器を嬉しそうに持って振る ゆっくりの時は、両手の鈴を振りながら歩く。  汽車の表現絵をつけて走るA児  嬉しそうに鈴の輪を振るA児	B1 バスのペープサートを持ち、山の場面絵の前で「ブブー」と歌いながら山を下る。  楽曲に合わせてバスの絵を動かすB児 B2 汽車の表現絵とお面をつけて、楽曲の間奏で「ぽっぽー」と歌いながら線路を歩いて行く。教師の合図でかけ足になる  表現絵をつけて線路の上を走るB児 B3 輪に鈴のついた楽器を両手に持って嬉しそうに揺らしながら走る。楽曲が速くなるとかけ足になる。

考察　A1 B1 のように楽曲の速さに合わせてペープサートを動かしながら歌ったりする姿やA2 B2 のように表現絵やお面を身につけて部分的に歌いながら楽曲の速さを感じ取って乗り物になって表現する姿、A3 B3 のように楽曲に合わせて楽器を鳴らす姿が見られた。このことは、山の場面を提示してペープサートで楽曲全体をみとらせ、次に表現絵やお面を提示して身体を動かして表現させ最後に楽器を使って速さを感じ取らせたことが、楽曲の山の場面のイメージを広げながら、楽曲の速さを感じとらせていくことに有効であったと考えられる。

イ、自分の好きな乗り物や好きな表現方法を選んで自由に表現して行く活動

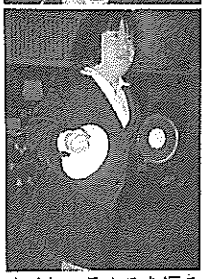
支援・援助	A 児 の 反 応	B 児 の 反 応
山の場 ・場面絵 ・絵譜 ・駅 ・表現絵	A4「好きな乗り物になってごらん」と教師に言われて汽車の駅に行く。空き缶マラカスを持って手  空き缶マラカスを振るA児	B4「好きな乗り物になってごらん」と教師にいわれて汽車の駅に行く。汽車  汽車の表現絵をつけて走るB児

・お面 ・楽器	を上げて振りながらかけ足で走る。 A5 今度も、汽車の駅に行くが、輪の鈴に持ち替えて手を振り上げながら「ぽっぽー」と歌う。 A6 今度も、汽車の駅に行く。今度はタイヤマラカスに持ち替えて、駅に座る。汽車の楽曲が流れ出すと自分から立ちあがって広場に出る。バスのタイヤのように腰に手を持っていき、「ぶーぶー」「バスははしる～」と歌いながら走る	表現絵を身につけ楽曲がなり出すと友達と一緒に広場を走り出す。「きしゃぽっぽ～」「ぽっぽ～」などと歌っている。 B5 今度も汽車の駅に行き輪の鈴を両手に持つ。楽曲が速くなると両手を激しく振って走りだす。 B6 今度は、バスの駅に行って、輪の鈴を持つ。バスのハンドルのように持って「バスははしる～」「ぶーぶーぶー」などと歌いながら走る



鈴のついた輪を振るA児





タイヤマラカスを振るA児

鈴のついた輪を振るB児





鈴をハンドルにみたてて走るB児

考察　リズムから楽曲のイメージを広げていくA児は、A4 A5 A6 のように楽器を持ち替えながら表現する乗り物にあった、動きをして特徴的な歌詞を歌って表現する姿がみられた。楽曲に登場するものや歌詞からイメージを広げていくB児は、B4 のようになりたい汽車の表現絵を身につけて嬉しそうに表現する姿から、B5 のように輪の鈴の楽器に持ち替え、B6 のようにバスを想い描いて、鈴をハンドルのように動かしながら特徴的な歌詞を歌って表現する姿がみられた。このことは、表現の仕方を知っていく活動の後に、自由に選択させたことによって、子供自ら表現するものや表現の仕方を選ぶ姿を生み出すのに有効であった。表現するものや表現方法を選択させたことは、リズムならリズムから、歌詞なら歌詞からと子供たちの最も有利な方法で表現させ、その子なりに楽曲の場面や動きを広げ、楽曲の要素をとらえて喜んで表現する姿を生み出すのに有効であった。

④第３次　合同音楽や休み時間に友達と一緒に表現し、生活に生かさせる。

支援・援助	子　供　の　反　応
・楽曲テープ ・絵譜 ・ペープサート ・お面 ・楽器	朝の会の時間では、学習してきた汽車やバスの楽曲が流れ出すと自分から席をたって友達と並んで走ったり、歌ったりする。 休み時間では、自分から好きな汽車のテープを取り出して、「かけて」と教師に頼み、楽曲が流れ出すと教室を手を腰のところで振りながら走る。

考察　朝の会の時間では、子供たち自ら、友達と連なって動いて表現したり、休み時間には、自分から好きな曲を選んで教師に「かけて」と頼む姿がみられた。これは、ここまでの活動で様々な表現をしたり、自己選択させて表現させたことによって、表現の達成感・成就感を十分に味わわせたことが有効であったと考えられる。

(8)　全体考察

子供の変容の姿から、個の音楽の楽しみ方に着目して、表現の仕方に出会わせた後、子供たち自身に表現するものや表現の仕方を選択させたことで、生活の中でも自ら表現していく姿が見られた。また、自己選択の活動の中で、子供一人一人のイメージの仕方に目を向け、表現絵やお面、楽器などを多種多様に提示し、自由に選ばせたことは自ら表現する喜びを生み出すことができたと考えられる。

—— メ モ ——

—— メ モ ——

おわりに

本校では、平成6年度から8年度までの3年間、文部省の研究開発学校の指定を受けて、21世紀の教育を見すえた研究を進めてきました。

1年次の昨年度は、21世紀に予想される社会で必要とされる人間像や児童像から、子供自身が豊かな自己実現を図ることで、社会へ積極的にかかわり、自分の生き方を創っていくことのできる教育課程の創造が重要であると考えました。

そこで、研究主題を「生きる喜びを生み出す教育課程の創造」と設定して、豊かな人間としての豊かな学力をわり出し、生きる喜びを生み出す子供の育成という観点から教科・領域の枠組みを行い、授業時数を設定し教育課程の編成を行いました。特に、21世紀の社会をよりよく生きる自立した子供を育てるために、現行教育課程における教科目標や内容を見直し、新しい教科目標を持った新教科や「表現科」「生活環境科」といった新設教科、「人間」という新設領域を設定し、年間計画を作成し実践してきました。

研究2年次の本年度は、学習の主体者である子供の心を体験や具体的活動によって十分耕し、心をもって対象にかかわって生じる主観的な見方も大切にしながら、もの・こと・人についてわかっていく、そんな学習ができる教育課程の編成が大切であると考えました。

そこで、副主題を「子供主体の活動からみる教育課程の編成」と設定し、学習を子供たちの意欲を喚起する教育的価値を内包した体験や具体的活動を軸として構成するようにしました。そして、1年次の新しい教科・新設教科・新設領域の枠組みを維持した形で、認識と感性の統一的発達を促す年間計画の作成と授業実践を行って参りました。子供たち自身が感じたり考え方たり活動したりする過程における自分の見方や考え方を大切にしながら、そのものの本質を感じ、学びとるとともに、自分のあり方や自分の存在価値をも自覚していくといった主体的な子供の姿を求めたのです。そのために、具体的な単元構成、授業構想を行っていく過程において、「環境に一人一人の子供がいかに旺盛にかかわっているか。」ということを、子供の主体性を見ていく大切な視点として取り上げ審議し、年間計画の改善を行ってきました。

変化の激しい社会において、今後の教育の在り方が問われ、学校のスリム化や社会の変化に対応できる生きる力の育成、教育内容の厳選と基礎・基本の重視が、ますます叫ばれ求められるなかで、研究開発学校の役割・責任の重さを感じているところです。

実地調査の先生方や運営指導委員の先生方などのご指導・ご助言により研究の方向については確立しつつあります。しかし、めざす学習の姿へと具現化させ、子供の姿として変容させるには、まだ多くの課題を抱えていますし、21世紀の教育の在り方を考えた場合、本校教育活動全体の総合的検討をはじめ、学校、家庭、地域社会における教育の役割と連携の在り方など課題は山積みされています。

この研究発表会を契機に更なる充実をめざして研究を進めていきたいと思いますので、今後一層のご指導を頂きますようお願い申し上げます。

平成8年6月

副校長　楠田和三

福岡教育大学教育学部附属福岡小学校研究同人（平成７年度）

◎学　　長　　田代高英

◎大学教官

（国　語）	前田真証	（生　活）	寺尾慎一	（道　徳）	堺　正之
（社　会）	中野和光	（音　楽）	平井建二	（特別活動）	高田　清
（算　数）	山下　昭		岩崎洋一	（障害児教育研究部）	山下　勲
	飯田慎司		木村次宏		海塚敏郎
	山口武志	（図画工作）	吉井　宏		木舩憲幸
（理　科）	進藤公夫	（家　庭）	甲斐純子		藤金倫徳
	中村重太	（体　育）	相部保美		石井武士

◎附小教官

〔職務〕	〔氏　名〕	〔教科等〕
校長（福岡教育大学教授）	高橋義夫	生物学
副校長	楠田和三	社会
教頭（４月～７月）	山下英俊	算数
教頭（８月～３月）	安永純二	理科
研究主任（５の１）	重松宏明	算数
教務主任（６の２）	水上栄一	国語
１の１	津本修一	音楽・表現
１の２	藤木寿美枝	生活
２の１	佐々木保善	国語
２の２	樺島　穣	図工・表現
３の１	芋生修一	社会・生活環境
３の２	植松伸之	道徳・人間
４の１	山下浩徳	理科・生活環境
４の２	佐々木壮一朗	体育
４の３	加藤英也	算数
５の２	中原　浩	特活・人間
５の３	今林康治	理科
６の１	伊藤啓二	国語
６の３	後藤正弘	社会
ふじ	林田千枝	音楽
さくら	落合純哉	国語
梅	松本良一	体育
専科	小嶋悦子	家庭
専科	大谷繁実	算数
専科	笠　宏照	体育
養護教諭	今村由香	保健
研修教官	有馬　宏	国語
研修教官	奥村明男	理科
研修教官	小森　晃	算数
研修教官	宮口光秀	図工
研修教官	矢野幸子	音楽

福岡教育大学教育学部附属福岡小学校研究同人（平成８年度）

（職名）	（担　任）	（専　攻）	（氏　名）	（出身郡市）
校　長		生　物　学	高　橋　義　夫	大　　学
副校長		社　　会	楠　田　和　三	春　日　市
教　頭	専　　科	理　　科	安　永　純　二	大　野　城　市
研究主任	6　の　1	算　　数	重　松　宏　明	糟　屋　郡
教務主任	専　　科	社会(生活環境)	芋　生　修　一	大　野　城　市
教　諭	1　の　1	生　　活	石　田　耕　一	糟　屋　郡
教　諭	1　の　2	国　　語	伊　藤　啓　二	春　日　市
教　諭	2　の　1	音　楽（表現）	津　本　修　一	福　岡　市
教　諭	2　の　2	図画工作(表現)	樺　島　　穣	福　岡　市
教　諭	3　の　1	算　　数	小　森　　晃	筑　紫　郡
教　諭	3　の　2	理科(生活環境)	山　下　浩　徳	甘　木　市
教　諭	4　の　1	体　　育	佐々木　壮一朗	糟　屋　郡
教　諭	4　の　2	算　　数	加　藤　英　也	八　女　市
教　諭	4　の　3	生　　活	藤　木　寿美枝	大　川　市
教　諭	5　の　1	国　　語	吉　田　正　樹	福　岡　市
教　諭	5　の　2	道徳（人間）	植　松　伸　之	糸　島　郡
教　諭	5　の　3	体　　育	笠　　宏　照	福　岡　市
教　諭	6　の　2	特別活動(人間)	中　原　　浩	三井郡・小郡市
教　諭	6　の　3	理科(生活環境)	今　林　康　治	福　岡　市
教　諭	専　　科	社　　会	後　藤　正　弘	宗　像　市
教　諭	専　　科	家　　庭	平　山　尚　美	福　岡　市
教　諭	ふ　　じ	音　　楽	西　原　敦　子	福　岡　市
教　諭	さ　く　ら	体　　育	松　本　良　一	久　留　米　市
教　諭	梅	国　　語	落　合　純　哉	大　野　城　市
教　諭	専　　科	体　　育	舛　元　俊　文	糟　屋　郡
養護教諭	養　　護		今　村　由　香	糟　屋　郡
研　修	専　　科	算　　数	本　田　　透	柳　川　市
研　修	専　　科	図　画　工　作	郡司掛　信　也	福　岡　市
研　修	専　　科	体　　育	稲　津　一　徳	糟　屋　郡
研　修	専　　科	道　　徳	石　硯　昭　雄	糸　島　郡
研　修	専　　科	体　　育	石　橋　康　秀	久　留　米　市

◎平成７年度転出教官

山　下　英　俊（春日市）	水　上　栄　一（糟屋郡）	佐々木　保　善（浮羽郡）
小　嶋　悦　子（福岡市）	林　田　千　枝（福岡市）	大　谷　繁　実（八女郡）
奥　村　明　男（大野城市）	宮　口　光　秀（糟屋郡）	矢　野　幸　子（朝倉郡）
有　馬　　宏（宗像市）		

タイトル・メッセージⅡ

一つ一つの分けられた生命に自己の魂を宿すこと

水の精を見守り　時の流れを受け止める

大地の恵みを花と建造物に感じ取る

音と素材の世界に浮遊した創造主体者たち

人と人がともに生きる喜びを生み出すこの時

誰もが主人公となって未来に旅立つ

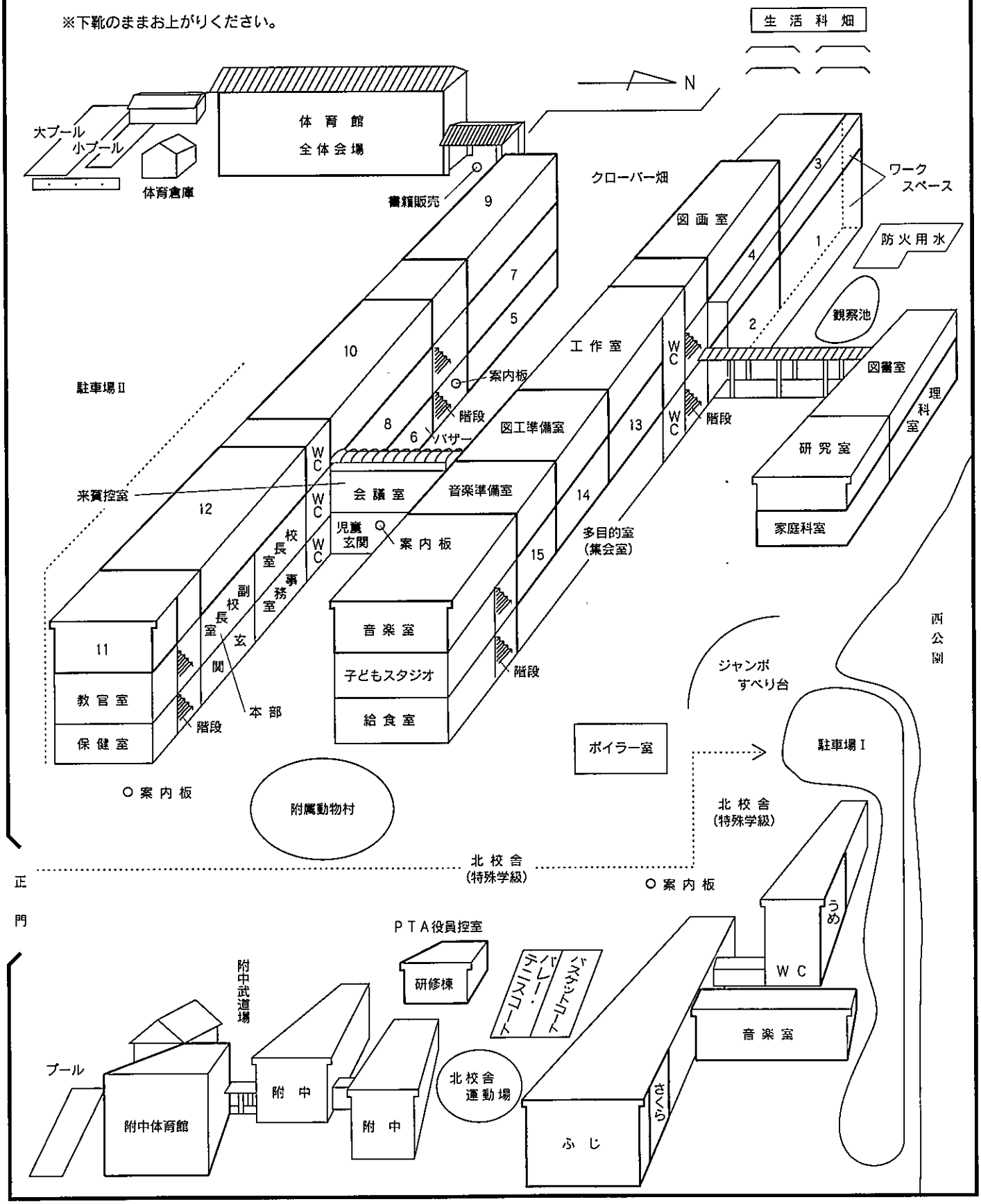
平成８年６月　　印刷・発行
福岡教育大学教育学部附属福岡小学校
研究紀要No.２７

発行者　附属福岡小学校
〒810　福岡市中央区西公園12番1号
ＴＥＬ　092（741）4731（代）

印刷所　㈱ネオ・プリンティング
ＴＥＬ　092（511）8941（代）

研究会会場図

※下靴のままお上がりください。




Fukuoka